岩手県埋文センター文化財調査報告書第28集

御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書

雫石町　　下長谷地・元御所Ⅰ・Ⅱ遺跡

(昭和48年度・55年度)

岩手県教育委員会
(財)岩手県埋蔵文化財センター
建設省御所ダム工事事務所

御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書

雫石町　　下長谷地・元御所Ⅰ・Ⅱ遺跡

(昭和48年度・55年度)

序

岩手県内には数多くの遺跡が存在することは広く知られている所であります。昭和55年３月の県教育委員会文化課の分布調査によりますと、県下に所在する埋蔵文化財包蔵地は、4,719ケ所の多きとなっております。この埋蔵文化財包蔵地は、我々の祖先が残してくれた貴重な文化遺産であります。この貴重な文化遺産を後世に守り伝える責務が我々に課せられているものと考えている所であります。

この貴重な文化遺産と開発との関係が、近年問題となってきております。文化遺産を守ると共に現在の生活を豊かにという要求との均衡を保つために文化財関係機関は多大な努力を払っております。県教育委員会文化課においても、事業者との調整につとめ、止むを得ず記録保存する遺跡を最少限に止どめる努力をいたしております。

当センターにおいて、埋蔵文化財保護の立場に立って、これら事業にかゝわる埋蔵文化財包蔵地の発掘調査に取り組んで参いりました。本年度から新たに資料課を設置し、調査と同時に資料の整備、報告書の刊行等を進めて参いりました。

本報告書は昭和48年度より調査を開始し昭和55年度で野外調査が終了した御所ダム建設関係遺跡37のうち当センター調査遺跡１、県文化課調査遺跡２の計３遺跡を収録いたしました。
本報告が、いささかでも関係各位の参考に供され、斯学向上の一助となれば幸甚と存じます。

最後に県教育委員会建設省御所ダム工事々務所をはじめ、地之関係者、考古学研究者など大勢の方々にご協力、ご援助を頂きましたことに厚く感謝申し上げ、今後のご指導、ご協力を合せてお願い申し上げます。

昭和57年３月

(財)岩手県埋蔵文化財センター
理事長　新　里　　盈

例　　言

1．本書は御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書である。

2．本書は、下長谷地、元御所Ⅰ、Ⅱの3遺跡の発掘調査成果を収録した。

3．各遺跡の調査主体、調査年度、担当者は次の通りである。

下長谷地遺跡	県教委文化課	昭和48年度	勝股国夫、吉田義昭
元御所Ⅰ遺跡	県教委文化課	昭和48年度	上野猛、高橋与右衛門
	(財)埋文センター	昭和55年度	本沢慎輔、高橋正之
元御所Ⅱ遺跡	県教委文化課	昭和48年度	瀬川司男、上野猛、高橋与右衛門

4．本報告書の執筆分担は次の通りである。

御所ダム関連遺跡調査経過	瀬川司男
遺跡群の立地と環境	高橋与右衛門
下長谷地遺跡	松野恒夫
元御所Ⅰ遺跡	本沢慎輔
元御所Ⅱ遺跡	瀬川司男

5．本報告書の執筆にあたり次の方々に御協力を賜わった。

相原康二氏・八木光則氏・高橋憲太郎氏

6．石質の鑑定は次の方に御教示を賜わった。

佐藤二郎氏

7．遺物の写真撮影は、当センター室内作業補助員岩渕希士、佐藤和也が担当した。

8．本報告書に使用した実測図は担当者が分担し、当センター室内作業補助員が作製した。

9．図版凡例は各々図版中に示してある。

10．発掘調査には、盛岡市繋地区、土渕地区、雫石町安庭地区、町場地区の方々に御協力を頂いた。

(財)岩手県埋蔵文化財センター組織図

役員		
理事長	新里　盈	(県教育長)
副理事長	中原　良一	(県教育次長)
常務理事	菅原　一郎	(センター所長)
理　事	吉田　良和	(県農政部次長)
〃	田代　太志	(県林業水産部次長)
〃	後藤　光雄	(県土木部次長)
〃	板橋　源	(県立博物館長)
〃	草間　俊一	(県立盛岡短大学長)
〃	小形　信夫	(県民俗の会々長)
監　事	白石　丈雄	(県教委総務課長)
〃	及川　久男	(県教委財務課長)

職員	
所　長	菅原　一郎
副所長	小野寺　登
総務課長	小笠原　喜一
庶務係長	岡沢　成治
主　事	佐藤　久四郎
〃	戸草内　幸男
〃	立花　多加志
技能員	佐藤　春男

調査課長	嶋　千秋		
主任専門調査員	近藤　宗光		
〃	遠藤　勝博		
〃	国生　尚		
専門調査員	村上　達夫	専門調査員	平井　進
〃	畠山　靖彦	〃	種市　進
〃	朝野　孝二	〃	鈴木　隆英
〃	菊池　利和	〃	三浦　謙一
〃	鈴木　恵治	〃	岩渕　久
〃	小平　忠孝	〃	光井　文行
〃	大原　一則	〃	佐藤　勝
〃	田鎖　寿夫	〃	高橋　義介
〃	佐々木嘉直	〃	佐々木清文
〃	栃沢　満郎	〃	酒井　宗孝

資料課長	瀬川　司男
専門調査員	高橋与右衛門
〃	四井　謙吉
〃	本沢　慎輔
〃	工藤　利幸
〃	高橋　文夫
〃	中川　重紀
〃	松野　恒夫
県立文化財専門員	渡辺　洋一

本文目次

序　文
例　言
御所ダム関係遺跡の調査経過……1
遺跡群の立地と環境……6

下長谷地遺跡

Ⅰ　遺跡の位置と環境……13
Ⅱ　調査方法と経過……15
Ⅲ基本土層……17
Ⅳ　発見された遺構と遺物……18
1．遺構
(1)竪穴住居址
1）1号住居址……18
2）2号住居址……20
3）3号住居址……22
(2)ピット
1）Bb－12ピット……24
2）Be－06ピットⅠ……24
3）Bd－03ピット……25
4）Bc－06ピット……25
5）Bd－09ピット……26
6）Be－03ピット……27
7）Bf－56ピット……27
8）Be－06ピットⅡ……28
9）Bf－09ピット1……28
10）Bf－09ピット2……29
11）Bf－12ピット1……29
12）Bf－12ピット2……30
(3)陥し穴状遺構
1）Bc－06陥し穴状遺構……31
2）Bb－09陥し穴状遺構……31
3）Ai－15陥し穴状遺構……32
4）Aj－15陥し穴状遺構……32
2．遺構外の出土遺物
(1)土器……49
(2)石器……54
(3)土偶……60
Ⅴ　まとめ……88
1．遺構
(1)竪穴住居址……88
(2)ピット……89
(3)陥し穴状遺構……90
2．遺物
(1)土器……91
(2)石器……92
(3)土偶……93

元御所Ⅰ遺跡

Ⅰ　遺跡の位置と環境……132
Ⅱ　調査方法と経過……134
　1．調査方法……134
　2．調査経過……139
Ⅲ　発見された遺構と遺物……140
　1．縄文時代の竪穴式住居址と土坑
　　a　1・2号住居址……140
　　b　3・4・5号住居址……145
　　c　6・7号住居址……147
　　d　8・9号住居址……148
　　e　10号住居址　22K－1土坑……148
　　f　11・12号住居址……150
　2．近現代の遺構……153
　　a　民家……153
　　b　炭窯……157
　3．遺物密集地と出土した遺物……160
　　a　遺物密集地と土器……160
　　b　土製品……161
　　c　石器……162
Ⅳ　まとめ……176

元御所Ⅱ遺跡

1．調査の概要……293
2．調査の結果……293

図版目次

図版A　御所ダム位置図……3
図版B　ダム周辺の地形……4
図版C　御所ダム関係遺跡分布図……5

下長谷地遺跡

図版1．遺跡位置図……11
　2．遺跡付近の地形図……12
　3．遺構配置図……14
　4．基本土層……16
　5．1号・2号住居址……33
　6．3号住居址……34
　7．a　Bb－12ピット……35
　　b　Be－06ピットⅠ
　　c　Bd－03ピット
　8．a　Bc－06ピット、陥し穴状遺構…36
　　b　Bd－09ピット
図版9．a　Be－03ピット……37
　　b　Bf－56ピット
　　c　Be－06ピットⅡ
　10．a　Bf－09ピット1・2……38
　　b　Bf－12ピット1・2
　11．a　Bb－09陥し穴状遺構……39
　　b　'Ai－15.Aj－15陥し穴状遺構
　12．遺構内の出土土器実測図(1)……40
　13．遺構内の出土土器実測図(2)……41
　14．遺構内の出土土器拓影図(1)……42
　15．遺構内の出土土器拓影図(2)……43

図版16．遺構内の出土土器拓影図(3)……44
17．遺構内の出土石器実測図(1)……45
18．遺構内の出土石器・土偶実測図(2)‥46
19．遺構内の出土石器実測図(3) ……47
20．遺構内の出土石器・土偶実測図(4) ·48
21．遺構外の出土土器実測図……61
22．遺構外の出土土器拓影図(1)……62
23．遺構外の出土土器拓影図(2)……63
24．遺構外の出土土器拓影図(3)……64
25．遺構外の出土土器拓影図(4)……65
26．遺構外の出土土器拓影図(5)……66
27．遺構外の出土石器実測図(1)……67
28．遺構外の出土石器実測図(2)……68
29．遺構外の出土石器実測図(3) ……69
図版30．遺構外の出土石器実測図(4) ……70
31．遺構外の出土石器実測図(5) ……71
32．遺構外の出土石器実測図(6) ……72
33．遺構外の出土石器実測図(7) ……73
34．遺構外の出土石器実測図(8) ……74
35．遺構外の出土石器実測図(9) ……75
36．遺構外の出土石器実測図(10) ……76
37．遺構外の出土石器実測図(11) ……77
38．遺構外の出土石器実測図(12) ……78
39．遺構外の出土石器実測図(13) ……79
40．遺構外の出土石器実測図(14) ……80
41．遺構外の出土石器実測図(15) ……81
42．遺構外の出土石器・土偶実測図(16)·82

元御所Ⅰ遺跡

図版１．元御所遺跡位置図 ……131
２．元御所遺跡発掘調査区域 ……135
３．元御所遺跡グリット配置図 ……137
４．元御所遺跡遺構配置図 ……141
５．１・２号住居址平面図、断面図 …143
６．３～９号住居址平面図 ……146
７．10号住居址平面図 ……149
８．11、12号住居址平、断面図 ……151
９．民家の礎石配置図 ……154
10．民家の礎石下の土坑 ……155
11．炭窯址 ……158
12．土器 ……186
13．土器 ……187
14．土器 ……188
15．土器 ……189
16．拓本(1)……190
図版17．拓本(2)……191
18．拓本(3)……192
19．拓本(4)……193
20．板状土偶 ……194
21．石鏃(1)……195
22．石鏃(2)……196
23．石錐 ……197
24．石匙(1)……198
25．石匙(2)……199
26．石匙(3)……200
27．石匙(4)……201
28．石匙(5)……202
29．石匙(6)……203
30．石篦(1)……204
31．石篦(2)……205
32．石篦(3)……206

図版33．石篦(4)……207
34．石篦(5)……208
35．石篦(6)……209
36．掻器(1)……210
37．掻器(2)……211
38．掻器(3)……212
39．掻器(4)……213
40．掻器(5)……214
41．掻器(6)……215
42．掻器(7)……216
43．掻器(8)……217
44．掻器(9)……218
45．掻器(10)……219
46．掻器(11)……220
47．掻器(12)　石篦（追加）……221
48．削器(1)……222
49．削器(2)……223
50．削器(3)……224
51．削器(4)……225
52．削器(5)……226
53．大型掻器・打製石斧……227
54．石斧(1)……228
55．石斧(2)・その他磨製石器……229
56．磨石、砥石……230
57．凹石(1)……231
58．凹石(2)……232
59．凹石(3)……233
60．石錘(1)……234
図版61．石錘(2)……235
62．半円状扁平打製石器(1)……236
63．半円状扁平打製石器(2)……237
64．半円状扁平打製石器(3)……238
65．半円状扁平打製石器(4)……239
66．半円状扁平打製石器(5)……240
67．半円状扁平打製石器(6)……241
68．半円状扁平打製石器(7)……242
69．半円状扁平打製石器(8)……243
70．半円状扁平打製石器(9)……244
71．半円状扁平打製石器(10)……245
72．半円状扁平打製石器(11)……246
73．半円状扁平打製石器(12)……247
74．半円状扁平打製石器(13)……248
75．半円状扁平打製石器(14)……249
76．半円状扁平打製石器(15)……250
77．半円状扁平打製石器(16)……251
78．半円状扁平打製石器(17)……252
79．半円状扁平打製石器(18)……253
80．半円状扁平打製石器(19)……254
81．半円状扁平打製石器(20)……255
82．半円状扁平打製石器(21)……256
83．半円状扁平打製石器(22)……257
84．半円状扁平打製石器(23)……258
85．半円状扁平打製石器(24)……259
86．半円状扁平打製石器(25)……260
87．半円状扁平打製石器(26)……261
88．半円状扁平打製石器(27)……262

写真図版目次

下長谷地遺跡

写真図版 1……96
a　遺跡遠景
b　調査風景
写真図版 2……97
a　1号・2号住居址遺物出土状況
b　1号・2号住居址
写真図版 3……98
a　2号住居址埋設土器・有孔石器出土状況
b　2号住居址埋設土器（断面）
c　3号住居址（土層断面）
d　3号住居址
写真図版 4……99
a　3号住居址1号炉（断面）
b　3号住居址2号炉（断面）
c　3号住居址（土器出土状況）
d　3号住居址（磨製石斧出土状況）
e　Bb－12ピット（断面）
f　Bb－12ピット
写真図版 5……100
a　Be－06ピットⅠ（断面）
b　Be－06ピットⅠ
c　Bd－03ピット（石器出土状況）
d　Bc－06ピット・陥し穴状遺構（断面）
e　Bc－06ピット・陥し穴状遺構（断面）
f　Bc－06ピット・陥し穴状遺構
写真図版 6……101
a　Bd－09ピット（土器出土状況）
b　Be－06ピットⅡ（遺物出土状況）
c　Be－03ピット（断面）
d　Be－03ピット（土器出土状況）
e　Bf－09ピット1・2（断面）
f　Bf－09ピット1・2
写真図版 7……102
a　Bf－12ピット1・2
b　Bf－12ピット1（断面）
c　Bf－12ピット2（断面）
d　Bb－09陥し穴遺構（断面）
e　Ai－15、Aj－15陥し穴状遺構
写真図版 8　遺構内の出土土器（実測）(1)103
9　遺構内の出土土器（実測）(2)104
10　遺構内の出土土器（拓影）(1)105
11　遺構内の出土土器（拓影）(2)106
12　遺構内の出土土器（拓影）(3)107
13　遺構内の出土土器・（拓影）(4)108
14　遺構内の出土石器(1)……109
15　遺構内の出土石器、土偶(2)‥110
16　遺構内の出土石器、土偶(3)‥111
17　遺構外の出土土器（実測）‥‥112
18　遺構外の出土土器（拓影）(1)113
19　遺構外の出土土器（拓影）(2)114
20　遺構外の出土土器（拓影）(3)115
21　遺構外の出土土器（拓影）(4)116
22　遺構外の出土石器(1)……117
23　遺構外の出土石器(2)……118
24　遺構外の出土石器(3)……119
25　遺構外の出土石器(4)……120

写真図版26　遺構外の出土石器(5)……121
27　遺構外の出土石器(6)……122
28　遺構外の出土石器(7)……123
29　遺構外の出土石器(8)……124
写真図版30　遺構外の出土石器(9)……125
31　遺構外の出土石器(10)……126
32　遺構外の出土石器、土偶(11)‥127

元御所Ⅰ遺跡

写真図版1　調査風景……263
2　調査風景……264
3　調査風景……265
4　調査風景……266
5　調査風景……267
6　土器……268
7　土器……269
8　土器……270
9　土器……271
10　土偶、その他……272
11　石鏃、錐……273
12　石匙……274
13　石匙、石篦……275
14　石篦、掻器……276
写真図版15　掻器……277
16　掻器……278
17　掻器、削器……279
18　大型掻器、その他……280
19　磨製石斧、その他……281
20　磨石、砥石、凹石……282
21　石錘……283
22　半円状扁平打製石器……284
23　半円状扁平打製石器……285
24　半円状扁平打製石器……286
25　半円状扁平打製石器……287
26　半円状扁平打製石器……288
27　半円状扁平打製石器……289

挿図目次

元御所Ⅰ遺跡

挿図1　グリット名称図……136
2　3～9号住居址……147
3　民家土台礎石配置図……156
4　グリット別遺物袋個数表……159
5　石鏃の各タイプと表……163
挿図6　石匙の各タイプ……165
7　石篦、掻器の各タイプ……166
8　石錘表……171
9　半円状扁平打製石器……173

御所ダム関連遺跡調査経過

岩手県の岩手町御堂を水源として南流する北上川は、一関市狐禅寺狭窄部によって数々の洪水を引き起こし、その被害は県南部を中心に広くもたらしている。この洪水対策は岩手県部分については、昭和16年以前は皆無の状態であった。昭和16年に岩手県内に5ケ所のダムと遊水池を設けて洪水調節を行う北上川改修計画がたてられ、同年から田瀬ダムの建設が行われた。しかし戦後カサリン・アイオン両台風によって計画を大巾に上廻わる洪水が引き起こされ、昭和27年当初計画を改訂した。

御所ダム建設は、県内5ケ所のダムの最後となり昭和48年移転宅地の造成から開始され、昭和55年11月湛水完了し、完成を見た。ダム建設の目的は、洪水調節を主とし、盛岡市の上水道用水、かんがい用水の他発電等にも利用される多目的である。

ダムの貯水池諸元概要は次の通りである。

湛水面積	6,400,000㎡
湛水延長	8.0km
常時満水位標高	180.0m
洪水満水位標高	182.0m
制限水位標高	174.0m
総貯水容量	65.000.000㎥

ダム建設に伴う水没地内の家屋および水田、畑地等の水没面積は次の通りである。

家屋	520世帯
宅地	45.4ha
田地	360ha
畑地	87ha
山林・原野	91ha
道路	22ha

ダム建設予定地内の分布調査は、昭和47年、48年に行なわれ、37ケ所の遺跡を確認した。

これら遺跡群に対する発掘調査は建設省御所ダム工事々務所の委託を受けて昭和48年7月より、岩手県教育委員会事務局文化課によって開始された。その後昭和52年4月に(財)岩手県埋蔵文化財センター発足、これに伴い、調査主体は埋蔵文化財センターに移管された。

野外調査は、昭和55年10月で完了し、昭和56年度には全ての報告書を刊行することとなっている。

以下各年度における発掘調査は次の通りである。

昭和48年度、繋Ⅳ、Ⅴ、野中、下長谷地、元御所Ⅱ、熊野橋遺跡。

昭和49年度　下猿田Ⅰ、新城館、除Ⅰ、安庭古墳、伝久、塩ケ森Ⅰ遺跡。天沼Ⅰ遺跡の付替道路及び工事用道路部分。（塩ケ森Ⅰ遺跡は未完）

昭和50年度　繋Ⅰ、Ⅱ、戸沢館、塩ケ森Ⅰ遺跡。(塩ケ森Ⅰの主要部分は保存、路線変更)

昭和51年度　除Ⅱ、塩ケ森Ⅱ、萪内遺跡。桜松遺跡の道路用地分。(萪内は未完)

昭和52年度　繋Ⅲ、Ⅵ、上野、南の又、兎野、広瀬Ⅰ遺跡。

昭和53年度　広瀬Ⅱ、堂ケ沢Ⅰ、Ⅱ、萪内、町場Ⅲ遺跡。(萪内、町場Ⅲは未完)

昭和54年度　萪内、町場Ⅱ、Ⅲ、下猿田Ⅱ、Ⅲ、塩ケ森Ⅰ遺跡。(萪内、塩ケ森Ⅰは未完)

昭和55年度　萪内、塩ケ森Ⅰ、元御所Ⅰ、桜松遺跡、野外発掘調査終子、但し、天沼Ⅰ、Ⅱ、田屋館、町場Ⅰ遺跡は現状保存。

昭和56年度　室内整理及び報告書作成

遺跡の性格は縄文時代の集落跡および土器散布地が圧倒的であり、調査遺跡33ケ所のうち23ケ所が該当する。平安時代もしくはそれ以降のものと考えられる遺構を主体とした遺跡は7ケ所、全ったく遺構、遺物が発見されなかった所は3ケ所である。

年度毎調査員は次の通りである。

昭和48年度　県教委文化課　瀬川司男、林謙作、勝股国夫。臨時職員　上野　猛、工藤利幸
盛岡市教委　　吉田義昭。　　臨時職員　及川
雫石町文化財調査員　　上野孝次郎、向野与太郎、高橋与右衛門

昭和49年度　県教委文化課　林謙作、新沼武秀、本宮雄輔　臨時職員　上野猛、工藤利幸
高橋与右衛門、熊谷太郎。

昭和50年度　県教委文化課　林謙作、新沼武秀　臨時職員　上野猛、工藤利幸、高橋与右衛門、高橋史子。

昭和51年度　県教委文化課、林謙作　臨時職員　上野猛、工藤利幸、高橋与右衛門、桐生正一、佐藤信行、内村明。

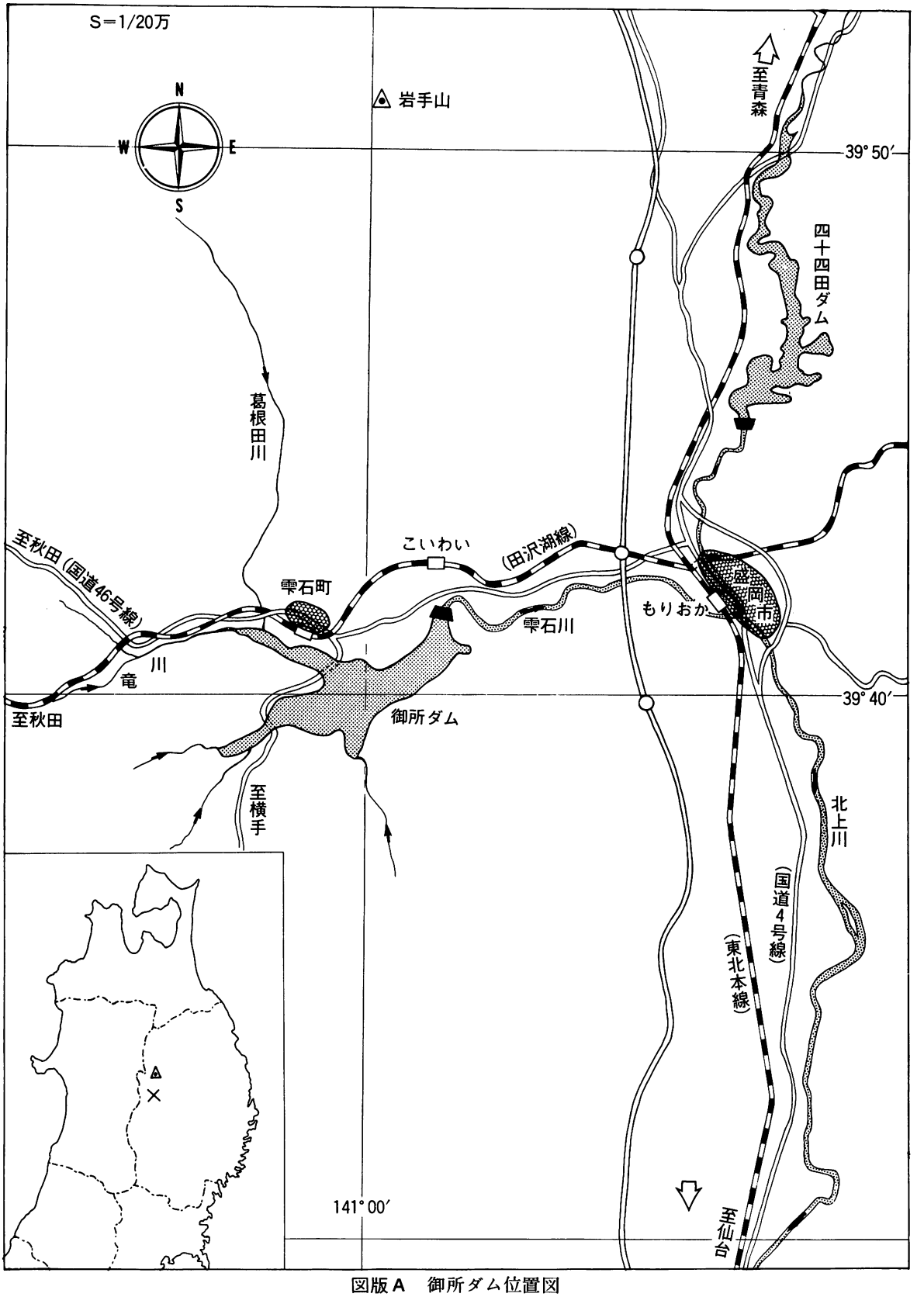
昭和52年度　県埋蔵文化財センター　上野猛、高橋正之、工藤利幸、高橋与右衛門

昭和53年度　県埋蔵文化財センター　上野猛、高橋正之、松野恒夫、工藤利幸、中川重紀、本沢慎輔。協力員　高橋栄治

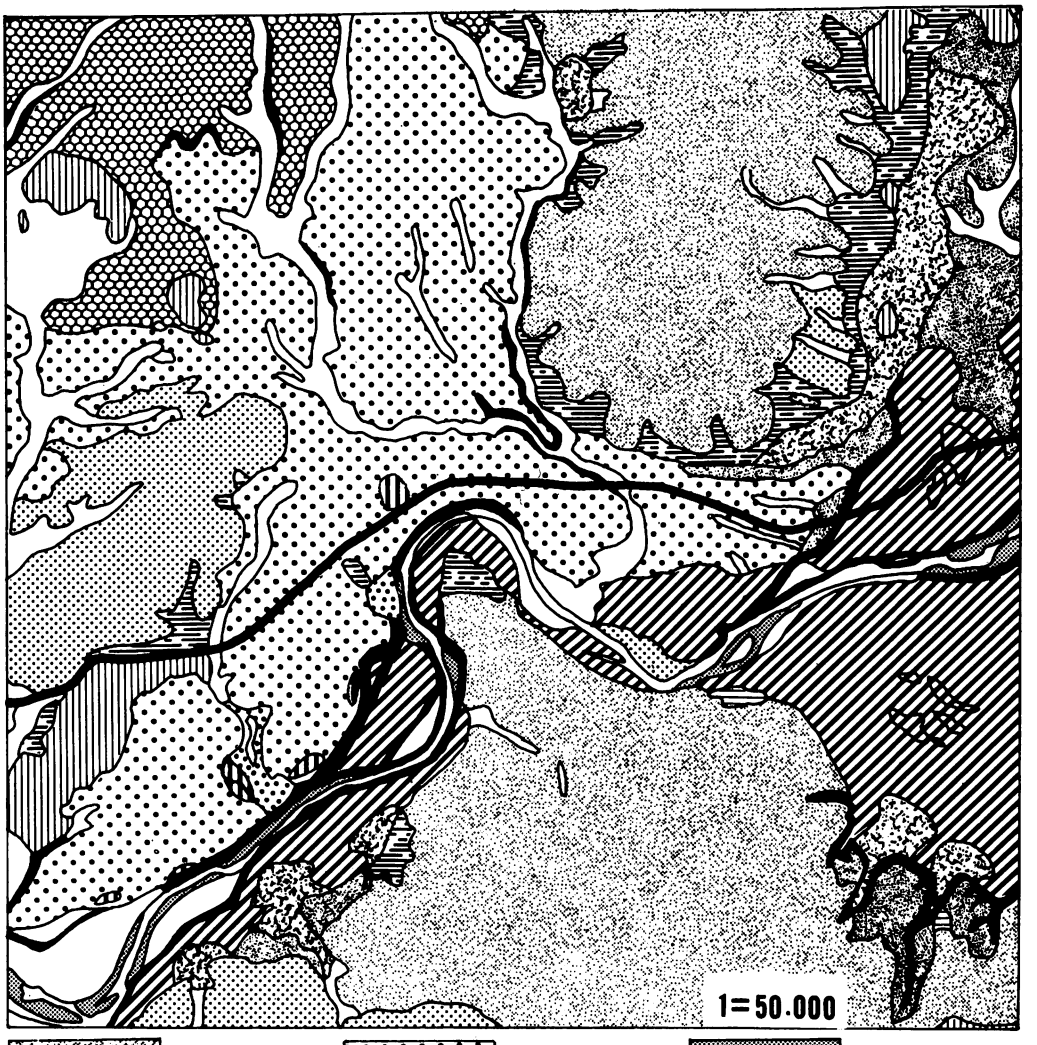
昭和54年度　全　上　　協力員　高橋栄治中途退職

昭和55年度　全　上

昭和56年度　松野恒夫、工藤利幸、中川重紀、本沢慣輔（瀬川司男、高橋与右衛門一部執筆）


S＝1/20万
N
W
E
S
岩手山
至青森
39°50′
四十四田ダム
葛根田川
至秋田（国道46号線）
こいわい
（田沢湖線）
雫石町
盛岡市
もりおか
雫石川
川
竜
至秋田
39°40′
御所ダム
至横手
北上川
（国道4号線）
（東北本線）
141°00′
至仙台

図版A　御所ダム位置図



中起伏山地

小起伏山地

丘陵地 I

丘陵地 II

砂礫段丘 I
洪積低位面

火山灰砂台地
洪積中位面

火山灰砂台地
洪積高位面

砂礫段丘 II
沖積古期面

扇状地

崖錐性扇状地

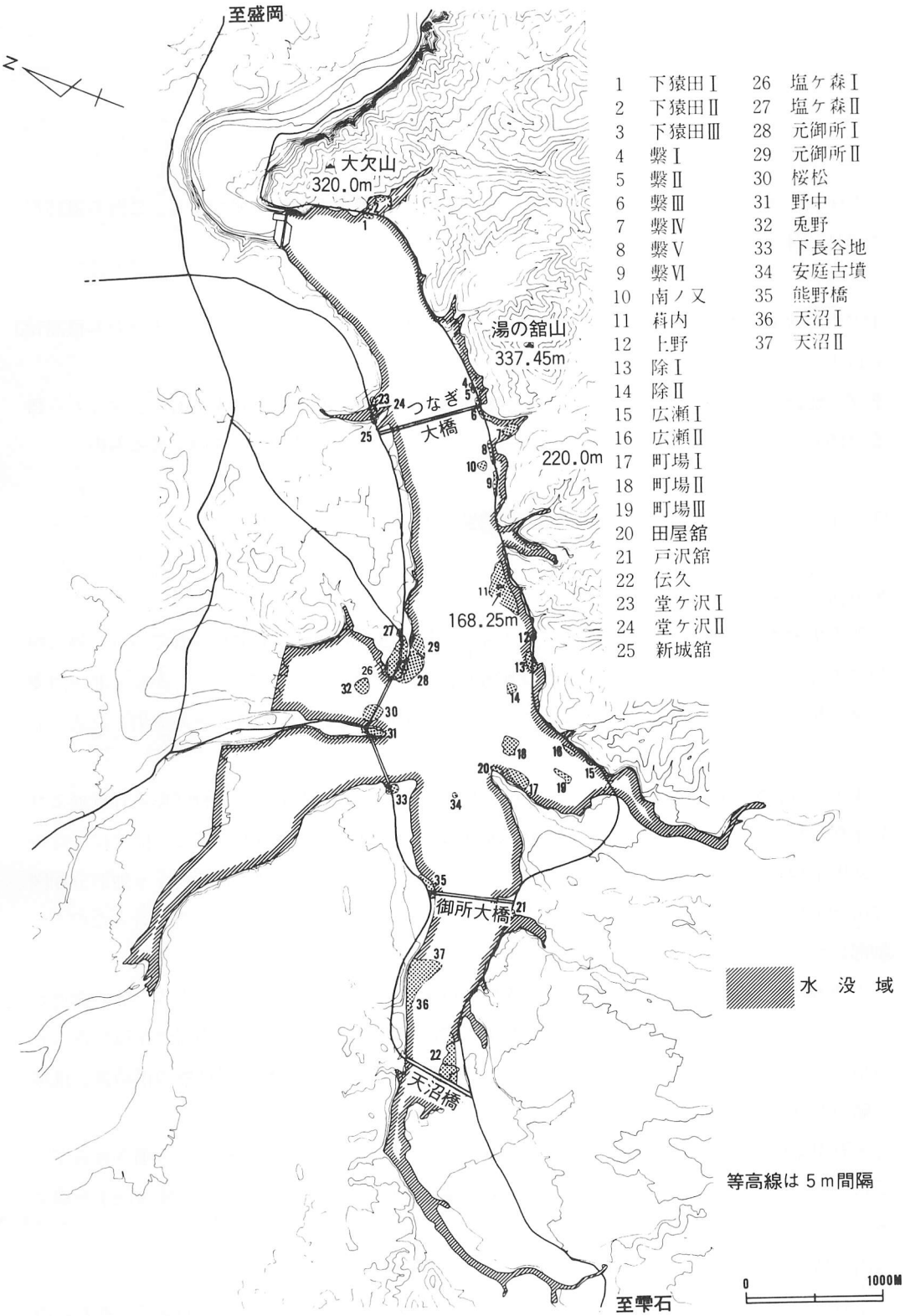
河原

谷底平野と
氾濫平野

人工改変地

泥流地形

図版 B　ダム周辺の地形



図版—C　御所ダム関係遺跡分布図

遺跡群の立地と環境

北上川右支流雫石川に建設される御所ダムに関係する遺跡群は37ケ所である。これら遺跡群の立地は地形から次の２つに大別される。

(1)ダム貯水池内に水没する雫石川岸近くに広がる沖積段丘上に位置するもの、すなわち標高180m以下に存在する遺跡群。
(2)ダム建設に伴う付替道路部分にあたる洪積世低・中位段丘面上に位置するもの、すなわち標高 180m 以上に存在する遺跡群。標高 184m を基準とする付替道路予定地内にあるもの。

(1)に属するもの18遺跡、(2)に属するもの19遺跡である。

地形面区分－盛岡市繋地区を中心として－（図版B）

北上川本流域に対する地形学的な調査研究は、相当広範囲に亘って進められている。特に中川久夫等の調査研究には特筆すべきものがあり、その業績に負う所が多い。しかし、北上川支流域に対する地形、地質の調査研究は部分的且つ個人的に行われており、その成果も公式に発表されたものは少ない。雫石川流域についても同様である。

本項では、繋地区遺跡の立地をより明確に把握するために、岩手郡滝沢村字塩の森付近より岩手郡雫石町西安庭付近までの範囲の地形面区分（特に段丘）を試みた。実際の区分に当たっては国土地理院発行の25,000分の１地形図、空中写真の判読、国土調査に関連する地形分類図(50,000分の１)等を参考にした。現地調査は種々の制約から小範囲についてのみ行ったので、細部についての事実誤認がある可能性のあることを付記しておく。

当地域は、黒沢川、竜川、葛根田川、南川、戸沢川、矢櫃川のうち、竜川を除く他の支流がほぼ同地点で合流しているために地形も非常に複雑である。特に雫石川と南川の左岸にみられる地形と右岸にみられる地形では若干の相違がみられるが、これは段丘堆積物の供給源、堆積に働いた営力等の差に起因するものと考えられる。

雫石川流域の地形は標高の高い方から山地、丘陵、河岸段丘、河岸平野等に大別されるが、それらは、標高、起伏、構成物等によって更に細分される。標高の高い方から順次説明を加える。

〔山　地〕

雫石川右岸には南昌山、赤林山、箱ケ森を主峰とする標高 850m ±の山群がある。それらの

北西部には大欠山、湯の館山等の標高 350m ±の中起伏山地が多く存在し、中起伏山地の麓に小規模な段丘がへばりついている。雫石川左岸には雫石町七ツ森山群（標高348m）、滝沢村鳥泊山山群（標高389m）があり、ともに麓には平野部が形成されている。これらの山群は安山岩、凝灰岩、チャート等で構成されている場合が多く、七ツ森山群は第４紀火山岩より成る。

〔丘　陵〕

丘陵地とみられる地域は雫石町塩ケ森、松ケ森山群（標高265m ±）と雫石町西安庭地内の女助山北麓にみられる（標高270～300m ±）地形が相当すると考えられる。これらの丘陵は凝灰岩や安山岩で構成される場合が多いが、塩ケ森の場合は石英粗面岩や安山岩質の第4紀火山岩より構成され、七ツ森と同時期の火山活動によって形成されたものである。女助山北麓の場合には凝灰岩によって構成され、現地表面には若干の起伏がみられる。

〔段　丘〕

段丘は洪積段丘と沖積段丘に大別されるが、雫石川流域では洪積段丘３面、沖積段丘２面が認められる。洪積段丘は高位面よりH面、M面、L面、沖積段丘は古期、新期面となる。

H面：相当する面は雫石町西安庭旭台、清水沢地区に広範囲に亘ってみられる。他には、雫石町西安庭籬野、雫石町繋字新城、高見、雫石町板橋、盛岡市繋字尾入野等に中位段丘の段丘崖沿いに残丘上の小丘としてみられる。標高は雫石町西旭台清水沢地区では 220 ～250m であるが、他は、205～220m である。現河床との比高は60～70m を測る。堆積物は雫石町繋字塩ケ森地区（塩ケ森IB遺跡）の土層観察によれば、礫層は全体としてクサリ礫が多く礫層の上面には0.5m ±の黄橙色火山灰が堆積している。

M面：相当する面は雫石町繋字塩ケ森、新城地区、盛岡市尾入野、山根地区、雫石町板橋・仁沢瀬地区、滝沢村仁沢瀬地区、雫石町西安庭等の各地区に広範囲に亘って観察される。盛岡市繋温泉地区には、中位段丘相当面は観察されない。標高は190～210m であり、現河床との比高は40～50m である。上位段丘面とは比高10m ±であり、緩傾斜の段丘崖が観察される。堆積物は、主として新鮮な砂礫分からなり、その上面を 1.5m 内外の、黄橙色火山灰が堆積している。雫石町繋字新城・盛岡市繋字尾入野地区には火砕泥流の堆積がみられ、小岩井泥流に相当するものと考えられる。

L面：相当する面は、盛岡市繋温泉、除地区、雫石町下平、桜松、町場、戸沢、安庭地区にみられ、標高は180～200m であり、現河床との比高は20m ±である。上位段丘面とは比高10m ±であり明瞭な段丘崖が観察される。段丘堆積物は、繋Ⅲ遺跡の例では、新鮮な砂礫層の上にシルトが0.5～1.0m 堆積しており、火山灰の堆積はみられない。

沖積段丘古期面：相当する面は、盛岡市繋萪内河原・下繋・猿田・尾入野・北の浦・雫石町西安庭字広瀬・町場・安庭・皀角・天沼・兎野地区等にみられる。標高は160～170m であり、

現河床とは比高10m ±である。上位のL 面との比高は10～15m である。堆積物は新鮮な砂礫層の上面に直接黒色シルトまたは腐植質土が堆積している。

沖積段丘新期面：各河川流域の両岸に細長くみられ、増水時には一部冠水する部分も含まれている。現河床との比高は３～５ｍの場合が多い。堆積物は新鮮な砂礫層の上面に砂質の腐植質土が堆積している。

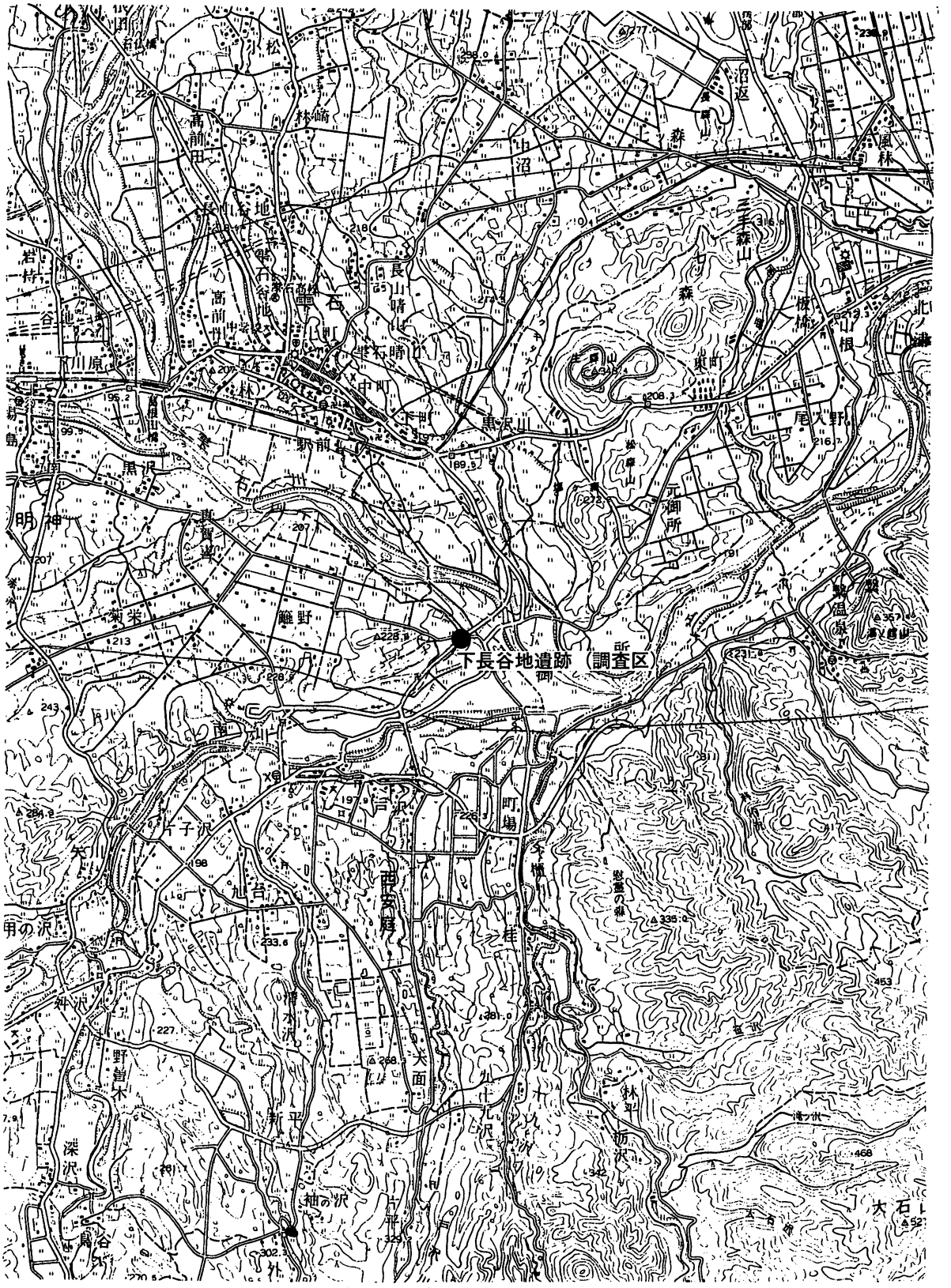
扇状地・谷底平野・扇状地は開析扇状地と現成扇状地に大別されるが、開析扇状地は洪積段丘として残存しており、繋Ⅲ遺跡の立地する段丘も洪積低位段丘相当の開析扇状地とおもわれる。

現成扇状地は、立石沢下流域、萪内沢下流域の沖積段丘古期面上にみられ、その中でも、立石沢下流域の扇状地は沖積段丘古期面とは比高５～10m である。

谷底平野は崖錐性扇状地とともに盛岡市繋地区の沢や谷沿いに形成されている。

下長谷地遺跡（しもながやち）

1．遺跡所在地　岩手県岩手郡雫石町大字西安庭第15地割字下長谷地41－1
2．事業主体　建設省御所ダム工事事務所
3．調査主体　岩手県教育委員会文化課
4．調査担当者　岩手県教委　勝股国夫
　　盛岡市教委　吉田義昭
5．発掘対象面積　1800㎡
6．発掘面積　700㎡
7．調査期間　昭和48年10月5日～12月26日
8．遺跡記号　SY－73



図版１　遺跡位置図（１／50000）

図版２　遺跡付近の地形図

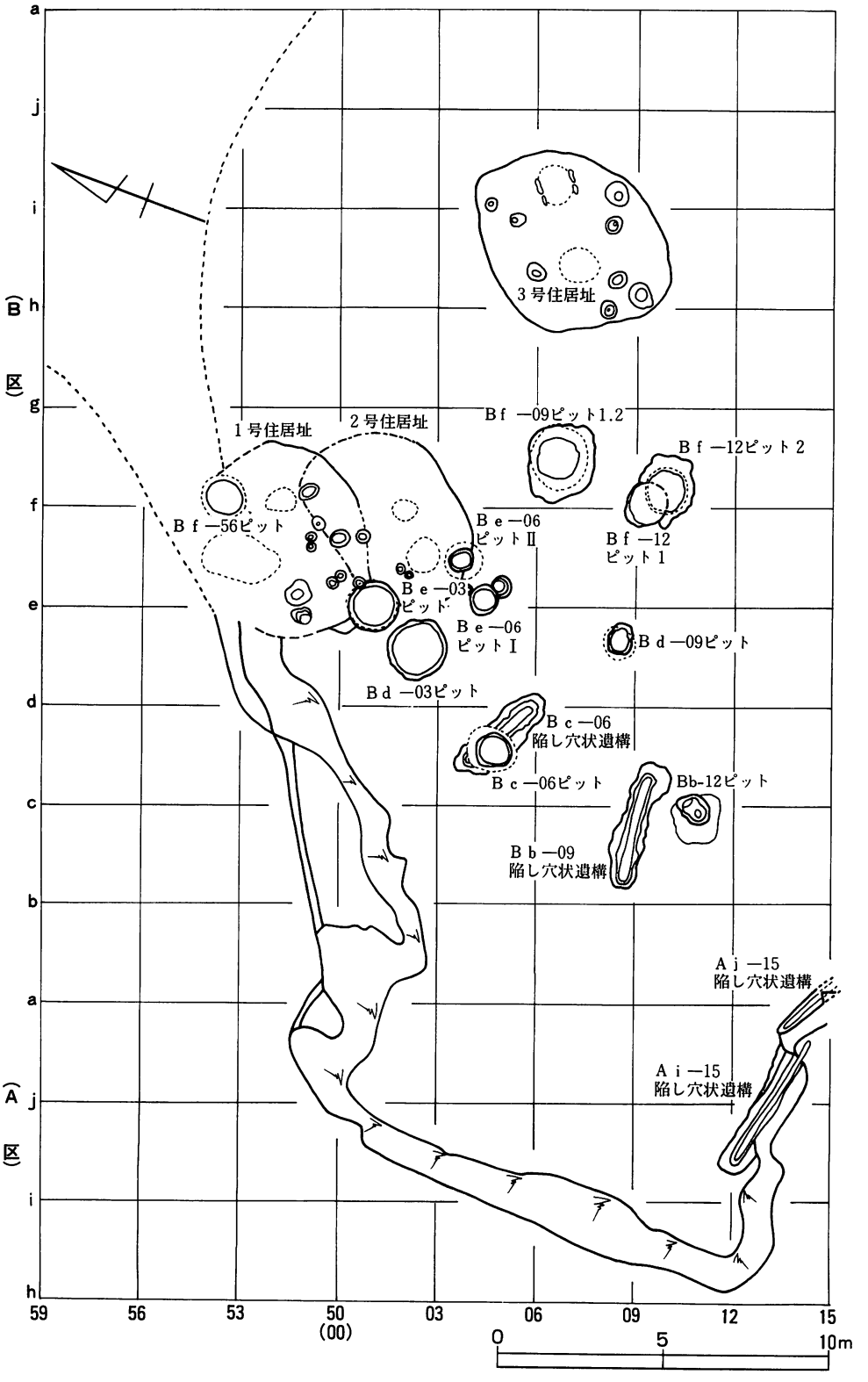
Ⅰ．遺跡の位置と環境

下長谷地遺跡は、岩手郡雫石町大字西安庭第15地割字下長谷地41－1に所在し、盛岡駅を起点とする国鉄田沢湖線雫石駅より南東1.9km±に位置する。

遺跡は、雫石川右岸に形成された洪積世の中位段丘面に営まれたもので、標高190mから、195mの緩傾斜面に相当する。遺跡の東方は、10m以上の比高差を持つ急峻な段丘崖を経て、雫石川によって形成された沖積段丘面が続く。南方も同様の地形を呈するが、雫石川に注ぐ南川、矢櫃川の合流点を臨むため、沖積段丘面はやや広く形成されている。遺跡が位置する段丘面の北西部から西部にかけては、ほとんどが開田による水田となっており、残された部分は畑地として利用されている。遺跡内は、5m前後の傾斜面になっており、最高部に古くからの稲荷神社が設置されていることもあってか、幸い開田事業から免れて現状を維持している。広葉樹や針葉樹が広範に繁り、雑木林を形成する。

調査区は、御所ダム建設工事に関連して湖岸道路を建設するための道路用地で、1800㎡が対象となった。位置的には、遺跡中心部から北部に向かって、やや舌状に張り出す形となる標高190mから191mの地点に相当する。現状は畑地であった。現在は、対岸の野中地区とを結ぶ安庭橋のつけ根部分にあたり、道路に面して雫石町立歴史民俗資料館が建設されている。

周辺の遺跡としては、雫石川をはさんで北東の段丘に野中遺跡（縄文時代早期～後期の遺物とピット）、桜松遺跡（縄文時代中期～後期の住居址、炉址、ピットなどの遺構と縄文時代早期～後期、平安時代の遺物）、黒沢川、クキタナイ川をはさんださらに北東の段丘に塩ケ森Ⅰ遺跡（縄文時代早期～中期の住居址、ピットなど多数の遺構と縄文時代早期～晩期の遺物）、元御所Ⅰ遺跡（縄文時代前期～中期の住居址、ピットなどの遺構と遺物）、南西の南川の左岸段丘に熊野橋遺跡（縄文時代中期～後期の住居址、ピットなどの遺構と縄文時代早期～後期の遺物）、東方の雫石川と南川、矢櫃川の合流点からさらに下流の右岸沖積段丘に萪内遺跡（縄文時代後期～晩期、平安時代の住居址、墓坑、鮒状遺構など多数の遺構と遺物）などがある。


3号住居址
1号住居址
2号住居址
Bf —09ピット1.2
Bf —12ピット2
Bf —56ピット
Be—06
ピットⅡ
Bf —12
ピット1
Be—03
ピット
Be—06
ピットⅠ
Bd—09ピット
Bd —03ピット
Bc—06
陥し穴状遺構
Bc—06ピット
Bb-12ピット
Bb—09
陥し穴状遺構
Aj —15
陥し穴状遺構
Ai—15
陥し穴状遺構
B区
A区
a
j
i
h
g
f
e
d
c
b
59
56
53
50
(00)
03
06
09
12
15
0
5
10m

図版3　遺構配置図

Ⅱ．調査方法と経過

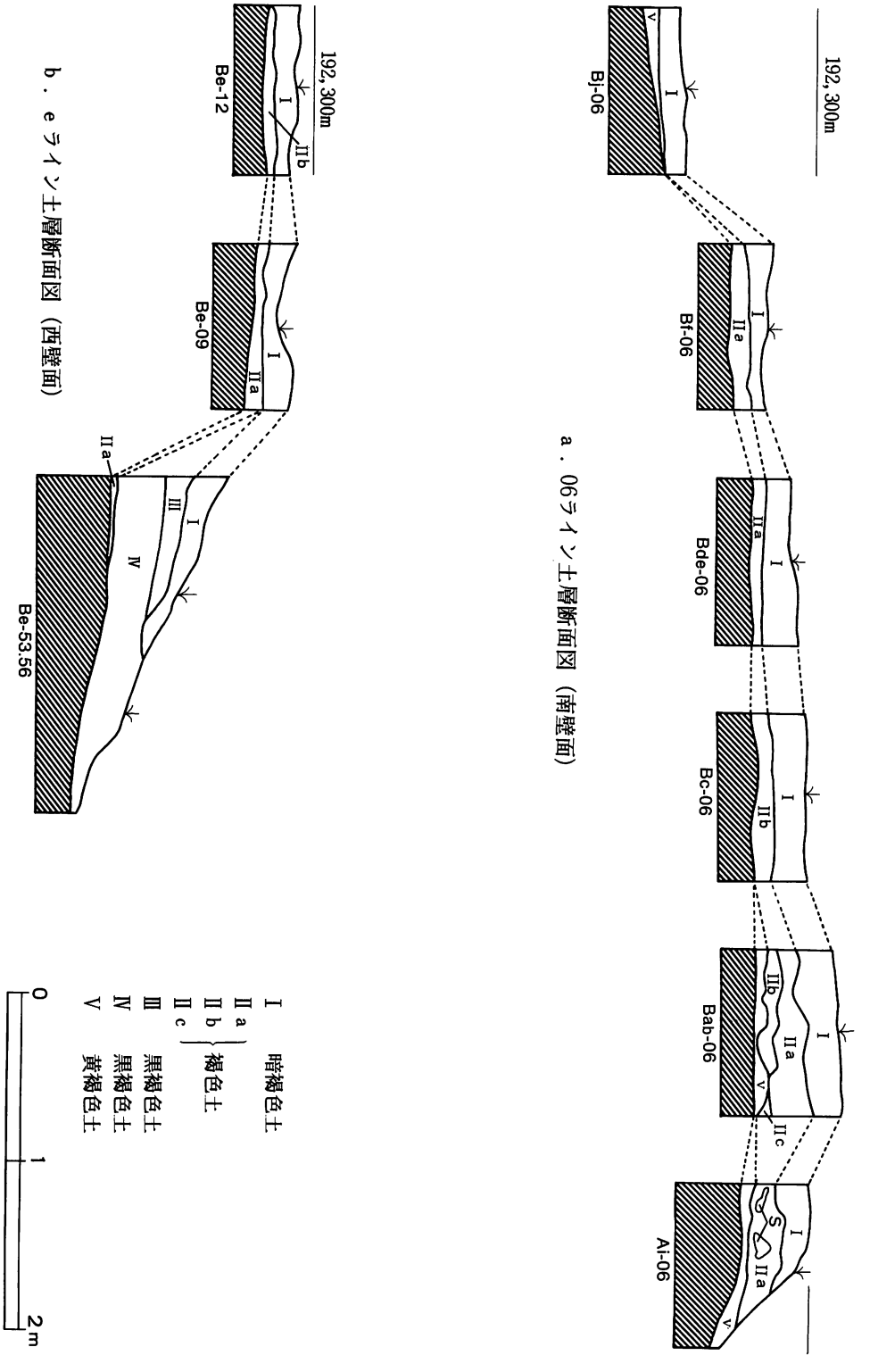
本遺跡の調査区は、湖岸道路用地に相当する1800㎡であった。しかし、調査以前に既に道路建設工事が着手されており、調査区南西部は破壊を受け基盤層が露出し１ｍ±の段差が形成されていた。（遺構配置図に実線で示されている段差部分）したがって、実際に調査された面積は、破壊を免れた700㎡±である。また、調査区西側には雫石町立歴史民俗資料館が建設されており、その際の整地によると思われる土砂の移動が、調査区西部に確認された。

残存する調査区からは、土器片のほか石匙、篦状石器、環状石斧などの石器が表面採集されたため、調査方法は３ｍ×３ｍの全面グリッド方式を採用した。グリッドラインは、はじめに湖岸道路の中心杭№50と№51を利用して、基準線50（00）ラインを設定し、これと平行に東方へ３ｍ毎に03、06…15まで、西方へ53、56、59までの各ラインを設けた。直交するラインは、道路中心杭№51を通るものをａラインとして、北方へ３ｍ毎にａ～ｊまでを与え、この10区画、30ｍの大区画をＢ区とし、その南方をＡ区とした。なお、基準線50（00）ラインは、Ｎ－57°－Ｅの方向になる。

各グリッドの名称は、一番前に大区画名を付け、その後には50（00）ラインより東方では交差する南方及び東方のライン名をとり、例えばAj－03、Ba－06グリッドのように、50（00）ラインより西方では、南方及び西方のライン名をとって、例えばAj－53、Ba－56グリッドのように命名した。50（00）は、グリッド名には使用していない。

名遺構の命名は、住居址については１号～３号住居址としたが、ピット、陥し穴状遺構についてはグリッド名を使用した。遺構が複数のグリッドにまたがって検出されたものについては、範囲の広いグリッド名を使用した。また、同一グリッドから重複がなく複数の遺構が検出された場合は、例えば、Be－06ピットⅠ、Be－06ピットⅡのように末尾にローマ数字を付し、重複がある場合は、Bf－09ピット１、Bf－09ピット２のように末尾に算用数字を付した。

調査が開始されたのは、10月５日であった。現状が畑地であったため刈り払いの必要がなく、かんたんに雑物を撤去した後にグリッドの設定を行なった。粗掘り作業は１グリッド毎では狭かったため、２グリッド毎に行なった。しかし、遺物の収納も２グリッド単位で行なわれ、正確なグリッドを表わさないという不備が生じた。（石器計測表にそれがみられる）遺構検出は表土層、褐色土層を剝いだ後に基盤層（地山）である黄褐色土層があらわれ、この上面が遺構検出面として把握された。精査は、住居址については四分法、その他の遺構については二分法で行なった。平面図、断面図は$\frac{1}{20}$でとり、必要に応じて$\frac{1}{10}$も採用した。調査は、11月に入ってからの降霜や降雪に悩まされたが、12月26日に無事終了した。


192,300m
Bj-06
Bf-06
Bde-06
Bc-06
Bab-06
Al-06
a．06ライン土層断面図（南壁面）
192,300m
Be-12
Be-09
Be-53.56
b．eライン土層断面図（西壁面）
Ⅰ 暗褐色土
Ⅱa
Ⅱb
Ⅱc
褐色土
Ⅲ 黒褐色土
Ⅳ 黒褐色土
Ⅴ 黄褐色土
0
1
2m

図版4　基本土層

Ⅲ．基本土層

調査区の基本土層は、06ラインとeラインの断面図より下記の通りである。

Ⅰ層　　暗褐色土

ほぼ調査区全域にみられる表土層である。畑地としての耕作が及んでおり、攪乱を受けている。土器片や石器が表面採集された。植生根が多く入り込み、場所によって黒褐色が強い部分もある。平坦部では平均20cmの層厚を測るが、北東部の段丘崖に向かう傾斜面では、極く薄くしか堆積していない。

Ⅱ層　　褐色土

Ⅰ層ほどではないが、植生根が入り込む。締まりはないが、やや粘性がある。わずかな色調のちがいにより三分（a、b、c）したが、同一の層である。平坦部では平均10cmの層厚を測る。傾斜面では観察されない部分もある。

Ⅲ層．Ⅳ層　　黒褐色土

調査区西部でのみ観察された層である。断面図によると、本来的な自然堆積層であるⅡa層が基盤層の上部にわずかに認められ、その上に本層の堆積がみられる。本層は自然堆積ではなく、資料館建設に伴う整地によって人為的に西部から押されて形成されたものである。Ⅱa層のわずかな堆積と平坦部とのレベル差を考えると、本来的にこの西部には小沢状の傾斜面が形成されていたものと思われ、Ⅲ、Ⅳ層の堆積はこれを埋める目的で行なわれたものと推定される。Ⅲ、Ⅳ層の線引きは、記載によるとⅣ層に多くの炭化物が認められたとあり、この点で行なわれたものであろうが、ほぼ同一の攪乱層である。本層から縄文時代早期に位置づけられる土器片のほとんどが、他の時期に位置づけられるものと混在して出土した。また、各器種にわたる石器も数多く得られている。

Ⅴ層　　黄褐色土

本遺跡の基盤層の漸移層と思われる。基盤層より軟かい。調査区南西部に部分的に認められる。

遺物は、Ⅰ層～Ⅴ層の全層から出土しているが、攪乱層が多く時期別、層位別の対応関係はない。遺構検出面は、ほとんどが基盤層上面である。

Ⅳ．発見された遺構と遺物

1．遺構

（1）竪穴住居址

1）1号住居址

遺構（図版5、写真図版2）

この住居址は、調査区西部の平坦地から傾斜地にかけて検出されたものである。検出グリッドは、Bd－53、Be－53・56、Bf－53の各グリッドにわたっている。遺跡の位置と立地及び基本層序の項でも述べた様に、調査区西部は本来的に傾斜地になっていること、また、耕作及び土砂の移動により削平・攪乱を受けていることなどから精査は難行した。

本住居址は、東壁で2号住居址、南壁でBe－03ピット、西壁際と思われる部分でBf－56ピットと重複している。このうち、2号住居址との重複関係は、断面図（A－A′）から、2号住居址の埋土である2層が重複部で切れることなく連続していること、3層が床面と同一傾斜を保ちつつ重複部から現われ、端部に立ち上がりと思われる部分が認められることより、3層が2号住居址の貼り床と認定された。したがって、1号住居址は、2号住居址より古いものに位置づけられる。精査段階では、この貼り床を地山面まで下げており、この重複関係については、不明だったものと思われる。（平面図は、線が煩雑になるため、残在する壁を実線で示している。一点鎖線で描いた2号住居址の方が新しい。）Be－03ピットについては、1号住居址及び2号住居址の壁を切っており、新しい遺構に位置づけられる。Bf－53ピットとの重複関係については、不明である。

平面形は、西壁及び南壁が不明であるが、残存する東壁や南壁の一部から推定すると、楕円形を呈するものと思われる。規模は、長径 591cm±、短径は不明、壁高は残存する東壁の地山面までで8cm±を測る。

埋土は、褐色土主体の3・4層が層が流され、その上に黒褐色土主体の5・6層が二次堆積しており、傾斜地特有のあり方を示している。このうち、7層が床面と同一レベルを保つように入っていることから、本住居址の貼り床と認められる。これは、傾斜する地山を床面とするには不都合なため、できるだけ平坦にする意図で行なわれたものと考えられる。地山と同様の明褐色土が使用され、固く締まっている。（断面図B－B′の貼り床は、模式的に示したもので正確ではない。）

炉は、現地性焼土が2個所検出されている。1号炉は、北部の床面にあり、長径99cm±、短径72cm±、2号炉は、西部の床面にあり、長径 240cm±、短径 135cm±を測る地床炉である。

しかし、断面図の記録がないため、埋土等については不明である。

柱穴状ピットは、本住居址と2号住居址の床面から合計13個のピット群が検出されているが、住居址への所属が不明なものがほとんどである。それぞれ、P－1（長径57cm±、短径44cm±、深さ58cm±）・P－2（長径42cm±、短径39cm±、深さ22cm±）・P－3（径28cm±、深さ39cm±）・P－4（径30cm±、深さ42cm±）・P－5（径76cm±、深さ58cm±）・P－6（長径62cm±、短径33cm±、深さ50cm±）・P－7（径34cm±、深さ21cm±）・P－8（径31cm±、深さ26cm±）・P－9（長径58cm±、短径48cm±、深さ40cm±）・P－10（径39cm±、深さ82cm±）・P－11（径32cm±、深さ38cm±）・P－12（径26cm±、深さ26cm±）・P－13（径29cm±、深さ34cm±）を測る。このうち、所属が明確なものは、断面図（B－B′）より2号住居址に伴うP－10、比較的明確と思われるのは、重複部からはずれるため1号住居址に伴うと考えられるP－5・P－6、同様の理由から2号住居址に伴うと考えられるP－12・P－13だけである。このような情況で柱穴配置を認定するのは問題があると思われるが、本住居址については、P－1・P－6・P－11の3個のピットと未検出の1個を加えた4個、あるいは、P－1・P－6・P－9・P－11の4個のピットと未検出の2個を加えた6個のピットで構成されるものと考えられる。配置は、長軸とややずれるが、長方形になる。

その他の施設としては、Be－03ピットに切られているが、南壁の一部に張り出しが認められる。上記に認定した柱穴配置と合わせて考えれば、出入口状の施設とも考えられるが、特に裏づける記録もないので、詳細は不明とするほかない。

出土遺物

復元土器（図版12－1、写真図版8－1）

この土器は、埋土下位から得られたもので、胴下部と底部しか残存しない。地文として結束第1種の原体LR－LRを横回転した単節斜縄文がみられる。胎土には繊維は含まれていない。

拓影土器（図版14－1～4、写真図版10－1～4）

いずれも埋土下位から得られたものである。1は、0段多条（3子撚り）の原体RLRによる複節斜縄文が施文されている口縁部破片である。2は、縦位の綾絡文を伴う原体LRとRLの単節斜縄文がみられる、一部羽状をなす。3は、孔のある軸に二種の原体RとLを入れ、異方向に巻きつけた絡状体を回転した木目状撚糸文がみられる。4は、網目状撚糸文が施文されている。

以上の出土土器のうち拓影土器1を除き他は第3群土器に属する。拓影土器1については不明である。

石鏃（図版17－1、写真図版14－1）

P－11の埋土から出土したものである。こころもち凹基であり、基部の右端部を欠損している。裏面は縁辺だけを二次加工している。

スクレイパー（図版17－２、３、写真図版14－２、３）

どちらも埋土下位からの出土である。２は、エンドスクレイパーと考えられる。表面には表皮を残し、下端に刃部を形成している。裏面は、上端のバルブ付近に刃部がつけられている。３は、サイドスクレイパーと考えられる。表面には表皮を残し、裏面の右側縁及び下端に刃部を形成している。

本住居址の時代的位置づけについては、２号住居址の最後で記述する。

２）２号住居址

遺構（図版５、写真図版２、３－a、b）

本住居址は、１号住居址のすぐ東側に検出され、重複関係にあるものである。埋土の検討の結果、３層を貼り床として使用しており、本住居址が新しいものに位置づけられる。ただ、３層が他の土を使用した人為的な貼り床か、自然堆積を利用してそのまま貼り床としたものかは明確ではない。

平面形は、残存した壁と断面図（A－A′）の３層（貼り床）の広がりから推定した形状（一点鎖線で示した）から、楕円形を呈するものと考えられる。規模は、この推定線から長径 610cm±、短径 400cm±、壁高は東壁で12cm±を測る。

炉は、長軸やや東寄りに現地性焼土が２個所検出されている。１号炉は、床面南部にあり径 100cm±、２号炉は、床面東寄り中央部にあり径68cm±の広がりを持つ地床炉である。しかし、断面図の記録がないため、埋土等については不明である。

柱穴は、P－１・P－11・P－13の検出された３個と未検出であるがそれに対応する３個の計６個、あるいは、これにP－９と対応する未検出のピットを加えた計８個で構成されるものと認定した。このうち、P－１・P－９・P－11は１号住居址の柱穴と共有関係にある。

その他の施設としては、床面北部のほぼ中央に埋設土器が１基検出されている。これも断面図の記録がないため詳細は不明であるが、一部に欠損があるものの口縁部から底部まで残存する深鉢形土器で、直立状態で埋設されていた。

出土遺物

復元土器（図版12－２～５、13－６、７、写真図版８－２～５、９－６、７）

４は、床面で検出された埋設土器である。口縁部から胴部上半にかけて半分程を欠くが、底部まで復元された。口縁部は、２個１対の山形突起を４単位有する波状口縁で外反する深鉢形土器である。口唇部には細くて撚りの緩い原体Rを使用した撚糸文が施文されている。口縁部直下に部分的に横位の綾絡文がみられ、これは胴部下半にもみられる。胴部には結束第１種の

原体RL－LRを横回転した羽状縄文が施文されている。この羽状縄文は、1度施文して段が変わる度に原体の位置を交互に変えながら施文したものと思われる。胎土にはわずかに繊維が含まれている。

5は、埋土下位から得られたもので、4と「兄弟」的な土器である。施文方法、胎土もほとんど4と同様である。異なる点は、口縁部の外反の度合が5の方が強いこと、綾絡文がみられないこと、羽状縄文の施文が4と逆に入っていることぐらいである。

2、3、6、7も埋土下位から出土したものである。2は、4つの山形突起を持つ波状口縁をなし、口縁部がゆるく外反する深鉢形土器である。胴部にゆるやかな膨みを持つ。口頸部に原体LRによる3条の側面圧痕文がみられるが、未端は合っていない。胴部には縦位の綾絡文を伴う同様の原体による単節斜縄文が施文されている。胎土には繊維の混入はみられない。

3は、口縁部から胴部にかけての一部と底部しかない深鉢形土器である。口縁部は平縁で外反し、胴部は円筒形を呈するものと思われる。口頸部に6条の沈線がめぐるが、接合しない別の口縁部をみると未端が合っていないため、7条から8条みられる部分もある。胴部には、文様が重なり合って不明確な部分もあるが、「変形」の木目状撚糸文が施文されている。これは孔のある軸に二種類の原体RとLを入れて未端に結び目をつくり、同方向に巻きつけた絡状体を縦回転した文様である。胎土には粗砂を多く含み、繊維の混入はない。

6は、胴部下半から底部にかけての深鉢形土器である。底部付近にゆるく膨みを有して立ち上がり、胴上部もしくは口頸部で大きく膨む、いわゆる「吹浦形」の器形を呈するものと思われる。地文として縦位の綾絡文を伴う原体LRの単節斜縄文が施文されている。胎土には粗砂が多く含まれ、繊維の混入はない。

7は、口縁部は平縁でゆるく外反する深鉢形土器である。口縁部下に6㎝±の無文帯を有し、一条の沈線によって地文部と区画する。地文は原体RLを縦回転した単節斜縄文である。胎土には細砂が含まれ、焼成はよい。

拓影土器（（図版14－5～8、写真図版10－5～8）

5、6は口縁部破片で、5は平縁でわずかに外反する。肥厚した口頸部に「フ」状の沈線文と2条の沈線がめぐる。6は、山形の小突起を有する波状口縁である。口縁に沿って原体LRによる2条の側面圧痕文がみられる。7は、綾絡文を伴う原体LRによる単節斜縄文、8は、結束第1種の原体RL－LRを用いて位置を変えながら回転した羽状縄文が施文されている。

以上の出土土器のうち復元土器7を除き他は第3群土器に属する。復元土器7は第4群土器に属する。

不定形石器（図版17－4、写真図版14－4）

埋土下位からの出土である。両面に不規則な二次加工が施されている。サイドスクレイパー

的な用途と思われる。

有孔石器（図版17－５、写真図版14－５）

北部の床面中央部からの出土である。両面から穿孔されており、周囲が磨かれている。

半円状扁平打製石器（図版17－６、７、18－８、写真図版14－６～８）

いずれも埋土下位からの出土である。８は、明確な敲打痕は持たないが、一部に磨面がみられる。６、７は、両面に敲打痕を有するもので、特に右側面の直状部に著しい。また、この部分には敲打痕の他に粗い磨面を有している。

以上の記述から、１号住居址と２号住居址の時代的な位置づけは、縄文時代前期未葉から中期前葉に属するものと考えられる。しかも、２棟の住居址には柱穴の共有関係（再利用）や出土土器から極めて近い時期の重複関係がうかがわれる。それが妥当とすると、２号住居址の貼り床である３層及び同系統の土である４層（１号住居址の埋土）は、自然堆積というよりも、２号住居址を構築した人々によって人為的に埋められた土とも考えられる。

３）３号住居址

遺構（図版６、写真図版３－c、d、４－a～d）

本住居址は、調査区の北東部に検出されたものである。検出グリッドは、Bh－06・09・12、Bi－06・09の各グリッドにわたっている。

平面形は、北壁、西壁の一部に耕作による攪乱を受けているが、不整な楕円形を呈し、規模は、長径 640cm±、短径 510cm±を測る。

埋土は、暗褐色土を主体として、褐色土、にぶい黄褐色土、黒褐色土などから構成されている。

床面は、ほぼ平坦である。

炉は、床面に２基検出されている。１号炉は、床面南寄りの中央部に位置し、長径 120cm±、短形100cm±、深さ12cm±を測る楕円形の地床炉である。埋土は、下部に明赤褐色土、上部に赤褐色土や褐色土などで構成されている。２号炉は、北東壁際の床面に位置し、焼土範囲が長径 130cm±、短径 100m ±を測る楕円形の石囲炉の形態を示す。石囲部は、両端が開く「二」の字状を呈し、構成礫は、長さ36cm±～64cm±を測る４個の礫である。開いている両端に、礫の抜き取り痕は認められない。一部に火熱による赤変と割れが生じている。埋土は、下部に明赤褐色土、上部に赤褐色土や褐色土などで構成され、１号炉と同様の堆積を示す。

柱穴状ピットは、床面にP－１（径25cm±、深さ39cm±）・P－２（長径49cm±、短径38cm±、深さ56cm±）・P－３（長径44cm±、短径32cm±、深さ34cm±）・P－４（径43cm±、深さ38cm±）・P－５（長径60cm±、短径49cm±、深さ40cm±）・P－６（長径55cm±、短径48

cm±、深さ14cm±）・P－7（径50cm±、深さ54cm±）・P－8（長径63cm±、短径55cm±、深さ60cm±）の計8個検出されている。これらのピットのうち、形状、規模、埋土の状態から、P－2・P－3・P－5・P－7のグループとP－1・P－3・P－5・P－8のグループの4個、ずつを柱穴と認定した。拡張を意図した建て換えが行なわれた可能性が強い。これらの配置は、不整台形状を呈する。

本住居址と重複する遺構はない。

出土遺物

拓影土器（図版14－9～14、写真図版10－9～14）

いずれも埋土下位および柱穴状ピットから得られたものである。9、10は出土地点、胎土、文様からみて同一個体と思われる土器片である。9は、平縁で肥厚する折り返し口縁部を持つ。地文には、横位の綾絡文を伴うLRの原体による単節斜縄文がみられる。また、拓影では明確でないが、最下部に横位の沈線が施されている。10は、9と同一の原体を使用しているが、施文方向は縦位である。したがって、9でみられた沈線が文様帯を区画するものと思われる。11は、P－4の埋土から出土したもので、縦位の綾絡文を伴うLRの単節斜縄文がみられる。12は、同様の文様であるが、原体はRLである。13は、口頸部破片で、原体LRによる側面圧痕文が縦位につく。その下部に横位の綾絡文を伴うより細い原体LRの単節斜縄文がみられる。14は、網目状撚糸文が施文される胴部破片である。以上の出土土器は第3群土器に属する。

篦状石器・打製石斧（図版18－9、写真図版14－9）

埋土からの出土である。刃部を欠損する。裏面に1次剝離面を残す。

磨製石斧（図版18－10、写真図版14－10）

埋土下位からの出土である。定角式に属する。基部を欠損する。

磨石（図版18－11、12、写真図版14－11、15－12）

どちらも埋土からの出土で、破損品である。しかし、12は、Bf－09ピットⅠの埋土から出土したものと接合した。

土偶（図版18－13、写真図版－15－13）

柱穴状ピットP－2の埋土からの出土で、板状土偶の胴部破片である。文様は、表裏両面、両側面に半截竹管状工具の内側を用いて沈線をつけ、その内部を同様の工具による「C」字状刺突文で充塡したものである。これと同一個体と思われる破片が、遺構外から2点出土している。文様の施文から第3群土器に伴うものと思われる。

台石（図版18－14、写真図版15－14）

埋土からの出土である。表面にやや平らな面と小さな敲打痕を持つ。

以上の記述から、本住居址の時代的位置づけは、縄文時代前期末葉から中期前葉に属するものと考えられる。

(2) ピット

1) Bb−12ピット

遺構（図版7−a、写真図版4−e、f）

このピットは、Bb−12グリッドとBc−12グリッドにかけて検出されたものである。平面形は、開口部、底部とも不整楕円形、断面形は、底部に長径に沿って二つのピット状の掘り込みがあるため平坦ではないが、浅い鉢形を呈する。開口部は、長径 128cm±、短径78cm±、底部は、長径88cm±、短径58cm±、深さ48cm±を測る。

埋土は、明褐色土をブロック状に含む黒色土と褐色土及び明褐色土からなり、人為的な堆積状況を示している。このピットの周囲には、径10cm±〜40cm±の凹みを伴った径 150cm±の不整円形の凹みが存在する。しかし、本ピットに伴うものかどうかは不明である。

出土遺物は得られていない。

2) Be−06ピットI

遺構（図版7−b、写真図版5−a、b）

このピットは、3号住居址の南側に位置する。検出面は、表土下の褐色土上面であり、他の遺構よりは新しいものと考えられる。平面形は、開口部、底部とも円形、断面形はビーカー形を呈する。開口部径88cm±、底部径70cm±、深さ50cm±を測る。

埋土は、暗褐色土を基本として、その他に、灰褐色土や明褐色土からなっている。埋土下位の暗褐色土には、炭化物の混入が認められる。このピットのそばに、2個の柱穴状ピットが重複した状態で検出されているが、これが、本ピットに関連するのか、3号住居址と関連するのかは、不明である。

出土遺物

拓影土器（図版14−15〜18、写真図版11−15〜18）

いずれも埋土からの出土である。15は、肥厚する口縁部片で、沈線による区画内を、下方からの半載竹管による刻み及び山形沈線文でみたす。16、17、18は、いずれも綾絡文を伴う原体Lの無節斜縄文であるが、16は横位に、17、18は縦位に施文されている。以上の出土土器は第3群土器に属する。

本ピットは、埋土から拓影で示した土器片が得られているが、構築時期を決定する資料とは

言えず、明確な時代的位置づけは不明である。検出面が他の遺構より浅い表土下であるところから、縄文時代以降の新しいピットと思われる。

3）Bd－03ピット

遺構（図版７－c、写真図版５－c）

このピットは、２号住居址の南西より、Bd－03グリッドの南側に位置する。平面形は、開口部、底部とも円形、断面形は皿形を呈する。開口部径 160cm±、底部径 144cm±、深さ14cm±を測る。

埋土は、暗褐色土からなる単層である。

出土遺物

拓影土器（図版14－19～22、写真図版11－19～22）

19は、網目状撚糸文がみられる胴部破片である。20は、胴下部破片で原体Rの撚糸文がみられる。21は、原体RとLを使用した木目状撚糸文である。22は、縦位の綾絡文が施文されている。以上の出土土器は第３群土器に属する。

箆状石器・打製石斧（図版19－15、写真図版15－15）

平面形は、三角形を基本とし、直刃タイプである。縦断面形は、両刃に近い。

石錘（図版19－16～21、写真図版15－16～20、16－21）

底部付近からまとまって６点出土した。いずれも、長軸上に両端からの打ち欠きを持つ。

4）Bc－06ピット

遺構（図版８－a、写真図版５－d～f）

このピットは、Bc－06グリッド中央部で陥し穴状遺構と重複して検出されたものである。重複があるため明確ではないが、平面形は、開口部、頸部、底部とも不整円形、断面形は、フラスコ形を呈するものと思われる。規模は、開口部径 108cm±、頸部径99cm±、底部径 157cm±、深さ 108cm±を測る。

A－A′の断面図で、陥し穴遺構との重複関係をみてみると、一点鎖線で示した部分で、２層、４層が下がっており、４層が切れていることから本ピットの方が新しいものとも考えられる。しかし、他層はつながりがあり、８層以下の堆積状況が陥し穴遺構のそれとよく似ていることなど疑問がある。B－B′の断面図をみると、１層～６層及び８層までどちらかというと陥し穴状遺構が本ピットを切っている堆積状況がみられる。したがって、本ピットより陥し穴状遺構が新しいものと認定した。図版は残された実測図から作成したため、埋土などにこの認定と矛盾する部分がある。いずれにせよ埋土の堆積状況や出土遺物からみるかぎり大きな時期差をも

った重複ではないと思われる。

出土遺物

復元土器（図版13－８、写真図版９－８）

この土器は、埋土から得られたもので、胴下部と底部が残存するにすぎない。底部がやや張り出し、胴上部ないしは口頸部で膨む６と同様な器形を呈する深鉢形土器と思われる。縦位の綾絡文を伴う原体LRによる単節斜線文が施文されている。

拓影土器（図版15－23～31、写真図版11－23～31）

全て胴部破片で埋土からの出土である。23、24は横位の綾絡文、25は縦位の綾絡文が施文されている。23は原体Lの無節斜縄文である。27、28は横位の結束第１種の羽状縄文、29はLR－Rの原体を使用した縦位の羽状縄文が施文されている。26は単節斜縄文、30はRとLの原体を使った木目状撚糸文、31は網目状撚糸文が施文されている。

以上の出土土器のうち拓影土器26は胎土に繊維を含み、尖底に近い器形が推定されるところから第２群土器に、他は第３群土器に属する。

５）Bd－09ピット

遺構（図版８－b、写真図版６－a）

このピットは、Bd－09グリッドの南東部に位置する。検出面は、基盤層上面である。平面形は、開口部、頸部が不整楕円形、底部は円形である。断面形は、フラスコ形を呈する。規模は、開口部で長径86cm±、短径61cm±、頸部で長径72cm±、短径52cm±、底部で径89cm±、深さ55cm±を測る。底部には、南面壁際に円形の副穴１個が存在し、その規模は、径28cm±、深さ18cm±である。

埋土は、炭化物を含む黒褐色土や暗褐色土からなり、自然堆積を示している。

出土遺物

復元土器（図版13－９、写真図版９－９）

この土器は、副穴際の底面から得られた胴部破片である。半載竹管による曲線で文様を区画し、不徹底ながら磨消が行なわれている。地文は、原体RLの単節斜縄文である。

拓影土器（図版15－32～36、写真図版12－32～36）

32と34は同一個体と思われる。口縁部は、山形の小突起を有する小波状口縁である。口縁直下から胴部にかけて、二列の竹管刺突文が施文されている。地文は、原体RLの単節斜縄文である。33と35は無節斜縄文、36は単節斜縄文が施文されている。

以上の出土土器のうち、復元土器９、拓影土器32、34は第４群土器に属する。他の土器もこれに伴う可能性が強い。本ピットは復元土器９の出土状況から縄文時代中期末葉から後期初頭

に位置づけられよう。

6）Be－03ピット

遺構（図版９－a、写真図版６－c、d）

このピットは、１号住居址、２号住居址と重複関係にあり、埋土の状況や出土遺物などから、そのいずれよりも新しい時期に構築されたものである。平面形は、開口部、頸部、底部ともほぼ円形、断面形は、フラスコ形を呈する。規模は、開口部径 148cm±、頸部径 122cm±、底部径 142cm±、深さ 116cm±を測る。底面は平坦である。

埋土は、黒色土、暗褐色土、褐色土からなり、自然堆積を示している。

出土遺物

復元土器（図版13－11、12、写真図版９－11、12）

11、12とも埋土下位から得られたものである。11は口縁部は平縁でやや外反し、胴央部でふくらみを持つ深鉢形土器である。口縁下から隆起線で「U」字状に四分し、胴央部では同様の隆起線が一巡している。四分した区画部分には、ボタン状の貼り付けが伴い、中央部に竹管刺突文が施文されている。二本の隆帯間には磨消が加えられ、地文は、原体LRの単節斜縄文である。

12は、四つの山形突起を有する大波状口縁で、外反し、口頸部にふくらみをもつ深鉢形土器である。口頸部は、横方向からの刺突文を伴う隆帯（いわゆる連鎖状隆起線）で飾られる以外は無文帯である。胴部は、隆帯下に竹管刺突文がめぐり、以下は撚りがゆるい太目の原体による網目状撚糸文が施されている。

拓影土器（図版15－37～39、写真図版12－37～39）

埋土から得られたもので、37、38は、縦位の綾絡文、39は、木目状撚糸文が施文されている。

以上の出土土器のうち、復元土器11、12は第４群土器に拓影土器37～39は第３群土器に属する。

不定形石器（図版19－22、写真図版16－22）

埋土からの出土である。厚目の剝片に不規則な刃部を形成する。

磨石（図版20－23、写真図版16－23）

埋土からの出土である。平面形、断面形とも楕円形を呈する。

本ピットは復元土器11、12の出土状況から、縄文時代中期末葉から後期初頭に位置づけられる。

7）Bf－56ピット

遺構（図版９－b）

このピットは、Bf－56グリッド南側に位置する。平面形は、開口部、頸部、底部ともほぼ円形、断面形は、フラスコ形を呈する。規模は、開口部径 121cm±、頸部径 111cm±、底部径 129cm±、深さ60cm±を測る。

埋土は、黒色土、褐色土、にぶい黄褐土などで構成される。本ピットは、1号住居址の床面の広がりから、この住居址と重複関係にあるものと考えられるが、出土遺物もないため、前後関係については明らかではない。

8）Be－06ピットⅡ

遺構（図版9－c、写真図版6－b）

このピットは、2号住居址と重複関係にあり、その南壁を切って構築されたものである。平面形は、開口部、頸部、底部とも不整円形、断面形は、フラスコ形を呈する。規模は、開口部径64cm±、頸部径58cm±、底部径 107cm±、深さ 102cm±を測る。底面は平坦である。

埋土は、炭化物を含む軟らかい暗褐色土で構成されているが、その上位面は記録がないため不明である。

出土遺物

復元土器（図版13－10、写真図版9－10）

この土器は、埋土中位から得られたものである。胴部破片であるが、図版13－6、8と同様の器形を呈するものと思われる。地文には、縦位の綾絡文を伴う原体LRの単節斜縄文が施文されている。

拓影土器（図版16－40～42、写真図版12－40～42）

40は、口縁部破片であり、口唇部や口頸部には粘土ひもの賠りつけによる隆帯加飾がある。口頸部には、篦状工具による三角状刺突文や刻みがつけられる。41は、口頸部破片で、隆帯によって、胴部と区画される。篦状工具による沈線文や刻みがみられる。42は、胴部破片で、縦位の綾絡文を伴う太目の原体Lによる無節斜縄文がみられる。

以上の出土土器は第3群土器に属する。

磨石（図版20－24、写真図版16－24）

埋土からの出土である。二つの破片が接合した。平面形、断面形とも楕円形である。

土偶（図版20－25、写真図版16－25）

埋土から出土した。左足の破片と思われる。文様は、篦状工具によって沈線が描かれその内部を篦先による刺突文で充塡されている。

9）Bf－09ピット1

遺構（図版10－a、写真図版６－e、f）

このピットは、Bf－09グリッド北西部に位置し、次に記述するBf－09ピット２号の直上に、これを切って構築されたものである。平面形は、開口部が不整楕円形、底部が不整円形、断面形は、鍋底形を呈する。開口部は、長径 214cm±、短径 196cm±、底部は、径 188cm±、深さ64cm±を測る。

埋土は、黒色土、褐色土、暗褐色土などからなり、自然堆積を示している。６層以下に、炭化物を含んでいる。

出土遺物

拓影土器（図版16－43～45、写真図版13－43～45）

いずれも埋土からの出土である。43は、口頸部破片である。沈線による曲線と、隆帯上に刻みがみられる。44は、原体Lの縦回転による無節斜縄文が、45は、縦位の綾絡文を伴う原体LRの単節斜縄文が施文されている。これらの出土土器は第３群土器に属する。

磨石（図版18－12、写真図版15－12）

埋土から出土した。この破片が、３号住居址の埋土から出土したものと接合した。

10）Bf－09ピット２

遺構（図版10－a、写真図版６－e、f）

前述のように、上部がBf－09ピット１号によって切られているため、全体の形状や規模は明確ではないが、残存部から推定すると、平面形は、頸部、底部ともほぼ円形、断面形は、フラスコ形を呈すると思われる。規模は、頸部で径126cm±、底部で180cm±、深さ100cm±を測る。

埋土は、にぶい黄褐色土、褐色土、暗褐色土などからなり、最下層の５層は、多くの炭化物を含む暗灰色土である。

本ピットからの出土遺物は得られていないが、ピット１号よりは古いものである。

11）Bf－12ピット1

遺構（図版10－b、写真図版７－a、b）

このピットは、Bf－12グリッド西部に位置し、次に記述するBf－12ピット２の西壁を切って構築されたものである。調査上のミスからピット１号もピット２号も同時に堀り下げているため、全体の形状や規模は明確でないが、残存部から推定すると、平面形は、開口部、底部とも不整円形、断面形は、開口部から底部にほぼ垂直におりるビーカー形を呈するものと考えられる。規模は、開口部径120cm±、底部径110cm±、深さ64cm±を測る。

埋土は、黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土などからなり、自然堆積を示している。この

うち、5層と6層は、ピット2号からの流れこみと考えられる。本来の立ち上がりは、11層の切れ目付近でろう。

出土遺物

拓影土器（図版16－46～54、写真図版13－46～54）

全て埋土から出土したものである。46～48は、口縁部破片で、46は、原体RLの側面圧痕文間及び隆帯上にLRの圧痕文を施している。47は、先細りの口縁部で、原体Lの縦回転による無節斜縄文が施文されている。48は、原体LRの側面圧痕文が、口唇部、口頸部にみられる。49は、隆帯上に篦状工具による刻みがみられる。50は、原体LとRの二本を使った木目状撚糸文、51は、網目状撚糸文が施文されている。52は、横位の綾絡文を伴う原体LRの単節斜縄文、53は、原体RLの単節斜縄文、54は、原体Rの撚糸文が密に施文されている。54は、胎土に若干の繊維を含む。これらの出土土器は54を除き第3群土器に属する。54は縄文時代前期前葉（大木2式）に属するものと思われる。

半円状扁平打製石器（図版20－26、写真図版15－26）

埋土からの出土で、欠損品である。磨面は認められない。

磨石（図版20－27、28、写真図版15－27、28）

いずれも埋土からの出土である。断面形は、27は楕円形、28は円形に近い。

12) Bf－12ピット2

遺構（図版10－b、写真図版7－a、c）

前述のように、西壁をBf－12ピット1によって切られており、また、ピット1と同時に堀り下げられたため、全体の形状、規模、埋土に不明な部分がある。残存部から推定すると、平面形は、開口部、頸部、底部とも不整円形、断面形は、フラスコ形を呈するものと思われる。

規模は、開口部径 178cm±、頸部径 128cm±、底部径 142cm±、深さ 118cm±を測る。

埋土は、上半部が不明であるが、下半部は、黄褐色土、褐色土などで形成され、人為的な堆積状況がうかがわれる。

出土遺物

拓影土器（図版16－55、56、写真図版13－55、56）

いずれも胴部破片で、55は、原体RLの単節斜縄文、56は、原体Rの撚糸文が施文されている。56は、胎土に若干繊維が含まれる。55、56とも、Bf－12ピット1号出土の53、54と同一個体と考えられる。したがって、本来はピット1に属するものが誤って収納されたものと思われる。

石匙（図版20－29、写真図版15－29）

埋土からの出土である。縦形に属するが、刃部を欠損する。縦長剥片を利用し打面につまみ

を形成する。

スクレイパー（図版20－30、写真図版15－30）

埋土からの出土である。基部を欠損する。縦長剝片を利用し、下端部、側縁部の刃部を形成する。エンドスクレイパーと思われる。

（3）陥し穴状遺構

1）Bc－06陥し穴状遺構

遺構（図版８－a、写真図版５－d～f）

この陥し穴状遺構は、長軸がN－72°±－Wの方向を示すものである。平面形は、隅丸長方形を呈する。規模は、開口部で長軸 340cm±、短軸 108cm±、底部で長軸 284 cm±、短軸21 cm±、深さ 101cm±を測る。Bc－06ピットとの重複については前述した。

埋土は、黒色土、暗褐色土、明褐色土などで構成されている。このうち７層の明褐色土は、他の陥し穴状遺構にはみられず、人為的な堆積の可能性も考えられる。副穴は検出されていない。

出土遺物

拓影土器（図版16－57、58、写真図版13－57、58）

いずれも埋土からの出土である。57は、口頸部破片と思われる。篦状工具による沈線がみられる。58は、縦位の綾絡文がみられるが、原体はLRとRLの二種類を用いており、一部は羽状縄文を呈する。これらの出土土器は第３群土器に属する。

磨石（図版20－31、写真図版15－31）

埋土から出土したものである。断面形は、不整楕円形を呈する。

2）Bb－09陥し穴状遺構

遺構（図版11－a、写真図版７－d）

この陥し穴状遺構は、Bb－09グリッドからBc－12グリッドにかけて検出され、長軸がN－70°±－Eの方向を示すものである。平面形は、不整な隅丸長方形、断面形は、「U」字形を呈する。規模は、開口部で長軸 389cm±、短軸82cm±、底部で長軸 340cm±、短軸18cm±、深さ 100cm±を測る。

埋土は、断面図が記録されていないため、不明である。底面に副穴は検出されていない。

出土遺物は得られていない。

3）Ai－15陥し穴状遺構

遺構（図版11－b、写真図版７－e）

この陥し穴状遺構は、Ai－15グリッドからAj－15グリッドにかけて、検出されたものであるが調査以前の道路建設工事により若干破壊されている。そのため、南壁及び東壁が攪乱をうけ、不明確になっている。この影響は、北部の一部にもみられる。残存部から推定すると、平面形は、隅丸長方形、断面形は、細い「U」字形を呈するものと思われる。長軸は、N－88°±－Wの方向を示している。規模は、開口部で長軸 490cm±（推定値）短軸96cm±（推定値）、底部で長軸 458cm±、短軸13±、深さ95cm±を測る。

埋土は、黒褐色土や褐色土からなるが、１、２層は、工事によって、攪乱されたものと考えられる。

出土遺物は得られていない。

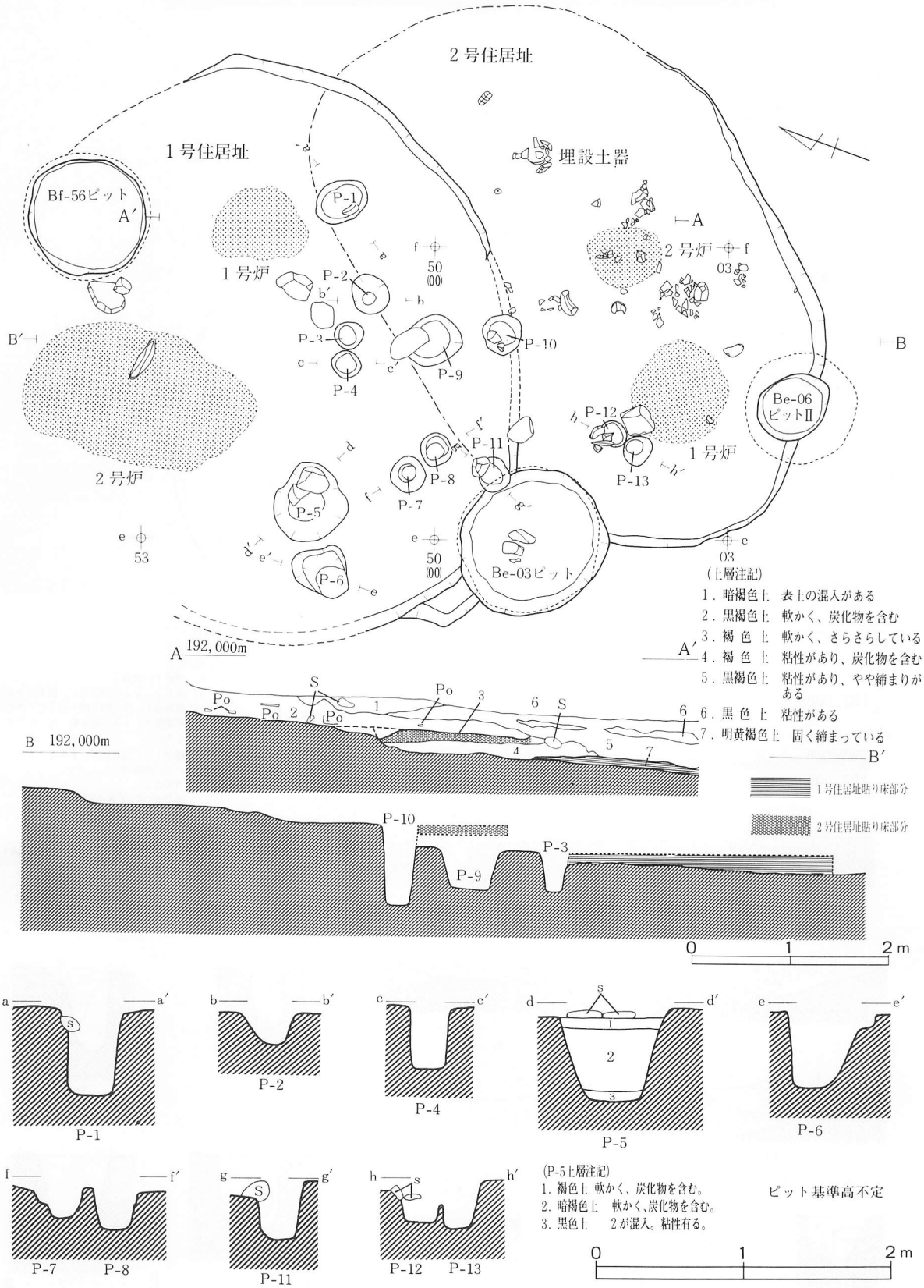
4）Aj－15陥し穴状遺構

遺構（図版11－b、写真図版７－e）

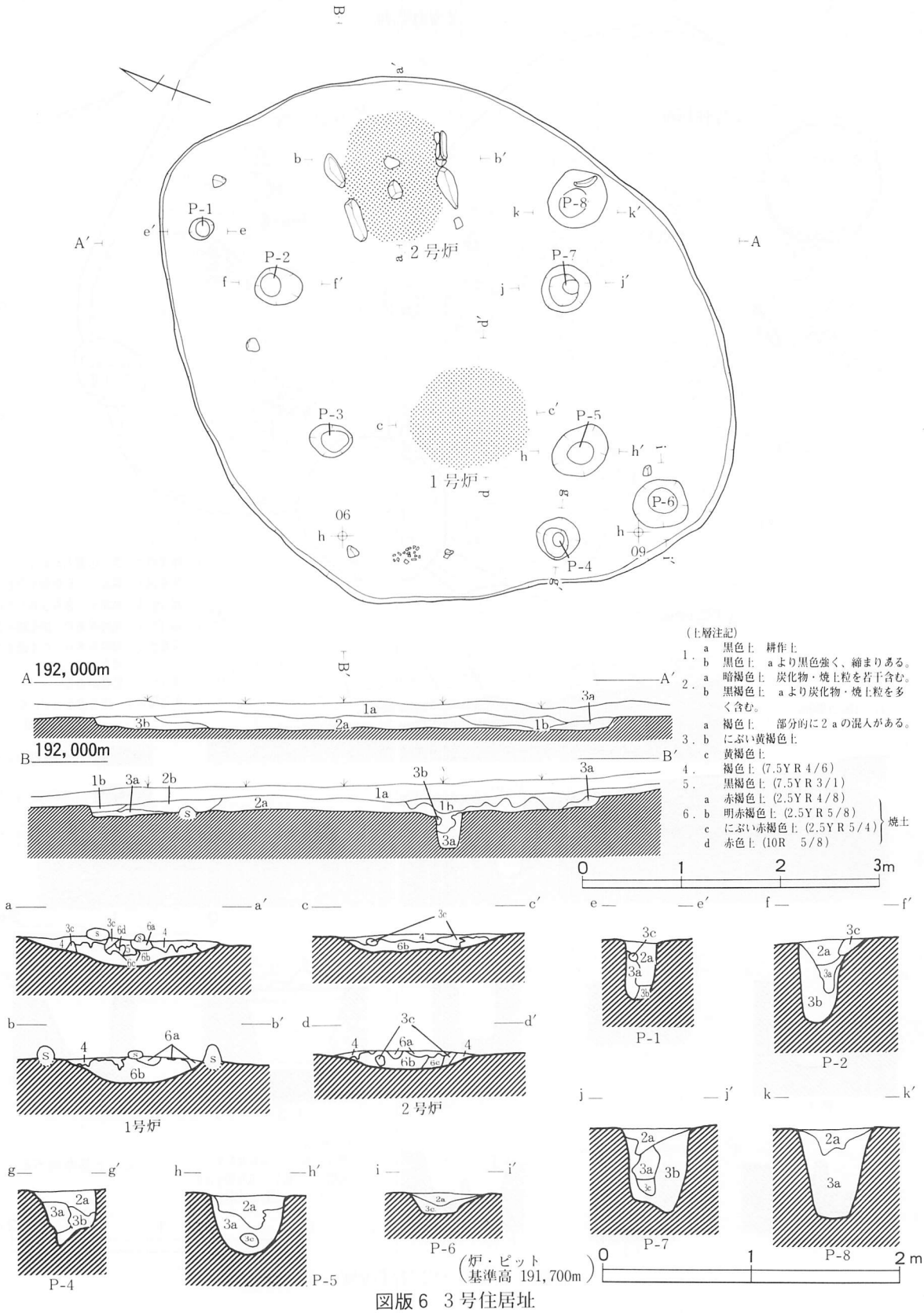
この陥し穴状遺構は、Ai－15陥じ穴状遺構と同様、調査区南端の工事による段差際に検出されたものである。東側半分が調査区外にのびているため不明確であるが、平面形は、隅丸長方形、断面形は、「U」字形を呈すると考えられる。長軸は、N－68°±－Wの方向を示している。規模は、開口部で、長軸は不明（残存部で 204cm±）、短軸は54cm±、底部で、長軸は不明（残存部で 172cm±）、短軸26cm±、深さ 146cm±を測る。

埋土は、Ai－15陥し穴状遺構とほぼ同様で、暗褐色土、褐色土、黒褐色土からなっている。

出土遺物は得られていない。

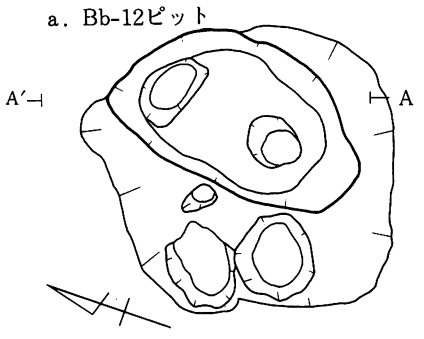

2号住居址
1号住居址
埋設土器
Bf-56ピット
A′
A
B′
B
1号炉
2号炉
P-1
P-2
P-3
P-4
P-5
P-6
P-7
P-8
P-9
P-10
P-11
P-12
P-13
Be-06
ピットⅡ
Be-03ピット
A 192,000m
A′
B 192,000m
B′
(上層注記)
1．暗褐色土　表土の混入がある
2．黒褐色土　軟かく、炭化物を含む
3．褐色土　軟かく、さらさらしている
4．褐色土　粘性があり、炭化物を含む
5．黒褐色土　粘性があり、やや締まりがある
6．黒色土　粘性がある
7．明黄褐色土　固く締まっている
1号住居址貼り床部分
2号住居址貼り床部分
0　1　2m
(P-5上層注記)
1．褐色土 軟かく、炭化物を含む。
2．暗褐色土　軟かく、炭化物を含む。
3．黒色土　2が混入。粘性有る。
ピット基準高不定

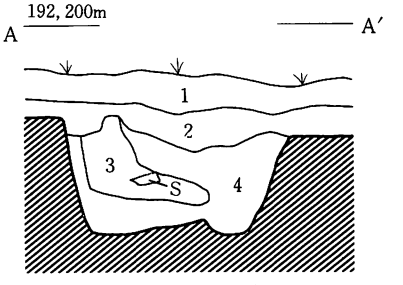
図版5　1号・2号住居址


B
a
b
b′
P-1
e′
e
A′
A
P-2
f
f′
2 号炉
P-8
k
k′
P-7
j
j′
d
P-3
c
c′
P-5
h
h′
1 号炉
g
P-6
06
h
09
P-4
192,000m
A
A′
B
B′
1a
1b
2a
2b
3a
3b
S
(土層注記)
1．a 黒色土 耕作土
b 黒色土 aより黒色強く、締まりある。
2．a 暗褐色土 炭化物・焼土粒を若干含む。
b 黒褐色土 aより炭化物・焼土粒を多く含む。
a 褐色土 部分的に2aの混入がある。
3．b にぶい黄褐色土
c 黄褐色土
4． 褐色土 (7.5YR 4/6)
5． 黒褐色土 (7.5YR 3/1)
a 赤褐色土 (2.5YR 4/8)
6．b 明赤褐色土 (2.5YR 5/8)
c にぶい赤褐色土 (2.5YR 5/4)
d 赤色土 (10R 5/8)
焼土
0 1 2 3m
a a′
c c′
e e′
f f′
3c
6d
6a
4
6b
6c
5b
b b′
d d′
1号炉
2 号炉
P-1
P-2
j j′
k k′
g g′
h h′
i i′
2a
3a
3b
3c
P-4
P-5
P-6
P-7
P-8
(炉・ピット
基準高 191,700m)
0 1 2 m

図版6 3号住居址

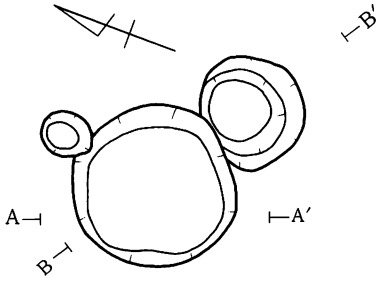
a．Bb-12ピット

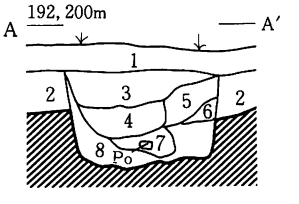


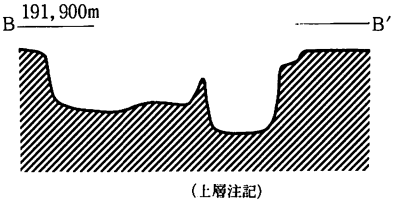


（上層注記）
1．暗褐色土　表土
2．黒 色 土　4がブロック状に混入
3．褐 色 土　4がブロック状に混入
4．明褐色土

b．Be-06ピットⅠ

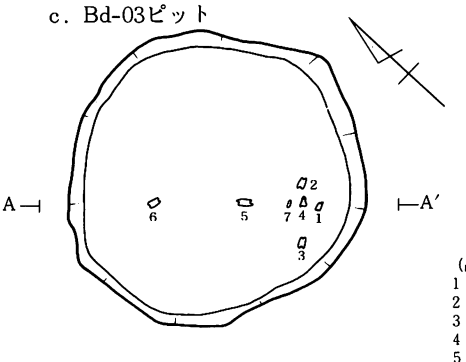


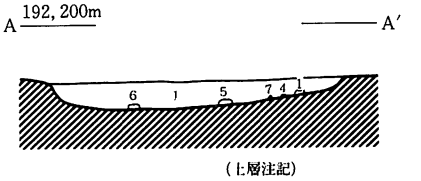




（上層注記）
1．暗褐色土　表土
2．褐 色 土
3．暗褐色土
4．暗褐色土
5．灰褐色土
6．明褐色土
7．暗褐色土　炭化物が混入
8．暗褐色土　炭化物が混入

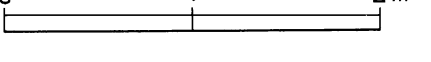
c．Bd-03ピット





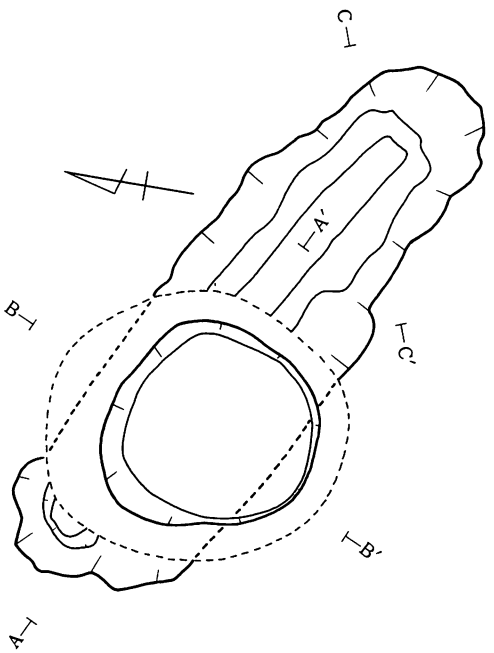
（上層注記）
1．暗褐色土

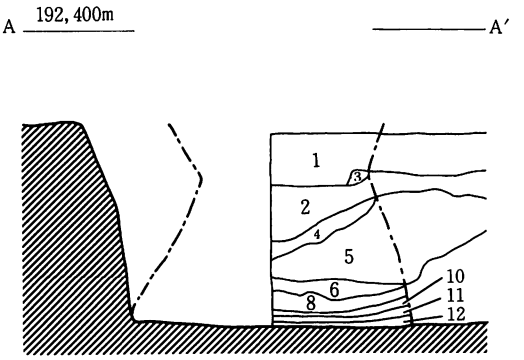
（出土遺物）
1
2
3
4
5
6
石錘
7　篦状石器・打製石斧

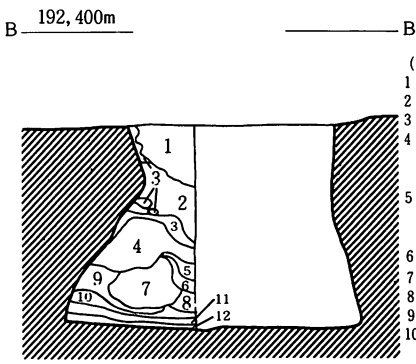


図版７　Bb-12ピット・Be-06ピットⅠ・Bd-03ピット

a．Bc-06ピット陥し穴状遺構

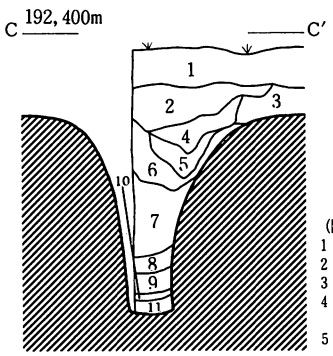






(ピット注記)

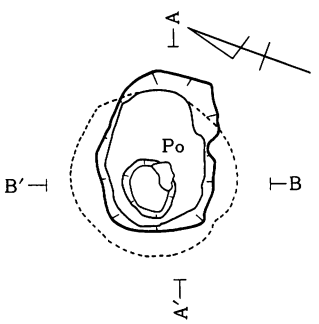
1．黒褐色土　表土が混入
2．暗褐色土　軟かい
3．黄褐色土
4．褐色土　軟かく、小炭火物が混入
5．にぶい褐色土　砂が混入しやや締まりがある。
6．褐色土　砂が混入
7．にぶい褐色土
8．暗褐色土　粘性がある
9．褐色土
10．明褐色土　締まりが強い
11．明褐色土　砂が混入し締まりが強い
12．明黄褐色土

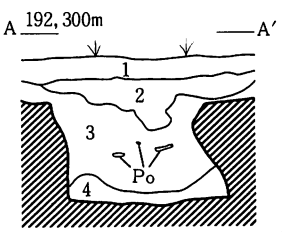


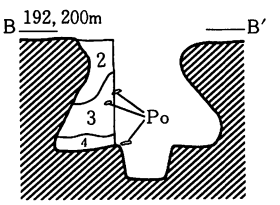
(陥し穴状遺構注記)

1．暗褐色土　表土
2．暗褐色土
3．褐色土
4．黒色土　締まり、粘性あり
5．暗褐色土
6．褐色土
7．明褐色土
8．褐色土
9．暗褐色土
10．明褐色土
11．明黄褐色土

b．Bd-09ピット陥し穴状遺構







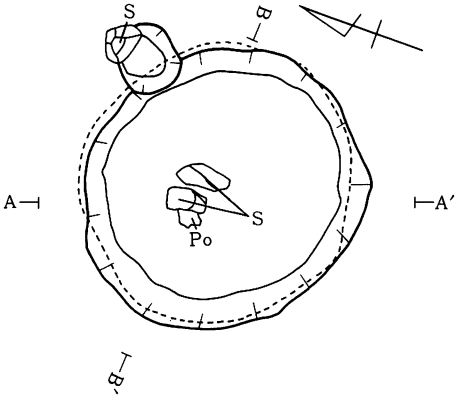
(土層注記)

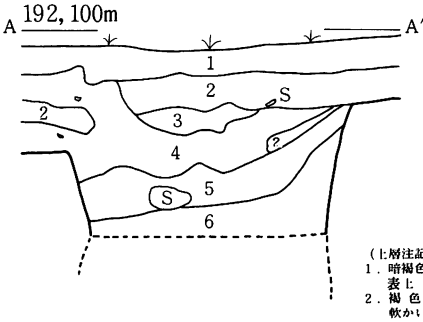
1．暗褐色土　表土
2．黒褐色土　やわらかく炭化物を含む
3．暗褐色土　やや締まりがあり、炭化物、土器片を含む
4．暗褐色土　締まりがあり、炭化物を含む

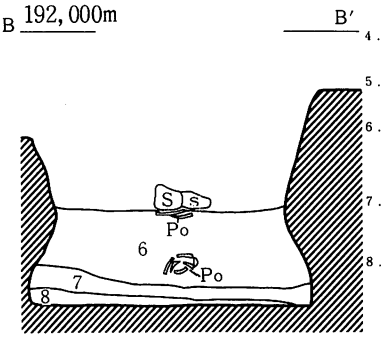
0　1　2m

図版8　Bc-06ピット、陥し穴状遺構・Bd-09ピット

a. Be-03ピット

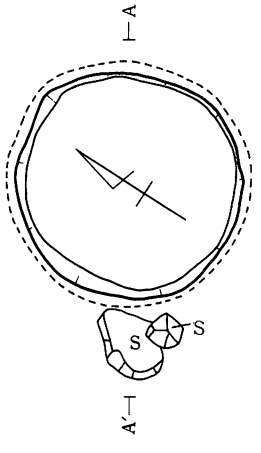


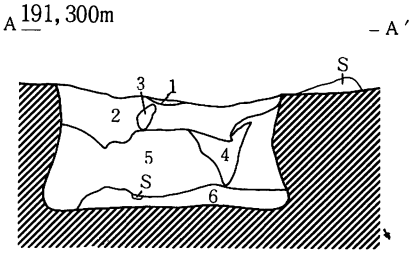




（上層注記）
1．暗褐色土
表土
2．褐 色 土
軟かい。
3．黒 色 土
締まり、粘性ややあり。
4．褐 色 土
やや粘性があり、小炭化物を含む。
5．暗褐色土
締まりがあり、炭化物を含む。
6．暗褐色土
軟かく、炭化物を含む。上部に黄褐色ブロック、小礫が入る。
7．褐 色 土
やや粘性があり、細やかな炭化物を含む。
8．黒 色 土
粘性が強い。

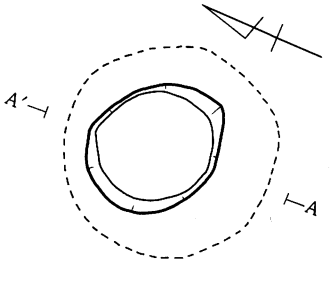
b. Bf-56ピット

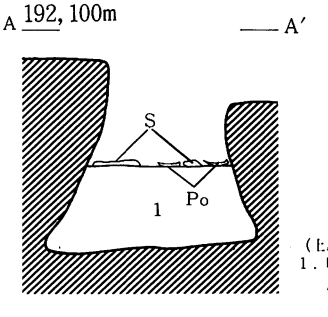




（上層注記）
1．黒 色 土　粘性がある。
2．褐 色 土　締まりがややある。
3．黄褐色土　ブロック。
4．黒 色 土　軟かい。
5．褐 色 土　締まりがあり、砂を含む。
6．にぶい
黄褐色土　小礫を含む。

c. Be-06ピットⅡ



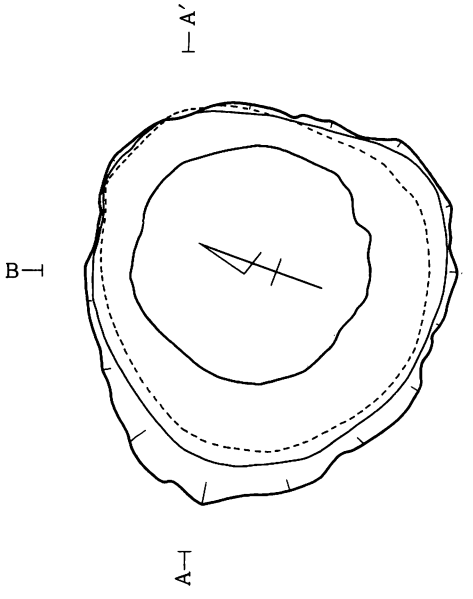


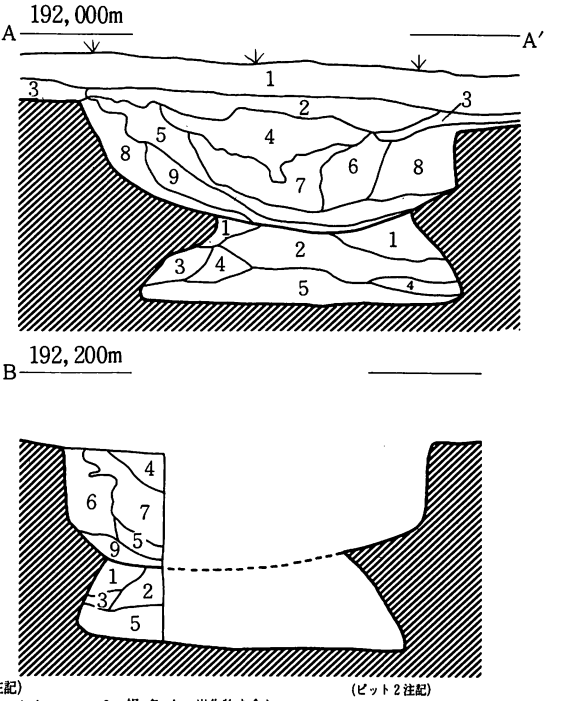
（上層注記）
1．暗褐色土　軟かく、炭化物を含む。

0　1　2m

図版9　Be-03ピット・Bf-56ピット・Be-06ピットⅡ

a. Bf-09ピット1・2

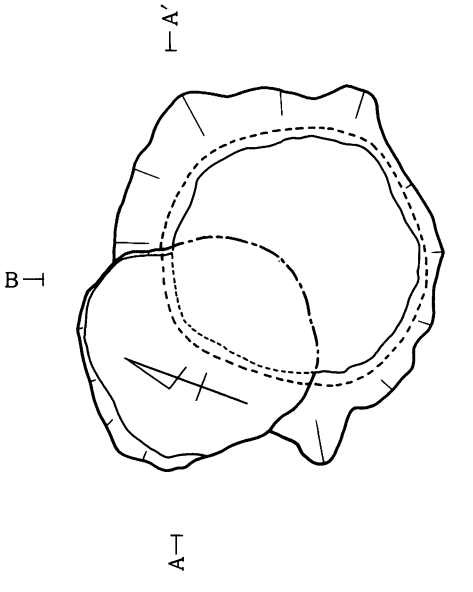


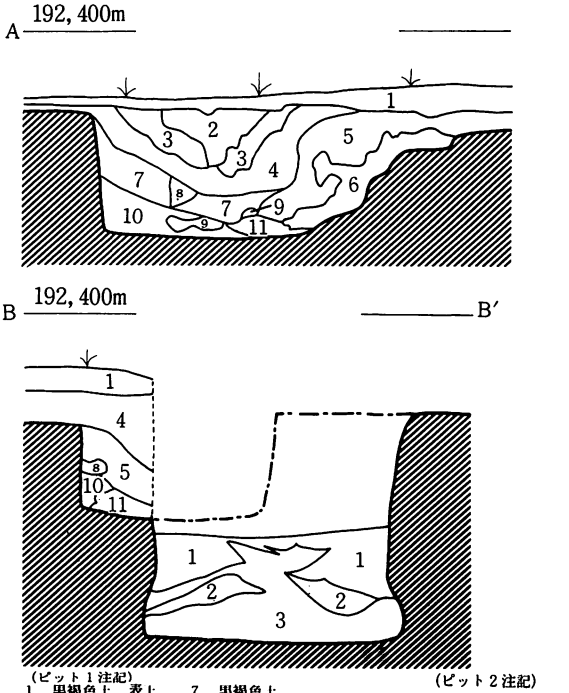


(ピット1注記)
1．暗褐色土　表土
2．黒褐色土
3．褐　色　土
4．黒　色　土
5．褐　色　土　3に類似
6．褐　色　土　炭化物を含む。
7．暗褐色土　炭化物を含む。
8．暗褐色土　わずかに炭化物を含む。
9．にぶい
　褐　色　土　わずかに炭化物を含む。

(ピット2注記)
1．にぶい
　黄褐色土　わずかに炭化物を含む。
2．褐　色土　炭化物を含む。
3．暗褐色土　わずかに炭化物を含む。
4．褐　色　土
5．暗灰色土　多くの炭化物を含む。

b. Bf-12ピット1・2



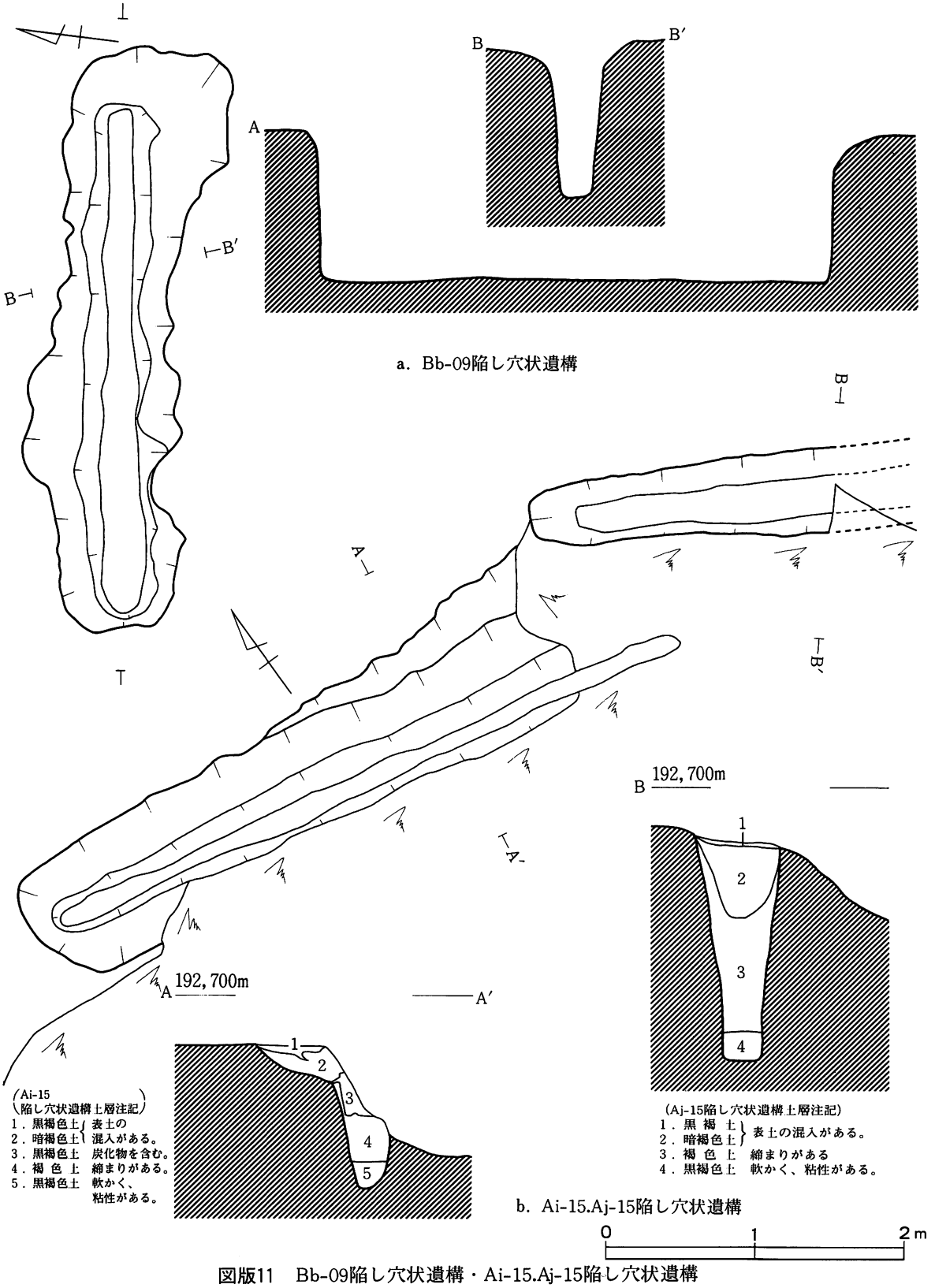


(ピット1注記)
1．黒褐色土　表土
2．黒　色　土
3．黒褐色土
4．黒褐色土
5．暗褐色土
6．にぶい黄褐色土
7．黒褐色土
8．褐　色　土
9．黄褐色土
10．黒褐色土　炭化物を含む。
11．黒　色　土

(ピット2注記)
1．にぶい黄褐色土
2．黄褐色土
3．褐　色　土

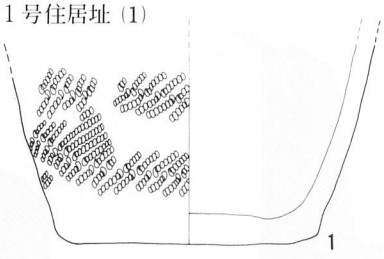
0　1　2m

図版10　Bf-09ピット1・2・Bf-12ピット1・2

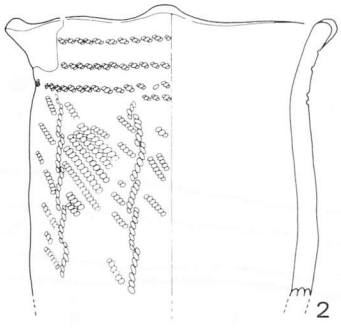


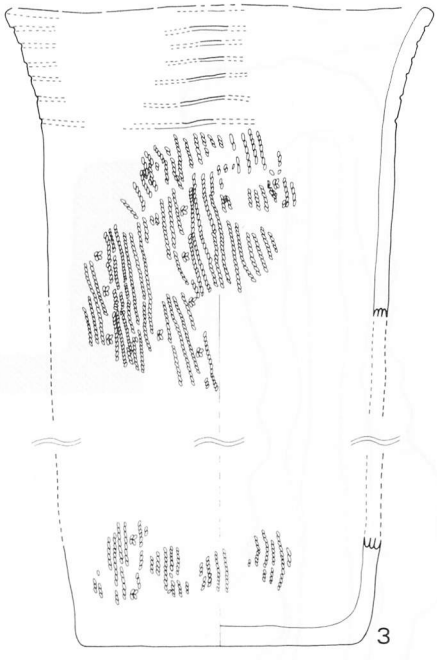
図版11　Bb-09陥し穴状遺構・Ai-15.Aj-15陥し穴状遺構

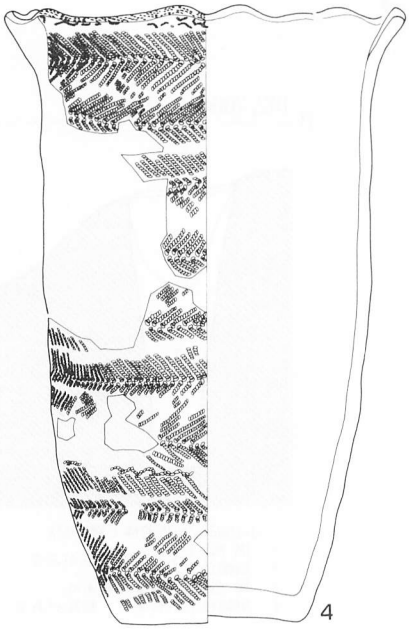
1号住居址（1）

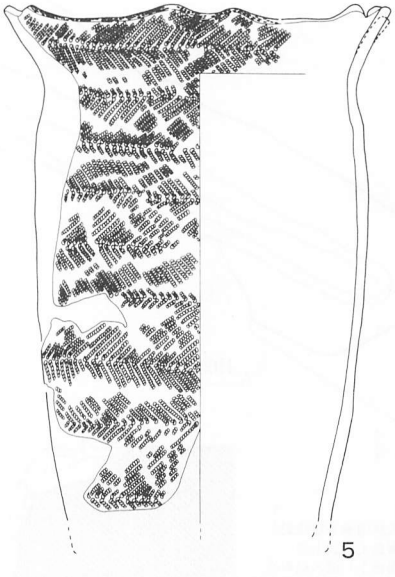


2号住居址（2～7）





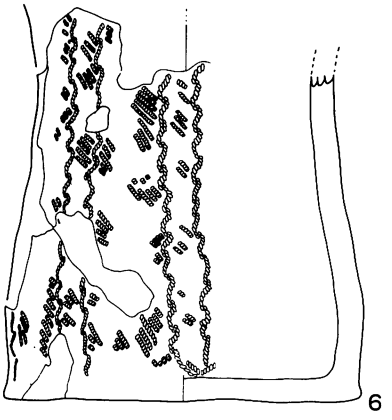


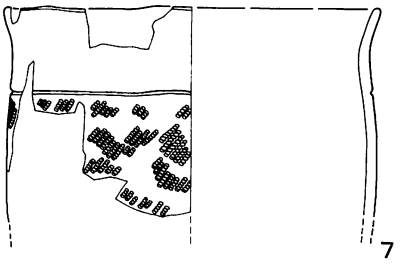


1～3　1/3

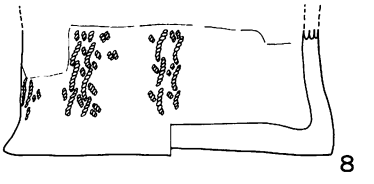
4・5　1/6

図版12　遺構内の出土土器実測図（1）

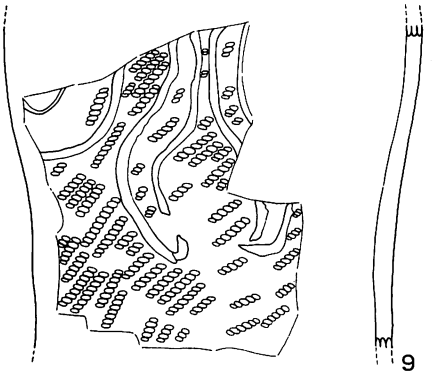




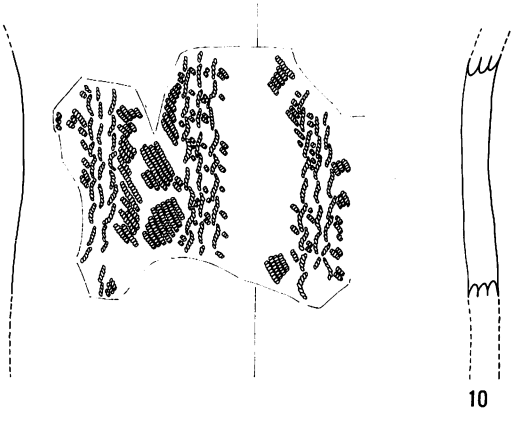
Bc-06ピット (8)



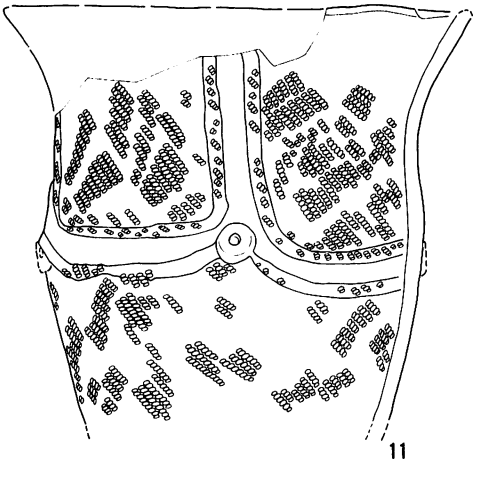
Bd-09ピット (9)

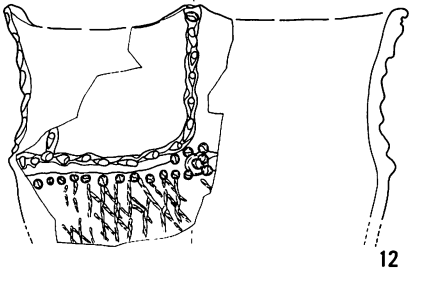


Be-06ピットⅡ (10)



Be-03ピット (11・12)

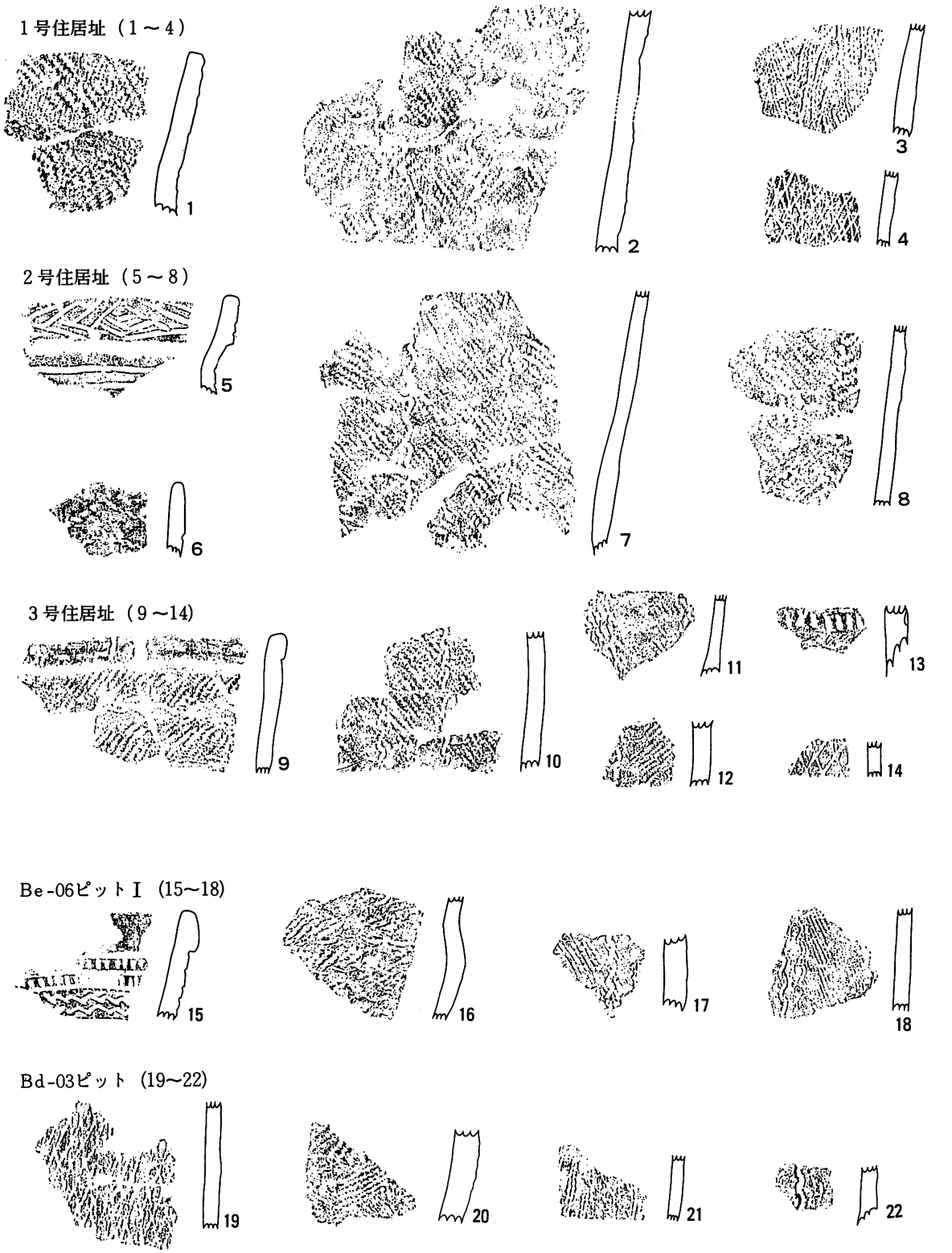




6～11 1/3

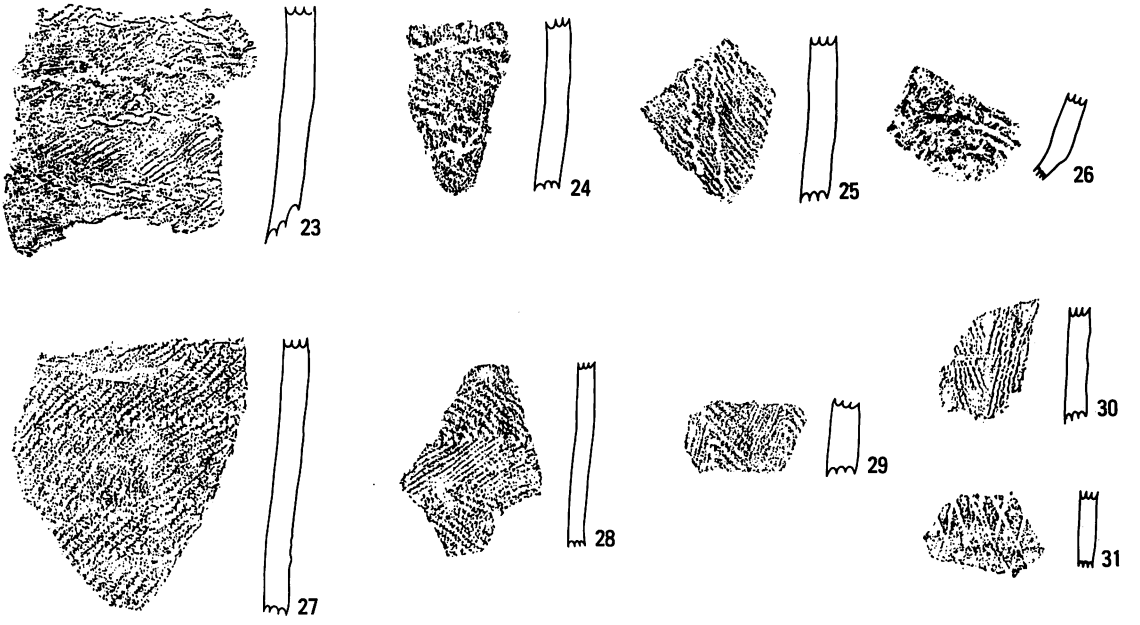
12 1/6

図版13　遺構内の出土土器実測図 (2)

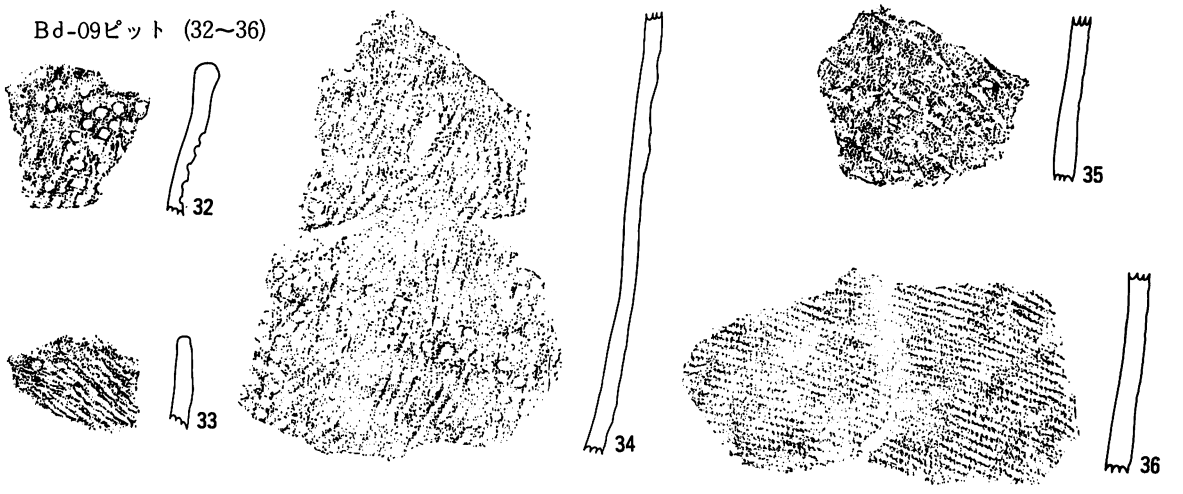


図版14　遺構内の出土土器拓影図（1）

Bc-06ピット (23～31)

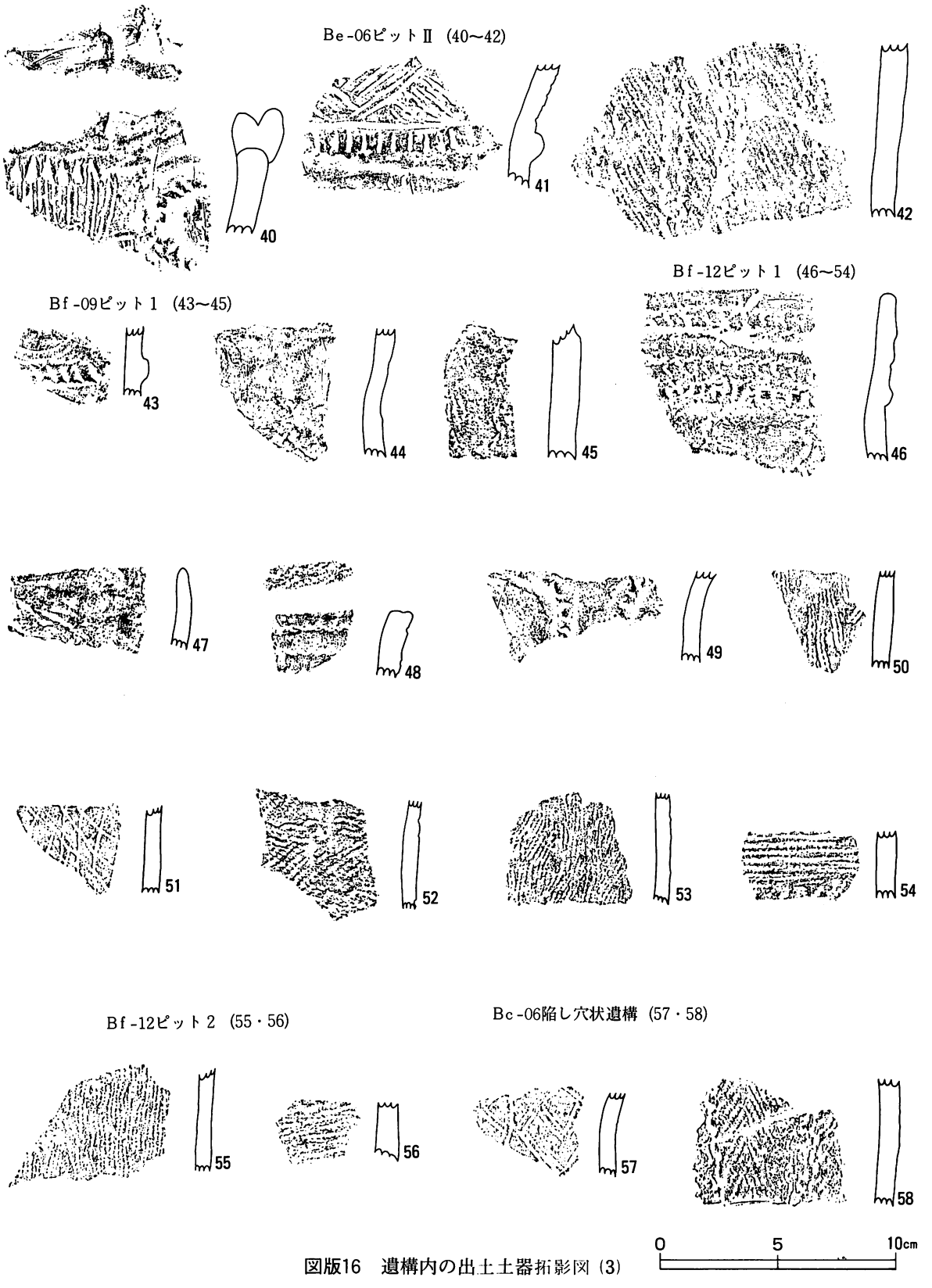


Bd-09ピット (32～36)

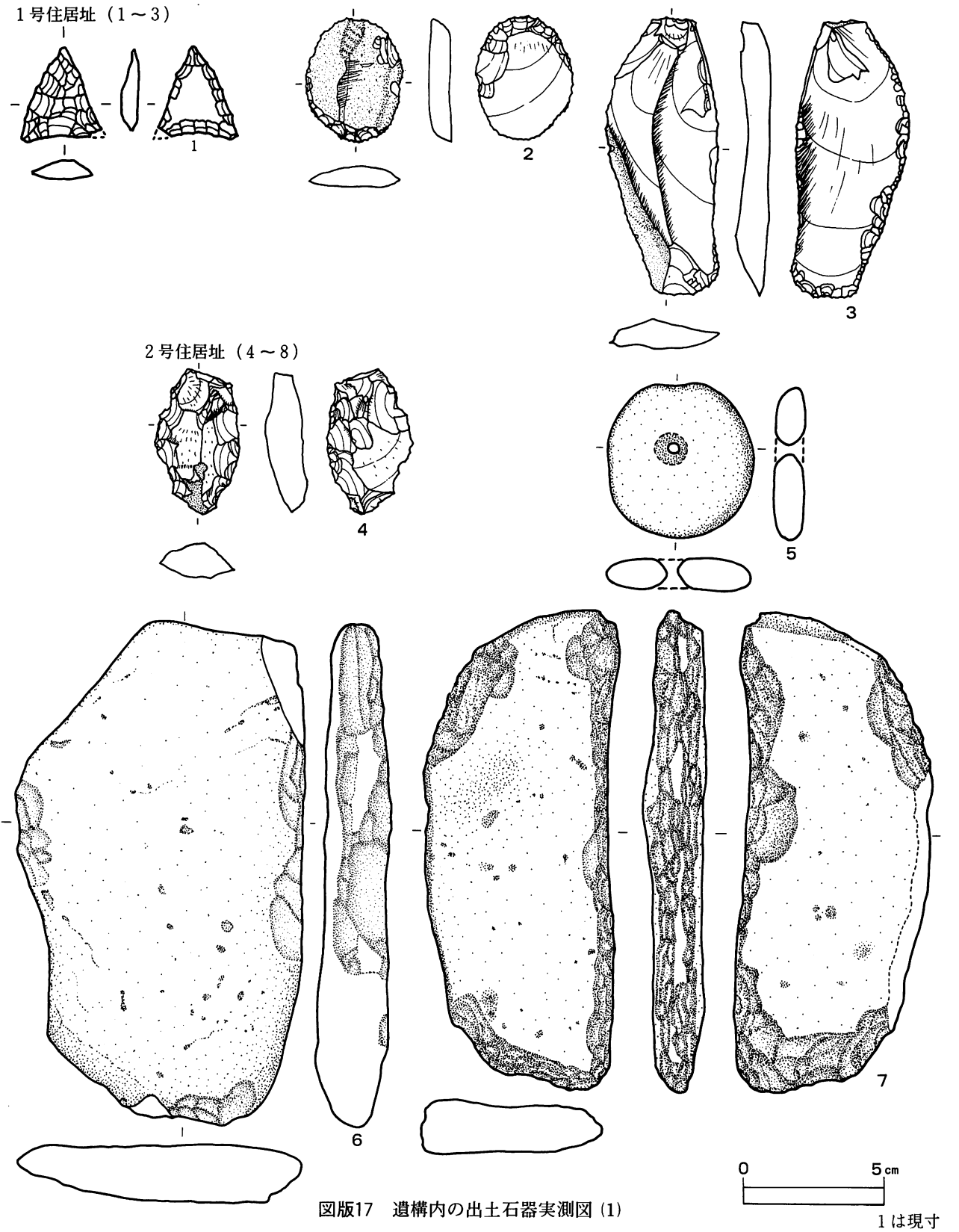


Be-03ピット (37～39)

図版15　遺構内の出土土器拓影図 (2)

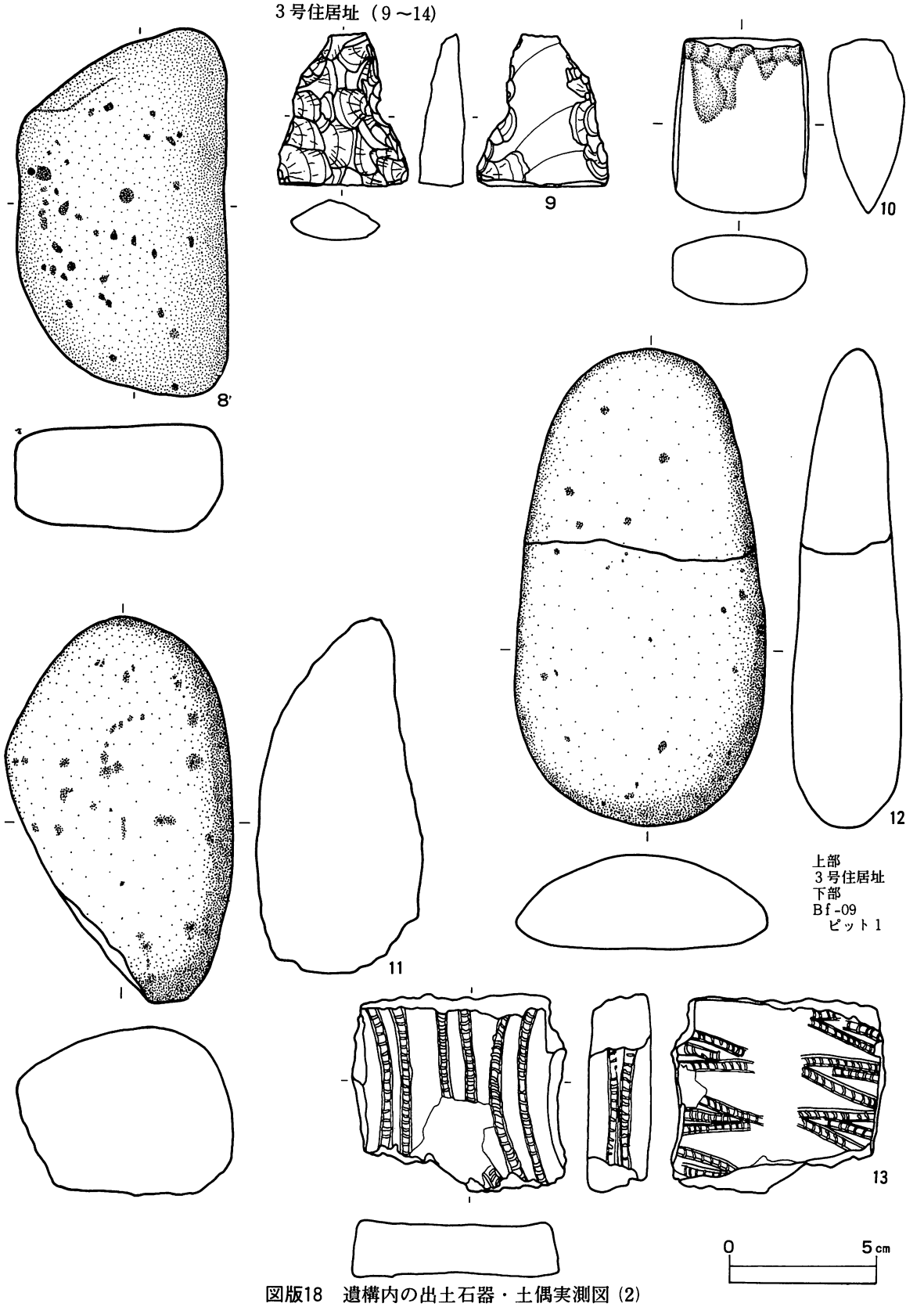


図版16　遺構内の出土土器拓影図 (3)

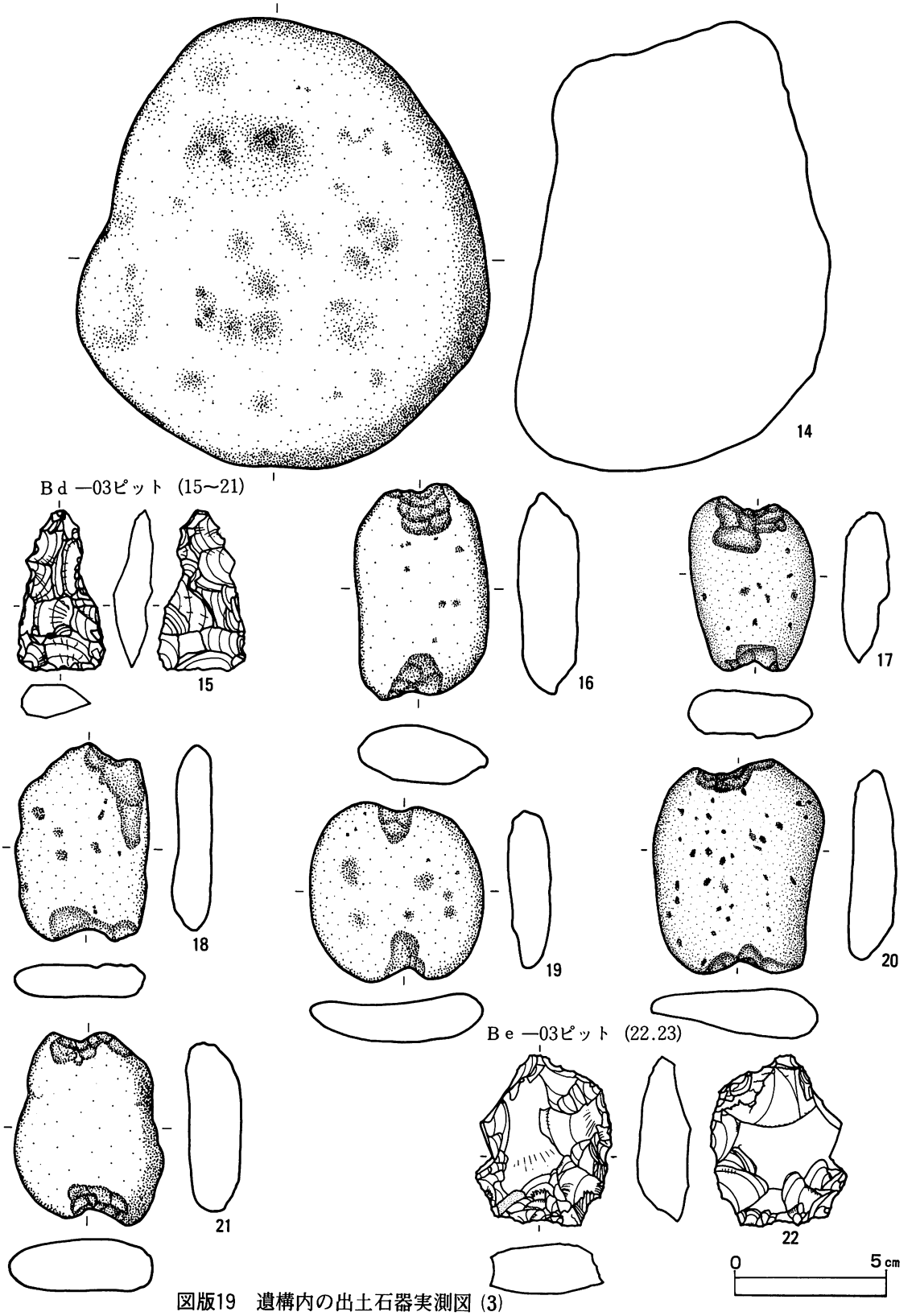


図版17　遺構内の出土石器実測図（1）

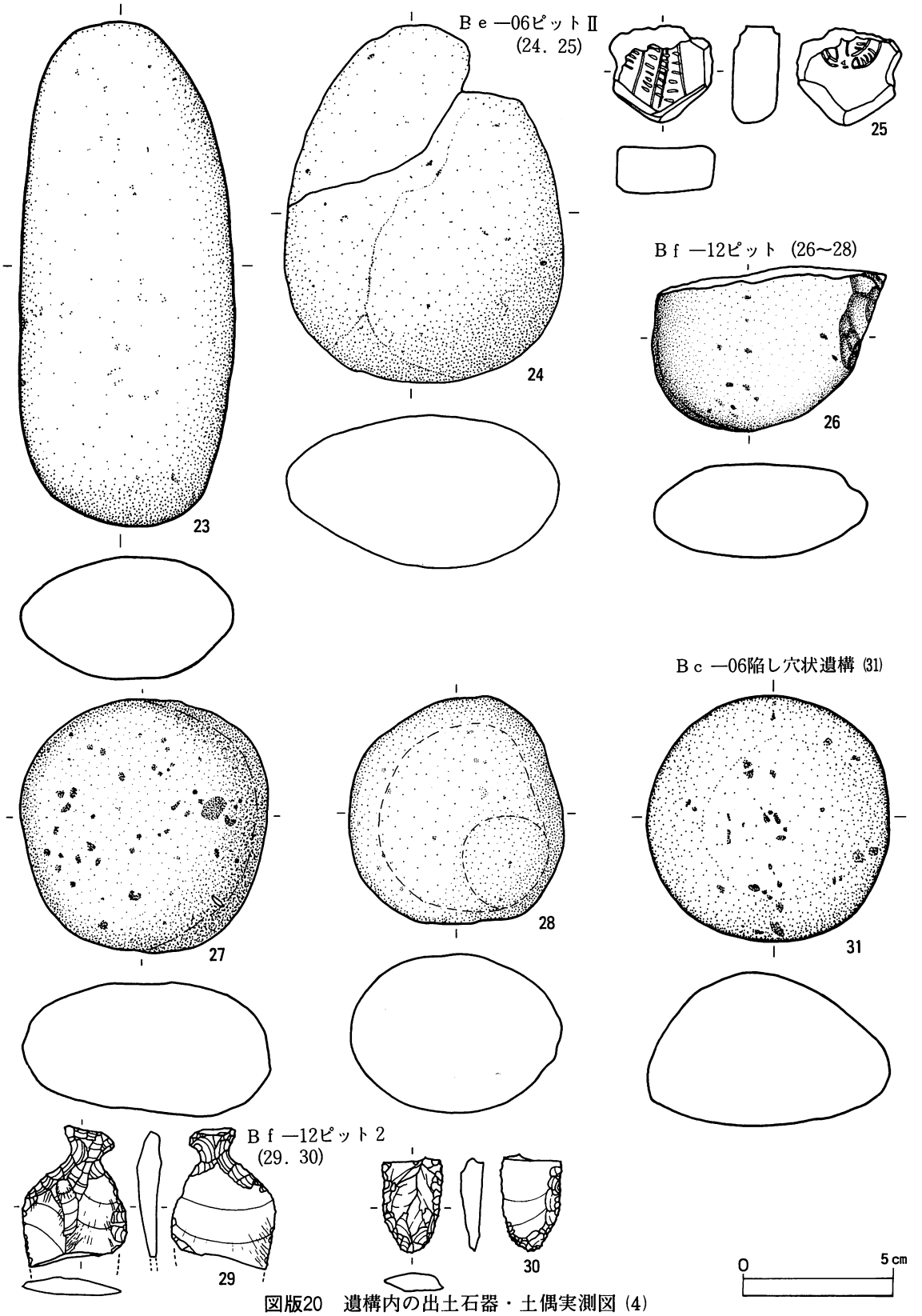
1は現寸



図版18　遺構内の出土石器・土偶実測図（2）



図版19　遺構内の出土石器実測図 (3)



図版20　遺構内の出土石器・土偶実測図 (4)

2．遺構外の出土遺物

遺構外からは、土器、石器、土偶が出土している。出土層位は、基本土層のⅠ層～Ⅴ層の全層にわたっている。しかし、時期別、層位別に出土したものではなく、また、時期的に分類した土器と石器を結びつけることも不可能であった。特に遺物が集中する地点は、調査区西部でグリッドでは、Be－53、56・Bf－53、56・Bg－53、56グリッドに相当する。この地点から、土器は縄文時代早期～中期に位置づけられる破片が出土しており、中でも早期に属する土器片はほとんどこの地点からの出土である。石器では、篦状石器（打製石斧）としたものの出土が多い。しかし、この地点から出土した遺物は、出土状態からみて縄文時代の人々によって形成されたものではなく、人為的な土の移動によって形成されたものであった。

（1）土器

所属する時期により、次の4群に分けて記載する。

第1群土器（図版22－1～23－29、写真図版18－1～29）

縄文時代早期に位置づけられるものである。いずれも小破片で、器形の知れるものはない。口縁部は平らに整形されている。器厚はおおむね薄く、焼成はよい。胎土には繊維の混入はない。色調は暗褐色を呈するものが多い。施文方法のちがいにより、四類に分ける。

a類（1～6）

細隆起線が施されたものである。この細隆起線は、剝落部の観察から細い粘土紐を貼り付け両側を篦状工具によって調整したものと思われる。断面形は、高さが低く、側辺の二辺に幾分凹みを持つ三角形を呈する。細隆起線は、縦位・斜位・横位につけられるが、横位のものが文様帯を区画するものと思われる。1～4には、胎土に金雲母を含む。

b類（7）

貝殻腹縁文が施文されたものである。ただ1点しか認められない。貝殻の腹縁を幾分傾け、斜位に施文している。

c類（8～11）

沈線が施文されたものである。裏面は無文である。沈線は直線状で、交差するものとしないものがある。8は口縁部破片で、口唇部に竹管あるいは半截竹管状工具の外側による押圧が加えられている。9～11は、胎土に金雲母が含まれている。

d類（12～29）

表面、裏面のいずれか、あるいは両面に条痕文が施文されたものである。さらに細分する。

d_1類（12～15）

表面に沈線、裏面に条痕文が施文されたもの。沈線は直線状で、交差するものやしないもの、

矢羽状のものなどがみられる。裏面の条痕文にも交差するものやしないものがある。15には胎土に金雲母が含まれている。

d_2類（16～18）

表面に沈線と刺突文、裏面に条痕文が施文されたもの。磨滅して不明確であるが、表面は沈線間に半截竹管状工具や篦状工具で刺突を加えている。

d_3類（19～24）

表面に条痕文が施文されるが、裏面は無文のもの。19～21は口縁部破片で、19、20には斜位の、21には横位の条痕文がみられる。24は底部破片で、平底を呈するものと思われる。19、20、24の胎土には金雲母が含まれている。

d_4類（25～29）

表裏両面に条痕文が施文されたもの。29には胎土に金雲母がみられる。

第2群土器（図版23－30～42、写真図版18－30～19－42）

縄文時代早期末葉から前期初頭に位置づけられるものである。胎土に植物性繊維を含み、縄文が施文されている。いずれも小破片で、器形は不明である。器厚は厚めのものが多い。縄文の種類、破片部位などにより、四類に分けた。

a類（30～33）

縄文の節が細長く表出する0段多縄の単節斜縄文が施文されるものである。太目の原体を使用している。30は口縁部破片で外反気味である。口唇部は内面から削るように整形され、尖っている。口唇部直下から施文されている。

b類（34～37）

結束第1種の羽状縄文が施文されるものである。34は口縁部破片で、口唇部は平らに整形されている。口唇部直下から施文されている。

c類（38、39）

底部に近い破片である。破片から推定すると、丸底に近い尖底を呈するものと思われる。縄文は磨滅して明確ではないが、単節斜縄文が施文されているものと思われる。

d類（40～42）

非常に細かな単節斜縄文が施文されるものである。全て同一個体の破片と思われる。裏面には幅の広い工具を使用した調整痕がみられる。胎土に繊維をわずかに含有するため本群に加えたが、その後同じ御所ダム関連で調査した萪内遺跡から出土した縄文時代晩期に属する土器片や土偶と胎土を比較したところ、これらとほぼ同様のものであることが判明した。沖積粘土を使用したものと思われる。したがって、本群に属するものと考えるよりも縄文時代晩期に位置

づけられる可能性が強い。

第3群土器 (図版21－1～3、5、23－43～25－118、26－129～132)
(写真図版17－1～3、5、19－43～21－118、129～132)

縄文時代前期末葉から中期前葉に位置づけられるものである。本遺跡の主体をなす土器群であるが、器形がわかる資料は少ない。口縁部は内湾するもの、直立するもの、外反するものなどがあり、内面や外面に折り返されて複合口縁を呈するものもみられる。胎土には一般に小礫を含む粗砂が多く混入している。わずかに繊維を含むものもある。文様の施文方法や地文のちがいなどから四類に分けた。

a類 (図版21－1、図版23－43～24－67)

沈線文が主な文様となるものである。沈線の施文には、半截竹管状工具や棒状工具、篦状工具によると思われるものがある。他の施文要素との結合でさらに細分する。

a_1類 (44～49)

沈線文だけで施文されるもの、この中には沈線文が直線的なもの (44、45、47、48) 曲線的なもの (46) 連弧文状のもの (49) などがみられる。

a_2類 (図版21－1、図版23－50～54、56～58)

沈線文と刺突文、刻みによって文様が構成されるもの。刺突文には篦状工具の先を用いた刻み状のもの、三角形のもの、丸棒状工具による円形のもの、瓜形のものなどがみられる。これは、平行沈線や波状沈線の内部につくものが多い。

図版21－1の土器は、4つの突起を持つ大波状口縁で、突起部には内外に隆帯による加飾がある。器形は、胴上部に膨みを持つところから、円筒形の胴下部がつくいわゆる「吹浦形」の器形を呈するものと推定される。文様は口頸部を主体に沈線による渦巻文や「フ」の字文が描かれ、内部は斜位の沈線 (刻み) によって満たされている。刺突文は篦状工具の先を平らにして使用した三角形を呈し、口縁部直下と胴上部につけられ、口頸部と胴部の文様帯を区画する役目を果たしている。胴部には無文部と施文部があり、施文部には縦位の綾絡文を伴う原体LRとRLの二種を用いた単節斜縄文がみられ、綾絡文間は羽状を呈している。

a_3類 (43、55、59～67)

a_2類の文様構成 (沈線文＋刺突文・刻み) に隆帯が加わるものである。隆帯は、口頸部をめぐり文様帯を区画するものが多いが、口頸部文様帯の中につけられ文様の一部をなすものもある。隆帯にも刺突や刻みが加えられるものがほとんどである。43は波状口縁部の破片で、環状に貼り付けられた隆帯に刻みがつけられている。口唇部にも同様の刻みがみられる。55は隆帯が剝落して明確ではないが、渦巻状に貼り付けられたものであろう。やはり刻みがつけられている。59、60、63、65、66の口頸部文様帯の中にみられる縦位の隆帯は、文様というより口頸

部文様帯を分割するものと思われる。65～67は粘土紐を貼り付け調整して肥厚させた口縁部に刻みや刺突が加えられるものである。口唇部にも同様の施文がみられる。

b類（図版21－5、図版24－68～25－88）

縄文原体や単軸絡状体の側面圧痕など、いわゆる撚糸圧痕文が主な文様となるものである。文様構成や施文具のちがいにより細分した。

b_1類（68～81）

縄文原体の側面圧痕文が施文されるもの。これには、横位に直線的に施文されるもの（68～75）直線的ではあるが斜位で交わるもの（76、77、79～81）小波状に曲線的に施文されるもの（78）などがある。原体には1段と2段のものが使用されている。

b_2類（図版21－5、図版25－82～86）

b_1類の文様構成に隆帯が加わり、隆帯にも縄文原体の側面圧痕文が施文されるもの、この隆帯はa_3類土器と同様に、口頸部に横位につけられるものは口頸部と胴部の文様帯を区画する効果、口縁下から縦位につけられるものは口頸部文様帯を分割する効果を有するものと考えられる。b_1類と同様に原体には1段と2段のものがみられる。

図版21－5の土器は、口縁部が外反し平縁の深鉢形の破片である。口縁部直下から隆帯が貼り付けられ、口頸部をめぐる別の隆帯に垂下して口頸部文様帯を分割する。口頸部には隆帯に沿って原体LRの側面圧痕文が施文され、隆帯上にもつけられる。口頸部をめぐる隆帯には、丸棒状工具による横方向からの刺突文が加えられている。胴部には縦位の綾絡文を伴う同一の原体LRを使用した単節斜縄文されている。

b_3類（87、88）

単軸絡状体による側面圧痕文が施文されるもの。出土点数は少ない。87、88とも口縁部下に原体Rの絡状体圧痕文がつけられ、88は地文に同じ原体による縦位の絡状体回転文（撚糸文）が施文されている。

c類（89～102）

地文に単軸絡状体回転文（撚糸文）が施文されたものである。ほとんどが胴部破片であるため、器形及び口頸部文様帯の有無については不明であるが、掲載した口縁部資料では口頸部文様帯は持たないものが多いらしい。文様のちがいにより細分した。

c_1類（89～92）

いわゆる狭義の撚糸文が施文されるもの。原体はRもLも使用され、縦位に施文されている。89は口縁部破片であり、やや外反気味で口縁直下から施文されている。

c_2類（93～96）

木目状撚糸文が施文されるもの。全て縦位に施文されている。これには、2孔ある軸に原体

Rを1本ずつ使用するもの（96）原体Lを2本ずつ使用するもの（93、94）1孔ある軸に1本の原体Lを使用し反対側の孔に折り返した原体をわずかに出したもの（95）などがみられる。93は口縁部破片で、口縁直下から施文されている。

c_3類（97～101）

網目状撚糸文が施文されるもの。縦位に施文される。網目が単純に交差するもの（97～100）と交差部分で巻きつけたもの（101）がある。97～99は口縁部破片であり、97は網目状撚糸文を施文した後に原体圧痕文が施されている。98、99は口縁部に内面から指による押圧が加えられ、結果として凹凸ある口縁部を形成している。

c_4類（102）

多軸撚糸文が施文されるもの。ただ1点の胴部破片であり、詳細は不明である。

d類（103～118）

地文に縄文が施文されるものと無文のものを本類とした。口縁部が特徴的なものや縄文の施文のちがいなどから細分した。

d_1類（103～108）

口縁部が特徴的なものを集めた。106は口縁部の内外面から指頭による押圧が加えられ凹凸状を呈する。103～105、107、108は折り返し口縁で、105には突起がみられる。107、108は無文であり、108は内面に折り返されたものである。

d_2類（図版21－3、図版25－109～113）

地文に綾絡文（結節縄文）が施文されるもの。綾絡文だけが単独で施文される場合はなく、全てに単節斜縄文が伴っている。これには、原体の末端処理として結節がつくられる場合と中央部につくられる場合があるが、ほとんどが自縄自縛で、綾絡文を施文した後に縄文がつけられる（あるいはこの逆も）ものは少ない。109～111は縦位に、112、113は横位に施文されるものである。縦位のものが多い。

d_3類（114～118）

地文に羽状縄文が施文されるもの。結束第1種の原体LR－RLを用いるものが多い。稀な例として、116～118がある。116は太い1段の原体R－Lを施文したものである。117は太さの異なる原体RL－LRを用いているが、結束部が不整なもので、末端部を結節した綾絡文もみられる。119は原体LR－R$\langle^{R}_{R}$で、一方に撚り戻しの原体を使用している。羽状縄文は縦位に施文されるもの（114～116）と横位に施文されるもの（117、118）があるが、横位のものが多い傾向を示す。

d_4類（図版21－2、図版26－129～132）

地文に無節斜縄文や単節斜縄文が施文されるもの。胎土の共通性から第3群土器に含めたが、

胎土だけで判断するには無理があるかもしれない。第4群土器に含まれるものも存在する可能性がある。図版21－2は、胴下部と底部だけが残存する深鉢形土器である。原体Lの無節斜縄文が縦位に施文されている。129、131は原体LRの縦位回転、130、132は原体LRの横位回転である。

第4群土器（図版21－4、26－119～128、写真図版17－4、21－119～128）

縄文時代中期末葉～後期前葉に位置づけられるものである。口縁部が内湾するものや外反するものがみられる。胎土には、第3群土器のような小礫や粗砂の混入はみられず、細砂が混入し焼成はよい。文様施文の方法で二類に分けた。

a類（図版21－4、図版26－119～126）

沈線と磨消縄文によって文様が構成されるものである。半截竹管状工具や篦状工具で曲線的な沈線を描き、沈線文間に磨消を加えている。他は地文部となり、無節や単節の斜縄文が施文される。

図版21－4の土器は、欠損部が多いものの復元によってほぼ全周する大型の深鉢形土器である。口縁部は内湾し、4つの小突起部を持つ。突起下には円形刺突文がみられ、波状沈線が口縁下をめぐる。大きく垂下する曲線状の沈線によって文様が描かれ、一部に渦巻文もみられる。地文は原体Lの無節斜縄文であり、沈線間は不徹底ながら磨消が行なわれている。119は口縁部が大きく外反するもので、胴央部に膨みを持つ器形と思われる。口縁部直下に小ボタン状の貼り付け文がみられる。口縁部破片ではないが121にも同様の貼り付け文がある。121には口縁部直下に刺突文がみられる。

b類（127、128）

無文部に沈線だけによって曲線的な文様が描かれるものである。127は垂下する曲線文に特徴がある。

（2）石器

1）石鏃（図版27－1～6、写真図版22－1～6）

基部の形態により、次の三類に分類される。

a類（1．2）

無茎凹基のものである。わずかに第一次剥離面を残すものの、入念な両面調整が行なわれている。

b類（3）

無茎平基のものである。先端部に加工が行なわれておらず、未製品と思われる。

c類（4～6）

有茎のものである。4、6は先端部を欠損するが、基部にアスファルトと思われる物質が付着している。5は、先端部に加工がゆき届かず丸味を帯びて鈍い。

2）石錐（図版27－7～9、写真図版22－7～9）

基部の形態と加工の状況により、二類に分類される。

a類（7）

基部が扁平で幅広いものである。両面に丁寧な調整が行なわれている。

b類（8、9）

基部が比較的肉厚で幅が狭いものである。片面加工されている。8は、裏面に丁寧な加工がみられるが、表面は身部の一部にしか行なわれていない。先端部は、稜がつぶれ丸味を帯びている。9は、両側面から折断された痕跡がうかがわれ、折断後に、表面左側縁に加工が行なわれている。サイドスクレイパーとも思われるが、先端部にわずかに加工がみられ、尖鋭になっているため、石錐に加えた。

3）石鏃（図版27－10～19、28－20、21、写真図版22－10～21）

ほとんどが裏面に第1次剥離面を大きく残すものである。形態と加工の状況により、三分類した。

a類（10～15）

いわゆる縦形石匙である。ほとんどが、縦長の剥片を利用し、バルブ付近につまみ部を有するが、14は、バルブと反対側につまみ部を作り出している。

b類（16、17）

ノッチによってつまみ部を形成しているため石匙に加えたが、刃部の加工がみられないものである。16は、バルブと反対側に、17は、バルブ付近につまみ部が作られている。16、17とも、縁辺に、使用によってできたと思われる刃こぼれがわずかに認められるが、石匙というよりつまみのえぐり部分を使用したスクレイパー的用途(スクレイパーd類)があったのかもしれない。

c類（18～21）

いわゆる横形石匙である。横長の剥片を利用し、バルブ付近につまみを作り出している。

4）箆状石器、打製石斧（図版28－22～31－75、写真図版22－22～25－75）

本器種に属すると思われる石器は、一番出土点数が多い。実測図に掲載しなかった破損品も

含めて、68点出土している。器種の分類にあたり、従来から使用されている篦状石器と打製石斧の区別が困難であったため、一括して掲載した。

この中での分類については、いろいろな要素が考えられるが、石器の機能と関連が強いと思われる縦断面形を第一に重視した。その後、刃部の形態により細分し、これに基部の形態を含めた平面形を若干加味した。

A類（22～45）

全くの片刃、あるいは片刃に近いものを集めた。24点出土している。

a類（22～26）

直刃に近いものである。5点出土している。このうち、22～24は、刃部の表裏両面、あるいは裏面に全く二次加工が及ばないもので、いわゆるトランシェ様石器（直刃斧）に近いものと考えられる。

b類（27～45）

扁刃を含み、円刃に近いものである。19点の出土である。27～35は、刃部が基部より幅広いもので、平面形は、基部が丸みを帯びた三角形を基本とするもの、基部が比較的平坦で台形を基調とするものなどがみられる。36は、基部と考えた上部も刃部に使用された可能性がある。また、37～41は、平面形が楕円形に近いもので、刃部と基部の幅の差はあまりない。41は、石質が粘板岩であり、他とは異質なものである。42～45は、基部が欠損する。

B類（46～64）

厳密な意味での両刃は存在しないが、片刃ではあるが両刃に近いものを集めた。19点の出土である。

a類（48）

直刃に近いものであるが、ただ1点だけの出土である。平面形は、基部が丸味を帯びた正方形に近い。

b類（46、47、49～64）

偏刃を含み、円刃に近いもの。18点出土している。46、47、49～55は、刃部が基部より幅広いもので、平面形は、基部が尖がる三角形を基調とするもの、基部が丸味を帯びた三角形を基調とするもの、平坦な台形を基調とするものがみられる。56～59は、刃部と基部の幅の差はあまりなく、平面形は楕円形を呈する。60～64は、基部を欠損するものである。53は、本類の代表的なもので、全く打製石斧としてよいものと考える。

c類（65～75）

刃部を欠損するため、縦断面形が不明なものである。基部は、A類、B類と同様に、尖るもの、丸味を持つもの、平坦なものがみられる。73は、表面の基部に剝離を意図する敲打痕があ

り、破損後の再利用がうかがわれる。

5）スクレイパー（図版32－76～33－99、写真図版26－76～27－99）

スクレイパーとしたものは、比較的に規則的な二次加工を剥片に加え、機能刃部を形成するものである。刃部の形成される部位及び加工の状態によって、四類に分類される。

a類（76～78、89）

剥片の長軸上の先端部に急角度の刃部を形成するもので、エンドスクレイパーと考えられる。76、77は、上半部を欠損する。76は、黒曜石を用いている。78は、裏面の上端と下端に刃部を形成する。89は、大きな部厚い剥片を利用し、先端に樋状剥離が行なわれている。

b類（79）

剥片の全周に刃部を形成するもので、ラウンドスクレイパー的である。粗い両面加工が行なわれている。

c類（80～88、90～94）

剥片の側縁に刃部を形成するもので、サイドスクレイパーと考えられる。ほとんどが縦長の剥片を利用しているが、87、92は、横長の剥片を利用している。また、多くが片面加工であるが、80、84、86、91などは、裏面の側縁部も加工している。

d類（95～99）

剥片の湾入部に刃部を形成するもので、コンケーヴスクレイパーあるいはノッチと考えられる。96は、下端部にも急角度の刃部が形成されており、エンドスクレイパーとの複合石器と思われる。

6）不定形石器（図版34－100～35－124、写真図版27－100～28－124）

不定形石器としたものは、剥片に不規則な加工を行なって刃部を形成するもの、あるいは、未加工のまま使用した結果刃こぼれが生じているものなどを一括した。機能的には、スクレイパーとしたものと、さほどちがわないものであろう。このうち、101は黒曜石製、108、118は篦状石器の未製品と思われ、123、124は、裏面の刃部と思われる部分に、使用痕と思われる破砕痕が観察された。(破線部で示す部分)

7）刃器（図版36－125～131、写真図版28－125～131）

適当な名称を知らないので、仮にこう命名した。礫に加工を行ない刃部を形成するもので、剥片剥離を途中でやめた残核様の形態を呈する。これには、刃部を中心として明確な使用痕と思われる刃こぼれ様の破砕痕が観察される。加工の状況により、二類に分けた。

a類（125～127）

片面加工のものである。表面に表皮を残すもの（125、127）と残さないもの（126）があるが、裏面は、できるだけ凹凸をとろうとする整形の意図がうかがわれる剝離がみられる。刃部には、樋状剝離様の加工を施こしている。126は亀甲状の形態をしており、裏面に何度か整形加工を行なっている。使用痕と思われる破砕痕は、125が特に著しい。

b類（128～131）

両面加工を行なっているものである。形態的には、刃部が幅広い扇形を呈する共通性がみられ、それは特に128、130、131に強くうかがわれる。129にも、これを意図したと思われる大きな剝離が、表面右側に加えられている。表皮を残すもの（129）と一部に残すもの（128、130、131）がある。このうち、使用痕と思われる刃つぶれ様の破砕痕は、129には全く認められないが、その他の3点には明確に認められる。

8）折断痕ある石器（図版36－132～134、写真図版29－132～134）

明確に側縁に折断痕が認められる石器である。刃部は、132、133が折断後に形成されたもので、片面加工である。134は、折断前はスクレイパー様の石器と思われ、両面加工となっている。133、134は、基部にかるい敲打痕と思われる痕跡が認められる。

9）磨製石斧（図版37－135～137、写真図版29－135～137）

製作法のちがいから二類に分類する。

a類（135）

擦切手法で製作された磨製石斧である。右側面に擦切の痕跡が明確に観察される。片刃的であり、刃部には縦位の擦痕が観察される。

b類（136、137）

定角式に含まれる磨製石斧である。136は、頭部を欠損する。刃部付近に縦位の擦痕がみられる。137は、完形品である。使用痕は、明確には観察されない。

10）環状石斧（図版37－138、139、写真図版29－138、139）

2点得られているが、いずれも欠損品である。139は表採品である。いずれも表裏両面から穿孔されている。138は、両面とも比較的丁寧に磨かれているが、139は、整形時の細かな敲打痕が残っている。刃部にはどちらも使用痕と思われる敲打痕がみられるが、139の方が顕著である。いずれも砂岩系統の岩を使用している。

11) 有孔石器（図版37－140、写真図版29－140）

有孔石器と分類したが、もともとは石剣だったものと思われる。縦横に破損した後に、孔を表面方向から穿ち、装身具（ペンダントか？）に再利用したものと考えられる。石質は、粘板岩である。

12) 石錐（図版37－141、写真図版29－141）

敲打による小さな糸かかり部が、短軸及び長軸に4個所つけられている。Bd－03の皿形ピットから、6点まとまって出土している。

13) 石棒（図版37－142～144、写真図版29－142～144）

石棒と思われるものは3点であるが、いずれも欠損品である。142は、不整な6面のうち1面にわずかに磨きが認められるぐらいで、ほとんど加工の痕跡はみられず、稜は全く自然のままである。143は、横方向に磨きと磨きによるわずかな稜が観察される。144は、男根状を呈する先端部で、敲打による整形痕がみられる。亀頭部のつけねに両面から凹みがつけられている。

14) 半円状扁平打製石器　（図版37－145～39－164、写真図版29－147～31－164）

直状部の状況により、三類に分類した。

a類（145～153、162）

直状部が敲打痕のみで形成されるものである。直状部の敲打痕の数に多少の異なりがあり、直状部だけでなく周囲にまで及ぶものも認められる。150は、表面にも敲打痕が認められる。162には、表裏両面に明確な磨面が観察される。

b類（154～160）

直状部が、敲打痕のほか、比較的広い磨面によって形成されるものである。この磨面は、実測図右側面の白ぬき部分で示している。本類にも、敲打痕が直状部だけのものと周囲にまで及ものがある。また、表裏面に明確な磨面をもつものがほとんどである。155、157には、両面にも敲打痕がある。

c類（161、163、164）

直状部が、敲打痕と狭い磨面によって形成されるものである。本来はもっと広い磨面が形成されていたと考えられるが、敲打によってわずかにしか残されていない。表裏両面に磨面が認められる。164は、裏面にも敲打痕が認められる。

15) 凹み石（図版40－165～172、写真図版31－165～172）

器面に敲打による凹みを持つもので、断面形に明確な凹みが表れるものを本類とした。平面形、断面形とも色々な形状があり、特に定形性はないが、平面形は、円形を基調とするものと長方形を基調とするものがみられる。凹みも、浅深、個数などまちまちである。

16) 磨石（図版40－173～42－187、写真図版31－174～32－186）

器面の全体及び一部に磨耗痕を有するものである。凹み石同様、平面形には円形を基調するものと長方形を基調とするものがみられる。磨面だけでなく、軽い敲打痕が認められるものもある。

17) 石皿（図版42－188～191、写真図版32－188～191）

全て無脚のものである。188～190は欠損品、191は完形品である。縁どりの有無で分類される。

a類（188～190）

縁どりのあるものである。188と189は、石質、形状から同一個体と思われる。188は、磨耗面が2個所認められ、破損後、砥石として再利用されたものかもしれない。190は、両面使用されている。

b類（191）

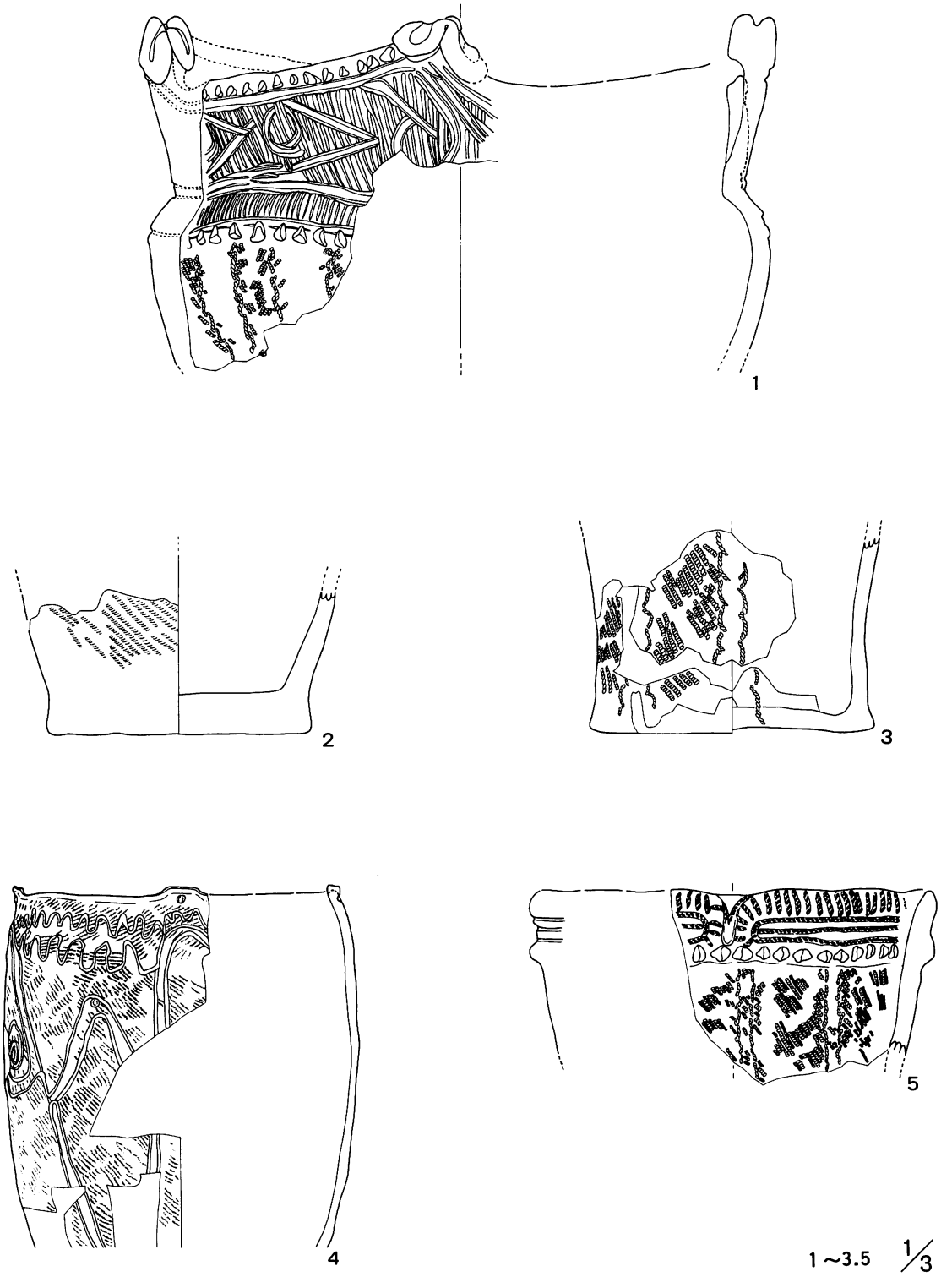
縁どりのみられないものである。磨耗痕が両面に認められる。

18) 有孔礫（図版42－192、写真図版32－192）

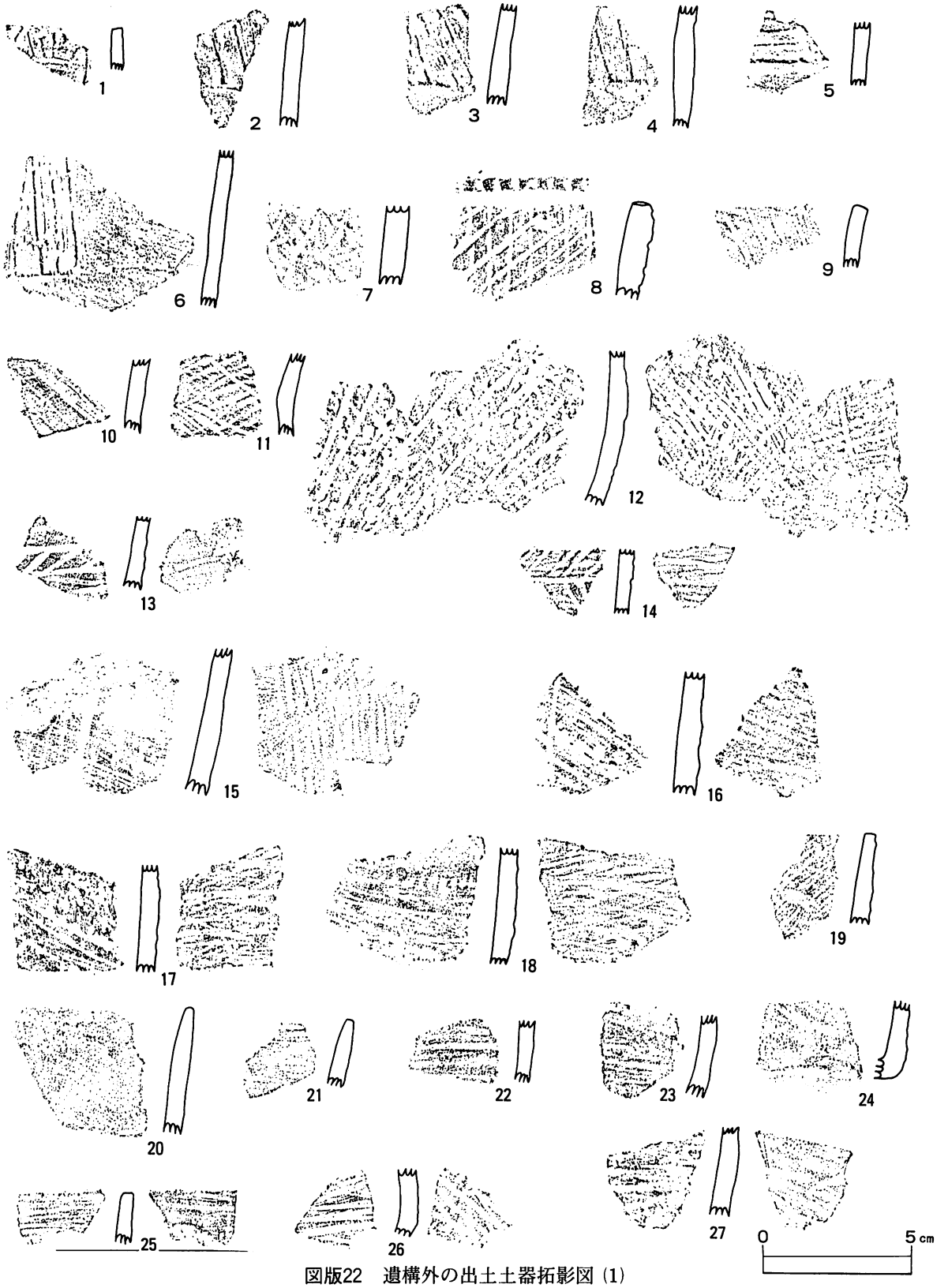
自然礫に孔を穿ったものである。表裏両面から穿孔したものと思われ、孔の部分を中心に粗い磨耗痕が認められる。他には、加工が全くみられない。

（3）土偶（図版42－193～195、写真図版32－193－195）

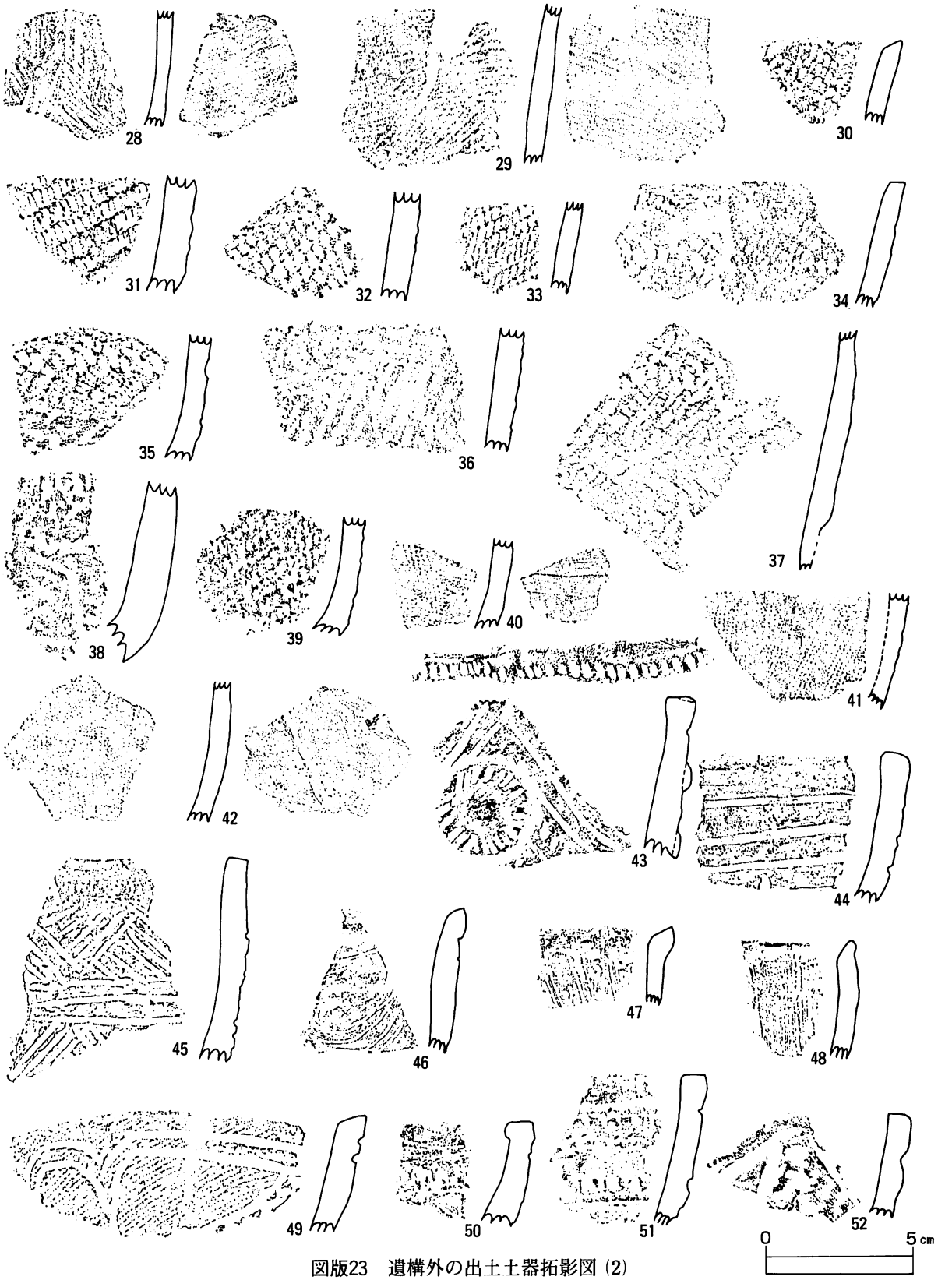
全て欠損品である。193は、土偶頭部と思われる。三個所に穿孔が認められる。表面には、篦状工具による沈線がひかれ、篦先によって刺突が加えられている。裏面にも、同様の施文があるが、ほんのわずかである。同様の手法によって施文された土偶破片が、Ｂｅ－06ピットⅡの埋土から出土しているが、同一個体かどうかは不明である。194、195は、同一個体と思われる。195は、左足の部分であろう。文様は、半截竹管状の工具の内側を用いて沈線をつけ、その内部を同様の工具による「C」字状刺突文で充塡している。同様の手法によって施文された土偶破片が、３号住居址のＰ－２の埋土から出土している。これは、同一個体である可能性が高い。



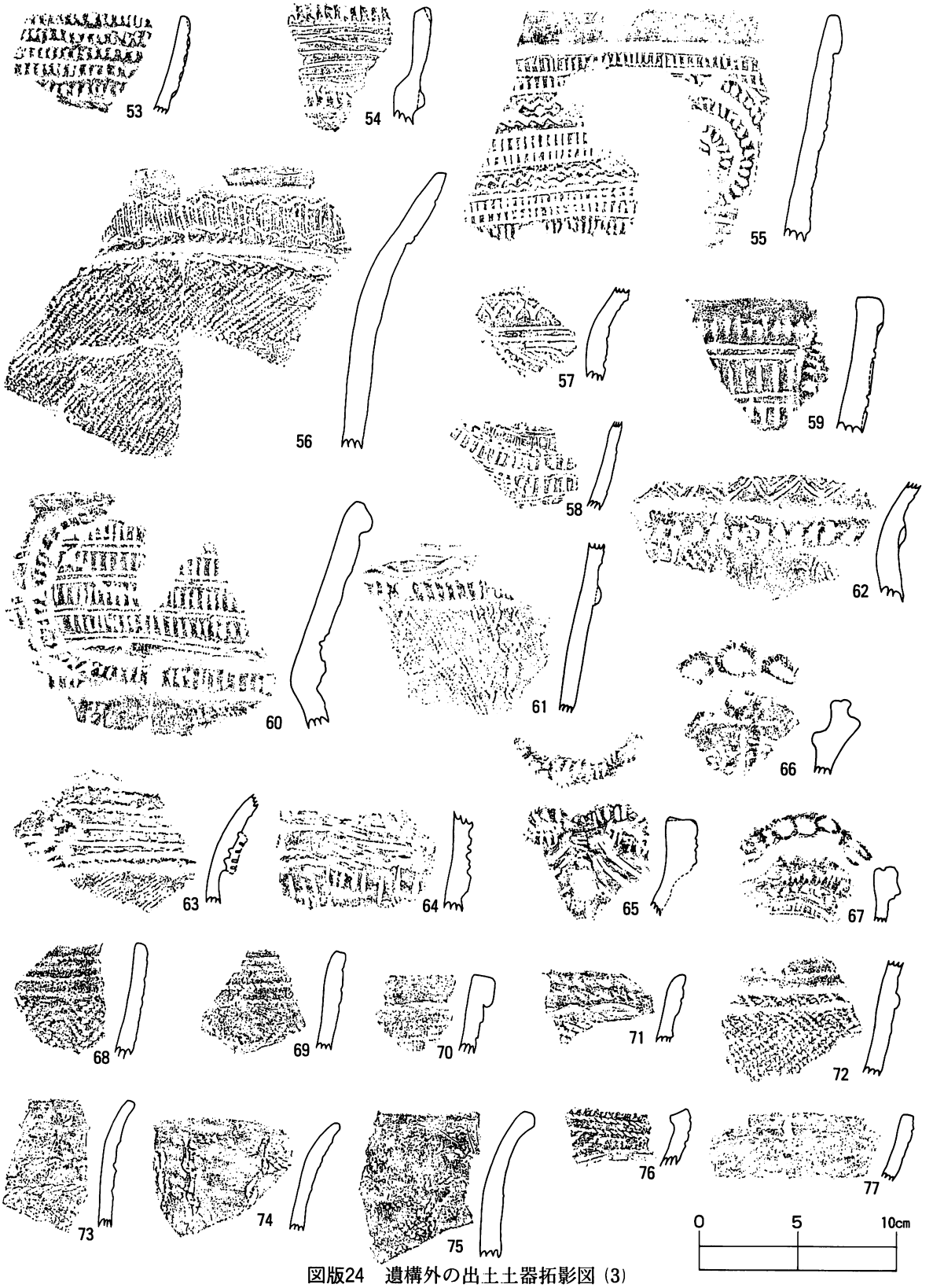
図版21　遺構外の出土土器実測図



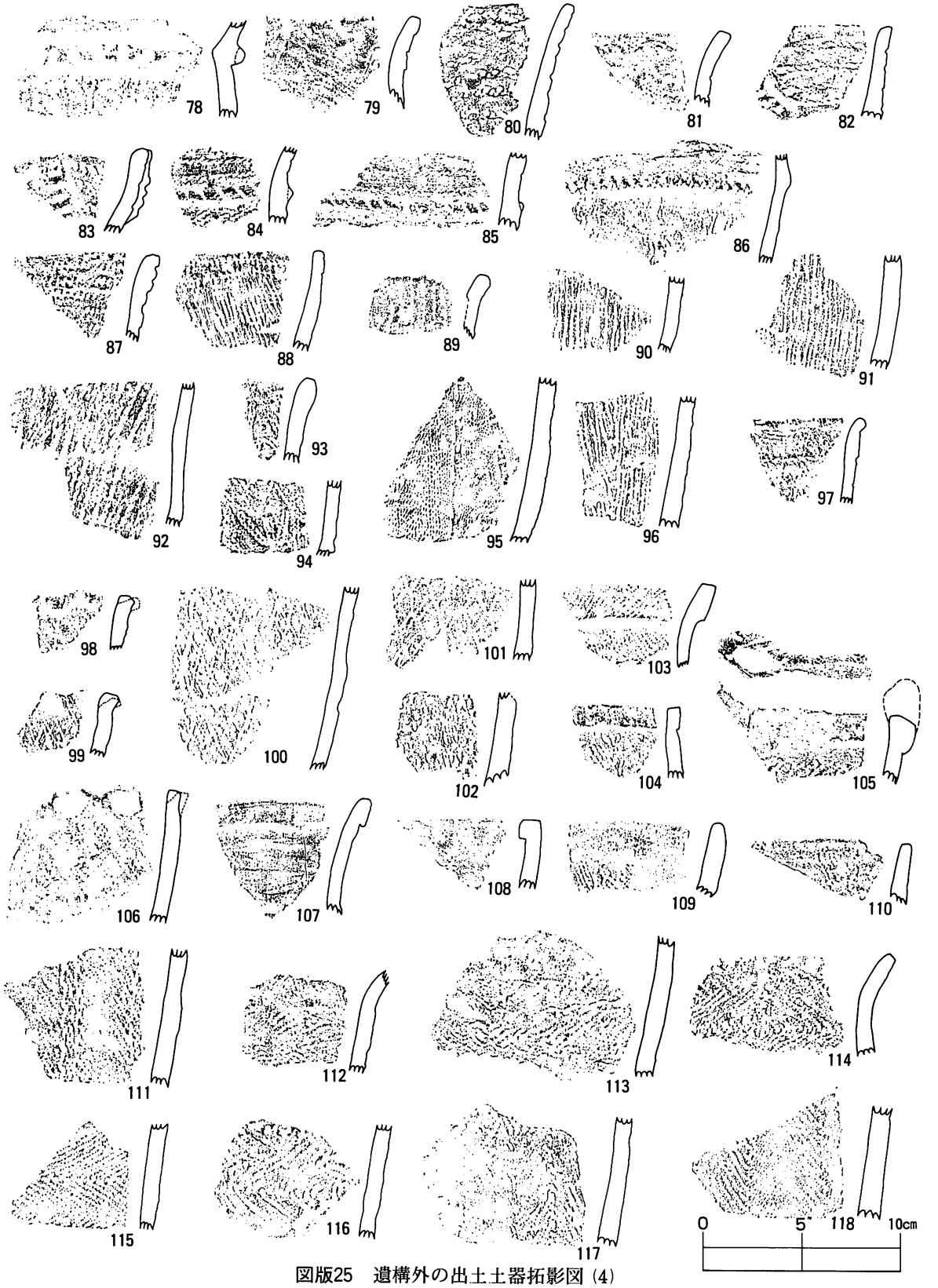
図版22　遺構外の出土土器拓影図 (1)



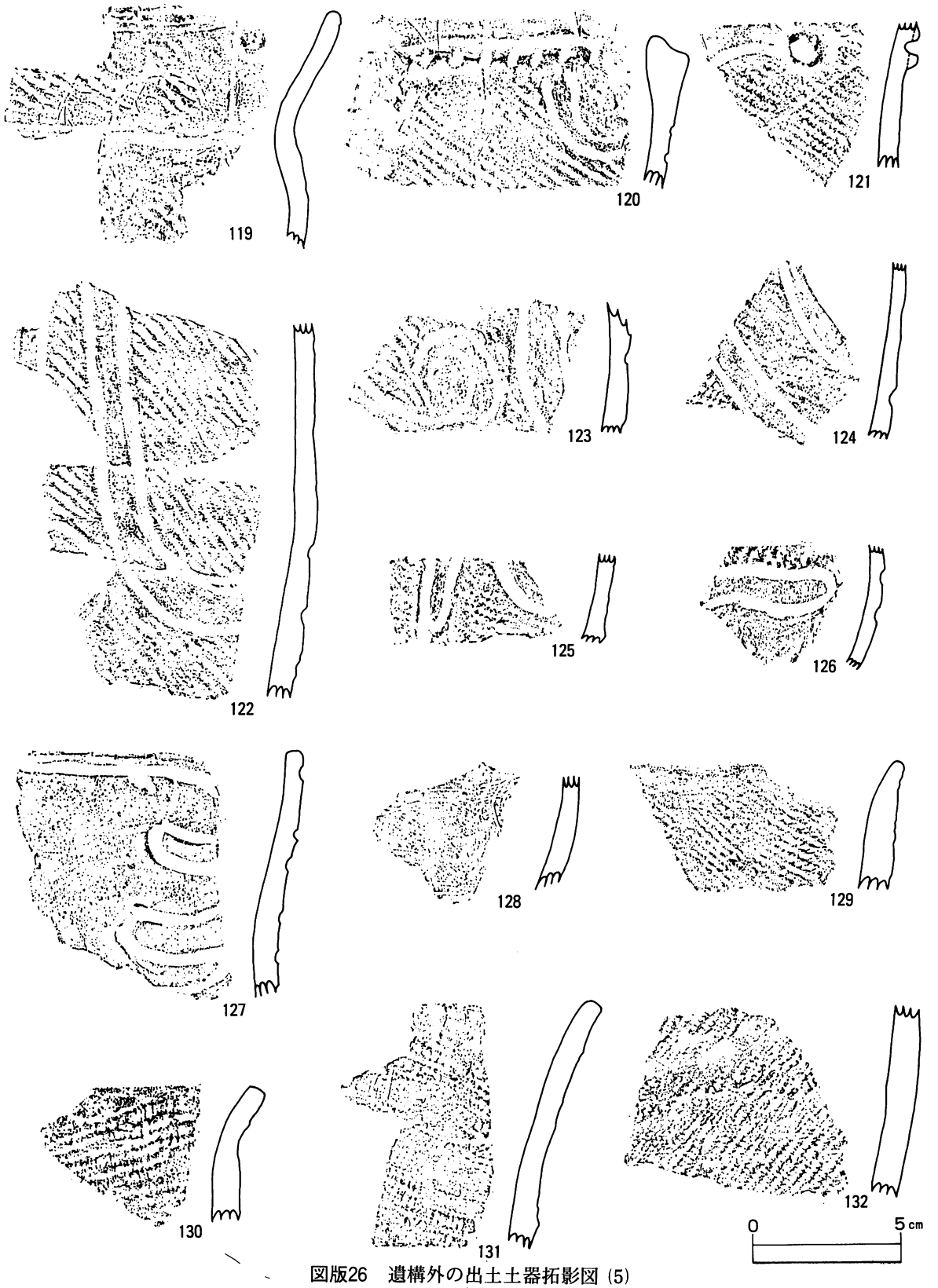
図版23　遺構外の出土土器拓影図 (2)



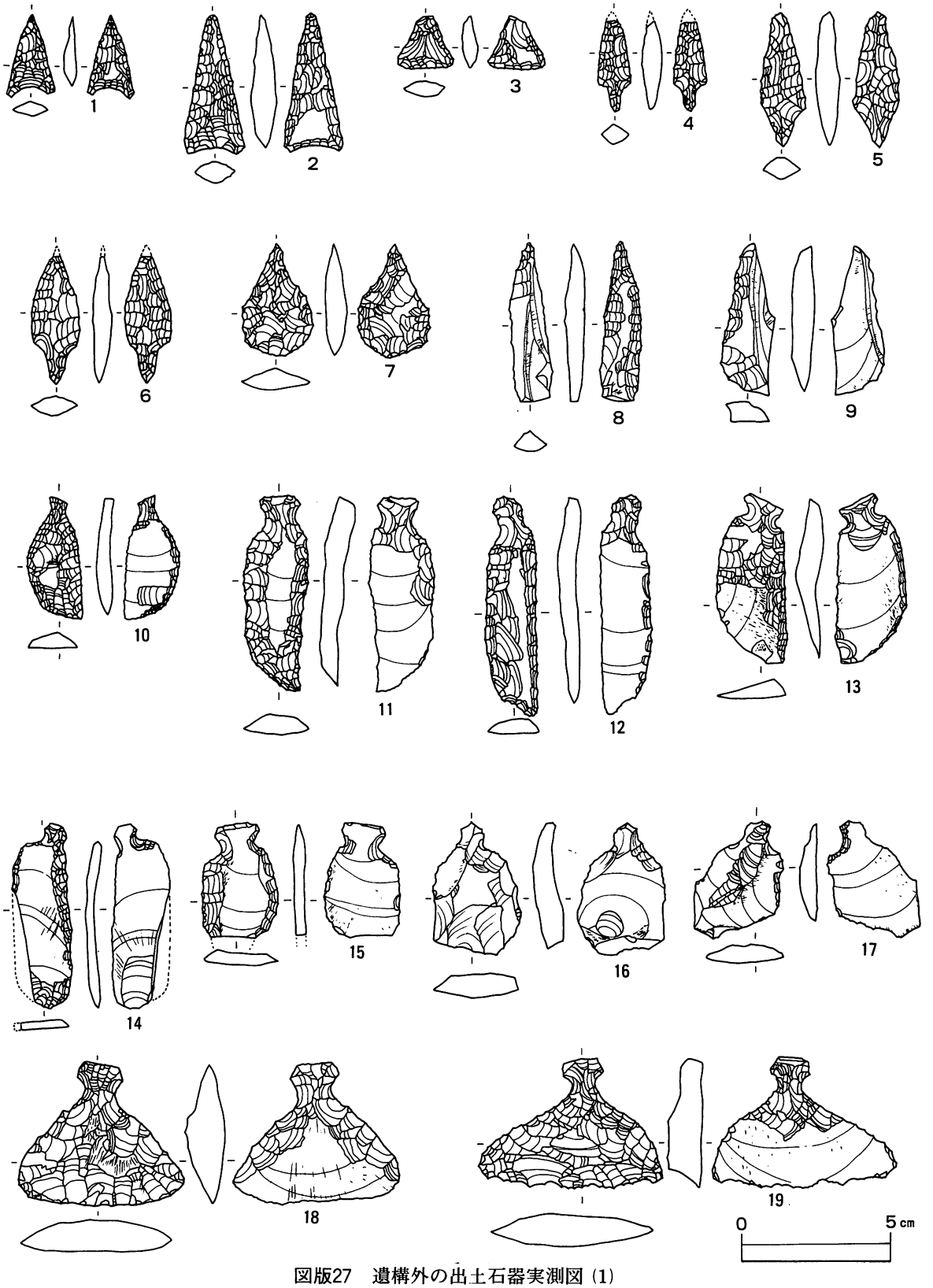
図版24　遺構外の出土土器拓影図（3）



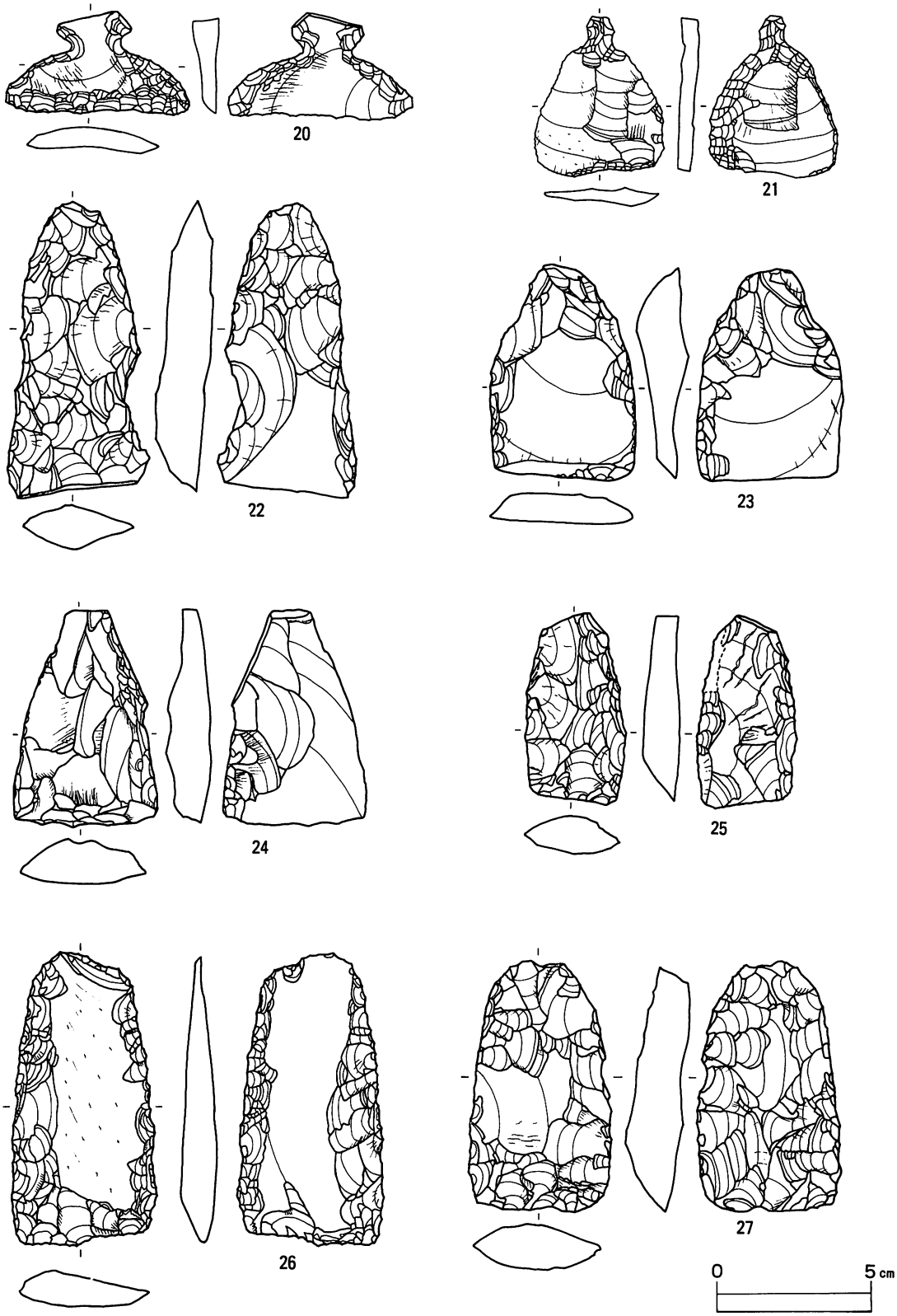
図版25　遺構外の出土土器拓影図（4）



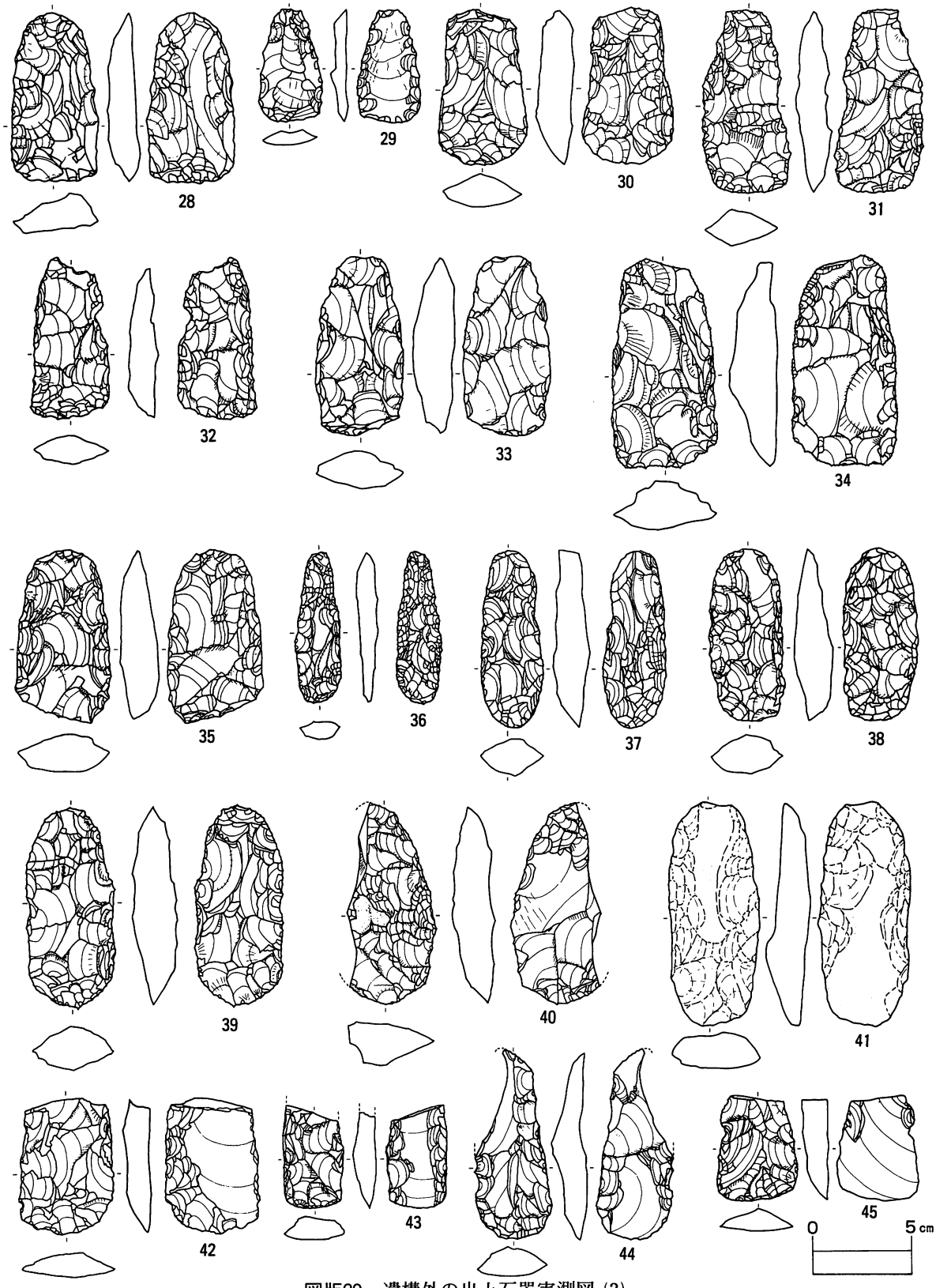
図版26　遺構外の出土土器拓影図（5）



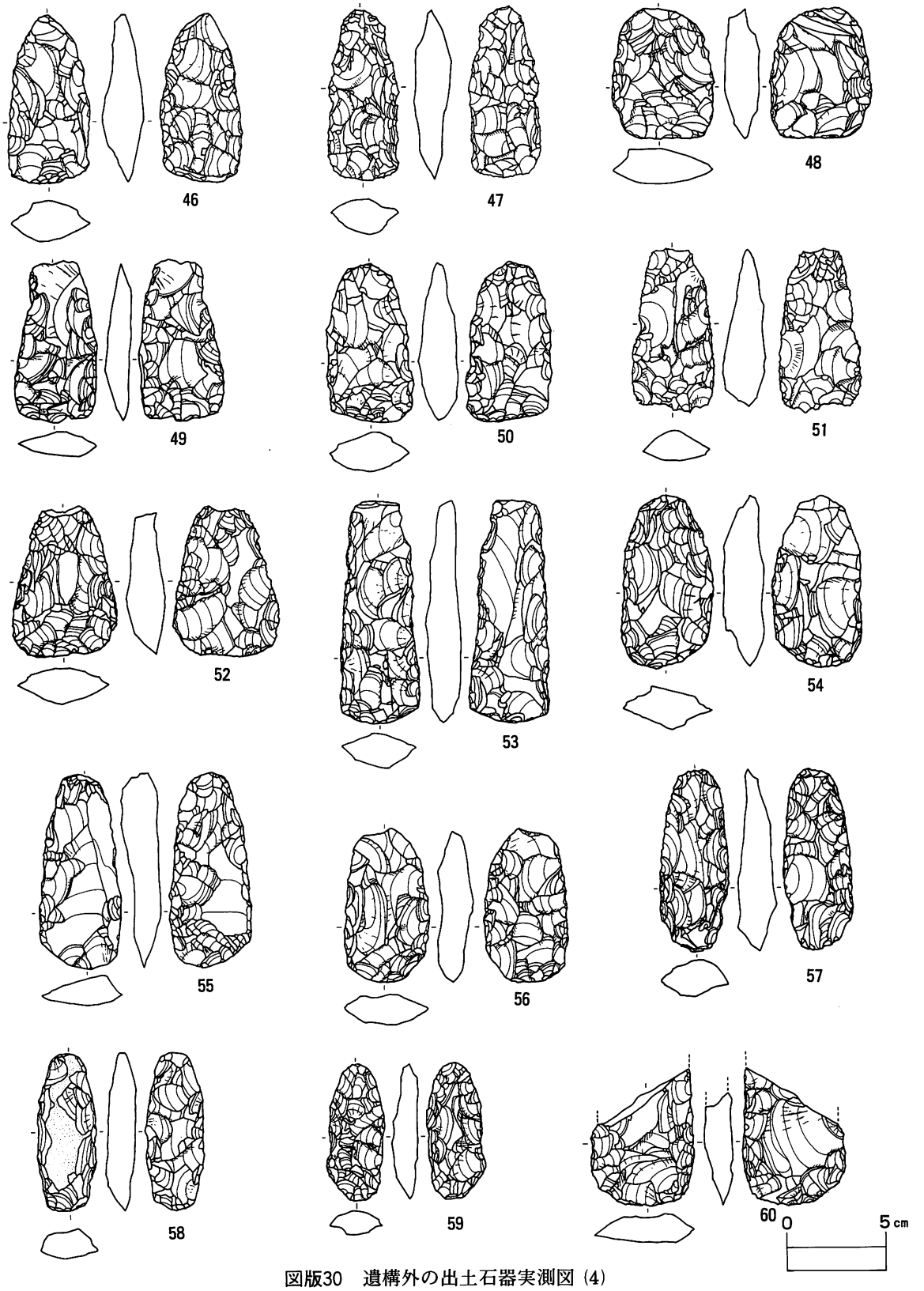
図版27　遺構外の出土石器実測図（1）



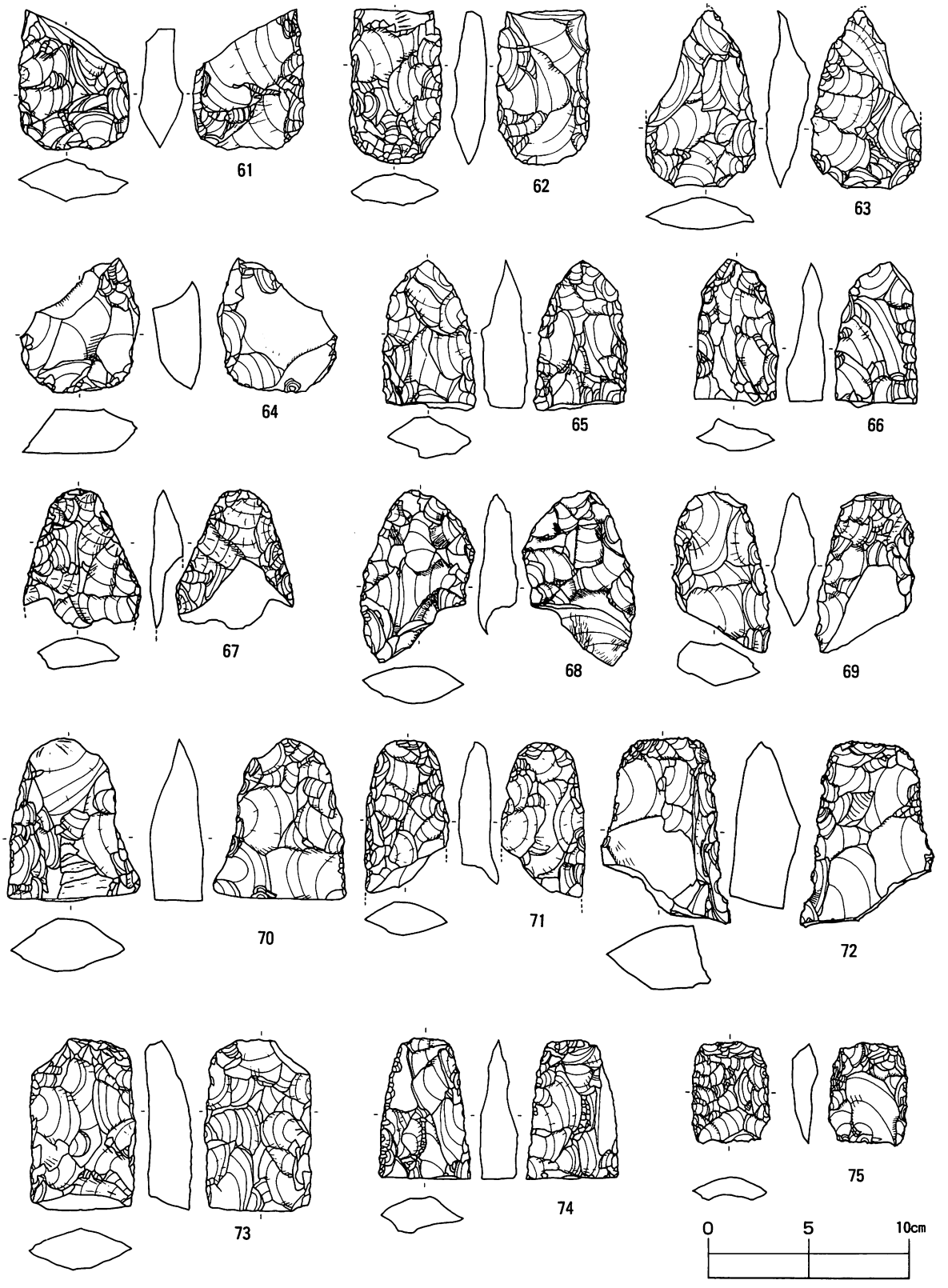
図版28　遺構外の出土石器実測図（2）



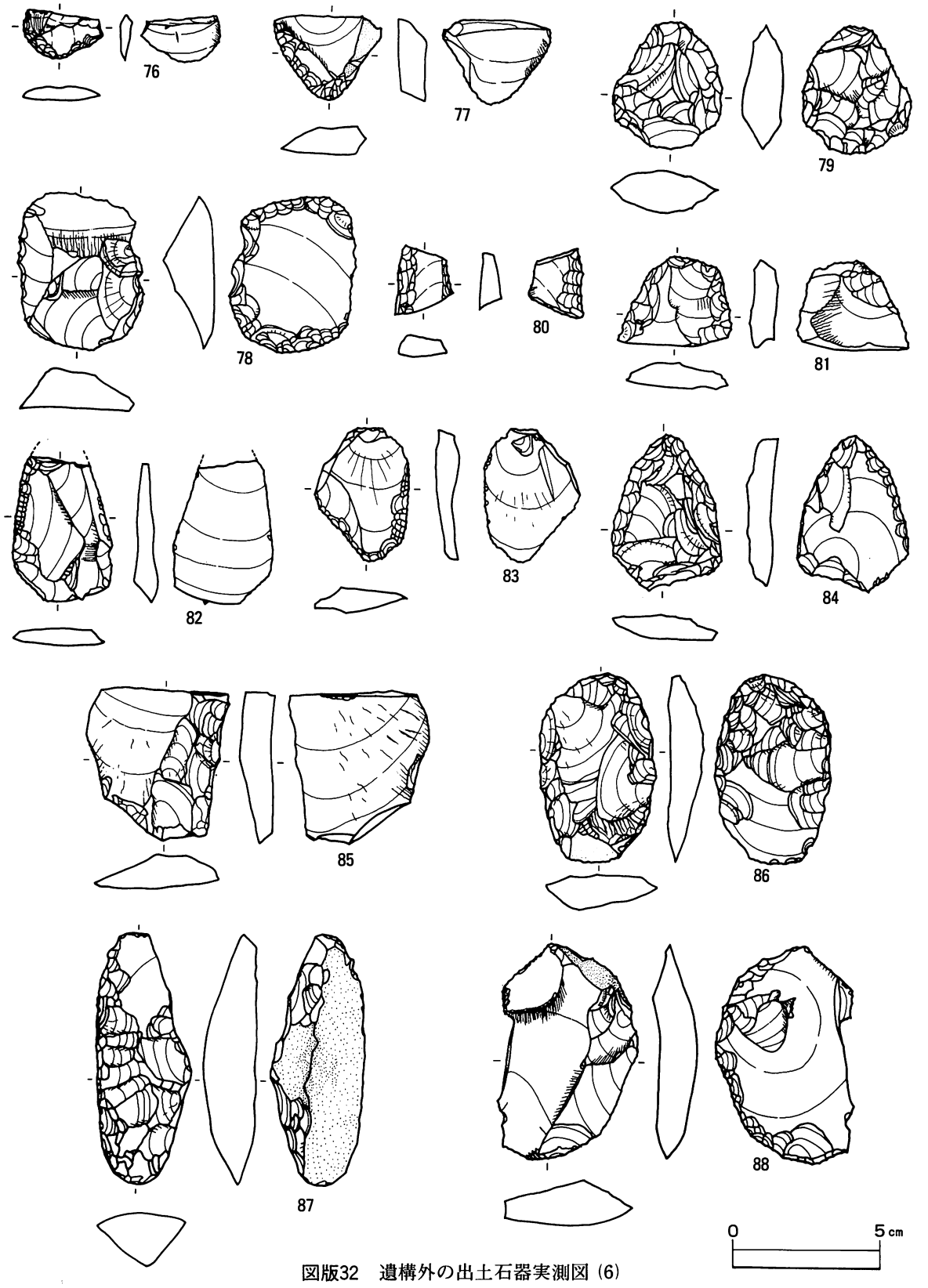
図版29　遺構外の出土石器実測図 (3)



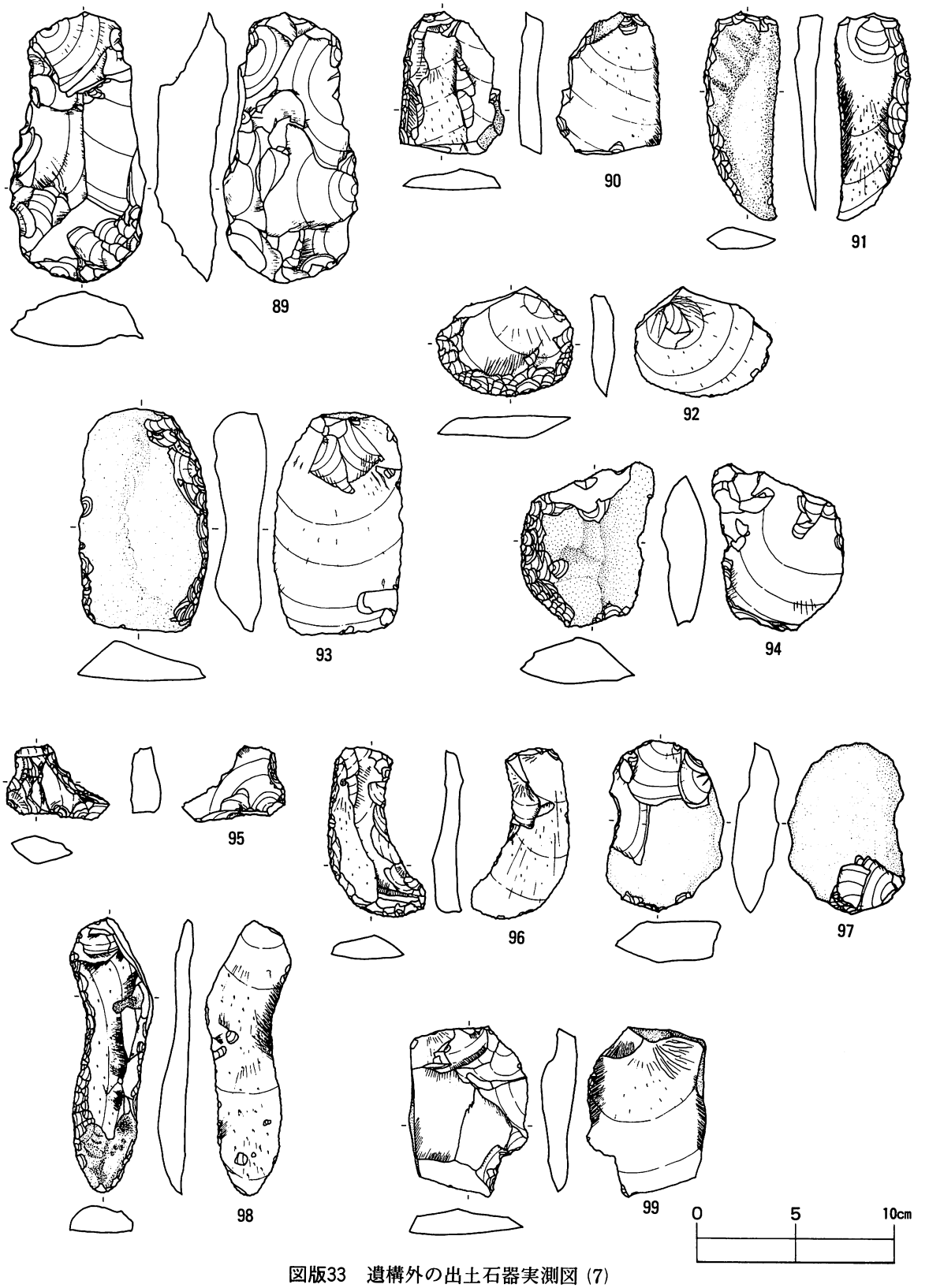
図版30　遺構外の出土石器実測図（4）



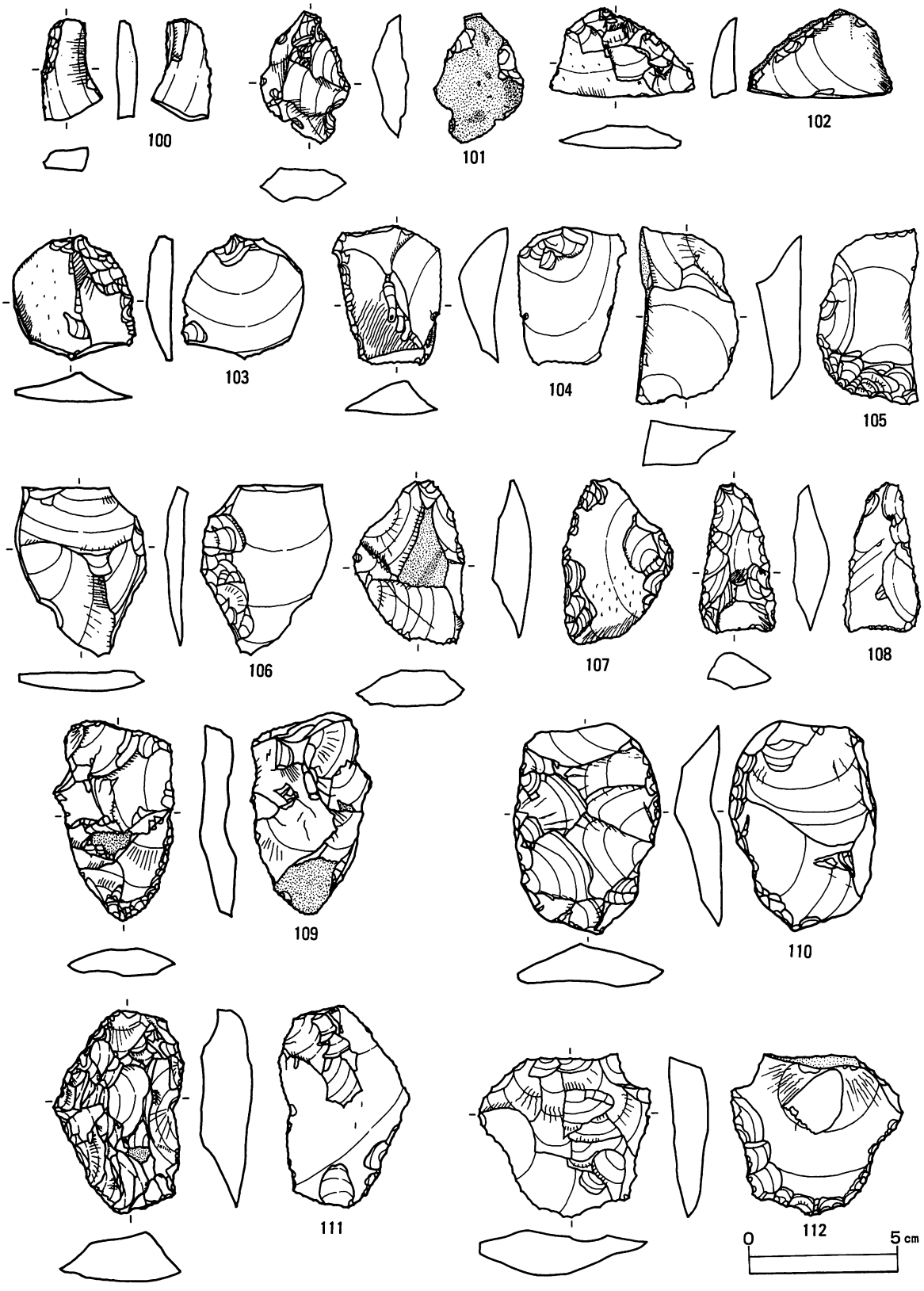
図版31　遺構外の出土石器実測図（5）



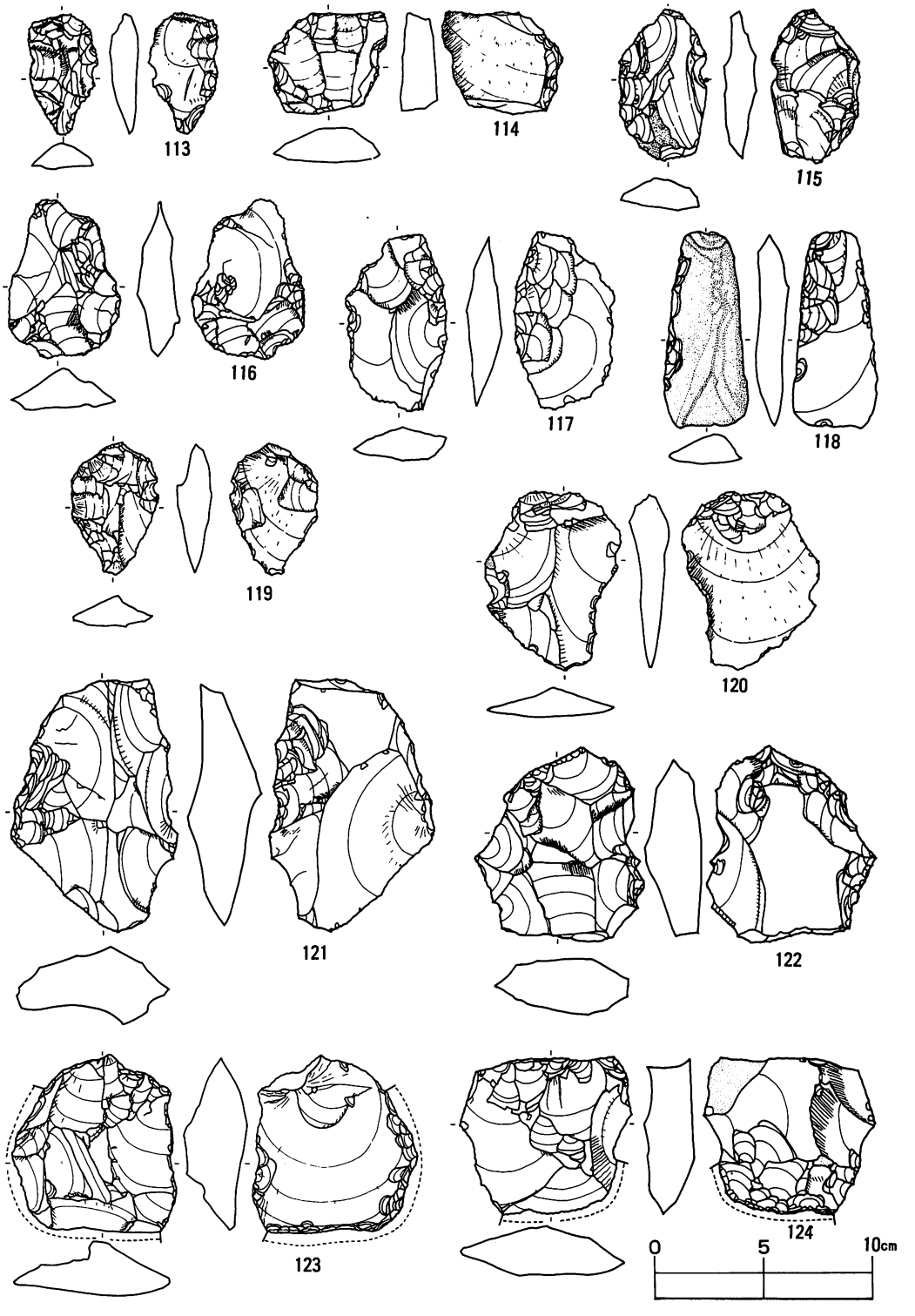
図版32　遺構外の出土石器実測図 (6)



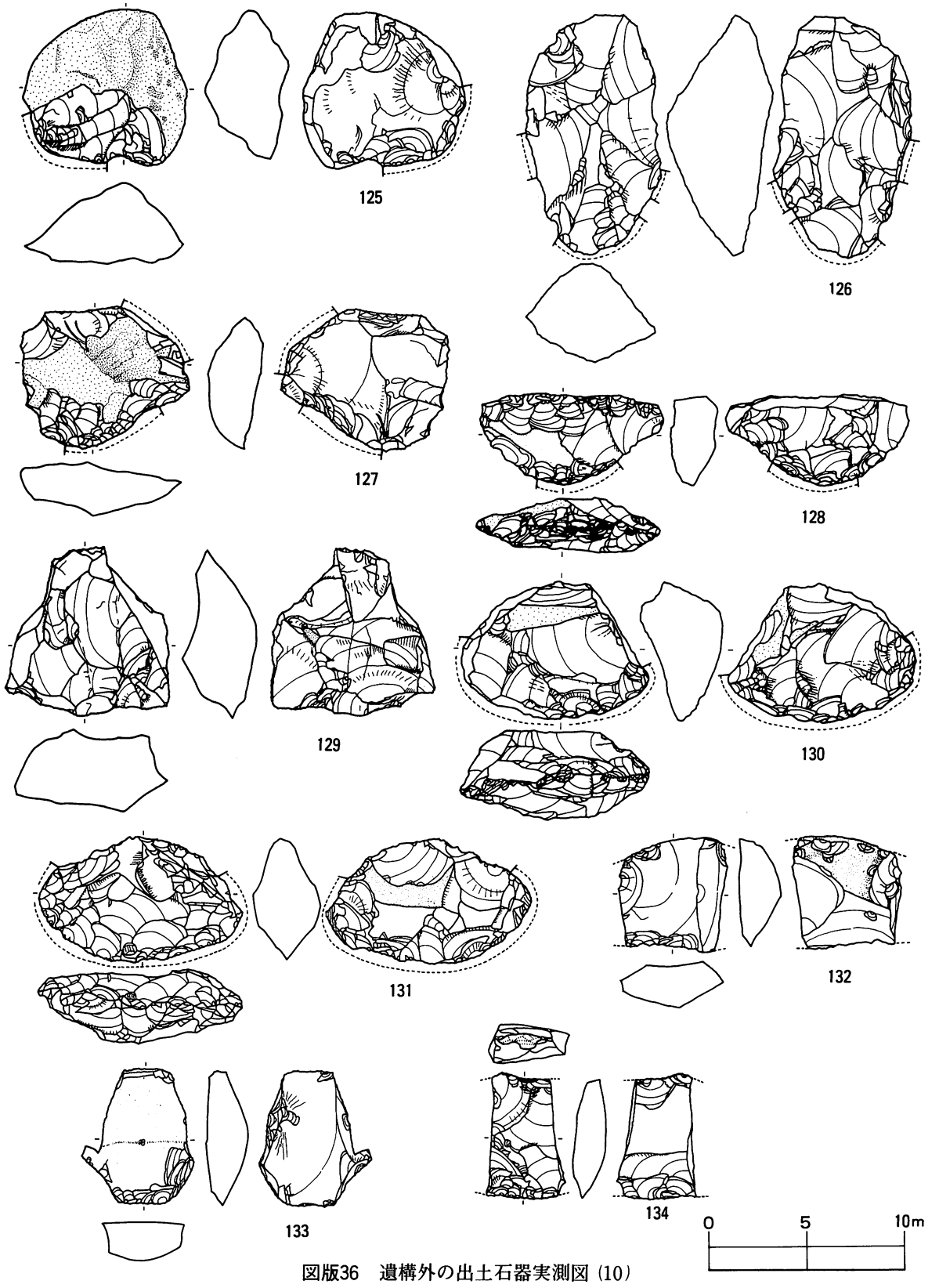
図版33　遺構外の出土石器実測図 (7)



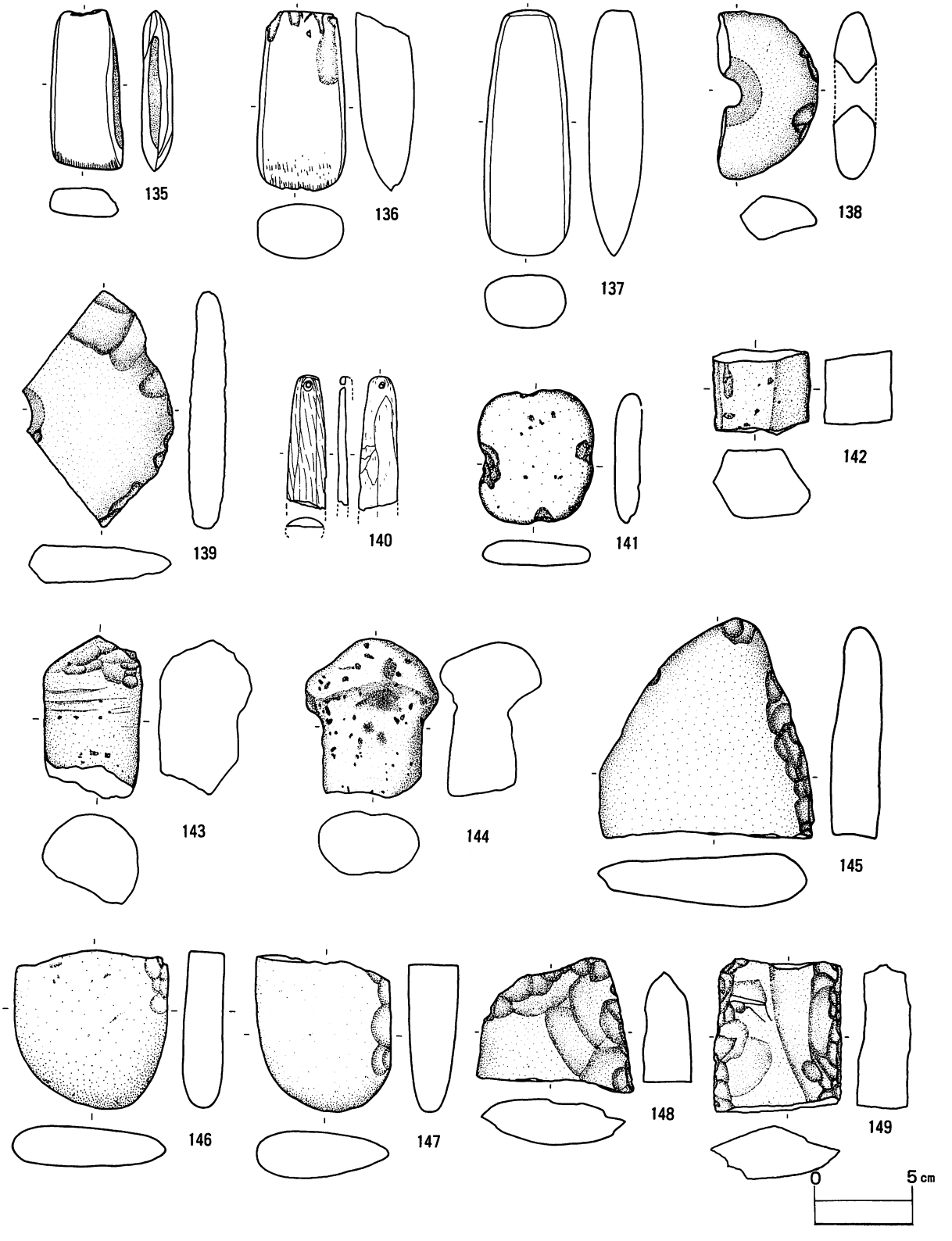
図版34　遺構外の出土石器実測図 (8)



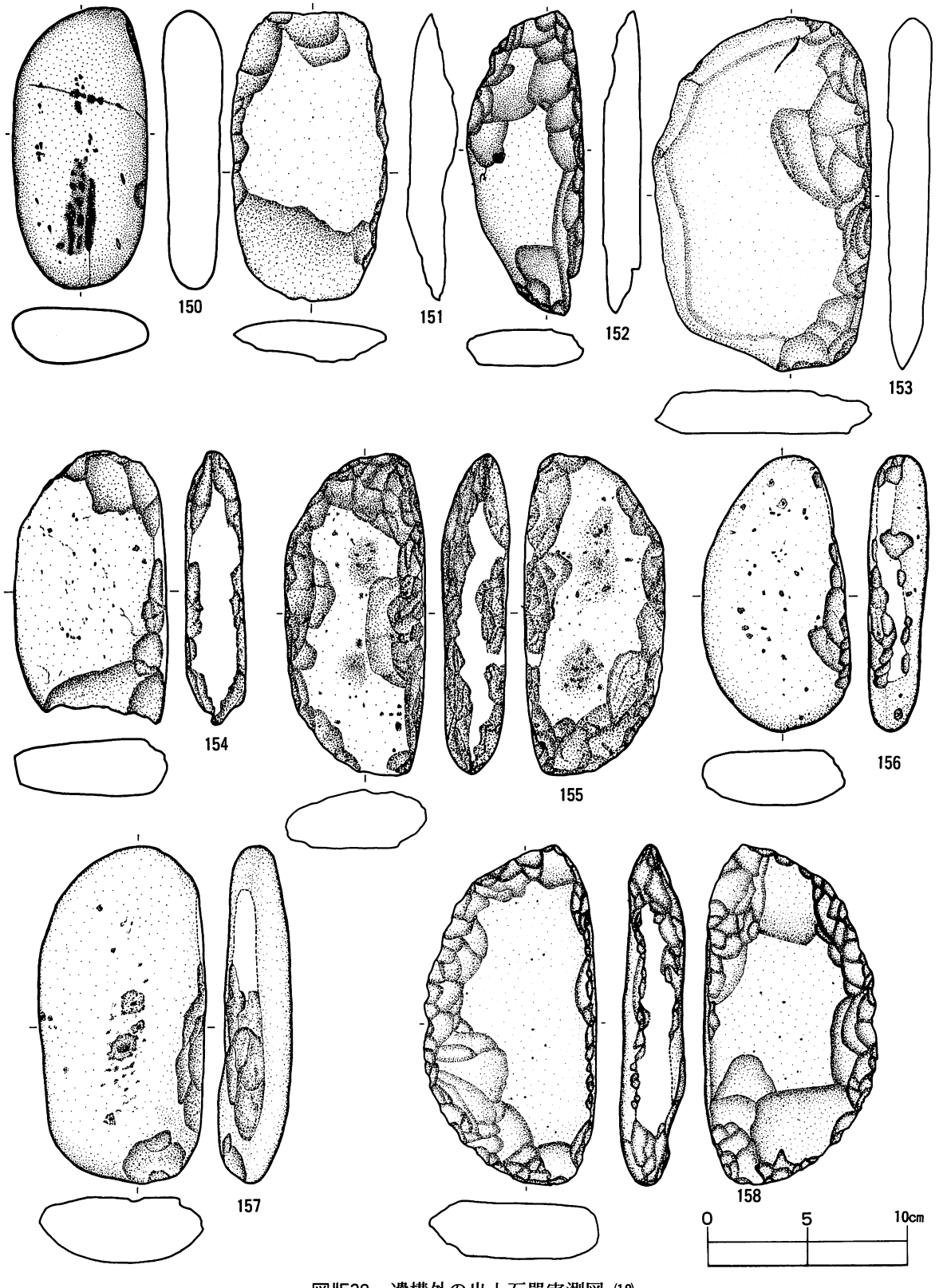
図版35　遺構外の出土石器実測図 (9)



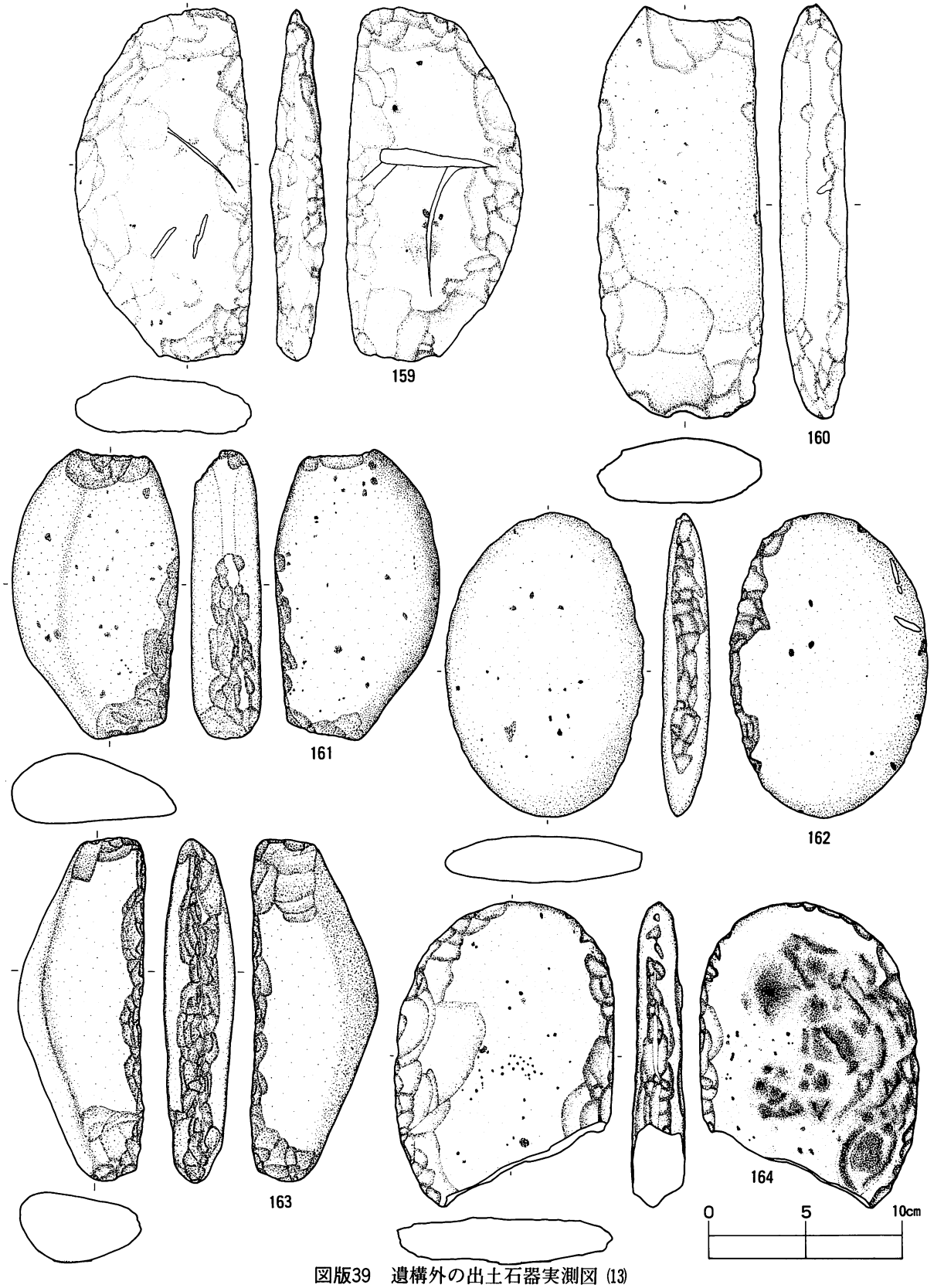
図版36　遺構外の出土石器実測図（10）



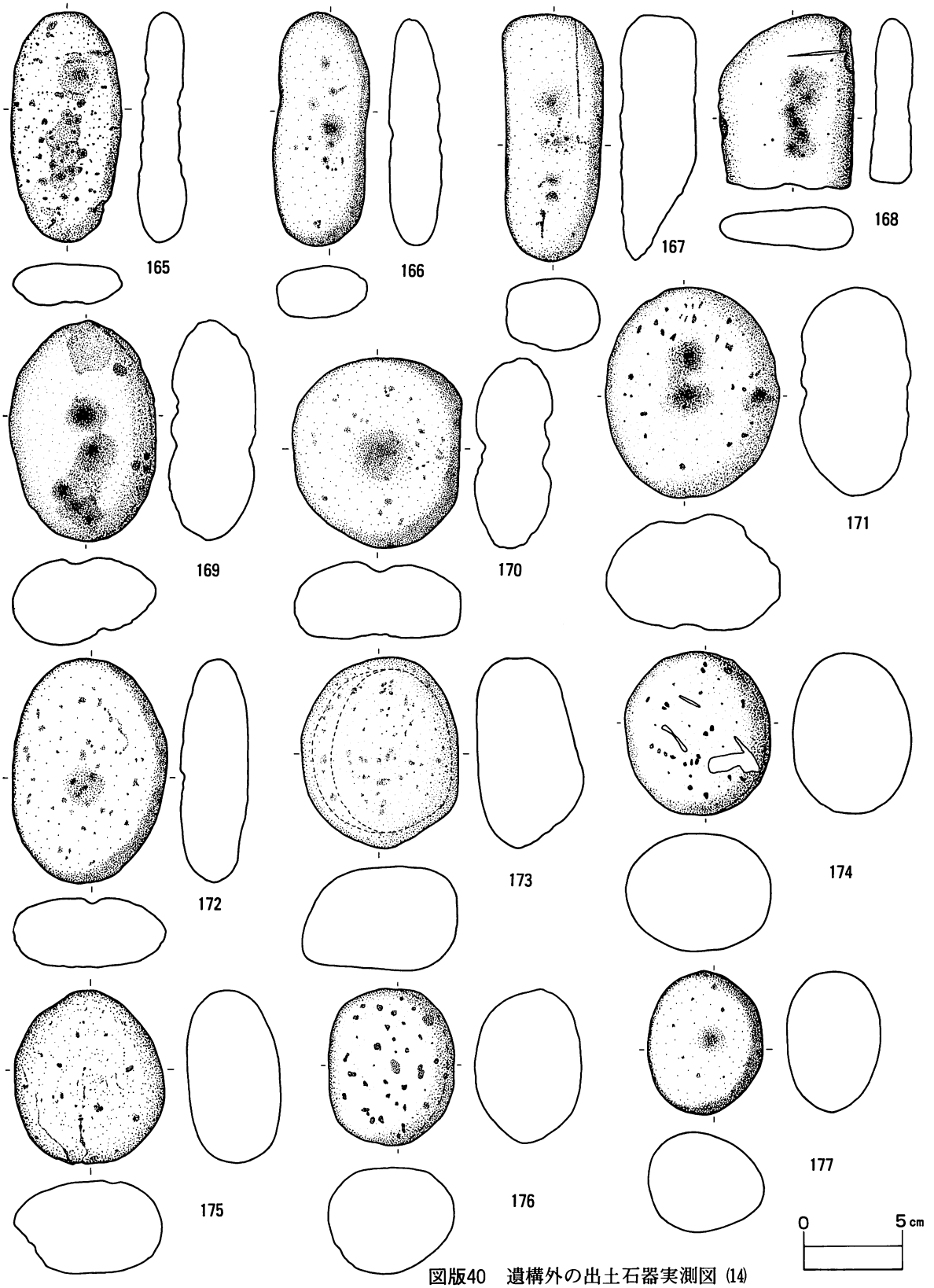
図版37　遺構外の出土石器実測図 (11)



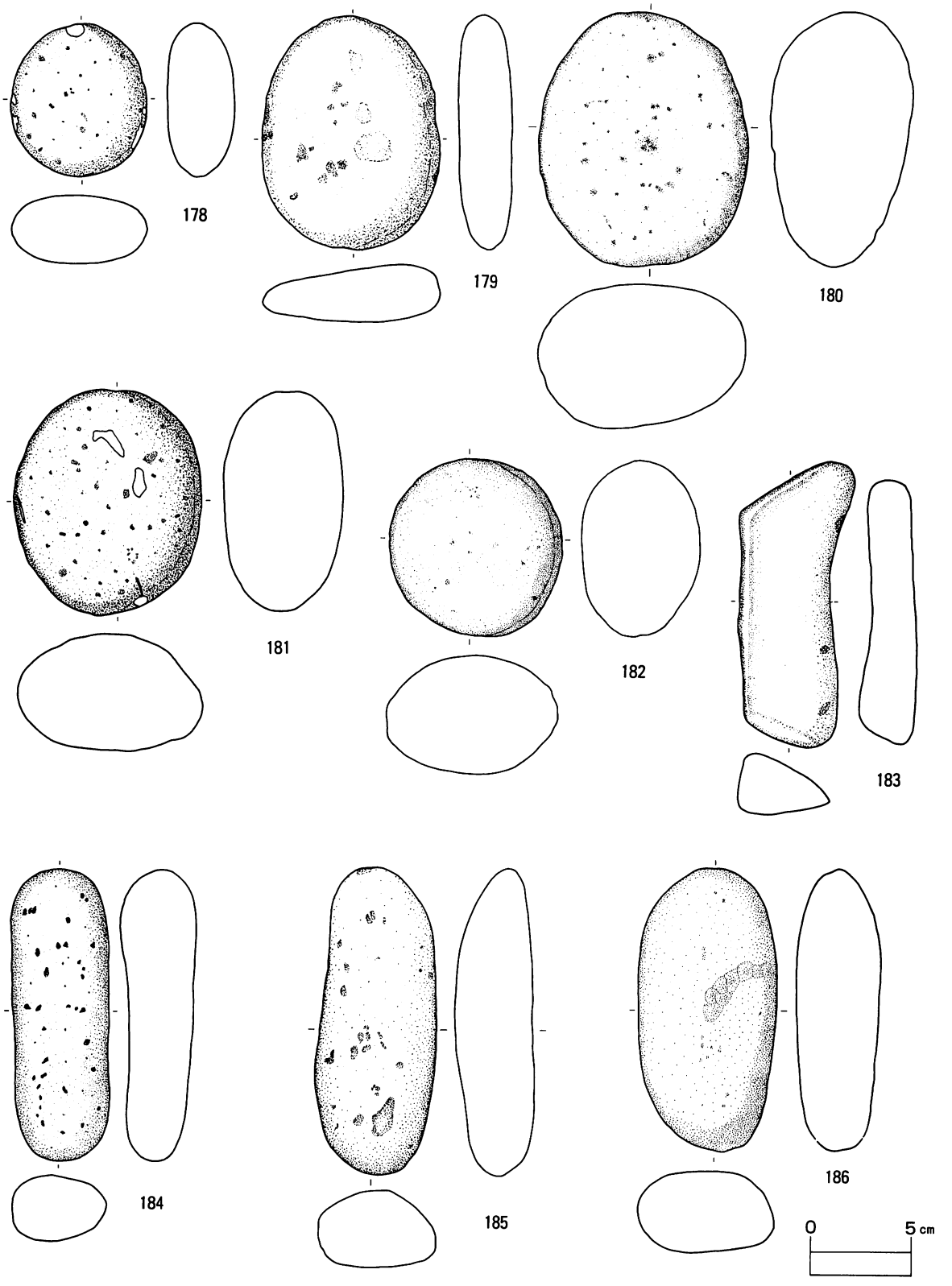
図版38　遺構外の出土石器実測図 (12)



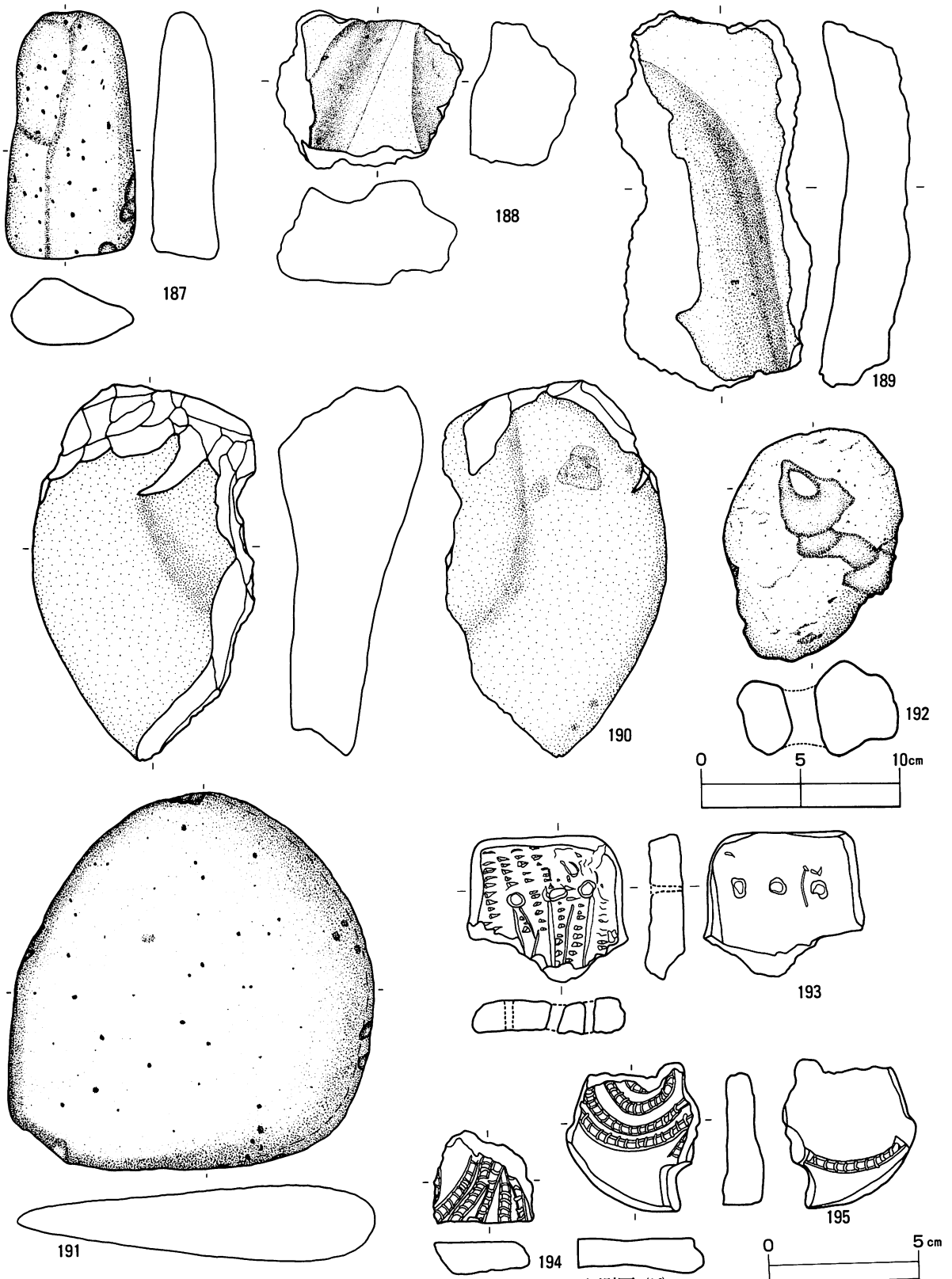
図版39　遺構外の出土石器実測図 (13)



図版40　遺構外の出土石器実測図 (14)



図版41　遺構外の出土石器実測図 (15)



図版42　遺構外の出土石器・土偶実測図 (16)

遺構内の出土石器・土偶計測表(1)　(　)は欠損品の残存値

遺構名	図版番号	写真図版番号	器種	最大幅(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質
1号住居址	17－1	14－1	石鏃	1.7	(1.6)	0.3	4.0	硬質泥岩
	2	2	スクレイパー	4.4	3.4	0.7	14.1	〃
	3	3	〃	9.9	4.0	1.1	44.2	流紋岩質細粒凝灰岩
2号住居址	4	4	不定形石器	5.1	3.0	1.3	18.2	珪質泥岩
	5	5	有孔石器	5.4	5.2	1.2	41.5	凝灰質砂岩
	6	6	半円状扁平打製石器	17.8	10.3	2.2	570.0	流岩質凝灰岩
	7	7	〃	17.2	6.6	2.2	320.0	淡緑色砂質凝灰岩
	18－8	8	〃	12.5	7.1	3.9	600.0	両輝石安山岩
3号住居址	9	9	箆状石器・打製石斧	(5.2)	4.5	1.5	32.9	硬質凝灰質泥岩
	10	10	磨製石斧	(5.9)	4.6	2.6	115.0	石質凝灰岩
	11	11	磨石	(12.9)	7.6	5.7	670.0	淡緑色凝灰岩
	12	15－12	〃	16.4	8.5	3.7	670.0	両輝石安山岩
	13	13	土偶	(6.6)	7.1	1.9	120.0	――
	14	14	台石	14.9	13.6	9.9	2580.0	輝石安山岩
Bd－03ピット	19－15	15	箆状石器・打製石斧	5.3	2.9	1.3	14.2	流紋岩質細粒凝灰岩
	16	16	石錘	6.9	4.3	1.9	75.0	淡緑色粗凝灰岩
	17	17	〃	5.7	4.1	1.5	38.4	緑色砂質凝灰岩
	18	18	〃	6.2	4.3	1.3	52.0	輝石安山岩
	19	19	〃	5.9	5.7	1.4	73.0	変朽安山岩質凝灰岩
	20	20	〃	7.1	5.4	1.6	80.0	輝石安山岩
	21	16－21	〃	6.0	4.9	1.7	69.0	流紋岩質砂質凝灰岩
Be－03ピット	22	22	不定形石器	5.6	(4.2)	1.7	45.6	硬質泥岩
	20－23	23	磨石	16.7	7.1	4.3	729.0	両輝安山岩
Be－06ピットⅡ	24	24	〃	11.9	9.3	5.6	780.0	淡緑色砂質凝灰岩
	25	25	土偶	(3.2)	(3.2)	1.6	15.2	――
Bf－09ピット1	18－12	15－12	磨石	16.4	8.5	3.7	670.0	両輝石安山岩
Bf－12ピット1	20－26	16－26	半円状扁平打製石器	(5.2)	7.4	3.3	187.0	変朽安山岩凝灰岩
	27	27	磨石	8.5	8.2	4.6	498.0	両輝石安山岩
	28	28	〃	7.5	7.2	5.3	414.0	〃
Bf－12ピット2	29	29	石匙	(4.7)	3.5	0.8	9.3	泥質石質凝灰岩
	30	30	スクレイパー	(3.1)	2.0	0.7	4.5	流紋岩質細粒凝灰岩
Bc-06陥し穴状遺構	31	31	磨石	8.2	8.1	5.1	478.0	輝石安山岩

遺構外の出土石器計測表(1)　（　）は欠損品の残存値

器　種	図版番号	写真図版番号	出土地区	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　質
石　鏃	27－1	22－1	Bef－12	2.8	2.1	0.4	1.2	泥質石質凝灰岩
	2	2	〃	4.7	2.0	0.9	4.8	硬質泥岩
	3	3	Bef－03	(1.8)	1.9	0.5	1.4	〃
	4	4	Bef－09	(3.1)	1.1	0.7	1.6	珪質泥岩
	5	5	Bgh－06	4.5	1.5	0.7	3.9	硬質泥岩
	6	6	Bf －53	(4.3)	1.7	0.7	3.0	流紋岩質石質凝灰岩
石　錐	7	7	Bcd－56	3.8	2.4	0.6	4.7	硬質泥岩
	8	8	Bef－03	5.4	1.3	0.7	5.2	〃
	9	9	Bef－53	5.0	(1.6)	0.7	5.4	珪質泥岩
石　匙	10	10	Aij －06	4.0	1.8	0.5	3.9	硬質凝灰質泥岩
	11	11	Bcd－03	6.6	2.2	0.8	12.2	硬質泥岩
	12	12	〃	7.5	1.8	0.6	8.9	硬質凝灰岩泥岩
	13	13	Bef－53	5.5	2.3	0.7	9.6	流紋岩質石質凝灰岩
	14	14	Bcd－03	6.3	(1.9)	0.3	5.2	珪質泥岩
	15	15	Bde－12	(3.9)	2.6	0.4	5.1	〃
	16	16	Bgh－09	(4.4)	2.9	0.8	10.8	硬質泥岩
	17	17	Ef －35	(3.5)	2.9	0.6	5.9	〃
	18	18	Be －53	4.9	5.6	1.3	22.6	〃
	19	19	Be －56	4.4	6.2	1.2	22.6	〃
	28－20	20	Bg －53	3.2	5.9	0.8	12.1	〃
	21	21	表　採	5.1	4.1	0.6	10.4	〃
篦状石器・打製石斧	22	22	Bf －56	9.3	4.6	1.6	75.0	流紋岩質細粒凝灰泥岩
	23	23	Bab－09	6.8	4.7	1.5	46.0	硬質泥岩
	24	24	Bab－09	7.0	4.6	1.5	51.6	〃
	25	25	表　採	6.1	3.2	1.2	31.5	硬質凝灰質泥岩
	26	23－26	Bef－56	9.5	4.7	1.1	58.1	硬質泥岩
	27	27	Bef－03	8.0	4.5	1.8	71.0	流紋岩質細粒凝灰泥岩
	29－28	28	Bef－06	8.5	4.4	1.8	80.0	硬質泥岩
	29	29	Bef－03	5.7	3.2	0.8	15.4	〃
	30	30	Bde－12	7.9	4.5	1.8	70.0	〃
	31	31	Bef－06	9.2	4.3	1.8	70.0	〃
	32	32	Be －56	(8.2)	3.9	1.5	49.7	〃
	33	33	Bgh－56	9.0	4.4	2.1	80.0	〃
	34	34	Bef－56	(10.6)	5.3	2.5	130.0	〃
	35	35	Bef－56	8.6	4.7	1.9	88.0	〃
	36	36	Bg －56	7.6	2.2	1.0	16.0	硬質凝灰質泥岩
	37	37	Bgh－09	9.0	3.2	1.9	47.7	硬質泥岩
	38	38	Bef－12	8.7	3.7	2.0	68.0	〃
	39	39	Bef－53	10.2	4.5	2.3	98.0	硬質凝灰質泥岩
	40	40	Bef－56	10.1	(4.3)	2.1	99.0	硬質泥岩
	41	41	Bef－06	11.4	4.6	1.9	135.0	粘板岩(ホルンフェルス)
	42	42	Bcd－03	(6.8)	4.7	1.4	41.3	流紋岩質細粒凝灰泥岩
	43	24－43	Bef－53	5.0	3.1	1.2	22.6	硬質凝灰質泥岩
	44	44	Bef－56	(9.6)	(3.8)	1.6	43.5	硬質泥岩
	45	45	Bcd－09	(5.3)	4.0	1.3	29.4	流紋岩質細粒凝灰泥岩
	30－46	46	Bgh－09	8.5	4.1	2.1	69.0	硬質泥岩
	47	47	Bgh－53	8.6	3.5	1.8	51.9	〃
	48	48	Bd －53	6.5	5.1	1.8	74.0	〃
	49	49	Aij －06	8.1	4.2	1.2	43.1	〃
	50	50	Bef－56	8.0	4.3	2.0	72.0	流紋岩質細粒凝灰泥岩

遺構外出土石器計測表(2)　(　) は次損品の残存値

器　種	図版番号	写真図版番号	出土地区	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　質
篦状石器・打製石斧	30−51	24−51	Bcd−03	8.2	4.1	2.1	64.0	硬質泥岩
	52	52	Bcd−12	(7.5)	5.2	2.0	80.0	〃
	53	53	Bef−53	11.2	4.0	1.7	78.0	硬質凝灰質泥岩
	54	54	Bef−56	8.6	4.5	2.0	77.0	流紋岩質細粒凝灰泥岩
	55	55	Bef−09	9.8	4.1	1.9	74.0	硬質泥岩
	56	56	Bgh−09	7.8	4.2	1.6	54.5	〃
	57	57	Bef−56	9.2	3.5	1.9	53.7	硬質凝灰質泥岩
	58	58	Ade−03	8.0	2.9	1.4	41.2	硬質泥岩
	59	59	Bgh−53	6.9	2.8	1.3	26.0	〃
	60	25−60	Bef−56	(6.3)	5.2	1.4	52.3	〃
	31−61	61	Bd −56	(6.6)	5.5	2.1	70.0	〃
	62	62	Bf −56	(7.6)	4.5	1.6	74.0	硬質凝灰質泥岩
	63	63	Bab−09	(8.8)	(5.5)	1.9	72.0	硬質泥岩
	64	64	Bab−09	(6.4)	5.7	2.3	98.0	〃
	65	65	Bef−56	(7.3)	4.6	2.1	70.0	硬質凝灰質泥岩
	66	66	Bab−06	(7.0)	4.1	1.9	56.0	硬質泥岩
	67	67	Bd −53	(7.0)	5.7	1.5	50.0	〃
	68	68	Bef−53	(8.0)	5.2	1.9	72.0	〃
	69	69	Bcd−06	(7.1)	4.7	2.1	65.0	硬質凝灰質泥岩
	70	70	Bg −56	(8.2)	6.6	2.6	135.0	硬質泥岩
	71	71	Bgh−53	(7.3)	4.1	1.6	58.0	〃
	72	72	表　採	(8.9)	5.8	3.2	180.0	〃
	73	73	Bef−56	(8.6)	5.2	2.2	125.0	流紋岩質細粒凝灰泥岩
	74	74	Bef−56	(7.0)	4.6	1.9	57.2	硬質泥岩
	75	75	Bef−56	(5.0)	3.8	1.2	27.6	〃
スクレイパー	32−76	26−76	Bcd−12	(1.5)	2.6	0.4	2.0	黒熔岩
	77	77	表　採	(2.8)	3.6	1.0	12.0	珪質泥岩
	78	78	Bef−12	5.2	4.1	1.7	38.2	硬質泥岩
	79	79	Bcd−06	4.3	3.7	1.4	21.3	〃
	80	80	Bef−12	(2.3)	1.9	0.7	3.0	〃
	81	81	Bef−35	(3.0)	3.7	0.8	12.0	〃
	82	82	表　採	(4.8)	3.4	0.8	16.6	珪質泥岩
	83	83	Bcd−06	(4.5)	3.2	0.8	10.9	硬質泥岩
	84	84	Ade−03	(5.1)	3.7	0.9	18.3	〃
	85	85	Bcd−03	(5.1)	4.6	1.1	33.6	珪質泥岩
	86	86	Bef−03	(6.4)	3.9	1.1	29.3	硬質泥岩
	87	87	Acd−12	8.5	(3.2)	1.8	48.4	〃
	88	88	Bef−06	7.3	(4.3)	1.5	52.4	〃
	33−89	89	Bgh−53	13.7	6.8	3.4	290.0	硬質凝灰質泥岩
	90	90	Bc −03	(7.1)	5.2	1.1	59.7	〃
	91	91	Bgh−56	(10.2)	3.7	1.2	57.2	流紋岩質細粒石質凝灰岩
	92	92	Bab−03	(5.4)	6.8	1.1	49.5	硬質泥岩
	93	93	表　採	(11.3)	6.5	2.6	210.0	〃
	94	94	Bef−56	(7.6)	6.1	2.3	115.0	〃
	95	95	Bgh−56	(3.5)	5.2	1.5	23.4	〃
	96	96	Bcd−06	(8.3)	4.0	1.2	48.4	〃
	97	97	Bgh−09	8.7	5.8	2.1	122.0	凝灰質硬質泥岩
	98	27−98	Acd−12	14.0	3.6	1.4	75.0	珪質泥岩
	99	99	Bab−09	(8.6)	5.9	1.7	92.0	流紋岩質細粒石質凝灰岩
不定形石器	34-100	100	Bef−06	(3.3)	2.0	0.8	49.0	硬質泥岩

遺構外出土石器計測表(3)　（　）は欠損品の残存値

器種	図版番号	写真図版番号	出土地区	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質
不定形石器	34−101	27−101	Bcd−12	4.2	3.0	1.1	11.5	黒燿岩
	102	102	Bef−53	(3.0)	4.8	0.8	10.7	流紋岩質細粒凝灰岩
	103	103	Bef−03	(4.0)	4.0	0.9	15.4	硬質泥岩
	104	104	Bef−03	(4.6)	3.6	1.4	18.3	〃
	105	105	Bgh−56	5.9	3.2	1.5	31.1	凝灰質硬質泥岩
	106	106	Bef−03	(5.6)	4.3	0.6	17.6	〃
	107	107	Beh−12	5.4	3.7	1.2	22.0	硬質泥岩
	108	108	Bef−53	5.0	2.6	1.2	12.1	〃
	109	109	Bef−56	6.5	4.0	1.0	25.5	珪質泥岩
	110	110	Bef−56	7.0	4.9	1.3	34.7	〃
	111	111	Bab−09	6.9	4.1	1.7	46.7	硬質泥岩
	112	112	Bef−03	5.3	5.6	1.5	44.8	凝灰質硬質泥岩
	35−113	113	Bgh−53	5.5	3.0	1.3	18.7	硬質泥岩
	114	114	Bef−06	(4.6)	5.1	1.7	51.0	〃
	115	115	Bab−06	7.0	3.9	1.4	36.7	珪質泥岩
	116	116	Baf−56	7.3	5.1	1.8	55.3	硬質泥岩
	117	117	Bef−03	8.1	4.5	1.5	47.7	凝灰質硬質泥岩
	118	118	Bef−56	8.9	3.8	1.3	45.3	硬質泥岩
	119	119	Bef−53	6.0	4.0	1.6	24.6	凝灰質硬質泥岩
	120	120	Bef−03	8.2	6.0	1.7	49.2	硬質泥岩
	121	28−121	Aef−56	11.5	7.6	3.1	209.0	〃
	122	122	Bef−56	(8.9)	7.6	2.6	169.0	流紋文質細粒石質凝灰岩
	123	123	無記入	8.1	7.3	2.9	145.0	凝灰質硬質泥岩
	124	124	Bef−56	(7.1)	7.8	2.3	150.0	硬質泥岩
刃器	36−125	125	Bcd−12	7.8	8.3	3.9	268.0	〃
	126	126	Bgh−56	12.2	6.7	5.1	346.0	〃
	127	127	Bef−56	7.0	8.4	2.7	163.0	〃
	128	128	Bcd−03	4.6	9.4	2.7	110.0	〃
	129	129	Bef−53	8.5	8.4	3.7	264.0	硬質凝灰質泥岩
	130	130	Bef−56	7.1	9.5	4.5	285.0	硬質泥岩
	131	131	Bef−56	6.4	10.3	3.5	187.0	〃
切断痕ある石器	132	29−132	Bef−56	5.8	5.4	2.2	98.0	珪質泥岩
	133	133	Ade−12	6.9	5.6	2.1	87.0	硬質泥岩
	134	134	Bgh−56	6.4	3.9	2.0	57.0	〃
磨製石斧	37−135	135	Bef−12	8.2	3.7	1.6	84.0	玻璃質流紋岩
	136	136	Bab−09	(9.1)	4.5	2.8	190.0	石質細粒凝灰岩
	137	137	Bgh−53	12.6	4.4	2.7	250.0	石質凝灰岩
環状石斧	138	138	Bf−56	8.5	(5.0)	2.2	112.0	凝灰質砂岩
	139	139	表採	12.1	(7.4)	2.0	207.0	緑色砂質岩
有孔石器	140	140	Bcd−03	(6.7)	2.0	0.5	11.0	粘板岩
石錘	141	141	Bcd−09	6.7	5.9	1.3	82.0	輝石安山岩
石棒	142	142	Bgh−06	(4.3)	4.9	3.4	112.0	斜長石流紋岩
	143	143	Bgh−12	(8.1)	5.1	4.7	218.0	石英安山岩
	144	144	Bab−03	(8.0)	6.7	5.1	249.0	輝石安山岩
半円状扁平打製石器	145	———	Bgh−53	(11.0)	11.0	2.6	452.0	変朽安山岩質凝灰岩
	146	———	Bg−53	(8.0)	7.8	2.0	222.0	〃
	147	147	Bg−53	(7.7)	6.9	2.5	200.0	〃
	148	148	Bgh−06	(6.5)	7.9	2.5	160.0	淡緑色角礫質凝灰岩
	149	———	Bab−06	(7.9)	6.5	2.7	115.0	淡緑色砂質凝灰岩
	38−150	30−150	Bef−06	13.8	6.7	3.0	412.0	淡緑色礫質凝灰岩

遺構外出土石器・土偶計測表(4)　(　) は欠損品の残存値

器種	図版番号	写真図版番号	出土地区	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質
半円状扁平行製石器	38－151	30－151	Bcd－03	14.5	7.9	2.3	319.0	淡緑色角礫質凝灰岩
	152	152	Bef－12	15.3	5.8	1.9	213.0	流紋岩質細粒(石質)凝灰岩
	153	153	表採	17.8	10.9	2.1	640.0	〃
	154	154	Bgh－56	(12.9)	7.6	3.0	428.0	淡緑色角礫質凝灰岩
	155	155	Bde－12	16.1	7.0	3.3	498.0	変朽安山岩質凝灰岩
	156	156	表採	13.8	7.3	3.0	411.0	〃
	157	157	Bef－12	16.9	8.4	3.5	710.0	〃
	158	158	Bgh－53	17.0	8.1	3.2	590.0	〃
	39－159	159	Bgh－56	18.2	9.1	2.8	600.0	〃
	160	160	表採	20.8	8.4	3.5	872.0	〃
	161	161	Bef－06	14.8	8.5	3.6	660.0	両輝石安山岩
	162	31－162	Aij－03	15.7	10.2	2.4	510.0	変朽安山岩質凝灰岩
	163	163	Bgh－09	17.8	6.3	3.7	524.0	淡緑色砂質凝灰岩
	164	164	表採	(14.5)	11.3	2.7	650.0	変朽安山岩質凝灰岩
凹石	40－165	165	Bg －53	11.6	5.6	2.5	185.0	流紋岩質凝灰岩
	166	166	無記入	11.8	4.7	2.7	187.0	〃
	167	167	〃	12.5	5.0	3.9	406.0	変朽安山岩質凝灰岩
	168	168	〃	(8.9)	6.9	2.1	200.0	〃
	169	169	Bef－03	11.2	7.4	7.3	510.0	両輝石安山岩熔岩
	170	170	Bef－09	9.6	8.5	3.9	428.0	〃
	171	171	Bab－12	10.7	8.8	5.8	573.0	〃
	172	172	Bab－06	11.3	7.8	3.5	403.0	輝石安山岩
磨石	173	――	Bef－06	9.7	7.9	5.3	632.0	両輝石安山岩
	174	174	無記入	8.3	7.3	6.0	524.0	〃
	175	――	Bef－03	8.8	7.6	4.7	372.0	〃
	176	――	Bcd－06	7.9	6.3	5.4	397.0	〃
	177	177	Bgh－53	7.3	5.8	5.1	255.0	〃
	41－178	178	Bgd－06	7.6	6.7	3.3	280.0	〃
	179	――	Bcd－06	11.5	8.8	2.6	412.0	〃
	180	180	表採	12.6	10.3	7.0	1120.0	両輝石安山岩熔岩
	181	181	Bg －53	11.1	9.3	5.8	868.0	両輝石安山岩
	182	32－182	Bef－06	8.7	8.5	5.9	596.0	〃
	183	183	表採	14.0	5.2	3.0	297.0	淡緑色凝灰岩
	184	184	〃	14.4	4.8	3.7	418.0	両輝石安山岩
	185	185	Bef－12	15.2	5.9	3.8	540.0	〃
	186	186	Bg －53	14.0	6.8	4.1	518.0	〃
	42－187	――	Bij－09	(12.3)	6.5	3.3	366.0	〃
石皿	188	188	Bgh－03	(7.9)	(9.2)	5.2	287.0	石英安山岩質極粗粒凝灰岩
	189	189	Bef－06	(18.5)	(9.1)	3.6	703.0	〃
	190	190	無記入	(18.8)	(11.1)	7.2	1215.0	緑色砂質凝灰岩
	191	191	〃	19.0	18.1	3.9	1762.0	〃
有孔礫	192	192	Bcd－06	11.4	8.8	4.6	608.0	流紋岩質凝灰岩
土偶	193	193	Bef－56	(6.8)	5.2	1.2	35.3	――
	194	194	Be －53	(3.0)	(3.3)	1.1	10.6	――
	195	195	Bef－53	(4.8)	(4.4)	1.3	28.6	――

Ⅴ．まとめ

以上、本遺跡の調査区から検出された遺構、出土した遺物についてその概要を記述したわけであるが、本項では若干の考察を加えまとめとしたい。

1．遺構

本遺跡の調査区から検出された遺構は、竪穴住居址３棟、ピット12基、陥し穴状遺構４基である。

（1）竪穴住居址

検出された３棟の住居址は、いずれも耕作による攪乱を受けていること、しかも１、２号住居址は本来的な傾斜面と考えられる部分に占地していることなどより、壁高は10cm程度しか残存せず保存状態は良くはなかった。しかし、これらの住居址には調査の結果、次のような共通点を見い出すことができた。

１．検出面は基盤層上面である。

２．平面形は楕円形を基調とする。

３．規模は長軸が６ｍ±である。

４．炉は床面に２基確認されている。

５．時期決定の資料は第３群土器に属する特徴を有する。

したがって、これら３棟の住居址は、縄文時代前期末葉から中期前葉に使用されたものと考えられる。１号、２号住居址には重複がみられ、その重複は柱穴配置からその共有関係（再利用）が認められ、しかも２号住居址の貼り床と考えられる１号住居址の埋土は、２号住居址を構築した人々によって埋められた可能性もあることから、極めて近い時期の重複であろうことが推定された。また、３号住居址の柱穴の認定から同系列の２種類の柱穴配置が考えられ、建て換えが行なわれた可能性があった。そしてこの建て換えは継続使用の中でのものと推定される。しかし、だからといって３棟の住居址が同時存在（集落）を示すものかどうかについては慎重でなければならない。なぜなら、前述した共通点以外の点では各住居址の構成要素（炉の形態位置、柱穴配置、柱穴数など）に相違点もみられるからである。１号住居址は２基の地床炉を持ち、長軸に対して炉の中心線及び柱穴の中心線が交差する方向にあり、柱穴数は４本ないし６本で平面形は長方形を呈する。２号住居址は２基の地床炉を持ち、長軸に対して炉、柱穴の中心線がやや平行になる傾向がみられ、柱穴数は６本ないし８本で平面形は長方形ないし縦長の六角形を呈する。３号住居址は地床炉と石囲炉を１基ずつ持ち、長軸に対して炉、柱穴の中

心線が交差するが、炉と柱穴の中心線はほぼ一致する傾向がみられる。柱穴数は4本、平面形は台形を呈する。具体的には以上の点である。

しかし、今回の調査における限界性（限られた調査区、よくない保存状態など）があり、同時存在（集落）の構成要素についても整理できなかったため、以上の点を指摘するにとどめる。

なお、3号住居址にみられる石囲炉は、本遺跡とほぼ同時期と思われる荒屋Ⅱ遺跡（Ei－1住居址に土器埋設炉と土器埋設石囲炉の2基が検出されている。）塩ケ森Ⅰ遺跡（昭和54年度調査のAD－30住居址に土器埋設石囲炉と石囲炉の2基検出されている。昭和55年度調査の住居址にも石囲炉が検出された。）に調査例があり、石囲炉の出現期と思われる。今後の資料蓄積を待ちたい。

（2）ピット

検出された12基のピットを断面形、規模で分類すると下記のようになる。

a類　断面形がフラスコ形を呈するもの　　7基

a_1類　開口部の長径（径）、深さとも1m未満のもの

Bd－09ピット

a_2類　開口部の長径（径）が1m以上、深さが1m未満のもの

Bf－56ピット

a_3類　開口部の長径（径）が1m未満、深さが1m以上のもの

Be－06ピットⅡ

a_4類　開口部の長径（径）、深さとも1m以上のもの

Bc－06ピット、Be－03ピット、Bf－09ピット2、Bf－12ピット2

b類　断面形がビーカー形を呈するもの　　2基

Be－06ピットⅠ、Bf－12ピット1

c類　断面形が皿形を呈するもの　　1基

Bd－03ピット

d類　断面形が鉢形を呈するもの　　1基

Bb－09ピット

e類　断面形が鍋底形を呈するもの　　1基

Bf－09ピット1

これらのピットのうち、検出面（掘込面）がⅡ層上面であるBe－06ピットⅠについては縄文時代以降に位置づけられる。Bd－09ピット、Be－03ピットからは底面及び埋土下位から第4群土器に属する遺物が出土しており、縄文時代中期末葉から後期前葉に位置づけられる。Bd－

03ピット、Bc－06ピット、Be－06ピットⅡ、Bf－09ピット１、Bf－12ピット１の埋土からはほとんど第３群土器に属する土器片が出土している。これらの土器片の出土層位が不明であるため時期決定の資料とするには問題があるが、調査区における住居址の位置や時期及びピットの位置などから、縄文時代前期末葉から中期前葉にかけて、あるいはそれ以降に位置づけられよう。全く遺物が出土しなかったBb－09ピット、Bf－56ピット、Bf－09ピット２、Bf－12ピット２については不明とするほかないが、縄文時代に属するものであることはたしかである。ただ重複がみられるBf－09ピット２、Bf－12ピット２については、それぞれBf－09ピット１、Bf－12ピット１よりは古いものといえる。機能的には、フラスコ形やビーカー形を呈するピットのうち自然堆積を示すものについては、貯蔵穴としての機能が考えられよう。平面形、断面形とも異なる形態を示すBb－09ピットについては、埋土に人為的なものがうかがわれ、墓坑としての機能が推定される。底部付近から石錘６点、篦状石器（打製石斧）１点がまとまって出土したBd－03ピットについては、類例を知らないため明確ではないが、１号、２号住居址に極めて近接した個所（１号住居址から1.2m ±、２号住居址から0.4m ±）に位置すること、出土土器がこれらの住居址と同時期であることから、屋内あるいは屋外での作業後の「物置（収納）場」的な機能が推定される。時期的には異なるが遺構外から石錘が集中して出土した例として新納屋(2)遺跡がある。43点の石錘が４～５段に種み重ねられており、近接する住居址との関連を推定している。また、萪内遺跡では墓域に13点の石錘が出土している。最も近接する住居址とは13m ±離れており、墓坑との関連性があるかもしれない。

（３）陥し穴状遺構

検出された４基の陥し穴状遺構は、調査区南西部に占地し、Bc－06、Bb－09、Aj－15の３基が４m ±～７m ±の間隔でほぼ直線上に並ぶ配置がみられる。規模は、Aj－15が調査区外にのびていること、Aj－15、Ai－15が調査前の道路建設工事によって破壊されていることなどから明確ではないが、推定値も含めて開口部の長軸340cm±～490cm±、短軸54cm±～108cm±、深さ95cm±～146cm±の範囲である。平面形は隅丸長方形、断面形は「U」字形を呈し、当センターの瀬川の分類によるとＡⅠ型に属する。また、３基の配置からタイプとしては、１タイプに近いものとなろう。機能的には、動物の捕獲を目的としたものと考えられる。今回の調査区での配置から、Bc－03を起点する配置はさらに南方へのびることが考えられる。また、Aj－15のすぐ西側に一見孤立したように検出されたAi－15も、これを起点としてさらに南方へのび、Bc－06を起点とするグループと並列する可能性も指摘できよう。

この陥し穴状遺構の時代的な位置づけは、Bc－06ピットとの重複からこれを切って構築されており、また、埋土からわずか２点ではあるが第３群土器に属する土器片を得ていることから、

縄文時代中期前葉以降と考えられる。

2．遺物

（1）土器

本遺跡の調査区から出土した土器について編年的位置を中心にいて記述する。

第1群土器

胎土に繊維を含まない薄手の土器で、細隆起線文、貝殻腹縁文、沈線文、条痕文などが施文されるものである。また、胎土に金雲母を含むものが比較的多く、ただ1点ではあるが平底の破片が得られている。このような特徴を有する類例としては、蛇王洞遺跡第Ⅱ層出土土器、大渡野遺跡第1群土器、早稲田貝塚第3類土器などがあり、ムシリⅠ式土器と極めて近い特徴を有する。しかし、ムシリⅠ式土器そのものの内容、位置づけについては不明な点が多く、編年的には縄文時代早期中葉から後葉に位置づけられるものとしておく。

第2群土器

a類～c類については、胎土に繊維を含む厚手の土器で、表面に太目の原体による0段多条の単節斜縄文、結束第1種の羽状縄文が施文され、裏は無文のものである。底部に近い破片から丸底に近い尖底と推定される。このような特徴を有する類例として、崎山弁天遺跡第1群土器B類、大渡野遺跡第3群a類、第4群a類土器、沢内B遺跡第1群1類B種、長七谷地貝塚Ⅱ－2、Ⅴ－2類土器、第Ⅱ群b類B－1類、第Ⅲ群B類土器などがある。いずれも小破片で出土点数も少ないため明確な時期的位置づけはひかえるが、縄文時代早期末葉から前期初頭に位置づけられると推定される。

d類は、細かな単節斜縄文の施文から縄文時代晩期に位置づけられる可能性が強い。

第3群土器

胎土に小礫を含む多くの粗砂を混入する厚手の土器群である。器形が明確なものは少ないが復元土器によると、口頸部付近で外反し胴部にゆるやかな膨みを有し底部でわずかにすぼまるもの、口頸部付近で外反し円筒形を呈するもの、口縁部が外反し口頸部あるいは胴上部で膨み円筒形の胴下部がつくいわゆる「吹浦タイプ」のものなどがみられる。文様構成は、①口頸部文様帯＋胴部の地文部と②地文部のみの2種類あり、①が多い。①の口頸部文様帯には、a類（沈線文を主体とするもの）とb類（撚糸圧痕文を主体とするもの）があり、胴部の地文部にはb_2類（綾絡文）d_3類（羽状縄文）が多用され、わずかではあるがc_2類（木目状撚糸文）もみられる。また、②には、口縁部にd_1類（折り返し口縁・凹凸口縁）がみられ、d_3類（羽状縄文）、d_4類（無節・単節斜縄文）c_3類（網目状撚糸文）c_2類（木目状撚糸文）c_1類（撚糸文）などが施文される。

①の口頸部文様帯でa類土器とb類土器には時期的な差はないものと考えられる。なぜなら沈線文と撚糸圧痕文とを置き換えた場合、ほとんど文様構成に変化はみられないからである。たしかに全てを置き換えることは不可能かもしれないが、それは沈線文の持つ自由に由来することであって、時期的な差からくるものではないと思われる。ことに本遺跡は雫石町に所在しいわゆる大木式土器文化圏と円筒式土器文化圏の接点に位置することから、両文化を主体的に融合させた独自の文化を形成していたものと推定される。それは、①の口頸部文様帯についてだけではなく、2号住居址から出土した復元土器にも色濃く反映されていることからも推定できる。本群と同様の様相を示す類例として、大館町遺跡第Ⅱ群8～11類、第Ⅲ群土器、天神ケ丘遺跡第4群2類、第6群土器などがある。縄文時代前期末葉から中期前葉に位置づけられるものと思われる。

第4群土器

胎土に細砂を含み焼成のよい土器群で、曲線状の沈線や隆起線で区画しその内部に磨消を行なうもの、連鎖状隆線で加飾するもの、曲線状の沈線だけで施文するものなどがみられる。このような特徴を有する類例としては、門前貝塚第Ⅰ群2類、第Ⅱ群2～3類土器、崎山弁天遺跡第Ⅳ群第1類、3類土器などがある。縄文時代中期末葉（大木10式併行）から後期前葉（後・門前式、堀之内Ⅰ式併行）に位置づけられるものと思われる。

（2）石器

本遺跡の調査区から出土した石器は、下記のようになる。

石鏃　7点	石錐　3点	石匙　9点	篦状石器・打製石斧　68点
スクレイパー　28点	不定形石器　26点	刃器　6点	折断痕ある石器　3点
磨製石斧　4点	環状石斧　2点	有孔石器　2点	石錘　7点
石棒　3点	半円状扁平打製石器　26点		凹石　9点
磨石　29点	石皿　5点	有孔礫　1点	

この中で特徴的なものについて触れると、まず出土点数が非常に多い篦状石器・打製石斧がある。従来の名称による区別が困難だったため、一括して掲載しその分類によってできれば明確なちがいを探ろうとしたが、結果的には主に筆者の浅学と時間的な制約からそれが果たせなかった。分類にあたって縦断面形を重視し、これに刃部形態や形状を加味したが、まだ多くの本石器群と関わる構成要素があり、これを使い切れなかった。ただ本遺跡の場合、A類（全くの片刃あるいは片刃に近いもの）とB類（片刃であるが両刃に近いもの）にはやはり機能的な異なりがあるのではないかと考えられる。A類にはトランシェ様石器（直刃斧）を含めて掻器的機能が強くうかがわれ、B類には全く打製石斧としてよいものもあり打製石斧的機能がうか

がわれた。しかし、これは刃部を全て下端部と認定した場合であり、A類の中にも全く石質の異なる41は打製石斧となる可能性があり、一概にいえない面がある。一般に篦状石器と打製石斧を良好に出土する遺跡では、石質のちがいによって使いわけがあるようであり、今後これらの明確なちがいを探ってゆかなければならないと考える。石器に与えられた名称は、主にその形状からつけられる場合が多くその機能や属性を正しく表わさないという指摘がたびたび行なわれてきた。また、本群の石器は東北地方北部に出土例が多いという地域的な偏よりがあるためか、等閑視されてきた傾向があるように思われる。最近、これを克服しようとする報告が行なわれてきており（大館町遺跡、東裏遺跡、大渡野遺跡）、資料の蓄積が待たれる。

刃器として分類した石器群は、以前広瀬Ⅱ遺跡で「大型粗製刃器」と仮称して若干の報告を行なったが、本遺跡の調査区から出土したものとはその使用において異なるようである。広瀬Ⅱ遺跡の刃器は、刃部の裏面に主に縦方向の擦痕がみられ、中にはトロトロの使用痕がみられるものがあったが、本群の石器にはそれがみられず、刃部に細かな破砕痕が観察された。対象物を敲き切るあるいは打ち割る機能が想定される。この種の石器群は、旧石器時代から縄文時代全般にわたって継続して使用されたものと思われ、最近の報告例では東裏遺跡や大渡野遺跡がある。本遺跡出土の刃器は、東裏遺跡の片刃石器、両刃石器に近い。

折断痕ある石器としたものは、明確に意図的な折断痕が観察されたもので、ある機能を想定して製作されたものであろう。折断面に二次加工は施されていないが、折断調整石器としてよいものと思われる。

半円状扁平打製石器は、主に円筒式土器に伴うとされさまざまな論考が加えられてきた。本石器の主要な使用面は直状部と考え、直状部の状況により三類に分けた。敲打と磨る機能が考えられる。a類～c類のちがいは、両機能の使用頻度のちがいであろう。弧状部の敲打痕は主に整形痕と思われる。また、これには表裏両面に敲打による凹みや明確な磨面が形成されるものもあり全面的に使われたものもある。

環状石斧は、縄文時代早期から出土例がある。本遺跡から出土しているものはいずれも欠損品で、残存部に使用痕がみられる。類例として大館町遺跡、桜松遺跡、大渡野遺跡がある。

（3）土偶

全て破損品で5点出土している。板状土偶の形態を有する。このうち3号住居址から出土した胴部破片と遺構外から出土した194、195は、胎土、施文から同一個体と考えられる。土偶の廃棄の一資料となろう。これらの土偶は、板状を呈し足部に股の表現があること、第3群土器と同様の施文（沈線＋刺突）であり伴出することから、縄文時代前期末葉から中期前葉にかけて作られたものである。

以上、本遺跡の調査区から出土した遺構、遺物について記述したわけであるが、調査区が遺跡北部の末端部分に相当し、遺跡の大部分は保存されることになった。今回の調査で縄文時代前期末葉から中期前葉にかけて、中期末葉から後期前葉にかけての遺構の存在が明らかになり、また縄文時代早期中葉から前期前葉、晩期の遺構の存在する可能性もあることから、遺跡の保存については十分に留意したいものと思う。

なお、屋外調査及び本報告書作成のための実測図整理、遺物実測、図版トレース、などに下記の方々から御協力頂いた。未筆であるが記名して感謝の意を表したい。

（屋外調査）

川崎富治・川口甚一・佐々木武・田屋館徳次郎・長瀬重雄・広瀬一郎・小笠原ミサオ
川崎キツ・佐々木キミ・佐々木美耶子・高橋テル・長沢トメ・長瀬キヌ・沼田イナ
細川幸子・細川フジエ・谷地節子

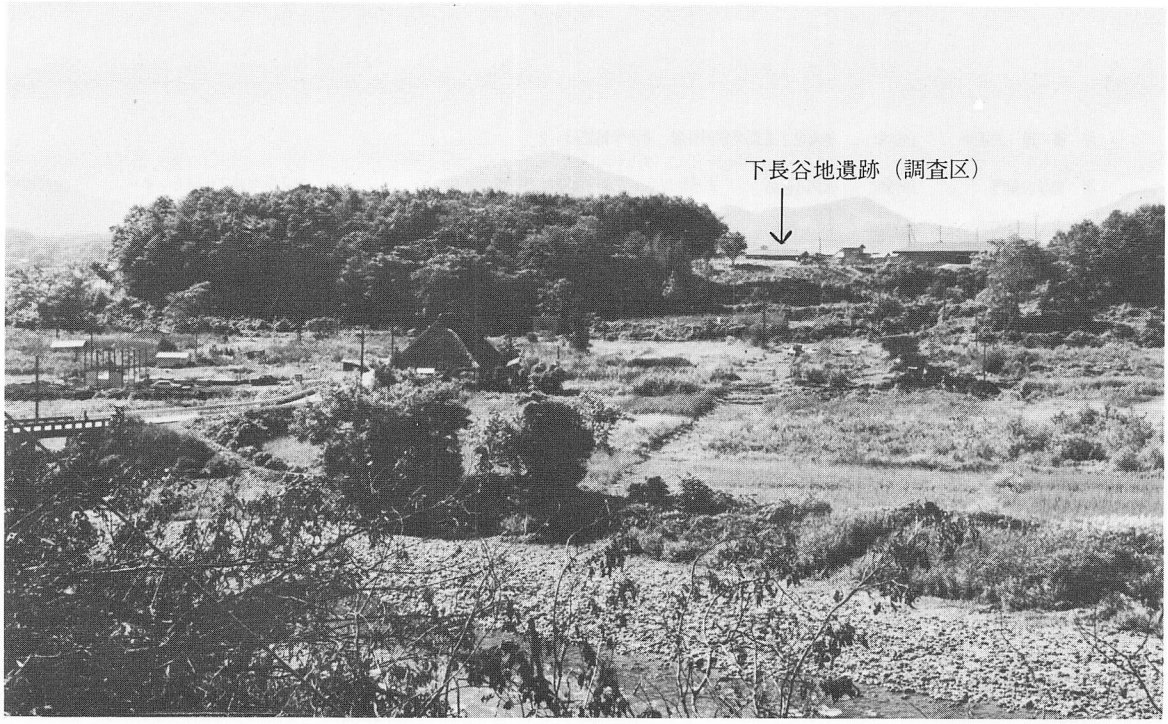
（室内整理）

佐々木トキ・佐々木マキ子・高橋和子・藤沢成子・藤平良子・藤平ヨシノ・藤村正江
女鹿麗子

参考文献

山内清男 甲野勇編 江坂輝弥	1964年	縄文式土器　日本の原始美術Ⅰ	講談社
永峯光一編	1981年	中期　縄文土器大成2	同上
林謙作	1965年	縄文文化の発展と地域性　2．東北　日本の考古学　Ⅱ．縄文時代	河出書房新社
岡本勇 戸沢充則	1965年	同上　3．関東　同上	同上
山内清男	1979年	日本先史土器の縄文	先史考古学会
加藤晋平 鶴丸俊明	1980年	石器の基礎知識Ⅰ　先土器(上)	柏書房
鈴木道之助	1981年	同上　縄文	同上
四井謙吉	1980年	荒屋Ⅱ遺跡　岩手県埋文センター文化財報告書第21集	(財)岩手県埋蔵文化財センター
武田将男ほか	1978年	大館町遺跡	岩手大学考古学研究会
昆野靖ほか	1980年	北館・伝大手門遺跡　岩手県文化財調査報告書第54集	岩手県教育委員会
相原康二	1979年	大渡野遺跡　同上　第32集	同上
同上	1981年	東裏遺跡　同上　第55集	同上
草間俊一 鈴鹿良一ほか 玉川一郎 芹沢長介	1974年	崎山弁天遺跡	岩手県大槌町教育委員会
林謙作	1965年	岩手県蛇王洞洞穴　石器時代第7号	

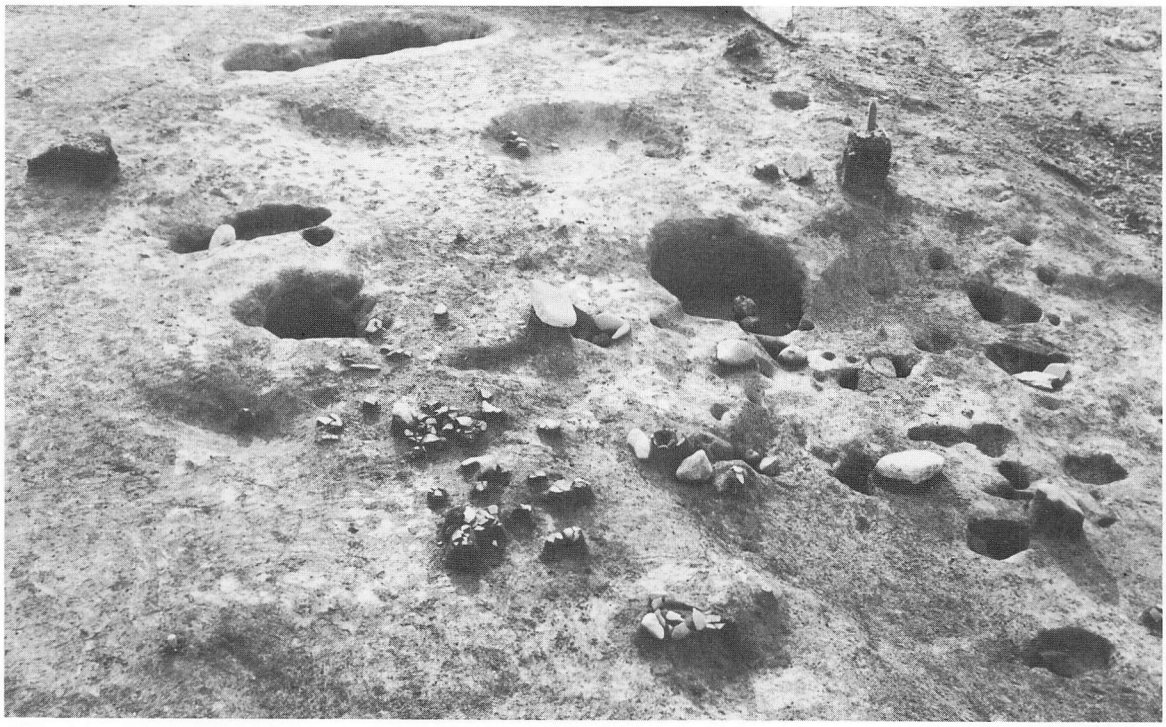
佐藤達夫ほか	1958年	青森県上北郡早稲田貝塚　考古学雑誌43－2		
高橋与右衛門	1979年	沢内B遺跡　岩手県埋文センター文化財調査報告書第7集		岩手県埋蔵文化財センター
及川洵 遠藤勝博	1974年	門前貝塚		岩手県陸前高田市教育委員会
草間俊一ほか 相原康二	1974年	天神カ丘遺跡		岩手県大槌町教育委員会
富樫泰時	1976年	トランシェ様石器について　東北考古学の諸問題		東北考古学会
村越潔	1976年	円筒土器に伴う特殊な石器　同　上		同　上
岡村道雄	1979年	縄文時代石器の基礎的研究法と.その具体例　研究紀要第5巻		東北歴史資料館
八幡一郎	1935年	奥羽地方発見の篦状石器　人類学雑誌50巻5号		
瀬川司男	1981年	陥し穴状遺構について　紀要Ⅰ		(財) 岩手県埋蔵文化財センター
鈴木克彦ほか 大湯卓二	1980年	長七谷地貝塚　青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第57集		青森県教育委員会
相馬信吉 小笠原善範	1981年	新納屋遺跡（2）　同　上　第62集		同　上
草間俊一 伊藤鉄夫 高橋文夫 佐藤勝	1965年	水沢の原始・古代遺跡		水沢市教育委員会
佐々木清文 高橋文夫 佐藤勝	1980年	松尾村長者屋敷遺跡（Ⅰ）遺構編（Ⅰ）　岩手県埋文センター文化財調査報告書第12集		(財) 岩手県埋蔵文化財センター
	1981年	同　上　遺構編（Ⅱ）　同　上　第20集		同　上
鈴木孝志	1960年	岩手県岩手郡松尾村水切場遺跡調査概報　上代文化第28輯		
本堂寿一	1980年	岩手県に於ける北上川流域の土偶　1980年秋の特別展図録		北上市立博物館
工藤利幸	1980年	南の又遺跡　岩手県埋文センター文化財調査報告書第13集		(財) 岩手県埋蔵文化財センター
松野恒夫	1980年	広瀬Ⅱ遺跡　同　上		同　上



a．遺跡遠景

b．調査風景

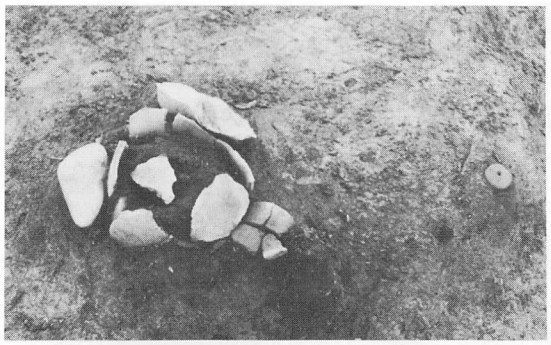
写真図版 1



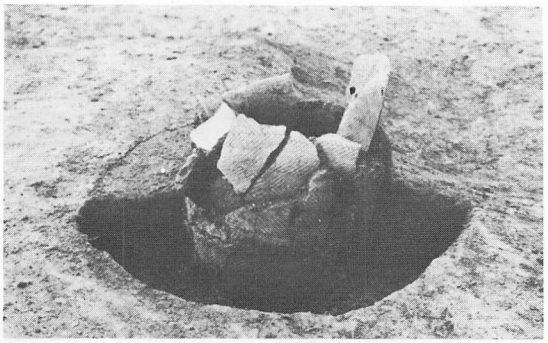
a．1号・2号住居址遺物出土状況

b．1号・2号住居址

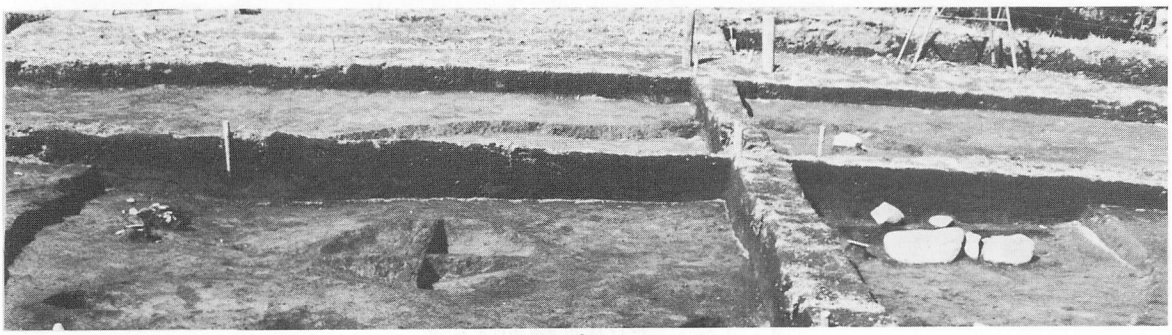
写真図版 2



a．2号住居址埋設土器・有孔石器出土状況



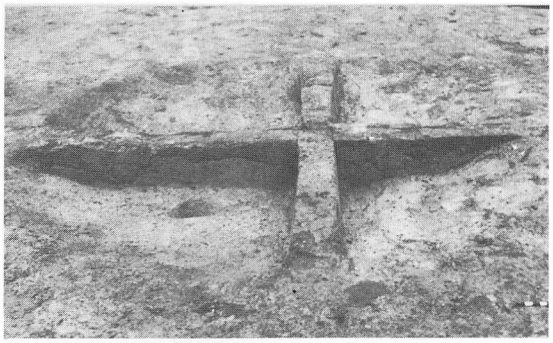
b．2号住居址埋設土器（断面）



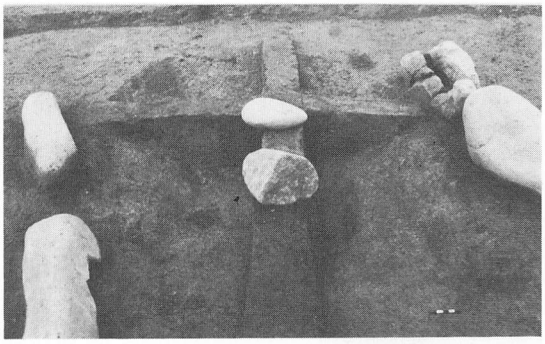
c．3号住居址（土層断面）

d．3号住居址

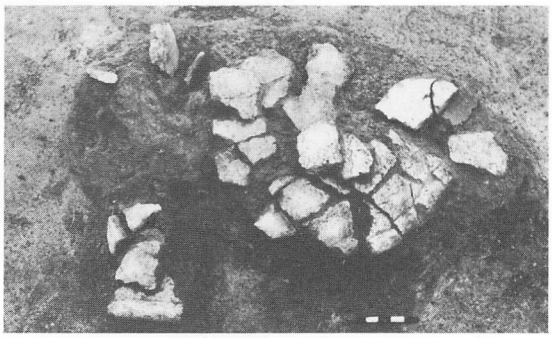
写真図版 3



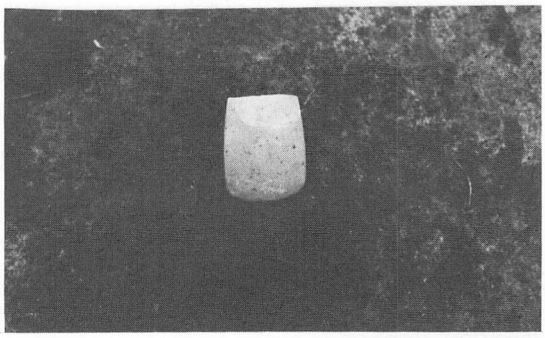
a．３号住居址１号炉（断面）



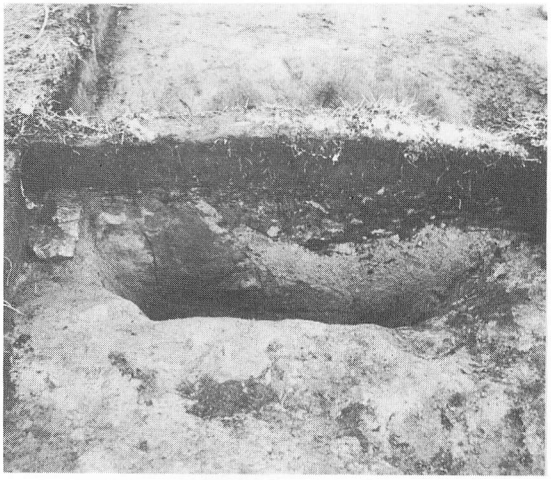
b．３号住居址２号炉（断面）



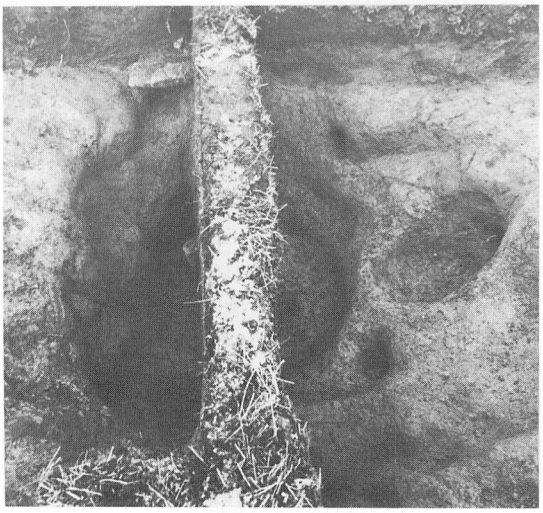
c．３号住居址（土器出土状況）



d．３号住居址（磨製石斧出土状況）

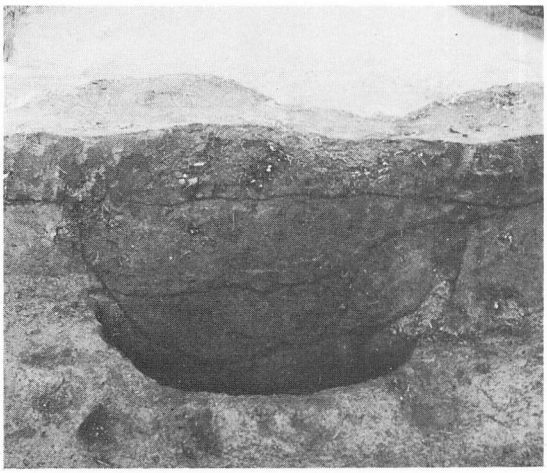


e．Bb-12ピット　（断面）

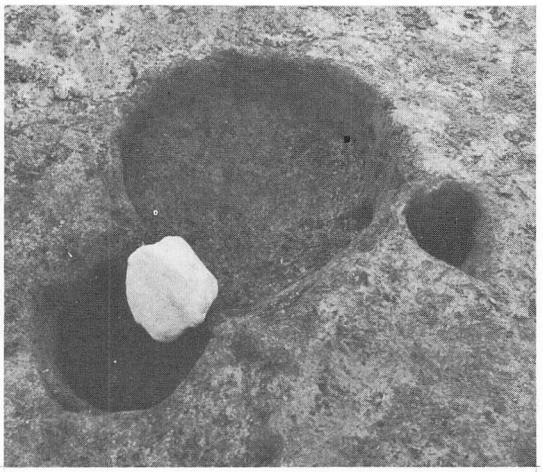


f．Bb-12ピット

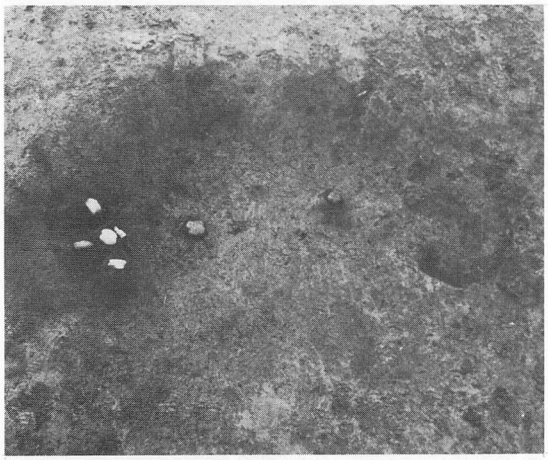
写真図版４



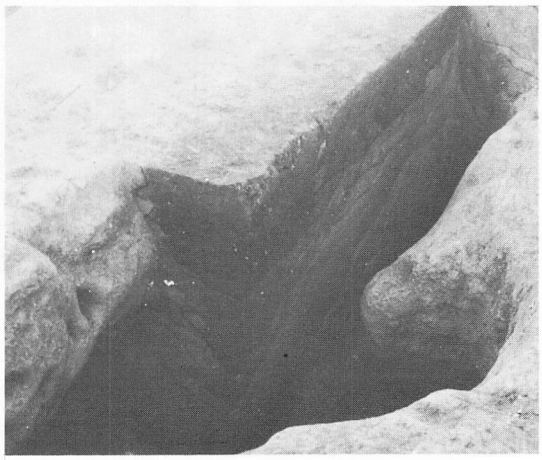
a. Be-06ピットⅠ（断面）



b. Be-06ピットⅠ

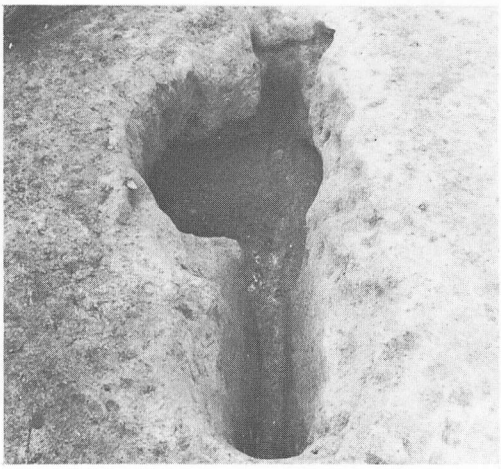


c. Bd-03ピット（石器出土状況）



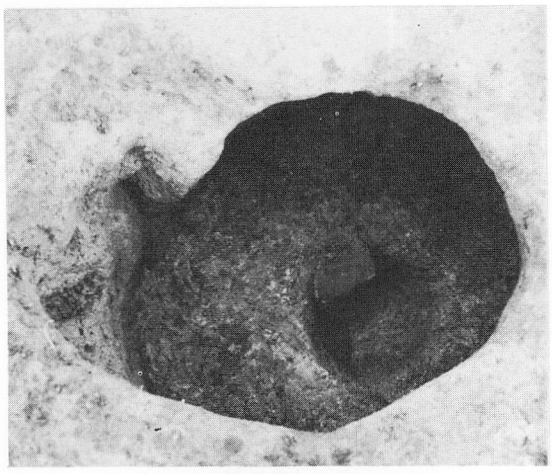
d. Bc-06ピット・陥し穴状遺構（断面）

e. Bc-06ピット・陥し穴状遺構（断面）

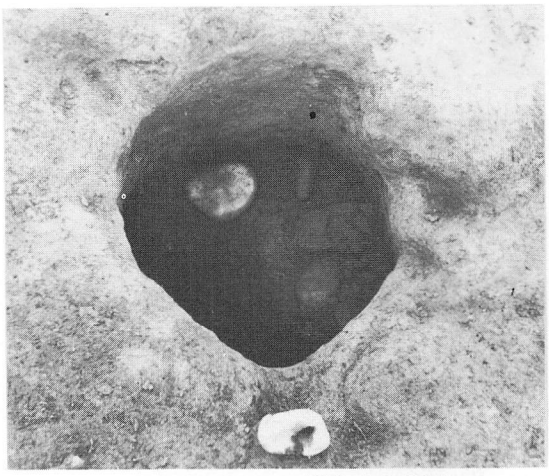


f. Bc-06ピット・陥し穴状遺構

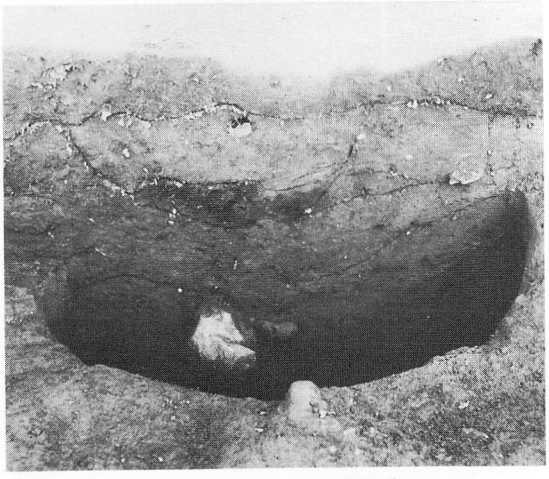
写真図版 5



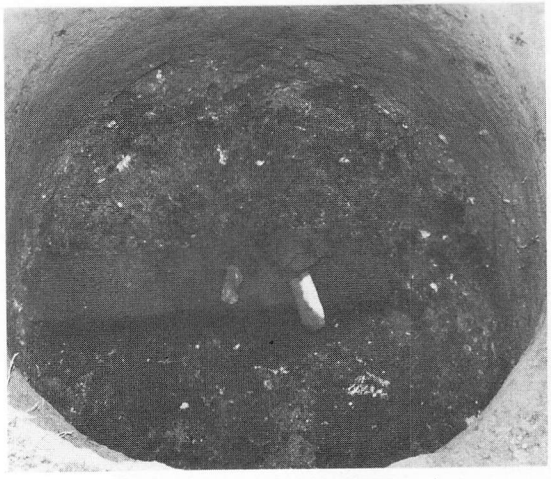
a．Bd-09ピット（土器出土状況）



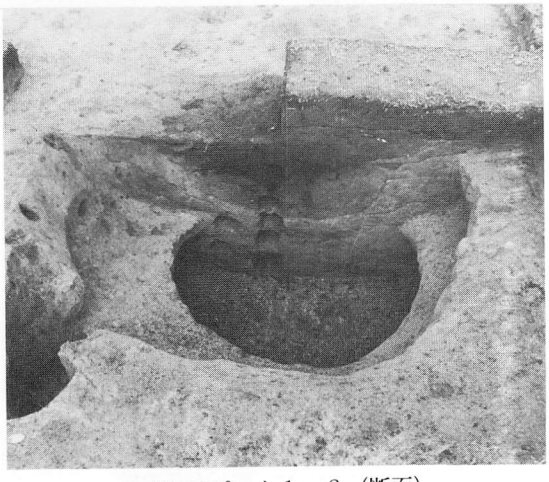
b．Be-06ピットⅡ（遺物出土状況）



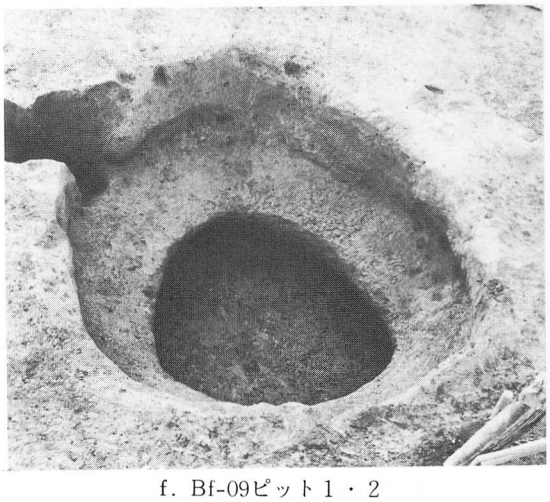
c．Be-03ピット（断面）



d．Be-03ピット（土器出土状況）

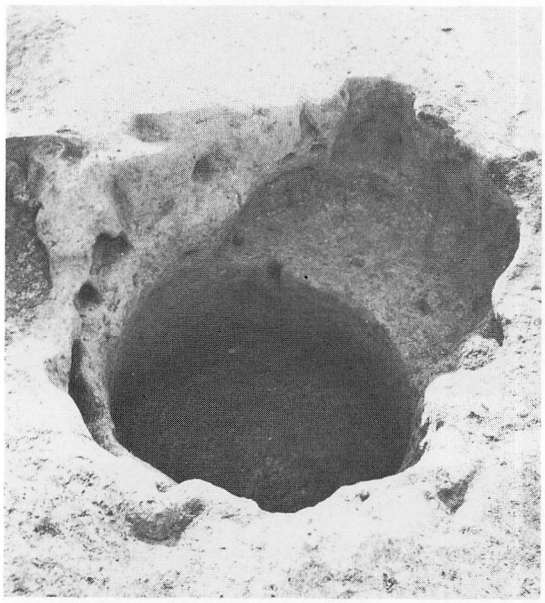


e．Bf-09ピット１・２（断面）

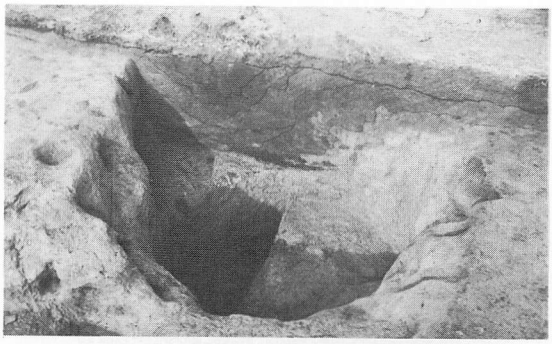


f．Bf-09ピット１・２

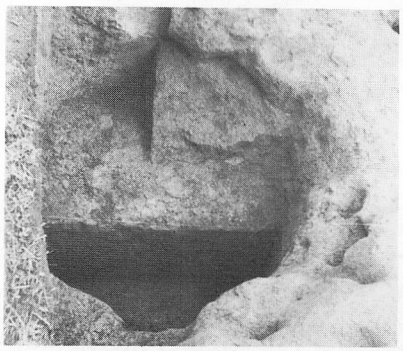
写真図版６



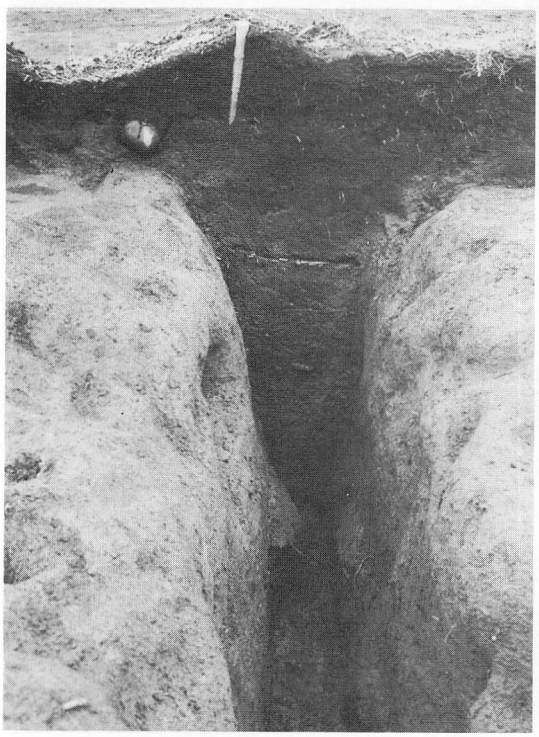
a. Bf-12ピット１・２



b. Bf-12ピット１（断面）



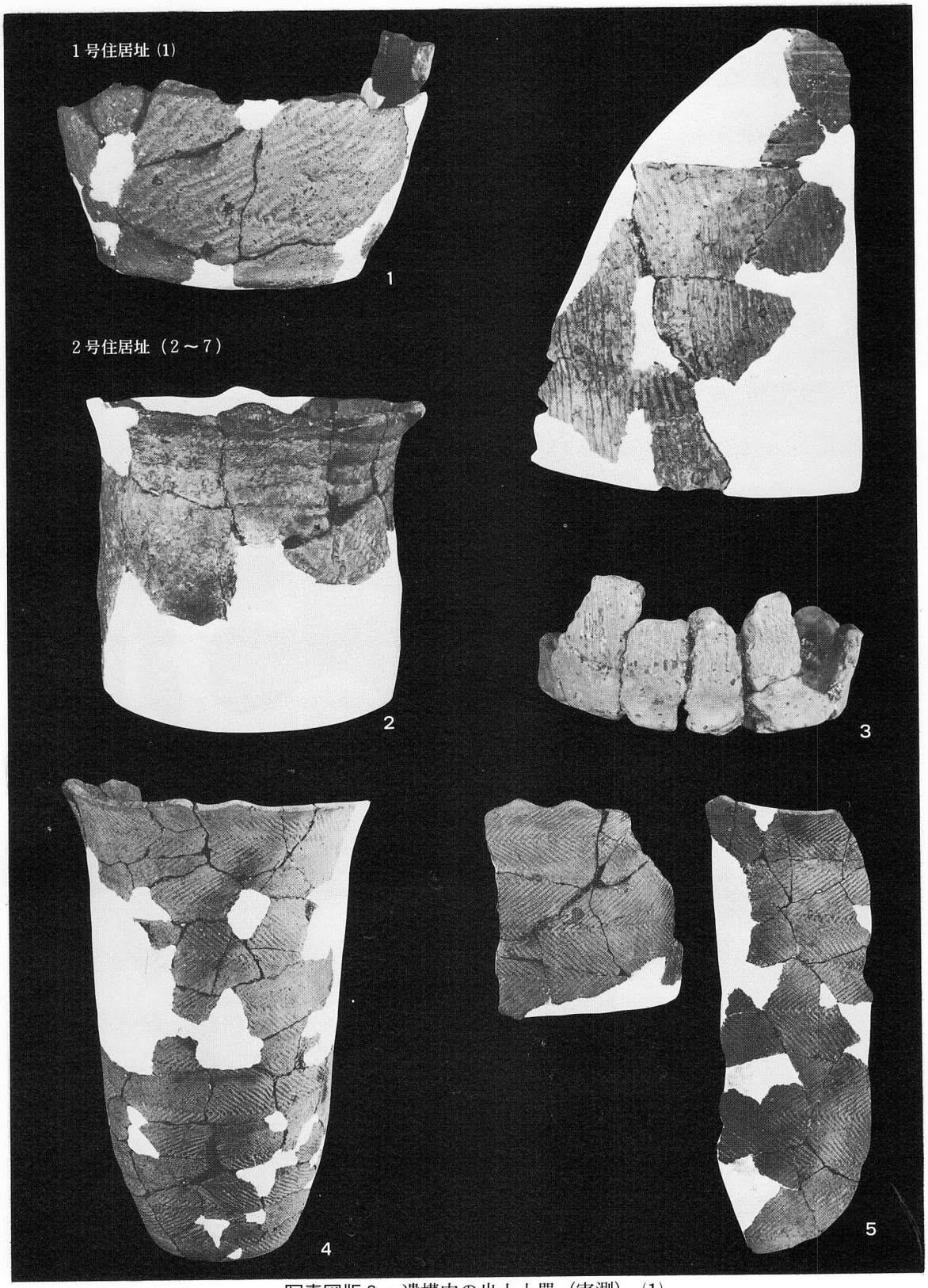
c. Bf-12ピット２（断面）



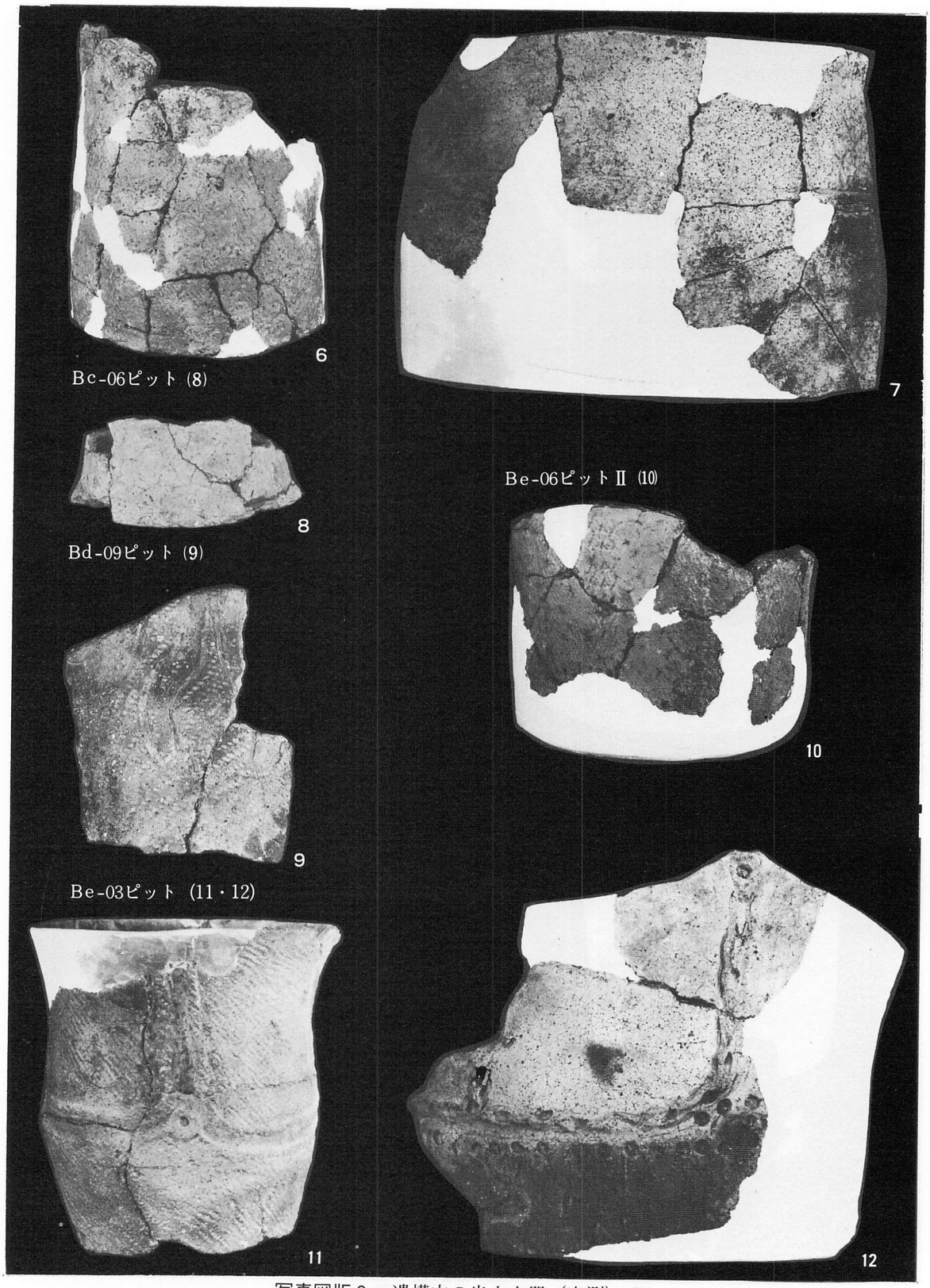
d. Bb-09陥し穴状遺構（断面）

e. Ai-15・Aj-15　陥し穴状遺構

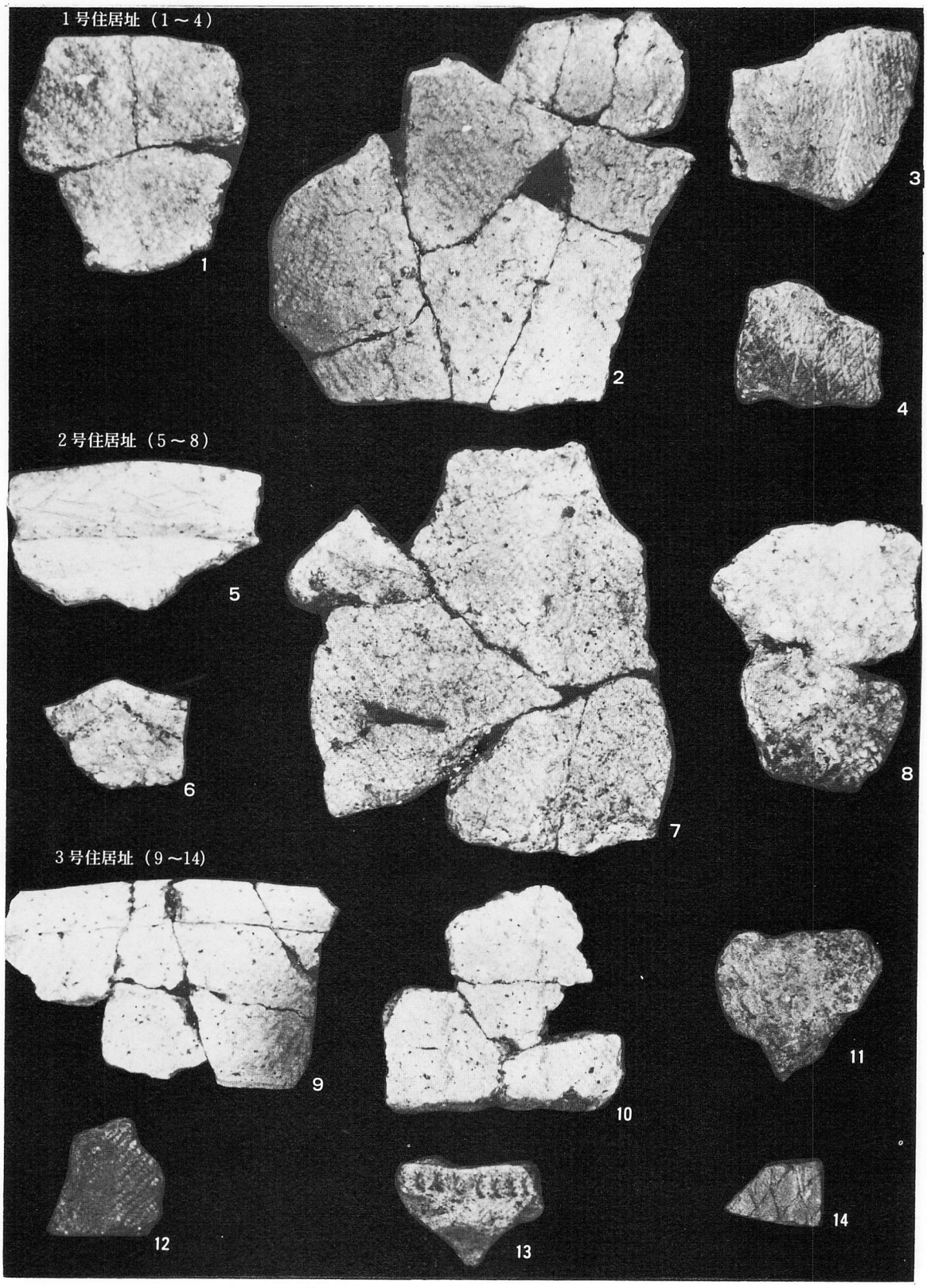
写真図版７



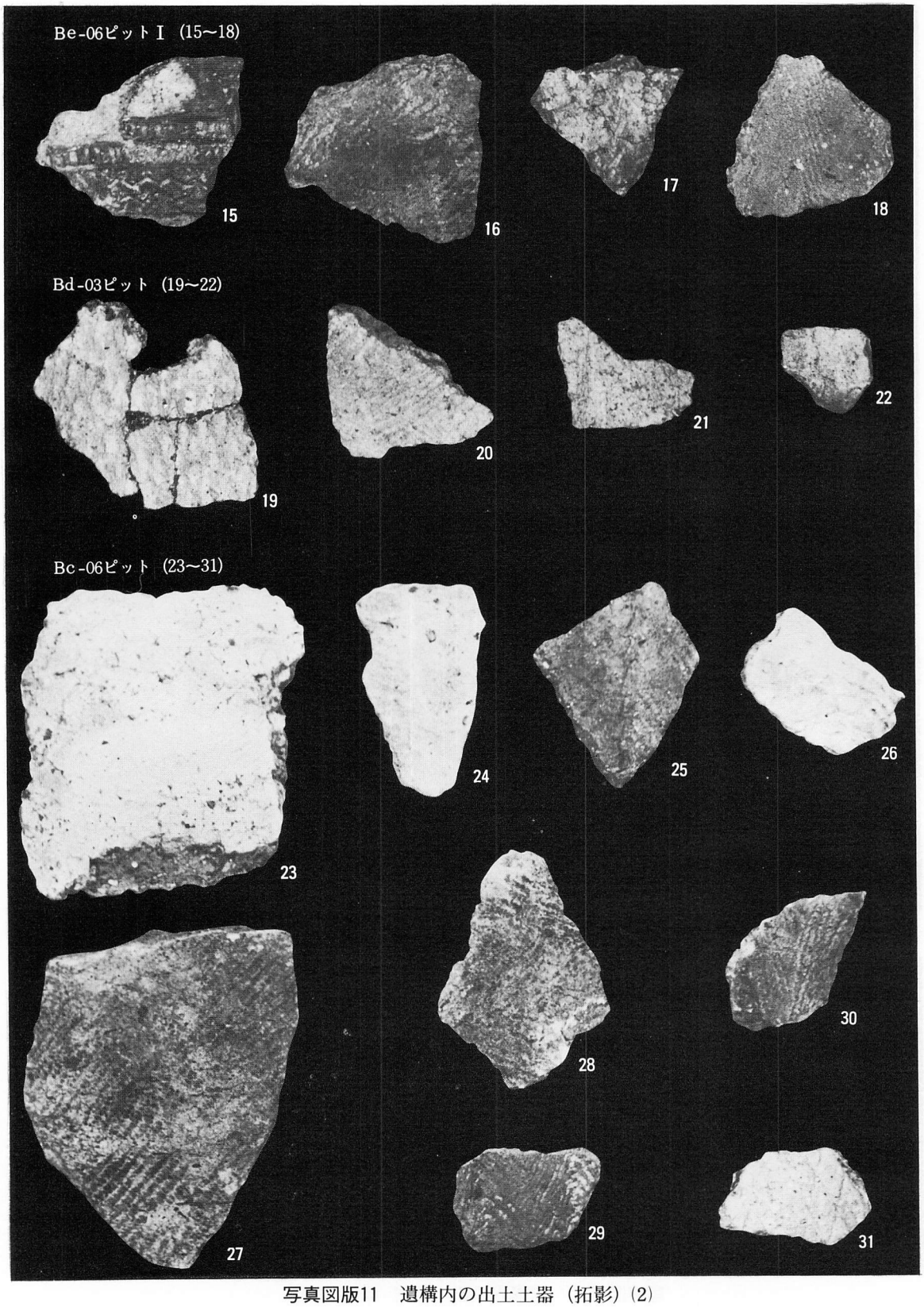
写真図版８　遺構内の出土土器（実測）（1）



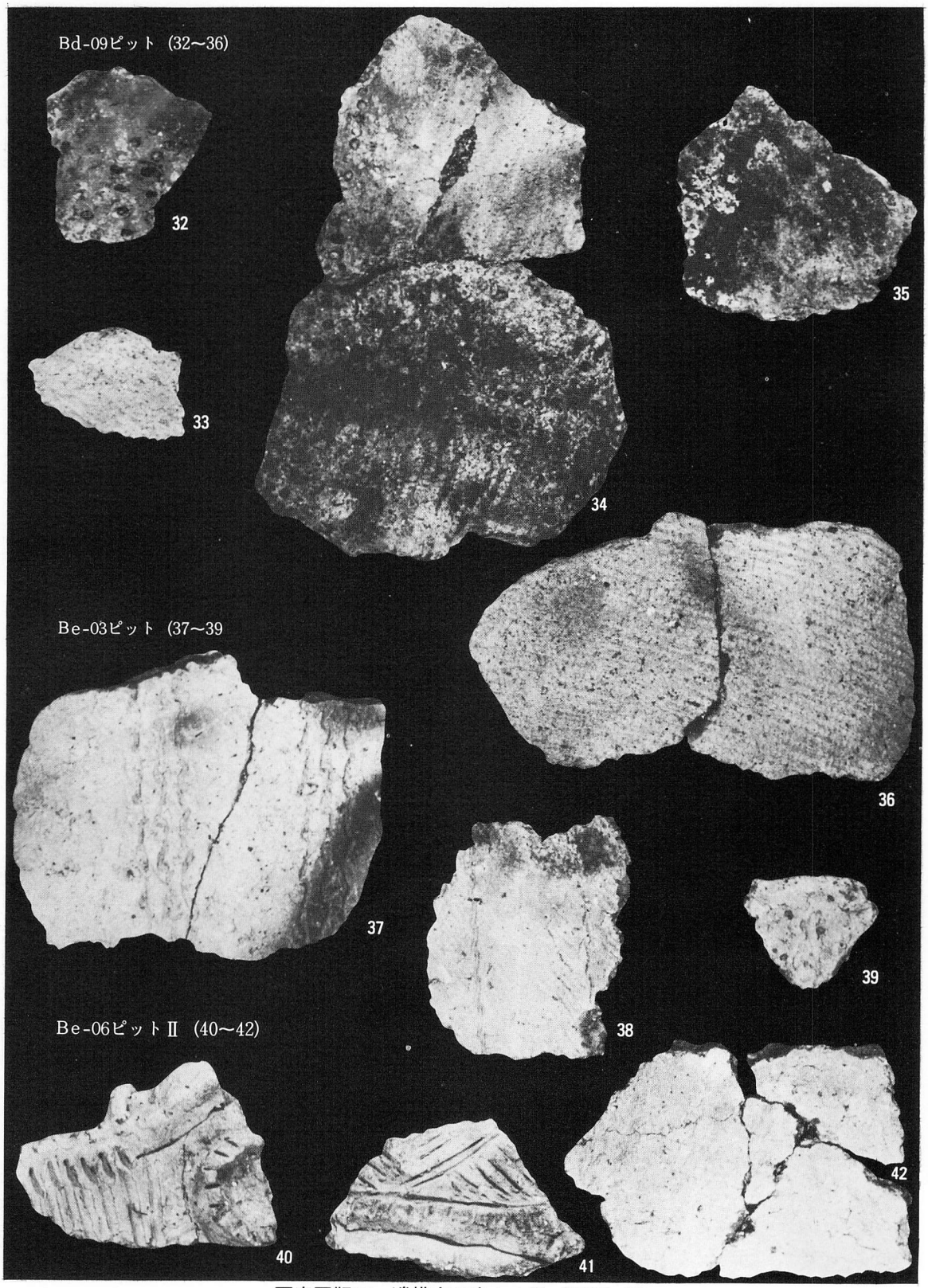
写真図版９　遺構内の出土土器（実測）（2）



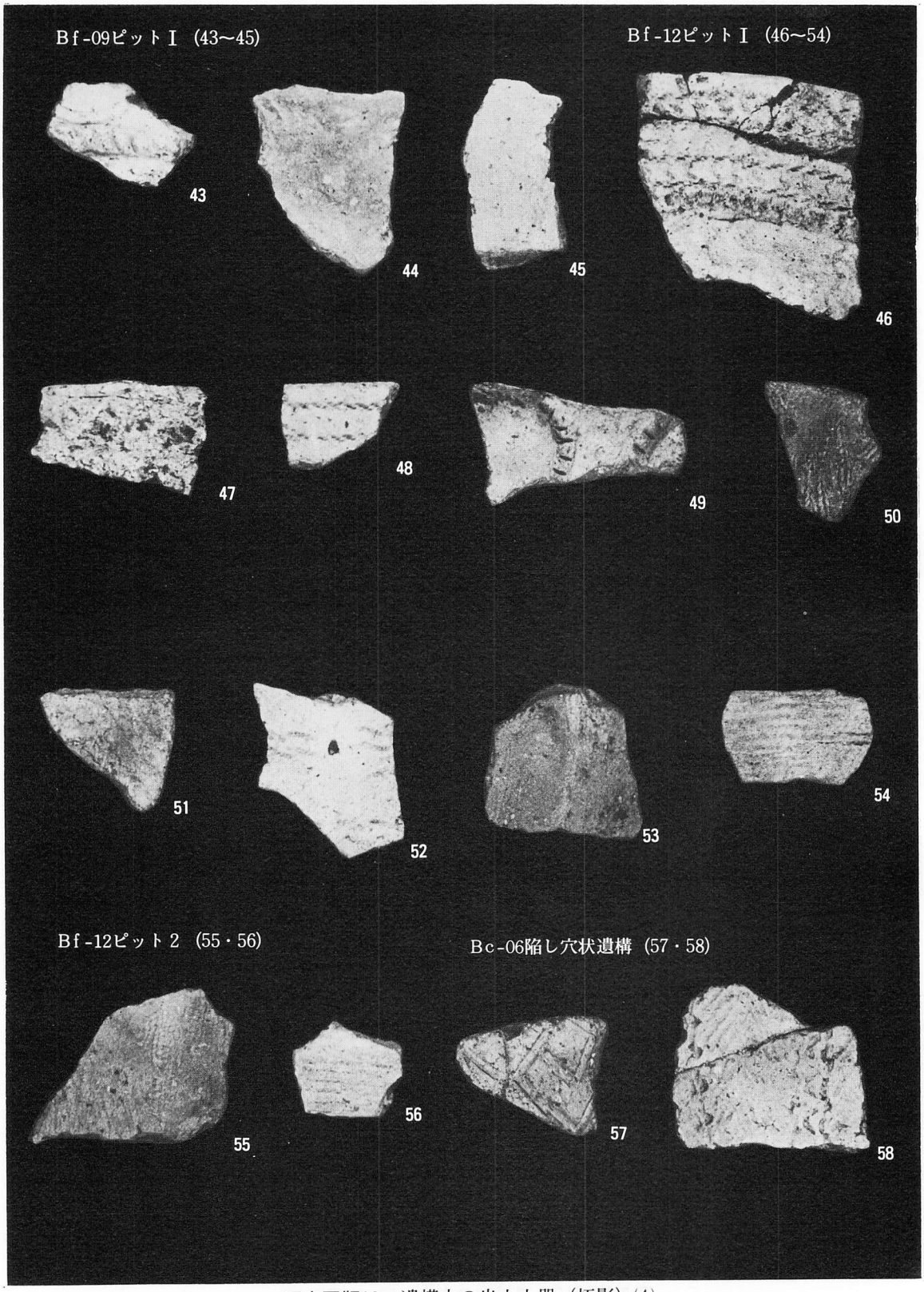
写真図版10　遺構内の出土土器（拓影）(1)



写真図版11　遺構内の出土土器（拓影）(2)



写真図版12　遺構内の出土土器（拓影）(3)



写真図版13　遺構内の出土土器（拓影）(4)

1号住居址（1～3）

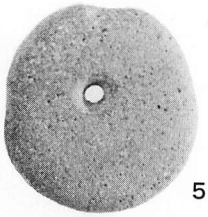
1

2

3

2号住居址（4～8）

4


5

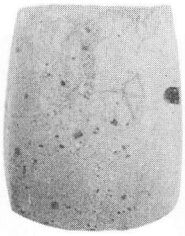
6

7

8

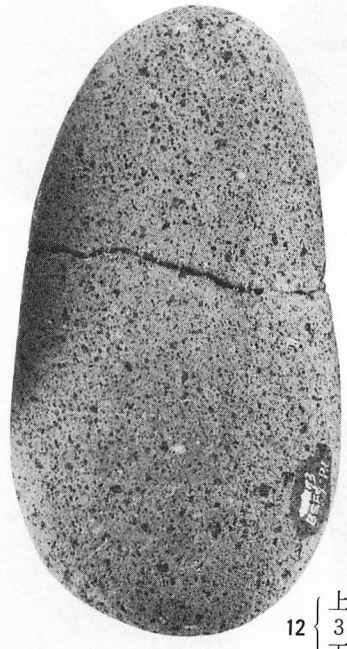
3号住居址（9～14）

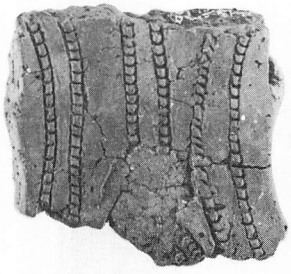
9

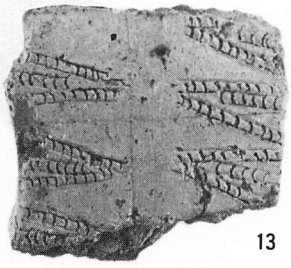

10

11

写真図版14　遺構内の出土石器（1）



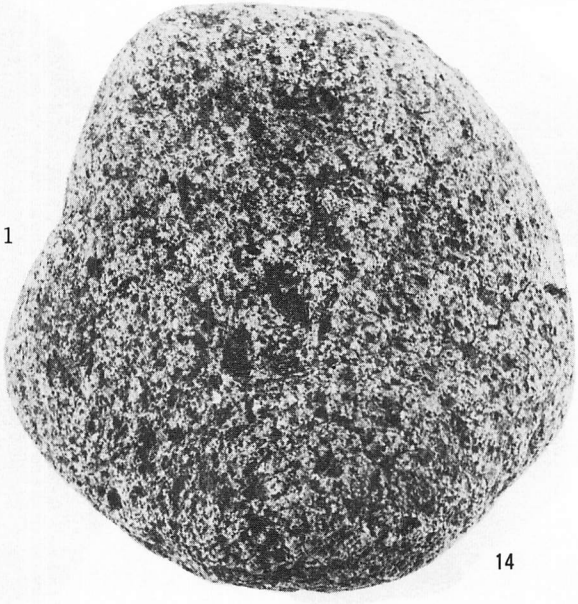




13

12 { 上部
3号住居址
下部

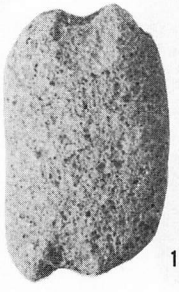
Bf-09ピット1



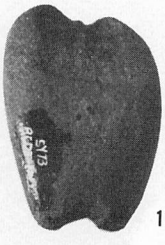
14

Bd-03ピット (15〜21)

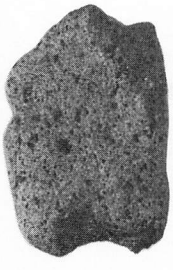
15



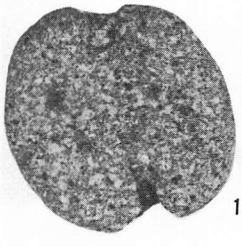
16



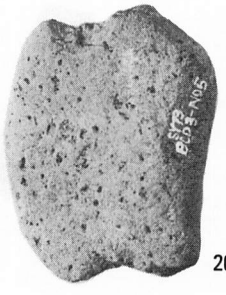
17



18



19

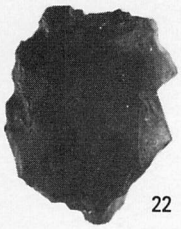


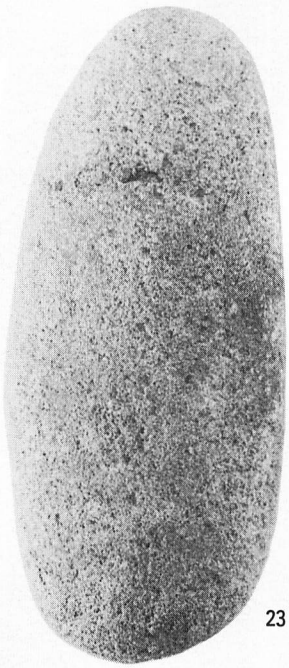
20

写真図版15　遺構内の出土石器・土偶 (2)

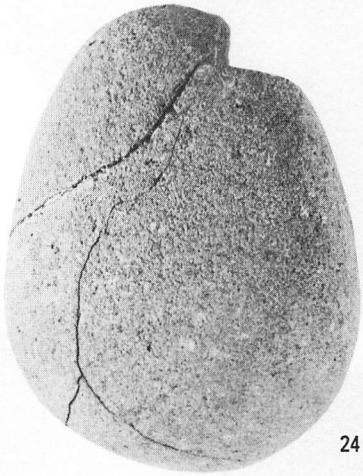
21

Be-03ピット (22・23)


22

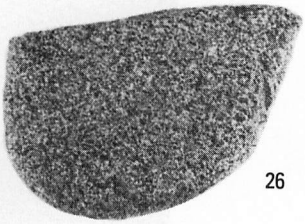

23

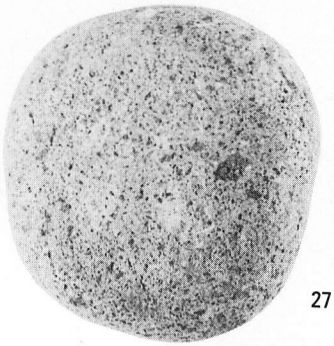
Be-06ピットⅡ (24・25)

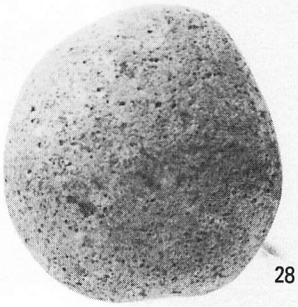

24

25

Bf-12ピット1 (26〜28)


26


27

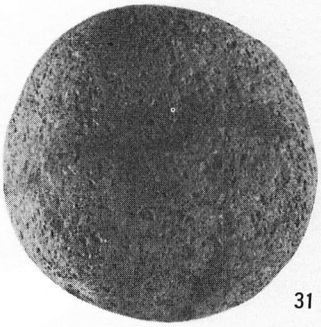

28

Bc-06陥し穴状遺構 (31)

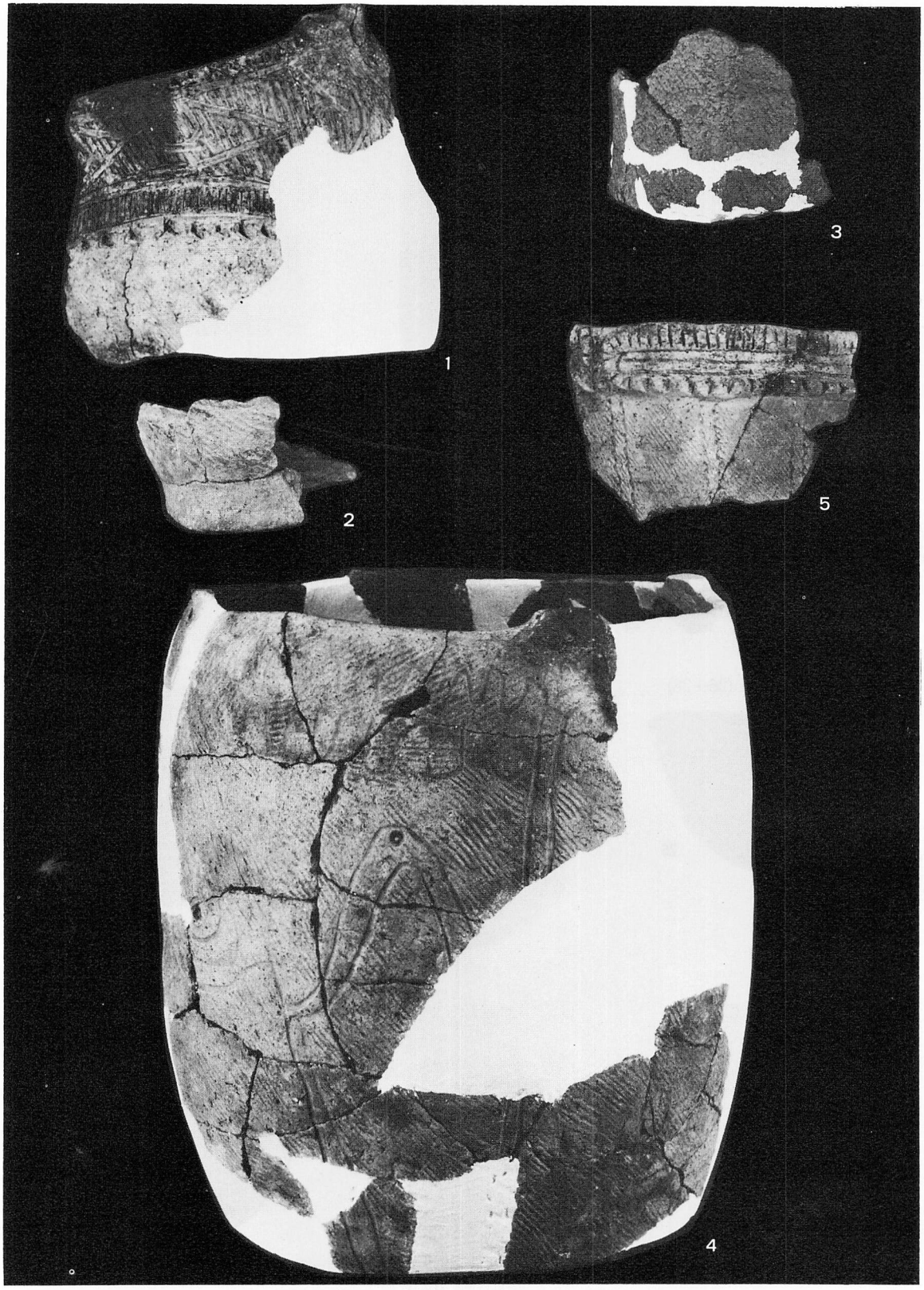
Bf-12ピット2 (29・30)

29

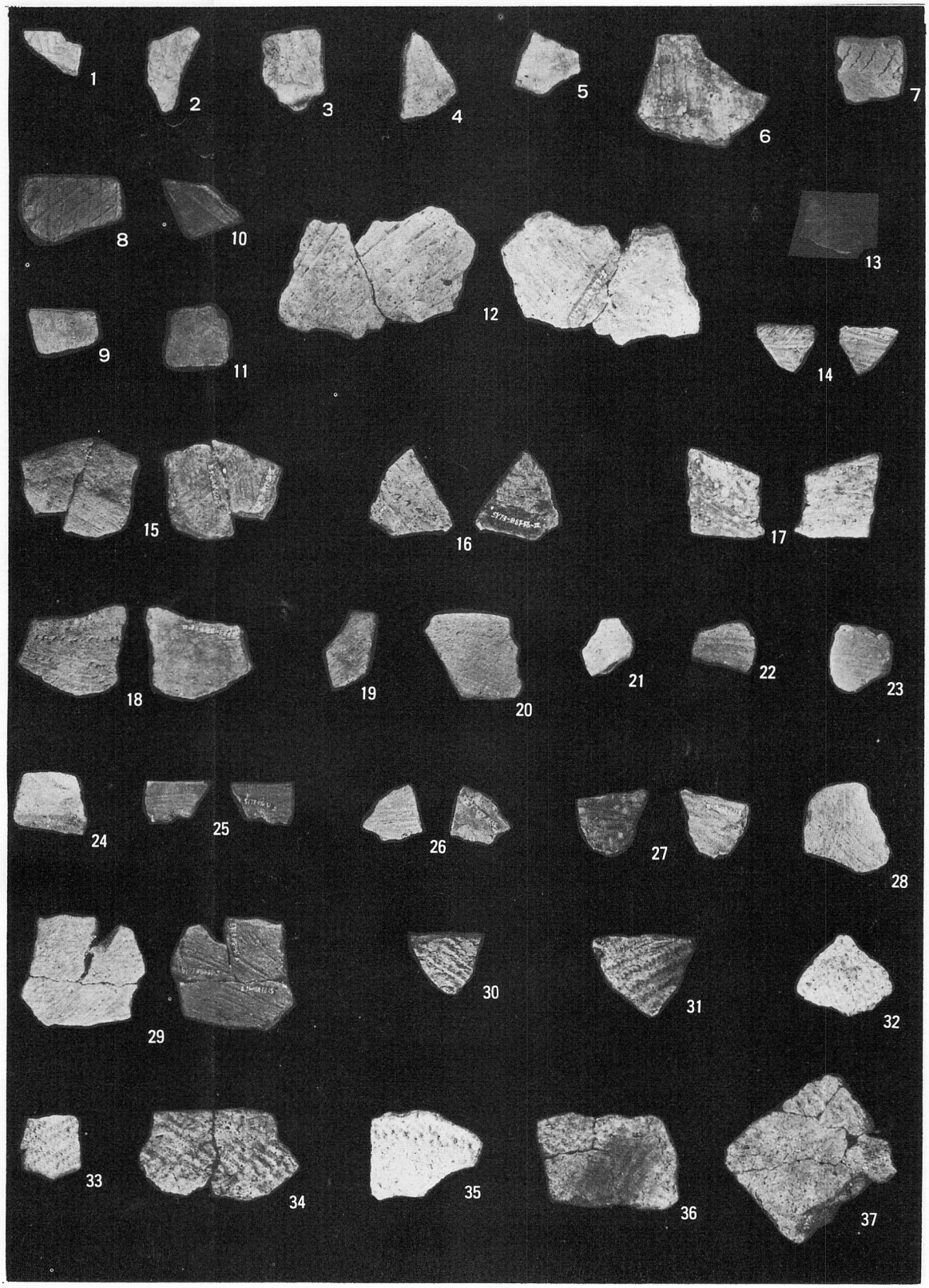
30


31

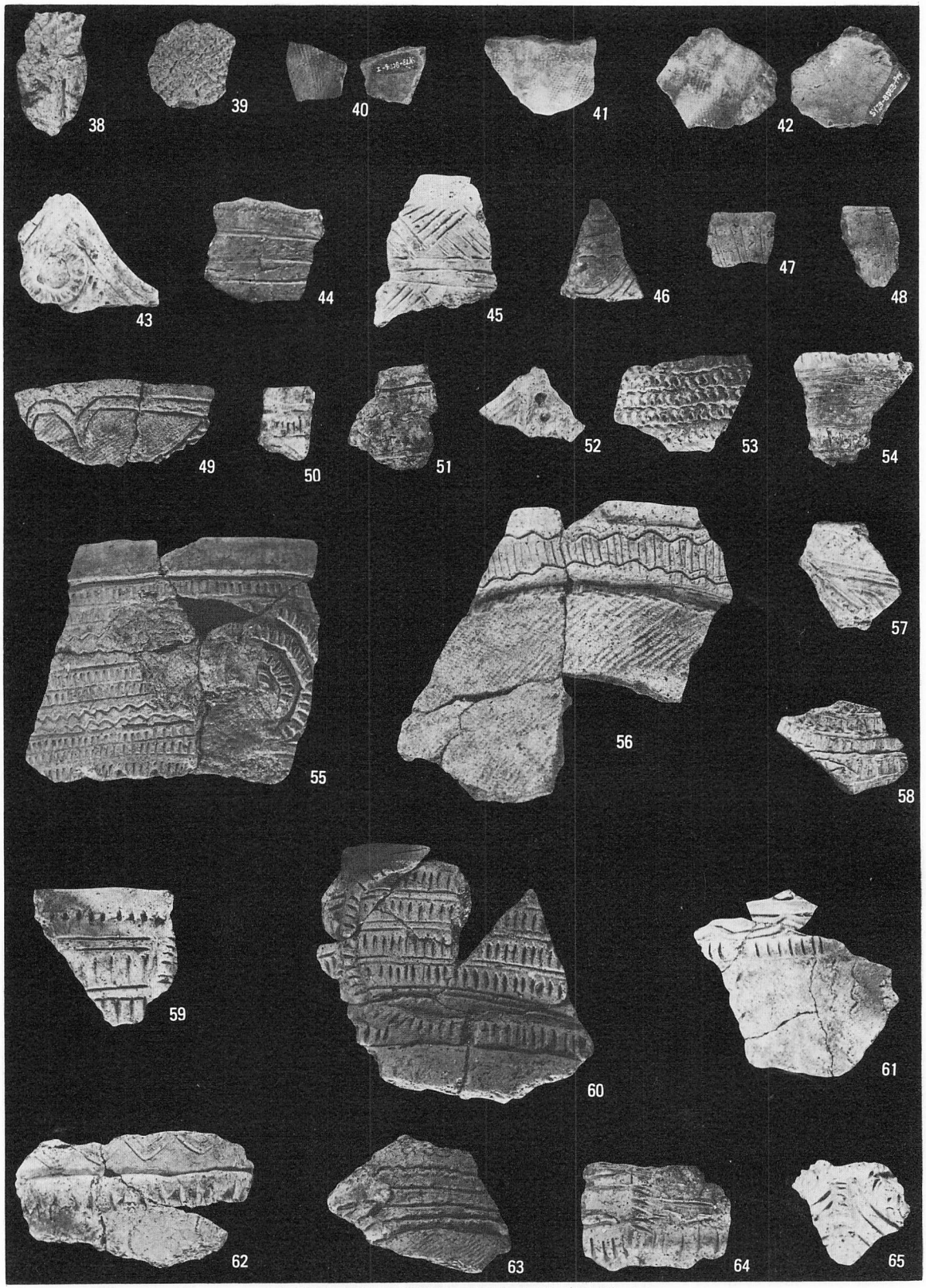
写真図版16　遺構内の出土石器・土偶 (3)



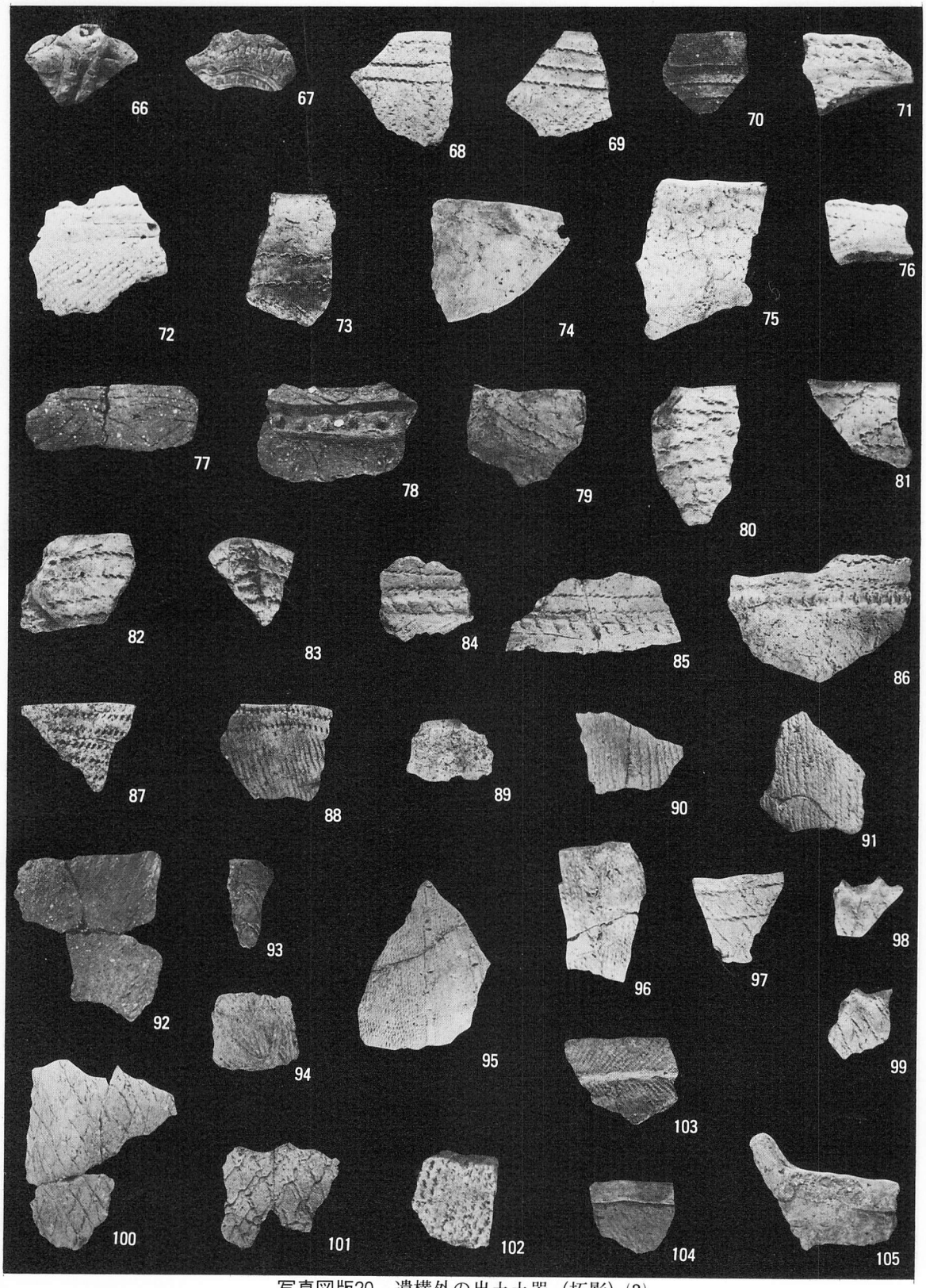
写真図版17　遺構外の出土土器（実測）



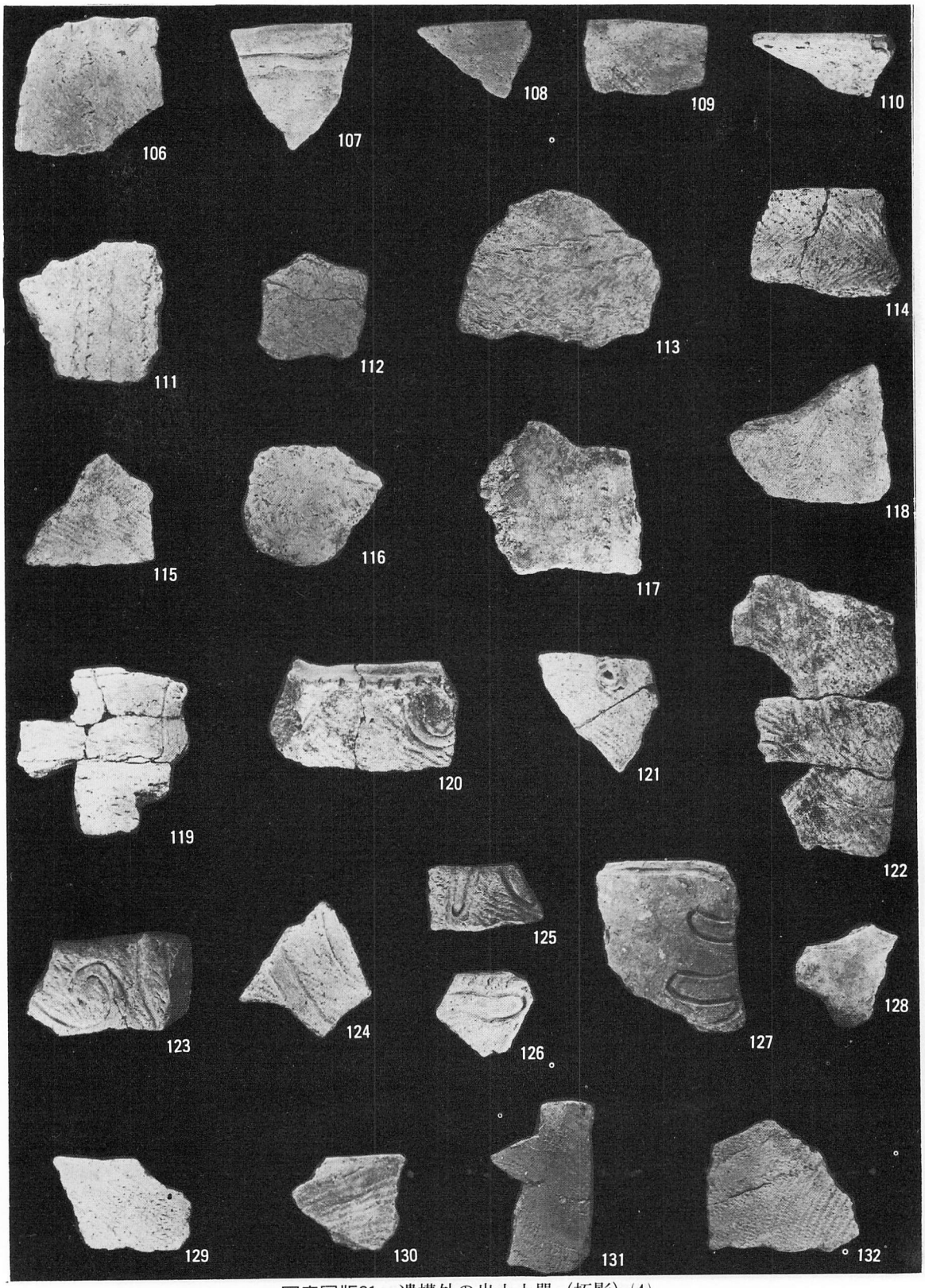
写真図版18　遺構外の出土土器（拓影）(1)



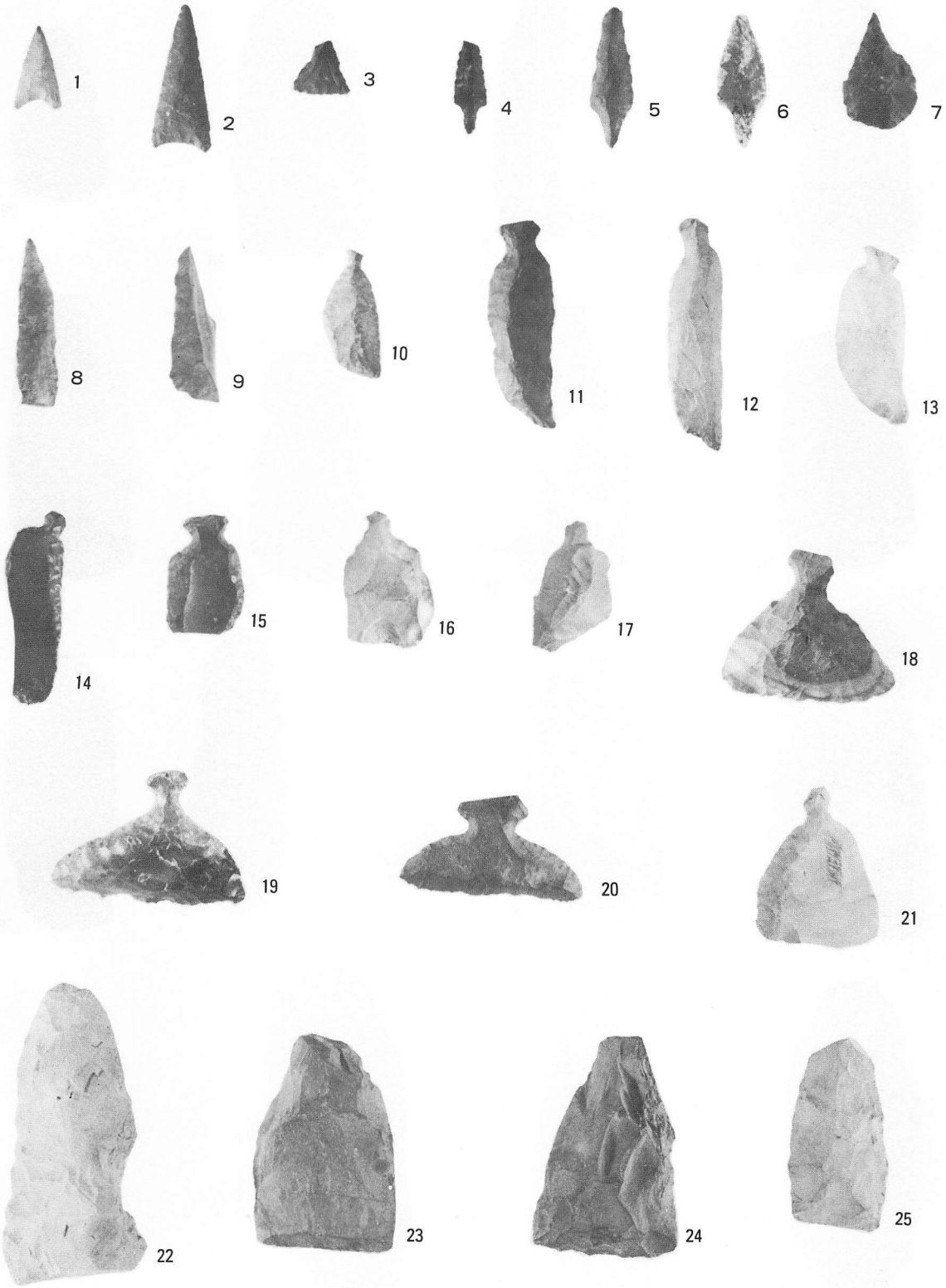
写真図版19　遺構外の出土土器（拓影）(2)



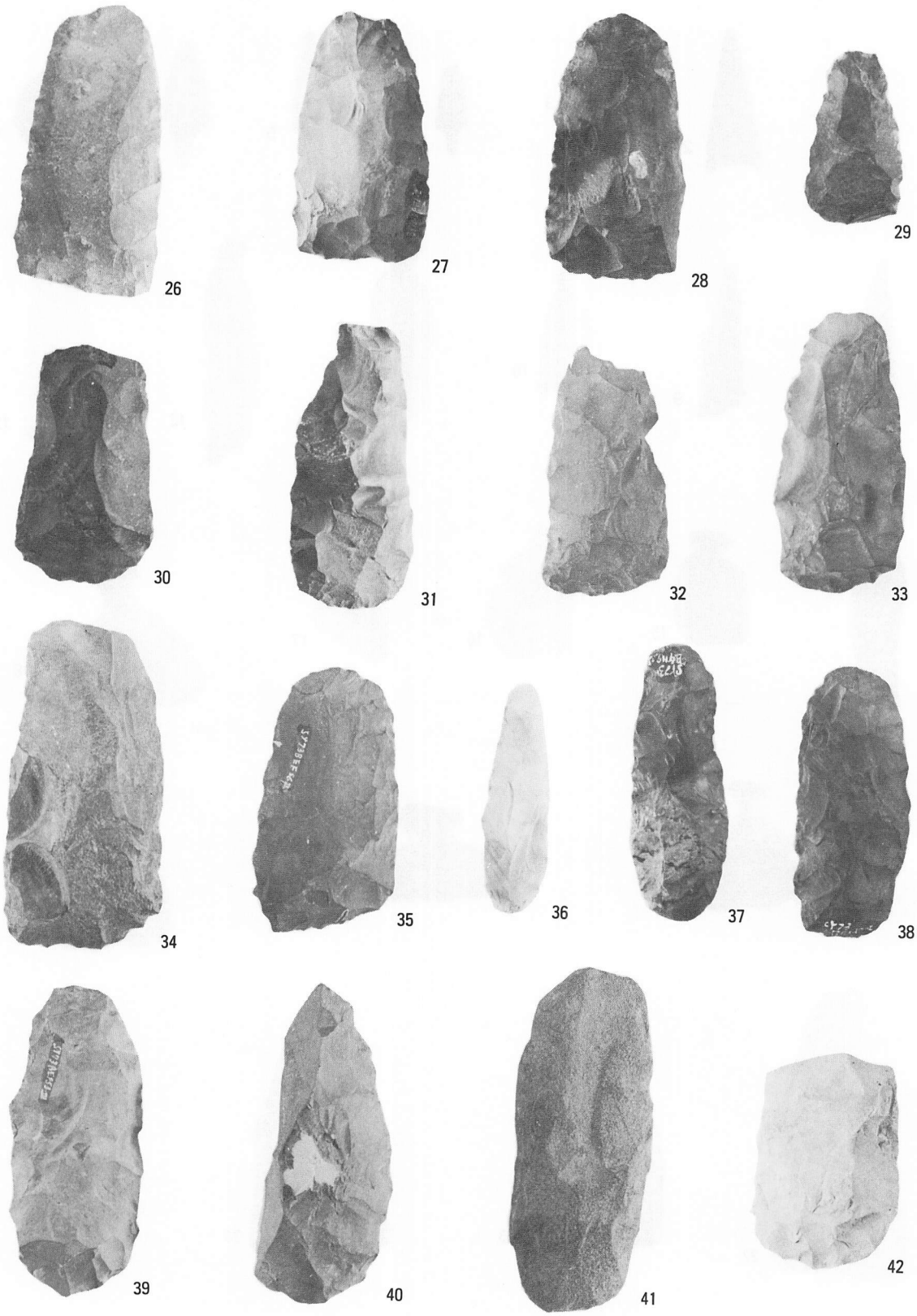
写真図版20　遺構外の出土土器（拓影）(3)



写真図版21　遺構外の出土土器（拓影）(4)



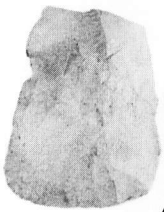
写真図版22　遺構外の出土石器（1）



写真図版23　遺構外の出土石器 (2)

43

44

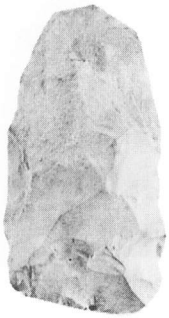

45

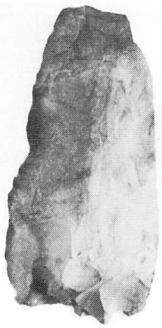
46

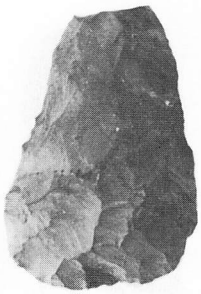
47

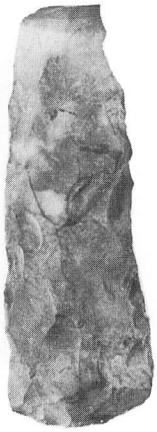
48

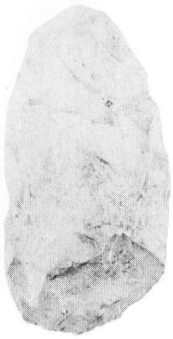
49


50

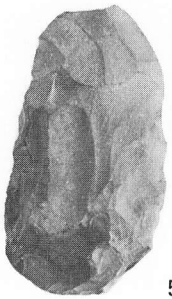

51

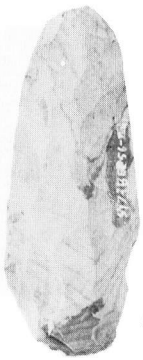

52

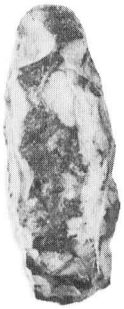

53


54

55

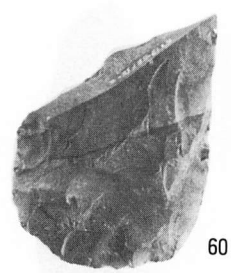

56

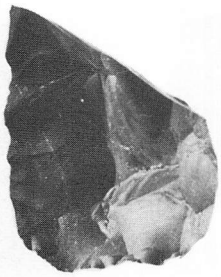

57


58

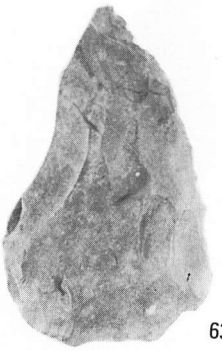
59

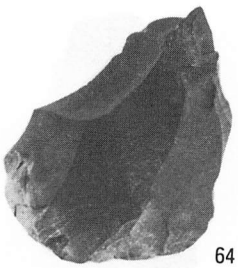
写真図版24　遺構外の出土石器 (3)

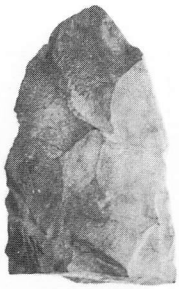

60

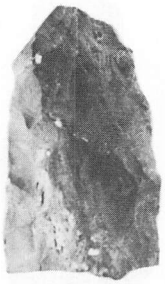

61

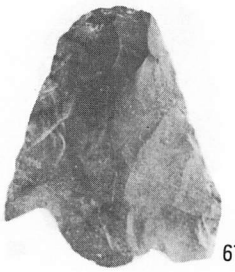
62

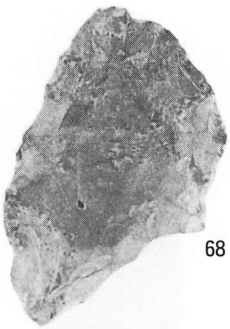

63

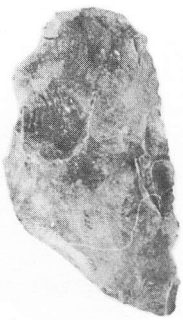

64

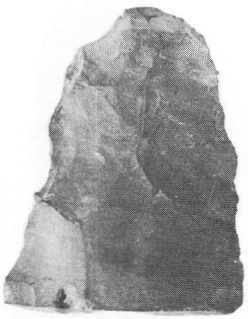

65


66

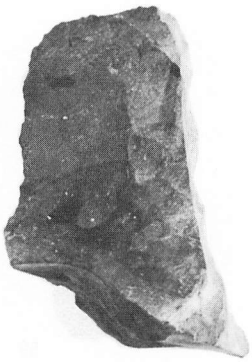

67


68

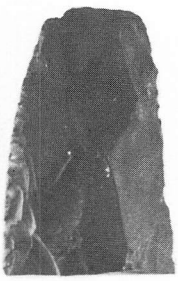

69


70

71

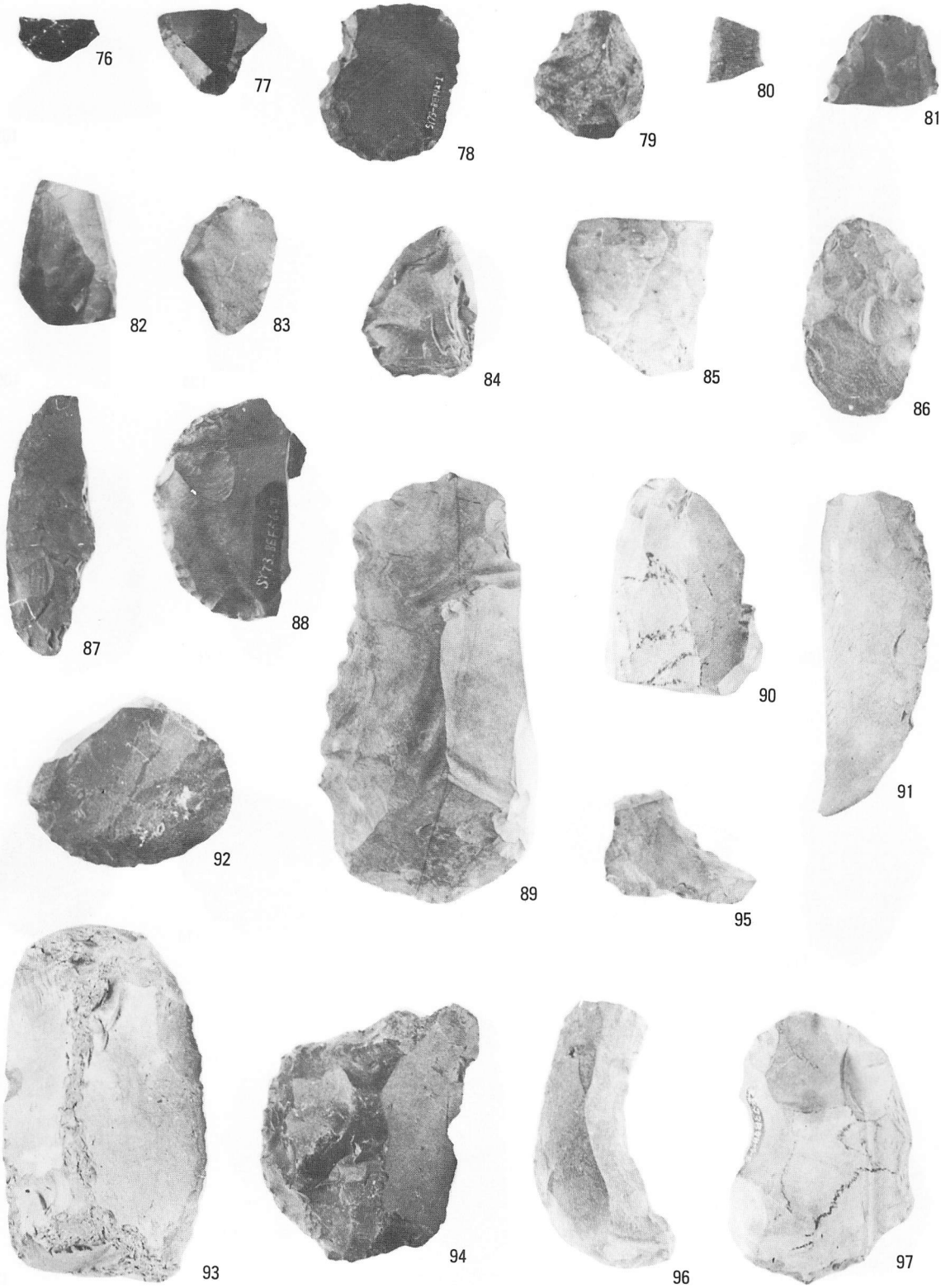

72

73

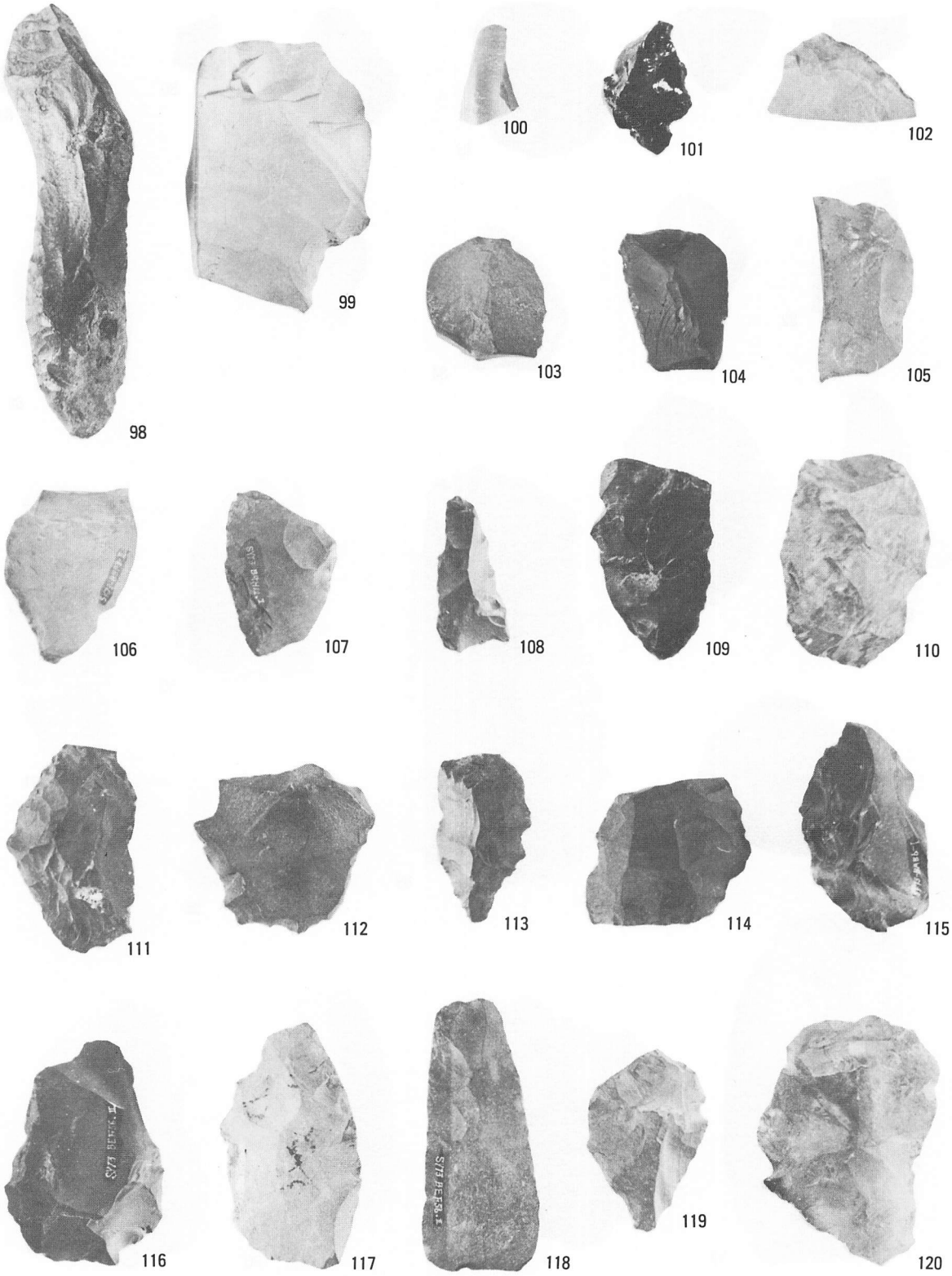

74

75

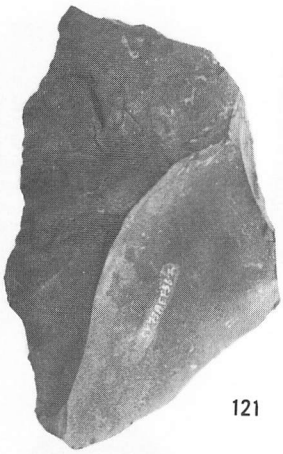
写真図版25　遺構外の出土石器 (4)

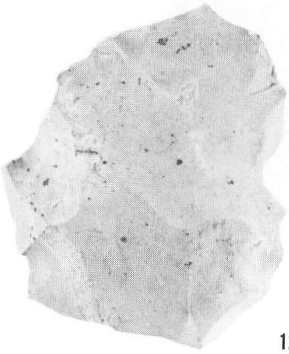


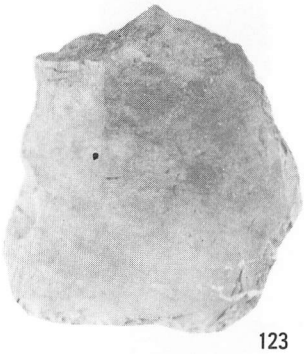
写真図版26　遺構外の出土石器 (5)

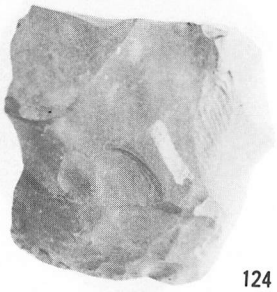


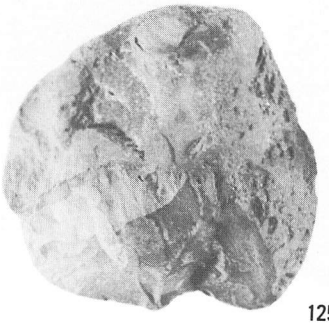
写真図版27　遺構外の出土石器 (6)

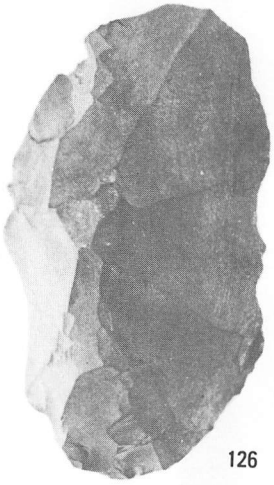

121

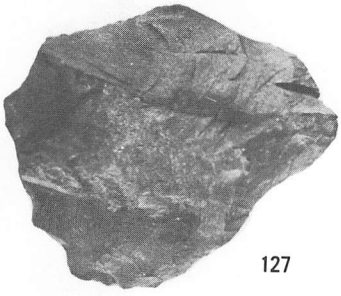

122

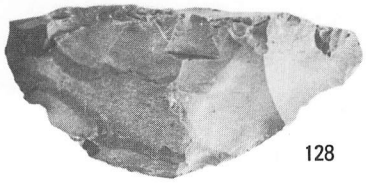

123

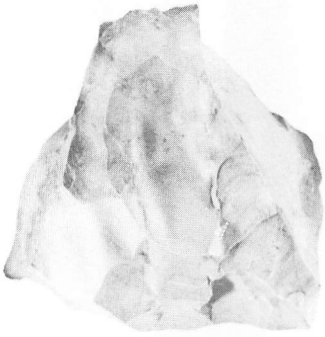

124

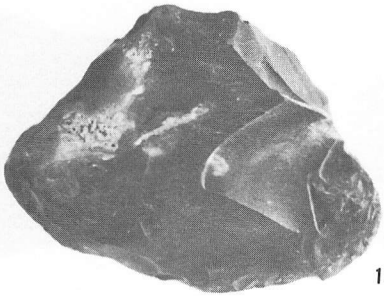

125

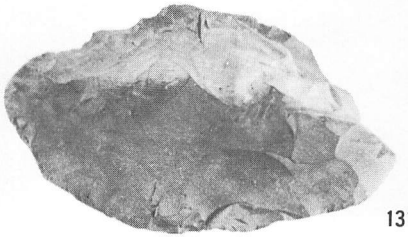

126


127

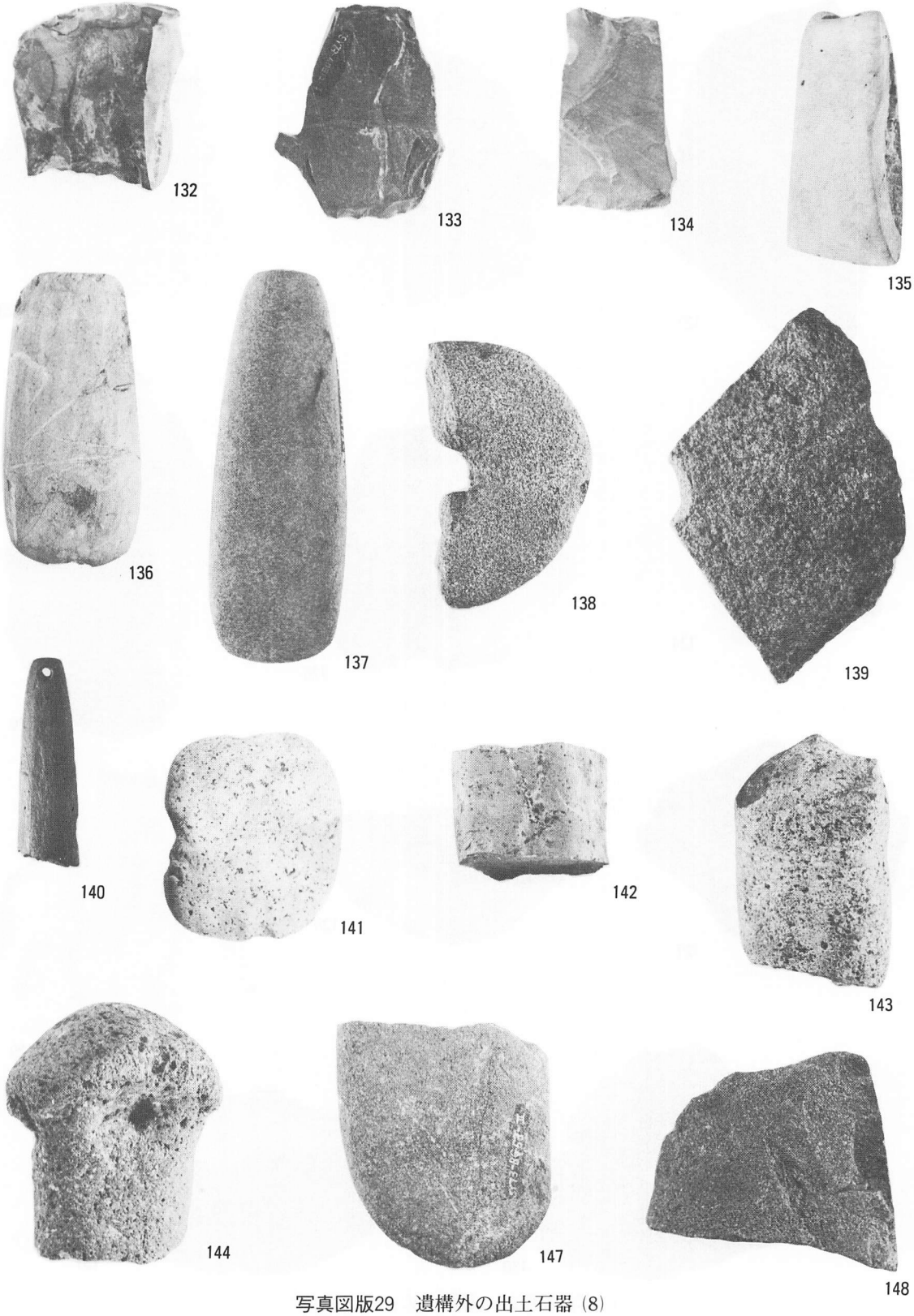

128


129


130

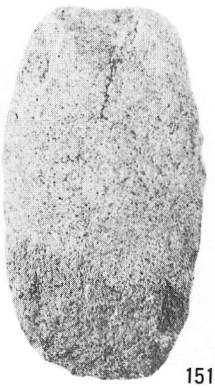

131

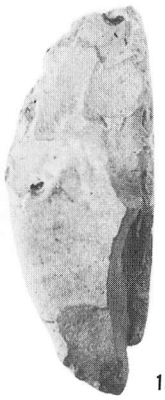
写真図版28　遺構外の出土石器（7）

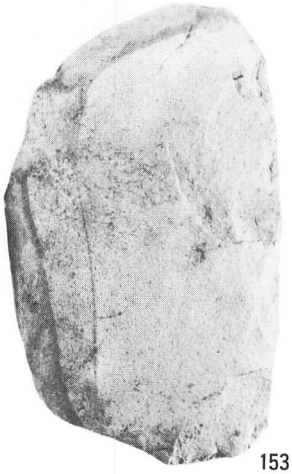


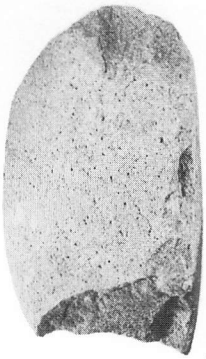
写真図版29　遺構外の出土石器 (8)

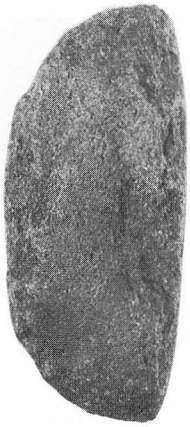
150

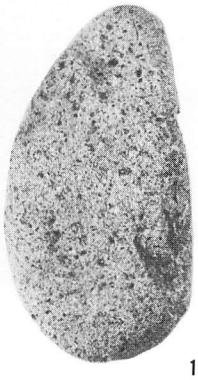

151


152


153


154


155


156

157

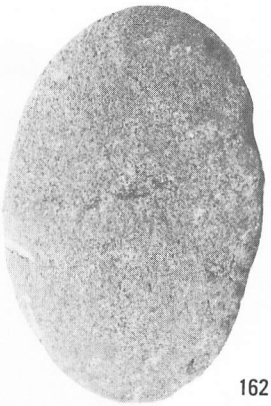
158

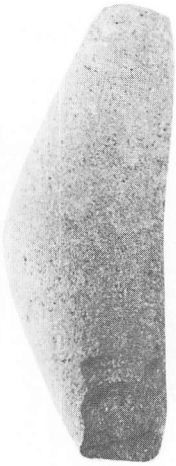
159

160

161

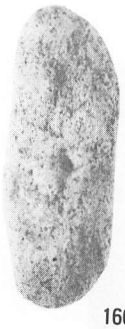
写真図版30　遺構外の出土石器（9）


162

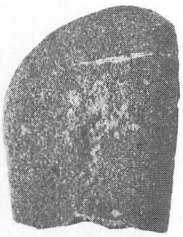

163

164

165

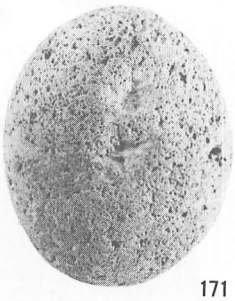

166

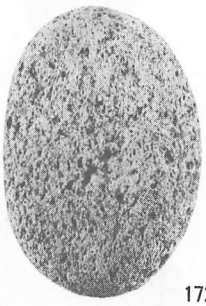
167

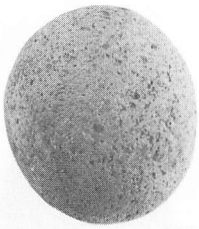

168

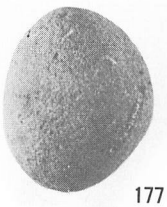
169

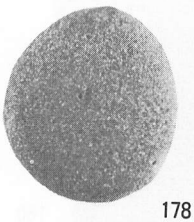
170

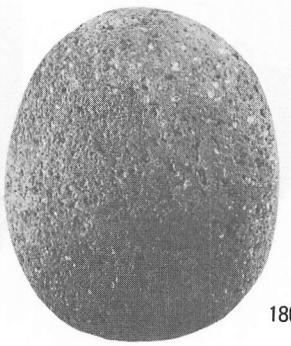

171

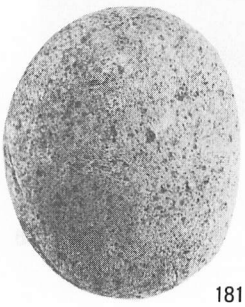

172


174

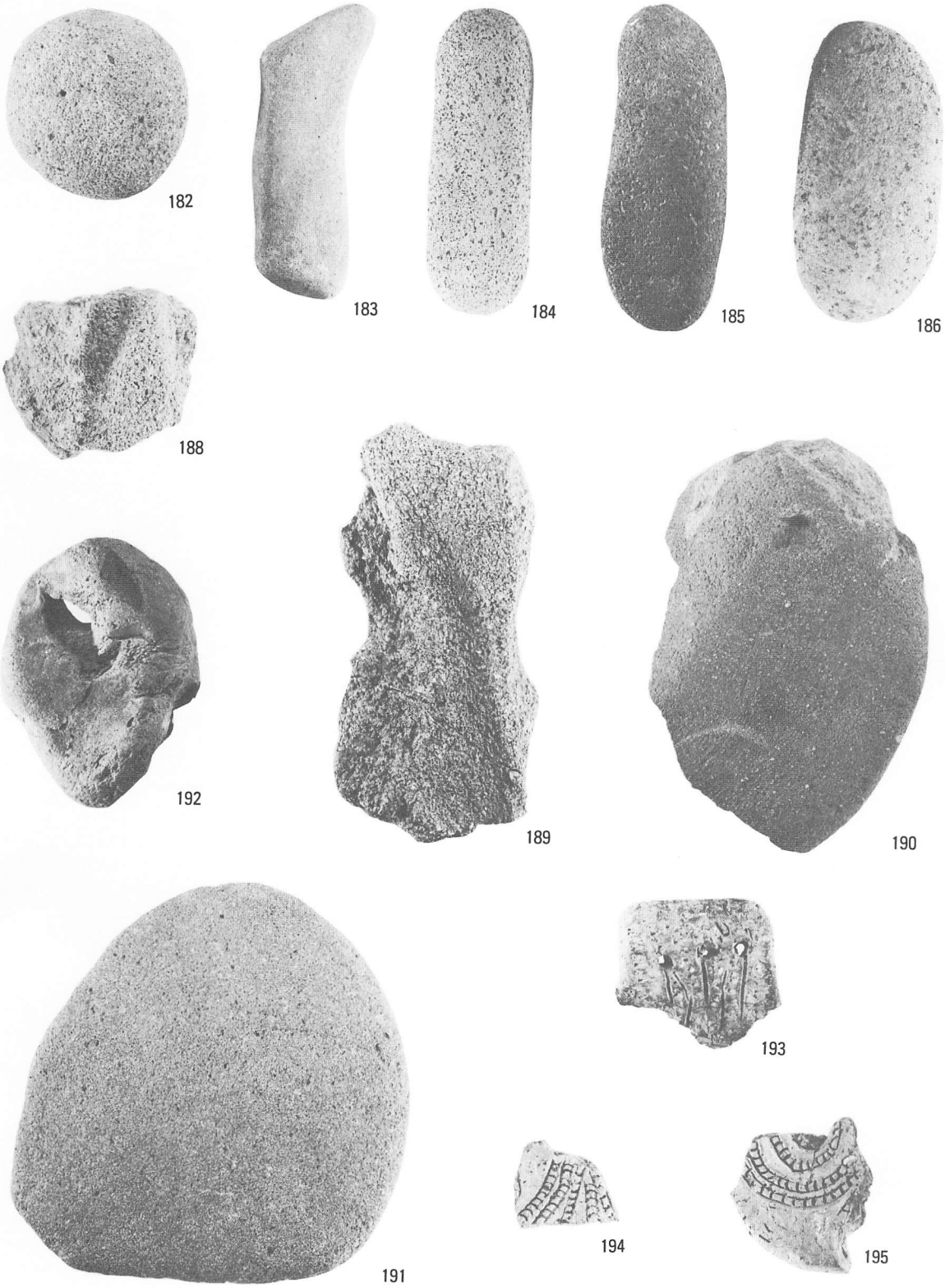

177


178


180


181

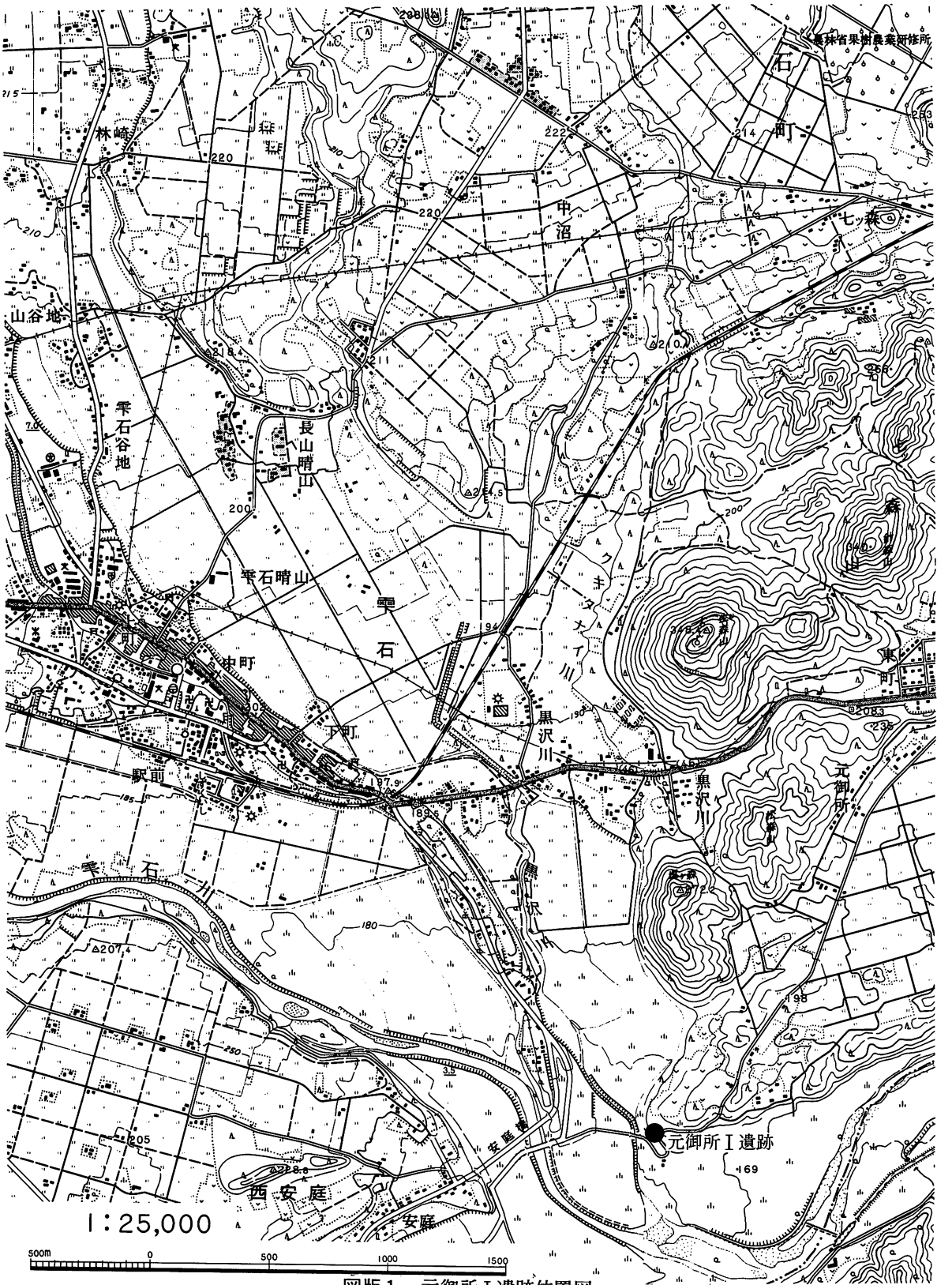
写真図版31　遺構外の出土石器 (10)



写真図版32　遺構外の出土石器・土偶 (11)

元御所（もとごしょ）Ⅰ遺跡

遺跡所在地	岩手県岩手郡雫石町元御所
事業主体	建設省御所ダム工事事務所
調査主体	1次調査　岩手県教育委員会文化課
	2次調査　(財)岩手県埋蔵文化財センター
調査担当者	1次調査　上野　猛　　高橋与右衛門
	2次調査　本沢慎輔　　高橋正之
発掘面積	3500㎡
調査期間	1次調査　昭和48年12月1日～10日
	2次調査　昭和55年4月7日～9月10日
遺跡記号	MG'73　　MG'80



図版1　元御所Ⅰ遺跡位置図

Ⅰ．遺跡の位置と環境

元御所Ⅰ遺跡は岩手県岩手郡雫石町元御所にあり、盛岡市街から西に13km、雫石街から南東に3kmに位置する。また当遺跡は東流する雫石川左岸に接した低位河岸段丘上に広がり、近年まで元御所の家々とそれをとりまく畑に利用されていた。遺跡の中央の海抜は179m、南に向ってわずかずつ下る緩傾斜の段丘で、南にのぞんだ雫石川との比高差は10m、北に接する一段高い段丘との比高差は同じく10mのレベル差がみとめられる。

当遺跡からは縄文式土器と石器が畑地から表採され、また北に接する一段高い段丘上の塩ケ森遺跡からも縄文式土器と石器が多数表採される。両遺跡中央位置での比高差は10mであるが、それぞれの遺跡範囲ラインが接する部分は、両遺跡とも遺物が万扁無く表採され、跡切れることがないため同一遺跡とも考えられる。

『岩手郡誌』によると御所村大字西安庭字元御所に「御所舘址」があると書かれているが、現在その遺構は見つかっていない。また同誌に遺跡の周辺に「公屋敷」「寺屋敷」「刑部屋敷」「将軍屋敷」の名が遺存していたとも書かれていることから、遺跡の発掘調査の過程で「御所舘址」の遺構が発見されるかと期待したが、最終的に近現代の遺構と縄文時代の遺構遺物が発見されたにすぎない。

周辺遺跡としては前述した大集落の塩ケ森Ⅰ遺跡が背後にひかえ、その北西に流れるクキタナイ沢の対岸には、『雫石町史』のグラビアに載る石刀が出土した兎野遺跡が所在する。また西方黒沢川をはさんだ対岸の桜松遺跡は元御所Ⅰ遺跡と同様御所ダム水没により発掘調査され、その結果縄文時代中期末の住居址と早期から晩期までの土器片と石器が多量に出土している。桜松遺跡の北西に接する中位段丘には縄文時代早・前期の遺物を出土する野中遺跡が、また更に西に流れる雫石川の対岸には縄文時代前期末から中期初頭の住居址と、土坑11、陥穴状遺構4を検出した下長谷地遺跡がある。元御所遺跡の南西方雫石川をはさんだ対岸には、縄文時代中期の遺物と近現代の建物址を調査した町場遺跡Ⅰ～Ⅲが連なり、これら遺跡群の西に接した台地上には一部圃場整備により破壊をうけた田屋舘遺跡が広範囲にひろがる。この遺跡は開田時縄文時代前期から後期の遺物が多量に発見され、大集落があった遺跡と考えられる。またこの台地の先端のネック部分に1条の土塁と掘址がみられる舘址遺跡がある。当遺跡と東に北流する矢櫃川をはさんだ位置に複式炉を検出した縄文時代中期後半の広瀬遺跡があり、元御所Ⅰ遺跡からは南方雫石川をへだてた対岸の除遺跡では、同じく縄文時代中期後半の複式炉を伴う竪穴式住居址が発掘調査されている。また元御所遺跡から南東方向、雫石川の対岸にはトーテムポール、大型土偶、鮎(えり)址、足跡等の遺構遺物を検出して新聞を賑わした縄文時代後期、晩期の科内(しだない)遺跡

があり、繋(つなぎ)温泉の雫石川よりには繋Ⅰ～Ⅵ遺跡群が広がりをみせている。大半が御所ダム建設に伴う発掘調査がなされており、特に繋Ⅲ遺跡に関しては縄文時代中期の竪穴式住居址群と中近世の竪穴式住居址群が検出されている。縄文時代の竪穴式住居址は複式炉を伴ない、１つの台地の大半を精査しているので、これら住居址群は集落単位として把握することが出来る。また中世の竪穴式住居址や掘立柱建物址等にしても、この遺跡の南に接して高い山頂に舘址の遺構（湯の舘址）がみられることから、これら建物址群となんらかの関係がみい出せるのではないだろうか。繋遺跡群の北方雫石川をへだてた対岸すなわち元御所遺跡からは東方にあたるが、同じ御所ダム水没に関連して発掘調査した新城舘遺跡、堂ケ沢遺跡が点在し、これらと元御所遺跡の中間よりやや北よりにロクロ使用の土師器片が表採出来る東町遺跡がみられる。雫石川と元御所遺跡を中心としてみたこれら周辺遺跡は概して縄文時代の遺跡が多く、土師の時代の遺跡は前述東町遺跡と墨書土器を出土した繋遺跡群内南ノ又遺跡のみである。

参考文献

岩手県教育会岩手郡部会『岩手郡誌』
雫石町史編集委員会『雫石町史』
（財）岩手県埋蔵文化財センター『岩手県埋文センター文化財調査報告書』第13集
繋Ⅲ、Ⅵ、上野、南ノ又、堂ケ沢Ⅰ、Ⅱ、広瀬Ⅱ遺跡
（財）岩手県埋蔵文化財センター『岩手県埋文センター文化財調査報告書』第16集
下猿田Ⅱ、Ⅲ、安庭古墳、伝久、町場Ⅱ、Ⅲ遺跡

Ⅱ．調査方法と経過

1．調査方法

昭和55年度元御所Ⅰ遺跡発掘調査は、当遺跡より上位の段丘上に位置する地続きの塩ケ森Ⅰ遺跡と同時の発掘調査であり、調査遂行上多々不備が目立ち、最終的に遺跡を外面的にしか把握することが出来なかった。

元御所Ⅰ遺跡はすでに昭和48年度に岩手県教育委員会文化課の手によってトレンチ発掘調査が行なわれ、遺跡の一部に縄文時代前期末から中期初頭の遺構と遺物が検出されていることから、今回の発掘調査はそれを踏まえて次の手順で行なうこととした。

1）発掘調査に入る前に東北における平面直角座標第Ⅹ系を利用して発掘調査を行なうためにアジア航測KKに基準点測量を依頼する。

2）調査期間を短縮するためやむおえずブルドーザーを使用して、遺構の平面プラン確認面まで土を取り除くため、前もって数10ケ所に任意にグリッド（第１次グリッド）を設置し掘り下げる。

3）ブルドーザーによる土取り後、上記の基準点を利用して座標を変換してグリッド掘り（第２次グリッド）に切り替える。

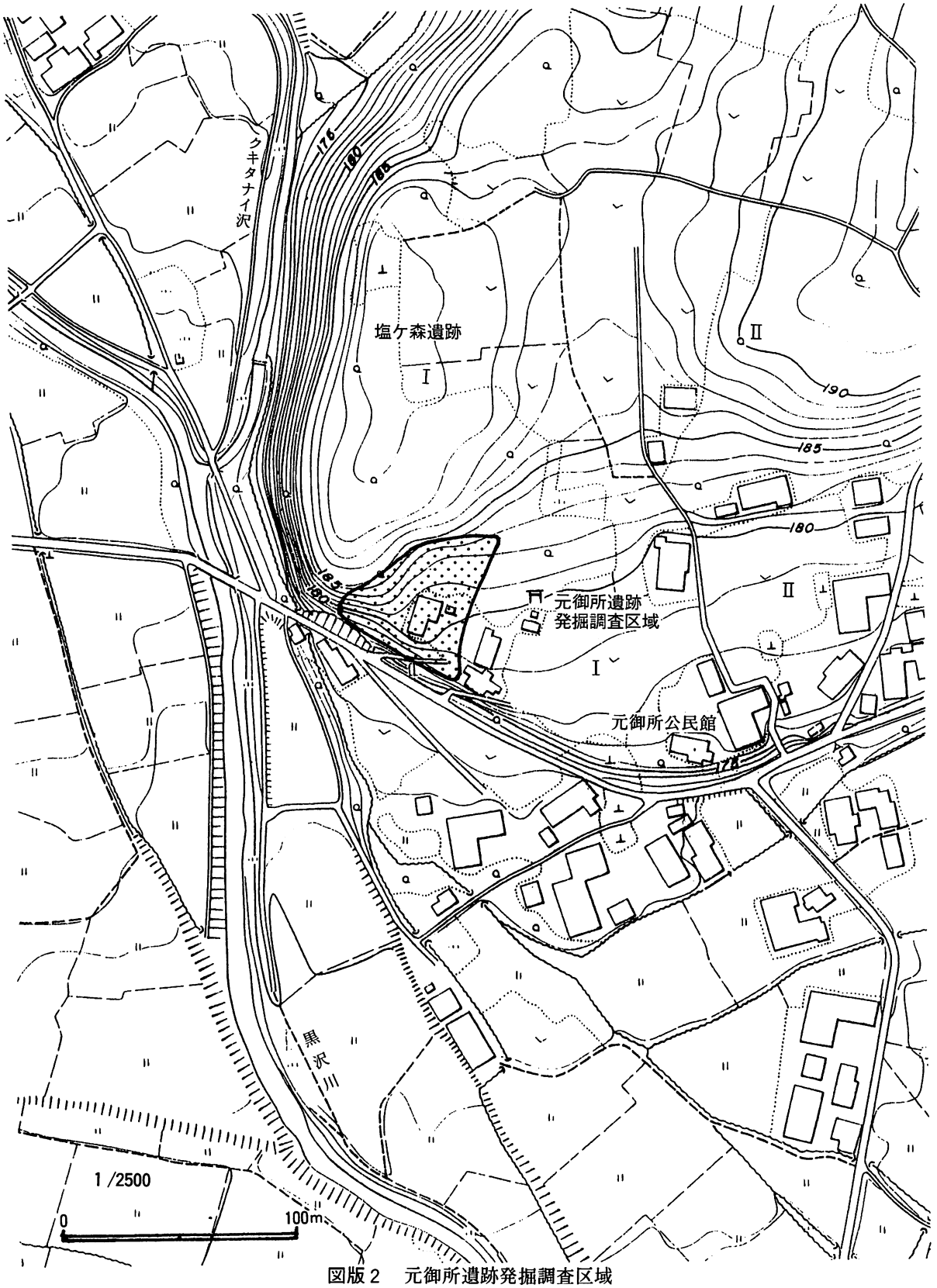
4）遺構の平面プランを確認して掘り下げる。

1）の基準点は、元御所Ⅰ遺跡の内、やや東端の平坦部に基準点Ⅲを、北東に約70m離れた塩ケ森遺跡に基準点Ⅳを設けた。その成果は下記の通りである。

基Ⅲ　X－36,352.93m
　　Y＋14,371.43m
　　H　180.376m
　　真北方向角　－0°6′25″
　　基Ⅳを視準した方向角58°26′56″
　　基Ⅳとの距離　69.26m

基Ⅳ　X－36,316.69m
　　Y＋14,430.45m
　　H　183.719m
　　真北方向角　－0°6′26″
　　基Ⅲを視準した方向角238°26′56″

この2点を利用して元御所Ⅰ遺跡中央に整数値による原点を設置した。すなわち原点の変換座標



図版２　元御所遺跡発掘調査区域

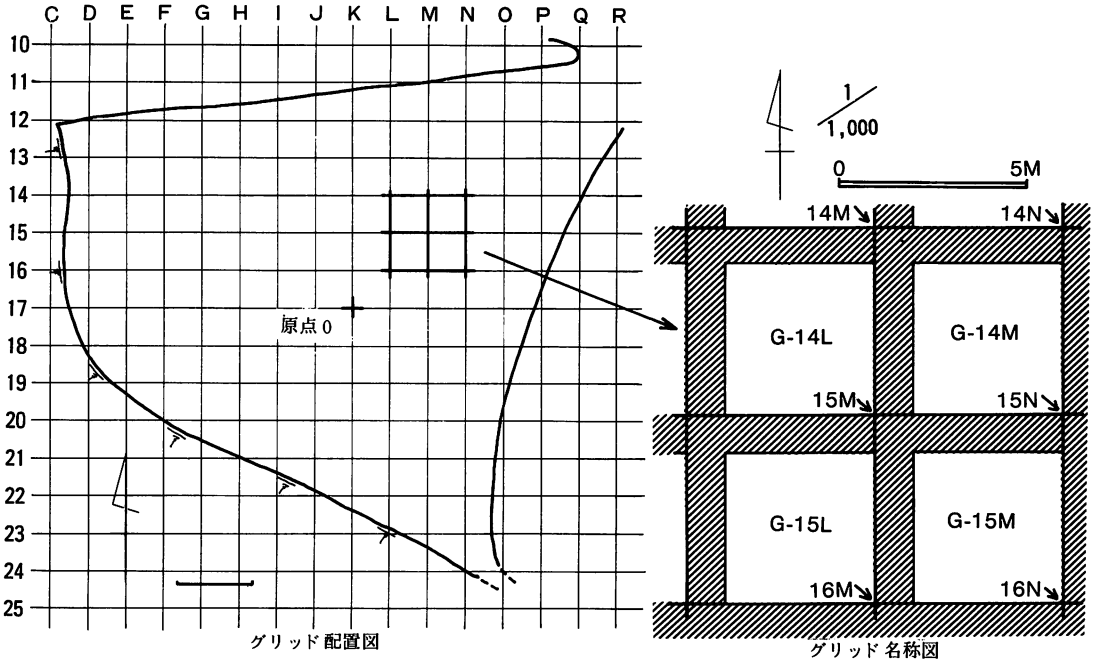
は、

O　X　−36,360.00m

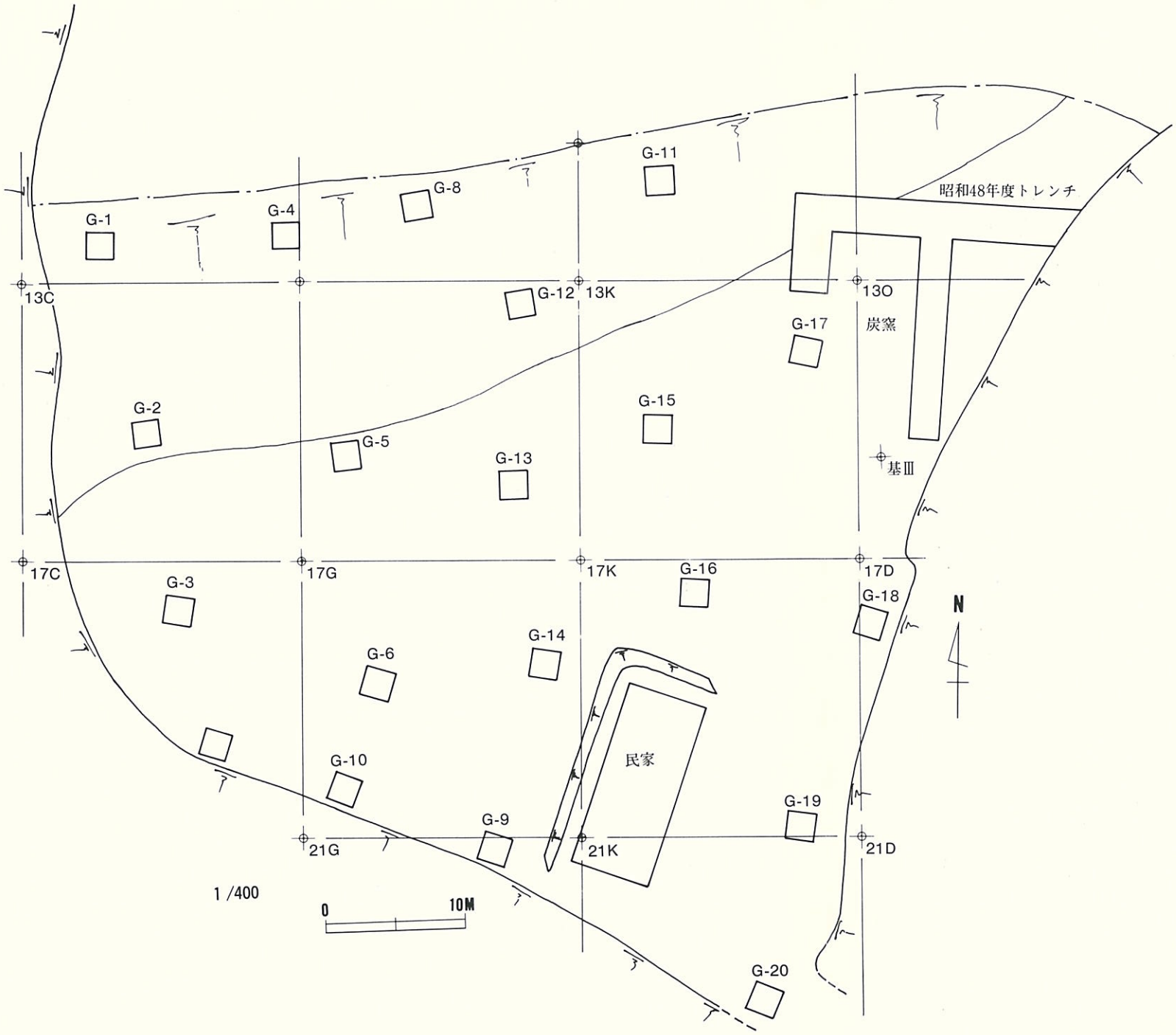
　　Y　+14,350.00m

で、この原点0を基準にして東西南北に5m単位のグリッドを設定した。近接遺跡である塩ケ森遺跡の発掘調査も同時平行しており、グリッド設定も同一方法をとっているので、グリッドの名称は両遺跡とも続き番号とした。グリッドは5m×5mとし、西から東へA・B・C順、北から南へ1.2.3.順にグリッドの四隅の杭にその記号をあたえ、グリッドの名称はその北西杭にあたえられた記号名を使用した。よって塩ケ森Ⅰ遺跡の原点0杭は実際にはクキタナイ沢上に位置するが1A杭とし、元御所Ⅰ遺跡の原点0杭は17K杭となる。

また一般的グリッド内の調査方法は、5m×5mのグリッドの内、北と西辺にそって幅1mずつのブリッジを残し、4m×4mの区域を層位ごとに掘り下げる。よって幅1mずつのブリッジでは四方に走り、発掘調査時の土捨て場への一輪車道として利用出来、またブリッジは、表土面から残存しているので、4m×4mの区域内に遺構が発見され、その延長がブリッジ下に達している場合、ブリッジの両面は表土層からの遺構の断面図に利用出来る。遺構が発見されない場合は、1グリッドの末調査区は9㎡、調査区は16㎡で、末調査区は全体の36%となり、ブリッジを残したままで調査を終了することも可能である。しかし、遺構と遺構らしき平面プランが発見されれば、ブリッジは断面観察と一輪車道に利用したのち掘下げることとする。



挿図1　グリッド名称図



図版３　元御所遺跡グリッド配置図

2．調査経過

昭和55年度の元御所Ⅰ遺跡発掘調査以前に、昭和48年9月に御所ダム水没区域の遺跡分布調査が岩手県文化課によって行なわれているが、すでに当遺跡範囲には砂利プラント建設のためブルドーザーによって整地されていたが、焼土範囲が確認され、土器片が数ケ所で表採された。3ケ月後の12月に入って、迂回道路を通すための事前発掘調査が雪の降る中を2週間行われた。短期間の発掘の調査のため、調査は東西20m、南北15mに丁字形にトレンチを設定し、遺構の確認を行ったが、多量の縄文式土器と石器の他、住居址が3棟と近現代の炭窯址が検出され、元御所Ⅰ遺跡の全面調査が今後に持ち越された。

元御所Ⅰ遺跡の全面発掘調査は昭和55年4月8日から開始された。地続きの塩ケ森Ⅰ遺跡も同時に発掘調査が開始され、プレハブ設営、両遺跡のグリッド設定と灌木の刈りはらい、木根の抜き取りを人夫の手分けして行なった。元御所遺跡の場合、遺構が確認される層まで、手掘り作業でなく重機により表土および2層のさらさらした黒褐色を除去するため、遺跡全体に任意に満遍無く2×2mのグリッド（1次グリッド掘り）を20ケ所設定し、出土する遺物の層位と量、遺構の有無を確認した。その結果、昭和48年度に確認されたトレンチ掘りによる住居址遺構の他に、南の段丘べりのG－9から住居址の北西プランが検出された。多量の土器石器を出したグリッドは1群のG－1、G－4、G－8、G－11、G－2の他に2群としてG－3、G－7があり、1群は北方塩ケ森Ⅰ遺跡の南斜面に多量に堆積した遺物包含層の末端の広がりの一部であり、2群はこのグリッド掘りの発掘調査段階では遺物の広がりははっきりしなかったが、後のグリッド掘り（2次）の結果、G－17D区を中心として独立した遺物の広がりであることが判明した。またG－170Dから焼土範囲も確認されている。

次いでこの1次調査を踏まえて

1）遺物包含層（1・2群）は表土層のみ除去

2）昭和48年度トレンチとG－9区域は除外

3）民家と炭窯区域は除外

4）ポイント17Kを中心に、東西南北に巾2mは除外

することにして、ユンボ2台トラック2台の重機を使用して遺構確認調査を行った。

土捨て場に制限があってユンボの土をトラック2台で他所に運び出したが、その多量の土の中に相当量の遺物が含まれたことは、言うまでもない。

Ⅲ．発見された遺構と遺物

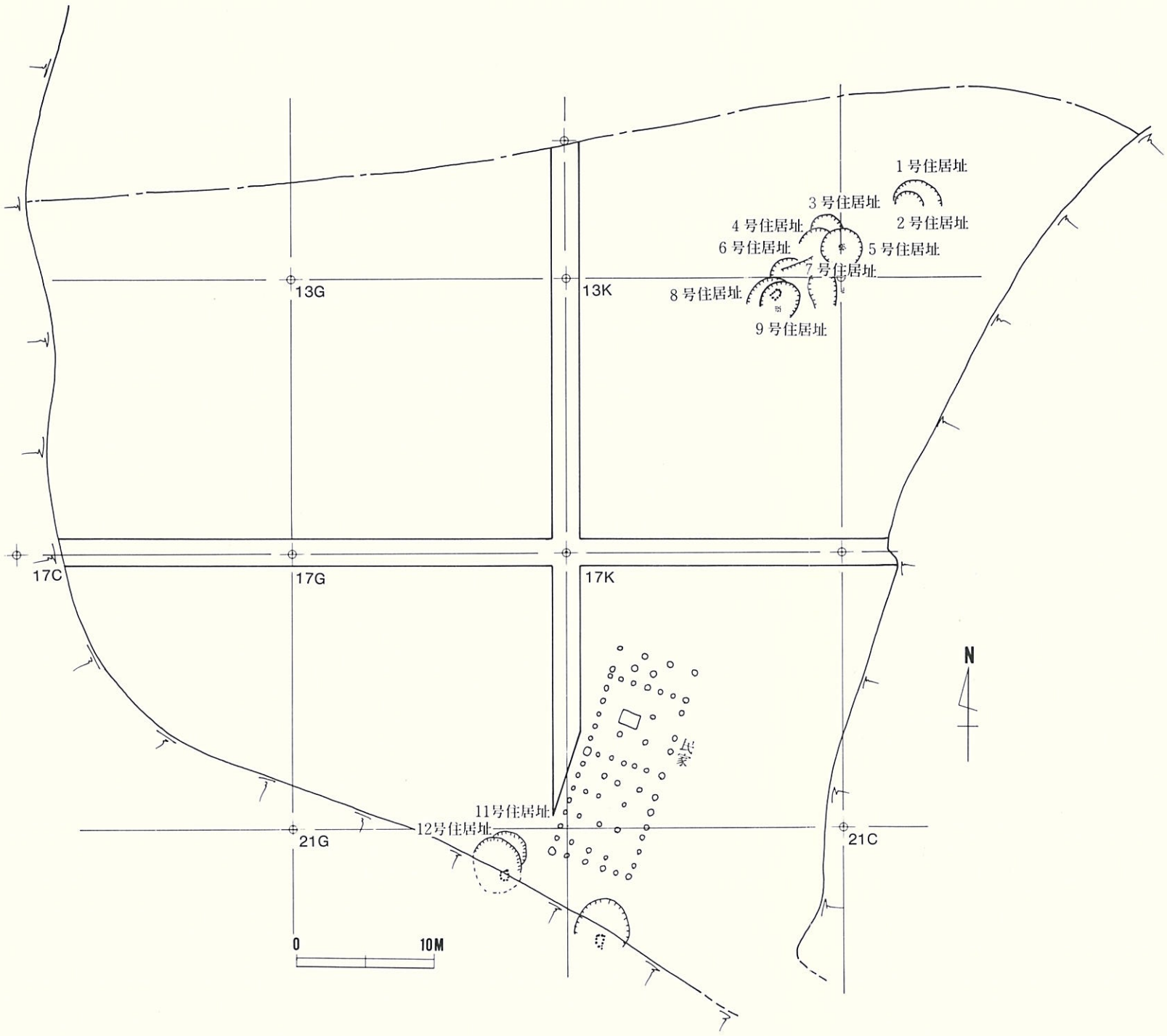
元御所Ⅰ遺跡の内、昭和48年度トレンチ発掘調査と昭和55年度全面重機発掘調査で、検出された遺構の総数は建て替えも含めて縄文時代の竪穴式住居址12棟、フラスコ形土坑１基・近現代の土台礎石建物址１棟、炭窯址１基を数える。今回の調査面積は実際は3500㎡あり、遺構の検出面積は400㎡で１割強を占める。遺構の密集区域は１群の１～９竪穴式住居址と炭窯址、２群は10～12竪穴式住居址と土台礎石建物址に２分される。１群は塩ケ森遺跡が広がる段丘から南方に向って傾斜面となり、次いて元御所遺跡範囲に入る。また平坦面を構成するところの付け根に位置し、この傾斜面に堆積する塩ケ森遺跡の遺物包含層の末端が１群の上面を覆っている。１群のうち、１・２号住居址はやや離れて発見されているが、他の３～９住居址と炭窯址は密集して切り合っている。２群は元御所遺跡がのっている段丘の南へりに位置し、そのため10～12住居址は切り合い関係にあるが、10住居址とはやや離れている。調査区域の西部の１画に遺物密集地が見られるが、黒沢川、クキタナイ沢の侵食作用によって西端の段丘は崩壊しているので、よって住居址群も崩れていると思われる。

１．縄文時代の竪穴式住居址と土坑

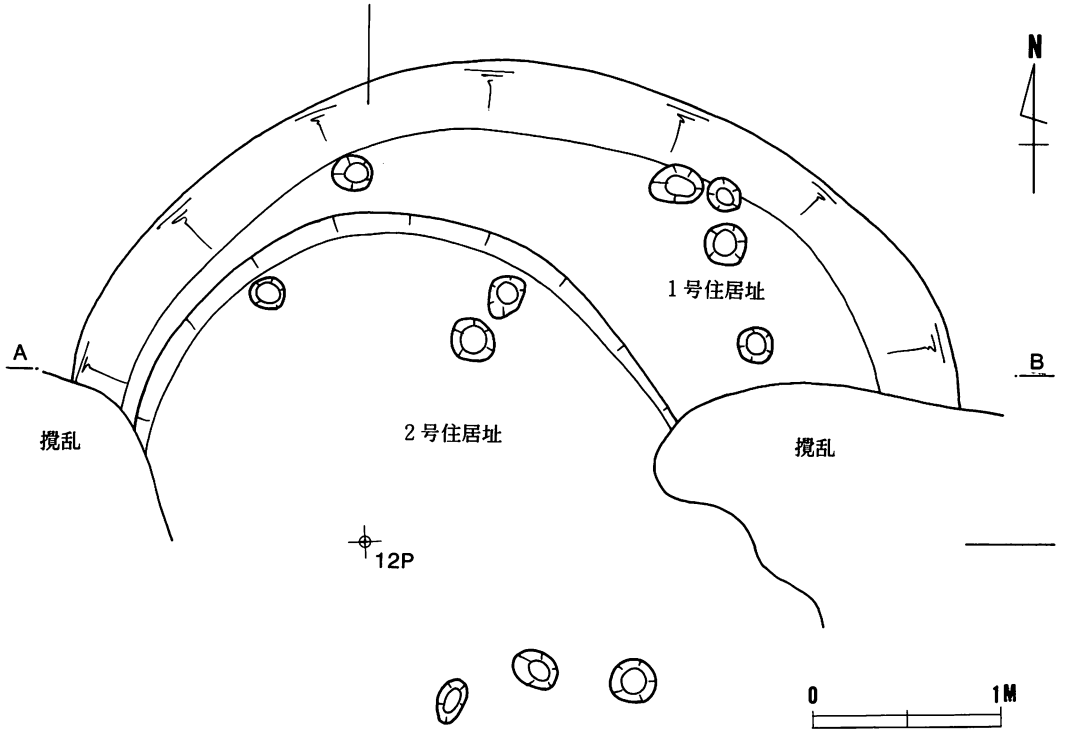
a　１号住居址・２号住居址

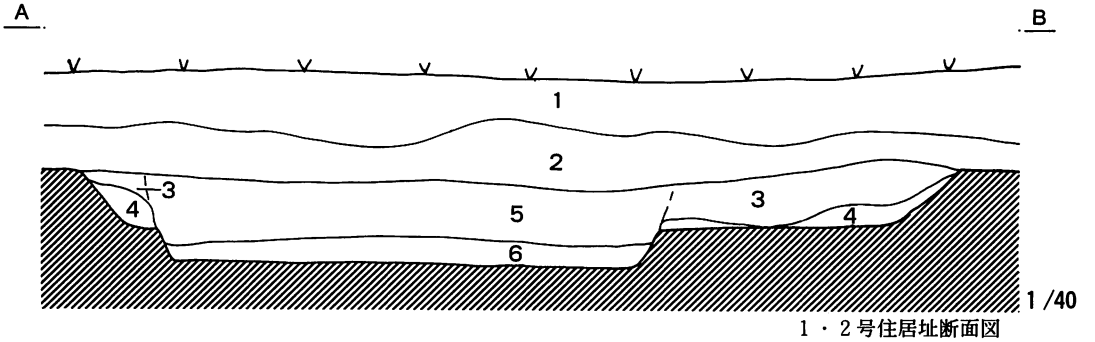
当住居址は昭和48年（1973）試掘調査の際のT字形トレンチの北中央にすでに発見されており、トレンチの北壁には住居址壁の立ち上がりと、トレンチ内には住居址床面と小柱穴が検出されている。今回の発掘調査はそれを手がかりに拡張グリッド（G－11P）を北に広げた所、１層の表土層及び２層のソフトな黒褐色土層中より縄文式土器と石器、剝片類が多量に出土したが、住居址の平面プラン確認面から下の住居址覆土中からは遺物は殆ど検出されず、床直からも発見されなかった。当遺跡の南半分は昭和48年度の発掘により既に調査されており、今回は北半分を調査したわけであるが、その判明された部分の規模は東西4.7mの円形に近い平面プランを呈し、プラン確認面から床面までの深さは0.3m、壁の立ち上がりは平均45°でゆるやかである。１号住の上部覆土３層は暗褐色で拳大の円礫を多量に含むサラサラした土で、その下層の壁際と床直上に堆積した４層はにごりのある黄褐色土で、小ブロック状にやや粘性のある黒褐色土が混入する。床面は地山中の拳大の円礫が突出して凹凸が激しく、この床面の精査の段階で２号住居址を発見した。

２号住居址の位置は１号住居址の中央からやや西にずれて、東西2.9mの円形を呈する平面プランかと思われる。２号住居址の上部覆土である５層は殆ど３層に似ており、僅かにカーボ



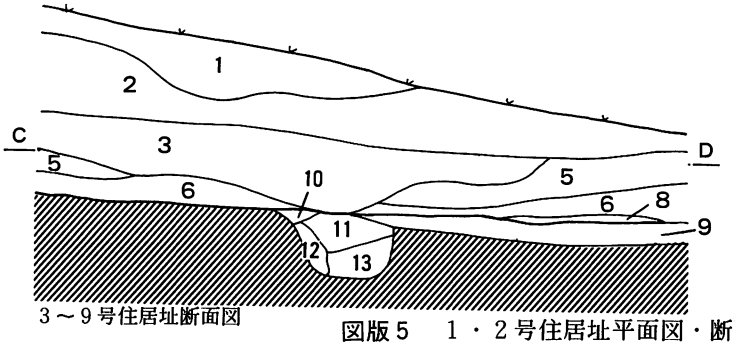
図版4　元御所遺跡遺構配置図





1・2号住居址断面図

1層　暗褐色土層
2層　黒褐色土層
3層　暗褐色土層
4層　にぶい黄褐色土層
5層　暗褐色土層
6層　にぶい黄褐色土層



3～9号住居址断面図

図版5　1・2号住居址平面図・断面図

ン粒子を含み3層よりソフトな土である。6層も1号址の4層に似ているがやや粘性が強い。平面プランからは2号住居址が、1号住居址を切っている様であるが、レベル的に1号住の床面に対応する2号住覆土内の5層中に貼り床は見られず、1号住居址の壁際から床面に広がる4層が2号住居址の壁際で止まっていることなどから2号住居址の方が新しい住居址とした。住居址床面からは小柱穴は計11個発見されたが、主柱穴となるべき柱穴は検出されていない。また両住居址とも炉址、壁溝は検出されていない。

遺物

1・2号住居址出土の遺物は数少ないが、当住居址の北部平面プラン確認のために掘り下げたG－11Pにおけるプラン確認時点までの出土遺物は縄文式土器を中心に石器、剝片が多量に出土している。当所は塩ケ森遺跡の南斜面の末端に位置し、また傾斜面に流れ込んだ遺物包含層の末端にもあたるため、当グリッドの東西に連なるグリッドも同様に多量に出土しており、表土層の1層、黒褐色土の2層中に遺物が集中している。図版12・13の14～22はG－11Pの粗掘り中の出土であり、これらの土器の中で15はやや古い時期の土器片で、口唇上端に指頭圧痕が加えられ、体部はLR単節斜縄文が施文される。胎土中には繊維が多量に含まれている。18・20～22の土器片は単節斜縄文に沈線或は2本の平行隆線に沿って3本の沈線が施こされている。これらの土器片は北の塩ケ森Ⅰ遺跡から流された土器片と考えられ、15の土器片は塩ケ森遺跡内に同時代の住居址が検出され、18・20～22の土器片は数は少ないが、塩ケ森遺跡の南端に大木8b式の土器を出土する住居址が検出され、この住居址と1.2号住居址の間は数mしか離れていない。

1号住居址に直接伴う土器片は図版12の10、12、13の3片のみである。10は体部のみで一面に櫛目文が施こされ、12は口縁部文様体部分の土器片であり、口唇部上端に2本の撚糸による単軸絡条体の圧痕を加え、口縁部は単節縄文の原体圧痕が5条見られる。13は綱目状撚糸文である。1～9・11の土器片は3層中に含まれた土器片であるが、調査の結果から2号住居址の方が新しいことが判明したので、3層中に出土した土器片は1.2号住居址の覆土中の土器片となる。

当住居址の石器は土器片に比べて多く、掻器3、削器1、砥石1、半円状扁平打製石器7点出土している。掻器21は小型であるが側縁がコンケイブされ、先端が刃部加工されている。

基部は欠損している。掻器52は従来不定形石器に分けられているが、しかし定形性は見い出す事が出来るし、刃部は孤を持ち刃角は60～80°の間におさまることから掻器類に分けた。掻器75はいわゆるノッチドスクレイパーである。削器40は小型の石器で使用痕と思われる微小剝離が見られる。砥石2は扁平で楕円形の河原石の片面に浅い溝状の削痕が2本見られる。半円状扁平打製石器2は扁平楕円形の河原石の1側縁に両面から剝離が加えられ使用辺を作り出しているが、磨面は加えられていない。また両面に凹みが見られる。半円状扁平打製石器35と47

は前記形態と同じであるが、使用部分の磨面最大幅が35で1.8cm、47で2.7cmと幅広である。47の場合は両端が打ち欠きによる抉りが見られる。半円状扁平行打製石器113、118、153は破損品である。

b　3号住居址・4号住居址・5号住居址（第6図）

3号住居址から5号住居址までは、昭和48年度のトレンチ発掘調査でほゞ完掘しており、今回の調査は前回の調査終了後、ビニールと藁を敷いて浅く土を埋めもどされた所を再調査し精査したのであって、これら住居址の細部は不明な所が多い。

3号住居址の規模は確認された弧状の壁間での最大幅の東西軸径は 2.4m を測り、実際はこの径より若干大きめの径をもつ円形竪穴式住居址であろう。床面は黄褐色地山を切込んだ堅固な面をもち、残されている北壁際にそって壁溝がめぐる。床面レベルは4号、5号住居址の床面レベルより高位にあり、4・5号住居址より3号住居址が新しい住居址であれば当然それらの覆土中に貼り床なり炉の遺構が検出されるはずであるが、前回調査者の助言によればそれらは確認されず、よって3号住居址がもっとも古く、5号住居址がもっとも新しいことになる。

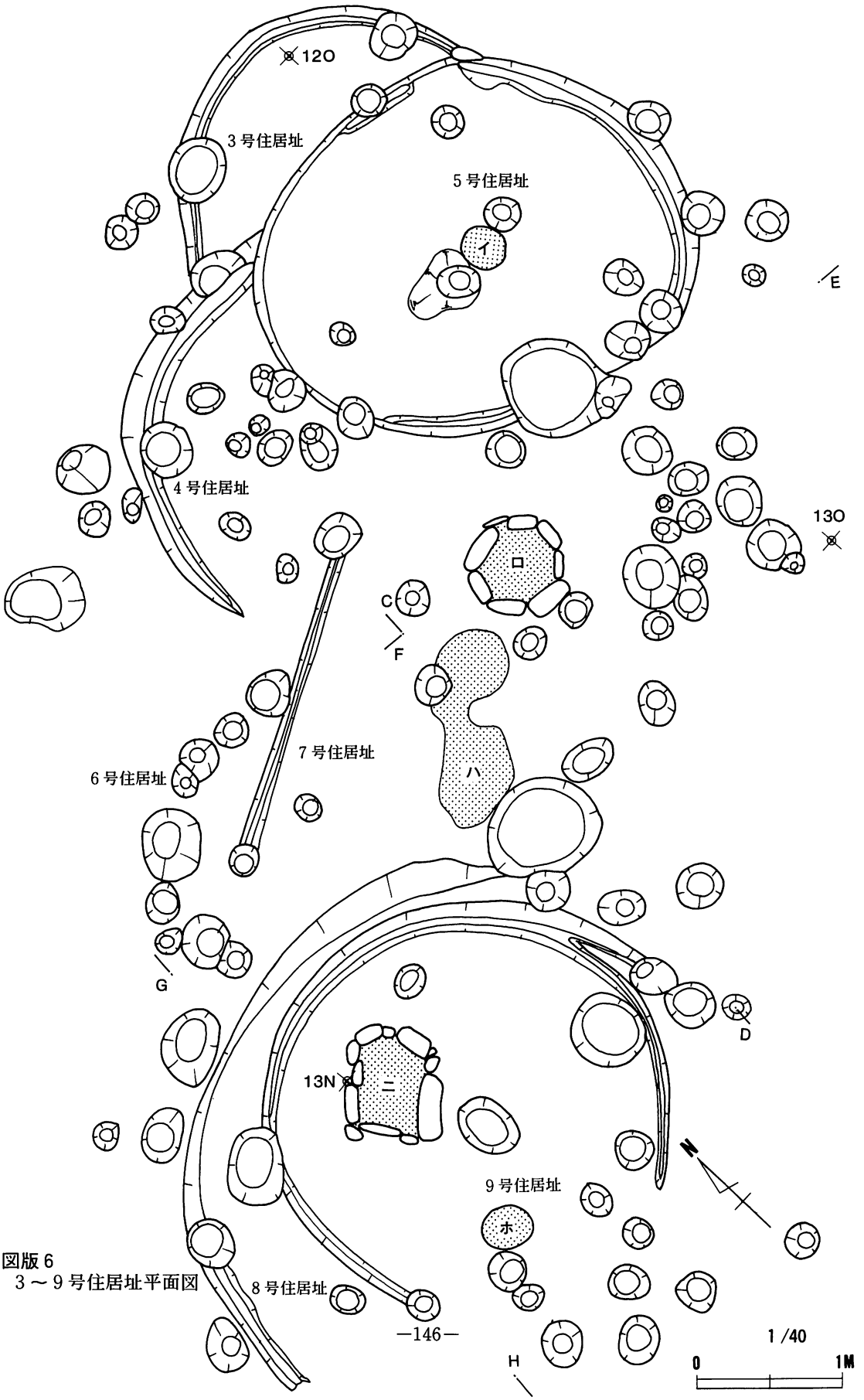
4号住居址の新旧関係は3号住居址と5号住居址の中間にはさまり、発掘された住居址は北西の1部を残すのみである。検出された北東から南西壁間の直線距離は 2.7m を測り、この住居址の形を復元すると径約3m 強の円形であろう。

5号住居址はほゞ全域の調査が確認出き、規模は東西3m、南北　2.5m　でやゝ東西に長い卵形である。北西をのぞき3方に壁溝はめぐり、住居址の中央に径0.2m の炉址（第6図イ）が検出された。それは地床炉で僅かに焼土面が形成されている。床面は平らに踏み堅められ、地山中に見られる拳大の円礫が床面より突出している。

遺物

5号住居址は今回南半分の覆土がわずかに調査する事が出来た。土器片も図版13、14中の23～29の7片が出土し、この内の2・3は床直である。23は頚部に隆帯が巡らされ、その上部に指頭圧痕が施こされる。また隆帯と口縁の間の文様帯は半截竹管の外側工具により横に6本の沈線が施こされ、その後文様帯を4区分するように同じく半截竹管の外側工具により縦に平行に3本の沈線が見られる。地文はLRの単節斜縄文である。口縁はやや外側に開き口唇部は円みを持っている。

当住居址の石器は少なく、石匙2、半円状扁平打製石器1の計3点が出土している。石匙59はつまみをもつ縦型の石器で側縁は波状を呈している。石匙70は横型の破損品、半円状扁平打製石器83は磨面をもち、側縁弧部は剝離と敲打によって半円状に作っているが、中央から横に破損しており、破損面の磨面よりには指頭大の擦面が見られた。側縁の磨面は敲打したり、磨



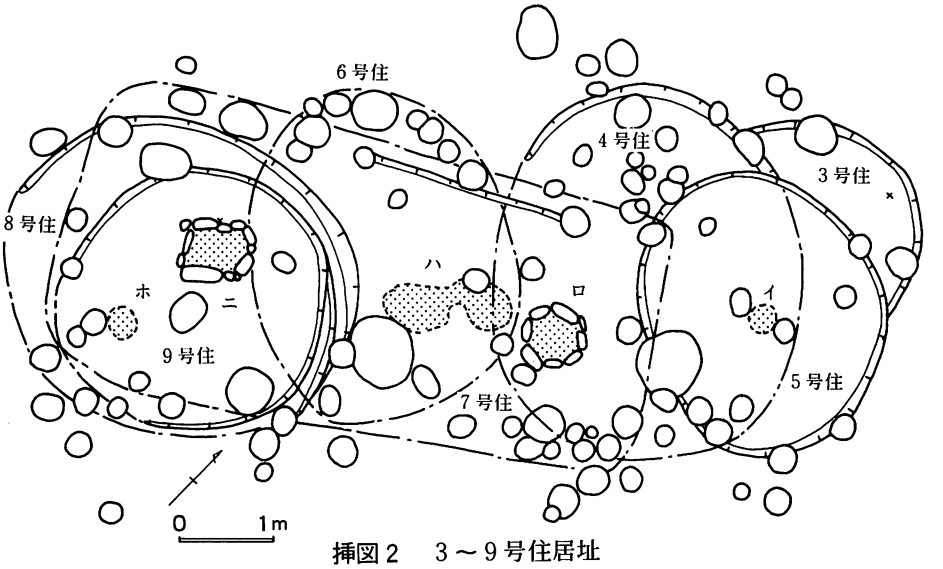
図版6
3～9号住居址平面図

いたりの繰り替えしの使用痕と思われ、破損面の擦面は破損面を調整せずそのまま部分的に強く擦り磨いた痕と考えられる。

c、6号住居址、7号住居址

6号住居址は7号住居址より古く、僅かに北側の壁に沿って弧状に柱穴が並ぶことから住居址と認定した。確認されている部分での住居址の最大幅は2.2m を測り、規模はそれよりやや大きめの円形住居址であろう。床面状況、炉址は7号住居址に切られて不明である。

7号住居址は、北西辺の壁溝の一部、第6図中ロ、ハ、ニの炉址と北東部の床面が検出されるのみで、その規模は不明であるが、これらと柱穴配置からおよその住居址規模は垣間見る事が出来る。平面的規模は北東－南西に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、長軸幅約6.4m 、短軸幅約3.1m を測り、柱穴配置は壁際に等間隔に穿たれている。床面は大半が貼り床を呈し、覆土と貼り床土、貼り床下土の上質が殆ど変化なく、柱穴の穿たれているレベルを確認出来ないまま地山まで掘り下げた結果による柱穴配置なので、確たる根拠のないそれである。この住居址に伴う炉址は3基検出され、この内の北東に位置する（ロ）の炉は一重の石囲い炉で、石囲いの外周の径は0.7m の円形を呈する。内の焼面はかなりの火を受けており、中央が浅く僅かにレンズ状に凹んでいる。（ハ）の焼土面は地床炉で、焼土ブロック混じりの暗褐色土が、北東に流れて（ハ）は、瓢箪形を呈している。（ニ）は（ロ）と同様に石囲い炉で、石囲いの外周の長軸は0.8m、短軸は0.7m を測る長方形を呈する。第5図下段の断面図と第7図上段2本の断面図は当住居址の覆土であり、1層は暗褐色土の表土層、2層はにごりのある黄褐色土小ブロックが点々と混入されるソフトな土の黒褐色土層、3層はカーボン粒子が入り、濁りのある黄褐



挿図2　3～9号住居址

色土層で7号住居址の覆土上層、4層は暗褐色土ブロックとカーボンが僅かに含まれる黄褐色土層、5層は土が密でカーボンが入る黄褐色土層、6層はカーボンが多量に入り、土が密な黒褐色に近い暗褐色土層、8層は堅くしまった暗褐色土の貼り床土である。

6号住居址・7号住居址とも遺物は出土していない。

d. 8号住居址・9号住居址

8号住居址は7号址の下部から発見された径3.9mの円形住居址である。また床面精査中、当住居址内側に壁溝と思われる溝が円を描いて検出された。径2.8mを測る8号住居址より古い円形住居址（9号住居址）で、壁溝以外床面、炉址、遺物などすべて不明である。8号住居は床面中央よりやや南によった位置に径0.3mの円形地床炉が検出されている。床面は良好で堅く踏み堅められている。第7図断面点G－Hの8号住居址断面図の当住居址覆土は14層、15層で14層は炭化物粒子が若干含まれる暗褐色土層、15層は炭化物粒子が多量に含まれる黒褐色土に近い暗褐色土層である。

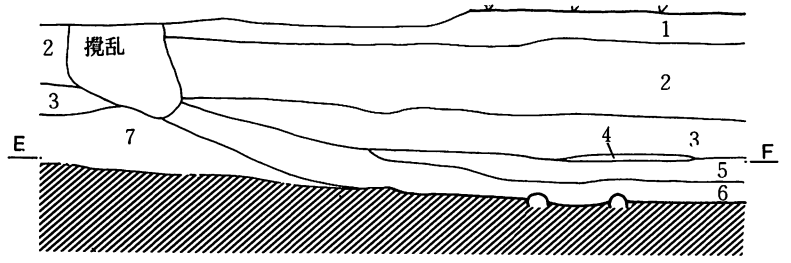
e. 10号住居址・22K－1土坑

当住居址は元御所遺跡調査区の南端から検出されたが、台地の縁辺のためと、重機による表土除去のため、遺構は南⅓と覆土の大半が崩壊し、破壊された。炉址の石はすでに露出しており、重機の重量によって石は地山に喰い込み、やはり重機によって石囲いの一部が欠損していた。

規模は推定長軸幅4.5m、短軸幅3.7mの楕円形を呈し、壁溝・柱穴は検出されていない。床面はソフトな黄褐色地山を切り込んで作られており、歩けば足跡がつく程軟弱な床面で、踏み堅められた形跡は無い。炉址は長軸線上中央より南に扁した位置に検出された石囲い炉である。炉址内の焼土面は殆ど見られず、中央径0.2mの範囲で黄褐色土地山が僅かに赤褐色化しているにすぎない。

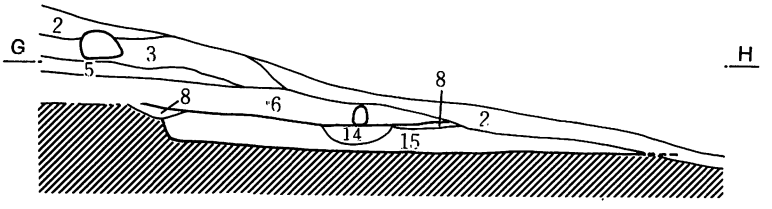
住居址の覆土は第7図下段右の断面図のごとくほとんど覆土を残していない。1層はソフトな黒褐色土で、住居址の壁の立ち上がりは検出されなかった。2層は殆ど1層と同じであるが、地山のソフト黄褐色土粒子が入り、またわずかであるが、カーボンを含む住居址覆土である。

また当居址のほぼ中央から住居址下にフラスコ形土坑(22K－1土坑)が発見されたが、炉址の下方に食い込むため、住居址より古い土坑である。土坑の発見面の口径は1.2m、底面の径は1.8m、確認面から底面までの深さ0.5mを測る。第7図下段右の断面中土坑の層序、3層は暗褐色を呈し堅く締まっており、住居址の土坑に対する貼り床である。4層は黄褐色地山で土坑の壁崩壊土であろう。5層は地山ブロックを多量に含む黄褐色土、6層は黄褐色土粒子が入るサ

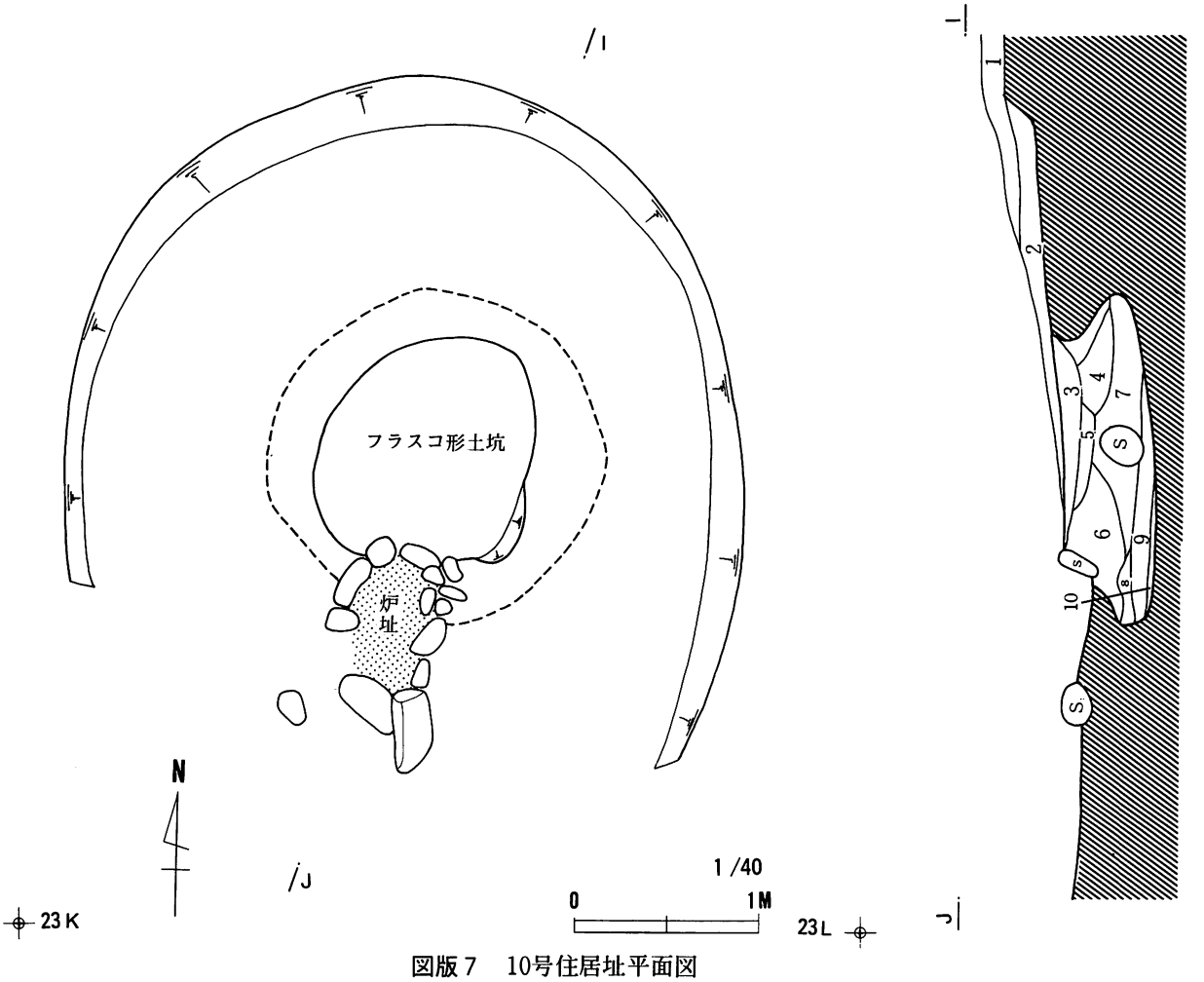


1層　暗褐色上層(表上層)
2層　黒褐色上層
3層　黄褐色上層
4層　黄褐色上層
5層　黄褐色上層
6層　暗褐色上層
7層　黄褐色上層
8層　暗褐色上層
14層　暗褐色上層
15層　黒褐色上層

3～9号住居址断面図



1層　黒褐色上層
2層　黒褐色上層
3層　暗褐色上層(貼床)
4層　黄褐色上層(地山)
5層　黄褐色上層
6層　暗褐色上層
7層　黒褐色上層
8層　暗褐色上層
9層　黒褐色上層
10層　黄褐色上層(地山)



図版7　10号住居址平面図

ラサラした暗褐色土。7層は粘性が強くカーボンを若干含む黒褐色土層で、層中下部に土器細片を含む。8層はサラサラした暗褐色土層、9層はハードな土で堅く締まった黒褐色土層、10層は地山で掘りすぎである。

遺物

当住居址の確認された覆土は浅く、出土した土器片も数少ない。図版14、15の30～40の11点の内34～37の4点は単節斜縄文を施こした胴部の上に隆帯を2本平行にはりつけ、その挟まれた中央と両側縁に沈線を加えて文様を施こし、胴部下半に向って直線に、また胴部に曲線を描くようである。37は隆帯が1本で両脇に沈線をともなう。34～36は同一個体であろう。39と40の口縁部文様帯は狭義の撚糸文（単軸絡条回転文）の上に口縁部から頸部まで6.7本の幅3㎜の細い粘土紐を隆帯として横方向に貼りつけ、この内2本の末端は円を描くように巻いている。頸部から下方には隆帯のかわりに横方向に8本の沈線が走り、この内上から4本目の沈線は波状を呈している。また38に見られる体部には地文は39、40と同様に施文され、縦に四分割と思われるが沈線が縦方向に4本走り、この内1本は末端が曲線をもって渦を巻いている。器形は39、40にみられるようにキャリパー形を呈している。

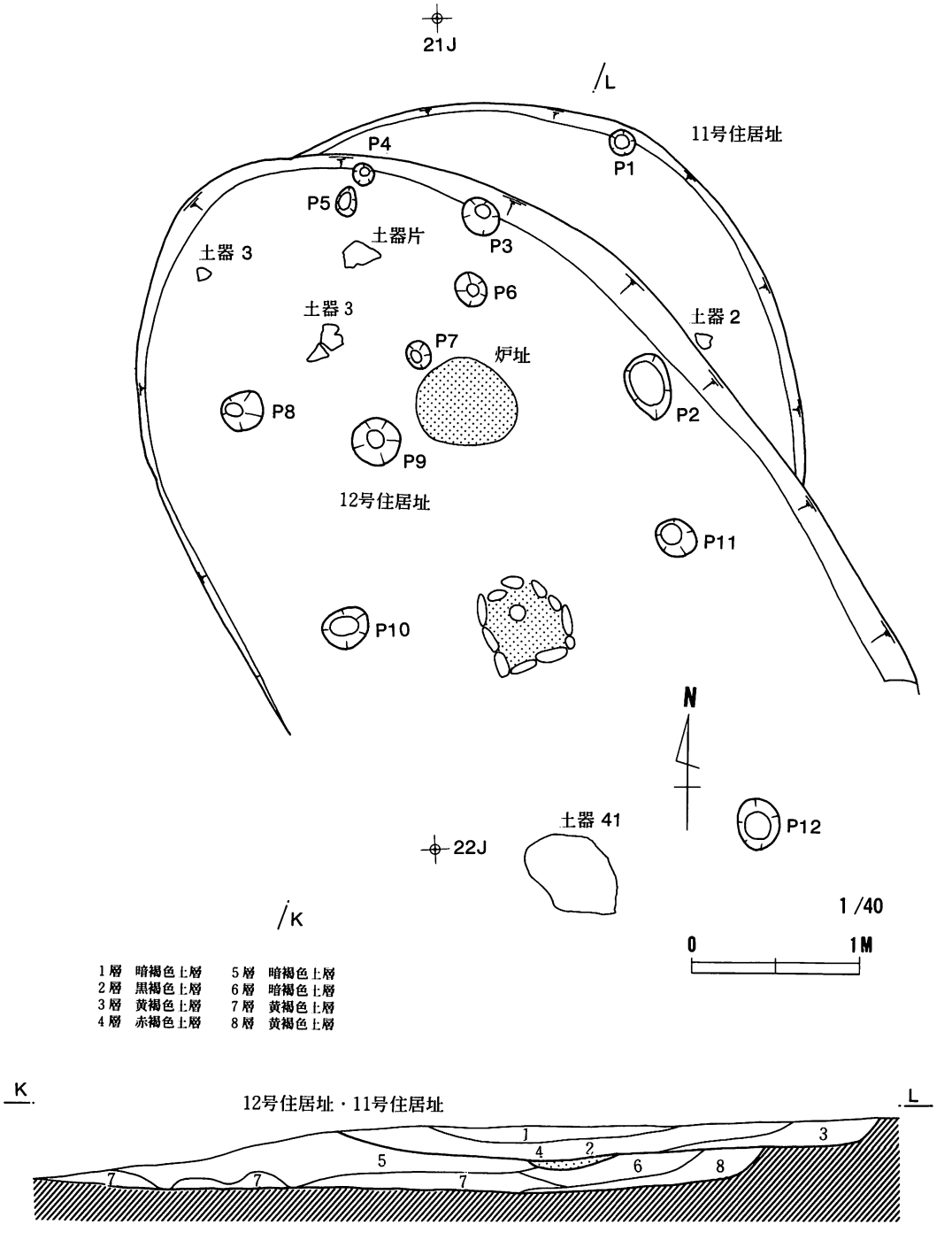
当住居址から出土した石器は覆土から掻器7の1点のみである。棒状を呈し基部は自然面を残している。

またこの住居址より古い22K－1土坑から出土した石器は石匙1、石斧1、石棒1の3点が見られる。石匙3は横型で1側縁が尖がる。石斧7は擦り切り痕が1側縁に2本見られ、刃部幅は他の石斧に比べて狭い。基部が欠損している。また石棒が1点出土している。両端が欠損しており形状は不明であるが、断面は円形に近く、面は縦方向の擦痕が見られる。

f. 11号住居址、12号住居址

12号住居址の存在は重機を入れ表土を除去する前に、掘り下げたグリッドG－9で発見しており、よって重機の重量やそれの爪による破壊から守るため、重機による表土除去は他に比較して極度に浅く行なったが、段丘の南はずれに位置していることと平面プラン確認面が黒褐色土層中にあるため、調査ははかどらず、浅い覆土の確認と北壁を残すだけである。

11号址は12号住居址の廃棄後、その上部に築かれた。平面的なプランは北東に孤を描く壁とわずかな床を検出したのみであるが、第8図下段の断面図に見られるように、2層のサラサラした黒褐色土が図の中央からやや南によって立ち上がり、断面図中に見られたその径と検出された壁のカーブとから、当住居址は径3.3～3.5mの円形状の規模をもっと推定される。壁高は0.15mで床面から垂直に近い傾斜を持って立ち上がる。壁溝は持たず柱穴はP.1以外不明である。



図版 8　11・12号住居址平・断面図

住居址内北部の地山に掘り込まれた床面はそれ程踏み堅められてはおらず、歩けばわずかに足跡が残る。12号住居址の覆土中に作られた11号住居址の床面は暗褐色土の上面に僅かに堅い黒褐色土小ブロックと黄褐色土小ブロックが混った薄い層の貼床面が検出された。当住居址の覆土（第8図下段土層断面図）は上下3層に分かれ、上層の1層はサラサラした暗褐色土、2層は暗褐色土に近いサラサラした黒褐色土層で、黄褐色土粒子とカーボンを含み、3層は壁に沿って住居址中央に向って流れるように浅く堆積した黄褐色土層からなる。

12号住居址は11号住居址の下から発見されたが、発掘調査当初これら2つの住居址は同一住居址としてとらえており、調査が進むに従って2つの住居址が重っていることが判明した。
12号住居址の規模は住居址の南部⅓を欠損しているが、長軸は北西－南東を向く楕円形の住居址で、短軸の住居址幅は3.3m、長軸のそれはおよそ6m前後であろう。確認された最大壁高は0.2mを測り、床面から曲線を描き、約45°の傾斜をもって立ち上がる。床面は踏み堅められて良好であるが、壁溝は検出されてない。柱穴は住居址と炉址の配置からP6、P8、P10、P11、P12がそれに該当すると思われる。炉址は住居址の中央に位置して一重に巡らした石囲炉である。石囲い内の焼土面を精査したところ、中央よりやや北に扁した位置に穴があき、動物が利用した穴と思いながらも更に掘り下げたところ、土器5が底部を欠いて倒立して発見された。底部を除けば完形土器で、土器内は下面に僅かに焼土ブロック混じりのサラサラした黒褐色土が堆積しているのみで、殆ど空洞であった。

第8図の下段の土層断面図は12号住居址の分として5層は黄褐色に近い暗褐色土で、焼土、カーボンの粒子を若干含粘性は少ない層、6層は5層に似た土であるが粘性が見られる層、7層は黄褐色土で粘性があり、床面直上に堆積している。8層の黄褐色土は壁崩壊土ブロック土である。

遺物

11号住居址は12号住居址を切って築かれており、それより新しい住居址である。出土遺物は殆ど無く、図版12－2の土器が床面直上から1点だけ出土している。この土器は完形の鉢形を呈し、口縁はくの字状に外反する無文土器である。器面は横方向に調整のためのケズリとナデを行なった同じく横方行に走る条痕が僅かに見られる。

12号住居址は、11号住居址に切られているためそれより古い住居址であるが、台地の南縁辺のため確認された覆土は僅かである。当住居址の炉址は炉内に土器を埋設した石囲い炉の形態をもち、土器は倒立して置かれ、底部を欠いてその面が焼土面に接して検出された。この土器は図版12－1の土器にあたり、口縁部から体部下半にLRの単節斜縄文が横方向に施文されている。口縁部は4.6cmの幅で折り返し口縁状を呈し、口唇部の上端に1対の小さな突起がつく。この直下の口縁部には幅4mmの隆帯が波状に蛇行して、V字状に貼りつけされている。この位置を中心にして口縁部を縦に6等分したところに幅4mm隆帯が垂下し貼りつけられている。図版12－3の土器は

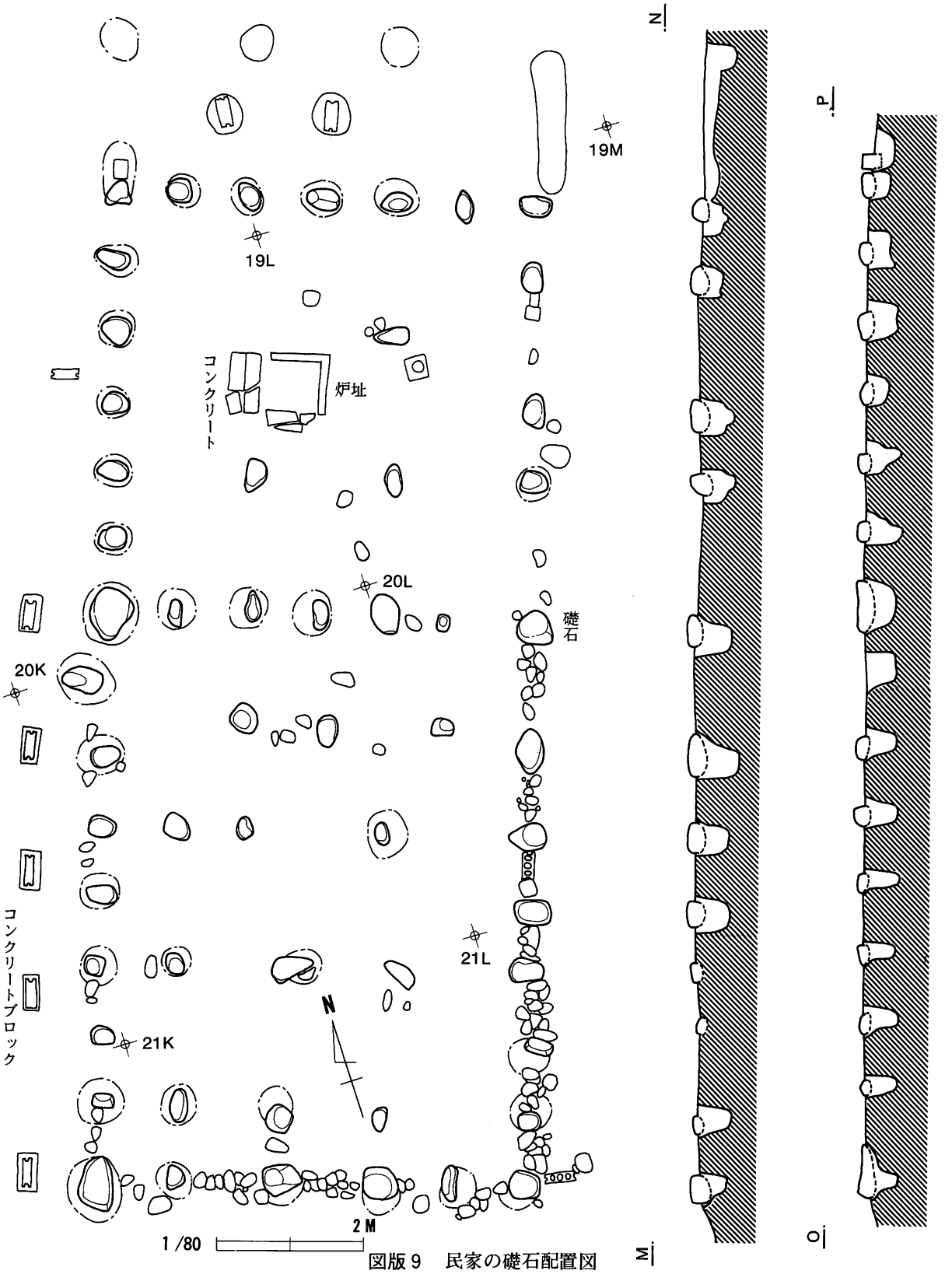
長軸線上の中央よりやや北面よりの床直から出土した完形の浅鉢形土器である。地文は横方向のＬＲ単節斜縄文が施文され、口縁部分様帯は4分割され、リング状の隆帯貼付けとその直下に垂下する隆帯、口縁部に平行する。指頭圧痕された隆帯が加えられ、またその間に横方向に単節の縄文原体圧痕が２本見られる。その他図版19－41は大型土器片で、住居址の南西部床直から発見されている。体部はＬＲの単節斜縄文が施文され、口縁部文様帯は口唇部から蛇行３㎜幅の隆帯が垂下し、同位置から斜めに幅６㎜の隆帯が貼されている。この隆帯上に直角に縄文原体圧痕がみられ、また口縁部には平行して同じ縄文原体圧痕が２本横方向に施文されている。

11号住居址からは発見されていないが12号住居址から出土した石器類は掻器１、削器１、大型掻器１、凹石１、半円状扁平打製石器１の計５点が見られる。掻器82は刃部先端が角状に１方向にカーブし先端が尖がる。削器43は剝片の１側縁に第２次調整剝離が加えられ、腹面には使用痕が観察される。大型掻器１は素材が剝片ではなく石核或いは残核を使用して刃部に調整剝離を施こした掻器と思われるため、石核石器の片刃石器の範ちゅうに加えたが、片刃石器の本来の意味からしてはやはり剝片石器中の掻器にも近い要素も見られるため石核石器中の掻器にも近い要素も見られるため石核石器中の大型掻器とした。凹石１は扁平で円みのある円礫の表裏面を敲打によって凹みがつけられた石器で１面に複数の凹みをもつ。半円状扁平打製石器12は扁平で楕円形の１側縁を敲打と磨面を持つ石器で、他側縁と両端は自然面を残している。ている。

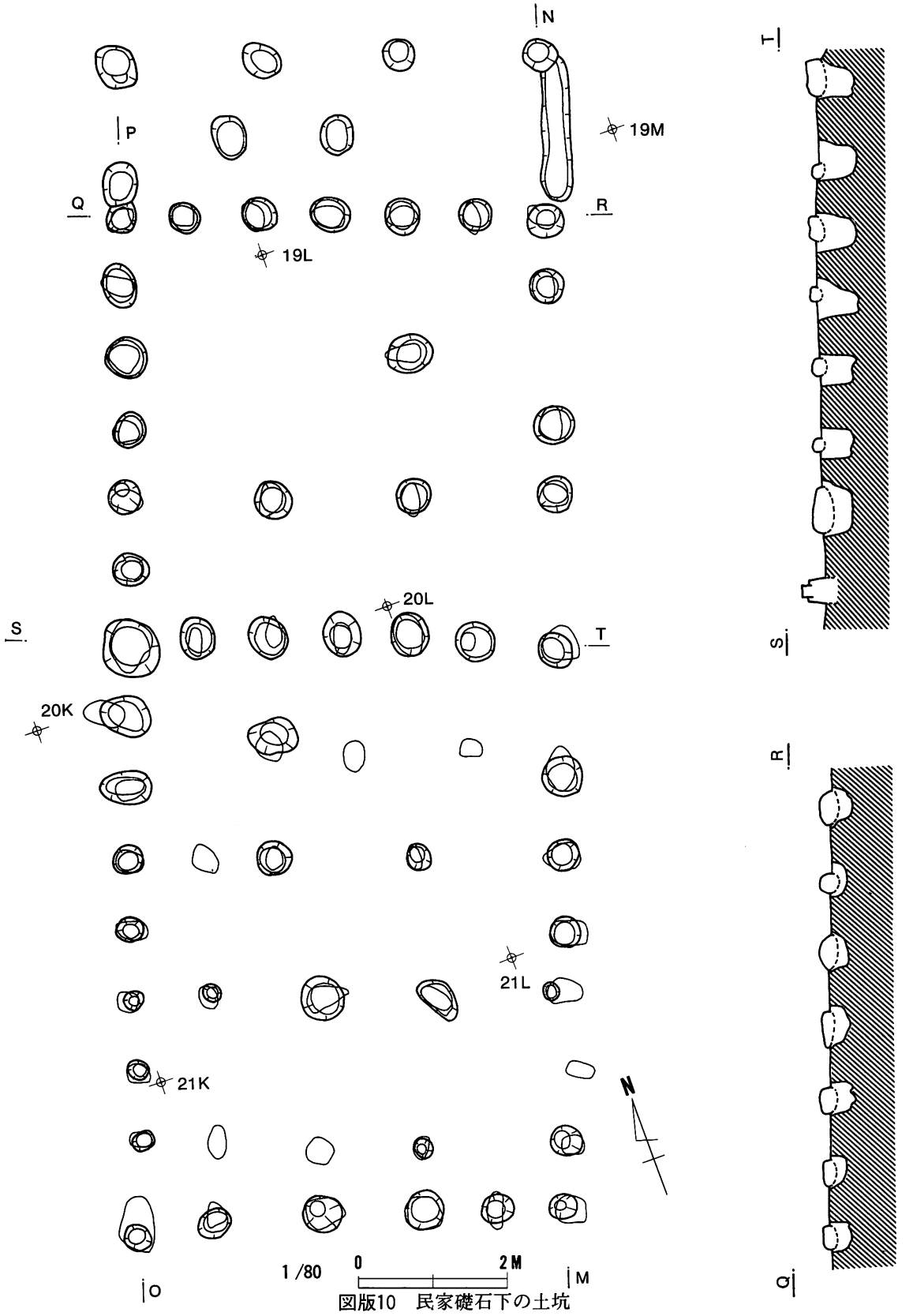
２．近現代の遺構と遺物

a　民家

民家は元御所遺跡の中央からやや南に寄った位置に南北に長い建物の礎石群が調査開始前から判明していたので今回の発掘調査の対象とした。この民家は極普通の3間×7間の規模で、御所ダム水没決定時点まで居住していた現代の民家であって決して江戸時代だとか中世の古民家ではない。しかし古民家も同様人が居住していないと家の崩壊は早いし、現在までも居住している民家の中には建築されて100年、150年も経ている家屋がある。またこれら古民家として民俗調査対象となる家屋は、大きな家屋、特殊な建築物に限られ、元来普遍的で一般民家を調査の対象としなければならない必要性は多々あり、発掘期限に制約されつつ一面的にでも調査の対象としたことは、調査の必要性を感じていることと現代の一代前の民家に接する要素を発掘調査によって抽出することにある。



図版9　民家の礎石配置図



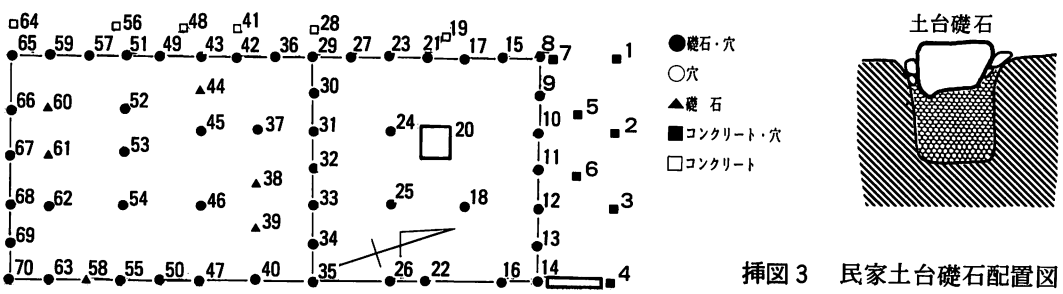
図版10　民家礎石下の土坑

当民家は御所ダム建設により補償が決定された後、建物が取り払われ、土台の礎石列は取り払うことなくそのまま放置された。その後10年近く経たのちに今回の発掘調査が行なわれたのであって、10年間で露出していた礎石列は一部の大型礎石を除いて表土が全面を被っている。調査の結果礎石群とコンクリート、コンクリートブロック列は東西7.8m 、南北16.4m の範囲で出土した。南北に長い建物で長軸は北からやや東によっている。これらの礎石列は形状によって３区域に分けることが出来るので、その準によって以下記述していく。

１区は挿図による記号1～7、19、28、41、48、51、64の範囲で建物の外辺にあたる。これらは礎石の変わりにコンクリートやコンクリートブロックが等間隔に設置され、1～7の下部は径0.5～0.6m の穴が掘られ、川砂利がその覆土として埋っている。19、28、41、48、51、64はコンクリートブロックがコンクリートによって固定されているのみで下部には穴は見られない。

２区は記号19、20を除いた８～27の礎石列であり、東西８～14の礎石中心間約5.7m を測り１間は1.9m 礎石間は0.95m となる。南北の８と29の礎石中心間は約5.7m を測り、以下同様である。またこれら土台礎石は大型河原石のやや扁平面を上面にしているが３区に比較してやや小さく、平面は不整形である。土台礎石の平面平均値は最大径43.8cm、最小径29.2cmである。記号20はコンクリートで作られた炉址であろう。土台礎石下に平面平均値の最大径52.2cm、最小径47.7cmの穴がそれぞれ穿たれており、その覆土として灰白色の河砂利が詰っている。穴は黄褐色土の地を穿っており、深さは平均30cmである。２区は主に台所部分であろう。

３区の礎石列は41、48、56、64を除いた29～70の37個で、この内38、39、44、58、60、61の６個の土台礎石は下部に穴を伴っていない。東西を走る29～35の土台礎石中心間は約5.7m を測り、１間は1.9m 、礎石間は0.95m となる。また南北29と65の礎石中心間は7.8m を測り１間と礎石間は東西間と同様である。個々の礎石規模は全体３区を平均すると最大径45.3cm、最小径31.0cmの平面が不整形　名を利用して、一面が平坦部分を上面にして据えられている。



挿図３　民家土台礎石配置図

また、29、35、65、70の四隅の礎石は特に大型で、4個の名の平均的規模は最大径61.5cm、最小径48.5となり、他の石に比較にならない程大きい。これらの石の下部には2区と同様穴が穿たれ、黄灰色をした山砂利が覆土となっている。穴の平均規模は最大径48.8cm、最小径42.7cmと2区の穴と比較して小型である。穴の掘込み面はサラサラした黒褐色土に見られ、底は同じ層中である。3区は主に座敷部分にあたろう。

当民家は以上の様にまったく新しい建造物であるが、土台に関しては、一代前の構築方法である。それは上屋を乗せる土台下がコンクリートでなく、一抱えもある河原石を礎石として利用し、また礎石を固定するためその下部に穴を穿ち砂利を満たしいわゆる「どうづき」を行ない礎石をその上に乗せさらには礎石を安定させるため、側に挙大の円礫を添えている。2区砂利は灰白色を呈する円礫の川砂利を利用し、3区は黄褐色呈すやや角礫に近い山砂を利用している所の2区と3区の差は、穴の平均値の差、礎石の平均値の差にも現われ、この相違は3区礎石列の上屋がこの民家の初期の建造物で増築時に北に3間×3間の建物（2区）加えたと考える事が出来る。

当民家は梁行桁とも1間は約1.9mであるが、礎石上に「＋」、「－」の墨縄痕も見られないので1.9mの値は礎石の中央間の距離測定であって、数cmの移動が考えられる場合、1間が6尺3寸の時、1尺が30.3cmで計算すると1間は19089mとなり1.9mに最も近似値となる。

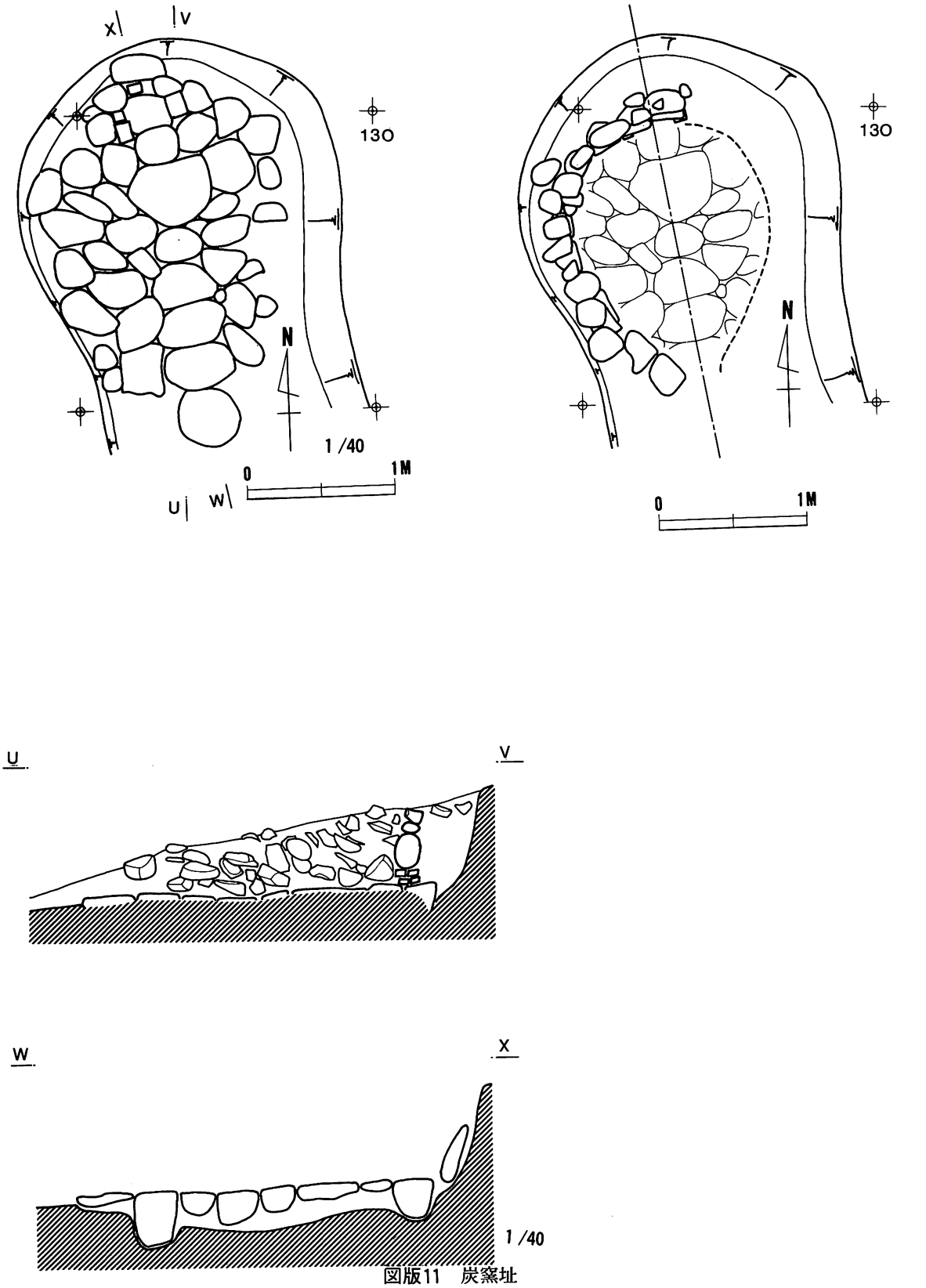
遺物としては表土中からは鍬などの鉄製品からセルロイドの玩具まで多々出土しているが、礎石を現わした段階でのいわゆる当時の面からは遺物は発見されていない。

b　炭窯址

炭窯址は昭和48年度トレンチ調査前の重機による地ならしの段階で焼土塊が当所周辺に散乱にあり、トレンチ調査時に覆土の縦半分を掘り下げ、炭窯址と判明している。トレンチ調査は以上の段階で止まっているので、今回の発掘調査はトレンチ内の精査と炭窯址の掘り下げられている部分の精査から始めた。

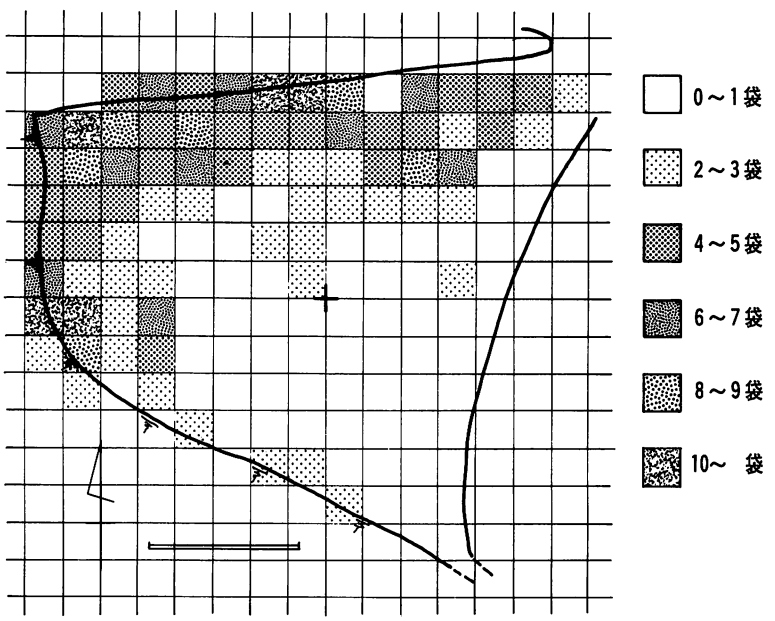
炭窯が造られたグリッドと地形はG－13Nの北東に位置し、北から南に流れる緩傾斜面に対して炭窯は、北に向って造築され開口部は南に開き、北に煙道部をもつ。

炭窯址は南北に長い掘り方をもつが、昭和48年度の発掘によって東半分が調査されているので今回は西半分を調査の対象とした。掘り方の規模は東西幅2.2m、南北は2.7m、開口部幅は1.7m、壁は垂直に近い立ち上がりをもち、サラサラした黒褐色土地山を掘り込んで無花果形を呈している。この掘り方の中に一面が扁平の大型河原石を床に平坦面を上に向けて敷き詰め、壁際に壁に沿って頭大の礫を積み重ねて窯を構築している。上面は重機によって破壊を受けて



図版11　炭窯址

いるが、石組の下部から3段目まで確認出来た。石組壁は南の開口部で0.3mの幅を持ち、北煙道部はレンガを2段ずつ積み上げその幅だけ煙道として、上部は石組壁を連続して回わす。煙道奥壁は一枚の扁平大型礫を立てかけ、煙と炎が垂直に近い角度で立ち上がるようになっている。覆土は火を受けて剝離された礫、焼土塊などが詰まっている他遺物は出土していない。



挿図4　グリッド別遺物袋個数表

3．遺物密集地と出土遺物

a　遺物密集地

今回の発掘調査開始直後に調査区域に無差別に入れた20個のグリッド（第１次グリッド）とその後５×５ｍのメッシュに沿って掘り下げたグリッドの（第２次グリッド）の遺物出土状況から見て、遺物の密集地が大きく３ケ所に分けられる。その１つは第１次グリット、G－1、G－4、G－8、G－11、第２次グリットではG－11E～G－11Q、G－12C～G－12Pの東西２列、その２は第１次グリットのG－2、第２グリットのG－14D、E、G－15DEの４グリット、その３は第１次グリットはG－3、第２次グリットのG－17C～F、G－18D～Fの７グリット分である。挿図４は各グリットについて層位は関係なく遺物袋ごとの量の増減を表にしたものである。その１の遺物密集地は調査区域の北辺にあたり、塩ケ森遺跡の南辺傾斜地遺物包含層の末端に位置するため、末端でも多量の土器、石器が出土した。しかし塩ケ森遺跡と元御所遺跡の間、数ｍの幅は末置収区域のため末調査なので、その層位的関係は不明である。その２の遺物密集地はその１の遺物包含層の末端が、元御所遺跡西辺に限って更に南にのびている。挿図４の遺物数でも判るように８、９袋も出土しているグリットが北から南へ連なっている。その３の遺物密集地は、北からのびて来る遺物包含層が、その２で一旦跡切れ、その３の区域に新たな遺物密集地が広がり、しかも殆ど平坦地である。

土器は前述１～３の遺物密集地から主に多量に出土したが、遺構確認作業は重機を使用したためグリットを掘り下げても１片の土器も出土しない区域が調査区の５割を占めた。図版12～15の土器類は出土した内のほんの一部で、器形・文様など不統一に掲載してある。口縁部に文様帯をもつ土器は主に竹管・隆帯・縄文側面圧痕によって文様が構成され、またそれが変化してそれぞれに紐を作る。器形もいわゆる吹浦のタイプから、図版13－10のように底・器壁とも四角い土器が出土している。これは底部と胴部下半の土器片しか出していないので、全体の様相は不明であるが、比較的深い沈線で直線と孤線・鋸歯状を描き文様としている。隆帯も図版13－11、14－18のような縦形の棒状貼り付け、図版13－13や14－20のように渦巻状の円形隆帯文が最も多く見られる。頸部に横方向に貼付されるものもある。地文も単節斜縄文、羽状縄文の他に変化の見られる結節文、図版14－14・18の木目状撚紋など円筒土器文化の接点に遺跡が位置するためか種類は多い。

b　土製品

土製品は板状土偶、立体状土偶、小型土器、土製円盤に分けられ、図版20に見られる板状土偶は6点出土している。図版20の1の土偶はG－11Ⅰの2層（黒褐色土）から他の土器片とともに出土した。これは左腕の部分と思われ、腕の中央と胴部の破線上に穿孔が見られる。沈線文が見られる外、側縁部は棒で窪みをつけた円文が縦に2列連なる。土偶2は重機の土取り後にそれによって攪乱された土の南西区粗掘中に出土した。それは胴部中央から下半が欠損しており、臍の突起は欠損している。顔面は小指程の粘土塊が貼り付けられ、刺突による窪みが2個見られる。穿孔は両腕と指圧により大きく楕円形に窪んだ口の中央に表裏面からあげられている。また口内の穿孔直下には臀部方向に胴部を縦に孔が貫通している。破損部の中央には穿孔が上に向ってあけられているが、1.2cmで止まっている。表面には縦方向に沈線が走り、裏面は同じく沈線が2本鋸歯状に走る。土偶3は重機の土取り後の北西区粗掘り中出土した。板状を呈し2本の穿孔が見られることから土偶としたが、片面は文様が無くまた片面は剝落しており、土偶ではなく、単なる土製品とも思える。土偶4はG－11Hの2層（ソフトな黒褐色土）中から出土している。頭部と左腕が欠損して、脚部も剝落している。臍の粘土塊貼付け突出部は残存しており、右腕には穿孔がみられる。表面の文様は沈線が描かれている。体の中心には縦に1本、それに沿って鋸歯状に2本の沈線が走る。裏面は同じく沈線が直線と鋸歯状、渦巻状に描かれている。腕の形状は土偶2と同様に三角形に先が小さく尖がり、脚部の先端も尖がる。土偶5はG－12Jの2層（ソフトな黒褐色土層）から出土しており、胴部中央から上半が欠損している。臍の突起は付され、股の間から穿孔が薄い板状が貫通している。表面の文様は臍の突起直上に沈線の渦巻きと、同じく臍を中心に方射状に半截竹管の内側の押し引きが施こされ、裏面は脚部に1対の沈線の渦巻きと胴部には1対の鋸歯状の沈線が施こされている。土偶6は同じく北東区の粗掘り中から発見され胴部1対の貫通孔から上半が欠損している。臍部には粘土貼り付けによる突起が見られ脚部の側縁ははり出し、股は切れ上がっている。表裏の文様は孤状の沈線と側縁に達する直線の沈線が見られる。

図版20－7は元御所遺跡出土唯一の土製円盤である。直径約6.3cm、厚さ1.1cmを測り、胴部に単節斜縄文を施こされた土器片を利用して周辺を打ち欠いて円形にしている。その他の土製品としては写真図版10－8は小型の土器底部と思われ、直径は2.4cm、口縁部は不明である。9は同じく小型の土器と思われるが、部位不明である。10と11は立体土偶の脚の一部であろう。

C　石器

元御所遺跡出土石器類の大半は粗掘り中か、あるいはグリット掘りの段階での発見であり、住居址や土坑覆土中出土の石器類は殆ど見られないため、これらの石器は一括して仕分けし、またその基準は個々の石器の属性を考慮して縄文時代出土石器の旧来からの名称を使用した。属性を細かく抽出した場合、これらが数類にまたがることもある。例えば凹石の凹み部は半円状扁平打製石器中にも見られ、また石篦にしても明らかに打製石斧と考えられる石器など、別項を設けて記述しなければならないような石器も含まれるが、仕分けされた石器の項目中に明記するにとどめた。

- 石（遺物）
  - 石器
    - Ⅰ剝片石器
      - 1 石鏃abcde
      - 2 石槍
      - 3 石錐
      - 4 石匙abcd
      - 5 石篦abcd
      - 6 掻器abcde
      - 7 削器abcd
      - 8 微小剝離石器
      - 9 特殊剝片石器ab
    - Ⅱ石核石器
      - 10片刃両刃石器
    - Ⅲ磨製石器
      - 11石斧
      - 12装飾品
      - 13石剣・石刀・石棒
      - 14特殊磨製石器
    - Ⅳ礫石器
      - 15敲石
      - 16磨石
      - 17砥石
      - 18石皿・台石
      - 19凹石abc
      - 20石錘
      - 21有孔石器
      - 22半円状扁平打製石器
  - Ⅴその他
    - 23石核・剝片
    - 24母岩

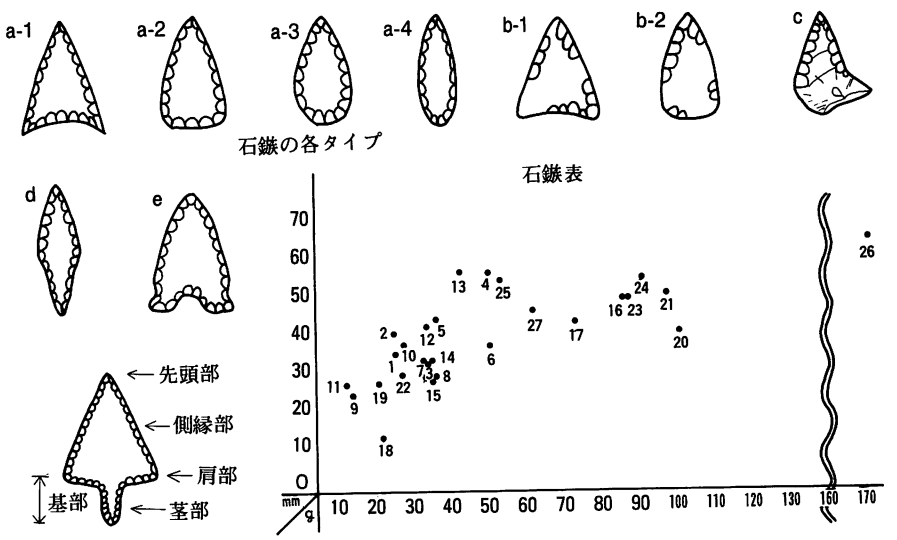
（Ⅰ）剝片石器

1．石鏃（図版21・22、写真図版11）

石鏃と石槍の相違は機能上明確に区別は出来るが、形態的には分類不可能に近い。元御所Ⅰ遺跡の場合、石鏃と石槍に近いものの総数は27点と少ないため、石槍は別項をあらためず27点を石鏃の範中に入れ、仕分けを行なった。

a－1（図版21－1～6）この6点の石鏃は緻密に両面ともに第2次剝離が施こされ、無茎鏃の内、基部が凹辺を呈している。先端と逆刺部は特に鋭利に尖がり、第21図の4と6は片面中央に第1次剝離を残している。アスファルト状付着物はみられない。a－2（図版21－7、8）この2点の石鏃はa－1と同様に両面から緻密に第2次剝離が施されているが、1面あるいは2面の中央に一部第1次剝離面を残している。側縁部と肩部はやや丸みをおび、基部は平坦かやや凸辺状を呈する。a－3（図版21－9）この類は1点しか発見出来なかったが、両面に緻密に第2次剝離が施こされ、1面の中央に第1次剝離面を残している。尖頭部は特に鋭利に剝離され、側縁部は曲線をもって全体的には木葉型を呈する。a－4（図版21－10～13）この4点は縦に長く基部は凸辺状を呈し、緻密に2面とも第2次剝離が施こされている。第21図13は両面に第1次剝離面を残し、側縁部の一部に第2次剝離が及ばない所がみられる。

b（図版21、22－14～21）b類は鋭利な尖頭部をもつが、全体的に粗雑なつくりで、第2次剝離も不規則に施される。b－1は3点出土しており、基部がともに凹辺を呈する。b－2は5点出



挿図5　石鏃の各タイプと表

土しており基部が平坦とやや凸辺状を呈している。またb－2の17、20、21は定形性がみられる小型石篦の可能性もある。

c（図版22－22、23）この2点は剝片から第2次剝離によって鋭い尖頭をつくり出してはいるが、2点とも第1次剝離時のバルブを明僚に残しており側縁部の一部と基部が未だ剝離を受けてないことから未完成の石鏃と思われる。

d（図版22－24～26）この3点は有茎鏃に属し、長さ重量は他の石鏃より大きく石槍的要素が強い。両面に第2次剝離が施こされ、25はこの内でスタンダードな型であろう。

e（図版22－27）27の1点は特殊な型をしており両面とも第1次剝離面が残されているが、側縁部と尖頭部、基部に連続的に第2次剝離が施こされている。特に基部は中央と両側からえぐるように剝離がみられ、双茎を呈する石鏃である。

2．石槍　出土していない。

3．石錐（図版23－1～6、写真図版11）

石錐は総数6点を数え、出土頻度は他の石器類にくらべて少ない。全体的に調整剝離を施した石錐は無く、剝片の先端を細く加工して作り出した錐でこの穿孔部の端に光沢が観察された。

4．石匙（図版24～29、写真図版12、13）

石匙は作り出しによるつまみを有する石器で、かつ腹面の打瘤の位置がつまみの中央を通る軸線に対しておよそ直角方向におかれる石器を横型石器（a）腹面の打瘤の位置がつまみの中央を通る軸線に即する石器を縦型石器（b）としたが、その中間に属するつまみの中央を通る2軸線と体部の長軸線が斜めに交わる石器類は打瘤の位置によって縦型石器の範中に入ると思われる。これらの石匙は主に片面の縁辺に第2次剝離を施こして刃部を作り出し、その反対の面にはつまみ部と縁辺の一部に部分的に調整剝離を加えているのみで、第1次剝離面をそのまま残す場合が多い。石匙の総数は83点あり、このうち横型は30点縦型49点つまみ部のみの石匙は4点である。

a－1（図版24－1～12、26）13点これに仕分けした石匙は横型でつまみに対する側線が凸辺状に弧をえがく。第24図の3の石匙は体部の一端が尖がり第24図の4と8の石匙は片面が全面的に調整剝離されている。a－2（図版25－13～19）この石匙は横型のうち、つまみに対する側縁が平坦である。点数は7である。17と18の側縁はやや凸辺状を呈している。

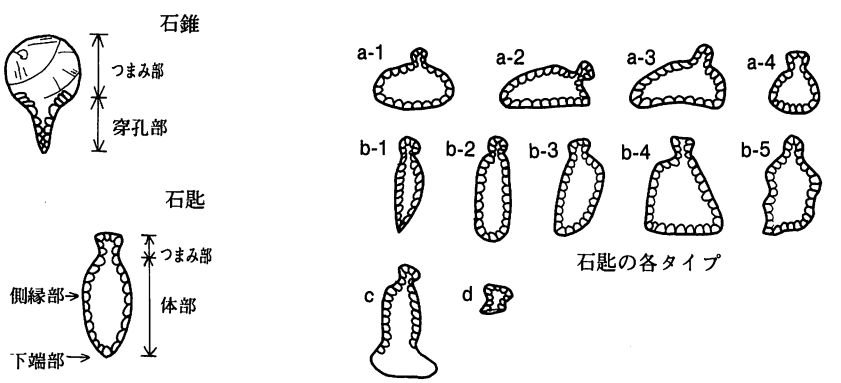
a－3（図版25－20～23）これに仕分けした4点の石匙はともに横型で、つまみに対する側縁が凹辺状を呈している。23の石匙は大型で側縁が特にえぐり込まれている。a－4（図版26－24・25）この2点の石匙は体部が小さく円型に近い。a－5（図版26－27～29、図版29－70）4点の

石匙は横型であるが、破損品である。

b－1（図版26－30～32）bは縦型を含めb－1に仕分けした3点は、体部が細長く、下端が尖がる石匙類である。b－2（図版26－33～41）この石匙はb－1ほどではないが、体部が細長く、下端が円く処理されている。34、36、41の3点は下端が自然面或いは第1次剥離面をそのまま残している。b－3（図版27～29－42～66）この類に仕分けした石匙は最も多く、25点を数える。それらは縦型であるが、前述したところのつまみの中央を走る軸線と体部の長軸線とが鋭角をもって交わる石匙が大半含まれる。44、47、59、64の4点は打瘤の位置と打瘤が存在すると思われる位置が、つまみと反対方向にみられ、また54、58、61の3点は調整剥離された面の下端が第1次剥離をそのまま残している。b－4（図版29－67、68）この2点の石匙は縦型を呈し、体部は肩が張った台形である。b－5（図版29－69、71）この2点は体部における調整剥離が不統一で側縁の凹凸がみられる。b－6（図版29－72～75）この4点は破損品であるが、打瘤方向から縦型の石匙に加えた。

c（図版29－76、77）この2点の石匙はつまみ部分は表裏ともノッチが加えられているが、体部の一側縁には調整剥離が及ばず元の剥片形を残しているので、未製品である。次の78、79の2点はつまみ部は完成されているが破損品と考えられる。

d（図版29－80～83）この4点はつまみ部のみで体部は欠損しているが、80の場合小型の体部にもわずかに調整剥離が加えられ、小型の完成した石匙であろう。



挿図6　石匙の各タイプ

5．石篦（図版30～35、写真図版14）

石篦は両面に調整剥離が施こされ、同一形態ながら大中小の差がみられる。定形性の強い石器である。総数は75点を数える。

a－1（図版30－1～12）12点。大型の縦長石器で、下端刃部近くに最大幅をもち、側縁は凸辺状に孤をえがく。8の下端は平坦に近いが、両側縁が平面的な形状からa－1類に入れた。a－2（図版31－14～21）8点。これらの石器はa－1を小型にした形状を呈し下端の刃部は円味をおびている。a－3（図版31・32－22～34）13点。やや定形性からはずれる石器も見られるが、小型で両側縁が円味をおび、下端の刃部も同様である。最も小さい石器は32の長さ3.1cmである。

b－1（図版32～34－35～52）18点この石器類は両面の両側縁に調整剥離が加えられ、刃部が下端にある台形の石篦である。刃部は平坦に調整されているが、41、42、43、44の4点は刃部の両面とも第1次剥離面か原石の自然面を残している。b－2（図版34－53～57）5点。b－1の類の小型品で、基部は尖がり、両側縁は2等辺三角形の辺の様に平坦である。57は両側縁は凸辺状に孤を描くが他はb－2の属性に合っている。

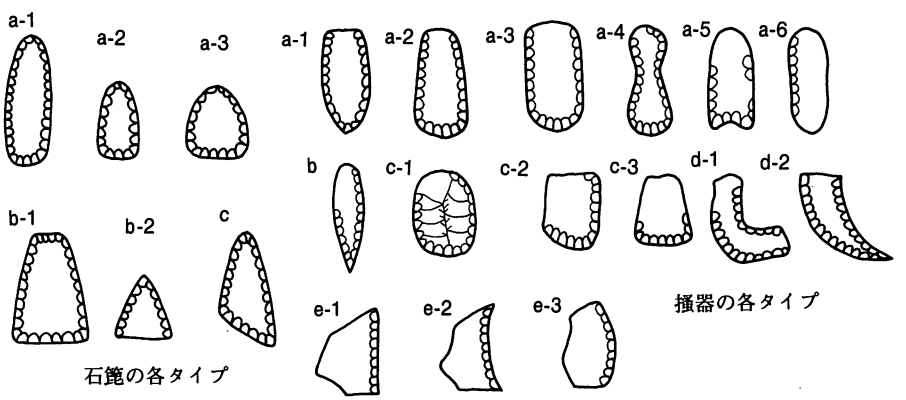
c（図版34－58～62）5点。大型の石篦でb－1類に似ているが、刃部が体部の長軸線に対して直角につくられていず、斜行している。前述の53も刃部が斜行している。

d（図版35－63～75、図版31－13）14点。破損品である。

6．掻器（図版36～47、写真図版14～17）

元御所遺跡の掻器は刃部が片面剥離で刃部角度が60～80°もある。石器類のすべてを加えたため、その総数118点に達している。

a（図版36～38－1～33）a仕分けした掻器は平面が長楕円形あるいは棒状を呈し、断面形はカマボコ形である。主に側縁かあるいは一端に刃部がつくられる。



挿図7　石篦・掻器の各タイプ

a－1（図版36－1.2）２点この掻器は平面が長楕円形と言うよりはむしろ基部が平坦で下端の刃部が先ぼそり、断面カマボコ形を呈している。a－2（図版36－3～12）10点。この掻器類の平面は下端近くに最大幅をもち側縁と円味をもつ下端に刃部がみられる。a－3（図版37－13、～19）７点。この掻器類は両側縁が平行を保ち、円味をもつ下端刃部に接続する。基部は不整で刃部は側縁と下端にみられる。a－4（図版37－20～24）５点。調整剥離された側縁は屈曲呈し、部分的にコンケイブド・スクレイパー部とエンド・スクレイパーが同居している石器である。a－5（図版38－25）１点。平面は棒状を呈し、下端の刃部が凹辺状をなしている。a－6（図版38－26～29）４点。平面は棒状を呈し、側縁に粗い調整剥離を施こした掻器である。a－7（図版38－30～33）この４点は破損品である。

b（図版38・39－34～40）この７点は平面が棒状を呈し断面が三角形の掻器である。一端が尖がり、側縁あるいは一端に刃部がつくられている。

c－1（図版39・40－41～49）この９点の掻器は平面が円型を呈し、刃部が円周の半分以上にみられる石器である。c－2（図版40～42－50～67）これら17点の石器は平面が不整円型を呈し、あるいは一辺以上の平坦な側縁をもつが、刃部は曲線をなし、その範囲は全周の半分以下である。c－3（図版42－68、69）この２点石器は曲線を呈する。凸辺状の刃部であるが、部分的であり、刃部の角度が浅いため、不定形石器の類であろう。

d－1（図版42－70～75）６点。これらの石器は平面的にはL字状を呈し、内側に凹辺した刃部をもついわゆるノッチド・スクレイパー或はコンケイブド・スクレイパーである。d－2（図版43－76、77）は下端が尖がる。基部は打面を残した石器も見られ、コンケイブド・スクレイパーの一種であろう。

e－1（図版44・45－87～99）e類は従来の不定形石器の内、刃部角度が60～80°の範囲にある石器を掻器として加えた。e－1は総数13点あり、刃部の辺が平坦である。e－2（図版45－100～102）の３点の石器は刃部が緩やかに内湾している。e－3（図版45～47－103～114）の11点の石器は前者とは反対に刃部側縁が凸辺状に曲線をえがく掻器である。

７．削器（図版48～52、写真図版17）

従来の削器はサイド・スクレイパーの名として用いているが、元御所遺跡では不定形石器類を削器としている。刃部形態は直刃、コンケイブ的、凸刃、両刃などあり、体部も定形性はみられない。また刃部の角度は浅く、刃部の調整剥離が見られない剥片に使用痕を示す刃こぼれが見られる石器も含める。

a－1（図版48－1～3）この３点の石器は１辺あるいは２辺以上の刃部をもち、その内の１辺が内湾している。２は使用痕の見られる部分が内湾している。a－2（図版49－20・21）の２個

の石器は基部から刃部先端にかけて一方に曲線を描く角状を呈する。刃角は浅く片刃である。

b－1（図版49－22～24）この3点の石器はラウンド・スクレイパーの様に平面形態が円形を呈しているが刃角が浅く、円周の半分以上に刃部の剥離が見られる。b－2（図版48・49－6～19）の石器10点は他の削器に比べて多少刃部辺が平坦であり、刃角は浅く多辺に刃部が見られる石器もある。b－3（図版50・51－25～43）の19点の石器は破損品も含まれ、刃部辺は凸辺状を呈する。38は大型の削器で1側縁に鋸歯状の調整剥離が加えられている。

c（図版51・52－44～56）の13点の石器は刃部の形態は不統一であるが、1辺が両刃状に刃部調整の剥離が施こされている。

d（図版52－1～3下段）この3点の削器は1側線或はこの側縁に対辺する例縁に刃部のための調整剥離が施こされ、他の同じく対応する2側縁は剥片切断している。この3点の他に12、36の2点も剥片を切断して調整している。

8．微小剥離石器

a（図版52－1～6中段）この6点は剥片の1側縁に使用痕と思われる刃こぼれの微小剥離が連続してみられる石器である。

9．特殊な剥片石器（図版53）

a（図版53左下石器）この1点の石器は平面が三角形を呈し、下端に両刃の規則正しい調整剥離が施こされている。またこの外湾した刃部の端は擦りつぶされており石棒や石斧の上面をならすために細かくたたいて刃がつぶれた使用痕であろう。

b（図版53右下1.2）この2個の石器は形態的には打製の石斧かと思われる。大型の剥片石器を利用して両側縁の上端近くをノッチ状に両面から調整剥離を施こし、その後その部分をつぶしている。また2の場合下端は第1次剥離をそのまま残し刃部としている。その場合は下端は欠損しており不明である。

Ⅱ．石核石器

10．片刃石器（図版53－1.2）

この類は2点あり、大型で厚みのある石核を使用して孤をなす側縁の一部に片面から刃角60°～80°をもつ急角度を持って調整剥離を施こし刃部を作り出している。特に刃部先端は磨滅して光沢が観察出来る。形態は掻器であるが、剥片であるより石核を利用していると思われ、他

の報告書では、コア・スクレイパーあるいは大型粗製刃器の名称を与えているが、元御所遺跡出土のこれら２点の石器は石核石器の類に加え、大型掻器と考えている。この調整剥離技法は、剥片石器中の掻器のそれと変ることなく、丁寧に剥離されており、近年岩手県内の縄文時代中期、後期の遺跡から発見される。いわゆるコア・スクレイパーとは異なる石器である。

Ⅲ．磨製石器

11．石斧（図版54・55－図1～8写真図版19）

本遺跡から発見された石斧は８点数え、その内完形品は２の１点である。７点の破損品のうち横に割れたつまり基部（装着部）と刃部が分離した石斧は６点あり、基部部分のみの破損品は４点、刃部のみは２点あり、また石斧の縦半分に割れた破損品は３の１点だけである。板状の母岩を石斧の原形に切り取った擦切り痕跡のみられる石斧は1.3の２点に１本ずつ、７の１点に２本ある。それは石斧の側縁部に残され、７の場合は１側縁の表裏からはさむように擦切り痕が見られる。破損後の再利用については、１の場合破損部の割れ口に部分的に再度磨いたあとが残り、基部の欠損後に割れ口を若干石研磨して刃部を再度利用したと思われる。６の場合は破損後基部の部分を開いて基部と破損部の両端に敲打により剥離された刃部を作り出し、その両端を小きざみに敲打する敲石として転用している。5.4.6.8の石斧の場合、基部によった側縁の角の部分に横方向に数条のきず痕と思われる沈線がみられ、石斧の着装部位と一致するので、着装痕と考えられる。

12．装飾品（図版55－2.3）

装飾品類は２点出土しているが、元来用途不明のものである。２は凝灰岩製の単孔で厚みのある円型石製品である。規模は径3.7cm、厚さ1.6cm、孔の最大径1.7cm孔の最小径0.6cmをはかり、穿孔は傷跡から錐様の遺物で右回軸で貫通したと思われる。３は上下は欠損しているが長さ2.2cm、幅0.7cm、厚さ0.3cmを側る小型の棒状石製品である。表面は研磨されており装飾品の一部かと思われる。

13．石剣、石刀、石棒（図版55－1）

１の石器は上下端が欠損しているが、長さ12.7cm、断面が楕円形の長径3.3cmを側る石棒の一部かと思われる。表面は円棒に研磨され、上下方向に走る傷跡が目立つ。

14．特殊磨製石器（図版55－4）

4の石器は同じく上下端が欠損しているが、石棒状遺物の表面が薄くはがれ側縁を利用して磨り切ったと思われる磨面が側縁にわずかに見られる。小型の石製品で、長さ4.4cm、巾2.3cm、厚さ0.4cmを測る。

Ⅳ．礫石器

15．敲石

敲打痕のみを残す礫石器類は当遺跡からは発見されなかった。しかし他の石器類の属性の一つとして敲打痕をもつ石器は、再利用の石斧や磨石、凹石、半円状扁平行製石器などの中に見られる。

16．磨石（図版56－1～4）

当遺跡から磨石は4点出土し、すべて完形である。1～3の石器は厚みのある円礫の河原石を利用して表裏の扁平な部分を磨りつぶしている。磨面は光沢が見られる程つるつるで、縁辺は自然面である。4の磨石は棒状を呈した円礫で、一面を磨面としている。

17．砥石（図版56－1.2）

当遺跡発見の砥石は2点で出土頻度は少ない。1の砥石は破損品であるが、表面の一部に磨かれた面が見られる。2の砥石は扁平で楕円形を呈した河原石の上面に条痕が2本走っている。うち1本長さ5.4cm、幅0.3cm、深さ0.1cmと細長い窪みをもち、他の1本は長さ2.3cm、幅0.5cm、深さ0.1cm小さい痕跡である。

18．石皿・台石

当遺跡からは石皿・台石類は出土していない。一般的に縄文時代の前期末から中期初頭に出土する石皿類は扁平な河原石をそのまま利用していることが多く、使用した痕跡が見られない石皿は当遺跡では3点出土している。

19．凹石（図版57～59－1～21）

凹石の総数は21点出土し、形状で3に仕分けした。凹み部1個の石について、1点から数点みられ、それらが連続して痕跡をもつものもあり、また表裏2面に凹みが見られる石器は多い。凹み部の断面は針を突いたような浅いもの、窪みがはっきりして皿状を呈するもの、また中央

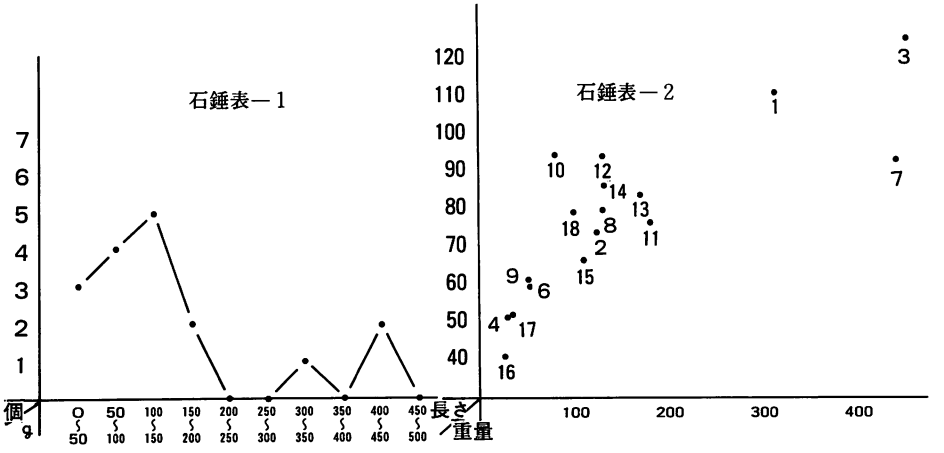
が深く蟻地獄状を呈するものなどさまざまである。a（第57図1～7）この7点は外形が円形からやや楕円形を呈し、厚さはさまざまである。b（第58、59図8～17）この10点、凹み石は上下に長く、全体的にやや薄手である。c（第59図18～21）この4点の凹石は扁平で半円状を呈し、21は縁辺が部分的に剝離されている。

20．石錘（図版60.61－1～20）

当遺跡の石錘は20点を数えるが、他の石器総数から見るとかなり少ない量である。この内径4cm前後の小型石錘は9と15の2点ある。大半は対応する2方向に抉りを入れ縄を掛ける石錘であるが、8、14、16の場合3方向から縄を掛ける方法をとっている。これらの石器はともに多角形に近く、2方向に抉りを入れ、他は自然面の側縁を利用している。これらと形態的に別個の石錘状石器（図版55－5）が1点出土している。棒状の河原石を利用して、長さは7.4cm、最大幅は2.1cm、厚さは1cmの規模をもち、長軸端の2ケ所に2.3本ずつの刻みを入れている。柔らかな石質なのか、粗末な刻み方から、それらと別な使用目的が考えられる。

21．有孔石器（図版61－21）

当遺跡における有孔石器は1点の出土であり、円礫の河原石に自然にあいた孔に人工的に手を加えて孔道をととのえたと思われる。



挿図8　石錘表

22．半円状扁平行製石器（図版62～88、1～178写真図版22～27）

当遺跡から出土した半円状扁平打製石器と同様の属性をもつそれに近い石器の総数は178点で総数の40％である。今回の調査出土中で半円状扁平行製石器に仕分けした石器類はその形状が、①半円呈し、②扁平であること、③半円の径の部分である。或は弦の部分に磨面をもつことを基準とし、更には④半円状扁平で磨面のもたない石器、⑤半円を呈さないが扁平で磨面をもつ石器（断面三角形）も広義の半円状扁平打製石器として加えた。これらの石器は横刃形石斧、包丁形石器、特殊砥石の名をあたえている報告書もあるように、未だ名称が確立しておらず上記の⑤は円筒土器文化以外に東北以外の縄文時代早期の遺跡からも出土している。またこれらの石器と属性が共通している。北海道・青森県内に出土している石冠、青森県内に出土している抉入扁平磨石器は当遺跡では出土していない。弦の部分にみられる磨面が半円状扁平打製石器の主たる使用痕であるが、他に表裏面中央に凹石の凹み部が完形石器中22点、31％にみられ、上下端には剥離による抉入痕が完形石器中23点、32％の割で見られる。これは装着にかかる痕跡であるか、直接切削敲打に使用したか不明であり、また側縁の孤の一部にある敲打痕は半円状にあるための調整痕であるか、敲打として使用した痕跡であるか判然としない。半円状扁平行製石器中破損石器は107点で全体の60％を占めるが、この107点のうち破損面に擦面をもつ石器は37点で破損品の33％にみられる。この類は破損した石器の転用と考えられ、痕跡の位置は磨面に近く親指程の範囲で、つるつるに研磨されている。これらの属性を考慮して主に形状を基に細分すると以下の通りとなる。

a（図版62・63－1～7）

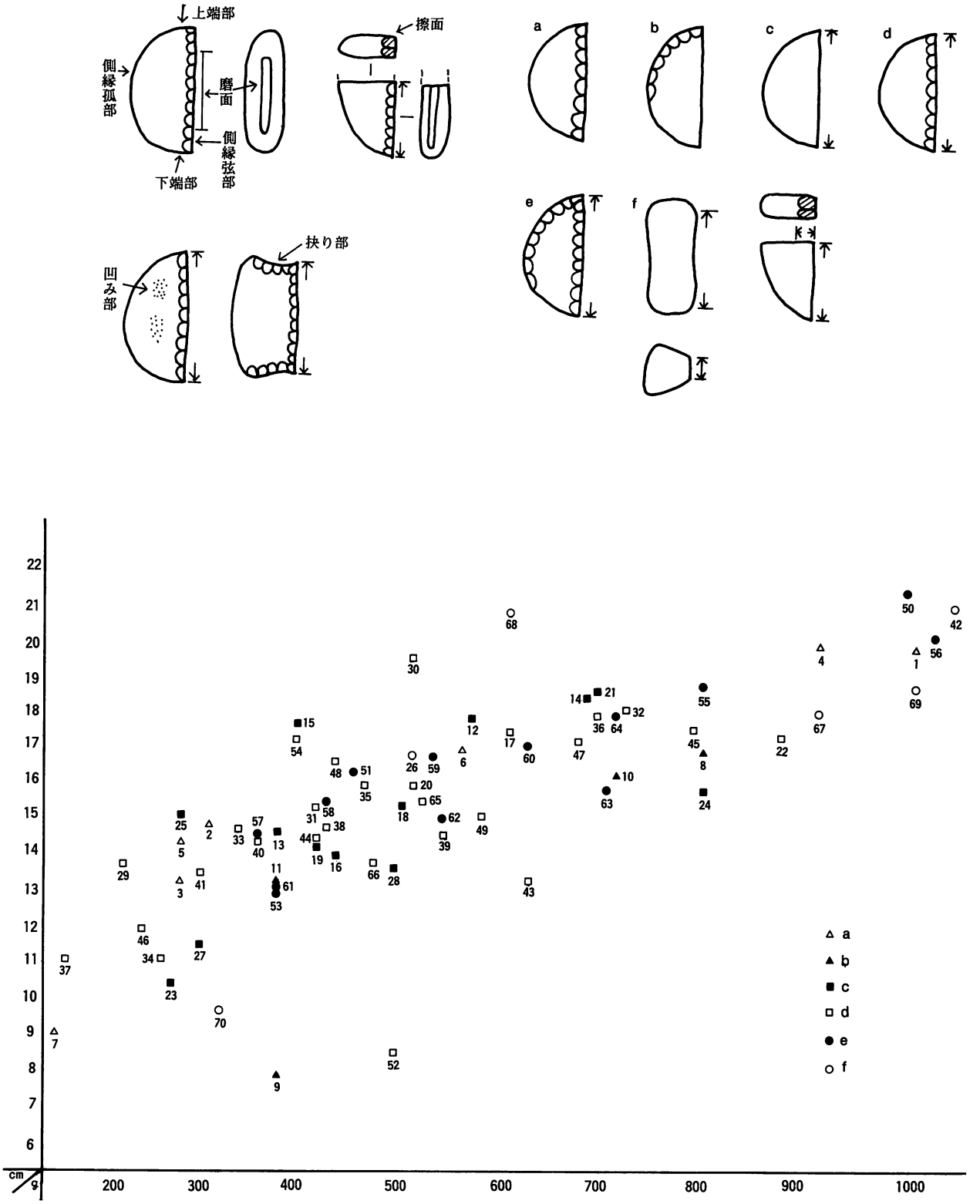
この７点の石器は側縁の弦の部分に両面から剥離を施こしているが、磨面をもっていない。側縁の孤の部分に調整剥離は施こされていない。端部の抉りは石器１に面の凹みは石2.5に見られ、石器４の場合は表裏一面に手頃にするための調整剥離が加えられている。

b（図版63、8～11）

この４点の石器は側縁弦部に自然面を残しており磨石はみられない。石器8、10は側縁の孤の部分に半円状をなすように調整剥離が加えられ、端部は抉り込まれている。石器9、11の場合は端部に両面からの剥離が施され敲石としての使用と考えられる。

c（図版64～66－12～16、18、19、21、23～25、27、28）

この13点の石器は側縁弦部に磨面と刃こぼれ状の小剥離がみられ側縁孤は調整剥離はみられず自然面のままである。弦部における剥離は元来施されていないと思われ、小剥離痕は使用時の刃こぼれであろう。c類の原石は２種類あり、前者は扁平楕円形を呈し、半円状にはならず楕円形の１側縁を磨石に用いている。後者石器26、27、28は厚みのある長楕円形を呈し両端に抉りがみられる。また表裏面にみられる凹部をもつ石器は12、14、16、21、25の５点である。



挿図９　半円状扁平打製石器

・d（図版64～73－17、20、22、29、30～41、43～49、52、54、65、66）

d類に仕分けした石器は27点と特に多い。これらは側縁弦部に両面から刃部作り出しのための調整剝離を施こして磨面をもっている。側縁孤部には調整剝離はみられないが、両端抉りのための剝離はdの分類基準には含めない。表裏面抉にみられる凹みをもつ石器は17、20、30、34、35、36、38～41、46～48、66の14点、両端に抉りをもつ石器は44～49、52、54、65、66の10点を数える。

e（図版70～72－50、51、53、55～64）

e類に仕分けした石器は13点で、側縁の弦の孤部に調整剝離を施こし、弦部に磨面をもつ。表裏面に凹みをもった石器は51の1点ではなく、両端に抉りをもつ石器は50、58、59、63の4点に見られる。

f（図版66～73－26、42、67～71）

この7点の石器は断面三角形で磨面を1側縁をもつ。石器26は両端部に抉りをもち69は同じ両端部に両面からの剝離が施こされているが、抉られておらず、敲石状の使用痕かと思われる。また石器42と68は磨面に側って剝離が見られるが、石器67と70、71は磨面のみである。石器70と71は半円状扁平打製石器中最も小型の石器である。

g（図版74～79－72～106）

この35点の半円状扁平打製石器破損品は、全破損品107点の中から破損部断面中に見られる擦面の痕跡を残す石器のみ抽出したものである。擦面の位置は破損断面中の磨面によって、親指の範囲のみ研磨されている。破損断面は凹凸が激しいが、擦面は凹凸を地ならしせずそれにそってつるつるな光沢が観察される。側縁部の磨面は敲打と磨りつぶしの作用によって出来た痕跡、破損断面の擦面は強く擦りみがいた痕跡と考えられる。よって、面の違いを磨面と擦面とに区別した。

h（図版80～88－107～178）

これらの石器はg類を除いた単なる破損品で72点である。

参考文献

工藤竹久　「北日本の石槍、石鏃について」『北奥古代文化』9号
青森県教育委員会　『熊沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書38集
鈴木道之助　『図録石器の基礎知識』　柏書房
赤沢威・小田静夫・山中一郎　『日本の旧石器』　立風書房
岩手大学考古学研究会編　『大館町遺跡』　1978
宮城県教育委員会　『上深沢遺跡』宮城県文化財調査報告書第52集

Ⅳ．まとめ

縄文時代の竪穴式住居址は総数12棟が検出された。住居址に直接伴う遺物は少なく、覆土中の土器片の最も新しい時期と住居址形態から、10号住居址を除いた1～9住居址、11、12号住居址は縄文時代前期末から中期初頭（大木6～7）に建てたものと思われる。11号住居址と12号住居址は新旧関係にあり、12号住居址の方が新しいが、遺物から見ると近接した時期の移り変わりであろう。10号住居址は大木8b～9の土器形式の土器片が数点覆土中に混じることから縄文時代中期中葉であろう。

現代まで使用していた建造物の土台礎石建物址の発掘調査は一見意味が無い調査に思えるが、遺構の項で記述した様に遺構の構造や構造にかかわる諸事項は不明と言わざるを得ない。ましてや一般住民の居宅は殆ど判明していないにもかかわらず、まったく少ない資料を用いて近世・中世にさかのぼって居宅の構造の歴史を解明することはそれこそ意味がない事になる。現在生活している或いは使用している建物であっても、その築造当時は30年50年前に遡ることが出来る建物は多々見られ、これらを調査して比較出来る資料の積み重ねによって100年200年前の更に古い建物址を追求する事が可能になる。

昭和48年度の発掘調査には、下記の人々が従事した。

高橋吉太郎　瀬川与四蔵　瀬川芳一　瀬川伯人　瀬川七蔵　瀬川秀雄　高橋喜代見　高橋久三　森下仁太郎　藤本理八　泉川清治　泉川道三　大鷲喜兵エ　泉川三郎　大鷲一二　瀬川エイ子　泉川スギノ　瀬川イマ　瀬川トミエ　瀬川敬子　高橋フジ　高橋ミサ　高橋ハル　高橋トキノ　村上トミエ　瀬川ハナ　村上ツギ　高橋ツギ　土川シゲ　広瀬ナカ　大鷲ナツノ

昭和55年度の発掘調査には、下記の人々が従事した。

簗田政高　高橋吉次　斎藤他人松　斎藤千次郎　斎藤登　斎藤百松　斎藤トシエ　伊東茂子　佐藤リツ　佐藤トキ子　簗田チエ　斎藤チエ子　斎藤静子　伊東歌江　斎藤良子　田中征子　高橋トシ　高橋サダ　斎藤ハルエ　近谷クメ　伊東イツ　斎藤スナ　斎藤ミヤ　佐々木トミ　佐々木アン　斎藤イネ　斎藤ハナ　斎藤サツ　斎藤サト　斎藤ハル　斎藤アン　斎藤ツエ　斎藤ミエ　晴山文子　佐藤キヨミ　遠藤リヨ　斎藤ミヤ子　斎藤サメ　斎藤トキ　斎藤シゲ　藤倉サヨ　西村サメ　工藤アキ　三上キミノ　梅村ヨウ　大坪チギ　高田クメ

徳田市重郎　細川与次郎　瀬川スエ　徳田キエ　細川キミエ

田中利光　斎藤道男　小笠原美栄子　石塚睦子　菊池賢治

昭和55年度・56年度の室内整理作業には、下記の人々が従事した。

高橋サキ　長瀬キヌ　広瀬良子　川崎昭子　田中征子　斎藤良子　浅沼則子　浅沼玲子　越戸ミヨ　佐々木マキ子　斎藤静子　斎藤ミヤ

大木絹子　阿部恵美子　小室登美子　佐藤みち子　中山すみ子　佐々木キヌ　大久保文子
高橋しで子　簗田和子　浅沼愛子

1．石鏃

図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
21	1	G-3,3層暗褐色	36.0	19.0	4.6	2.15	完　形
〃	2	G-15C,3層暗褐色	42.0	18.0	4.0	2.02	〃
〃	3	北西区粗掘	33.5	20.2	5.6	2.92	〃
〃	4	北西区、粗掘	57.6	20.4	5.0	4.54	〃
〃	5	〃	45.1	18.6	5.0	3.21	〃
〃	6	G-11 Ⅰ,2層黒褐色	38.0	12.2	5.7	4.55	〃
〃	7	G-11 F,2層暗褐色	35.0	16.7	5.8	2.85	〃
〃	8	TrA-1,pit埋	30.7	15.6	7.4	3.23	〃
〃	9	TrA-1,	26.2	12.5	3.3	0.90	〃
〃	10	北西区，粗掘	38.2	12.0	5.7	2.37	〃
〃	11	TrA-1	28.0	9.3	3.2	0.70	〃
〃	12	G-18 D,2層暗褐色	43.5	12.6	5.7	2.97	〃
〃	13	G-3,2層暗褐色	57.8	12.3	5.3	3.71	〃
〃	14	G-7,2層暗褐色	35.0	22.1	4.5	3.02	〃
〃	15	G-130,3層にぶい黄褐色	29.4	23.0	5.3	3.19	〃
22	16	G-8,2層黒褐色	50.9	22.3	8.2	8.23	〃
〃	17	北東区，粗掘	45.0	24.0	6.0	6.85	〃
〃	18	H	14.1	13.0	4.6	1.57	〃
〃	19	TrA-1.pit埋	28.0	14.1	4.2	1.52	〃
〃	20	北西区，粗掘	42.2	22.9	11.5	9.53	〃
〃	21	北東区，粗掘	52.7	25.7	7.7	9.36	〃
〃	22	G-15 C,3層暗褐色	30.7	19.2	5.5	2.31	未成形
〃	23	G-3,2層黒褐色	50.3	28.6	6.0	8.27	〃
〃	24	G-1表	56.0	22.0	10.6	8.62	完　形
〃	25	G-15,3層黄褐色	56.0	16.7	11.8	4.83	〃
〃	26	北西区，粗掘	60.8	21.0	14.0	16.62	〃
〃	27	G-18 D,2層暗褐色	47.4	26.0	4.4	5.72	〃

3．石　錐

図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
23	1	G-17C,2層暗褐色	66.5	29.2	11.2	16.26	完　形
〃	2	G-11N,2層黒褐色	41.3	32.4	9.0	8.05	〃
〃	3	北西区，粗掘	36.2	18.9	7.8	4.54	〃
〃	4	北西区，　〃	35.4	24.0	4.9	3.81	〃
〃	5	G-18D,2層暗褐色	43.8	29.7	8.3	8.18	〃
〃	6	北西区，粗掘	38.0	20.1	6.5	4.80	〃

4．石　匙

図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
24	1	G-17 D,2層暗褐色	66.0	38.3	8.5	19.40	完　形
〃	2	G-3･2層黒褐色	58.0	44.0	9.7	22.22	〃
〃	3	22K-1土坑.東フク土	60.9	41.2	9.5	15.98	〃
〃	4	G-14 C,2層暗褐色	64.5	45.7	10.5	25.42	〃
〃	5	北西区，粗掘	59.5	57.9	13.5	36.90	〃
〃	6	G-18 E,2層暗褐色	57.0	41.7	5.6	11.25	〃
〃	7	G-18 D,　〃	44.3	43.0	6.6	10.39	〃
〃	8	G-7,3層暗褐色やや明るい	47.4	29.6	5.0	6.60	〃
〃	9	南西区，粗掘	49.9	47.1	9.4	19.00	〃
〃	10	北東区，粗掘	54.6	44.6	8.2	13.15	〃
〃	11	南西区，　〃	41.5	38.5	8.6	9.72	〃
〃	12	北西区，　〃	53.7	33.0	9.3	12.90	〃
25	13	G-7-3層暗褐色やや明るい	80.0	31.2	10.0	26.55	〃
〃	14	北西区，粗掘	49.5	41.8	9.2	17.53	〃
〃	15	G-17 D,2層暗褐色	59.9	36.3	13.5	20.69	〃
〃	16	G-7,3層暗褐色	58.7	47.8	9.5	21.85	〃
〃	17	南東区，粗掘	64.0	45.0	11.8	25.61	〃
〃	18	G-11 Ⅰ,2層黒褐色	57.2	40.4	7.5	17.72	〃
〃	19	G-12 Ⅰ,　〃	59.9	37.8	7.7	16.00	〃
〃	20	北西区，粗掘	59.0	32.7	11.0	20.07	〃
〃	21	G-12C,3層黄褐色	59.5	31.3	6.2	8.90	〃
〃	22	G-18C,2層暗褐色	54.2	41.8	5.3	10.55	〃
〃	23	G-3,3層　〃	85.4	47.5	7.5	23.70	〃
26	24	TrA-1,b-d	38.7	35.5	6.9	7.20	〃
〃	25	南西区，粗掘	41.9	41.4	11.3	14.01	〃
〃	26	TrC-1,d-g	49.0	30.4	6.5	10.86	〃
〃	27	G-18D,2層暗褐色	28.0	26.2	10.7	4.25	破損品
〃	28	G-18D,　〃	60.2	40.5	7.5	17.46	完　形
〃	29	南西区，粗掘	35.5	31.4	4.1	3.76	〃
〃	30	TrC-1,b	68.6	17.4	6.8	8.34	〃
〃	31	TrB-3,c	59.7	15.5	6.4	5.29	〃
〃	32	G-19D,2層暗褐色	84.3	22.3	8.0	13.92	〃
〃	33	盛土内	72.5	24.9	13.0	22.31	〃
〃	34	G-18D,2層暗褐色	60.3	23.9	6.4	8.79	〃
〃	35	G-17D,　〃	61.0	21.8	9.7	9.20	〃
〃	36	G-16C,　〃	61.5	20.1	6.9	7.65	〃
〃	37	G-16C,2層黒褐色	76.0	22.3	8.4	14.74	〃
〃	38	G-15D,3層黄褐色	82.7	26.8	10.1	24.84	〃
〃	39	G18E,2層暗褐色	81.0	24.6	10.4	22.10	〃
〃	40	G-13C,2　〃	52.9	20.0	6.7	8.43	〃
〃	41	北西区，粗掘	47.8	16.8	5.5	5.05	〃
27	42	G-12G,2層黒褐色	64.8	26.4	7.4	14.65	〃
〃	43	G-12E,2層暗褐色	69.0	35.5	11.3	21.65	〃
〃	44	G-4,2層黒褐色	78.4	33.4	12.0	22.86	〃
〃	45	南西区，粗掘	75.3	25.8	12.0	29.56	〃
〃	46	G-15 C,3層黄褐色	66.3	24.8	3.1	16.93	〃
〃	47	G-13C,2層暗褐色	68.2	38.6	10.7	23.50	〃
〃	48	TrA-Ⅰ,d-F	61.8	32.5	6.4	11.26	〃
〃	49	北西区，粗掘	62.5	31.0	8.2	14.40	〃
〃	50	TrA-2,b	68.0	32.2	5.9	13.04	〃
〃	51	北西区，粗掘	57.6	29.8	11.1	13.98	〃
〃	52	G-3,2層黒褐色	58.3	30.4	7.4	14.34	〃
〃	53	南西区，粗掘	42.6	32.5	0.8	9.60	〃
28	54	G-3,2層黒褐色	68.0	26.0	8.3	10.65	〃

図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
28	55	G-17D,2層暗褐色	63.4	26.3	9.9	14.56	完　形
〃	56	G-17D,　〃	45.8	27.2	6.0	11.49	〃
〃	57	南西区，粗掘	58.8	28.7	9.0	13.67	〃
〃	58	G-11G,2層暗褐色	79.2	32.0	7.4	19.01	〃
〃	59	5号住，フク土中	40.0	33.0	5.5	15.80	〃
〃	60	南西区，粗掘	58.6	33.8	9.0	19.43	〃
〃	61	〃　〃	64.5	33.7	6.0	13.03	〃
〃	62	G-12F,2層暗褐色	66.5	36.3	17.0	38.17	〃
〃	63	G-8,2層黒褐色	56.4	27.9	10.0	16.85	〃
〃	64	G-18D,2層暗褐色	65.1	33.0	8.1	18.69	〃
〃	65	G-12M,3層　〃	67.0	29.5	10.6	21.00	〃
29	66	G-11Ⅰ,2層黒褐色	41.6	17.3	5.5	4.19	〃
〃	67	G-12E,2層暗褐色	60.5	41.0	7.7	20.48	〃
〃	68	G-17D,〃　〃	54.3	38.6	8.9	18.64	〃
〃	69	G-18C,〃　〃	56.4	27.0	7.0	9.46	〃
〃	70	5号住，フク土中	23.7	16.0	11.4	6.71	破　損
〃	71	北西区，粗掘	71.3	41.4	17.1	53.35	完　形
〃	72	北東区，〃	46.2	33.2	7.8	8.23	破　損
〃	73	G-11Ⅰ,2層黒褐色	57.2	53.9	9.0	21.34	〃
〃	74	南西区，粗掘	49.0	35.0	9.0	10.98	〃
〃	75	〃　〃	55.3	37.0	4.6	9.55	〃
〃	76	G-18D,2層暗褐色	59.0	38.5	8.0	13.11	未整形
〃	77	南西区，粗掘	68.4	33.5	8.5	17.90	〃
〃	78	〃　〃	64.5	36.6	10.7	16.10	完　形
〃	79	G-17C,3層暗褐色	47.8	30.2	7.0	8.17	〃
〃	80	北西区，粗掘	27.8	24.7	4.0	2.14	〃
〃	81	TrC-1，b	17.7	14.3	5.5	1.24	破　損
〃	82	北西区，粗掘	77.3	30.3	7.5	2.43	〃
〃	83	G-17D,2層暗褐色	18.8	18.3	6.0	2.05	完　形

5．石　篦

図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
30	1	南西区，粗掘	93.2	28.6	19.6	53.05	完　形
〃	2	北西区，〃	87.8	29.0	17.0	41.86	〃
〃	3	G-11G,2層暗褐色	99.1	32.6	18.8	56.14	〃
〃	4	G-16J,2層黒褐色	88.0	26.2	18.4	38.93	〃
〃	5	北西区，粗掘	32.4	32.0	11.8	32.50	〃
〃	6	G-18C,2層暗褐色	82.7	27.3	15.3	35.01	〃
〃	7	旧トレンチⅡ区粗掘	59.1	29.6	8.0	26.04	一部破損
〃	8	北西区，粗掘	71.8	31.0	13.4	33.28	〃
〃	9	G-18C,2層暗褐色	70.0	26.0	13.9	29.60	完　形
〃	10	TrA-2，b	70.2	26.1	14.1	25.75	〃
〃	11	北西区，粗掘	73.5	25.5	8.0	19.18	〃
〃	12	G-12F,2層暗褐色	72.5	34.3	17.3	47.31	〃
31	13	北西区，粗掘	64.8	31.0	14.5	34.60	一部破損
〃	14	G-12J,2層黒褐色	72.5	28.0	19.2	36.77	完　形
〃	15	南西区，粗掘	67.8	27.2	18.7	39.79	〃
〃	16	G-7,3層暗褐色　やや明るい	58.8	22.5	12.4	16.49	〃
〃	17	G-11　H,2層黒褐色	59.5	22.0	11.0	17.88	〃
〃	18	北西区，粗掘	70.5	24.3	19.0	15.29	〃
〃	19	G-12C,3層黄褐色	60.5	26.5	15.5	24.32	〃
〃	20	G-15D,3層黄褐色	55.6	24.5	13.8	19.91	完　形
〃	21	北西区，粗掘	51.3	24.8	9.7	14.76	一部破損
〃	22	南西区，〃	50.3	39.9	9.0	20.75	完　形
〃	23	G-12C,3層黄褐色	49.2	27.3	11.3	11.70	〃
〃	24	G-11J,2層暗褐色	39.8	28.0	8.2	7.96	一部破損
〃	25	G-11Ⅰ,2層黒褐色	41.0	28.7	9.4	11.35	完　形
〃	26	北西区，粗掘	43.3	31.8	10.3	14.51	〃
〃	27	G-12D,2層暗褐色	58.5	36.2	9.7	20.72	〃
〃	28	G-130,3層にぶい黄褐色	46.2	32.7	7.4	10.40	〃
32	29	旧トレンチⅢ区	38.6	26.3	8.6	8.75	〃
〃	30	TrC-1　dg	38.1	28.7	9.4	8.56	〃
〃	31	北西区，粗掘	42.9	28.0	10.2	42.00	〃
〃	32	〃　〃	30.0	21.6	6.0	3.64	〃
〃	33	G-12H,2層黒褐色	50.8	26.8	12.3	16.16	〃
〃	34	北西区，粗掘	42.0	34.3	8.8	13.94	〃
〃	35	G-12D,2層黒褐色	72.5	48.8	19.6	68.00	〃
〃	36	G-12D,2層暗褐色	98.7	50.2	32.3	139.00	〃
〃	37	G-12F,〃　〃	45.4	40.7	20.5	39.90	〃
〃	38	G-11P，粗掘	54.0	25.9	9.4	19.71	〃
〃	39	南西区，粗掘	67.8	32.0	14.6	36.72	〃
〃	40	北西区，粗掘	66.0	23.0	10.8	24.09	〃
〃	41	G-11E,2層暗褐色	37.2	37.1	12.0	27.22	〃
〃	42	南西区，粗掘	61.7	37.4	12.8	31.91	〃
33	43	〃　〃	65.4	42.0	8.4	29.41	〃
〃	44	G-7,2層黒褐色	78.1	37.0	16.8	46.56	〃
〃	45	G-17D,2層暗褐色	55.3	39.0	15.1	39.87	〃
〃	46	G-17E,2層黄褐色	65.4	51.9	22.5	95.00	破　損
〃	47	G-11Ⅰ,2層黒褐色	81.5	56.7	15.5	85.00	完　形
〃	48	G-11Ⅰ,2層暗褐色	81.4	47.0	15.5	70.00	〃
〃	49	G-11L,	85.0	44.0	18.0	38.39	〃
〃	50	G-18D,2層暗褐色	76.1	44.4	17.3	78.00	〃
〃	51	G-11J,〃　〃	67.1	44.2	7.8	35.75	〃
34	52	北西区，粗掘	65.0	35.5	16.5	44.05	〃
〃	53	G-13C,2層暗褐色	51.6	37.6	10.2	21.01	〃
〃	54	G-12C,3層黄褐色	47.5	32.5	8.0	12.99	〃

図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
34	55	北西区，粗掘	41.0	45.0	10.2	34.89	完　形
〃	56	G-130,2層黒褐色	47.2	36.4	11.5	13.89	〃
〃	57	G-9の周辺，粗掘	40.6	27.8	5.7	6.56	〃
〃	58	G-12D,2層暗褐色	39.4	27.3	5.3	6.54	〃
〃	59	北西区，粗掘	87.1	33.8	19.1	59.90	〃
〃	60	G-11F,2層暗褐色	79.4	33.9	18.0	40.70	〃
〃	61	G-11J，〃　〃	72.5	29.0	9.8	18.03	〃
〃	62	南西区，粗掘	79.6	40.9	13.3	40.94	〃
35	63	〃　〃	50.5	26.9	10.0	38.60	破　損
〃	64	北西区，〃	25.7	39.6	13.5	21.26	〃
〃	65	G-18D,2層暗褐色	56.7	31.1	13.7	17.34	〃
〃	66	G-18C，〃　〃	39.6	37.0	11.1	22.60	〃
〃	67	G-11J，〃　〃	30.0	28.0	7.8	6.50	〃
〃	68	北西区，粗掘	24.6	29.1	4.8	3.90	〃
〃	69	G-17D,2層暗褐色	40.9	38.6	15.9	28.16	〃
〃	70	G-12H,2層黒褐色	31.5	35.8	10.1	11.87	〃
〃	71	G-17C,3層暗褐色	42.2	25.1	12.0	13.18	〃
〃	72	G-11Ⅰ,2層黒褐色	52.2	37.0	12.7	25.5	〃
〃	73	G-11，〃　〃	31.4	19.0	8.0	4.00	〃
〃	74	G-18D,2層暗褐色	36.2	43.5	19.4	27.70	〃
〃	75	G-7，〃　〃	34.4	28.9	7.5	6.45	〃

6．掻　器

図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
36	1	南西区，粗掘	81.7	30.0	14.6	52.06	完　形
〃	2	〃　〃	70.8	29.0	14.9	31.14	〃
〃	3	TrA-2，b	69.3	32.7	14.3	38.89	〃
〃	4	南西区，粗掘	68.7	31.2	14.6	33.53	〃
〃	5	G-17D,2層暗褐色	71.2	37.9	19.1	34.90	〃
〃	6	G-18E，〃　〃	63.6	30.6	11.7	22.49	〃
〃	7	10号住，フク土	83.7	30.0	12.2	34.26	〃
〃	8	G-12J,2層黒褐色	78.5	33.4	12.1	32.49	〃
〃	9	南西区，粗掘	71.4	33.4	15.6	35.66	〃
〃	10	北西区，〃	60.8	26.9	11.3	17.05	〃
〃	11	G-7,2層黒褐色	64.0	31.7	16.3	38.71	〃
〃	12	南西区，粗掘	54.7	26.7	9.3	21.36	〃
37	13	G-16C,2層黒褐色	75.0	33.0	12.8	35.20	〃
〃	14	北西区，粗掘	87.9	31.8	22.0	68.00	〃
〃	15	G-18C,2層暗褐色	84.2	28.3	19.0	58.64	〃
〃	16	G-11Ⅰ,2層黒褐色	75.6	28.2	16.0	37.11	〃
〃	17	北東区，粗掘	65.1	26.7	9.3	21.36	〃
〃	18	北西区，〃	63.2	37.8	18.5	61.00	〃
〃	19	G-12D,2層暗褐色	71.0	41.6	14.5	55.30	〃
〃	20	南西区，粗掘	84.4	35.7	9.3	31.49	〃
〃	21	1・2号住，フク土	44.7	23.0	11.0	13.00	破　損
〃	22	G-17C,3層暗褐色	70.4	25.0	8.6	15.54	完　形
〃	23	G-12D,2層　〃	48.5	29.6	6.5	6.76	〃
〃	24	北東区，粗掘	70.1	27.3	21.7	45.30	〃
38	25	G-11F,2層暗褐色	75.6	31.3	21.9	44.29	〃
〃	26	G-18D，〃　〃	70.3	26.8	24.9	32.67	〃
〃	27	TrA-2，C-e	64.0	31.8	14.8	29.75	〃
〃	28	北西区，粗掘	91.2	35.5	19.6	74.00	〃
〃	29	〃　〃	91.9	42.0	21.8	65.00	〃
〃	30	G-17D,2層暗褐色	29.4	33.4	10.3	9.55	破　損
〃	31	G-13C，〃　〃	25.0	29.0	7.4	6.45	〃
〃	32	G-12F，〃　〃	66.3	30.2	17.0	39.23	〃
〃	33	G-12G，〃 黒褐色	57.2	41.0	14.9	35.19	〃
〃	34	北東区，粗掘	50.6	59.5	10.4	5.05	完　形
〃	35	G-4,2層黒褐色	68.1	20.0	7.7	9.93	〃
〃	36	北西区，粗掘	57.2	28.6	9.0	13.75	〃
39	37	TrA-Ⅰ，b	82.1	31.2	12.6	33.47	〃
〃	38	北南区，粗掘	78.4	27.2	16.2	28.85	〃
〃	39	盛土中	94.6	36.5	18.5	54.00	〃
〃	40	G-6K西トレンチ,3層黄褐色	81.3	16.0	9.6	14.95	〃
〃	41	南西区，粗掘	45.9	46.0	11.8	38.95	〃
〃	42	G-16E,2層黒褐色	41.0	23.6	9.9	10.26	〃
〃	43	G-11Ⅰ，〃　〃	44.5	50.2	20.0	34.19	〃
〃	44	G-17C,3層暗黒褐色	66.7	70.4	22.0	115.00	〃
〃	45	盛土中	52.0	53.0	12.0	42.00	〃
〃	46	北西区，粗掘	63.0	53.8	22.8	22.58	〃
40	47	G-17D,2層暗褐色	43.9	28.0	10.0	13.68	〃
〃	48	南西区，粗掘	41.8	28.0	8.5	10.37	〃
〃	49	北西区，〃	44.1	32.3	12.2	15.71	〃
〃	50	G-12H,2層黒褐色	47.2	52.1	16.8	59.28	〃
〃	51	南西区，粗掘	83.3	48.6	17.3	72.00	〃
〃	52	1・2号住，フク土	89.3	52.8	11.2	60.00	〃
〃	53	G-13C，にぶい黄褐色	100.2	50.3	18.5	95.00	〃
〃	54	北東区，粗掘	77.2	61.7	18.3	95.00	〃

図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
40	55	G-12H,2層黒褐色	37.7	64.7	10.8	19.84	完　形
41	56	G-13C(130)にぶい黄褐色	79.2	49.3	12.8	56.55	〃
〃	57	G-11Ⅰ,2層黒褐色	42.8	50.2	12.2	35.22	〃
〃	58	北西区，粗掘	37.4	46.2	11.5	22.61	〃
〃	59	〃　〃	46.5	47.3	15.0	31.01	〃
〃	60	G-13C,2層暗褐色	38.6	41.5	9.8	23.54	破　損
〃	61	G-12Ⅰ,2層黒褐色	65.7	35.6	12.9	26.45	完　形
〃	62	北西区，粗掘	36.1	35.8	9.3	15.81	破　損
〃	63	〃　〃	75.2	62.1	25.3	13.50	完　形
〃	64	〃　〃	78.2	42.6	16.4	48.70	〃
〃	65	TrA-1·dF	55.5	37.3	12.9	31.34	〃
〃	66	G-17D,2層暗褐色	51.2	55.0	13.9	23.80	破　損
42	67	北西区，粗掘	68.9	49.8	27.3	83.20	完　形
〃	68	G-17D,2層暗褐色	58.2	38.4	9.6	29.55	〃
〃	69	南西区，粗掘	65.9	36.7	9.1	25.45	〃
〃	70	G-5,2層黒褐色	89.2	58.9	20.2	90.00	〃
〃	71	G-15H,3層暗褐色	64.9	43.6	9.5	39.21	〃
〃	72	G-12Ⅰ,2層黒褐色	52.4	41.7	15.7	45.85	〃
〃	73	南西区，粗掘	61.7	48.0	8.2	18.30	〃
〃	74	北西区，〃	86.0	29.1	15.0	47.18	〃
〃	75	1・2号住，フク土	64.5	33.7	19.5	43.68	〃
43	76	〃　〃	18.0	34.5	8.8	45.30	〃
〃	77	盛土中	43.8	54.2	9.3	17.14	〃
〃	78	G-11,2層黒褐色	52.8	40.8	8.0	26.38	〃
〃	79	G-12F,2層暗褐色	45.2	26.2	5.0	9.75	〃
〃	80	G-17D，〃	45.4	27.0	8.4	10.75	〃
〃	81	北西区，粗掘	44.0	33.8	9.0	32.20	〃
〃	82	12号住4区，フク土中	27.5	19.3	9.3	5.40	〃
〃	83	G-12H,2層黒褐色	34.5	8.2	7.9	12.80	〃
〃	84	G-17D,2層暗褐色	77.0	29.0	11.8	31.91	〃
〃	85	G-12G,2層黒褐色	66.1	28.9	13.7	25.85	〃
〃	86	盛土中	67.5	30.0	10.7	19.15	〃
44	87	北東区，粗掘	66.6	64.0	9.6	52.65	〃
〃	88	G-18E,2層暗褐色	98.3	45.0	14.0	85.00	〃
〃	89	南西区，粗掘	87.1	52.3	20.3	91.00	〃
〃	90	G-18D,2層暗褐色	76.8	67.0	21.8	62.00	〃
〃	91	南区，粗掘	86.0	70.1	19.5	52.00	〃
〃	92	南西区，粗掘	69.0	34.2	15.3	44.89	〃
〃	93	G-12D,2層暗褐色	67.8	33.5	15.2	61.00	破　損
〃	94	北西区，粗掘	50.0	35.3	14.5	21.05	〃
45	95	盛土中	52.0	31.3	8.4	16.17	完　形
〃	96	G-11P，粗掘	45.4	71.5	19.8	54.19	〃
〃	97	G-12F西ブリッチ,2層黒褐色	80.2	33.2	9.8	13.72	〃
〃	98	北西区，粗掘	58.9	27.2	7.8	13.40	〃
〃	99	G-12D,2層暗褐色	44.3	31.5	16.3	24.05	〃
〃	100	G-7,3層暗褐色	85.1	47.8	13.6	40.13	〃
〃	101	南西区，粗掘	77.6	40.4	20.5	72.00	〃
〃	102	〃　〃	68.4	58.4	15.6	39.0	〃
〃	103	G-7,3層暗褐色	66.0	23.1	6.7	7.65	〃
〃	104	TrA-Ⅰ，dF	76.7	62.8	25.8	13.20	〃
46	105	G-17D,2層暗褐色	11.2	63.8	22.4	68.00	〃
〃	106	南西区，粗掘	84.9	46.0	17.6	58.90	〃
〃	107	〃　〃	81.9	53.5	11.8	69.00	〃
〃	108	G-17D,2層暗褐色	92.2	40.6	13.6	41.37	〃
〃	109	G-17C,3層　〃	67.0	49.3	15.6	48.00	〃

図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
46	110	北西区，粗掘	59.8	51.2	8.2	19.63	完　形
〃	111	TrB-3，b	47.2	30.8	11.5	16.26	〃
〃	112	C-12M,3層暗褐色	48.3	41.6	13.0	39.99	〃
47	113	G-11J,2層　〃	80.4	41.7	11.7	28.17	〃
〃	114	南西区，粗掘	55.8	35.0	11.4	24.03	〃
〃	115	G-16E,2層黒褐色	70.5	13.5	12.5	18.49	〃
〃	116	G-15,〃　〃	64.2	13.2	12.3	16.80	〃
〃	117	G-18C,2層暗褐色	58.1	43.7	12.8	41.97	〃
〃	118	G-3,3層　〃	40.8	22.5	6.7	13.70	〃

7．削　器

図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
48	1	南西区，粗掘	41.1	29.1	8.7	16.8	完　形
〃	2	G-3,3層暗褐色	42.4	27.2	10.2	10.25	〃
〃	3	北西区	72.1	43.2	10.8	20.80	〃
〃	4	G-12Ⅰ,2層黒褐色	48.2	33.2	11.9	15.53	〃
〃	5	G-17D,2層暗褐色	40.5	21.8	5.8	5.62	〃
〃	6	G-13C,〃　〃	59.3	31.0	11.2	7.21	〃
〃	7	G-4,2層黒褐色	58.3	38.3	8.9	19.36	〃
〃	8	G-13C,2層暗褐色	83.7	33.5	10.0	23.76	〃
〃	9	北西区，粗掘	57.9	34.8	14.2	19.8	〃
〃	10	TrA-1･dF	67.8	42.0	12.0	59.55	〃
〃	11	G-7,2層黒褐色	50.1	27.0	10.8	12.49	〃
〃	12	盛土中	72.6	42.2	10.1	30.80	〃
〃	13	南西区，粗掘	66.2	55.3	12.8	33.24	〃
49	14	G-18C,2層暗褐色	59.6	47.0	9.6	24.85	〃
〃	15	G-12Ⅰ,2層黒褐色	83.1	42.0	19.0	52.90	〃
〃	16	北西区，粗掘	48.4	36.0	10.5	19.10	〃
〃	17	南西区，〃	51.1	46.9	12.4	27.19	〃
〃	18	〃　〃	58.0	53.6	11.0	42.35	一部破損
〃	19	盛土中	52.9	37.6	11.2	22.35	〃
〃	20	TrA-1，dF	54.2	29.0	13.0	14.49	完　形
〃	21	TrA-2，b	37.0	21.8	5.3	4.73	〃
〃	22	G-北東区，粗掘	36.7	27.0	13.0	2.50	〃
〃	23	北西区，〃	46.2	36.3	19.1	34.21	〃
〃	24	G-11F,2層暗褐色	54.9	50.1	15.7	40.30	〃
50	25	G-18D,〃　〃	51.6	31.4	4.0	9.32	〃
〃	26	G-11F，暗褐色	66.9	49.3	15.0	55.80	〃
〃	27	G-14J,2層黒褐色	37.8	18.8	6.8	5.55	〃
〃	28	北東区，粗掘	36.7	30.3	10.4	18.01	〃
〃	29	北西区，〃	37.3	29.2	7.5	9.23	〃
〃	30	G-3,3層暗褐色	33.1	33.8	3.3	24.10	破　損
〃	31	南西区，粗掘	55.2	39.2	12.2	38.15	完　形
〃	32	G-12Gブリッジ,2層黒褐色	20.1	55.4	12.3	15.73	破　損
〃	33	G-18D,2層暗褐色	79.0	55.5	16.0	68.00	完　形
〃	34	G-12C,3層黒褐色	63.8	52.5	20.2	65.00	〃
〃	35	G-12Ⅰ,2層黒褐色	52.7	41.7	9.0	26.00	〃
〃	36	G-12H，〃　〃	31.4	18.8	9.8	4.80	〃
〃	37	北西区，粗掘	88.5	40.4	10.7	36.31	〃
51	38	G-14C,2層黒褐色	54.2	32.0	8.6	14.55	〃
〃	39	北西区，粗掘	40.3	36.2	14.6	24.76	〃
〃	40	1・2号住，フク土	46.5	13.0	8.5	5.48	〃
〃	41	北東区，粗掘	25.6	33.2	8.0	8.85	〃
〃	42	G-3,2層黒褐色	39.1	30.2	8.2	5.25	〃
〃	43	12号住4区，フク土中	44.4	29.6	16.4	7.62	〃
〃	44	C-12M,3層暗褐色	68.4	61.4	11.0	55.10	〃
〃	45	G-11E,2層　〃	84.1	49.0	9.1	34.80	〃
〃	46	G-1，〃　〃	40.3	48.7	12.0	27.61	〃
〃	47	G-130,2層黒褐色	34.4	26.9	7.6	6.61	破　損
〃	48	北西区，粗掘	30.0	19.0	7.0	4.29	完　形
52	49	G-11Ⅰ,2層黒褐色	31.6	28.0	5.3	5.52	一部破損
〃	50	南西区，粗掘	36.7	30.5	8.7	12.60	〃
〃	51	〃　〃	41.8	40.1	7.6	13.05	完　形
〃	52	TrA-2-3，GB	38.2	31.4	11.0	13.15	〃
〃	53	南西区，粗掘	25.0	22.0	3.1	1.56	〃
〃	54	TrAⅠ，pit埋	41.2	30.5	9.8	11.43	一部破損
52	55	G-3,3層暗褐色	32.7	18.7	3.70	2.00	一部破損
〃	56	G-11J,2層〃	46.1	26.5	7.20	10.37	完　形

8．微小剝離石器

図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
52	1	南西区，粗掘	57.3	35.5	12.0	23.0	完　形
〃	2	G-11Ⅰ,2層黒褐色	63.5	17.3	5.0	4.49	〃
〃	3	G-7,3層暗褐色	50.0	35.4	7.8	18.56	〃
〃	4	南西区，粗掘	40.3	36.5	5.8	78.00	〃
〃	5	〃　〃	55.9	28.5	12.8	19.00	〃
〃	6	〃　〃	58.2	36.0	5.0	11.26	〃

9．特殊剝片石器

図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
53	1	北東区，粗掘	7.4	6.65	1.90	77.00	完　形
〃	2	G-15D,3層黄褐色	7.2	4.20	2.29	70.90	破　損
〃	3	G-9周辺，粗掘	9.4	4.95	2.90	80.30	完　形

10．大型掻器

図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
53	1	MG-5住12号住,4区フク土中	7.9	7.8	4.6	270.0	完　形
〃	2	南西区，粗掘	93.6	62.0	40.0	212.0	〃

11．石　斧

図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
54	1	南西区，粗掘	94.0	47.5	27.0	200.00	基部欠損
〃	2	北東区，〃	66.5	44.4	29.3	100.00	完　形
〃	3	北西区，〃	105.5	37.5	12.0	61.00	縦形破損
〃	4	G-12G.2層黒褐色	64.1	43.0	30.0	105.00	刃部欠損
〃	5	北西区，粗掘	59.2	36.3	31.7	105.00	刃部欠損
〃	6	南西区，〃	125.0	30.0	16.0	120.00	破損→再
〃	7	22K-1土坑，東フク土	55.0	20.0	11.8	24.80	基部欠損
55	8	TrC-1　d-g	78.5	43.0	26.4	160.00	刃部欠損

12.13.14．石剣特殊

図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
55	1	22K土坑，東フク土	130.0	34.3	28.8	220.00	破　損
〃	2	北西区，粗掘	3.56	ナシ	1.54	20.00	完　形
〃	3	TrA-1　dF	22.3	7.5	8.5	1.15	破　損
〃	4	北西区，粗掘	40.0	22.4	9.30	5.17	被　損

16．磨　石

図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
56	1	G-11G	105.5	89.0	60.0	745.00	完　形
〃	2	G-12Ⅰ，G-12H	98.5	78.5	55.0	470.00	〃
〃	3	G-20F	88.5	87.0	56.5	630.00	〃
〃	4	G-12E,2層暗褐色	125.0	44.5	34.0	255.00	〃

17. 砥　石

図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
56	1	G-11H,2層黒褐色	88.5	79.5	38.0	270.00	破　損
〃	2	1・2号住，フク土	98.0	50.0	17.0	125.00	完　形

19. 凹　石

図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
57	1	TrC-1，d-g	11.0	7.8	4.3	470.00	完　形
〃	2	G-12F	9.0	8.3	5.3	600.00	〃
〃	3	G-12E,2層暗褐色	15.3	6.2	3.2	470.00	〃
〃	4	12号住,3区，フク土中	11.0	7.5	4.7	580.00	〃
〃	5	G-12F	10.5	7.9	5.3	580.00	〃
〃	6	TrA-1	9.9	7.4	3.4	300.00	破　損
〃	7	G-12F	10.7	7.5	2.3	320.00	完　形
58	8	TrA-3，b	18.1	6.9	3.3	600.00	〃
〃	9	北西区，粗掘	14.3	6.4	4.5	680.00	〃
〃	10	G-11G	15.2	9.3	3.0	700.00	〃
〃	11	G-17C，D	12.0	5.5	3.3	390.00	〃
〃	12	G-12F西ブリッジ,2層黒褐色	15.1	6.2	3.3	470.00	〃
〃	13	G-13M,3層暗褐色	8.1	5.0	2.8	160.00	破　損
〃	14	北西区，粗掘	6.9	6.7	3.4	230.00	〃
59	15	G-12F西ブリッジ,2層黒褐色	14.5	4.8	3.5	340.00	完　形
〃	16	G-12G，　〃	9.8	4.8	2.1	140.00	〃
〃	16	G-17C,3層暗黒褐色	6.5	5.5	2.4	90.00	破　損
〃	18	G-17E，18E	18.8	9.1	4.4	900.00	完　形
〃	19	G-12C,3層黄褐色	10.2	8.2	2.3	280.00	破　損
〃	20	G-11P，粗掘	15.5	9.4	3.4	700.00	完　形
〃	21	G-12 0,2層黒褐色	13.4	6.0	2.1	240.00	〃

20. 石　錘

図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
60	1	南西区，粗掘	111.00	95.0	23.0	315.00	完　形
〃	2	G-11J,2層暗褐色	73.2	65.6	17.5	125.00	〃
〃	3	北西区，粗掘	125.0	99.0	30.0	450.00	〃
〃	4	G-11，	51.4	50.5	8.6	36.49	〃
〃	5	G-7,2層黒褐色	88.6	61.6	26.7	180.00	破　損
〃	6	G-12Ⅰ,2層黒褐色	58.7	52.8	12.7	53.51	完　形
〃	7	表採	93.5	90.0	32.5	420.00	〃
〃	8	G-11F,2層	79.0	68.6	14.4	130.00	〃
〃	9	北西区，粗掘	61.0	38.0	19.0	52.45	〃
61	10	南西区，〃	94.5	59.5	10.5	80.00	〃
〃	11	北西区，〃	76.2	74.0	21.5	180.00	〃
〃	12	G-11H,2層	94.0	61.5	13.0	130.00	〃
〃	13	G-14C,2層暗褐色	83.8	69.3	18.0	165.00	〃
〃	14	G-1表	86.0	78.8	14.2	135.00	〃
〃	15	G-17D,2層暗褐色	68.0	53.0	26.6	112.00	〃
〃	16	G-12E，〃　〃	41.0	37.3	12.3	26.90	〃
〃	17	G-11Ⅰ,2層黒褐色	52.0	49.0	9.7	38.50	〃
〃	18	G-11H	79.2	65.0	18.2	100.00	〃
〃	19	TrA-1，a-c	63.8	55.8	12.6	45.25	破　損
〃	20	G-11Ⅰ,2層黄褐色	68.0	42.5	20.4	44.60	破　損

20. 特殊な石錘状石器

図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
55	5	G-17D,2層暗褐色	54.8	21.8	12.2	23.75	完　形

21. 有孔石器

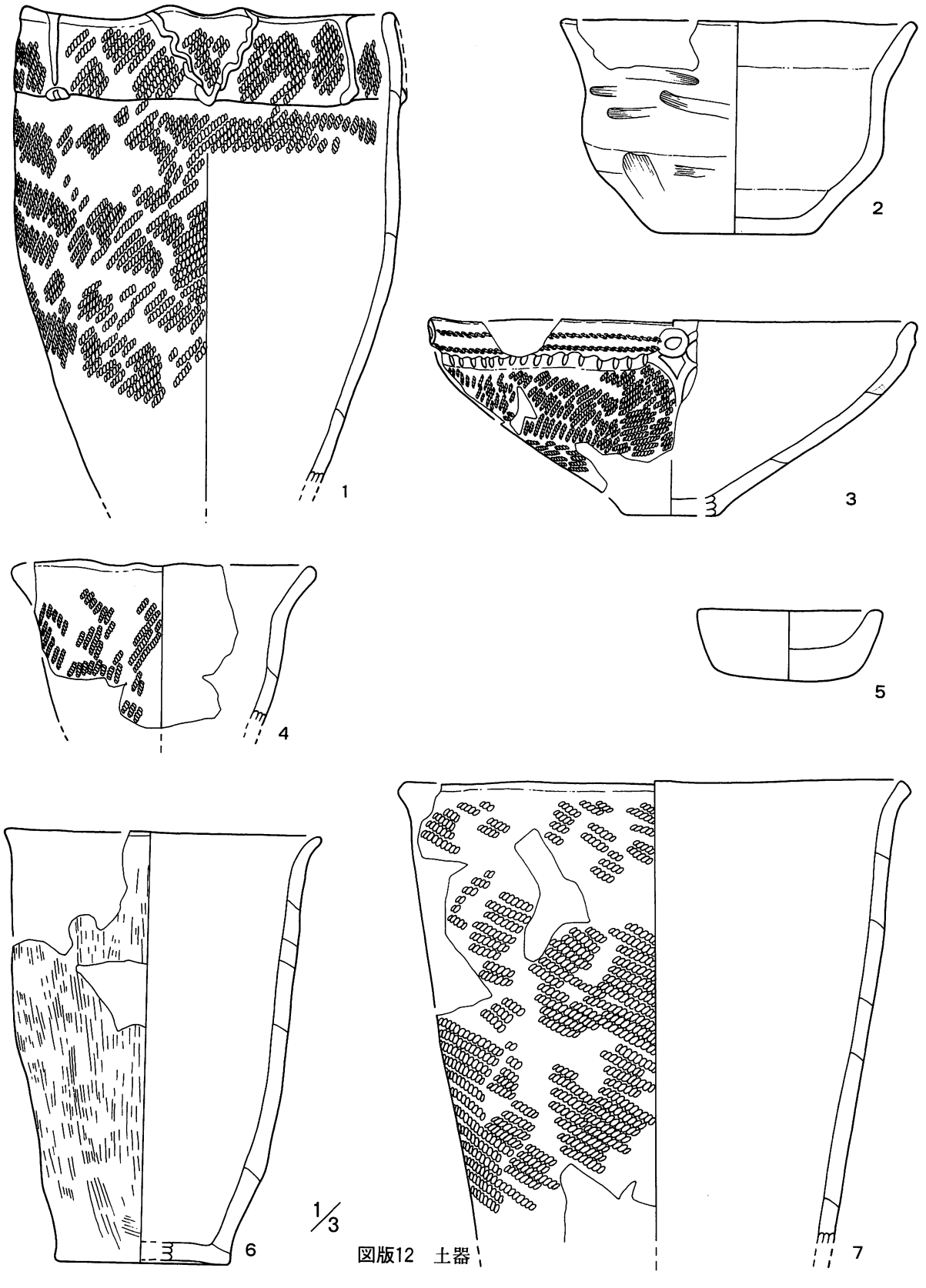
図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
61	21	南西区	198.5	73.5	34.0	315.00	完　形

22．半円状扁平打製石器

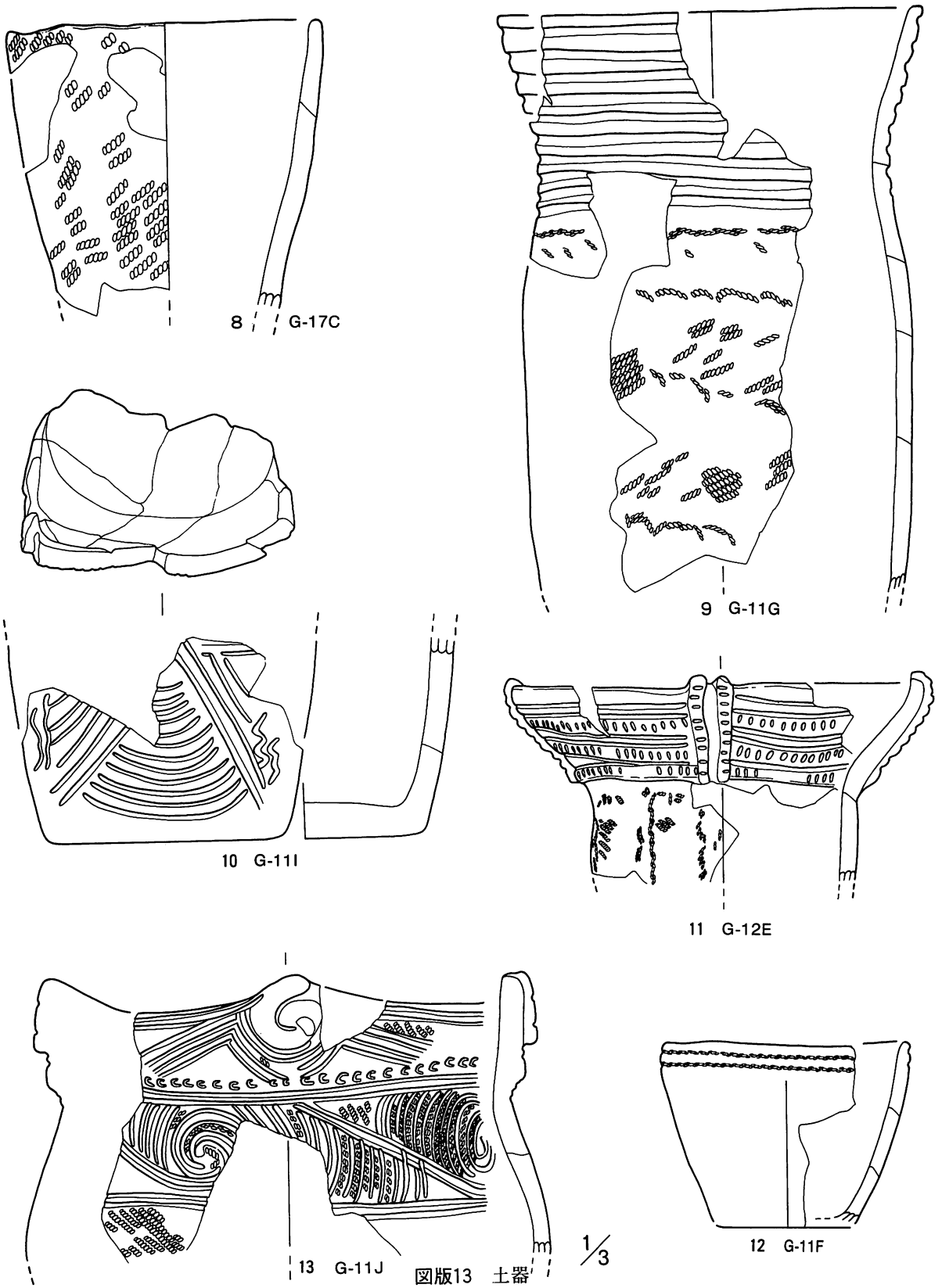
図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
62	1	G-12F	19.1	8.4	4.1	10.40	完　形
〃	2	1・2号住北東区，黒褐色土層	14.5	7.0	2.6	310.00	〃
〃	3	G-16E,2層黒褐色	13.0	6.4	2.3	280.00	〃
〃	4	G-17C，暗黒褐色	19.1	10.3	4.6	940.00	〃
〃	5	G-17E,2層黄褐色	14.0	8.3	1.6	280.00	〃
63	6	G-4,2層黒褐色	16.4	8.9	3.5	570.00	〃
〃	7	G-14C,2層暗褐色	9.1	7.0	1.75	130.00	〃
〃	8	TrA-1，C-d	16.3	9.4	3.4	820.00	〃
〃	9	G-13C (18C)	8.0	7.4	3.8	380.00	〃
〃	10	TrB-3，b	15.7	10.8	3.5	730.00	〃
〃	11	G-15D,2層暗褐色	13.0	7.6	2.4	378.00	〃
64	12	12号住，フク土	17.2	9.1	3.2	580.00	〃
〃	13	北西区，粗掘	14.2	6.7	2.9	380.00	〃
〃	14	G-120,2層黒褐色	17.7	8.5	4.4	700.00	〃
〃	15	G-16C，　〃	17.1	6.9	2.0	400.00	〃
〃	16	1・2住，フク土	13.7	9.9	2.3	440.00	〃
〃	17	TrA-3，H	16.9	7.3	3.5	620.00	〃
65	18	G-12Ⅰ-12H	15.5	9.8	2.4	510.00	〃
〃	19	G-12F	13.9	7.6	2.7	420.00	〃
〃	20	G-11N,2層黒褐色	15.5	7.4	3.5	520.00	〃
〃	21	G-20F	17.9	7.6	3.5	710.00	〃
〃	22	TrA-1	16.8	10.0	3.7	900.00	〃
〃	23	G-12F	10.4	6.5	3.2	270.00	〃
66	24	G-120,2層黒褐色	15.4	8.3	3.7	820.00	〃
〃	25	南西区，粗掘	14.7	5.4	2.8	280.00	〃
〃	26	G-12E,2層暗褐色	16.3	6.7	3.8	520.00	〃
〃	27	G-11G,2層暗褐色	11.4	7.0	2.9	300.00	〃
〃	28	G-11N,2層黒褐色	13.4	7.5	3.0	500.00	〃
〃	29	G-12D,2層暗褐色	13.5	5.8	1.9	220.00	〃
67	30	G-12Ⅰ,2層黒褐色	18.8	6.9	3.0	520.00	〃
〃	31	G-17D,2層暗褐色	14.9	8.6	2.7	420.00	〃
〃	32	TrA-1	18.0	8.7	3.0	740.00	〃
〃	33	G-12E,2層暗褐色	14.4	6.9	3.0	340.00	〃
〃	34	G-12F	11.0	7.8	2.0	260.00	〃
〃	35	1・2住.にぶい黄褐色	15.5	7.5	3.0	470.00	〃
68	36	盛土内	17.3	8.5	3.2	710.00	〃
〃	37	G-130,2層黒褐色	11.0	5.3	2.2	160.00	〃
〃	38	G-12D,2層暗褐色	14.4	8.2	2.5	430.00	〃
〃	39	G-11G,	14.2	8.0	3.3	550.00	〃
〃	40	北西区，粗掘	14.2	8.3	2.8	360.00	〃
〃	41	G-12Ⅰ,2層黒褐色	13.3	6.3	2.6	300.00	〃
69	42	G-11C，　〃	20.2	8.5	5.4	1080.00	〃
〃	43	TrA-1	13.1	7.3	4.6	640.00	〃
〃	44	TrB-3，C	14.2	7.4	2.9	420.00	〃
〃	45	TrB-1，a-C	17.0	9.4	3.4	810.00	〃
〃	46	TrR-1，C	11.8	5.6	2.3	240.00	〃
〃	47	1・2号住，フク土	16.7	8.1	3.6	690.00	〃
70	48	G-11G・2層暗褐色	16.1	7.7	2.3	440.00	〃
〃	49	TrA-3　b	14.8	7.6	3.0	590.00	〃
〃	50	1号住北東区,にぶい黄褐色,	20.5	10.8	3.7	1030.00	〃
〃	51	北西区，粗掘　土層中	15.8	6.7	3.3	460.00	〃
〃	52	G-16 C,2層黒褐色	13.6	8.6	2.8	500.00	〃
〃	53	G-12F	12.8	8.0	2.5	380.00	〃
71	54	南西区，粗掘	16.7	6.5	3.4	400.00	〃
71	55	北西区，粗掘	18.2	10.6	4.2	800.00	完　形
〃	56	南西区，〃	19.4	11.8	2.8	1060.0	〃
〃	57	G-14C,2層黒褐色	14.2	6.6	2.7	360.00	〃
〃	58	北西区，粗掘	15.1	7.8	2.6	430.00	〃
〃	59	G-12C,3層黄褐色	16.2	7.1	3.4	540.00	〃
72	60	G-12.0,2層黒褐色	16.6	8.2	3.1	640.00	〃
〃	61	G-12D,2層暗褐色	12.9	7.3	2.7	380.00	〃
〃	62	G-120,2層黒褐色	14.7	7.6	3.5	550.00	〃
〃	63	G-12C,3層黄褐色	15.4	10.0	3.8	720.00	〃
〃	64	G-12F	17.4	8.6	3.5	730.00	〃
〃	65	TrC-Ⅰ	15.1	7.1	3.3	530.00	〃
73	66	TrB-3，C	13.5	7.1	3.5	480.00	〃
〃	67	G-17C，D	17.4	6.4	4.9	940.00	〃
〃	68	G-16C，17C	20.0	6.9	3.8	620.00	〃
〃	69	北西区，粗掘	18.1	6.9	6.3	1040.0	〃
〃	70	G-12Ⅰ，12H	9.7	7.1	5.5	320.00	〃
〃	71	南西区，粗掘	9.2	3.5	2.3	100.00	〃
74	72	1号住北東区.黒褐色土層	10.3	7.0	1.8	170.00	破損→再
〃	73	G-12C,3層黄褐色	80.3	74.3	37.2	365.00	〃
〃	74	北西区，粗掘	9.8	7.0	3.4	330.00	〃
〃	75	G-120,2層黒褐色	10.4	8.0	3.8	490.00	〃
〃	76	G-11J,2層暗褐色	9.3	7.6	3.3	270.00	〃
〃	77	北西区，粗掘	9.4	7.5	3.3	310.00	〃
75	78	TrA-3，b	8.1	7.0	3.2	280.00	〃
〃	79	G-11N,2層黒褐色	10.2	7.6	3.4	340.00	〃
〃	80	盛土中	7.65	7.5	3,0	270.00	〃
〃	81	G-17D,2層暗褐色	9.5	7.0	3.2	300.00	〃
〃	82	G-11J,〃　〃	6.2	6.1	3.0	200.00	〃
〃	83	5号住，フク土中	10.0	8.7	3.58	420.00	〃
76	84	TrC-1，d-g	12.0	9.1	3.4	480.00	〃
〃	85	TrB-3，C	7.5	6.8	2.8	200.00	〃
〃	86	G-4,2層黒褐色	7.3	6.1	2.3	150.00	〃
〃	87	G-16C,2層黒褐色	13.0	8.1	3.7	600.00	〃
〃	88	G-17C，D	10.0	6.0	4.2	430.00	〃
〃	89	G-11L	8.2	6.4	2.7	210.00	〃
77	90	G-16C,2層黒褐色	9.5	6.2	2.0	220.00	〃
〃	91	南西区，粗掘	9.5	7.0	2.8	290.00	〃
〃	92	G-11H,2層黒褐色	10.4	8.5	3.3	400.00	〃
〃	93	G-7,2層黒褐色	8.1	5.5	3.0	200.00	〃
〃	94	G-120,2層黒褐色	11.0	7.1	2.3	260.00	〃
〃	95	G-12G　〃	8.2	6.1	3.6	270.00	〃
78	96	南西区，粗掘	10.2	8.0	3.5	450.00	〃
〃	97	G-12G,西ブリッジ,2層黒褐色	10.5	7.2	2.8	300.00	〃
〃	98	G-11Ⅰ,　〃	8.2	6.8	3.0	230.00	〃
〃	99	G-13C,2層暗褐色	12.4	7.7	2.4	390.00	〃
〃	100	北西区，粗掘	9.4	9.1	2.1	220.00	〃
〃	101	〃　〃	7.7	7.7	3.4	300.00	〃
79	102	盛土内	11.2	8.0	3.0	400.00	〃
〃	103	G-14C,2層黒褐色	7.6	6.2	1.9	140.00	〃
〃	104	TrA-2，C-g	9.3	8.9	3.7	400.00	〃
〃	105	G-12D,2層暗褐色	11.4	8.3	4.2	500.00	〃
〃	106	G-11Ⅰ,3層黄褐色	10.8	9.5	2.7	400.00	〃
80	107	TrB-1，d-g	9.9	8.0	2.6	220.00	破　損
〃	108	G-12J,2層黒褐色	11.5	9.7	2.9	400.00	〃
〃	109	G-12F	10.4	9.3	3.0	420.00	〃

図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
80	110	G-12E,2層暗褐色	10.0	7.6	1.2	140.00	破　損
〃	111	G-12G,2層黒褐色	11.8	6.2	3.6	260.00	〃
〃	112	北西区，粗掘	9.5	7.6	3.0	240.00	〃
〃	113	1・2号住，フク土	11.3	11.2	4.5	710.00	〃
〃	114	北西区，粗掘	6.0	5.2	2.3	80.00	〃
81	115	G-11G,2層暗褐色	15.6	8.5	2.9	460.00	〃
〃	116	G-17D,〃　〃	9.0	7.9	4.7	500.00	〃
〃	117	G-12,2層黒褐色	10.2	8.7	3.9	410.00	〃
〃	118	1・2号住，フク土	195.0	97.0	46.5	1140.0	〃
〃	119	北東区	15.1	7.6	2.7	260.00	〃
〃	120	G-12F,2層暗褐色	10.5	8.8	1.7	160.00	〃
〃	121	G-12C,2層黄褐色	8.1	7.3	1.6	130.00	〃
82	122	G-120,2層黒褐色	215.0	90.5	31.0	880.00	〃
〃	123	G-12C,3層黄褐色	14.0	9.0	2.6	590.00	〃
〃	124	TrA-3，b	17.8	8.5	4.3	900.00	〃
〃	125	G-14C,2層暗褐色	15.2	6.1	2.7	330.00	〃
〃	126	G-12E,〃　〃	6.5	5.9	3.6	170.00	〃
〃	127	G-12F	12.9	8.5	4.1	610.00	〃
83	128	TrB-1，a-c	10.4	10.4	3.6	420.00	〃
〃	129	TrB-3，C	10.4	6.2	3.4	310.00	〃
〃	130	TrC-1，d-g	14.6	11.0	4.2	910.00	〃
〃	131	G-130,2層黒褐色	10.2	4.4	1.5	80.00	〃
〃	132	TrA-2，c-b	7.5	6.9	3.3	230.00	〃
〃	133	北東区，粗掘	5.8	5.6	2.2	60.00	〃
〃	134	TrC-Ⅰ	6.3	5.7	2.4	120.00	〃
〃	135	TrA-3，b	10.2	8.0	3.3	380.00	〃
84	136	南西区，粗掘	13.6	10.1	3.6	690.00	〃
〃	137	G-11P，粗掘	11.7	5.9	2.3	220.00	〃
〃	138	〃	8.7	7.9	3.0	280.00	〃
〃	139	G-11G,2層暗褐色	8.2	2.8	2.1	50.00	〃
〃	140	南西区，粗掘	6.7	2.8	3.5	70.00	〃
〃	141	G-17D,2層暗褐色	8.7	5.2	3.6	140.00	〃
〃	142	G-12D,〃　〃	6.8	4.2	3.3	140.00	〃
〃	143	旧トレンチⅡ区，粗掘	7.5	7.48	2.7	200.00	〃
〃	144	G-12D,2層暗褐色	10.0	8.1	2.2	230.00	〃
85	145	G-12.0,2層黒褐色	8.4	10.1	5.1	470.00	〃
〃	146	1号住北東区,黒褐色土層	11.4	4.6	1.4	70.00	〃
〃	147	G-12E,2層暗褐色	8.5	8.4	4.2	370.00	〃
〃	148	G-11Ⅰ,2層黒褐色	7.6	7.0	3.0	180.00	〃
〃	149	G-130(C)にぶい黄褐色	9.6	7.6	3.5	360.00	〃
〃	150	G-18E,2層暗褐色	8.3	6.9	2.7	200.00	〃
〃	151	北東区，粗掘	8.9	8.7	3.4	400.00	〃
〃	152	G-4,2層黒褐色	9.8	9.8	2.8	390.00	〃
86	153	1・2号住，フク土	7.6	5.5	3.1	200.00	〃
〃	154	G-11G,3層暗褐色	7.7	5.2	2.6	120.00	〃
〃	155	G-17D,2層　〃	7.9	6.0	1.8	130.00	〃
〃	156	G-14C,2層黒褐色	8.8	7.0	2.1	160.00	〃
〃	157	G-17E,18E	7.1	6.8	3.4	180.00	〃
〃	158	TrA-1，cd	7.3	5.9	3.4	160.00	〃
〃	159	G-17E，18E	7.0	6.9	3.1	180.00	〃
〃	160	G-17D,2層暗褐色	5.8	3.6	3.7	120.00	〃
〃	161	G-15C,3層黄褐色	6.0	4.8	3.2	80.00	〃
〃	162	C-12M,3層暗褐色	7.4	3.4	0.9	30.00	〃
〃	163	13N住，フク土	9.8	3.6	1.7	70.00	〃
87	164	G-12E,2層暗褐色	9.4	8.2	3.6	450.00	〃

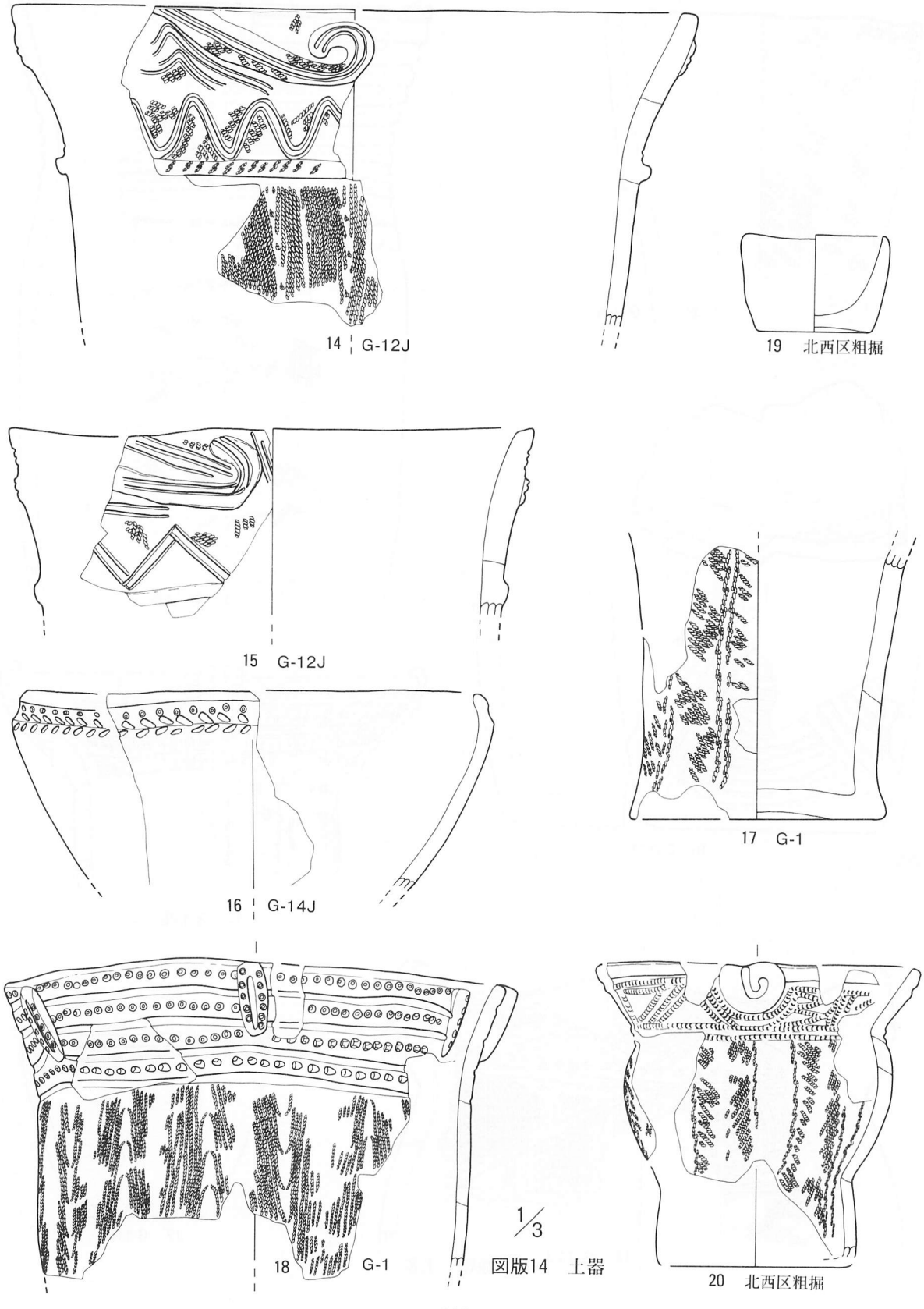
図頁	番号	地区層位	長さ	幅	厚さ	重量	破損度
87	165	G-12Ⅰ,2層黒褐色	9.1	8.6	4.0	370.00	破　損
〃	166	G-17C，D	15.7	5.2	7.3	600.00	〃
〃	167	H	12.5	5.8	4.9	480.00	〃
〃	168		7.8	7.2	5.6	400.00	〃
〃	169	G-11G	8.4	7.5	5.6	520.00	〃
〃	170	TrA-1，C	8.5	6.5	3.7	370.00	〃
88	171	1号住北東区，黒褐色層	16.1	9.3	2.5	480.00	〃
〃	172	G-17C,3層暗黒褐色	12.4	8.2	4.1	640.00	〃
〃	173	G-11Ⅰ,2層黒褐色	9.7	8.8	3.3	450.00	〃
〃	174	G-15G,3層黄褐色	10.6	7.4	2.6	360.00	〃
〃	175	G-120,2層黒褐色	10.1	7.3	3.8	400.00	〃
〃	176	G-12G,2層黒褐色土	11.4	7.9	3.0	440.00	〃
〃	177	G-18D,2層暗褐色	7.7	6.4	2.2	160.00	〃
〃	178	G-11Ⅰ,2層黒褐色	8.0	8.0	3.0	270.00	〃



図版12　土器

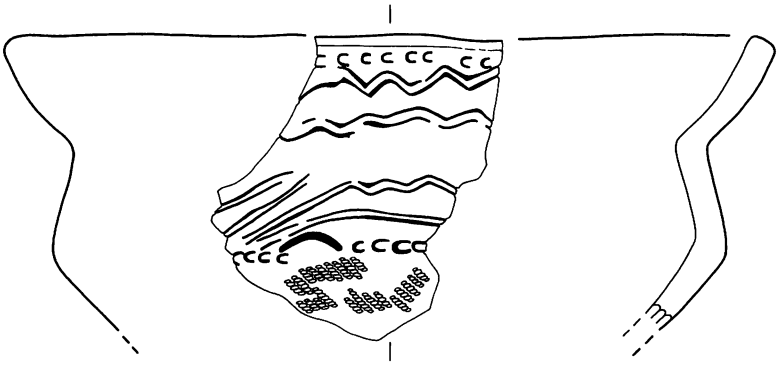


図版13　土器

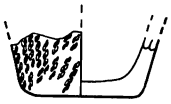


1/3

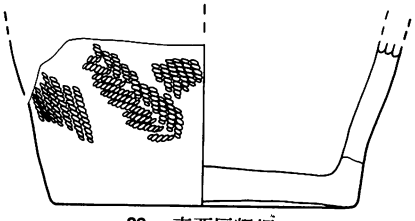
図版14　土器



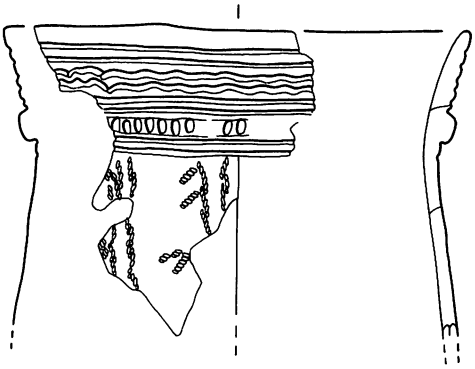
22　南西区粗掘



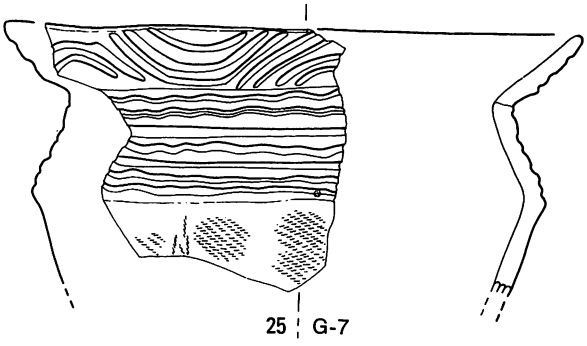
21　南東区粗掘



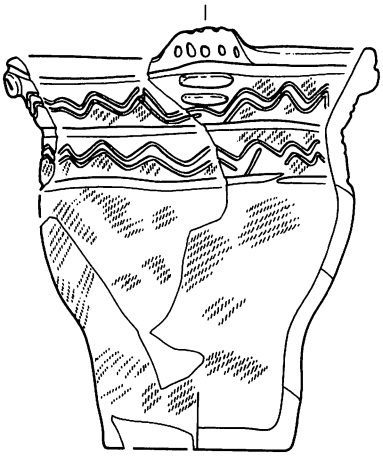
23　南西区粗掘



24　南西区粗掘



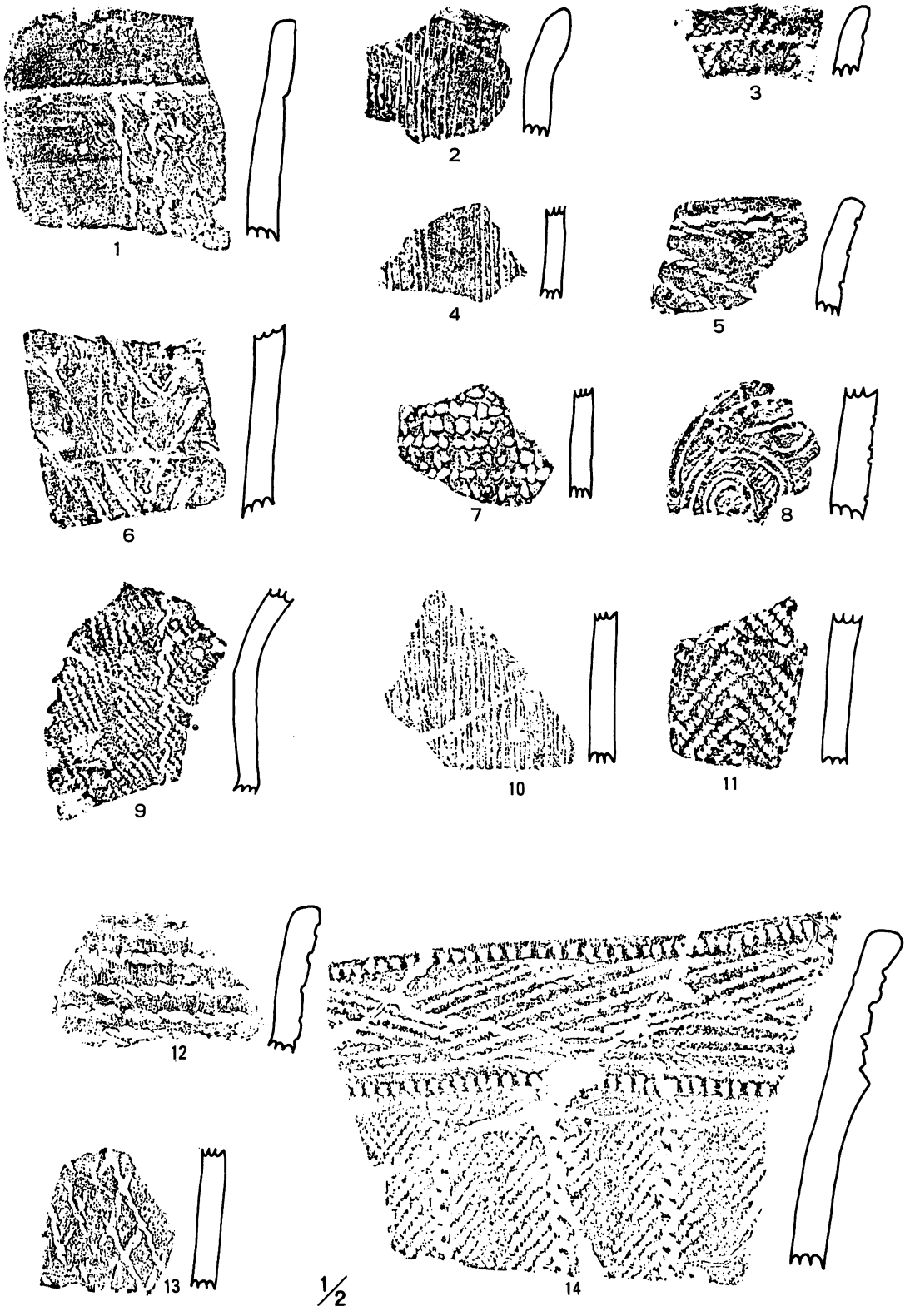
25　G-7



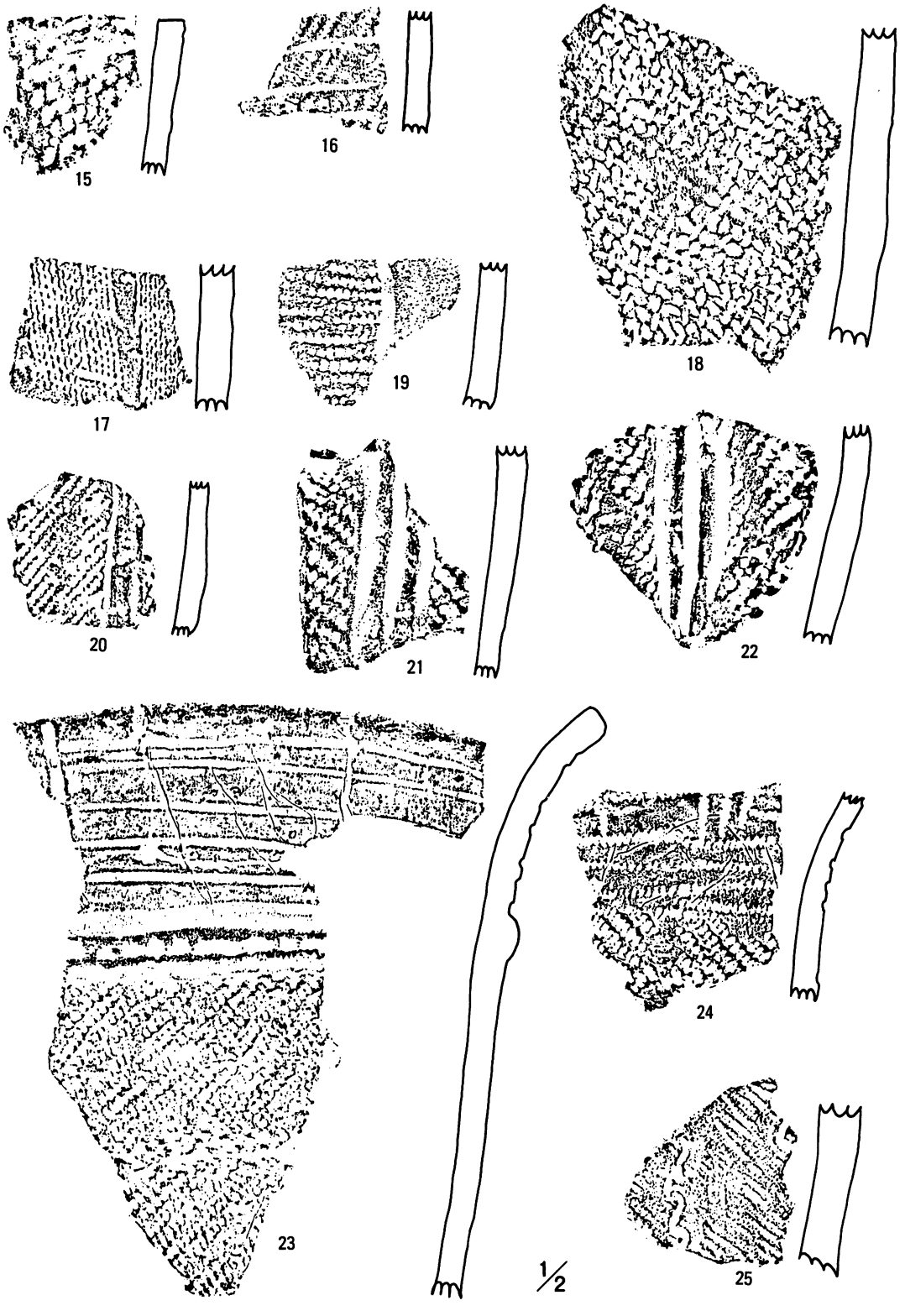
26　盛土中

1/3

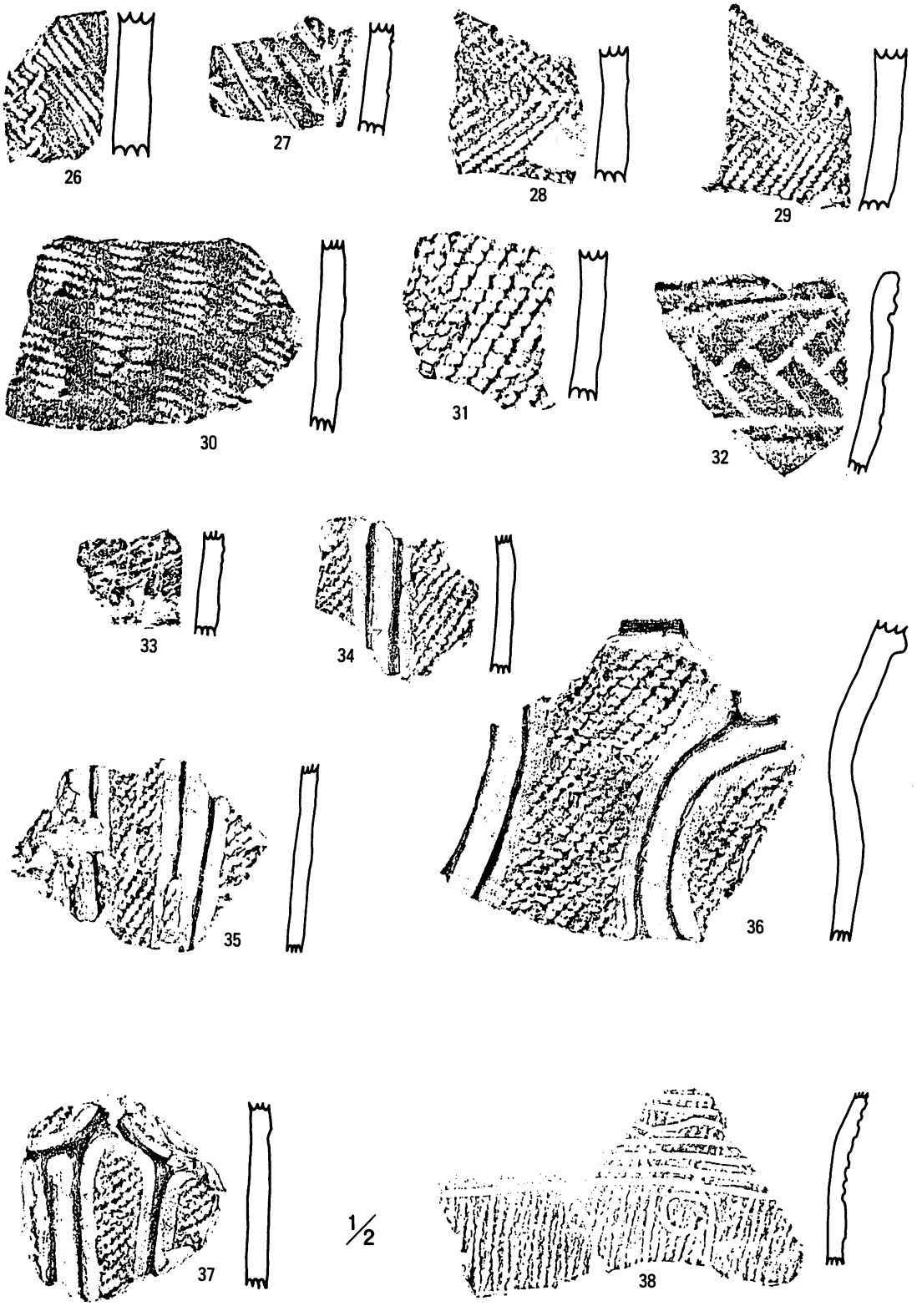
図版15　土器



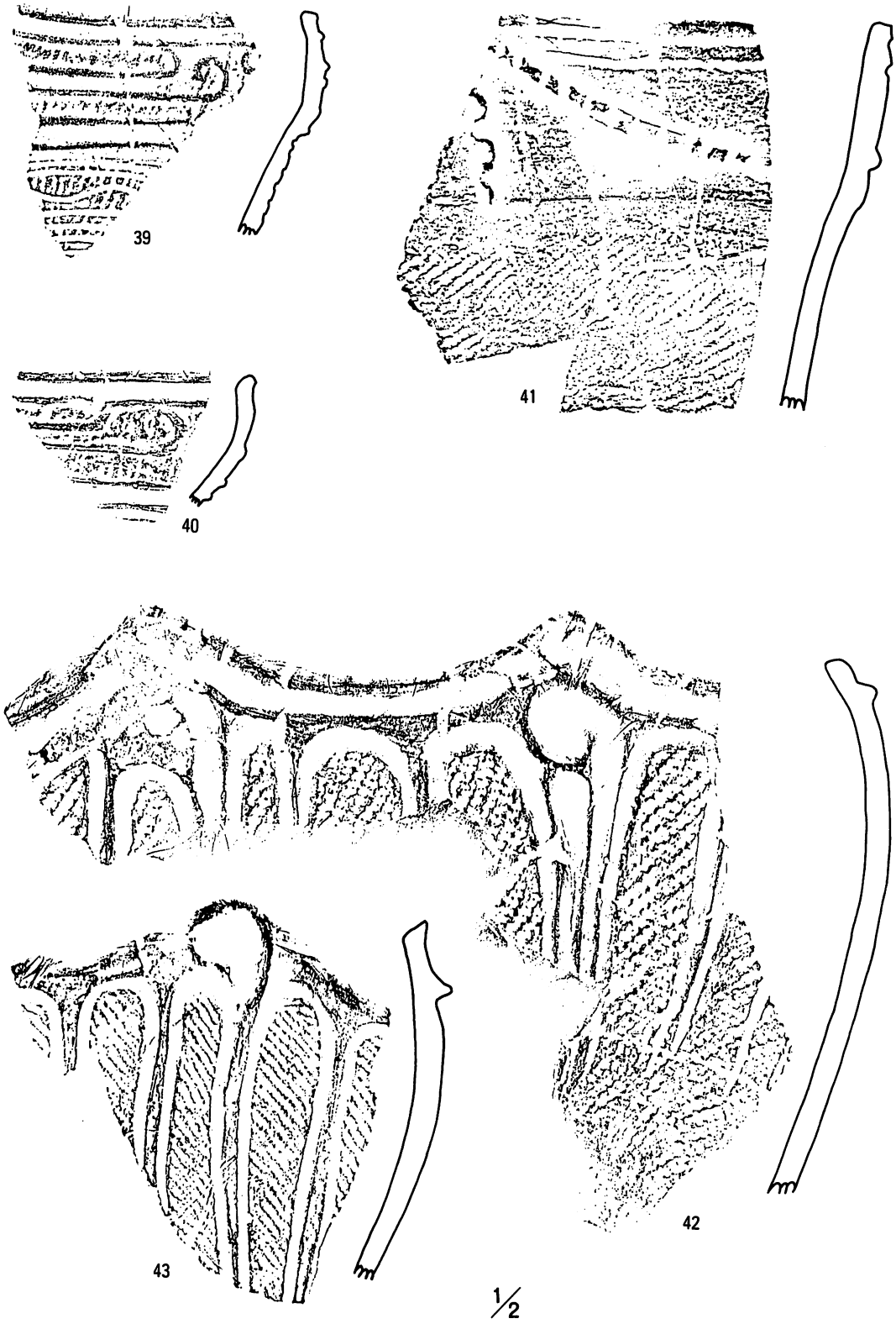
図版16　拓本 (1)



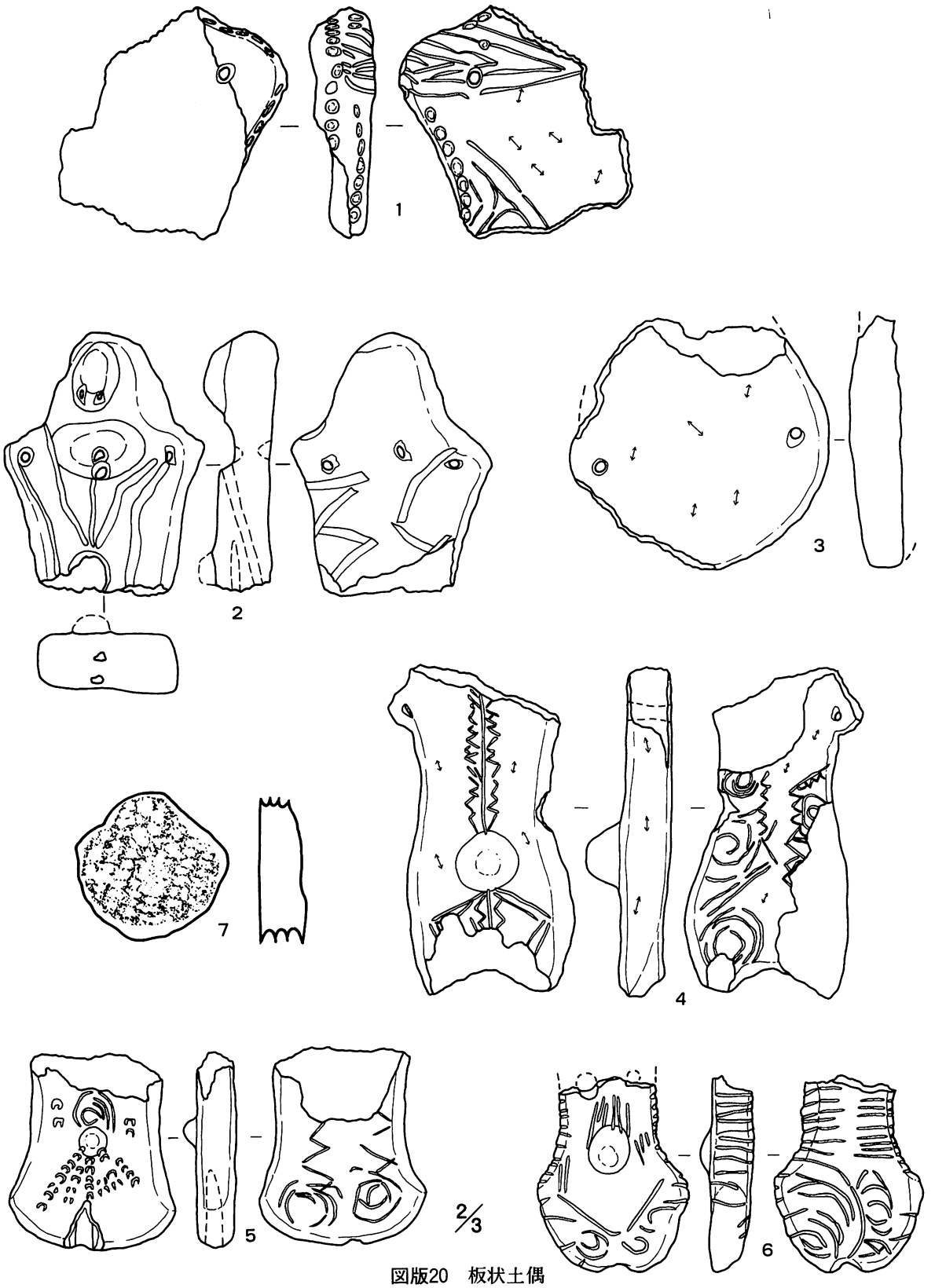
図版17　拓本 (2)



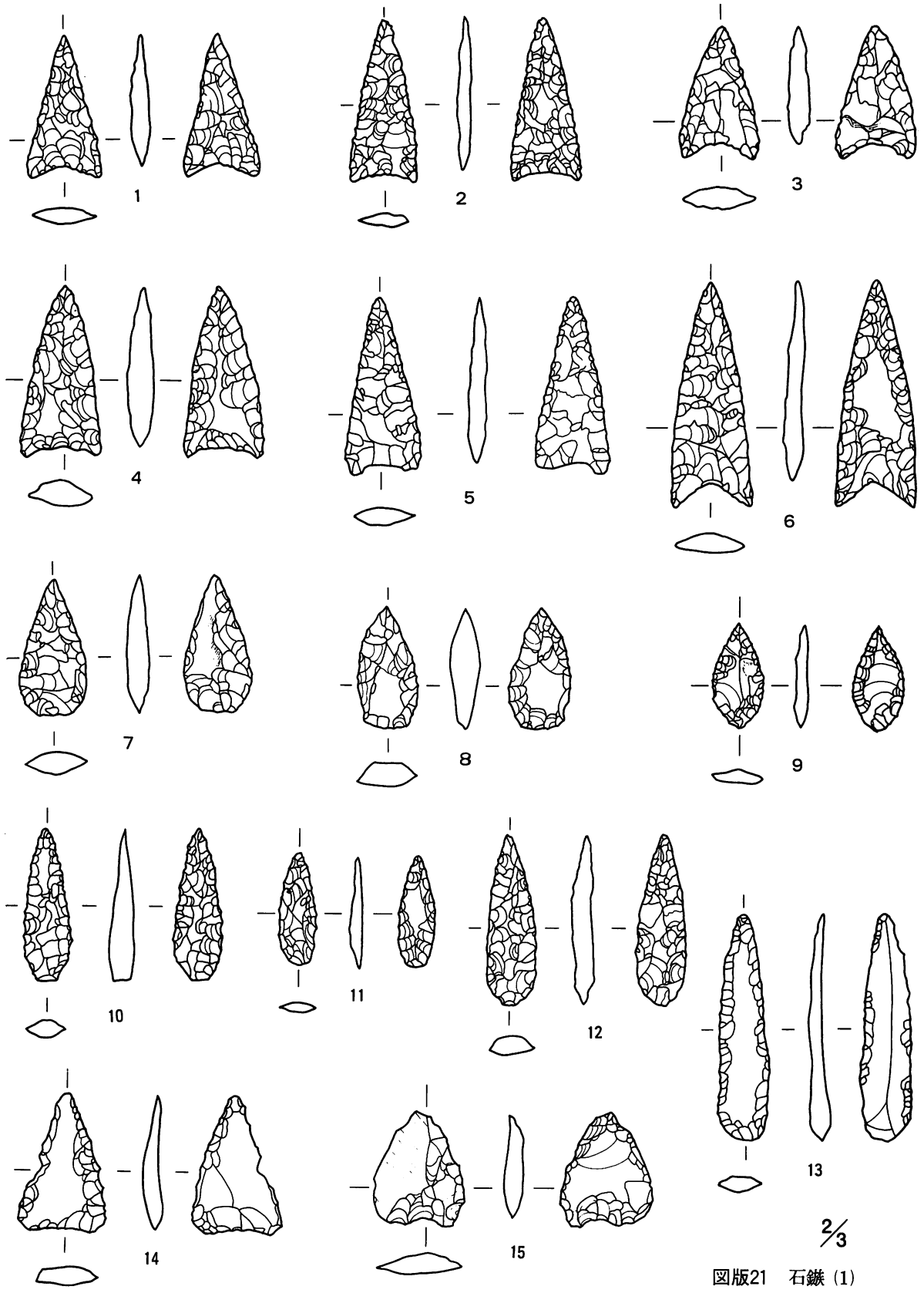
図版18　拓本 (3)



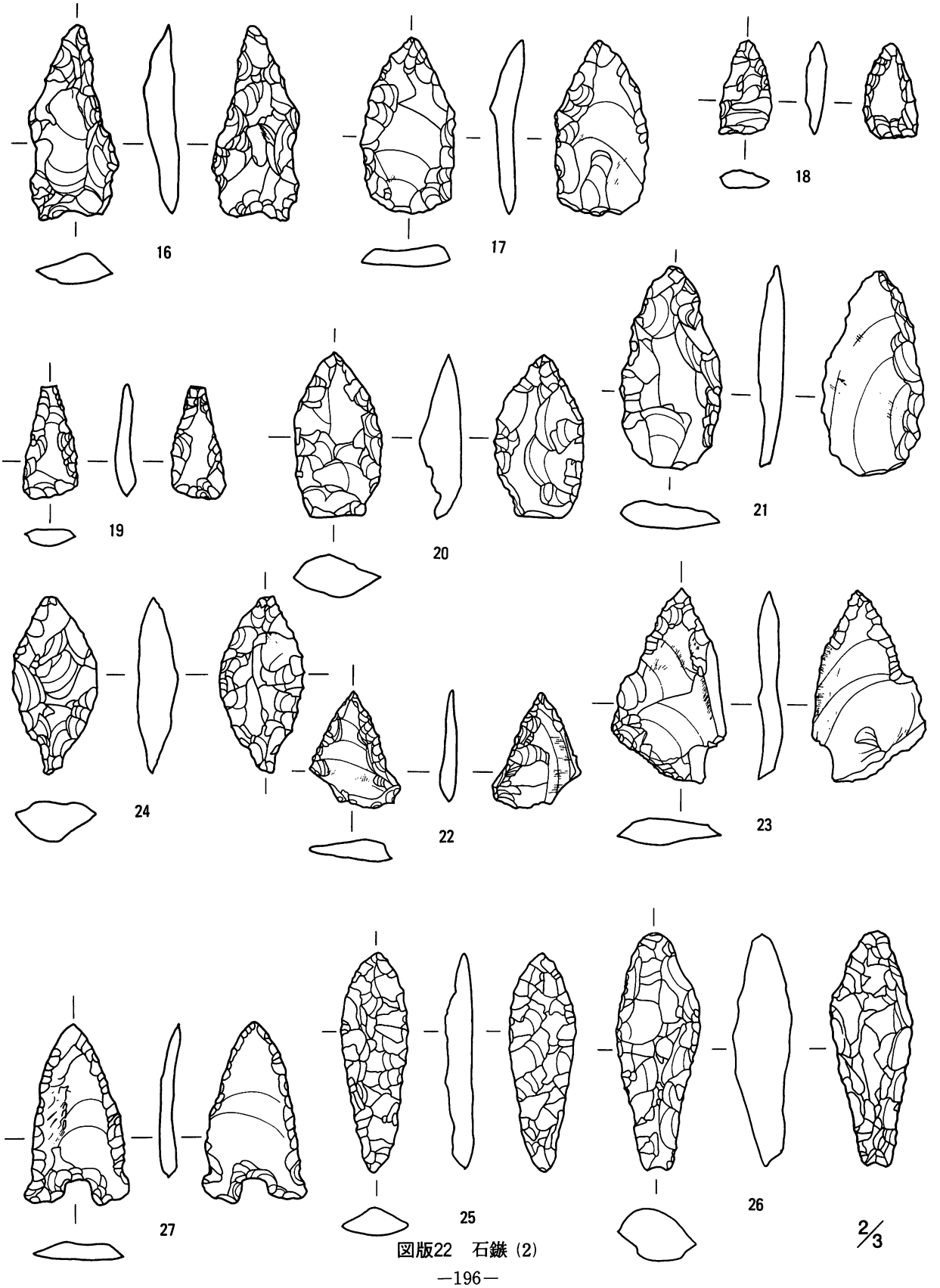
図版19　拓本 (4)



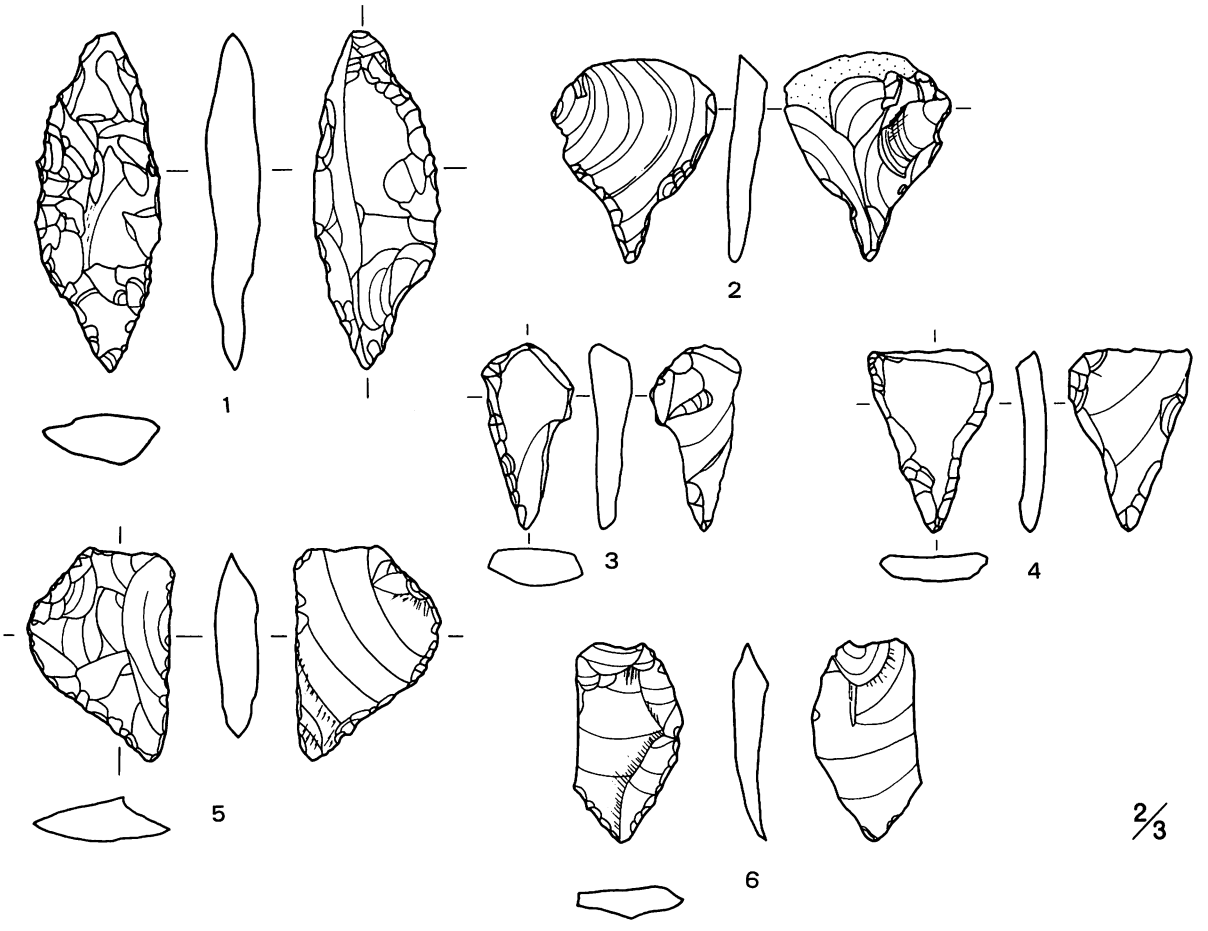
図版20　板状土偶



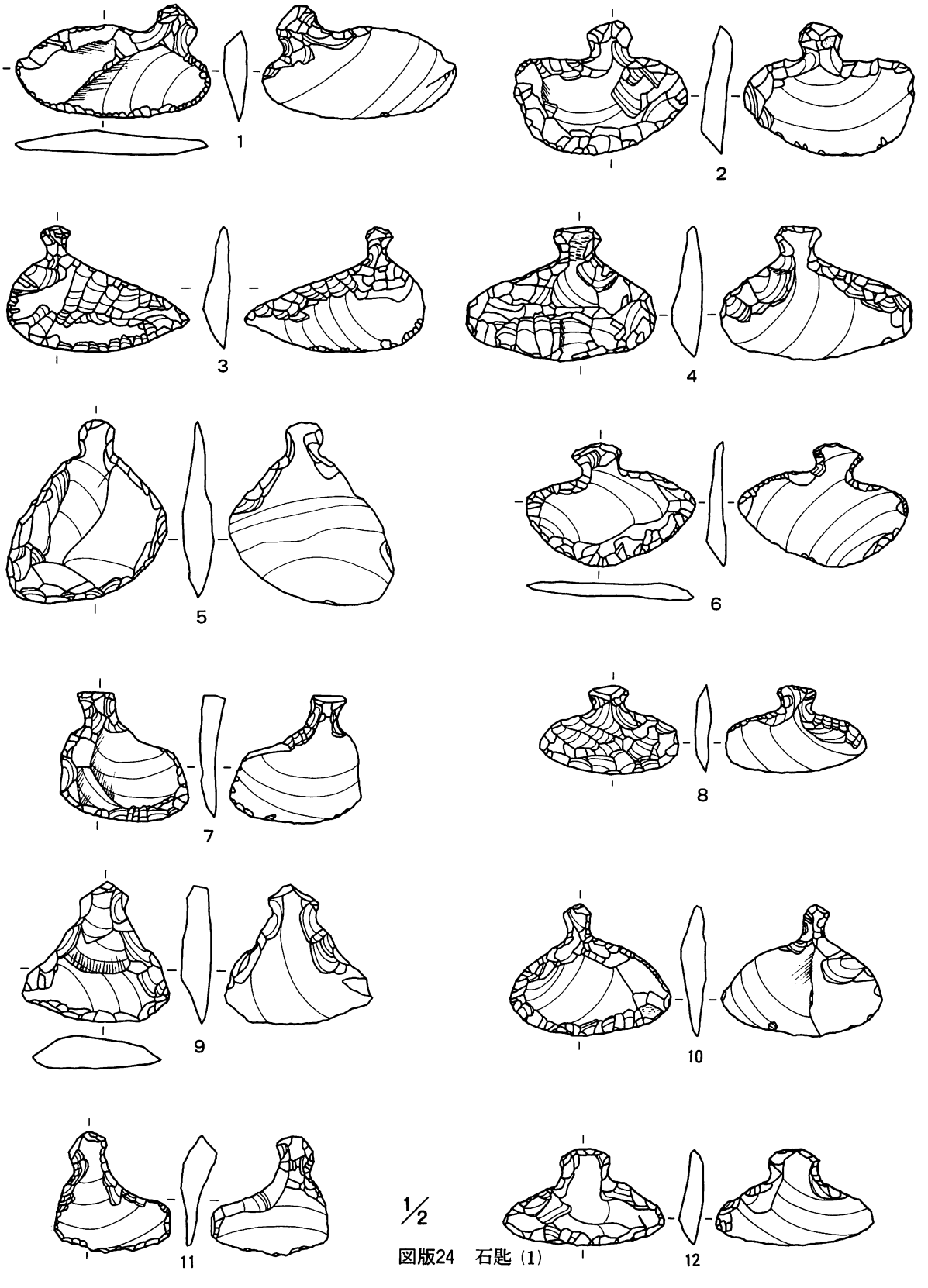
図版21　石鏃 (1)



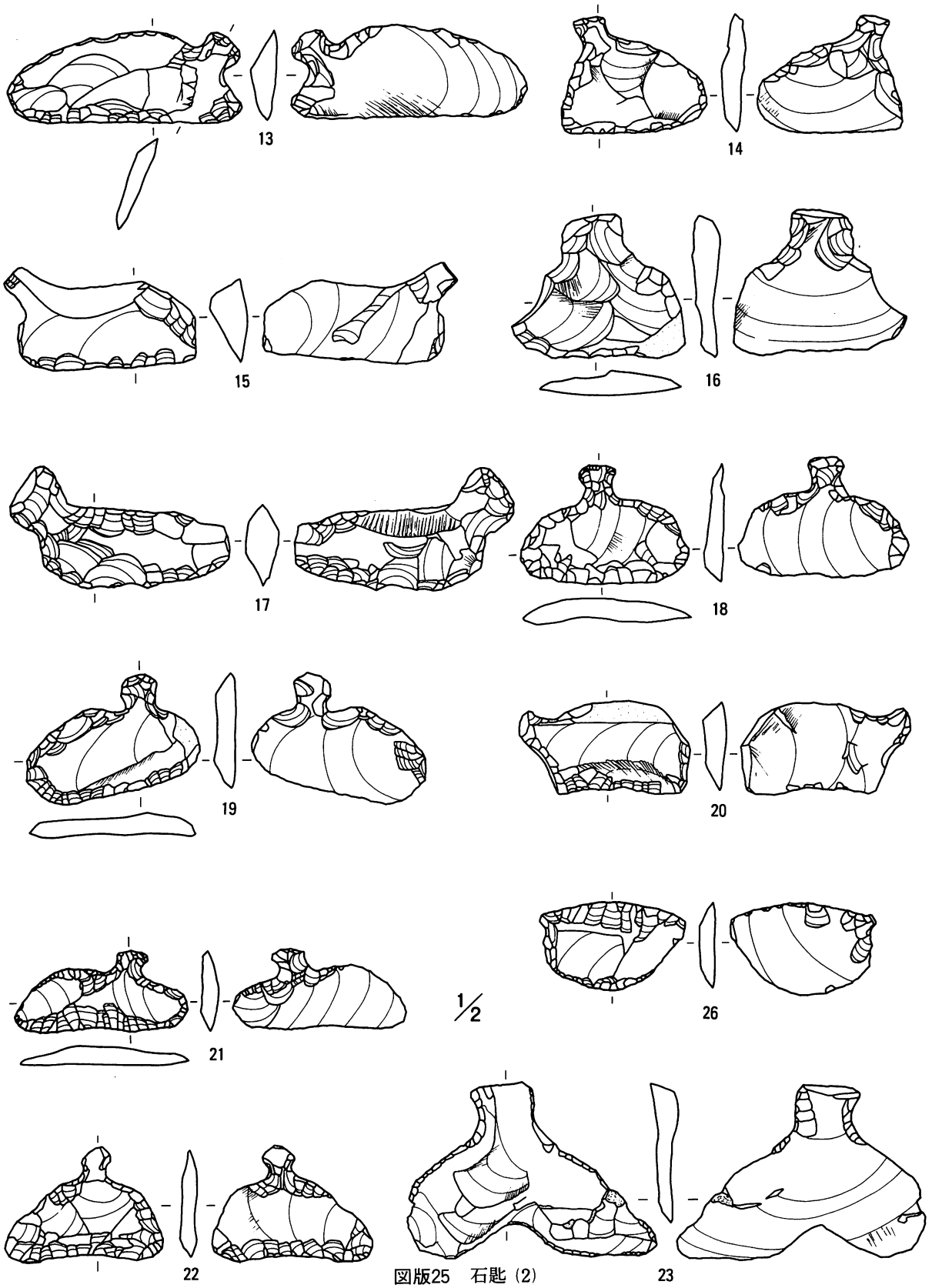
図版22　石鏃（2）



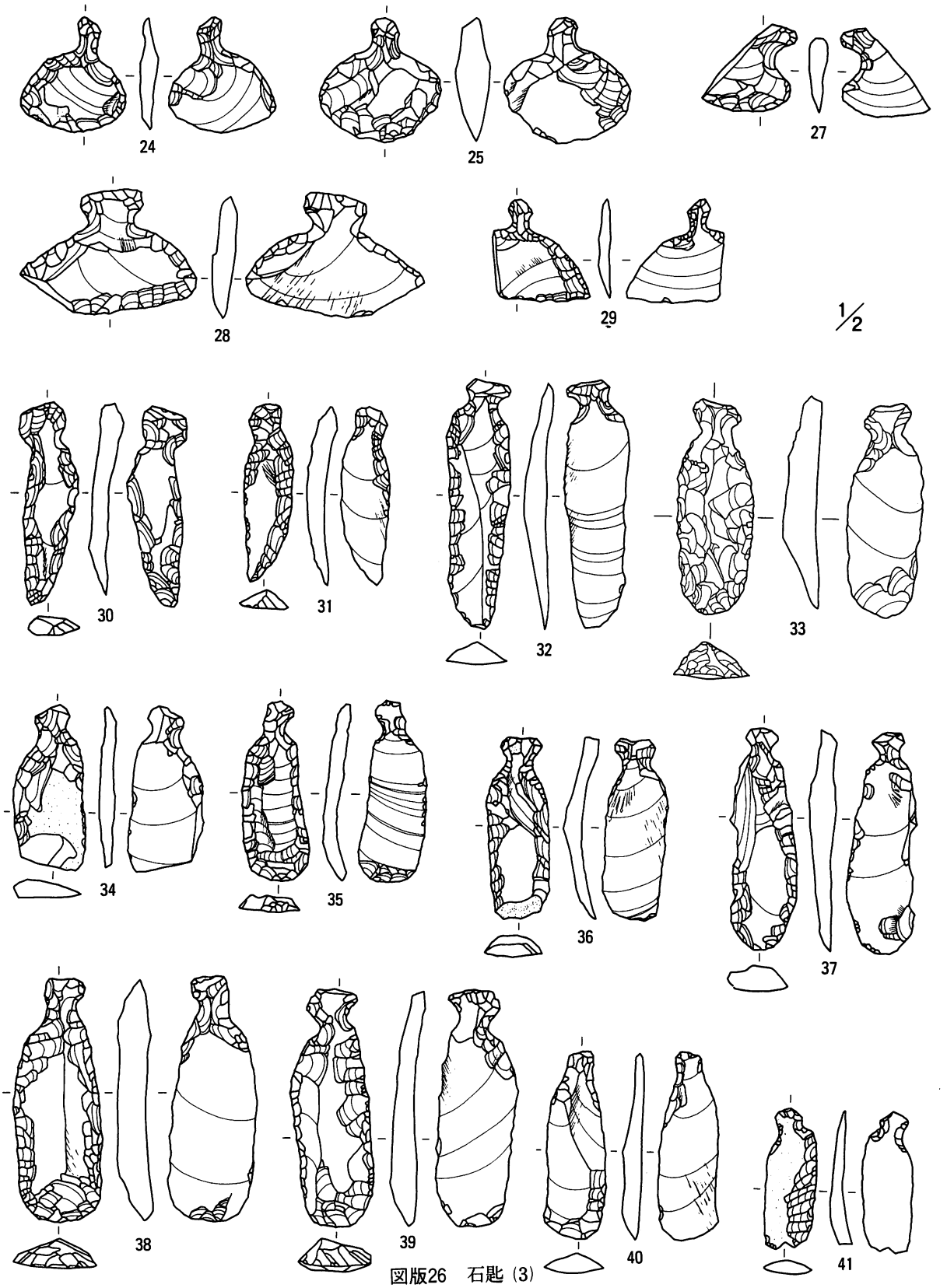
図版23　石錐



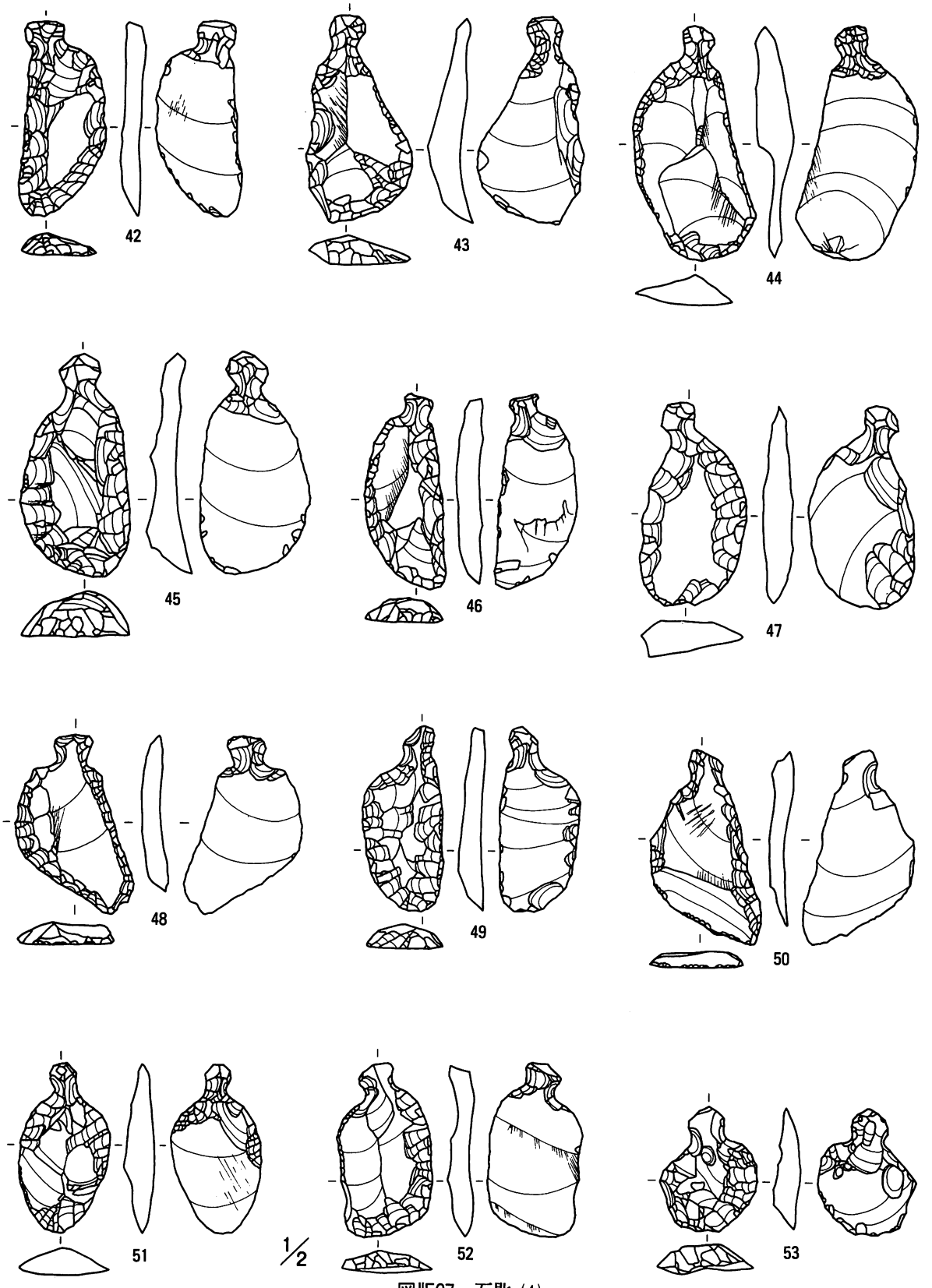
図版24　石匙 (1)



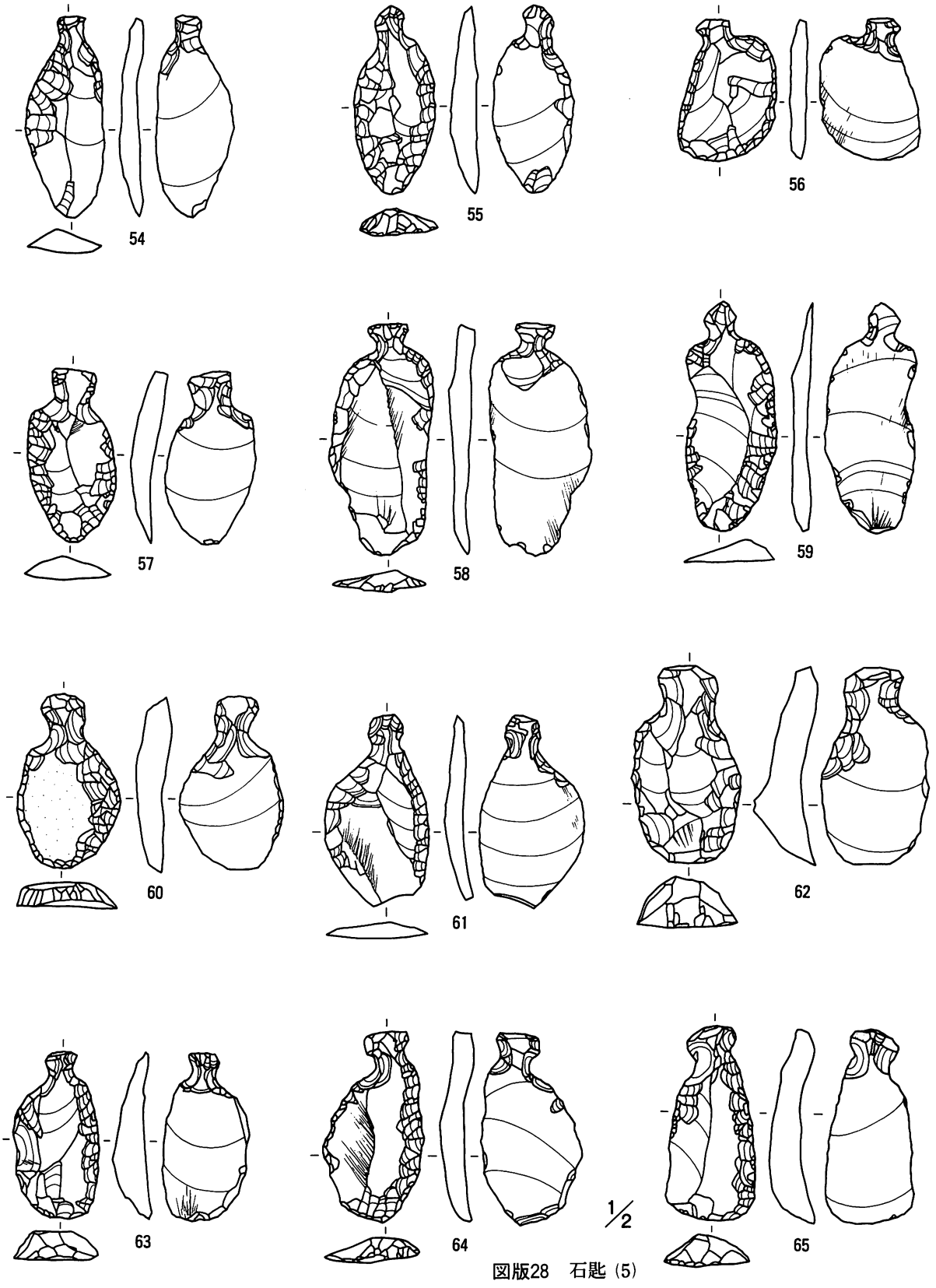
図版25　石匙 (2)



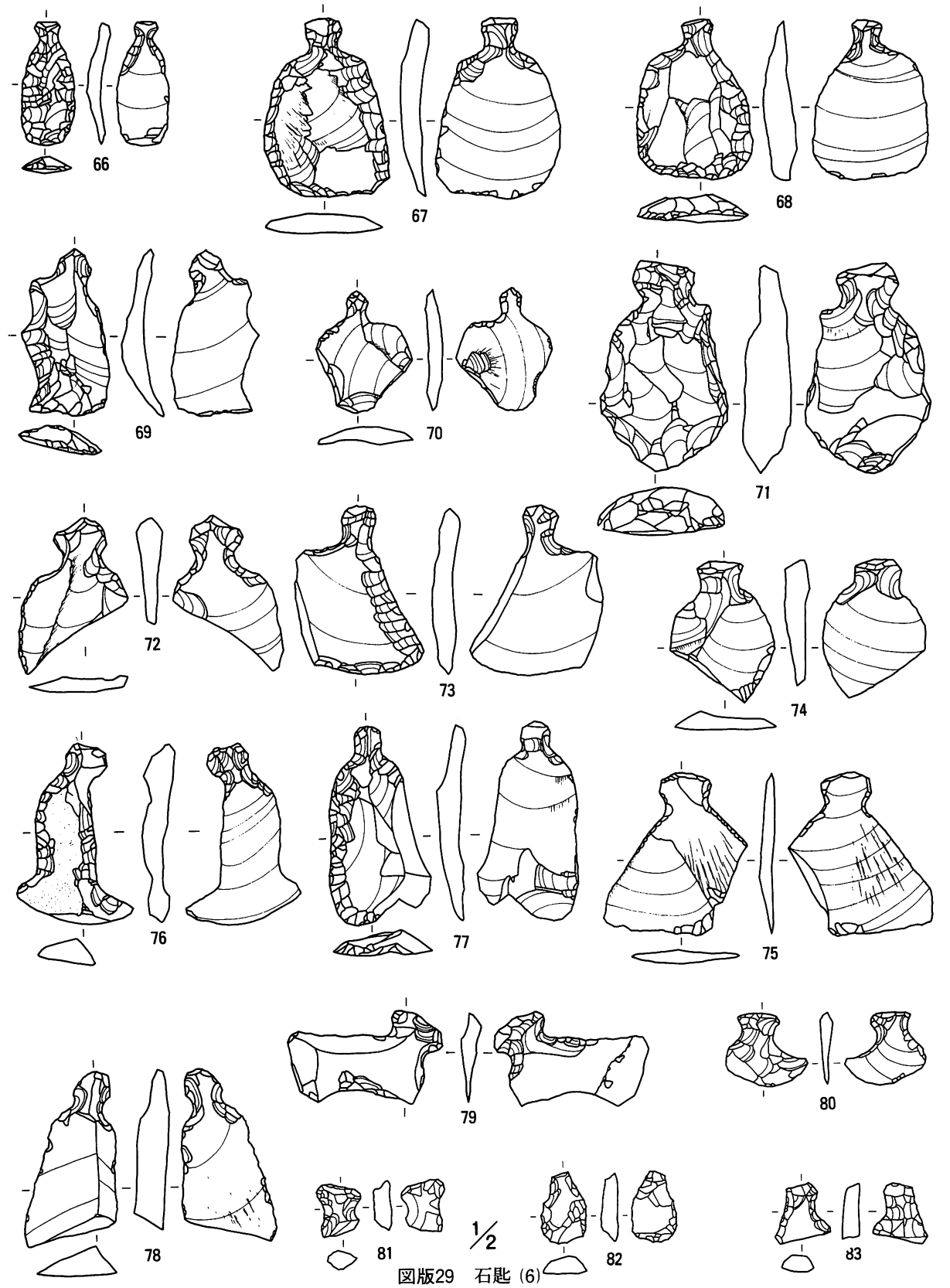
図版26　石匙 (3)



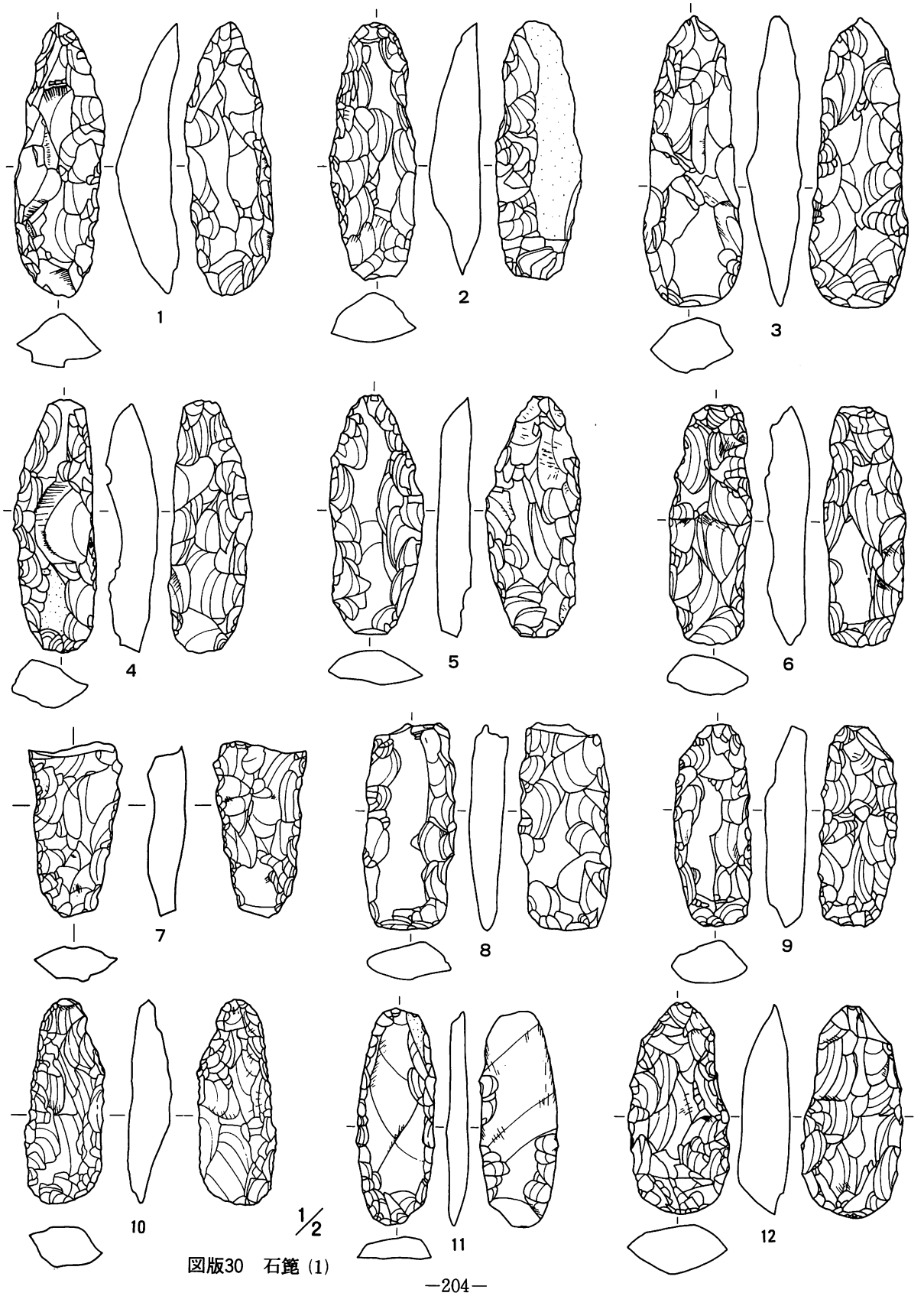
図版27　石匙 (4)



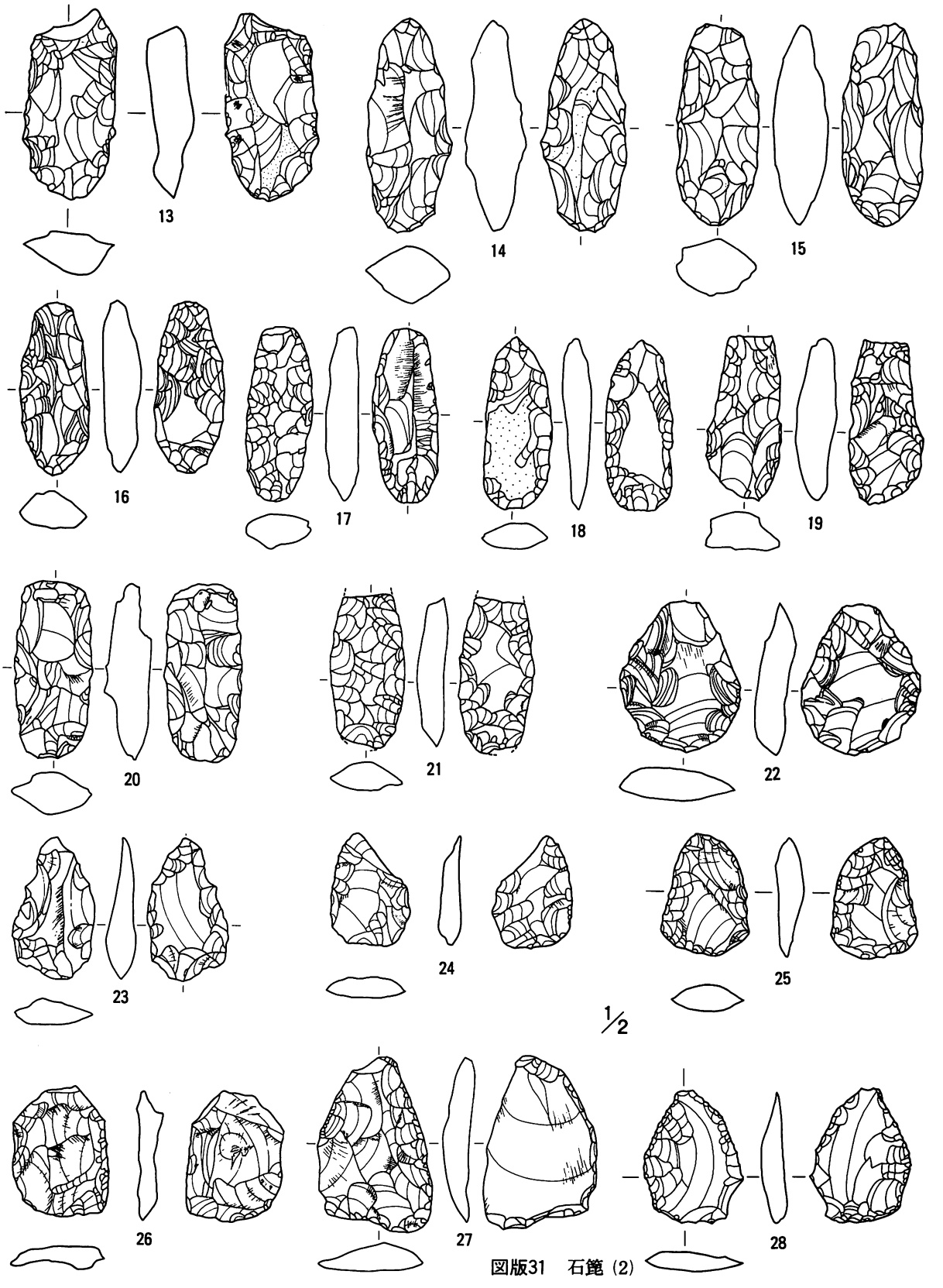
図版28　石匙（5）



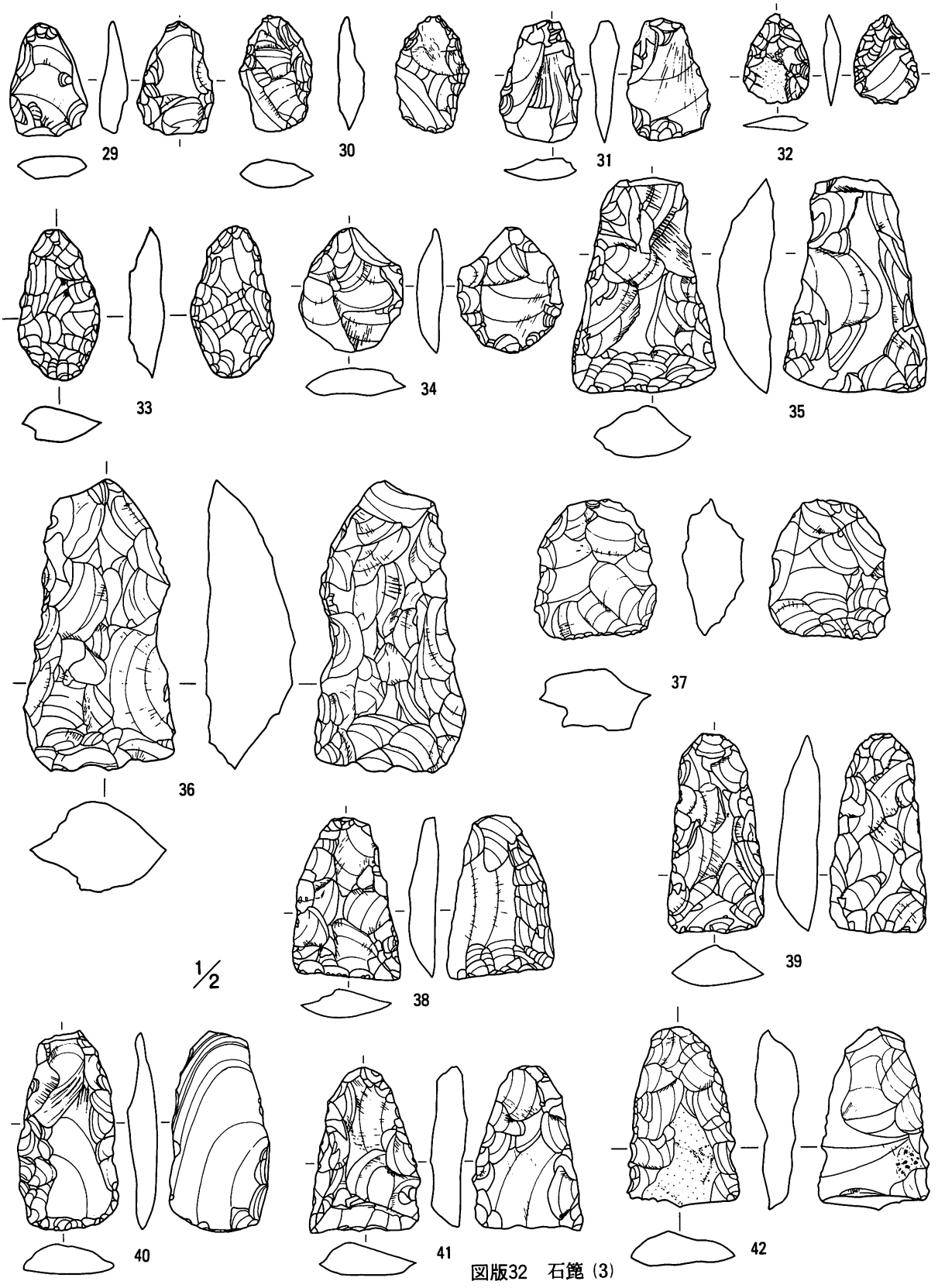
図版29　石匙 (6)



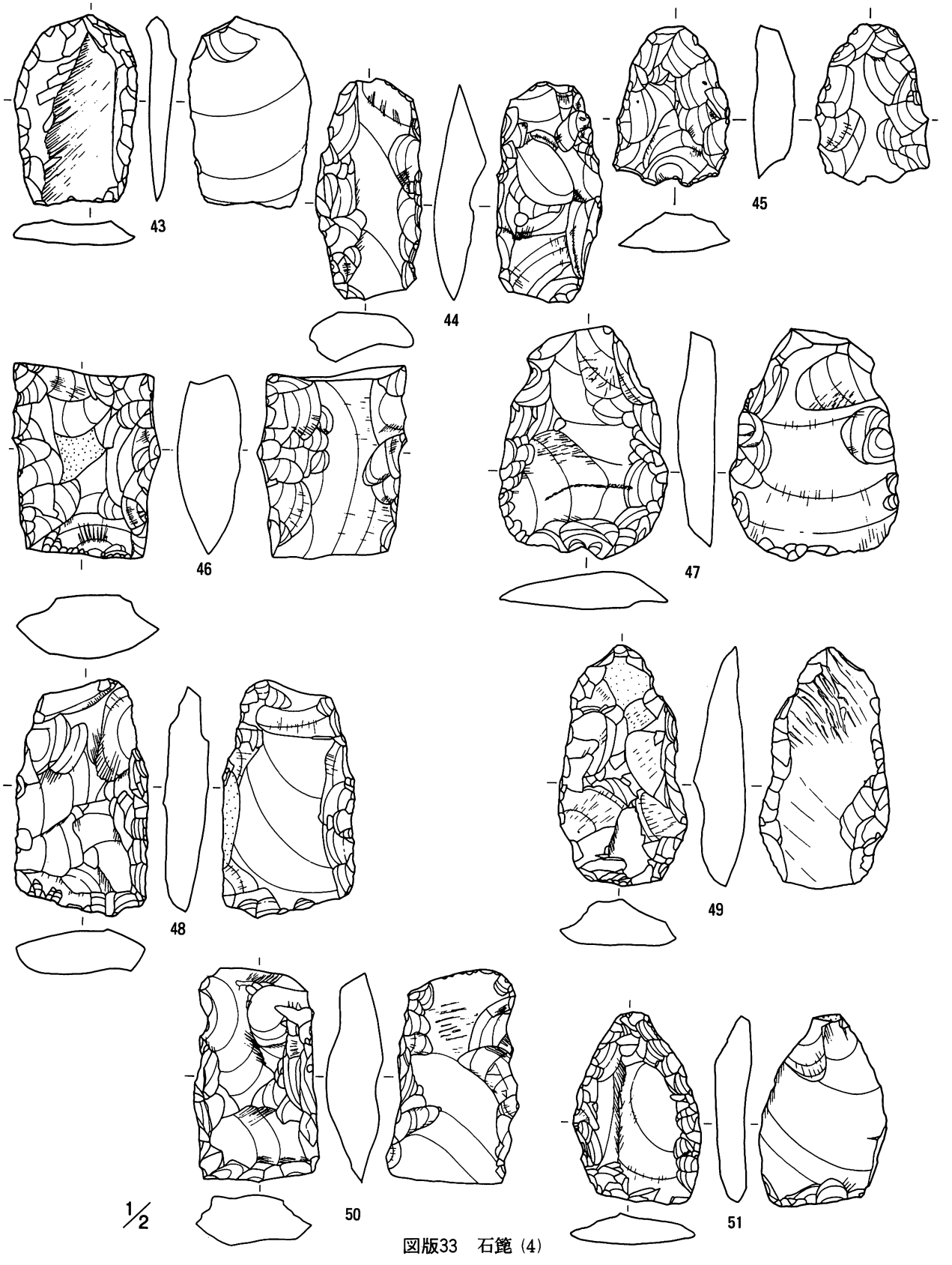
図版30　石篦 (1)



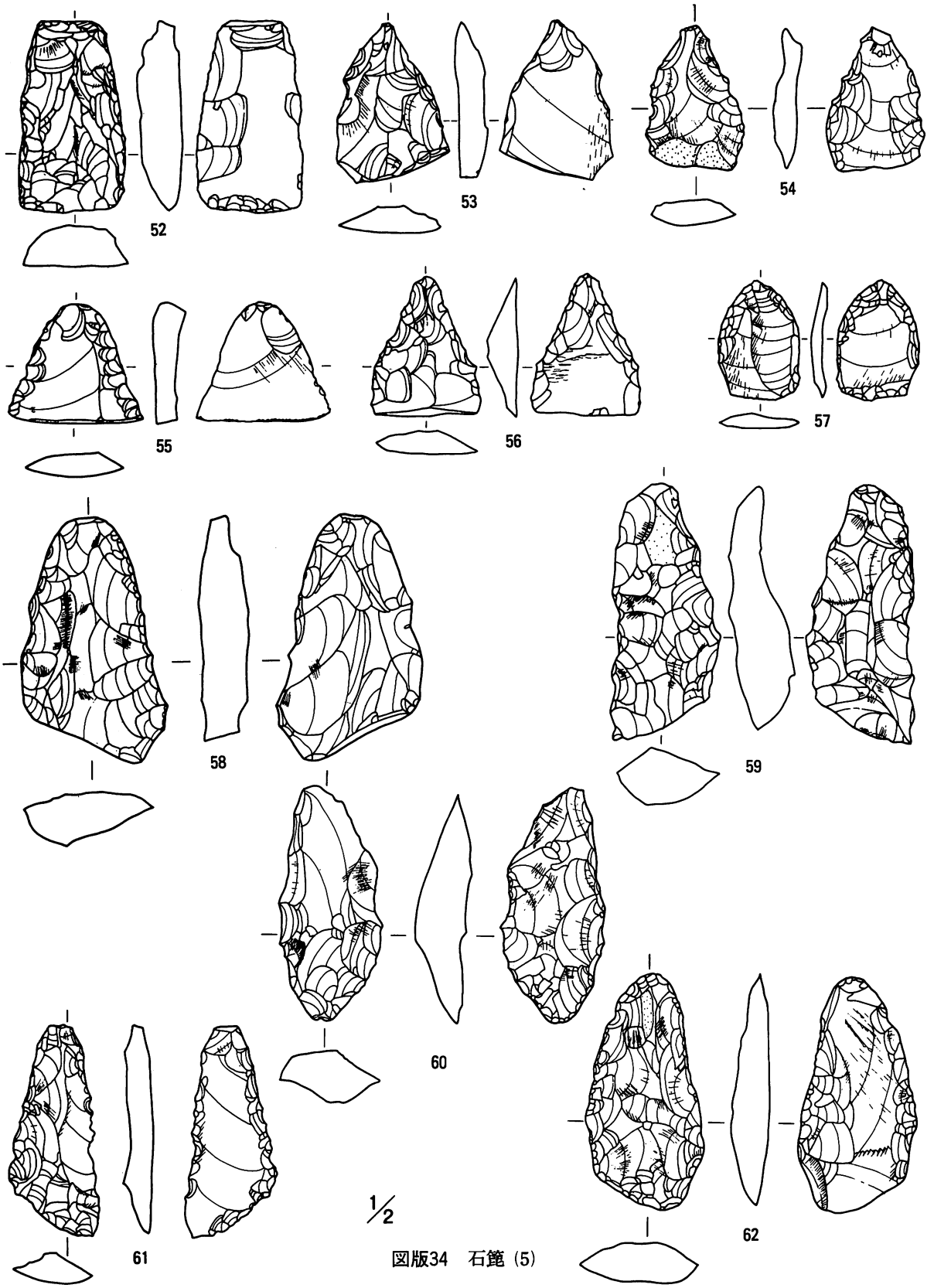
図版31　石篦 (2)



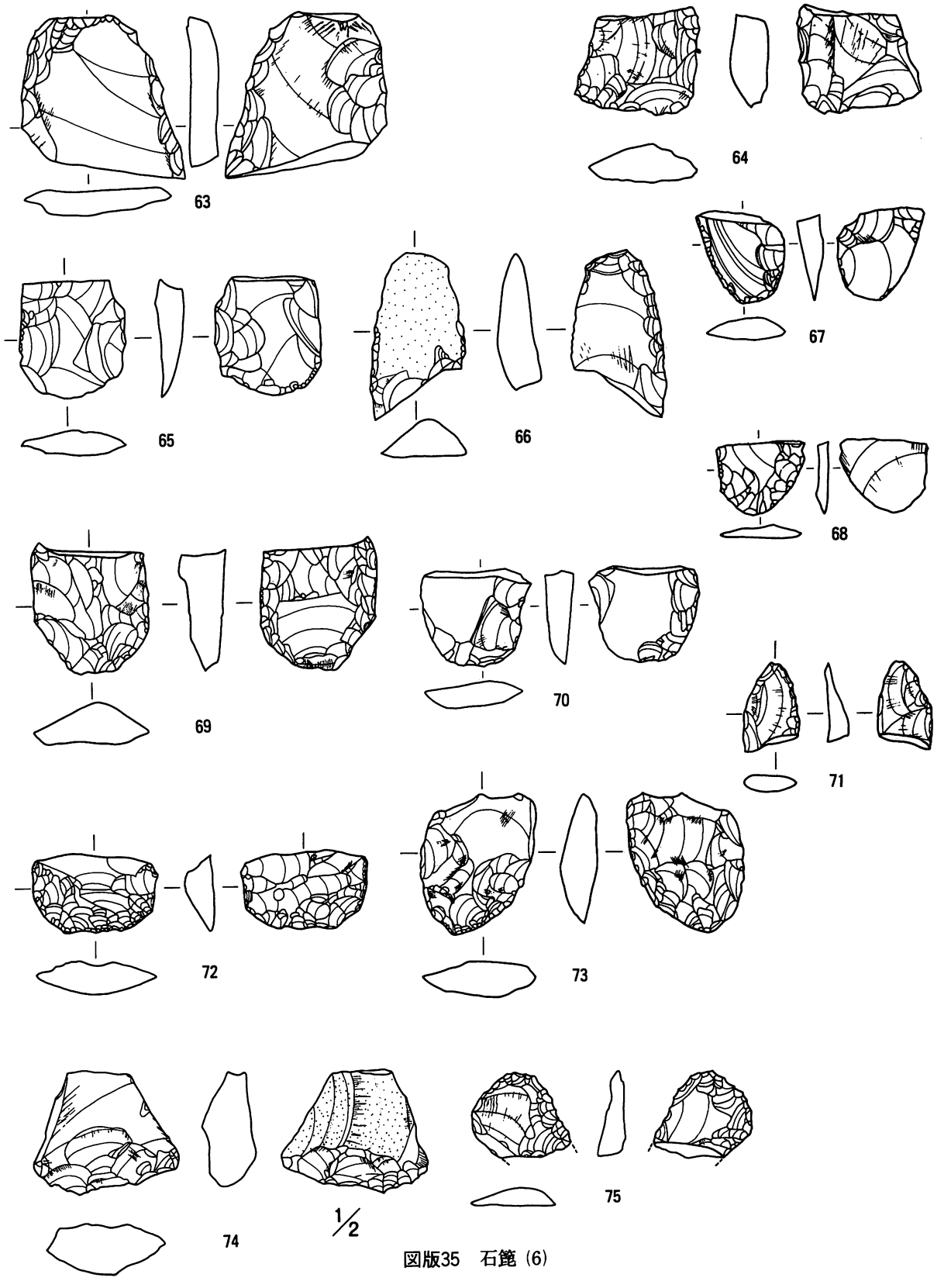
図版32　石鏃 (3)



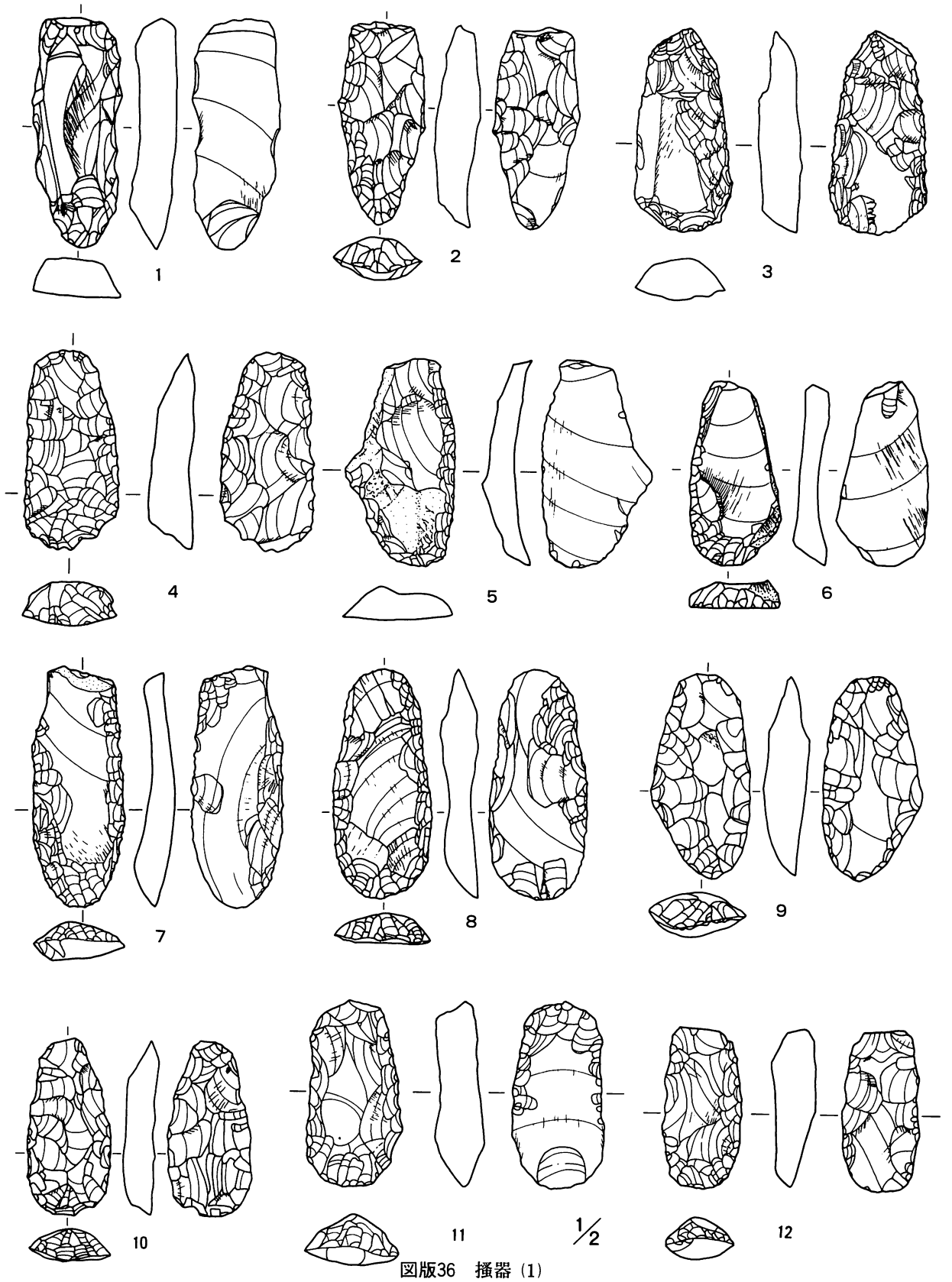
図版33　石鏃（4）



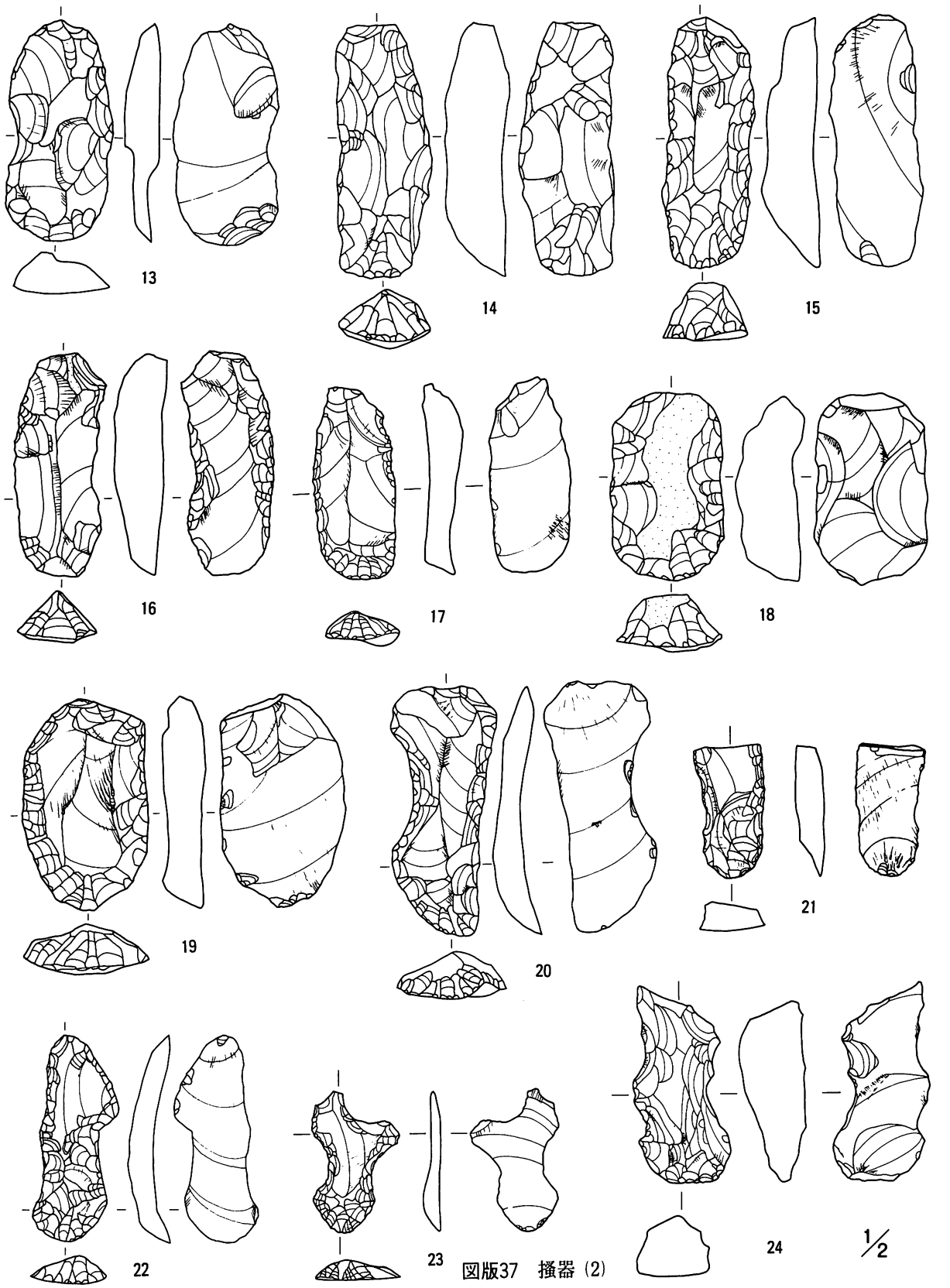
図版34　石鏃 (5)



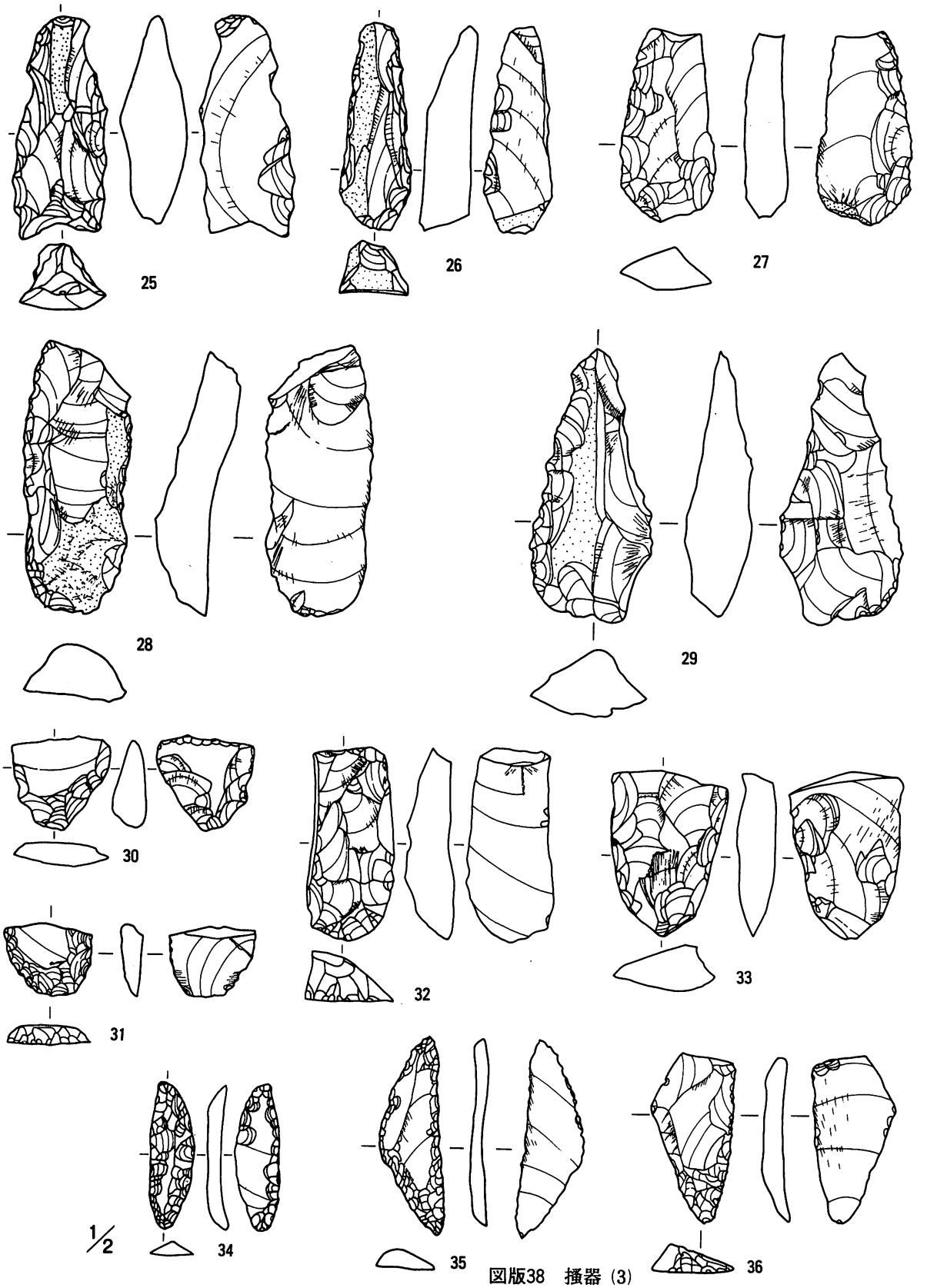
図版35　石鏃 (6)



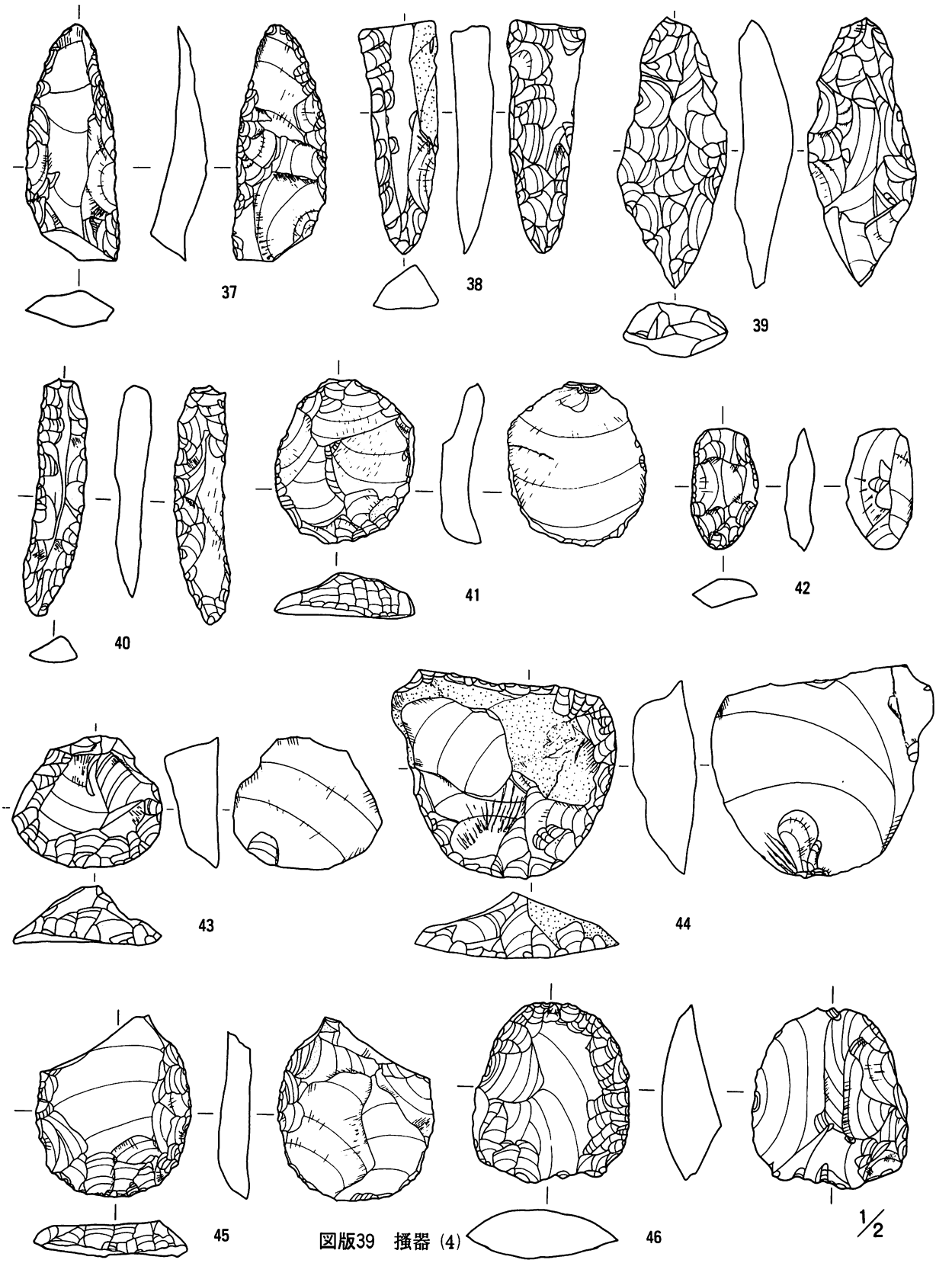
図版36　掻器（1）



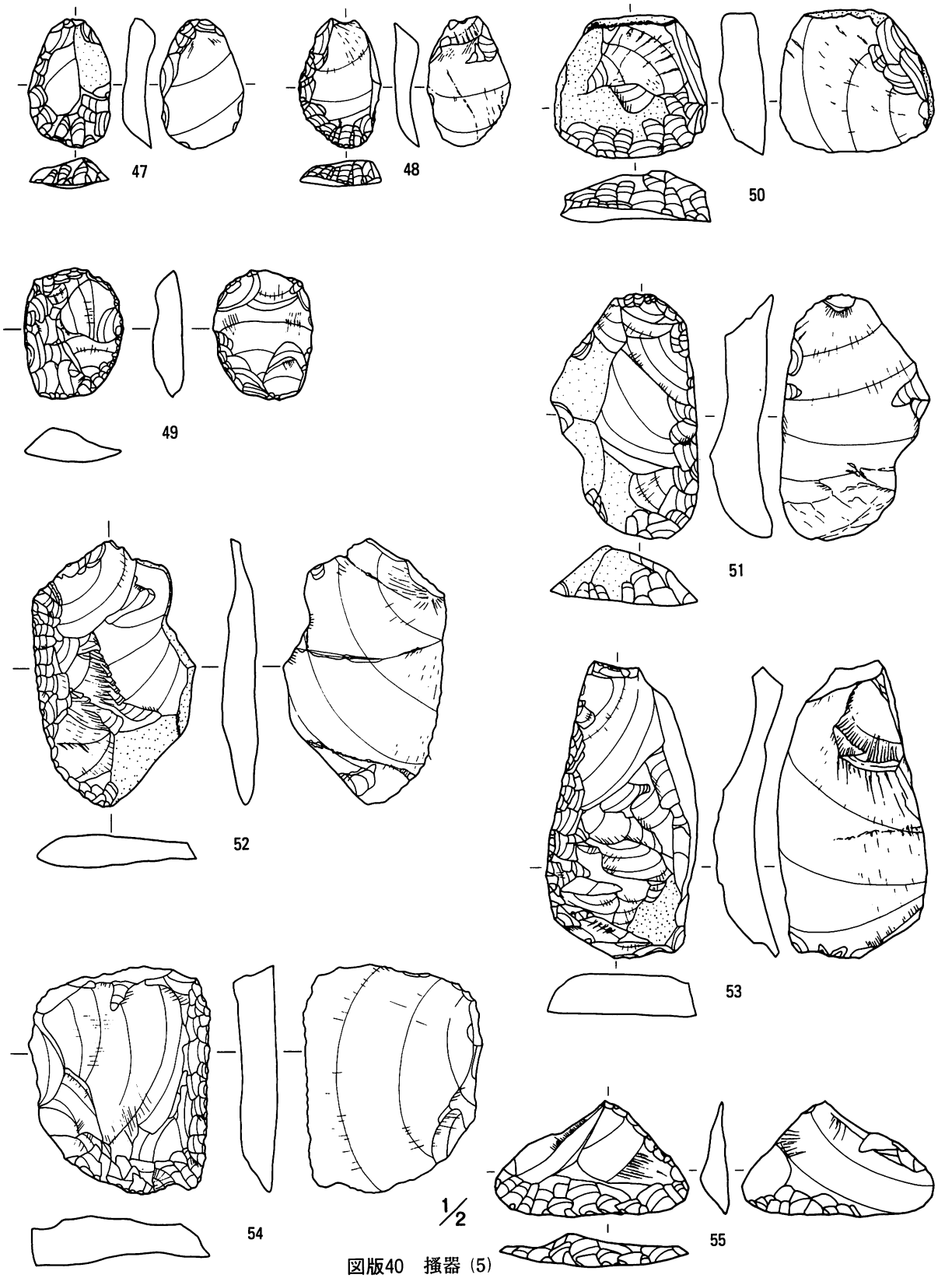
図版37　掻器 (2)



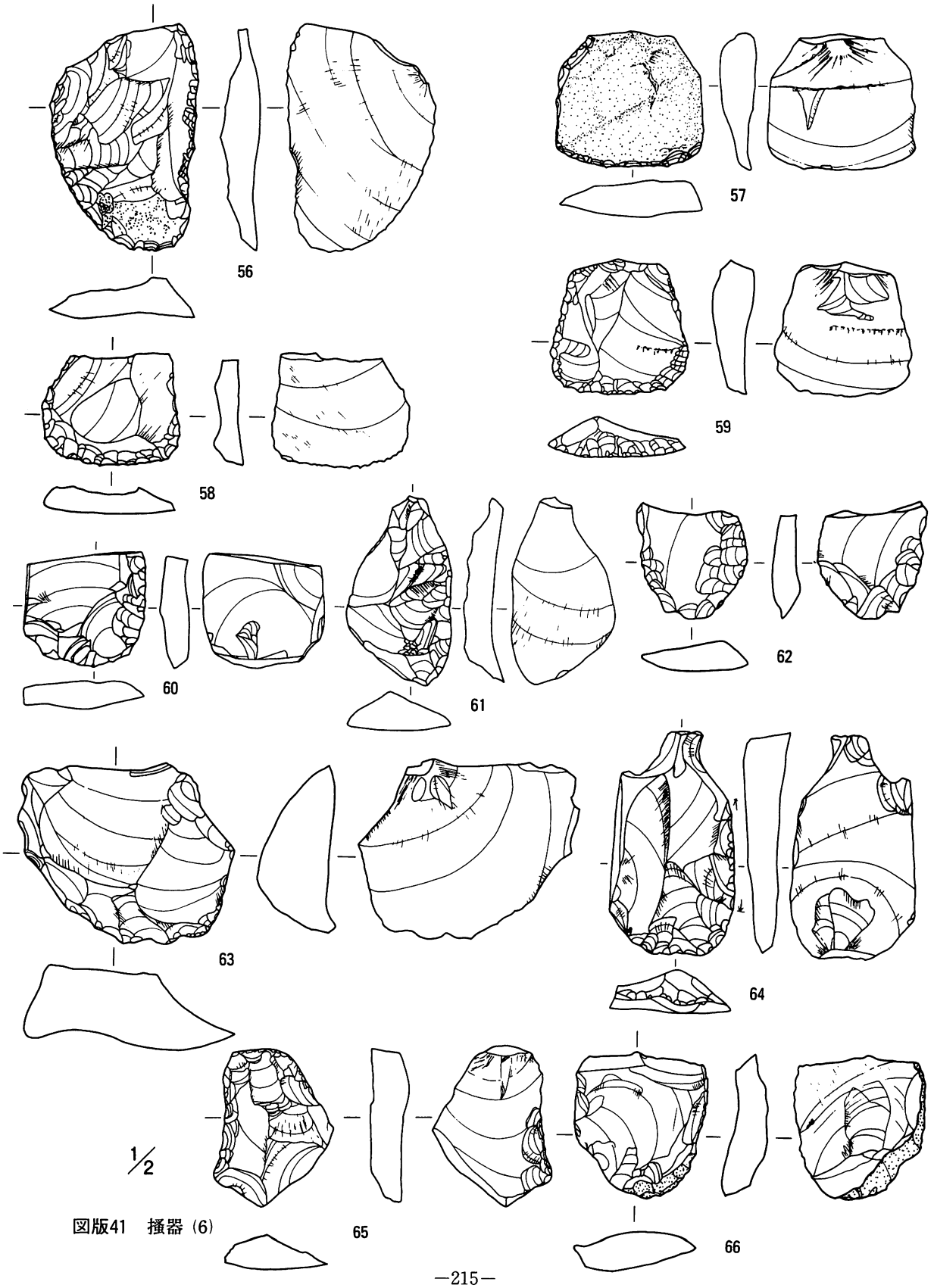
図版38　掻器 (3)



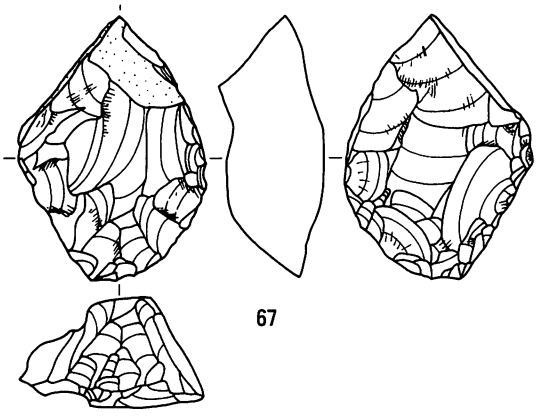
図版39　掻器 (4)

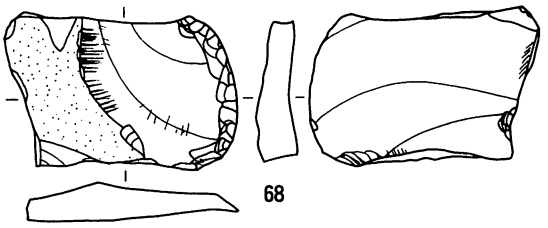


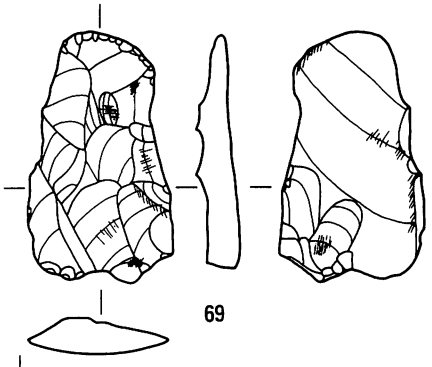
図版40　掻器 (5)

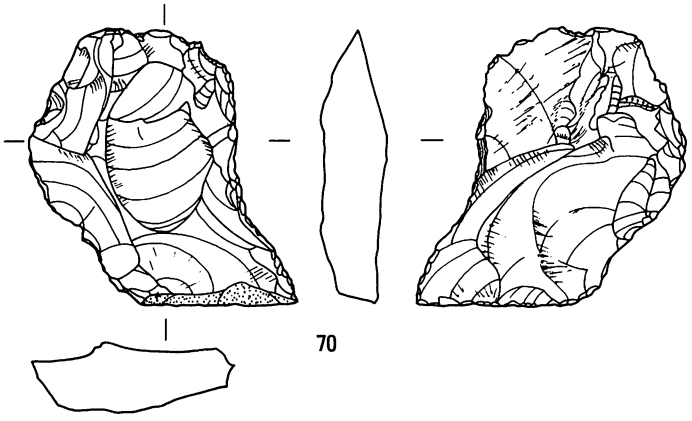


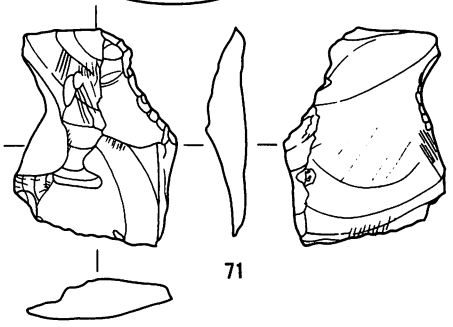
図版41　掻器 (6)

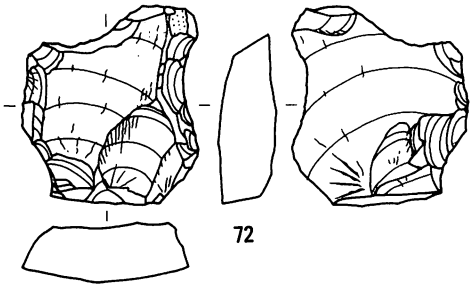


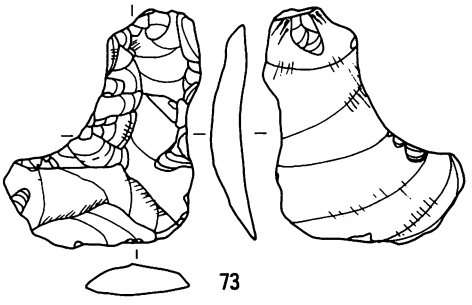


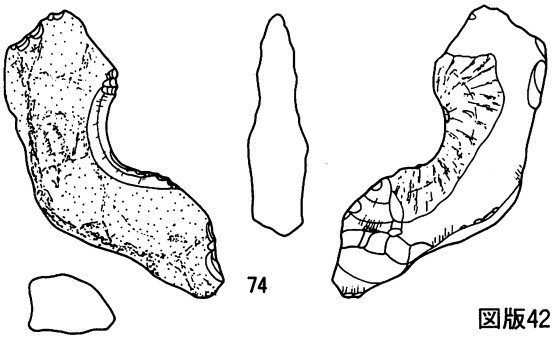


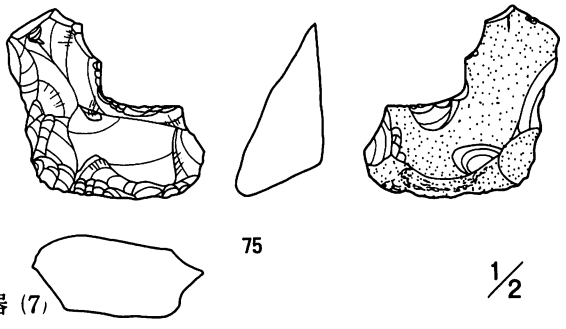






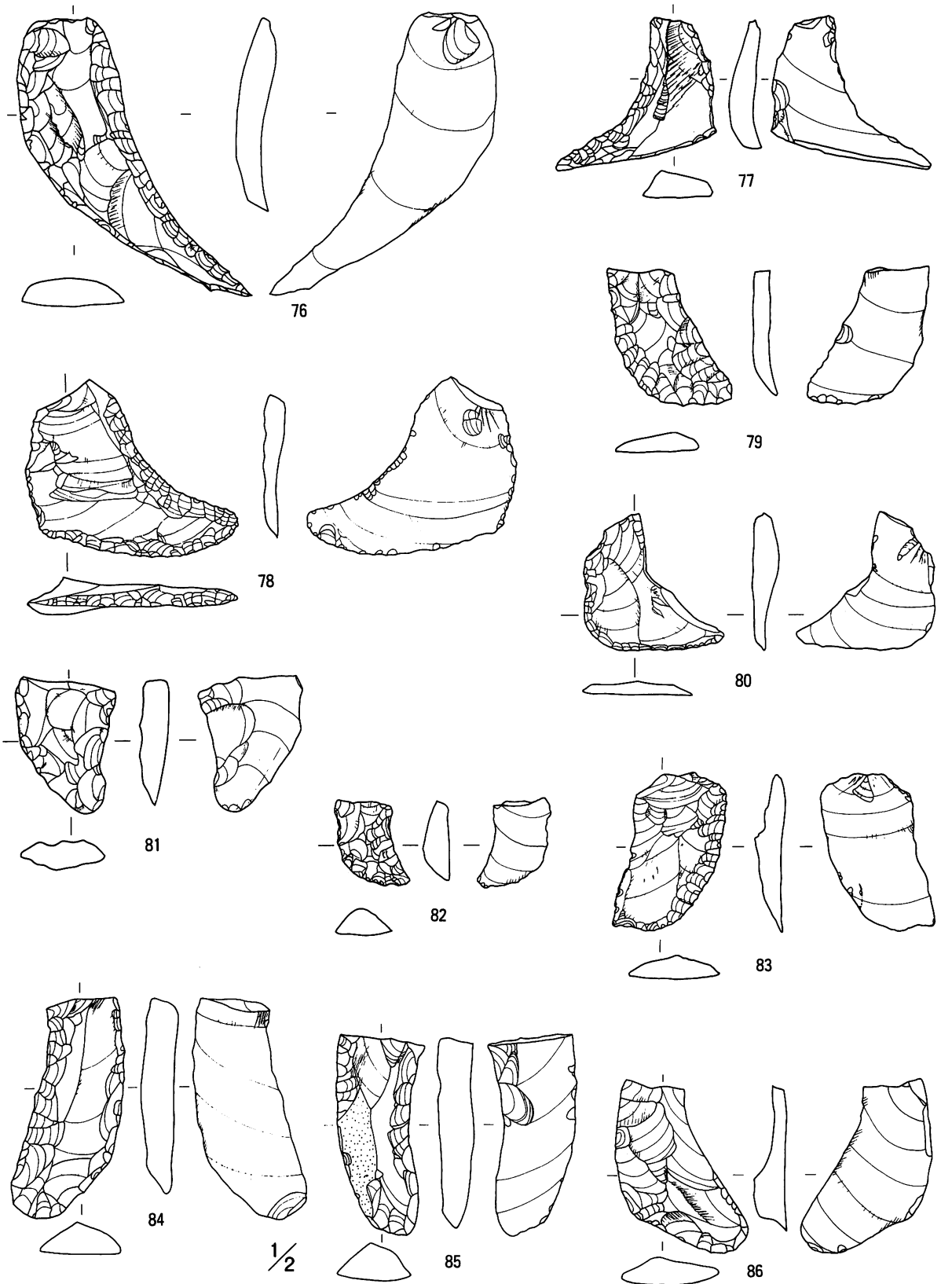




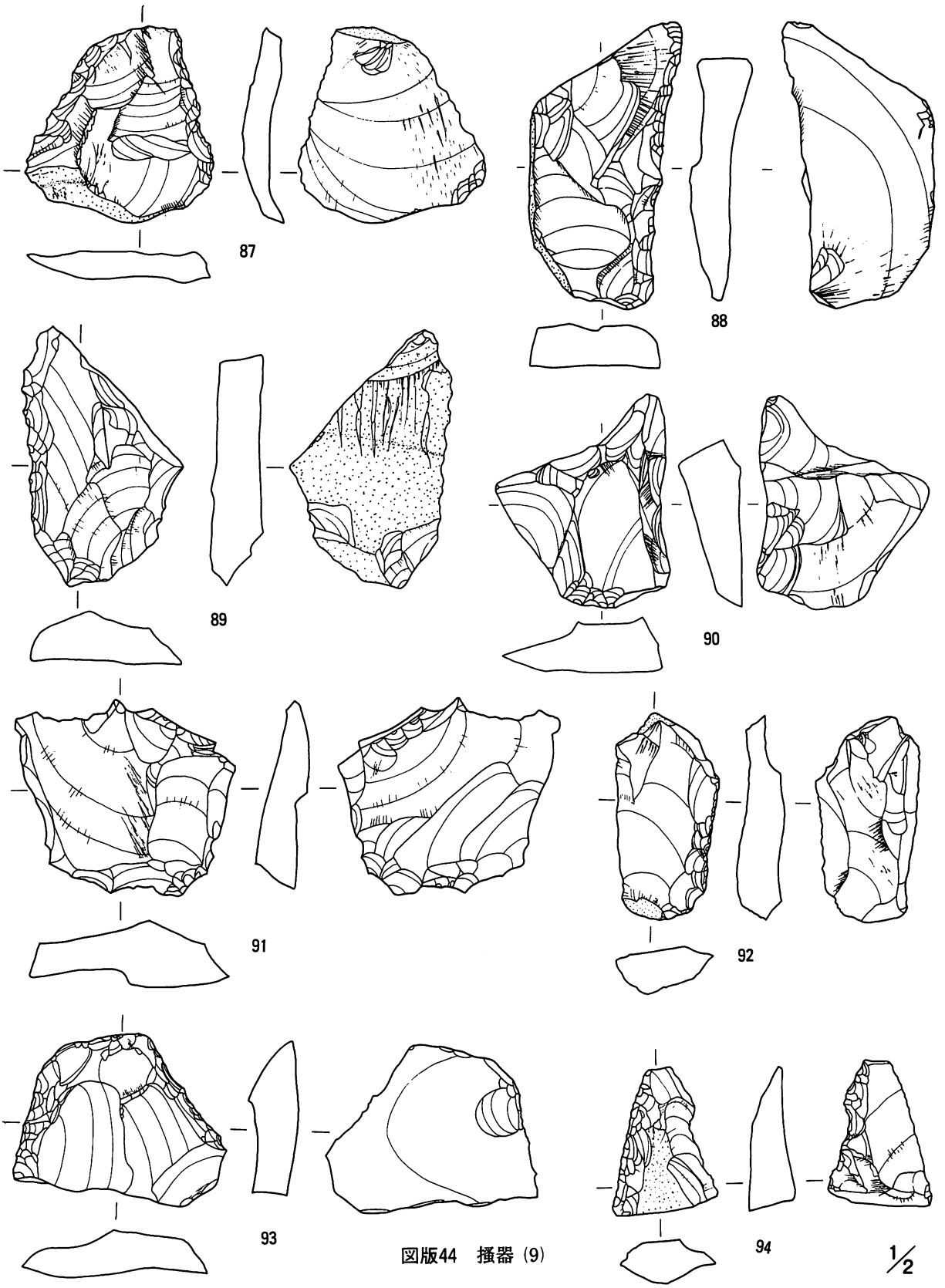


1/2

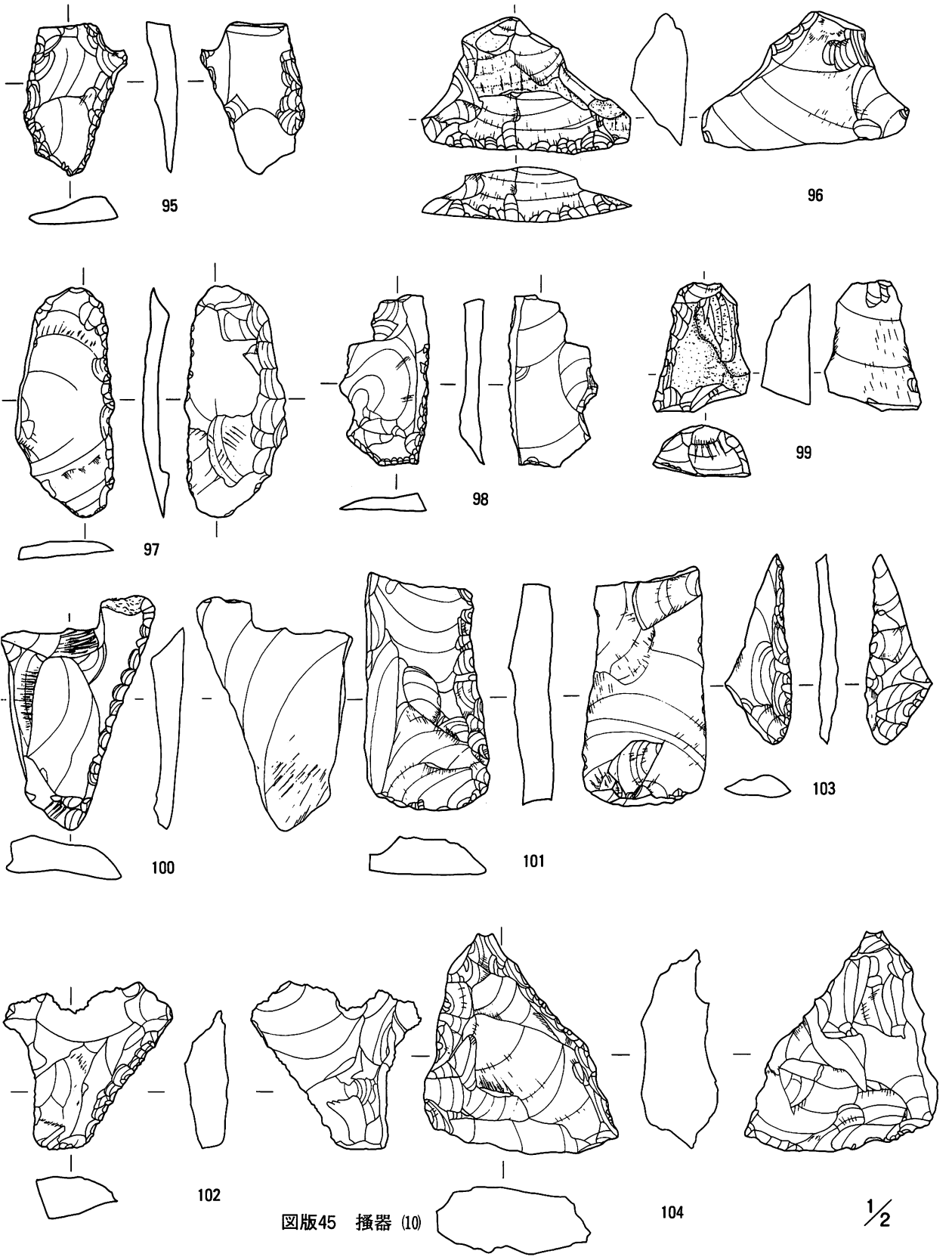
図版42　掻器（7）



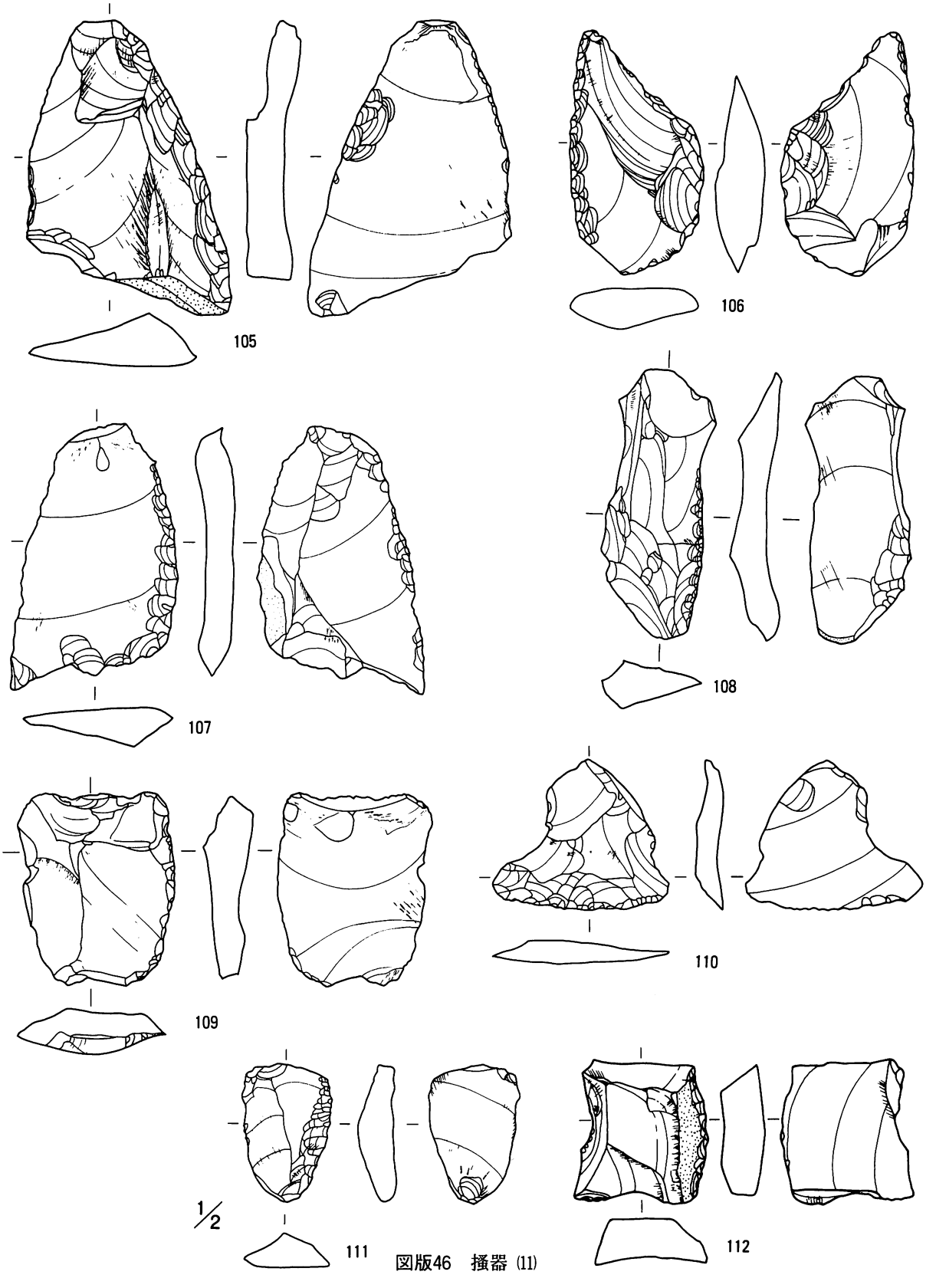
図版43　掻器（8）



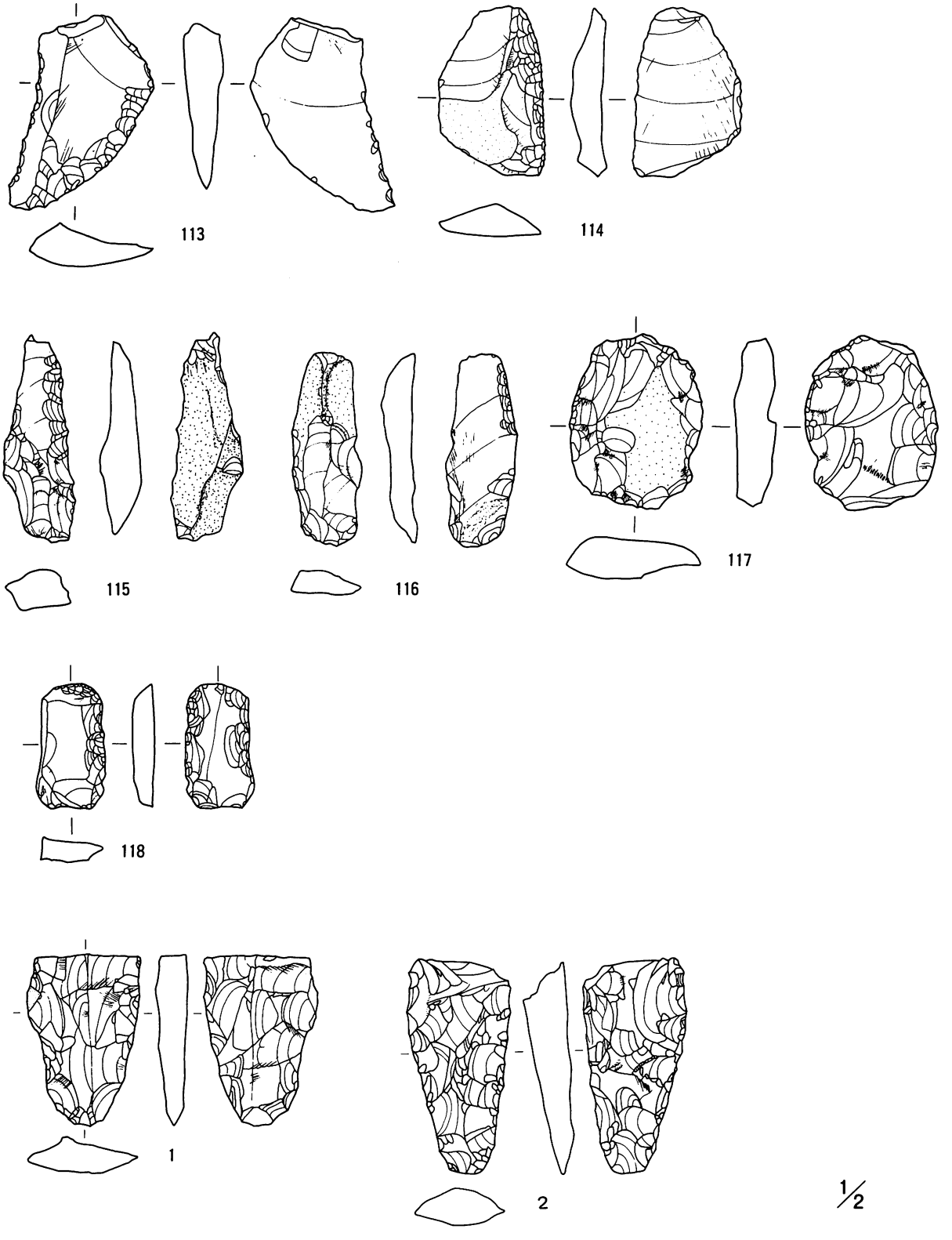
図版44　掻器 (9)



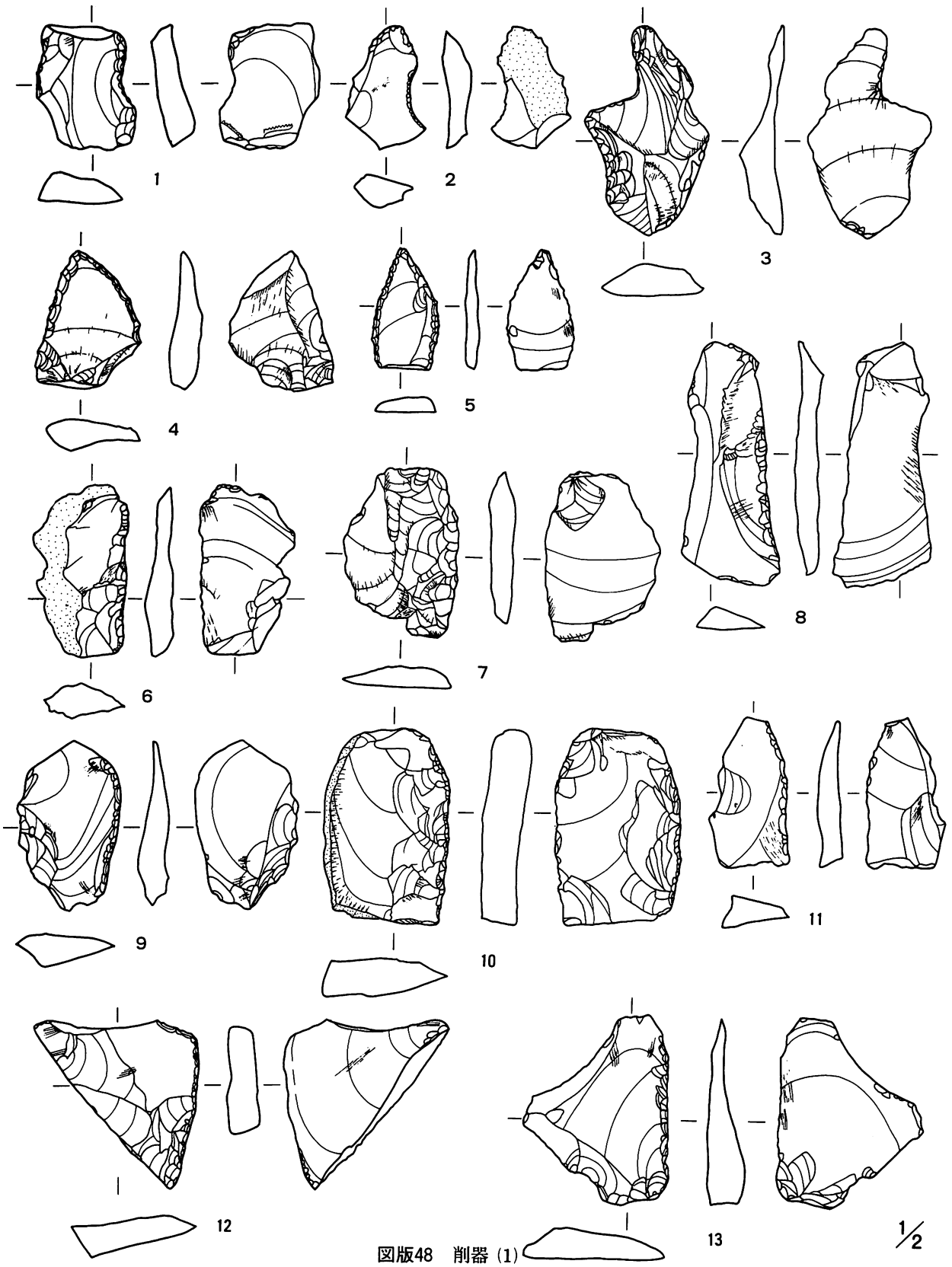
図版45　掻器 (10)



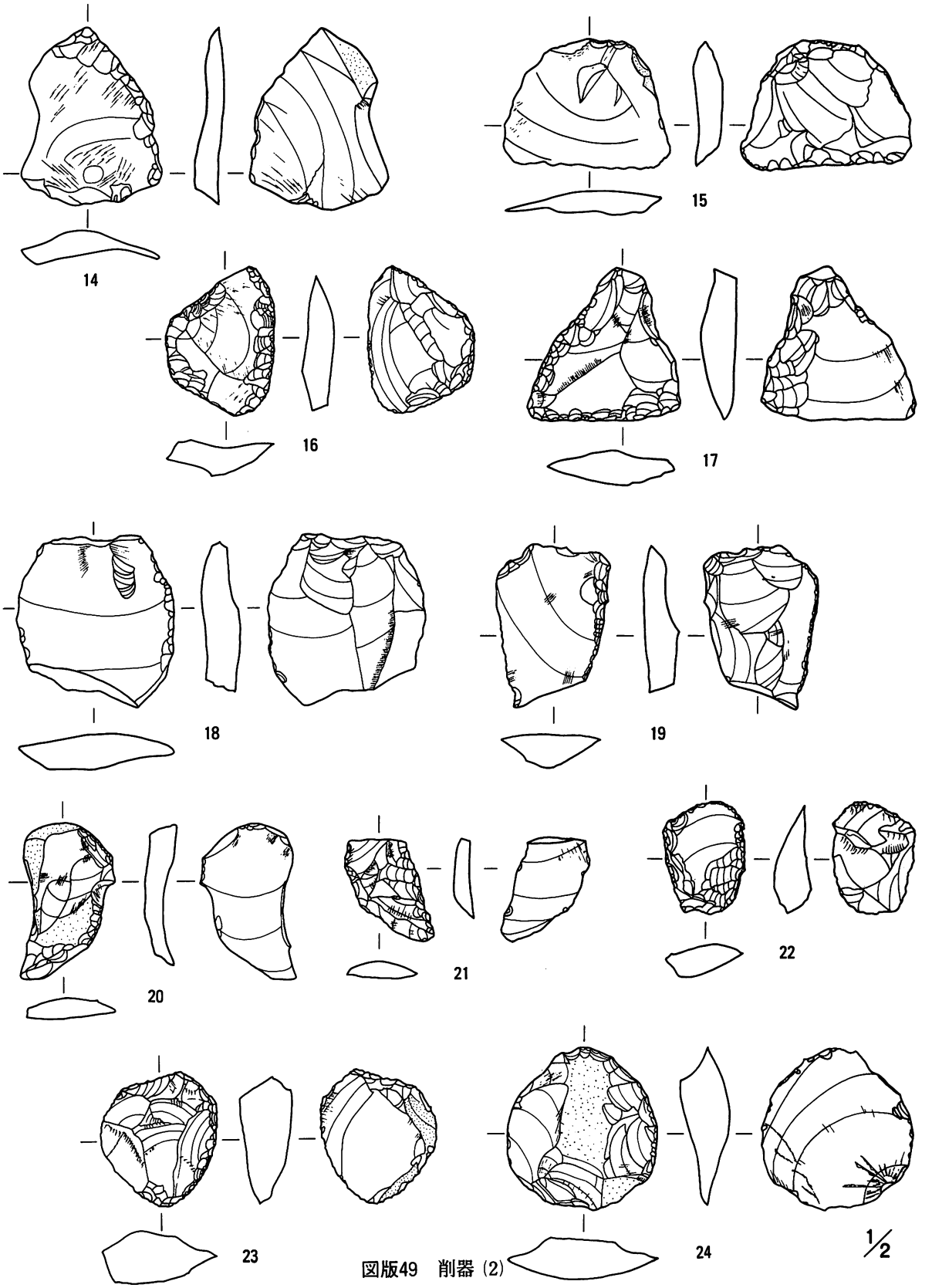
図版46　掻器 (11)



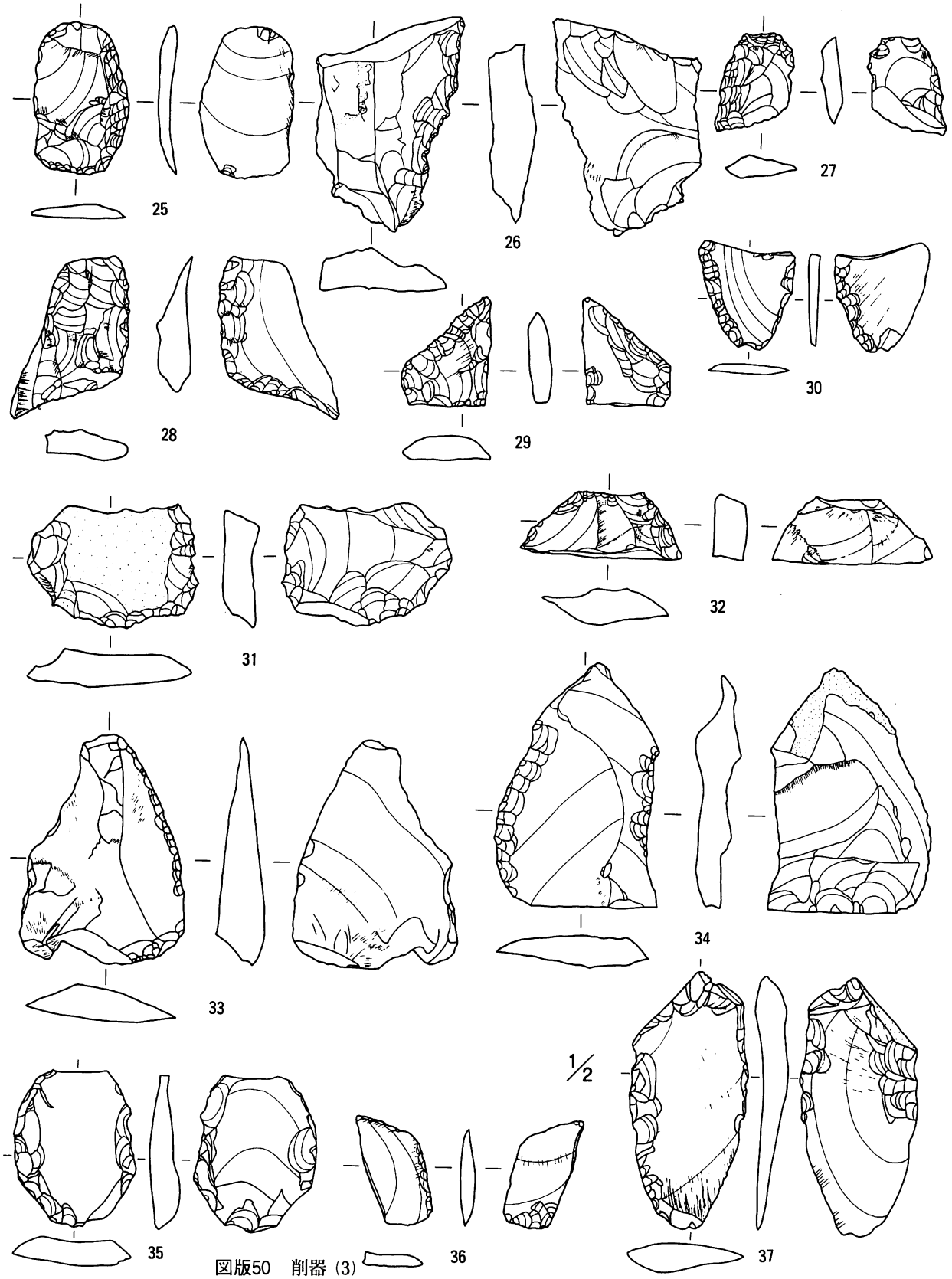
図版47　掻器 (12)、石鏃（追加）



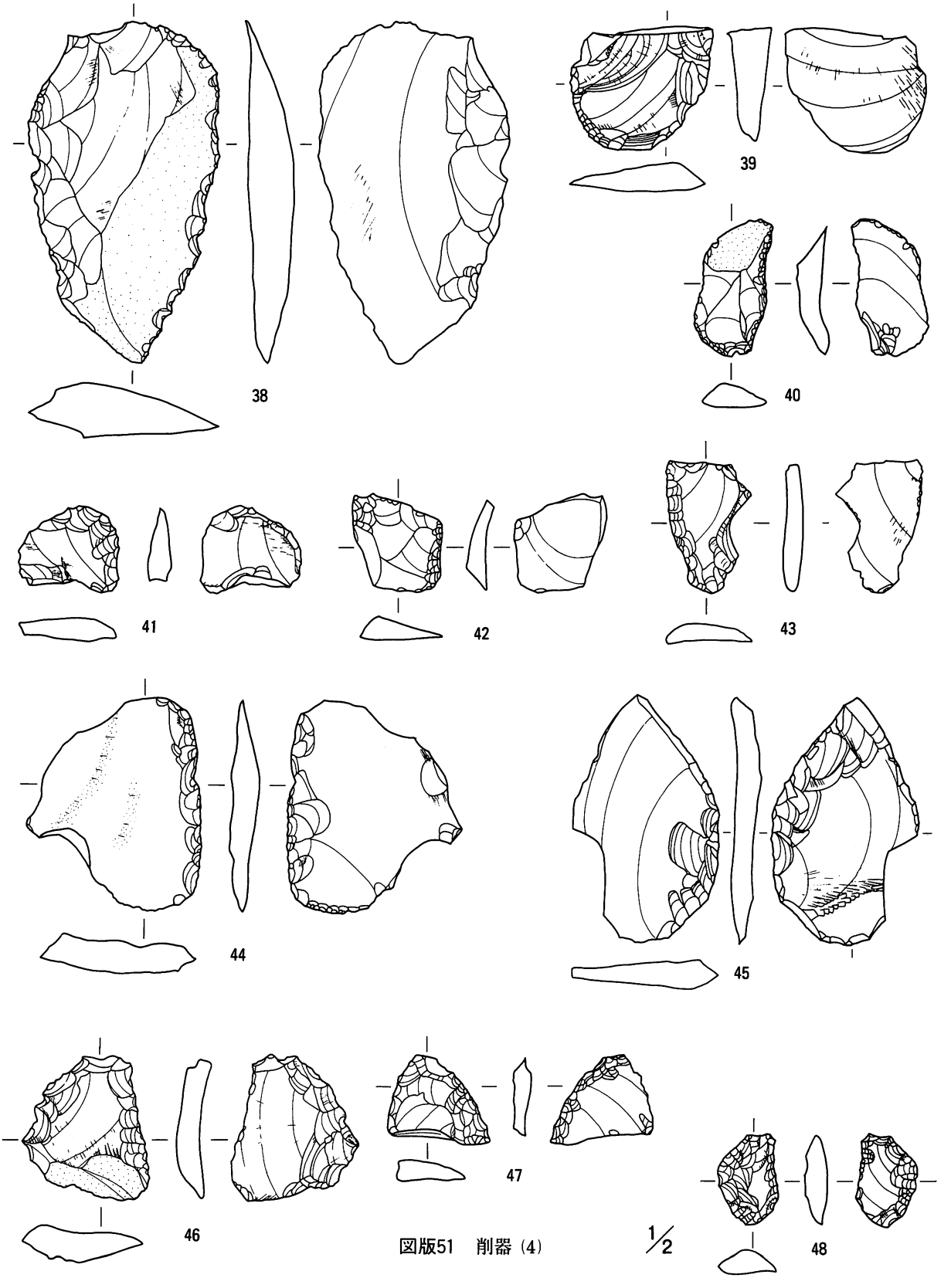
図版48　削器 (1)



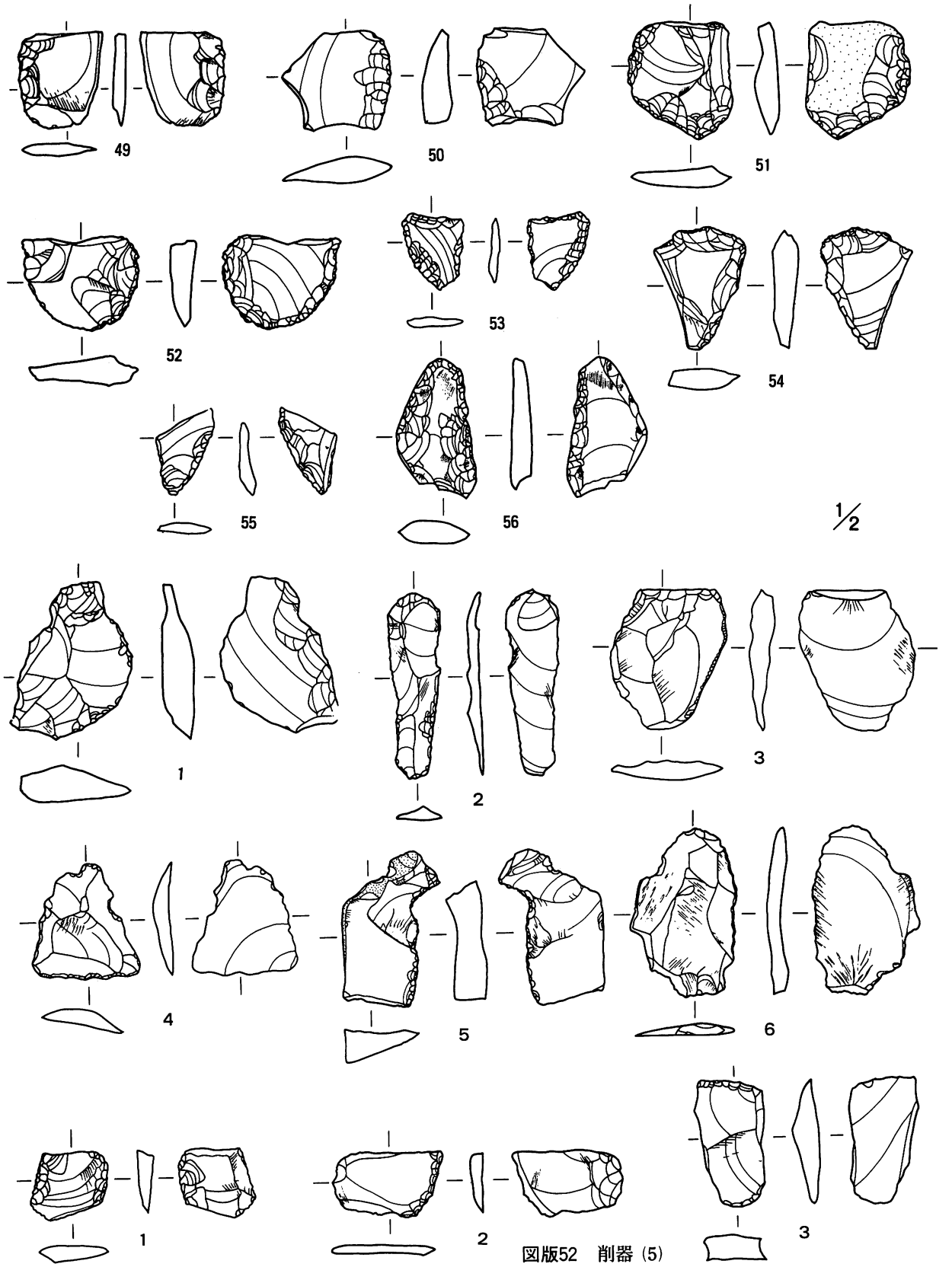
図版49　削器 (2)



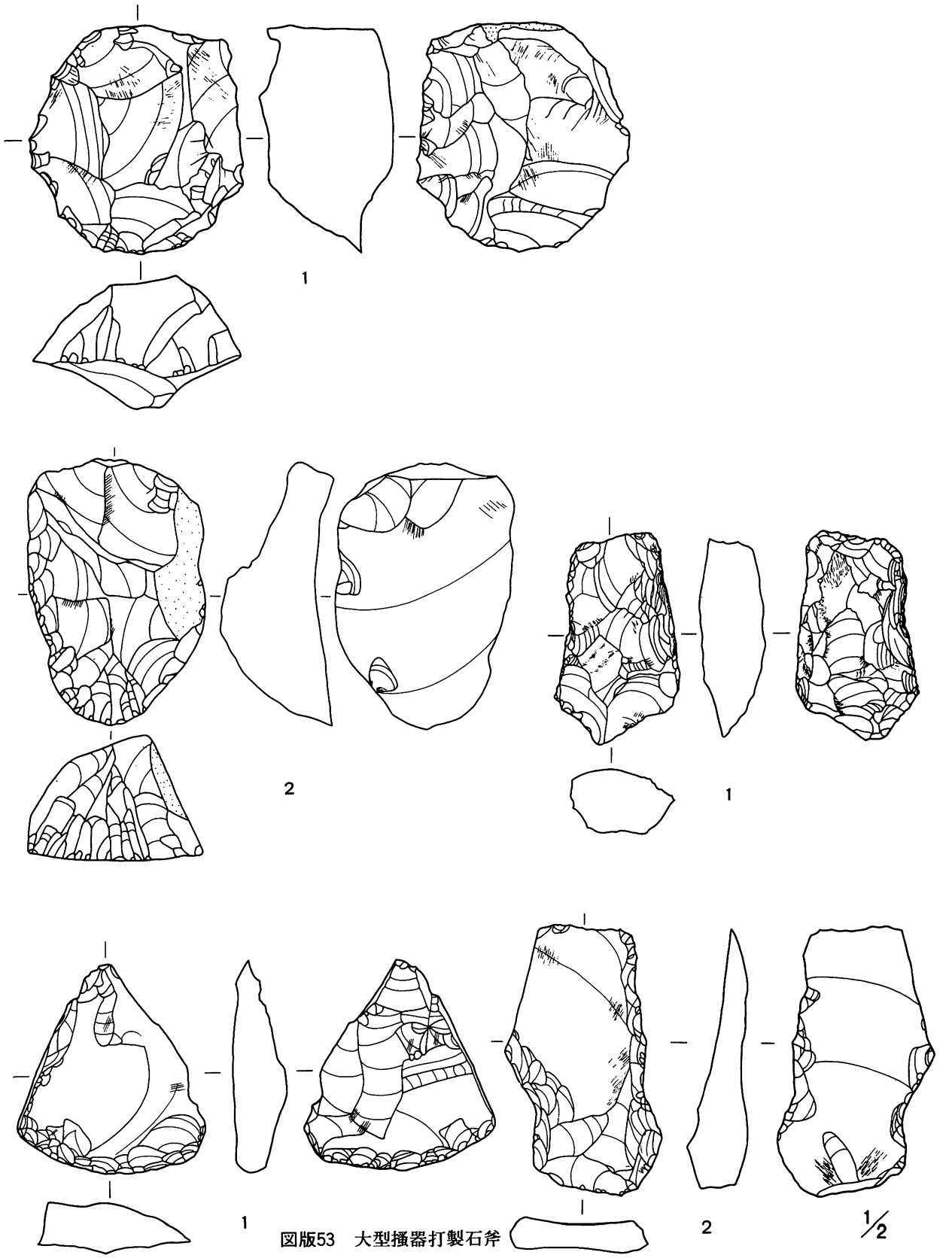
図版50　削器 (3)



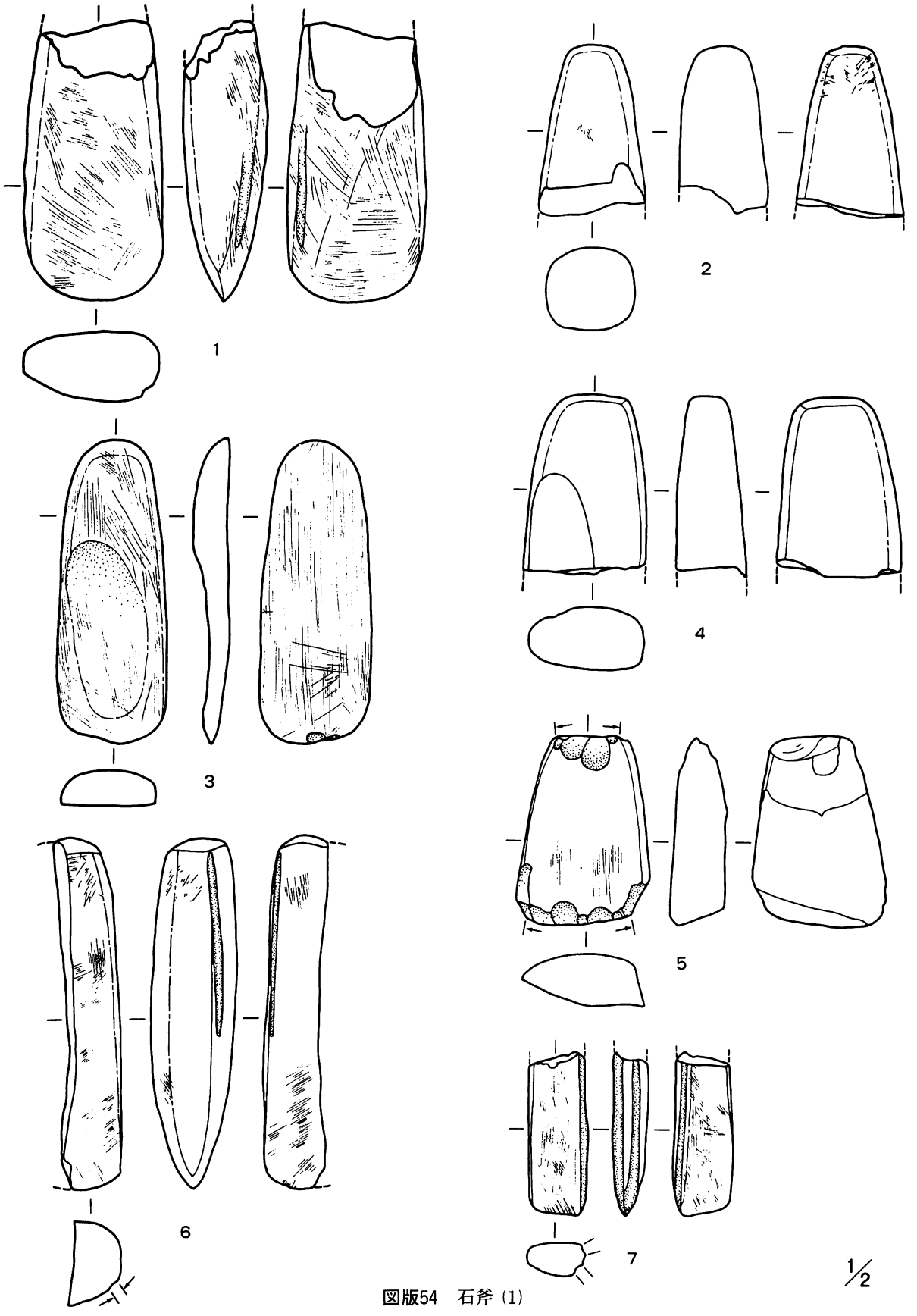
図版51　削器 (4)　1/2



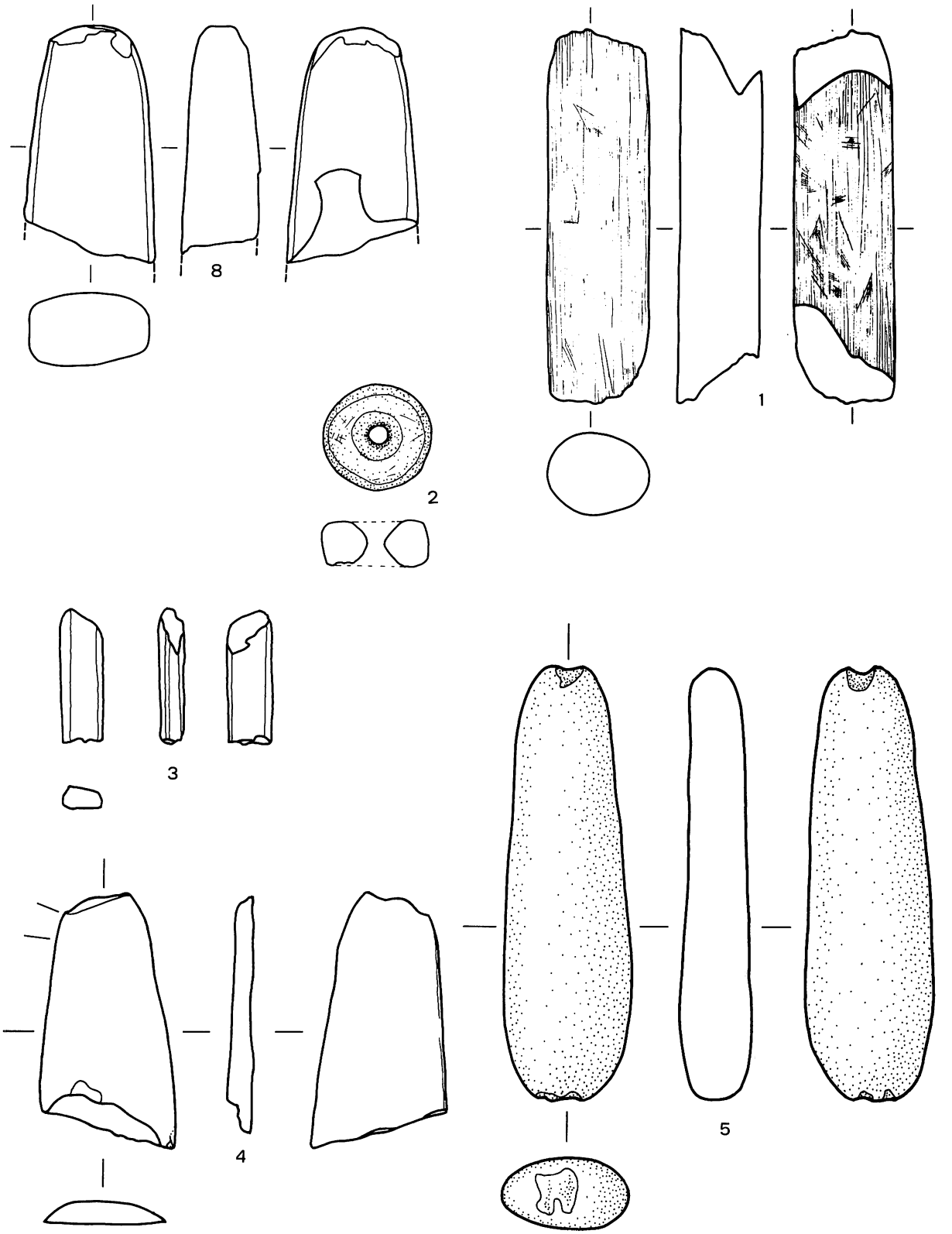
図版52　削器（5）



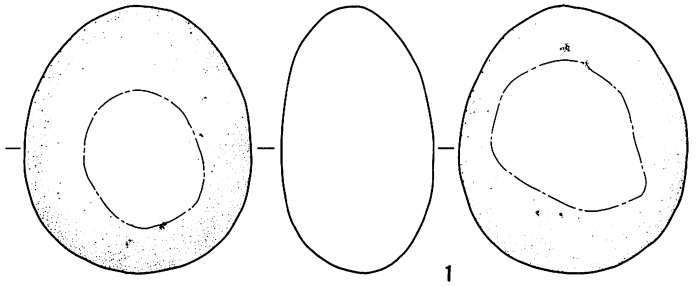
図版53　大型掻器打製石斧



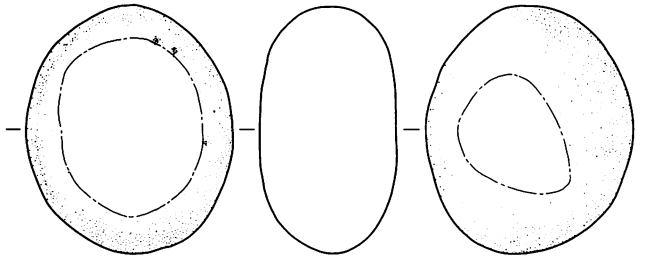
図版54　石斧 (1)



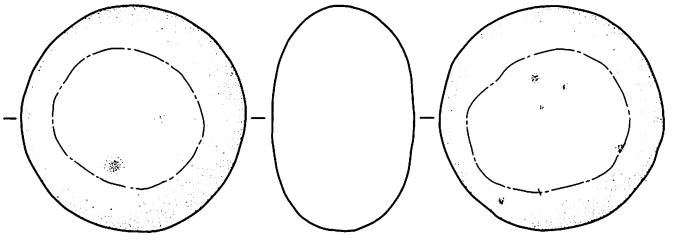
図版55　石斧２・その他磨製石器



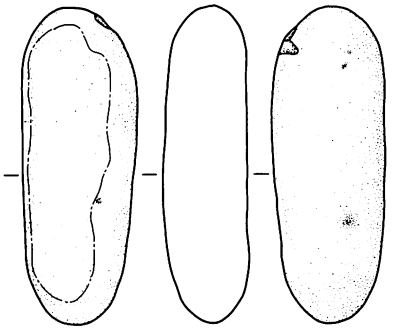
1



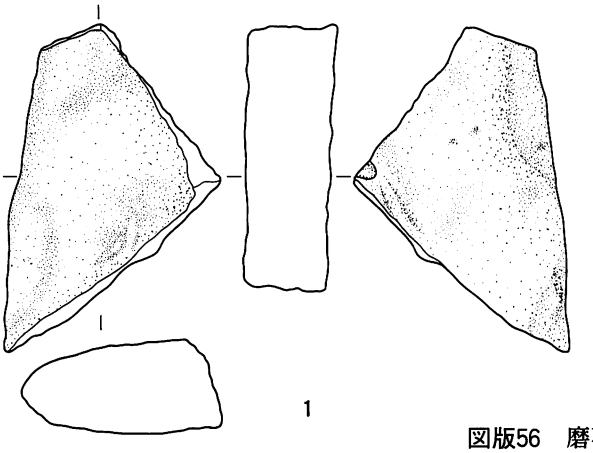
2



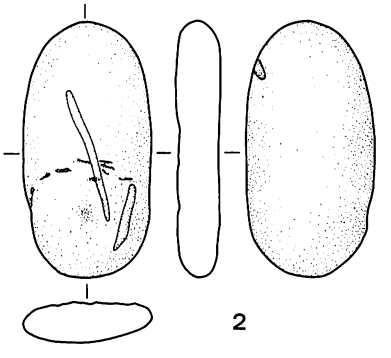
3



4



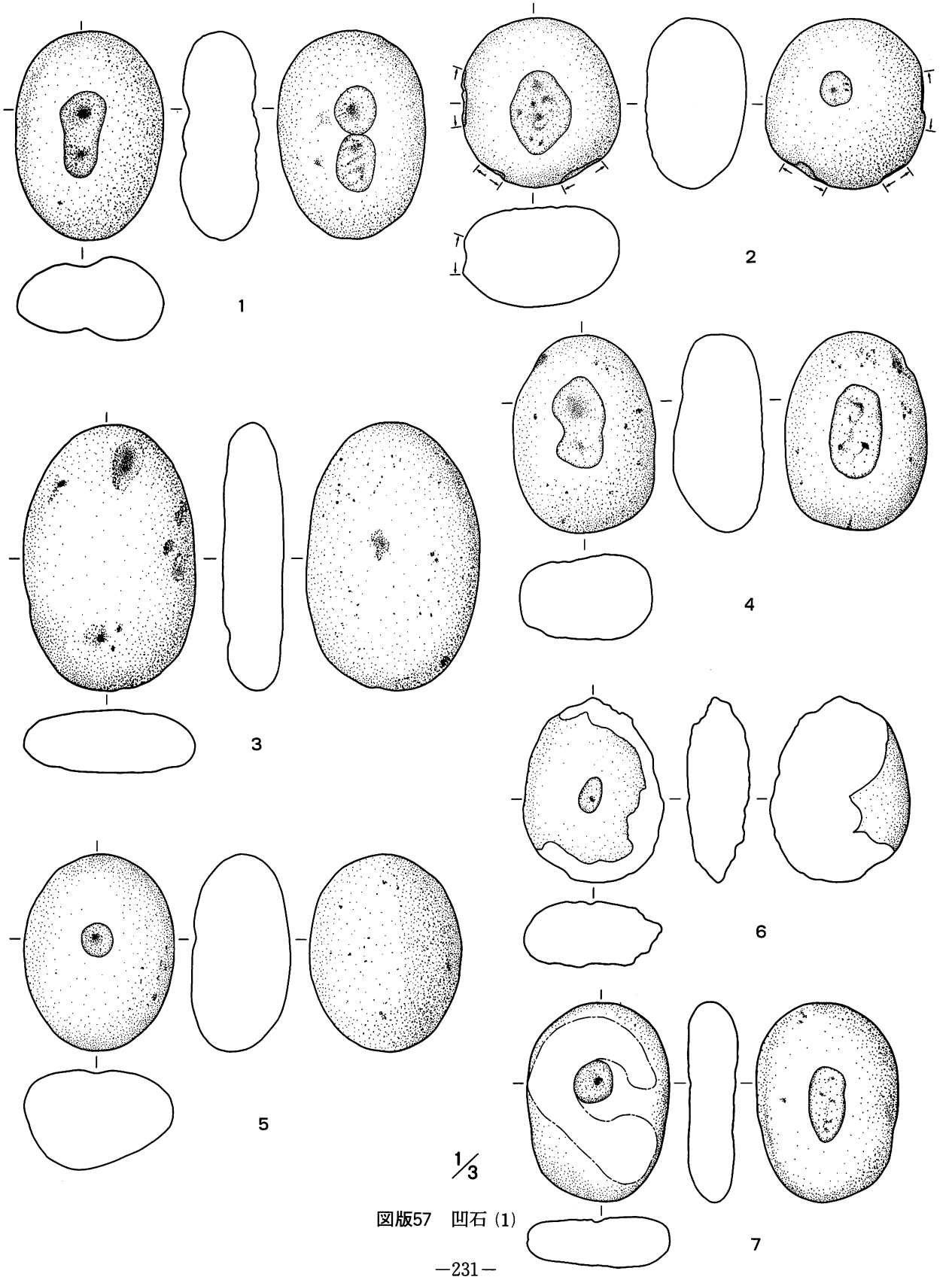
1



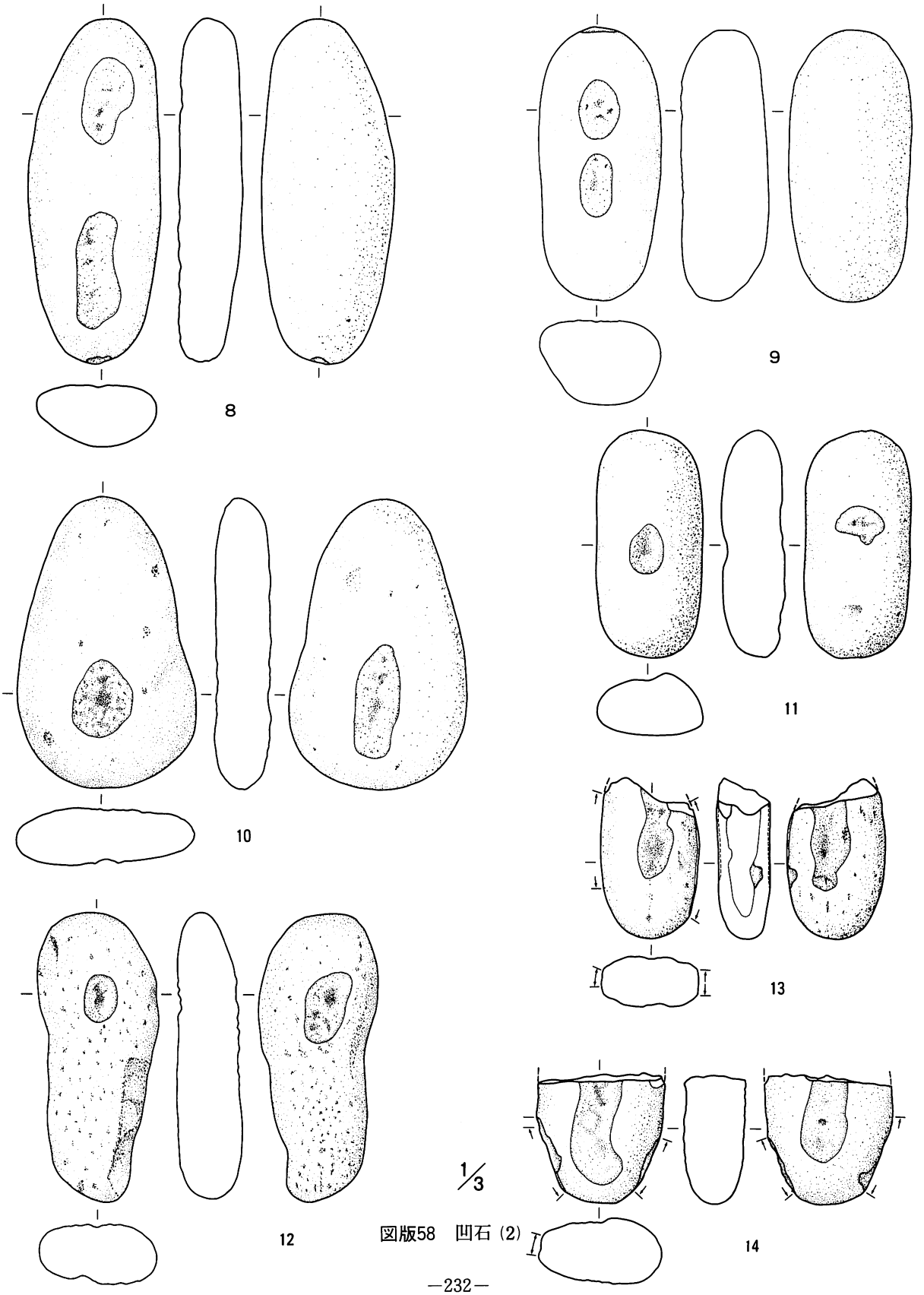
2

1/3

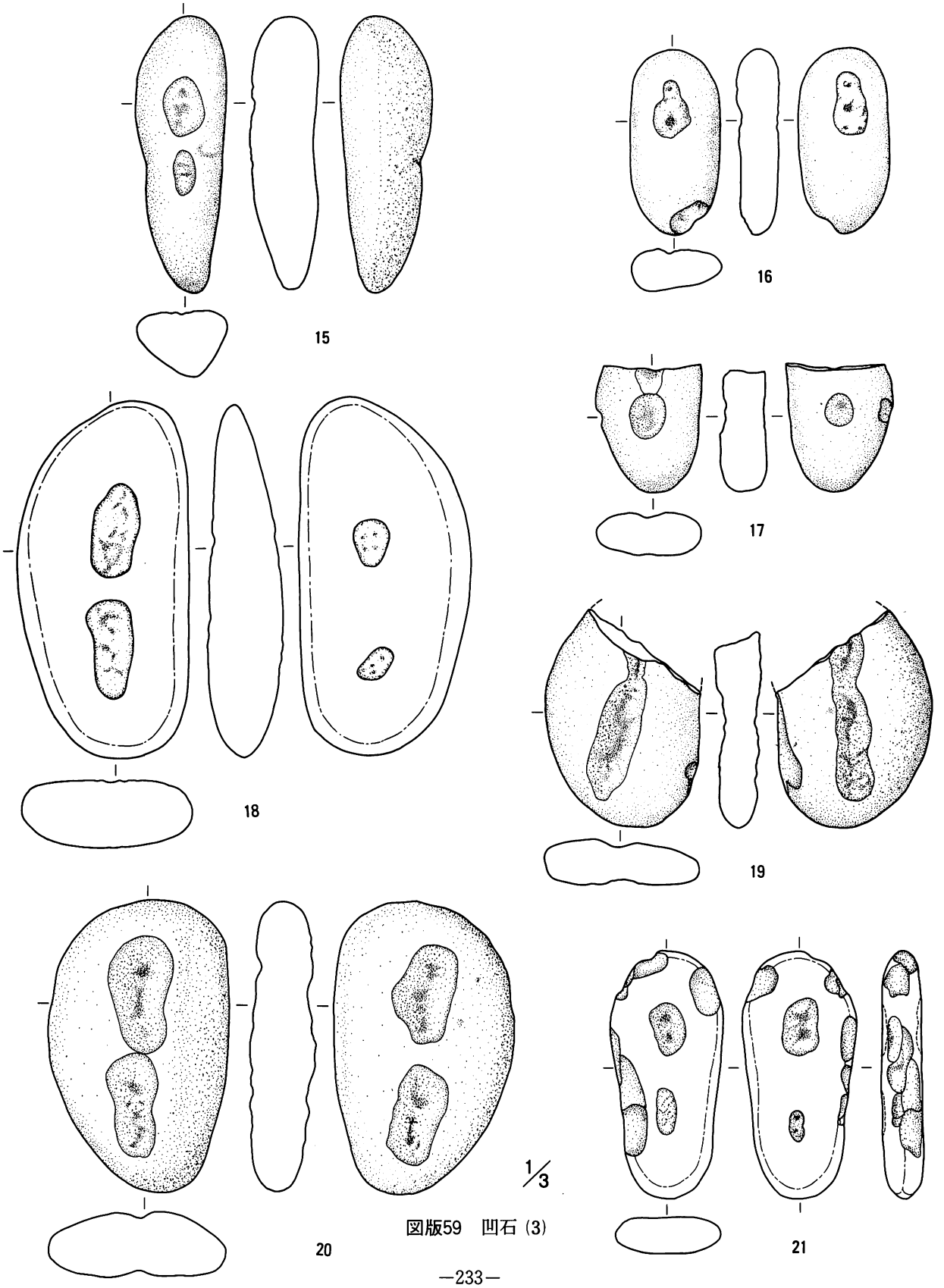
図版56　磨石・砥石



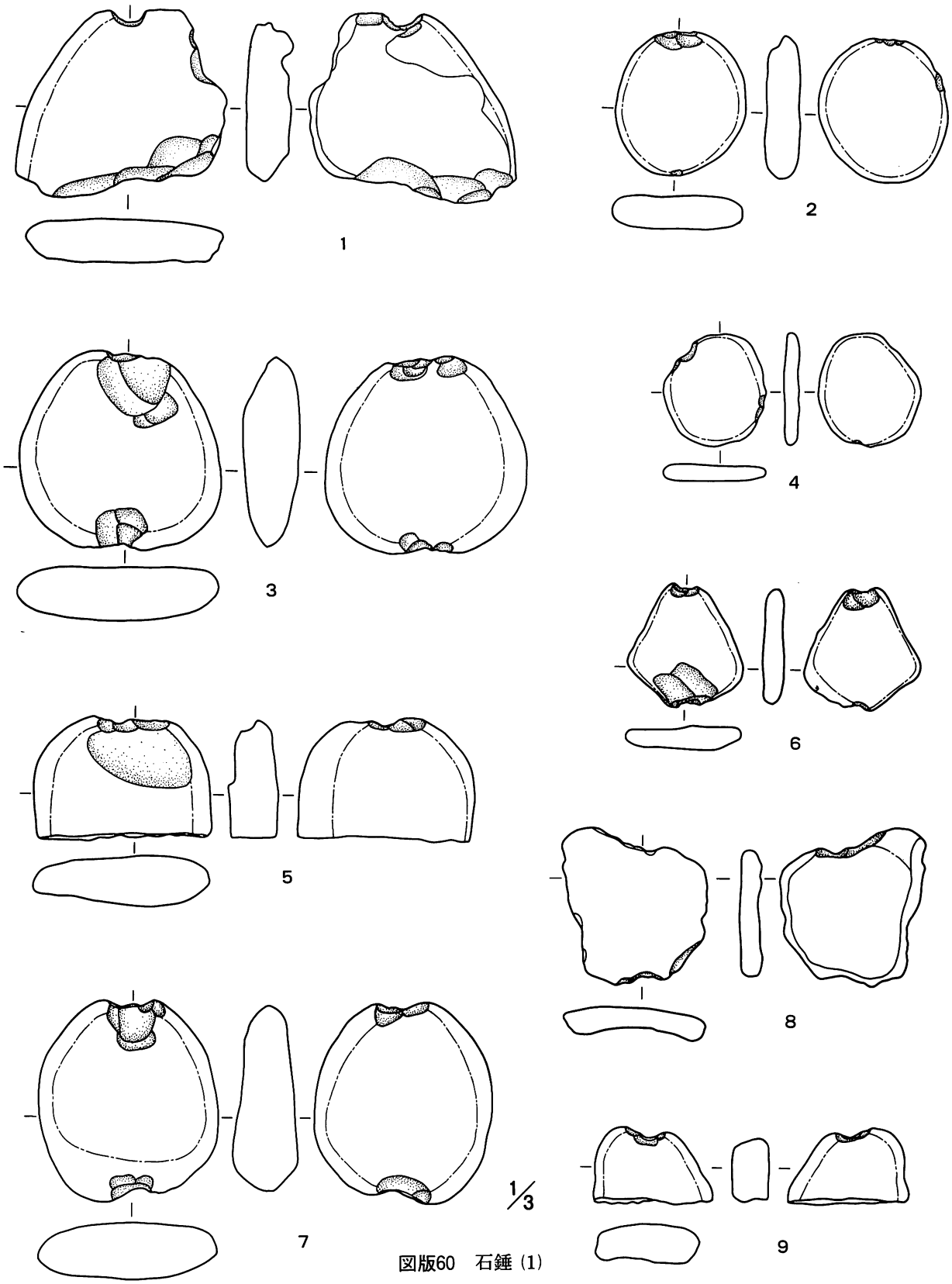
図版57　凹石 (1)



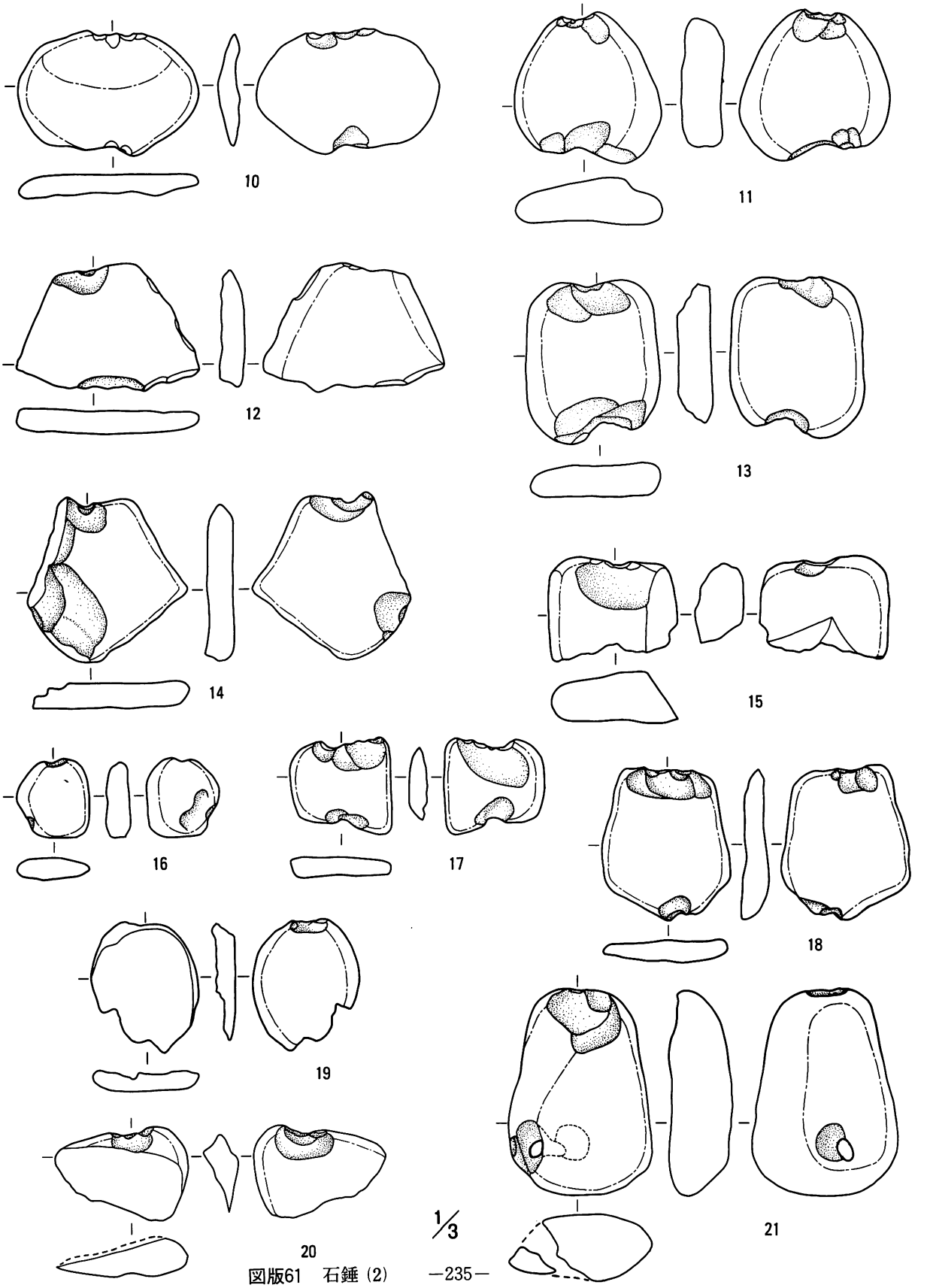
図版58　凹石 (2)



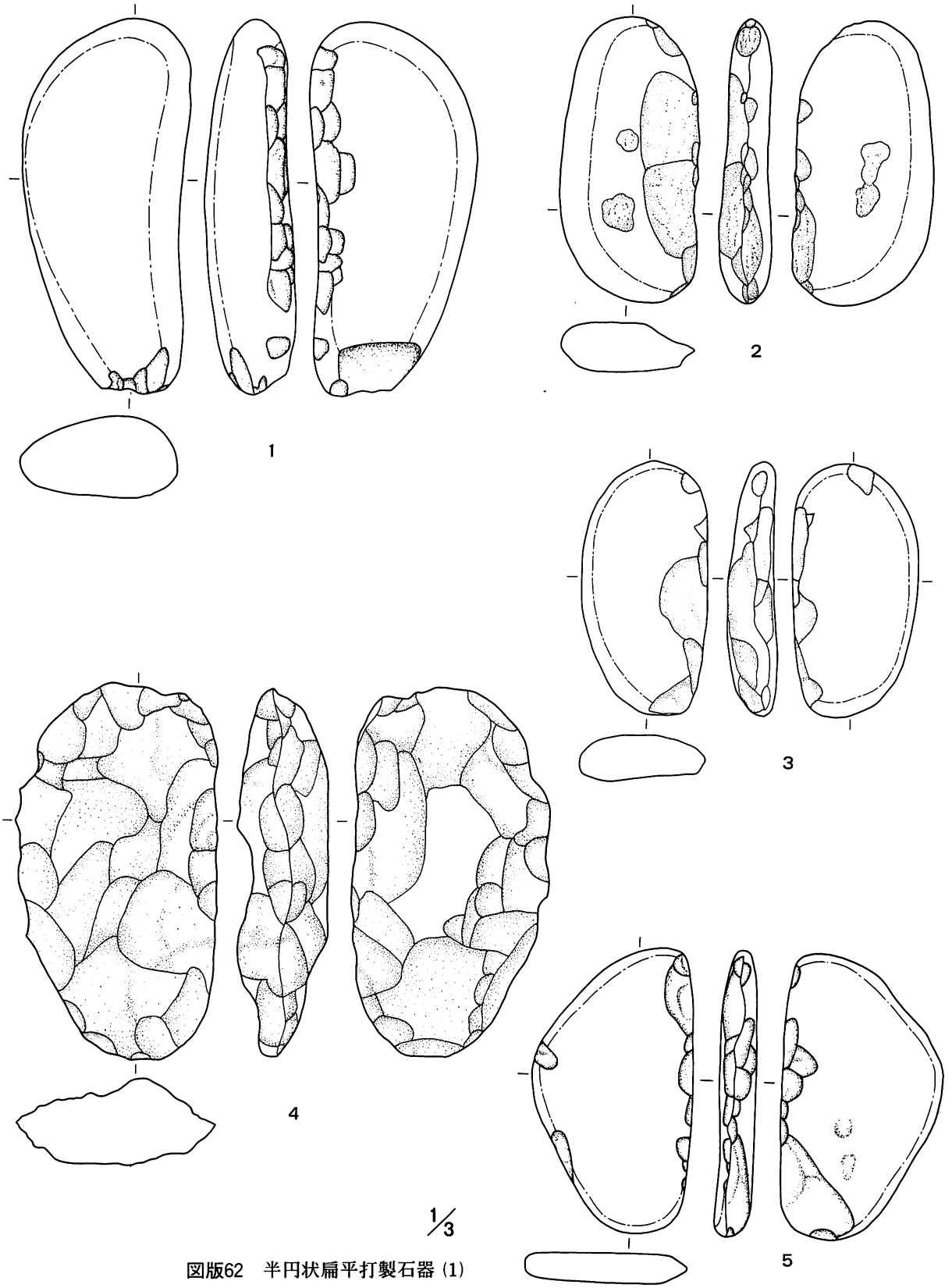
図版59　凹石 (3)



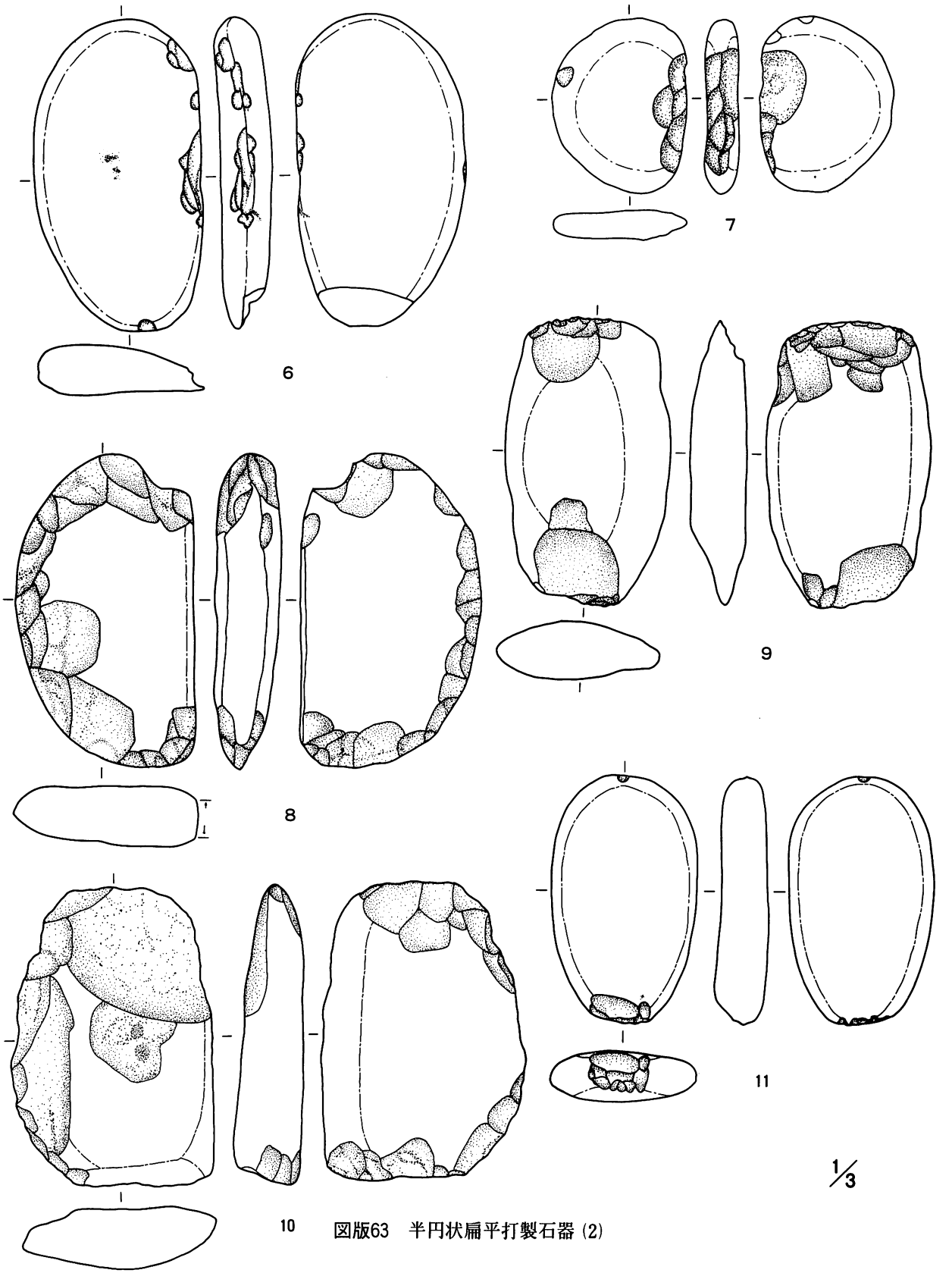
図版60　石錘 (1)



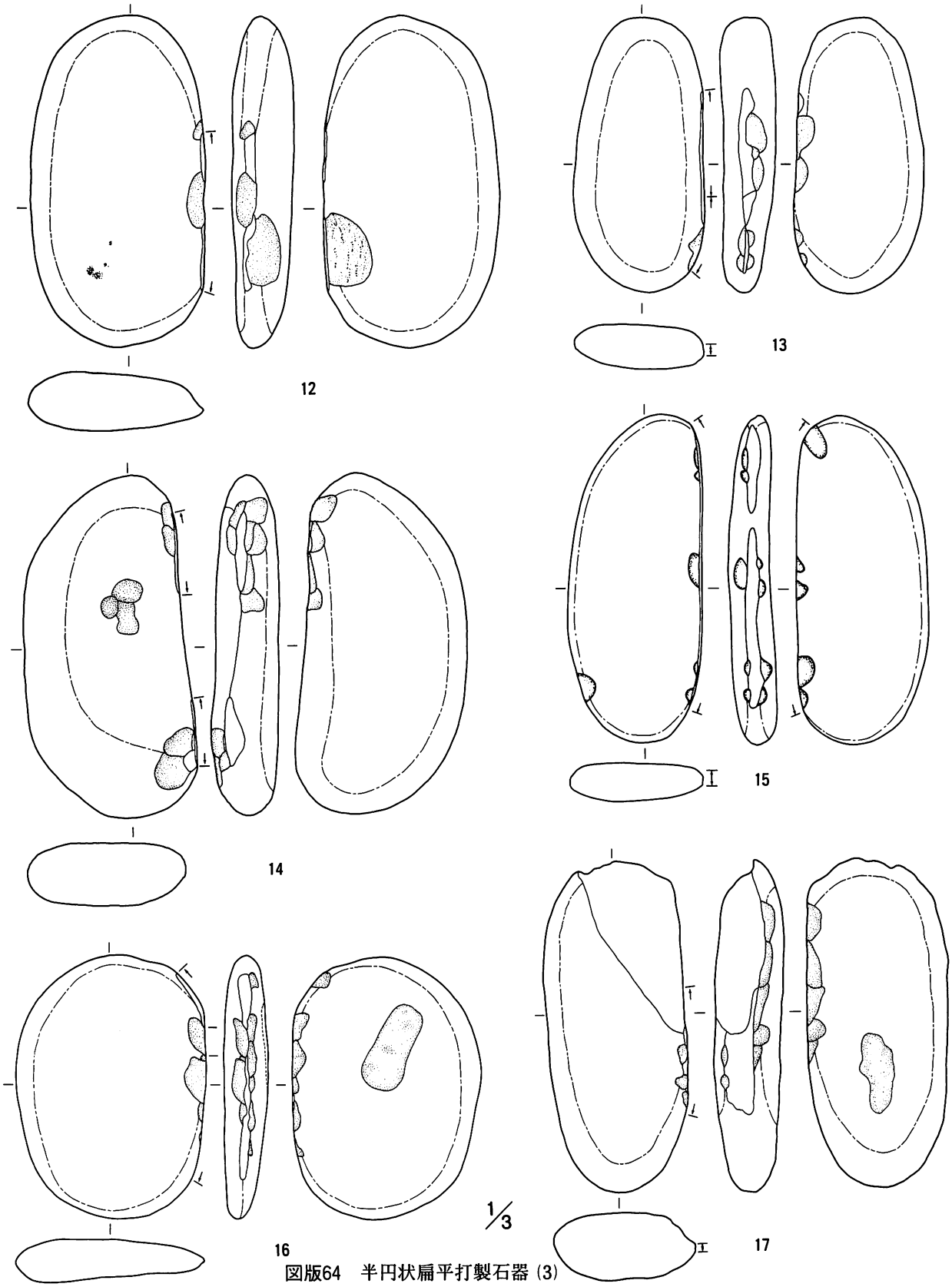
図版61　石錘 (2)



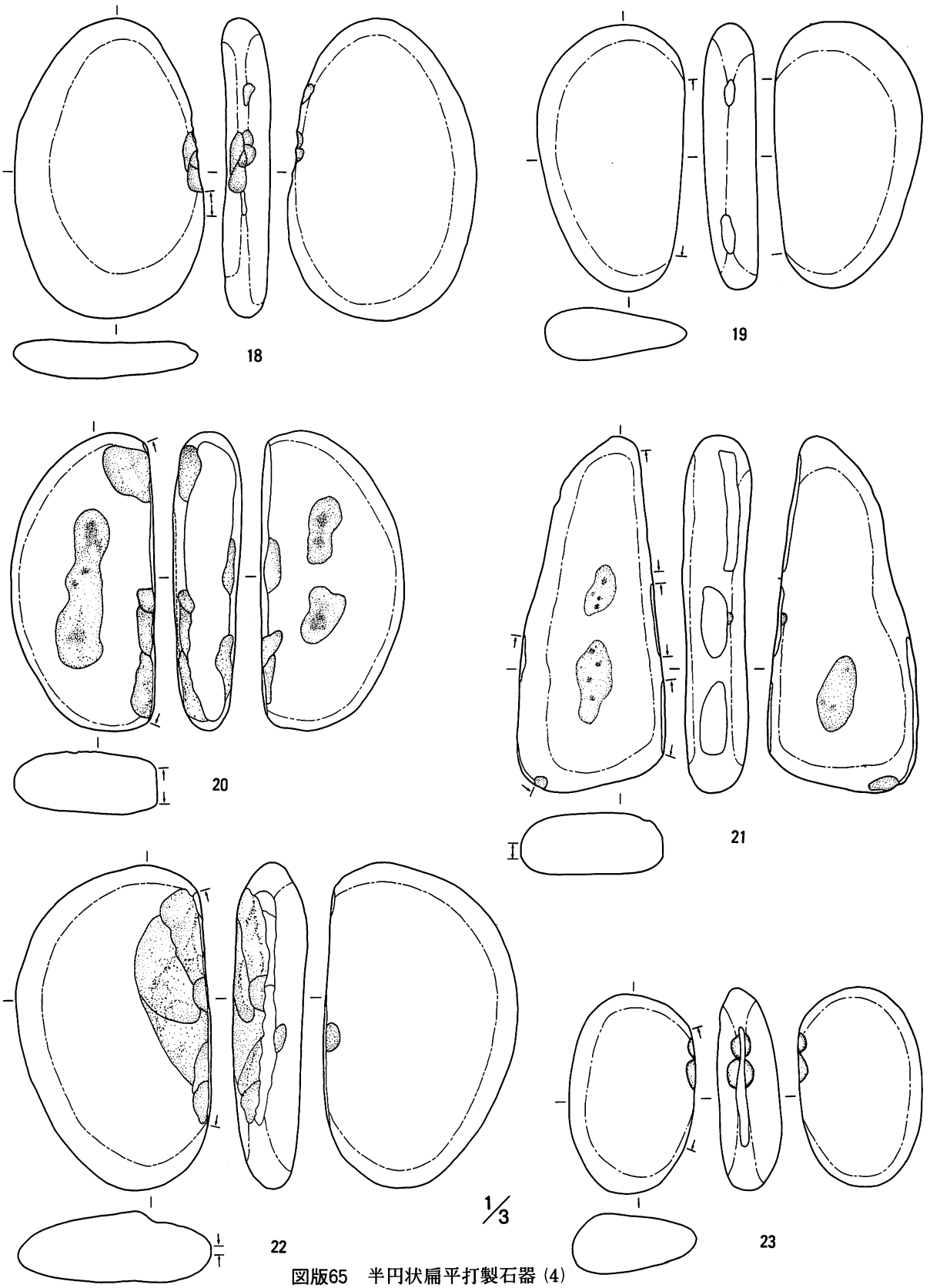
図版62　半円状扁平打製石器 (1)



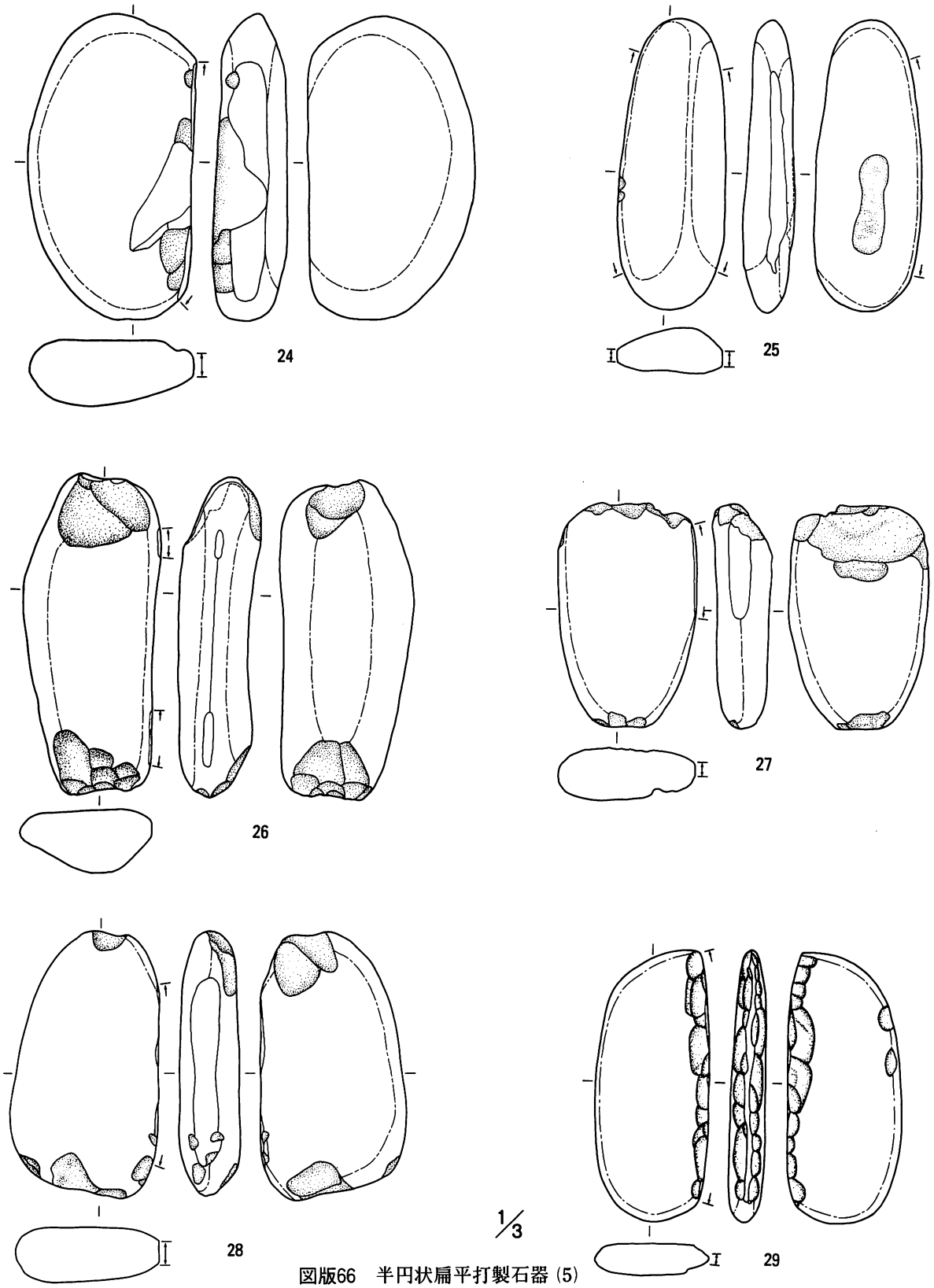
図版63　半円状扁平打製石器 (2)



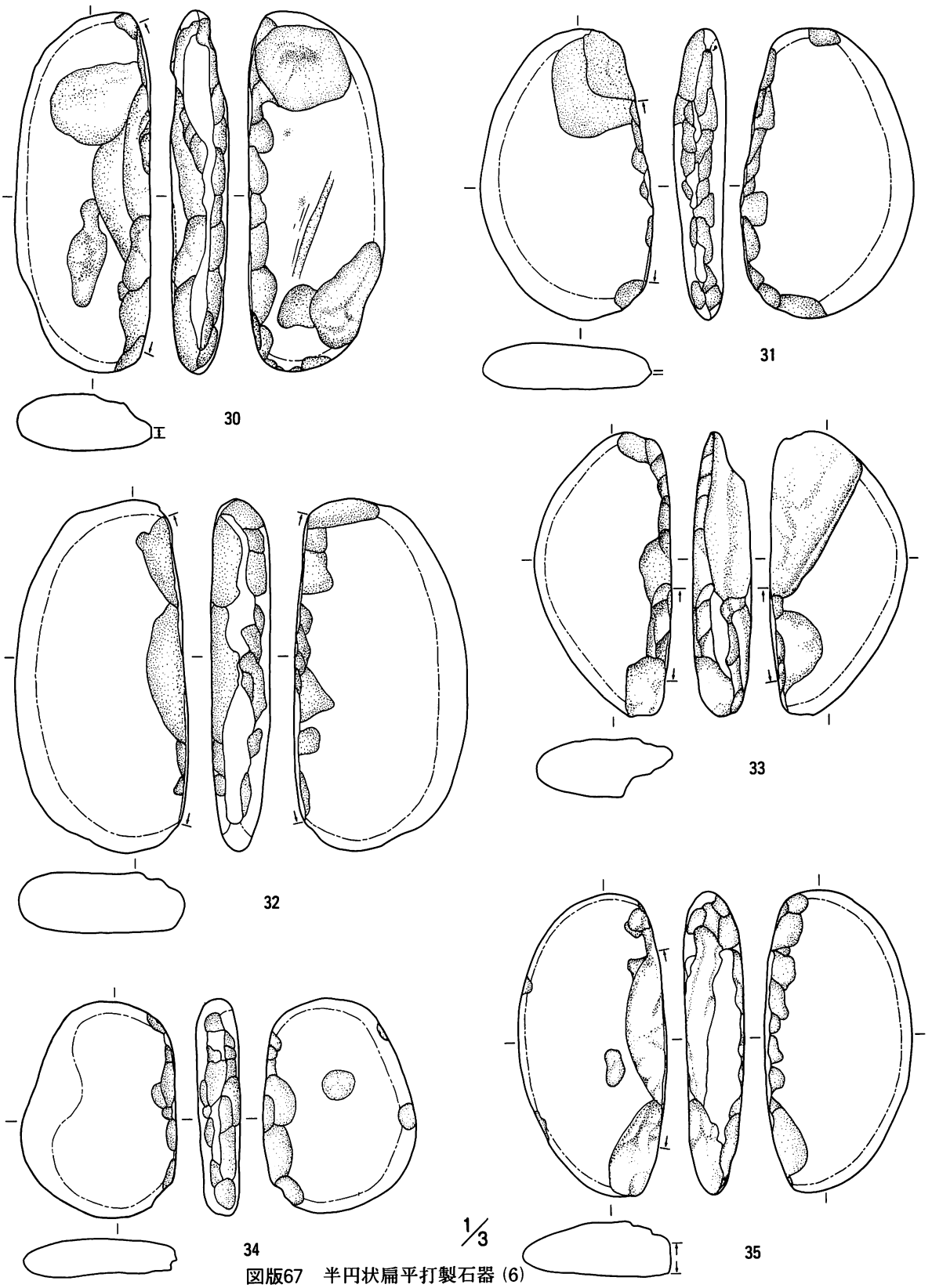
図版64　半円状扁平打製石器 (3)



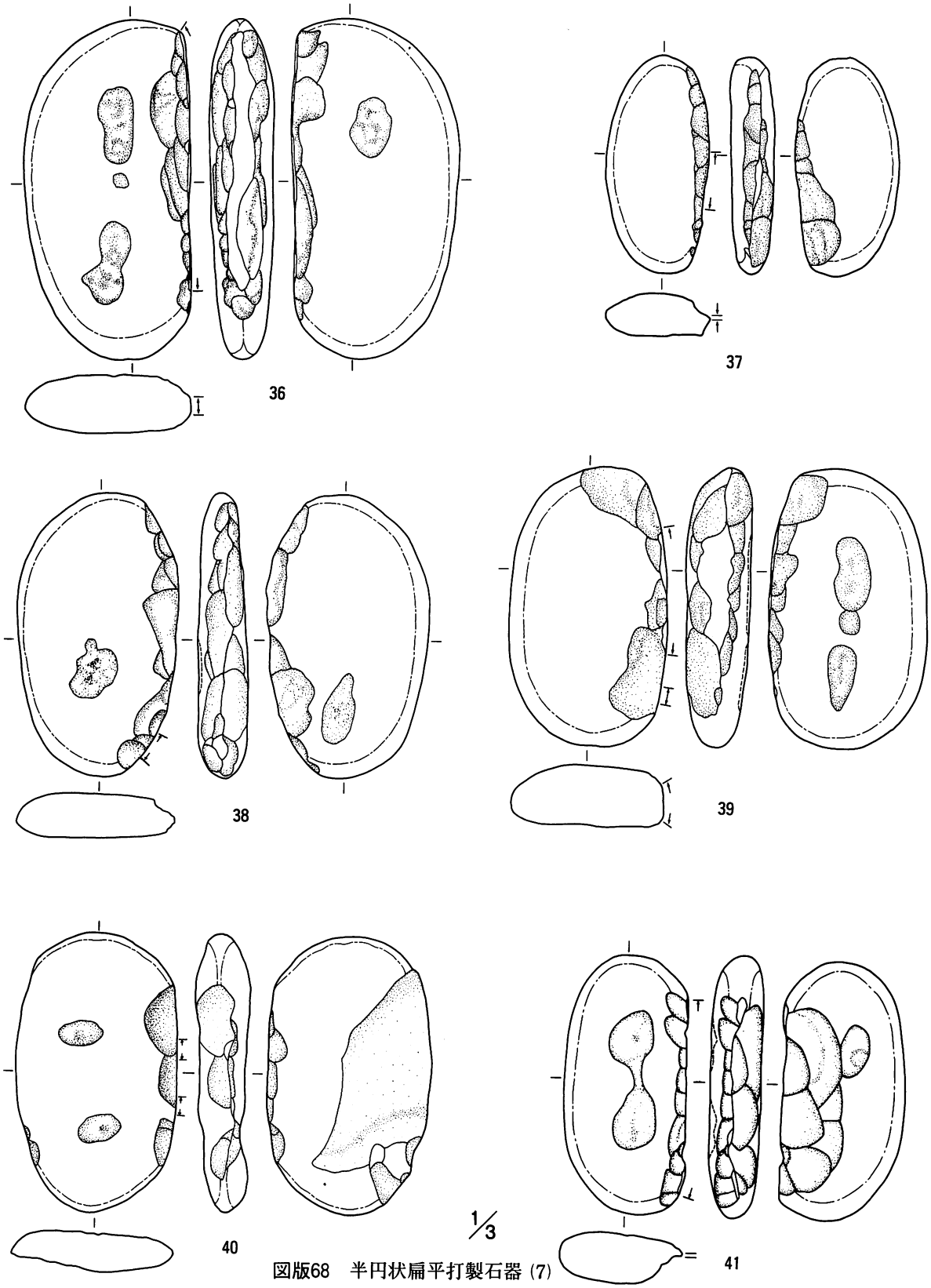
図版65　半円状扁平打製石器 (4)



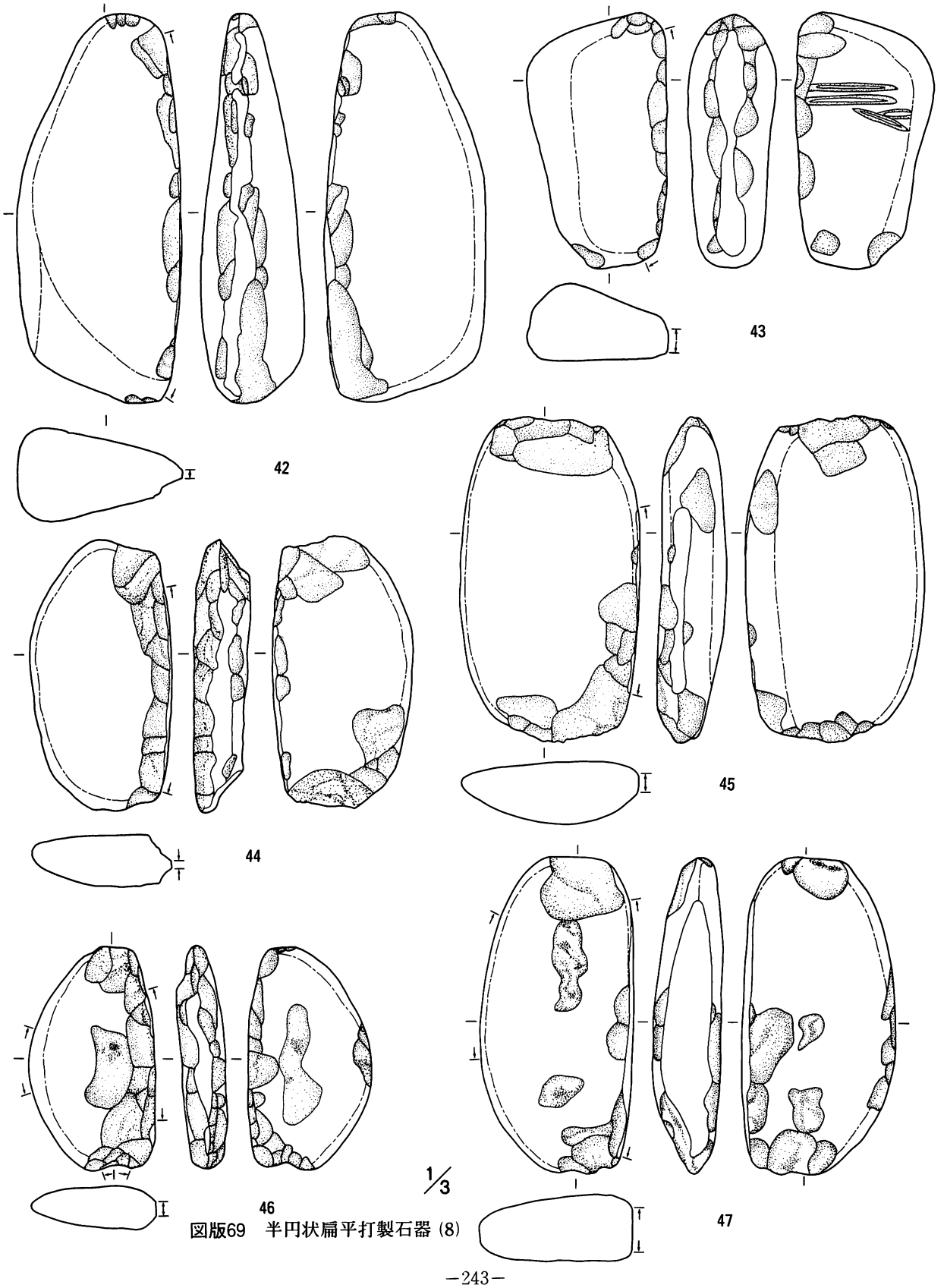
図版66　半円状扁平打製石器 (5)



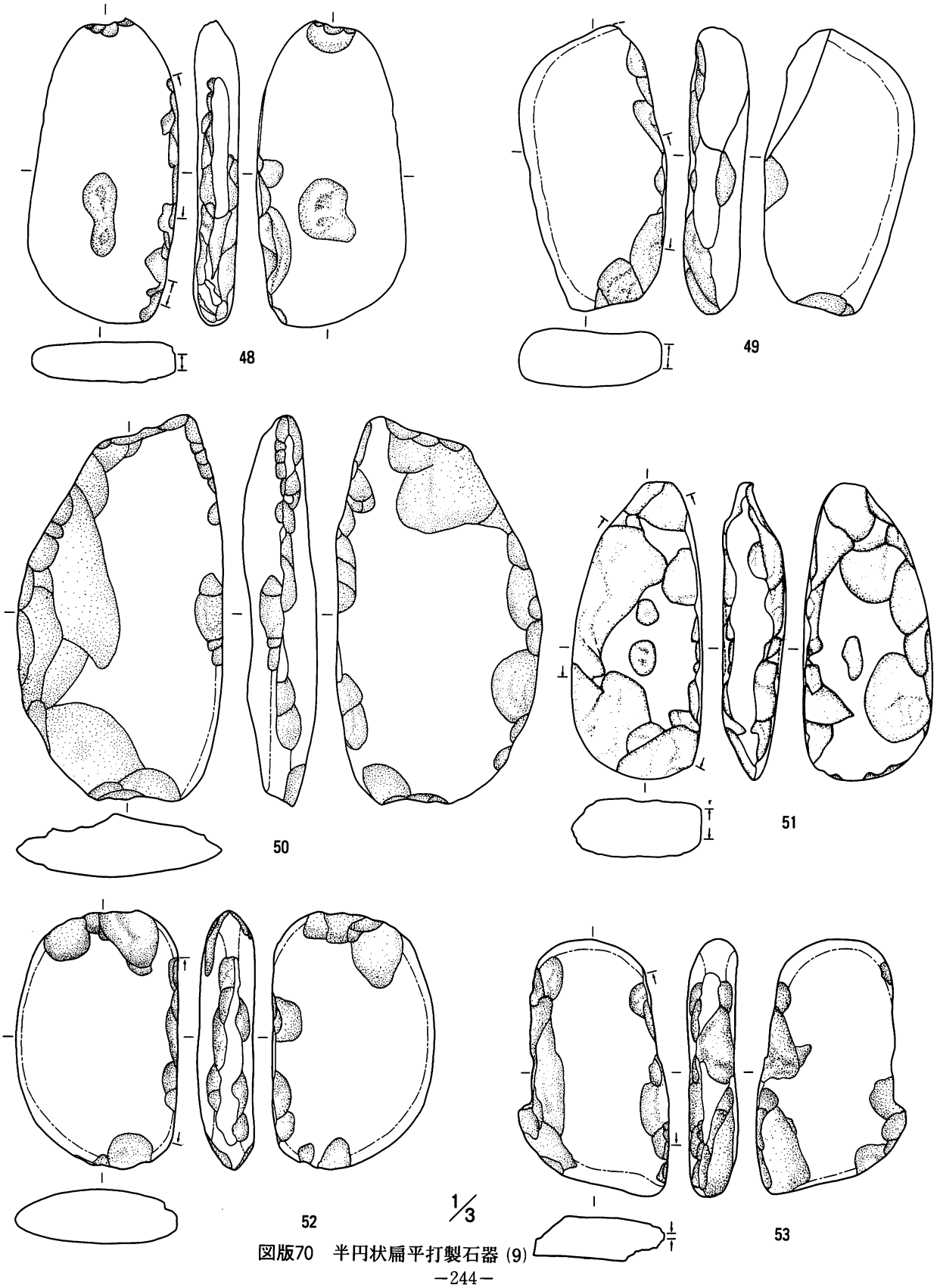
図版67　半円状扁平打製石器 (6)



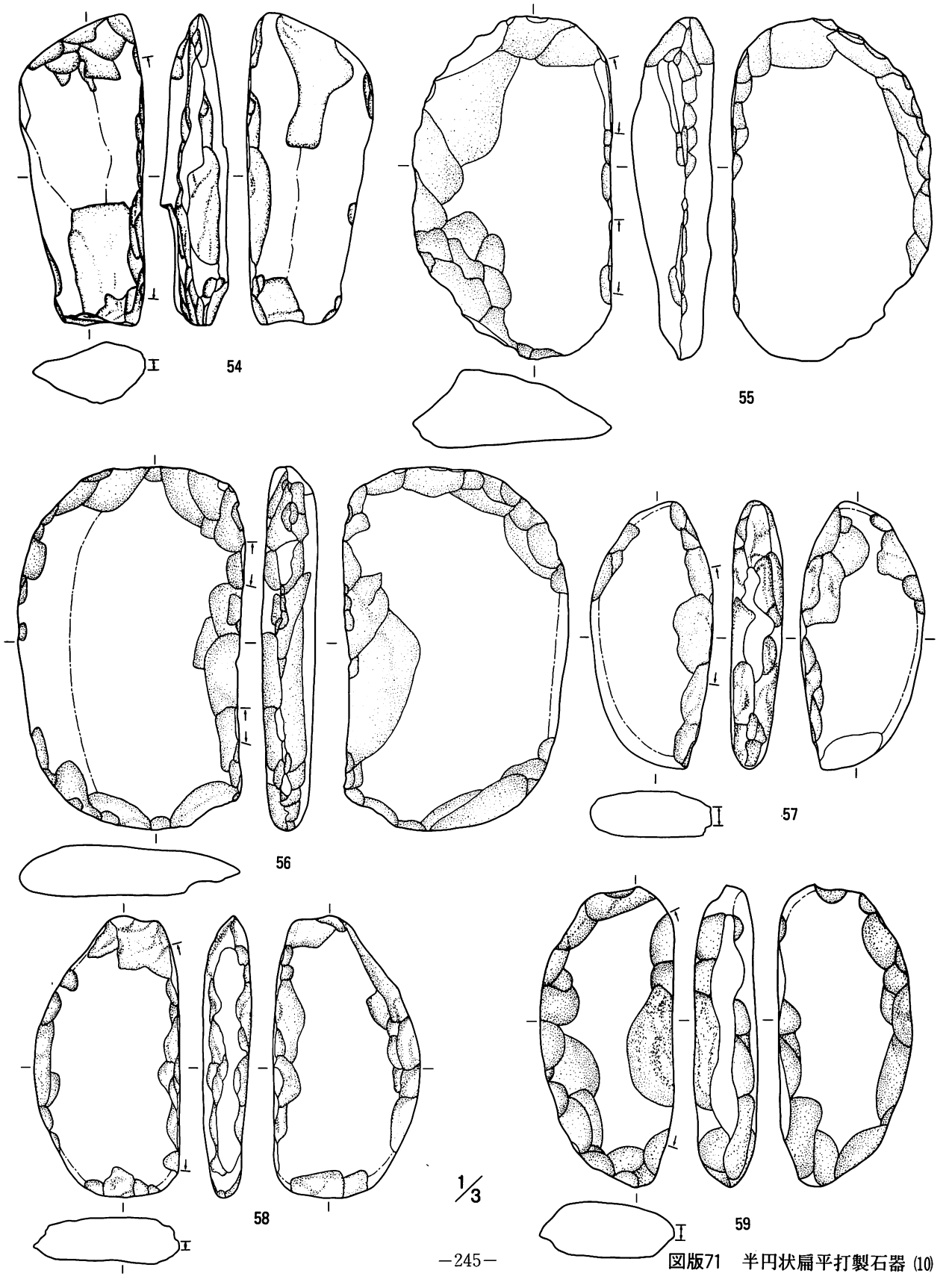
図版68　半円状扁平打製石器 (7)



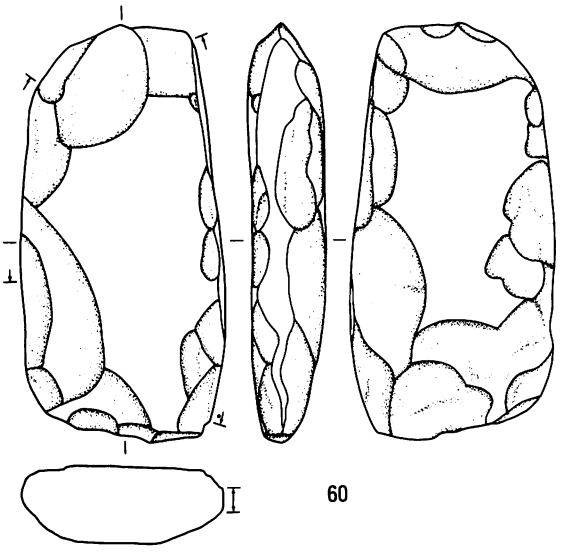
図版69　半円状扁平打製石器 (8)

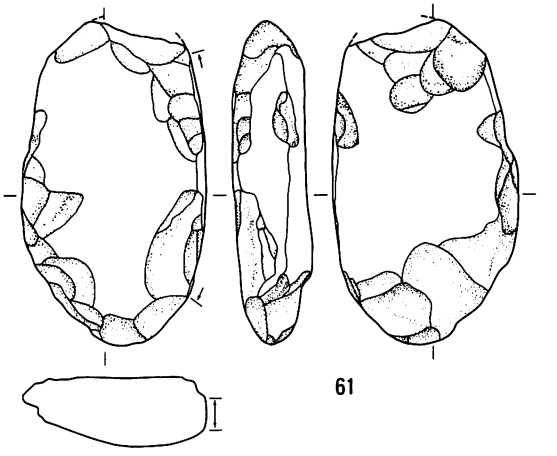


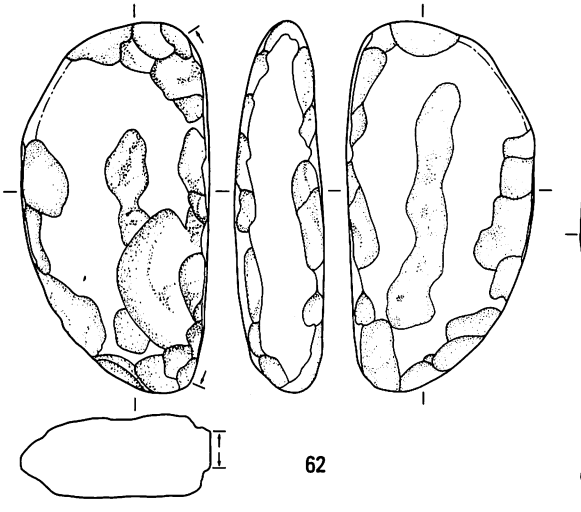
図版70　半円状扁平打製石器 (9)

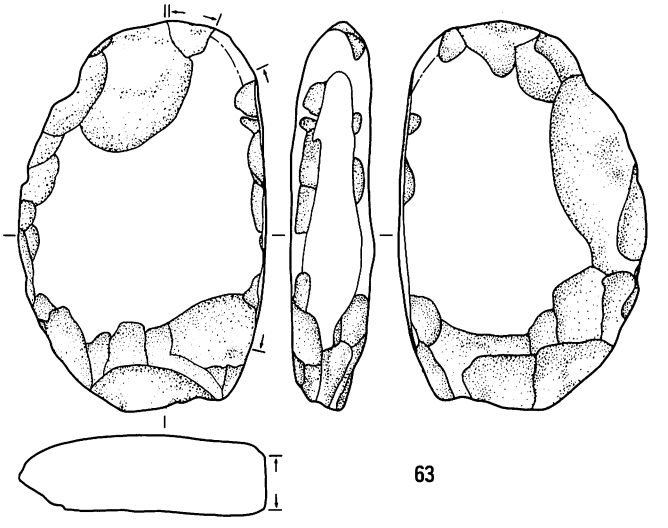


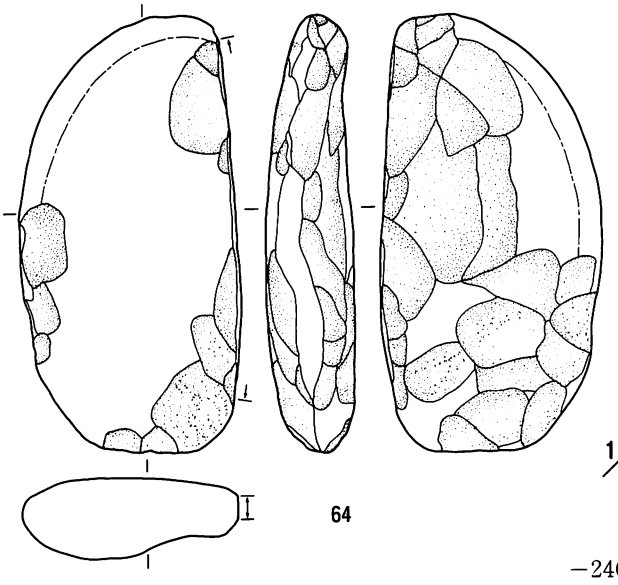
図版71　半円状扁平打製石器 (10)



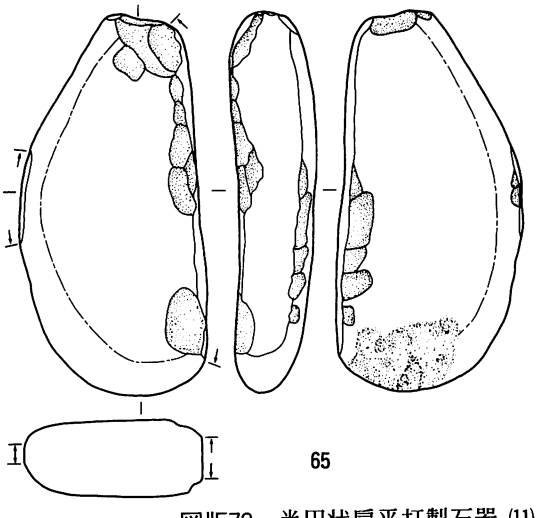




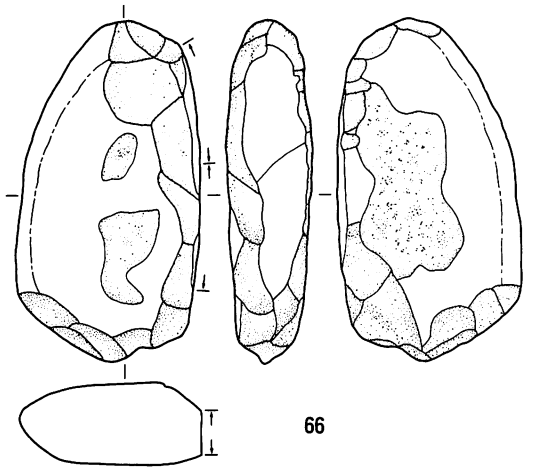


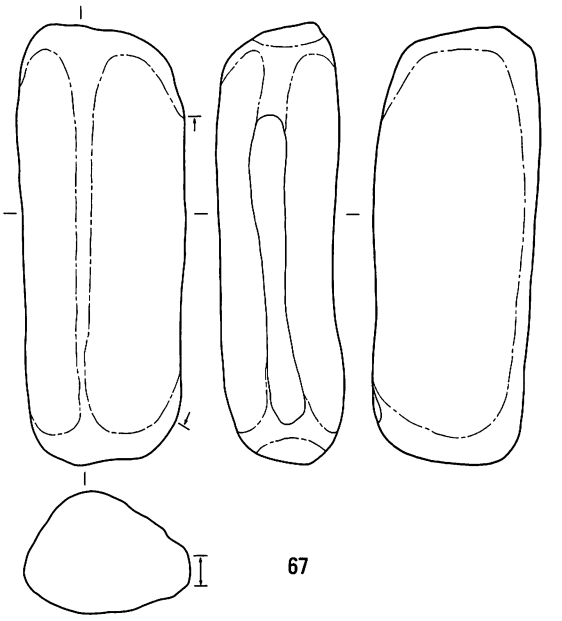


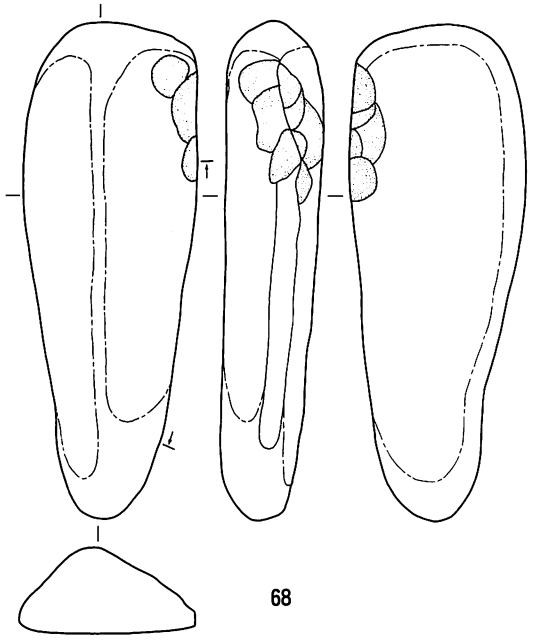
1/3

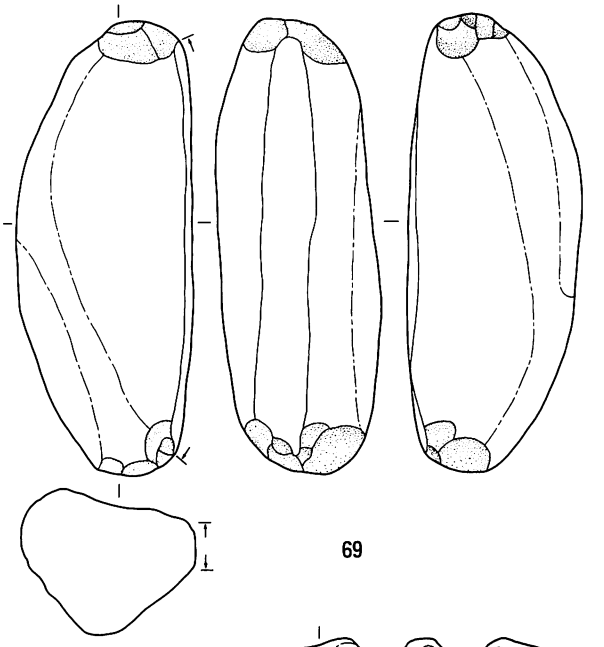


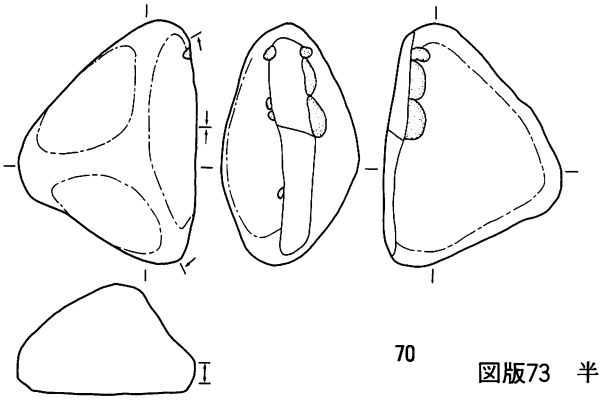
図版72　半円状扁平打製石器 (11)

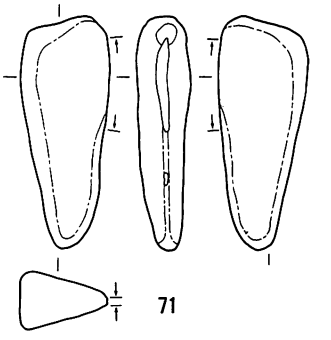






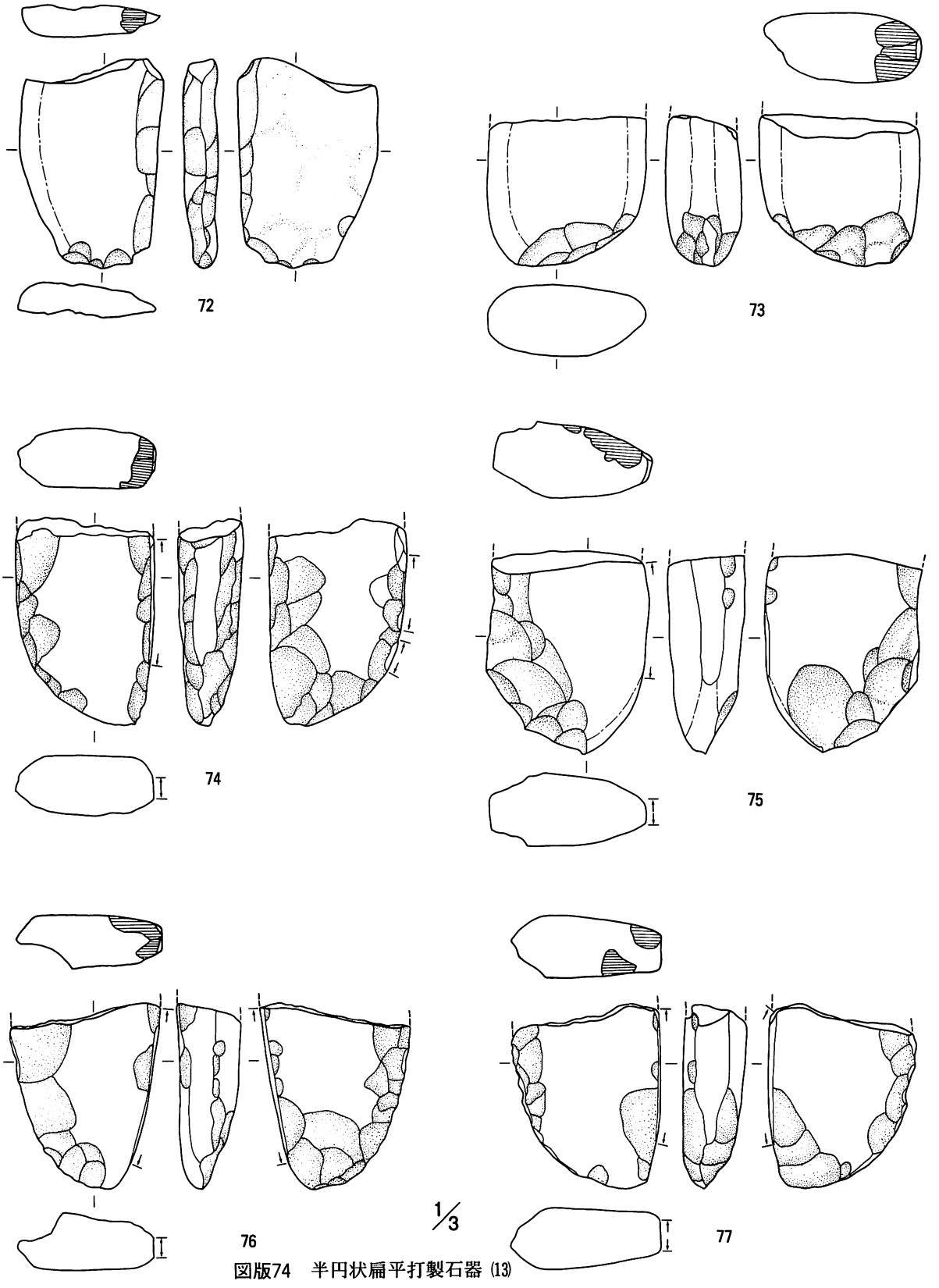




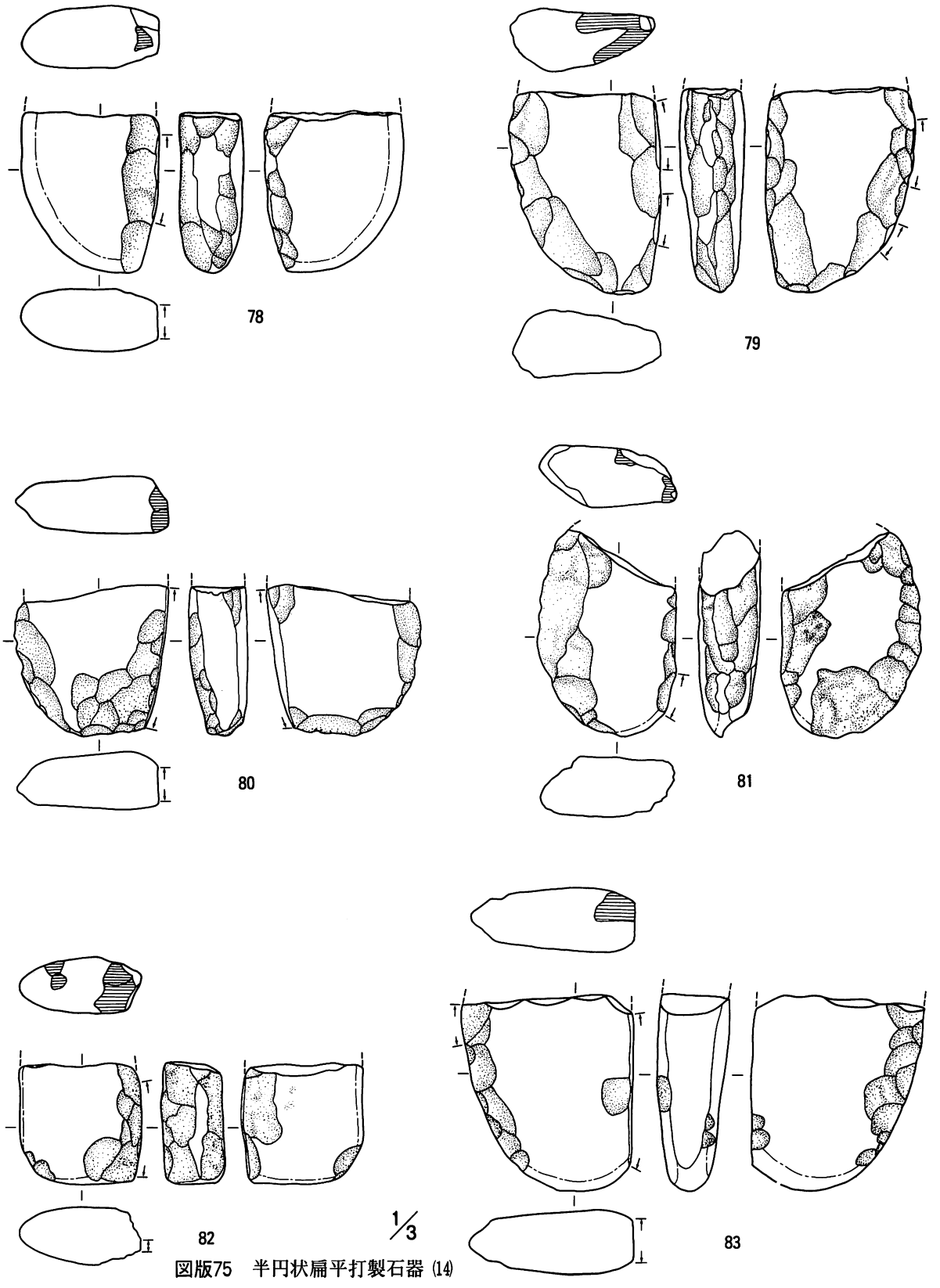


1/3

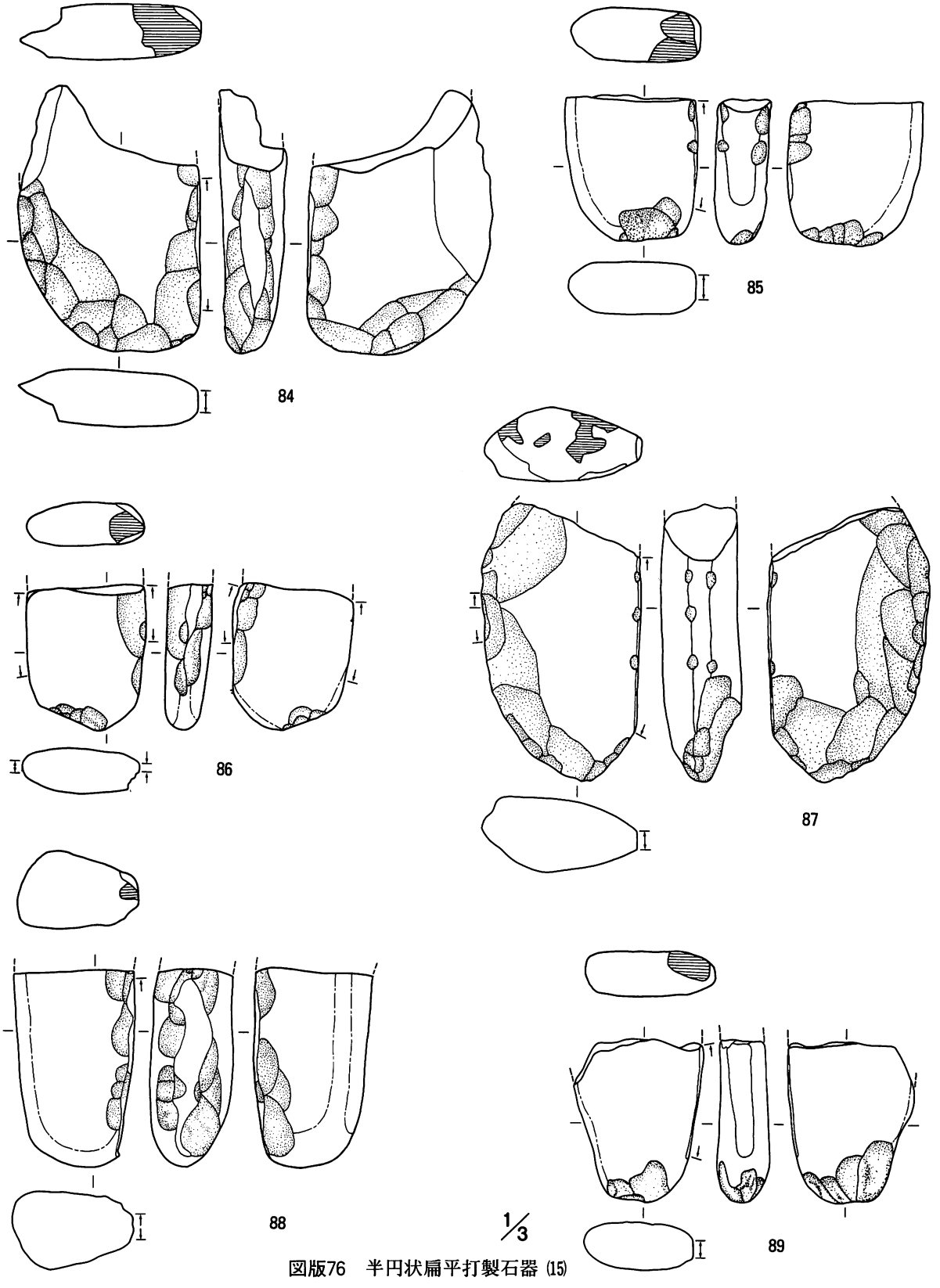
図版73　半円状扁平打製石器 (12)



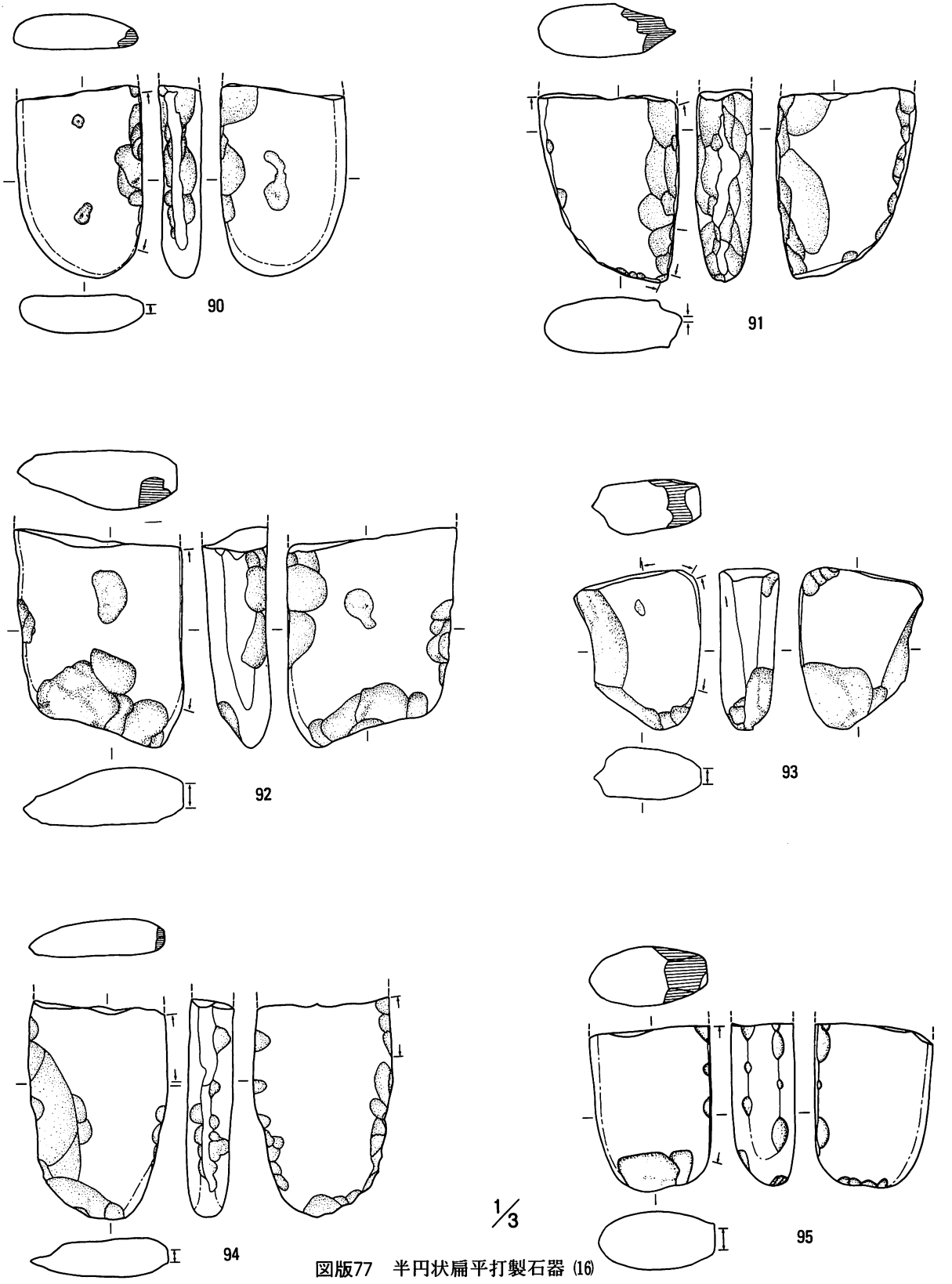
図版74　半円状扁平打製石器 (13)



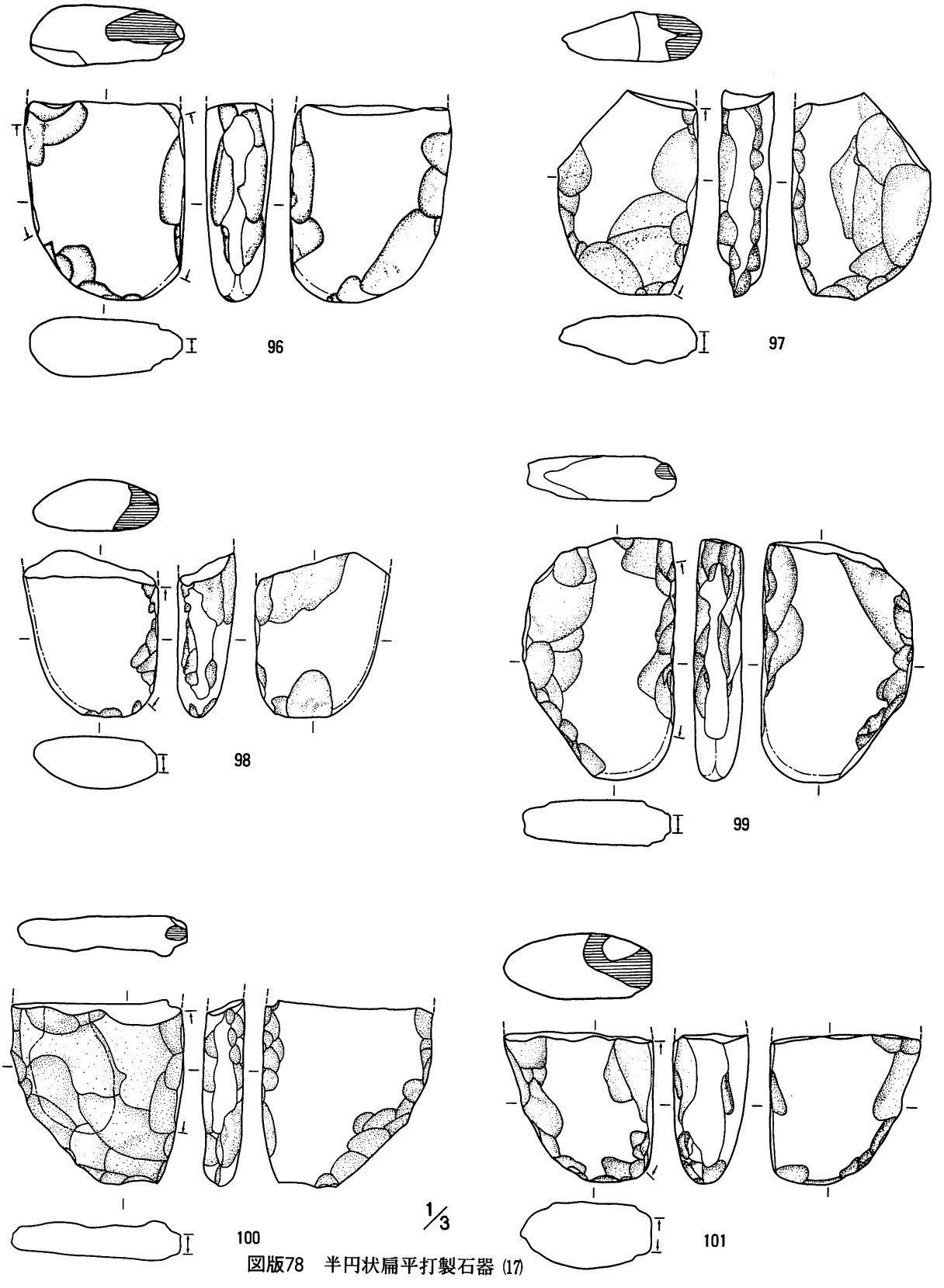
図版75　半円状扁平打製石器 (14)



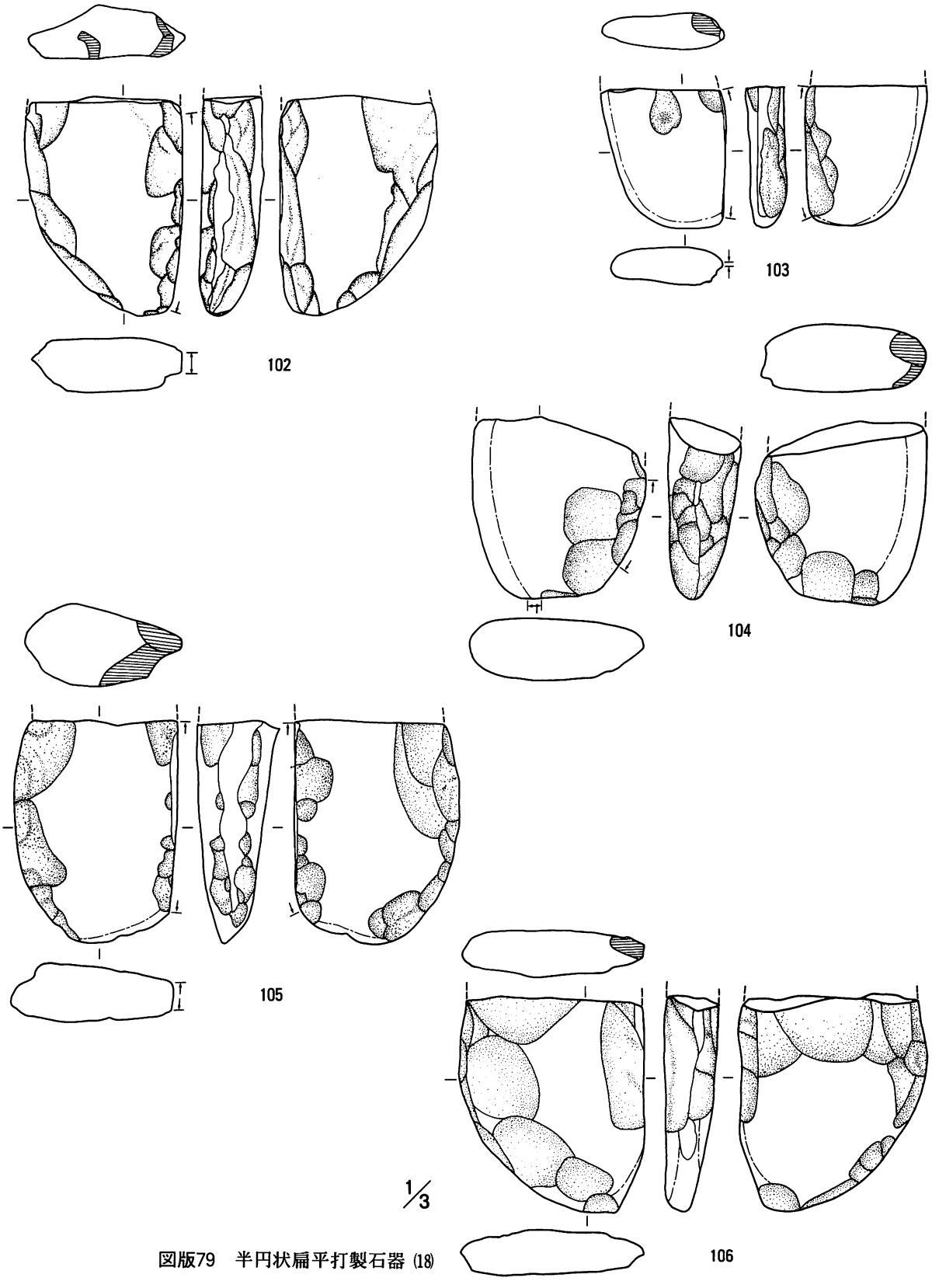
図版76　半円状扁平打製石器 (15)



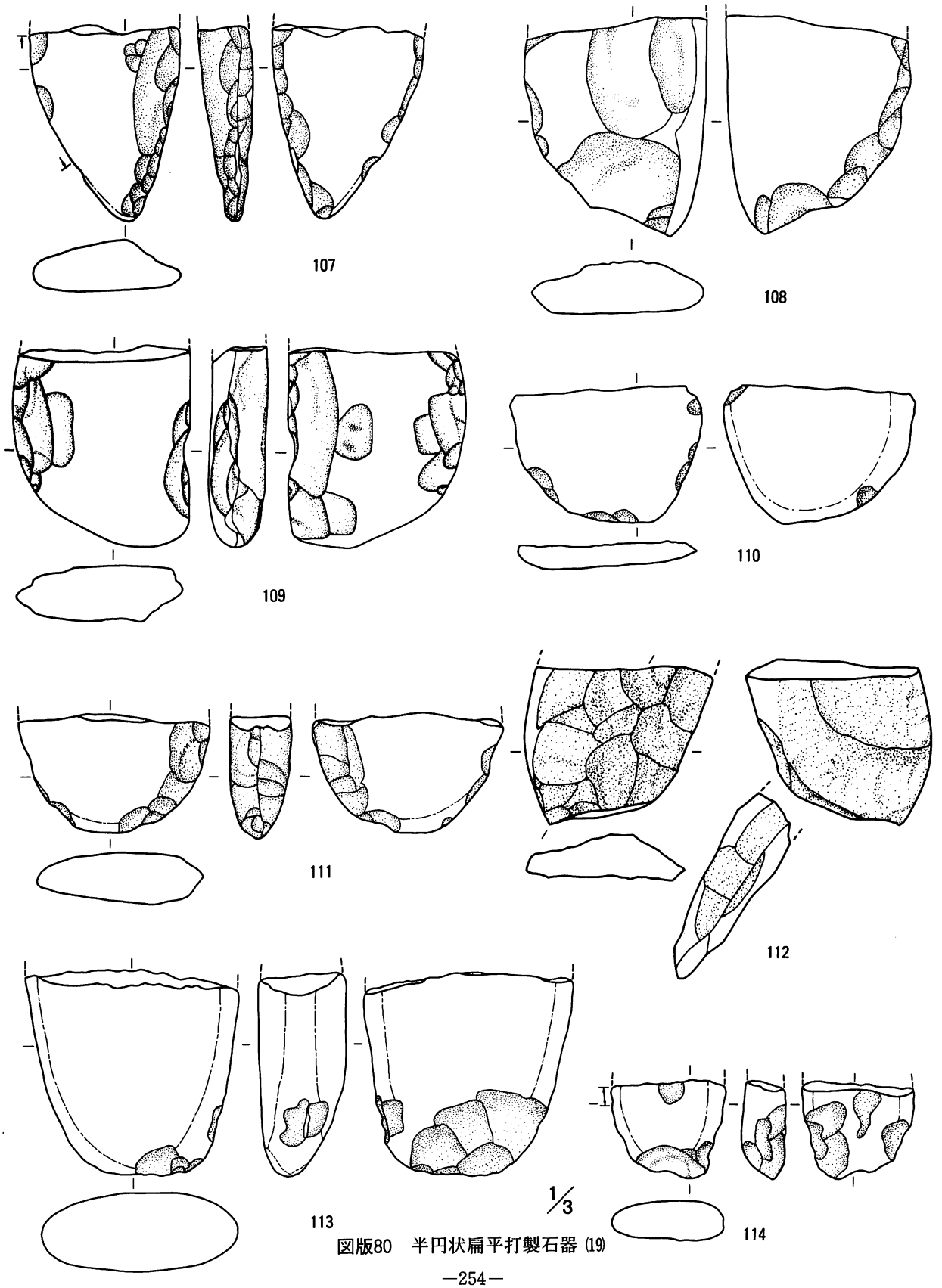
図版77　半円状扁平打製石器 (16)



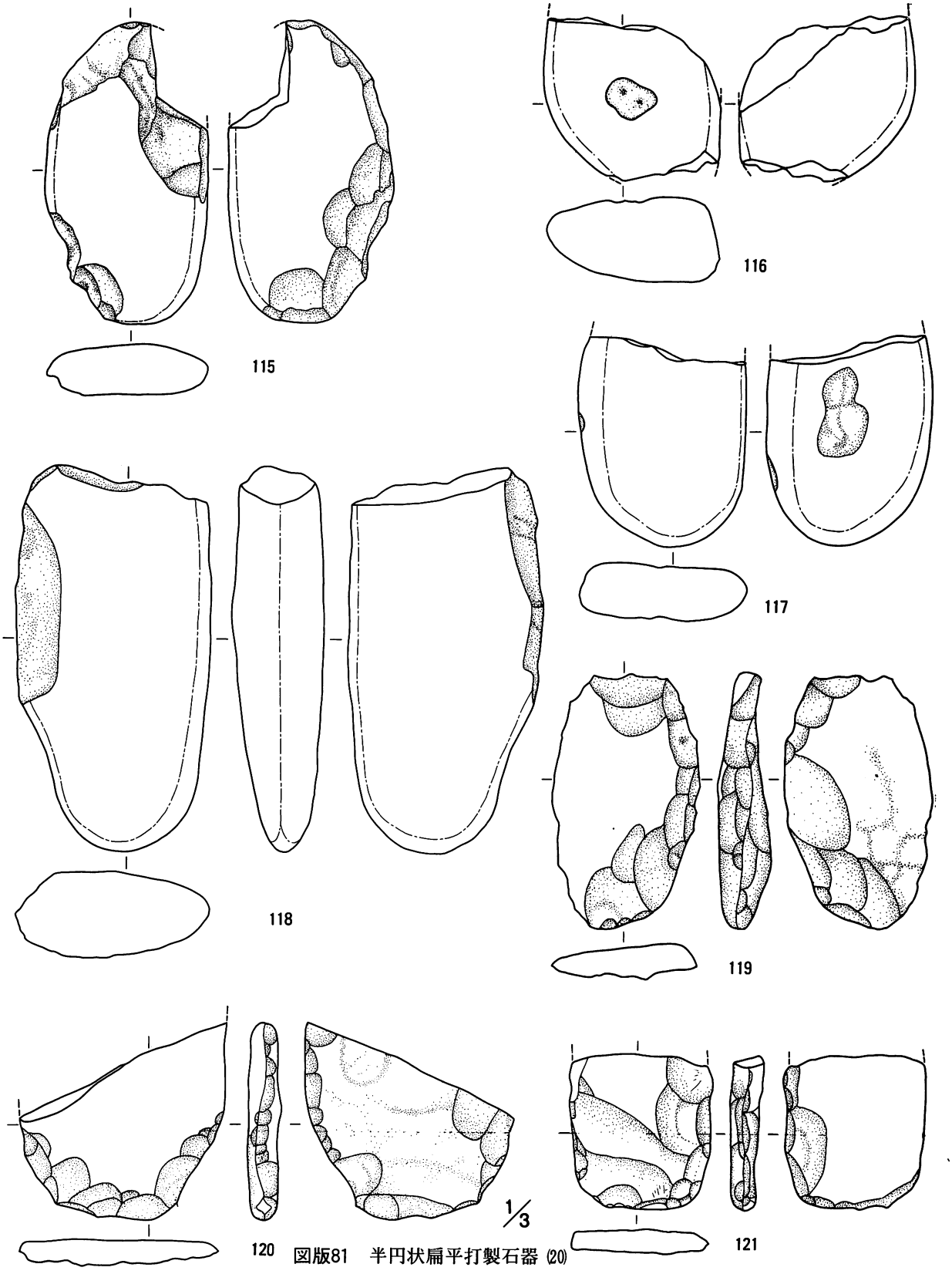
図版78　半円状扁平打製石器 (17)



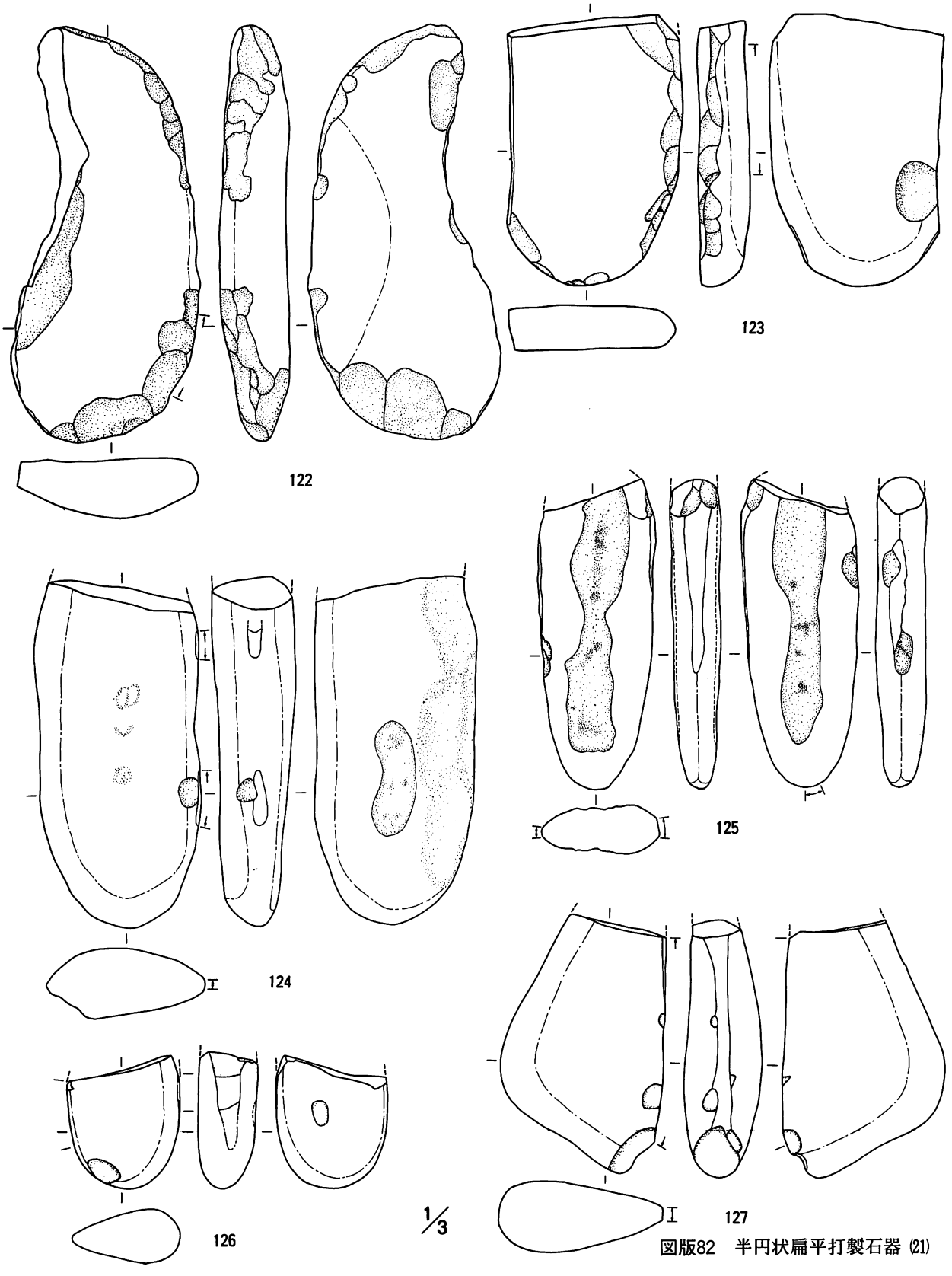
図版79　半円状扁平打製石器 (18)



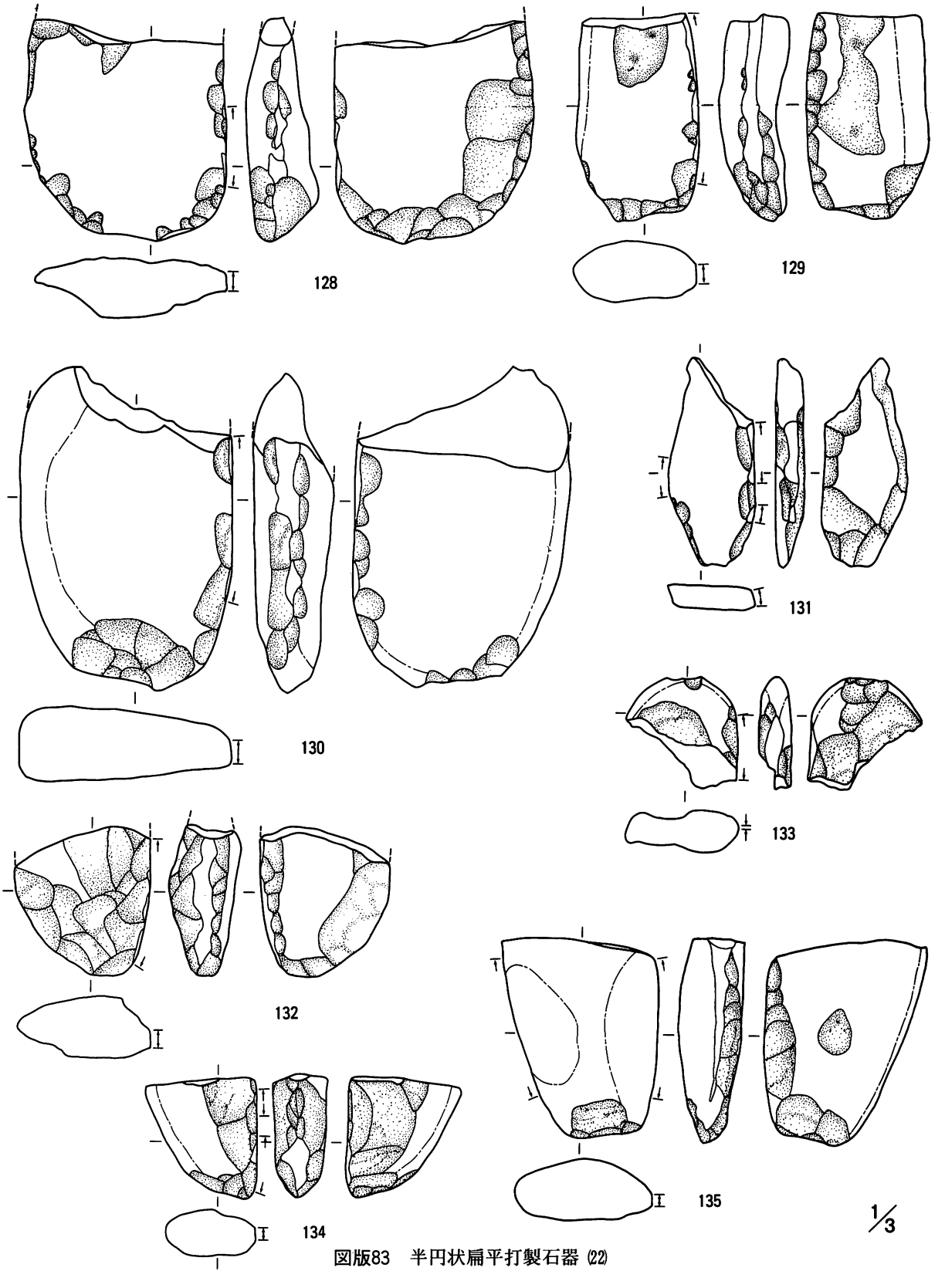
図版80　半円状扁平打製石器 (19)



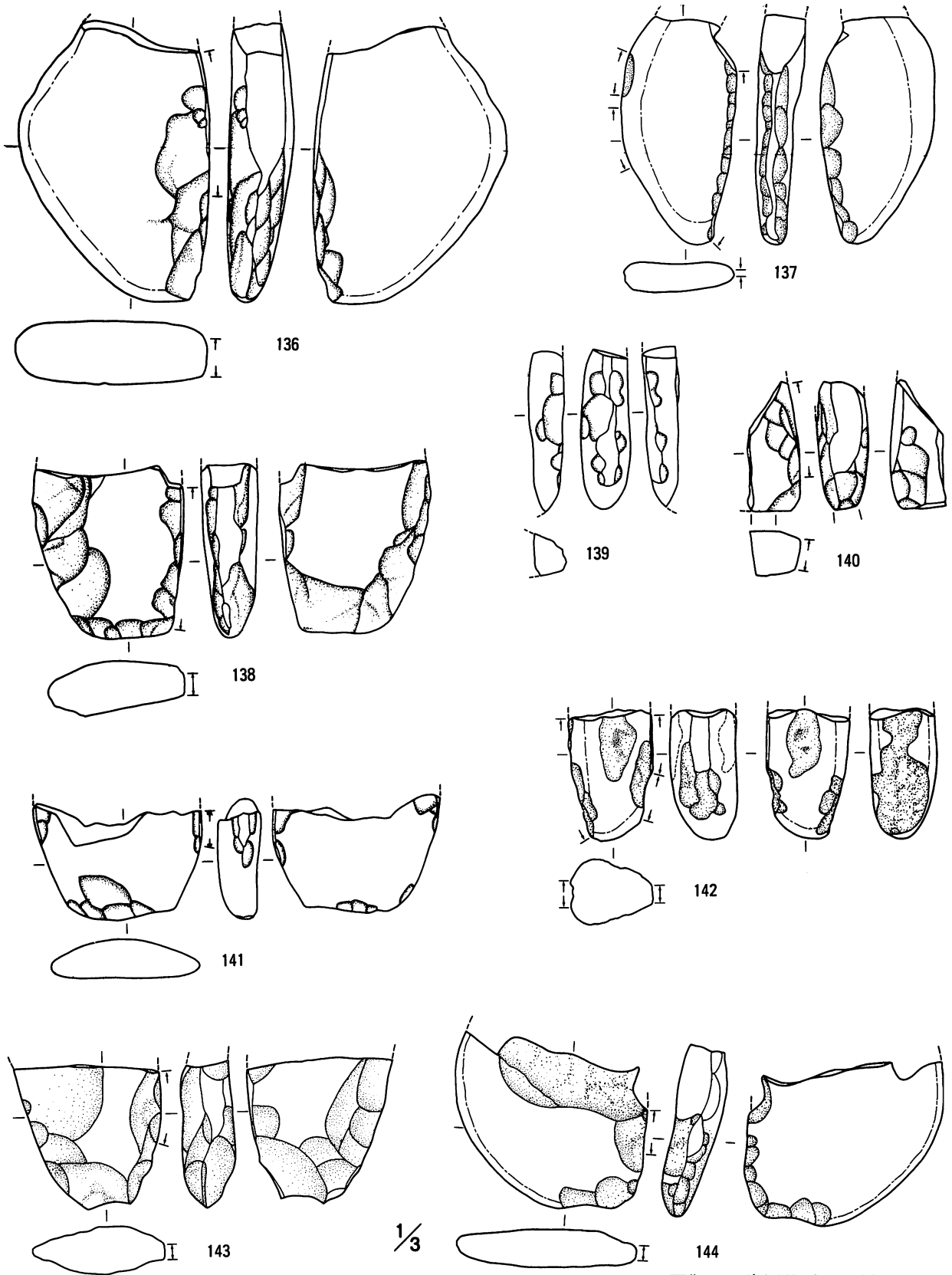
図版81　半円状扁平打製石器 (20)



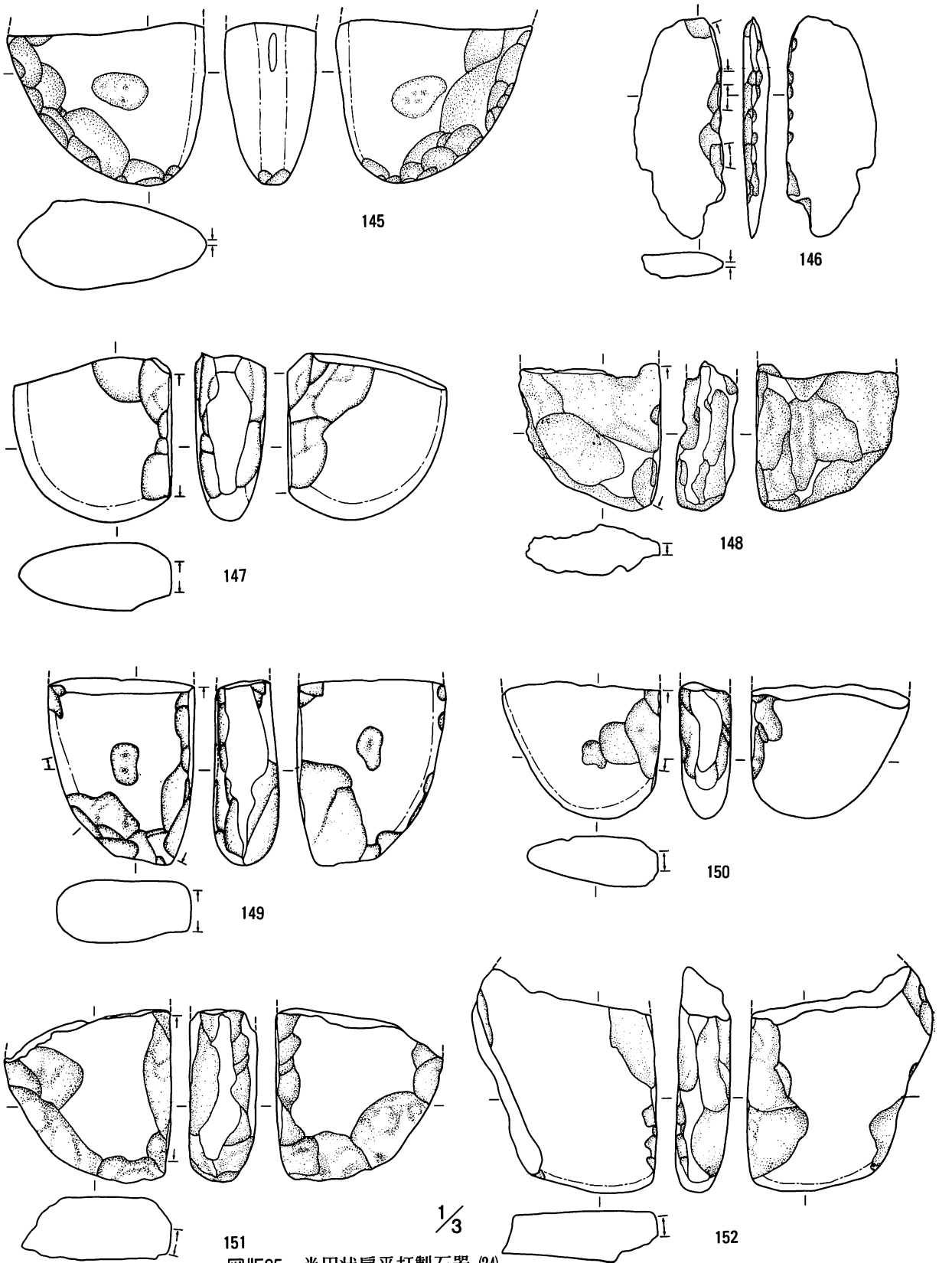
図版82　半円状扁平打製石器 (21)



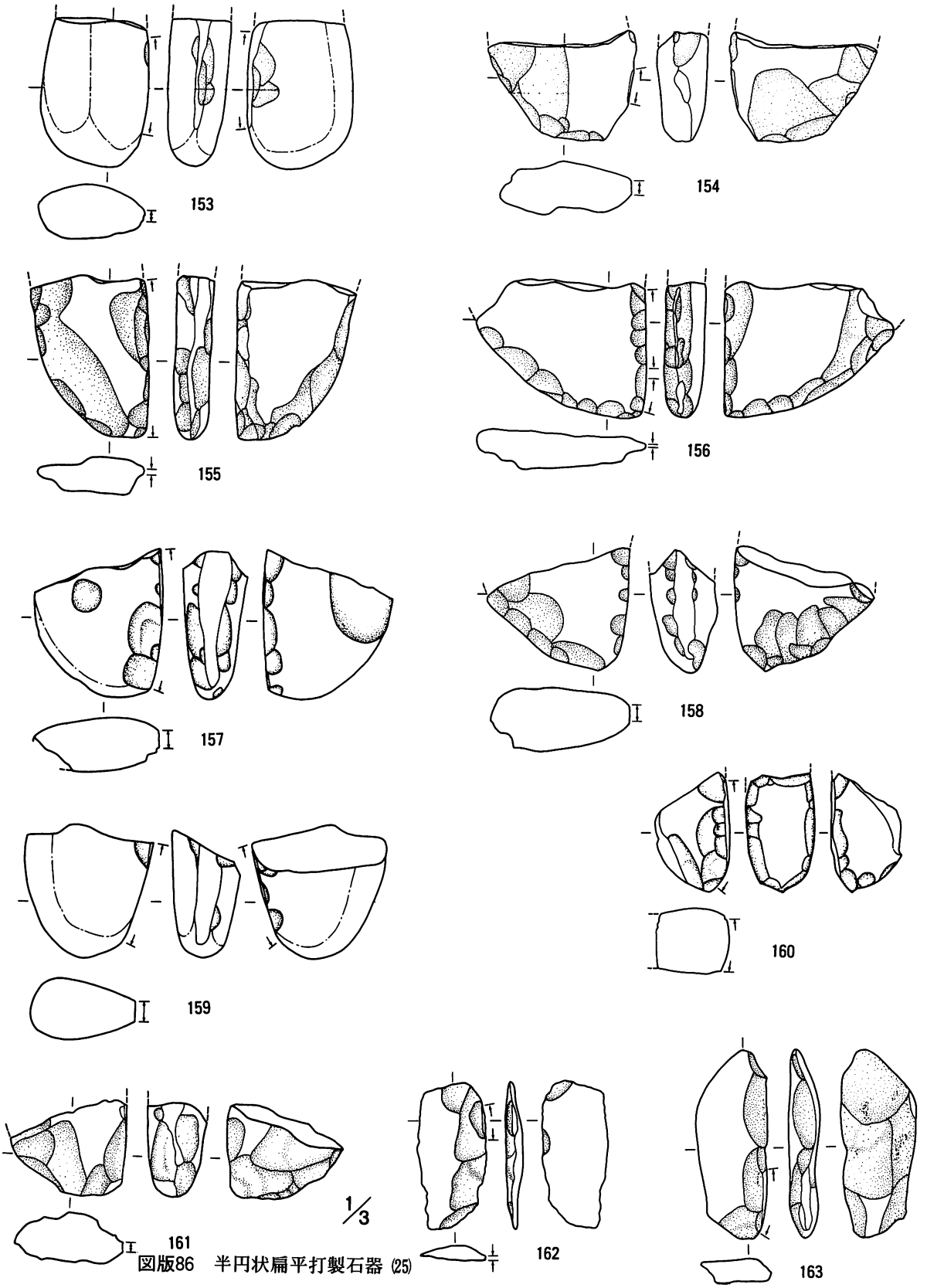
図版83　半円状扁平打製石器 (22)



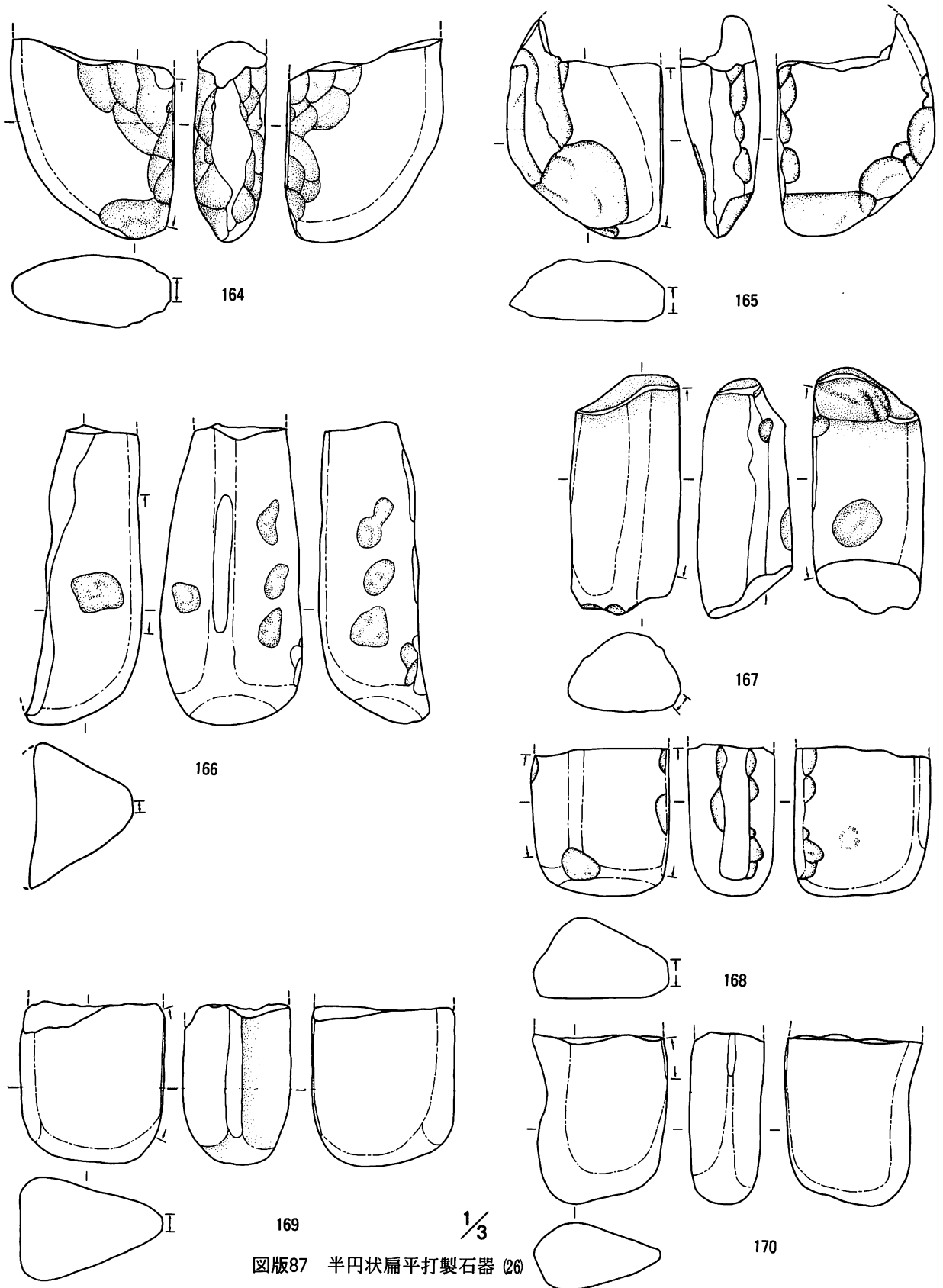
図版84　半円状扁平打製石器 (23)



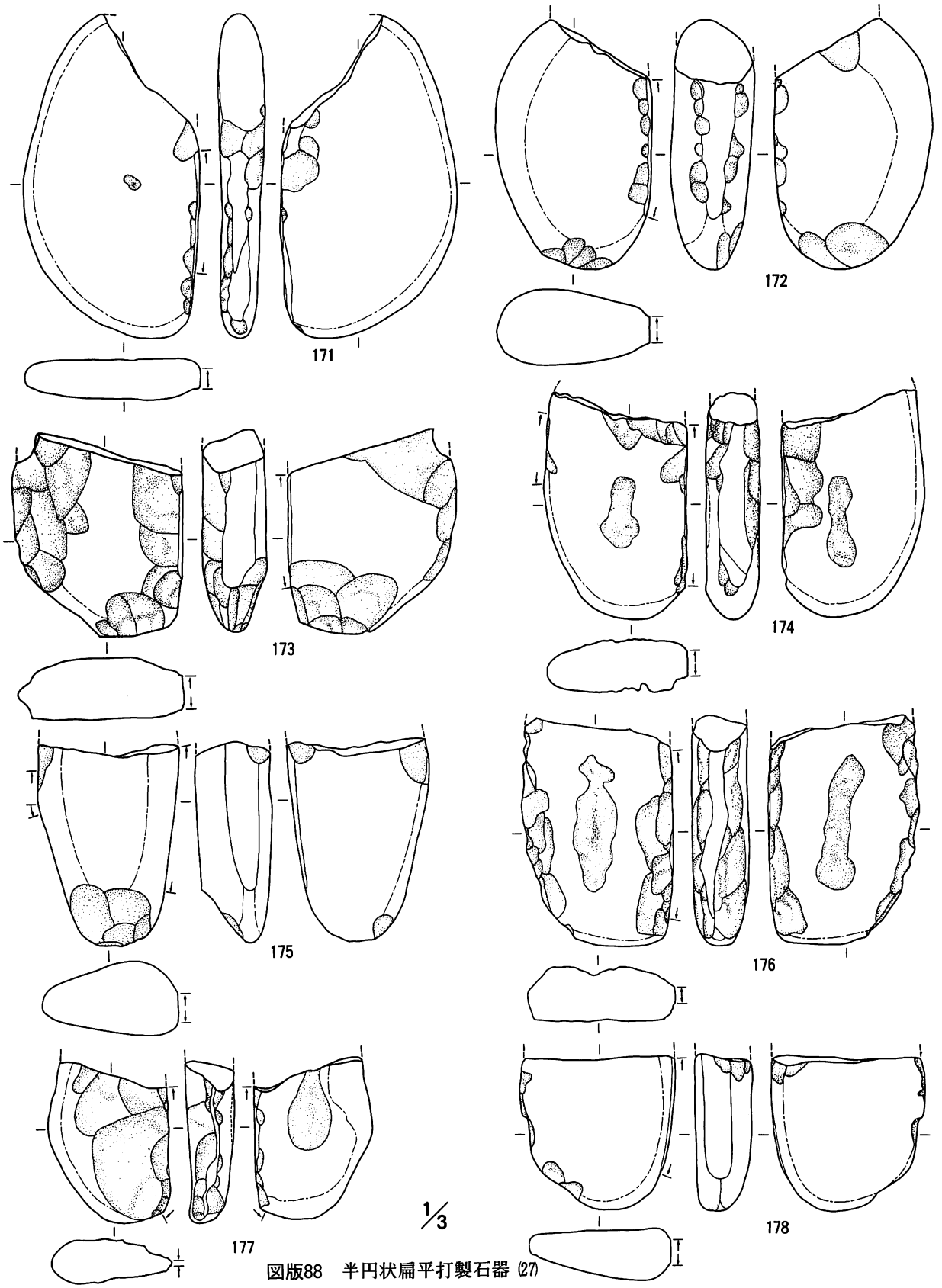
図版85　半円状扁平打製石器 (24)



図版86　半円状扁平打製石器 (25)

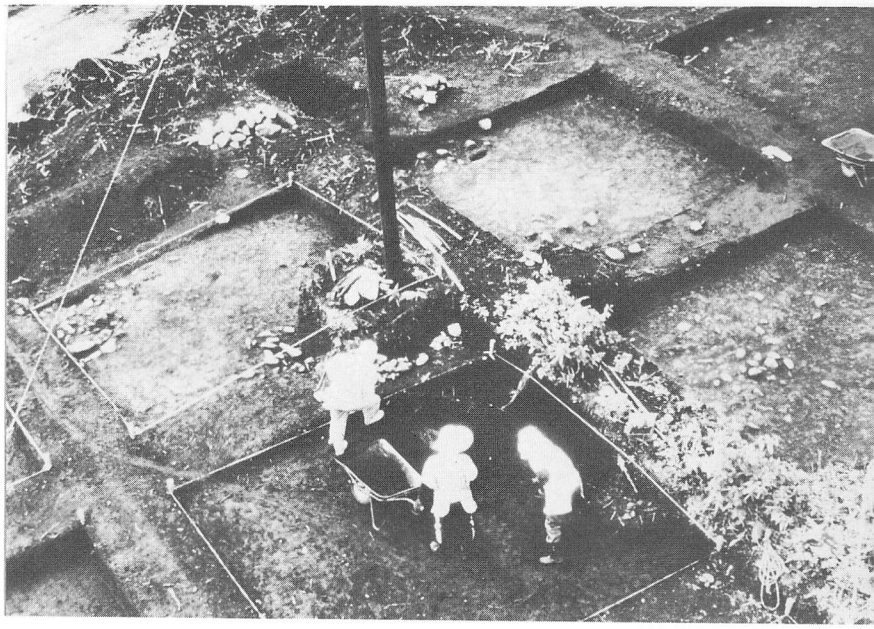


図版87　半円状扁平打製石器 (26)



図版88　半円状扁平打製石器 (27)

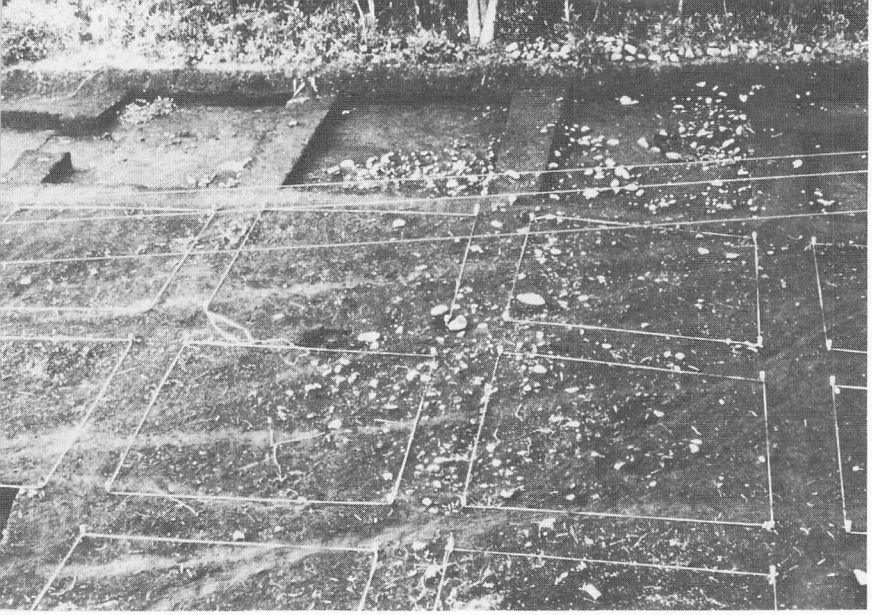
元御所Ⅰ遺跡



元御所Ⅰ遺跡
グリッド発掘調査

トレンチ内発見住居址

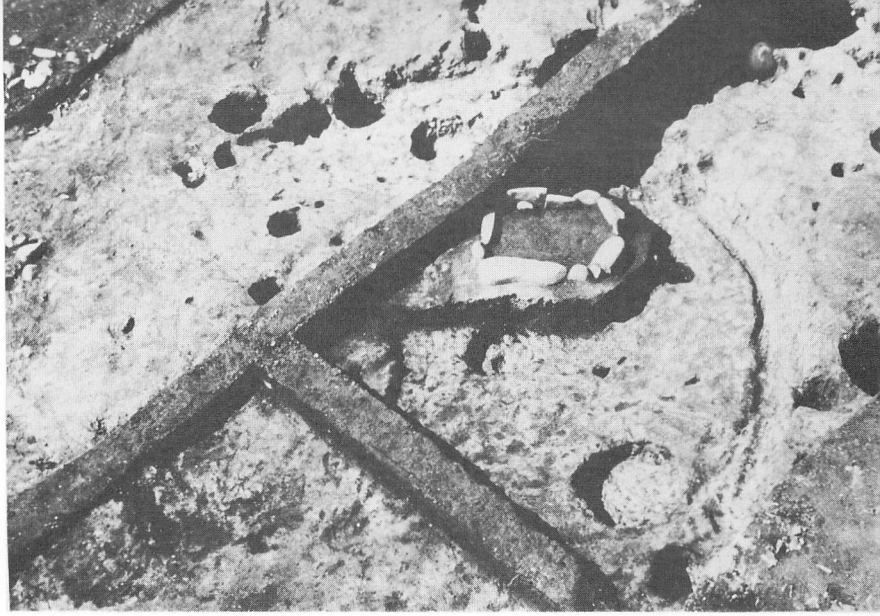
写真図版１　調査風景



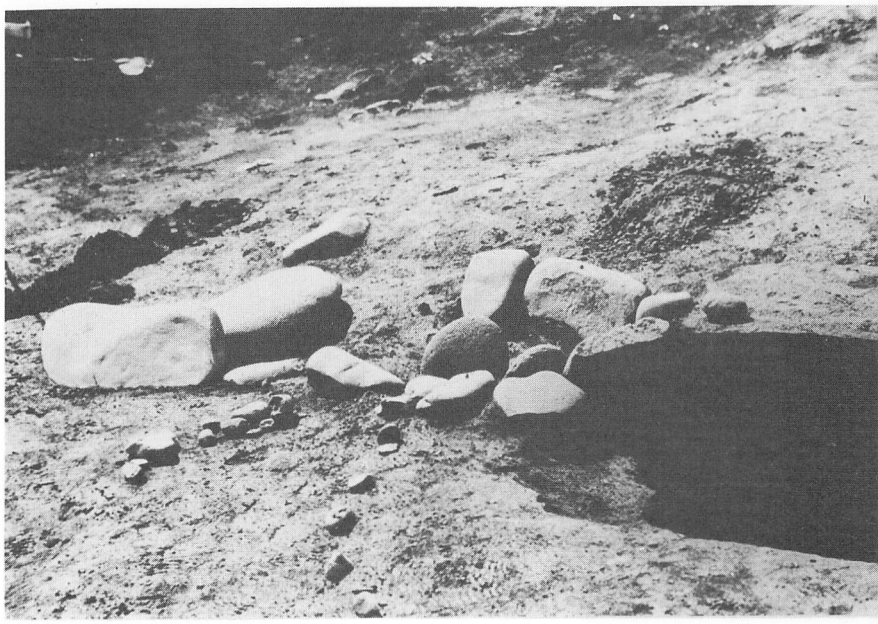
グリッド発掘調査

住居址発掘調査

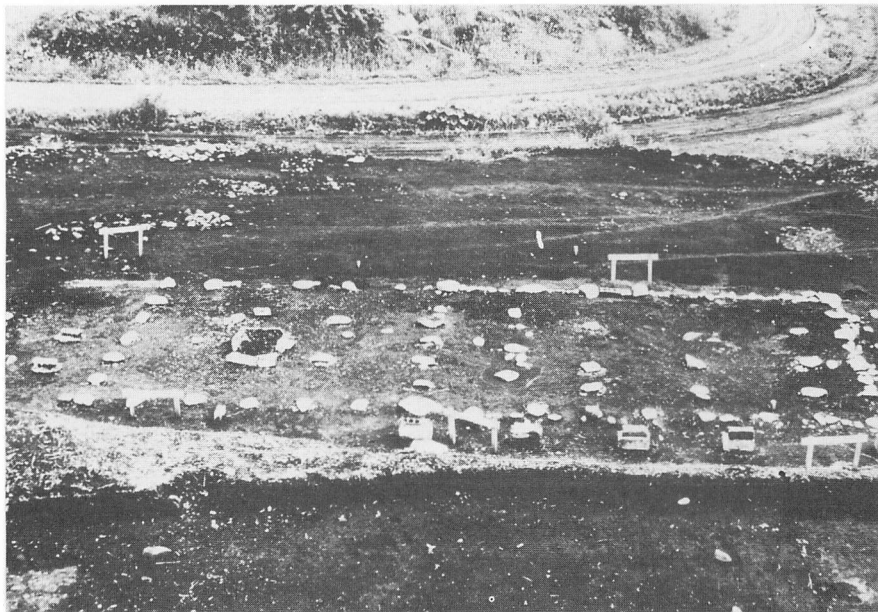
3～9号住居址



3～9号住居址



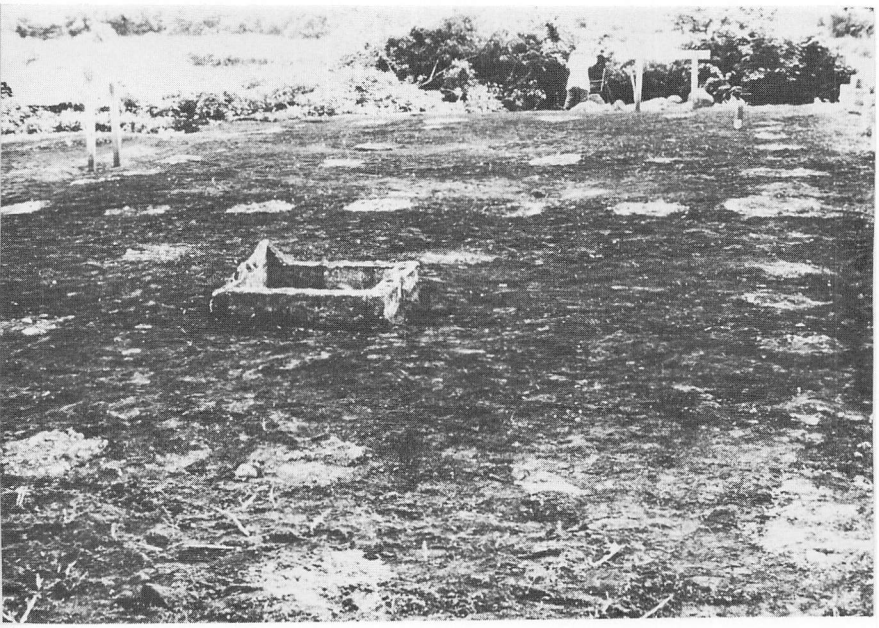
10号住居址炉址



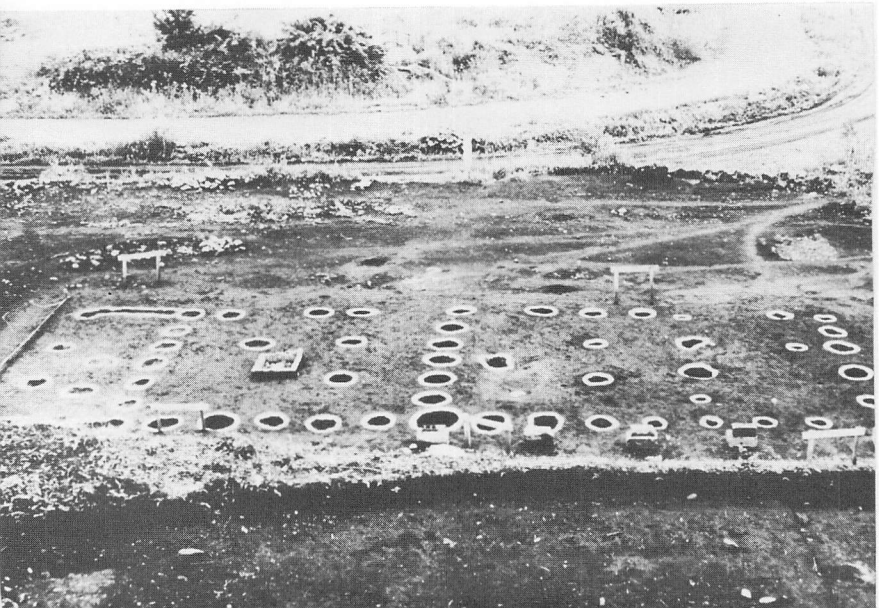
民家礎石列

写真図版 3

民家礎石下の遺構

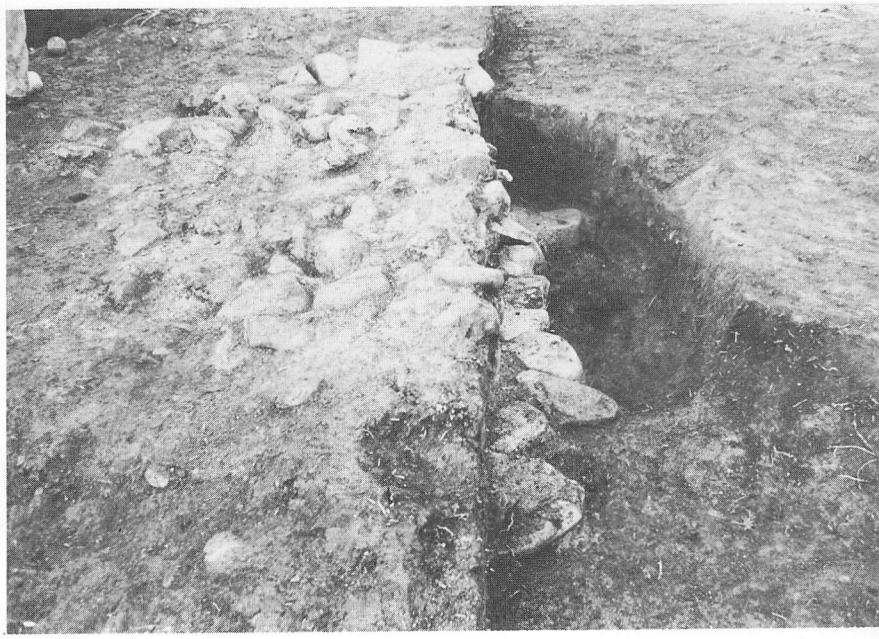


民家礎石下の遺構



民家礎石下の遺構

炭窯の平面状況

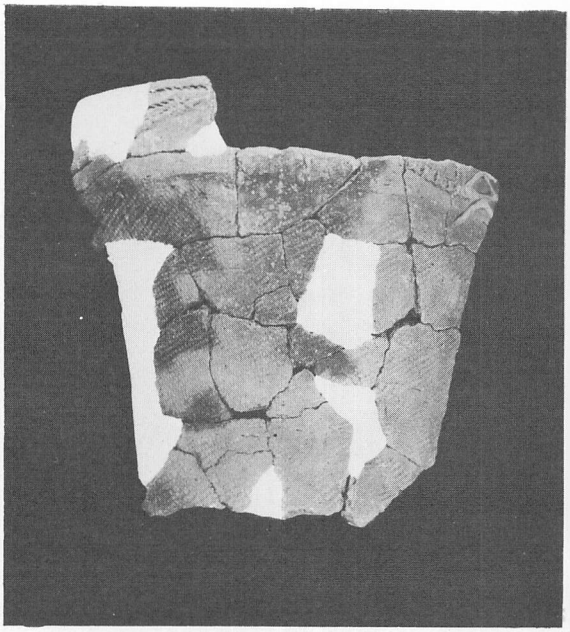


炭窯

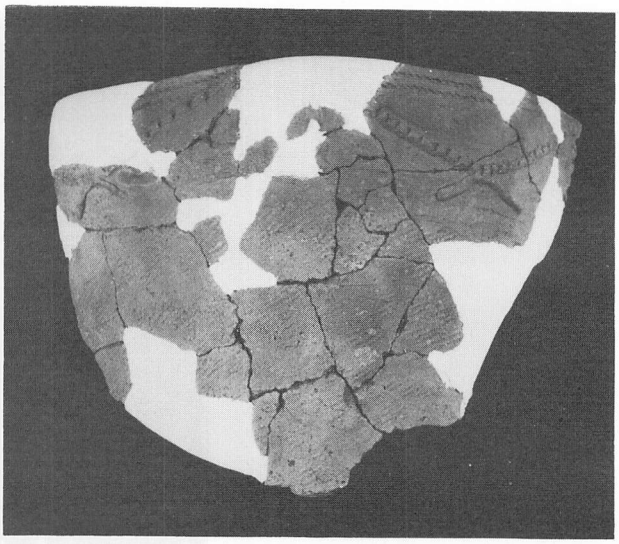
炭窯の断面

写真図版 5

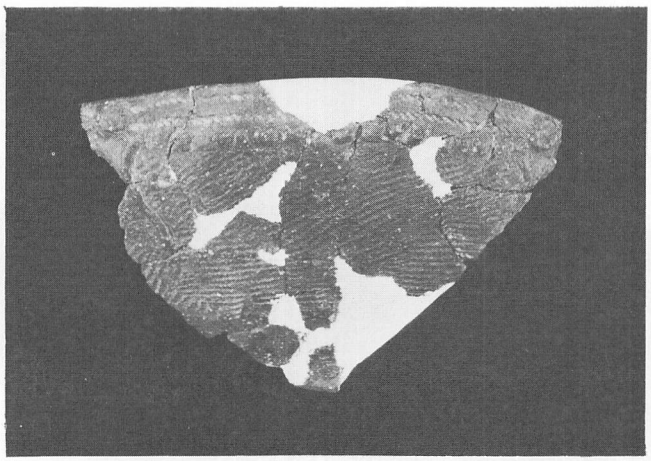
炭窯の床面



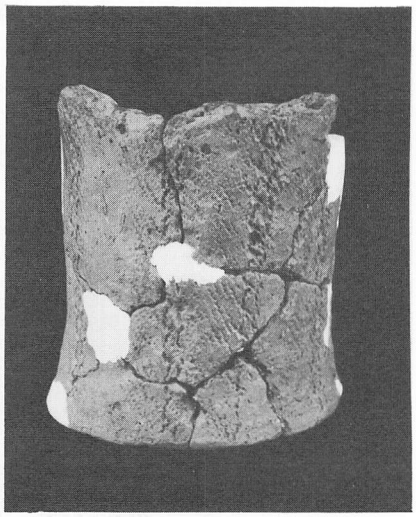
12号住4



12号住4



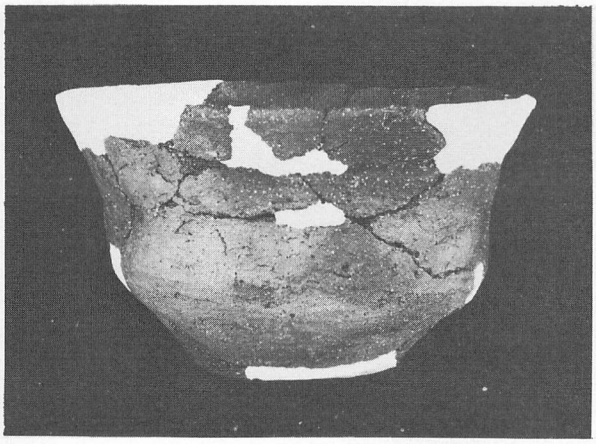
12号住2



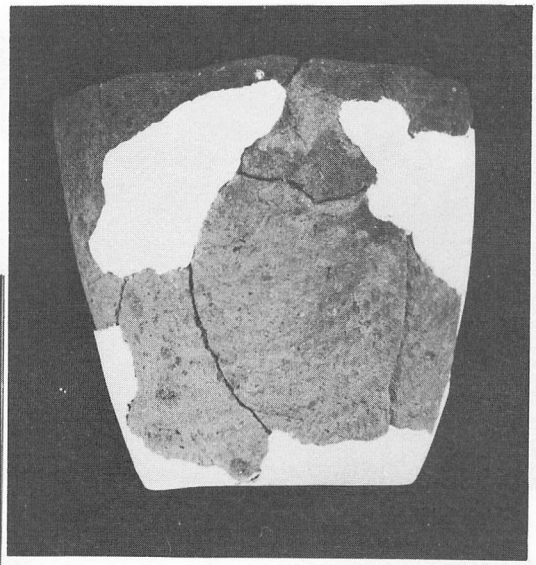
12号住
床直

写真図版6

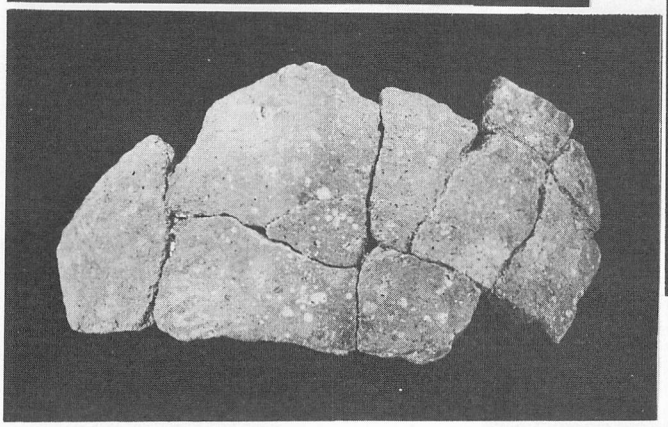
12号住炉内



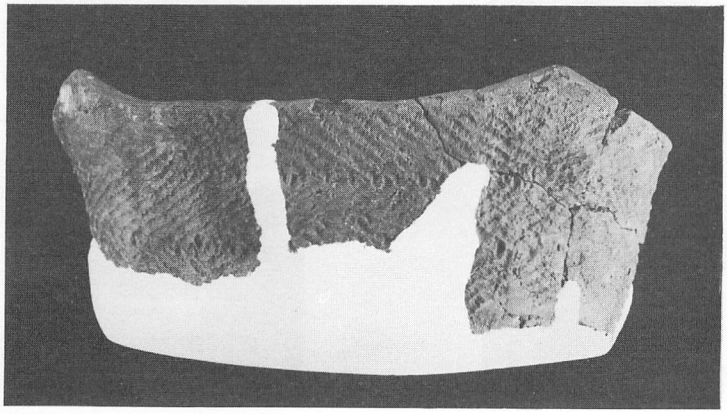
11号住



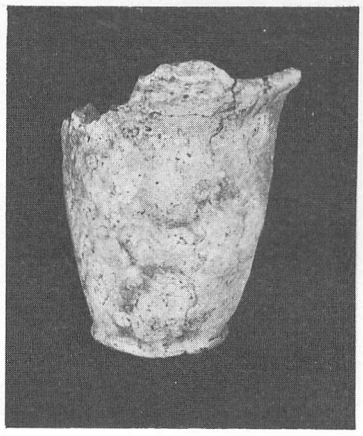
G—17C 2層



G—14J 2層

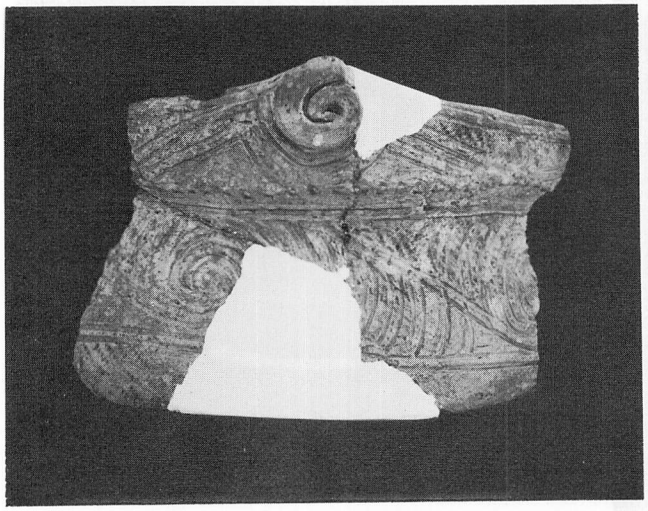


G—16D
2層

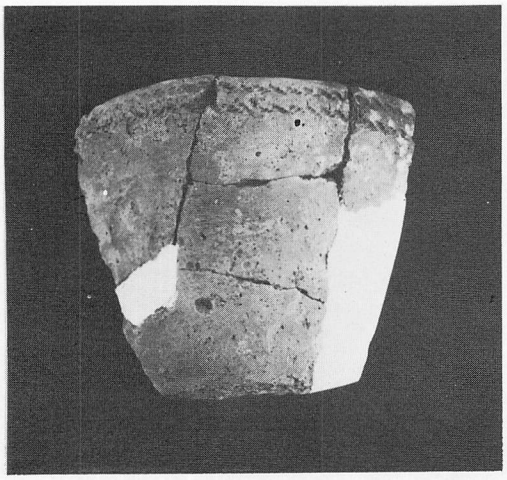


G—18D

写真図版 7



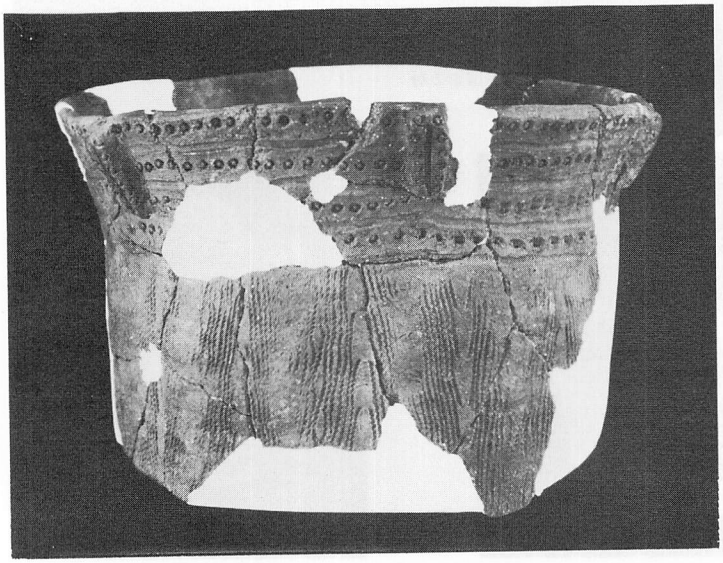
G－11I　2層



G－11F　2層

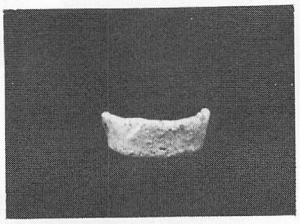
G－12E　2層

G－12J　2層

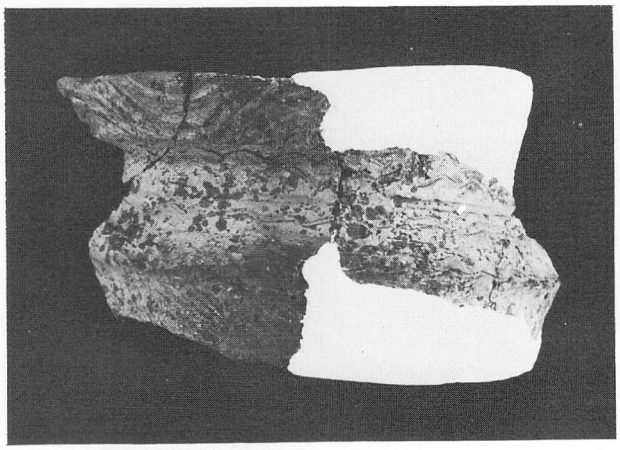


G－1　2層

G－17D

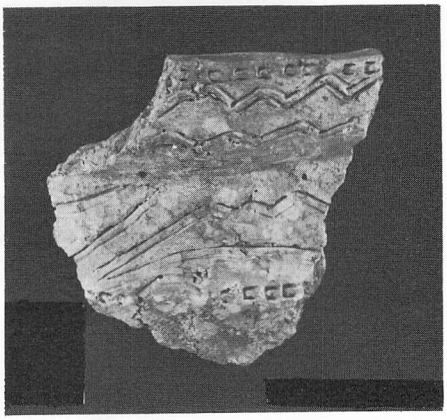


写真図版 8

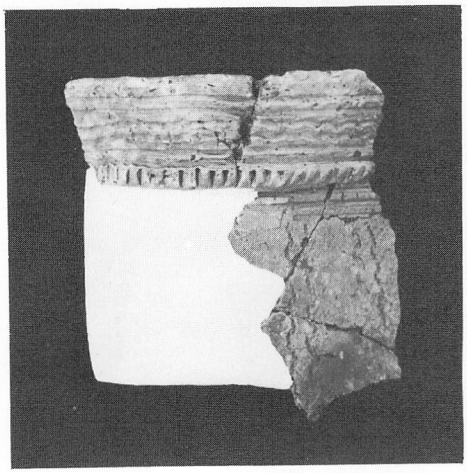


G－7　3層

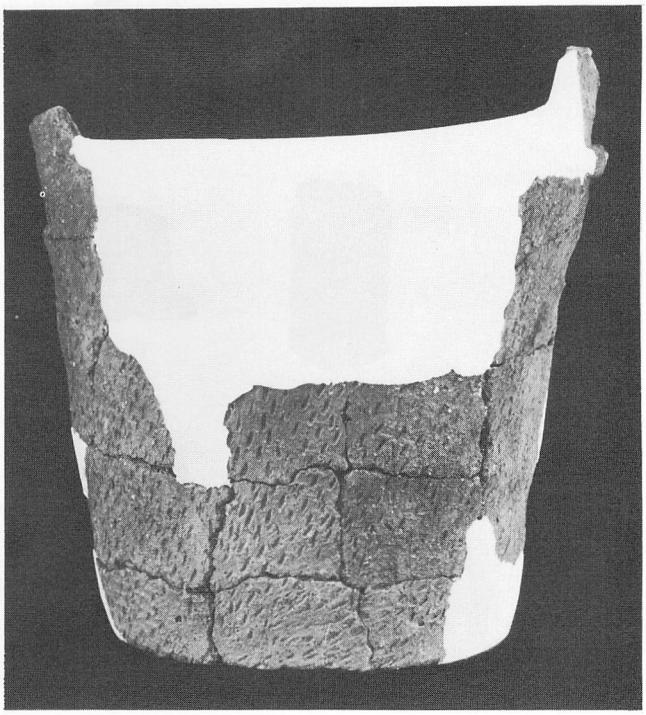
北西区粗掘



南西区粗掘



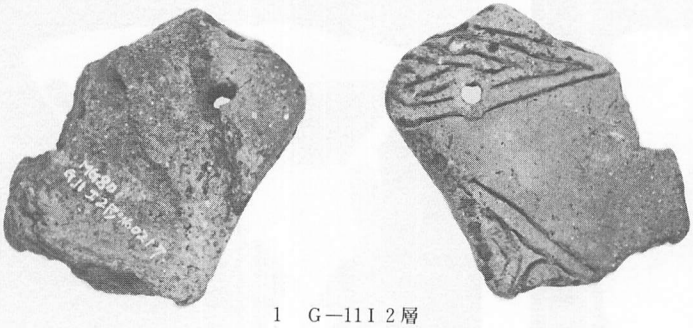
南西区粗掘



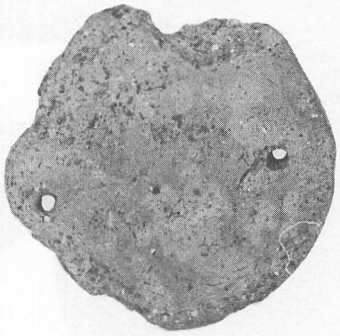
盛土内

南東区粗掘

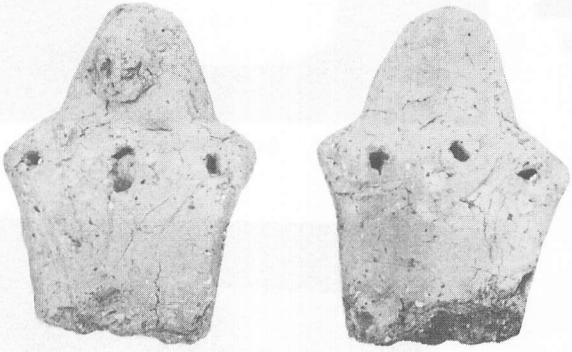
写真図版 9



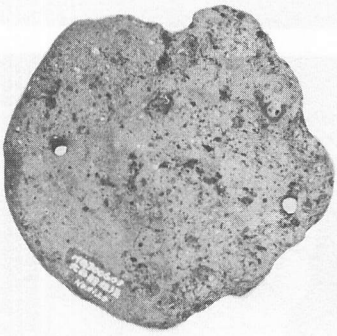
1　G—11I 2層

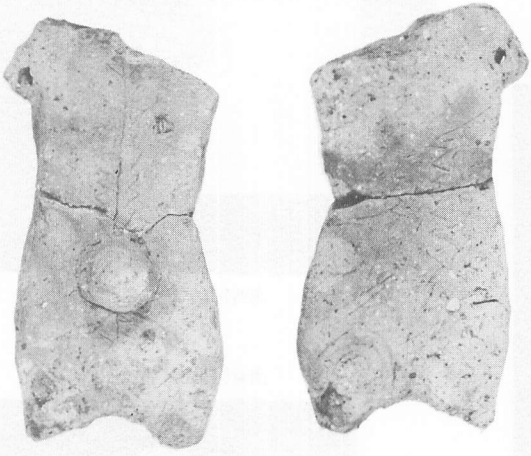


3
北西区粗掘



2　南西区粗掘





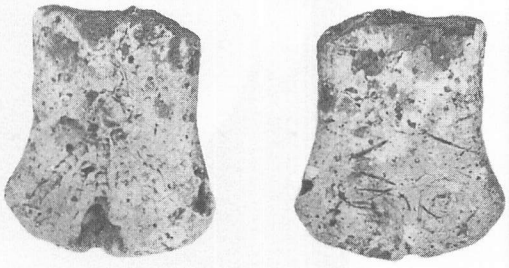
4　G—11H 2層

8

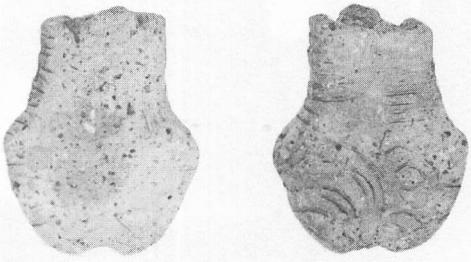
9

10

11



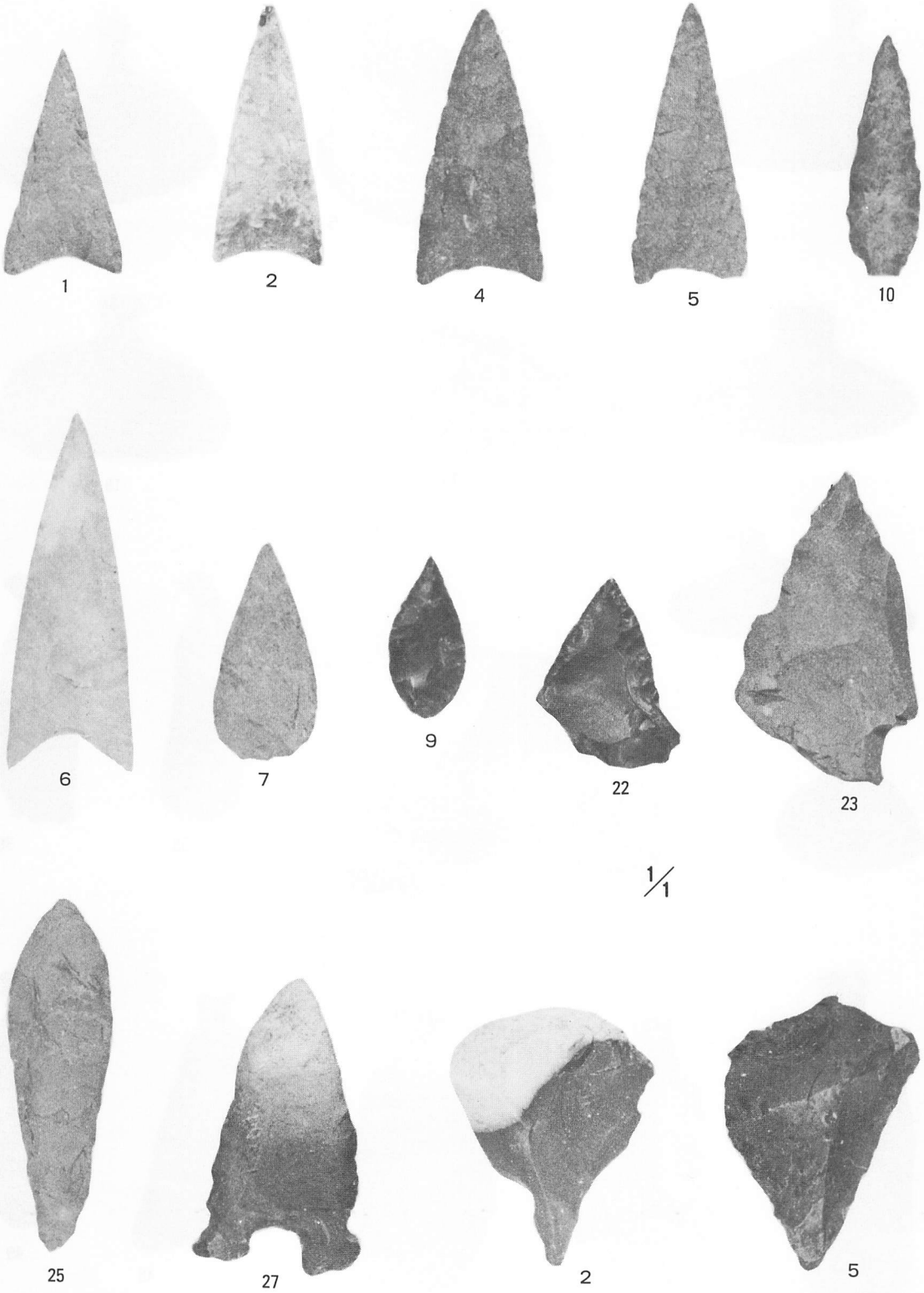
5　G—12J 2層



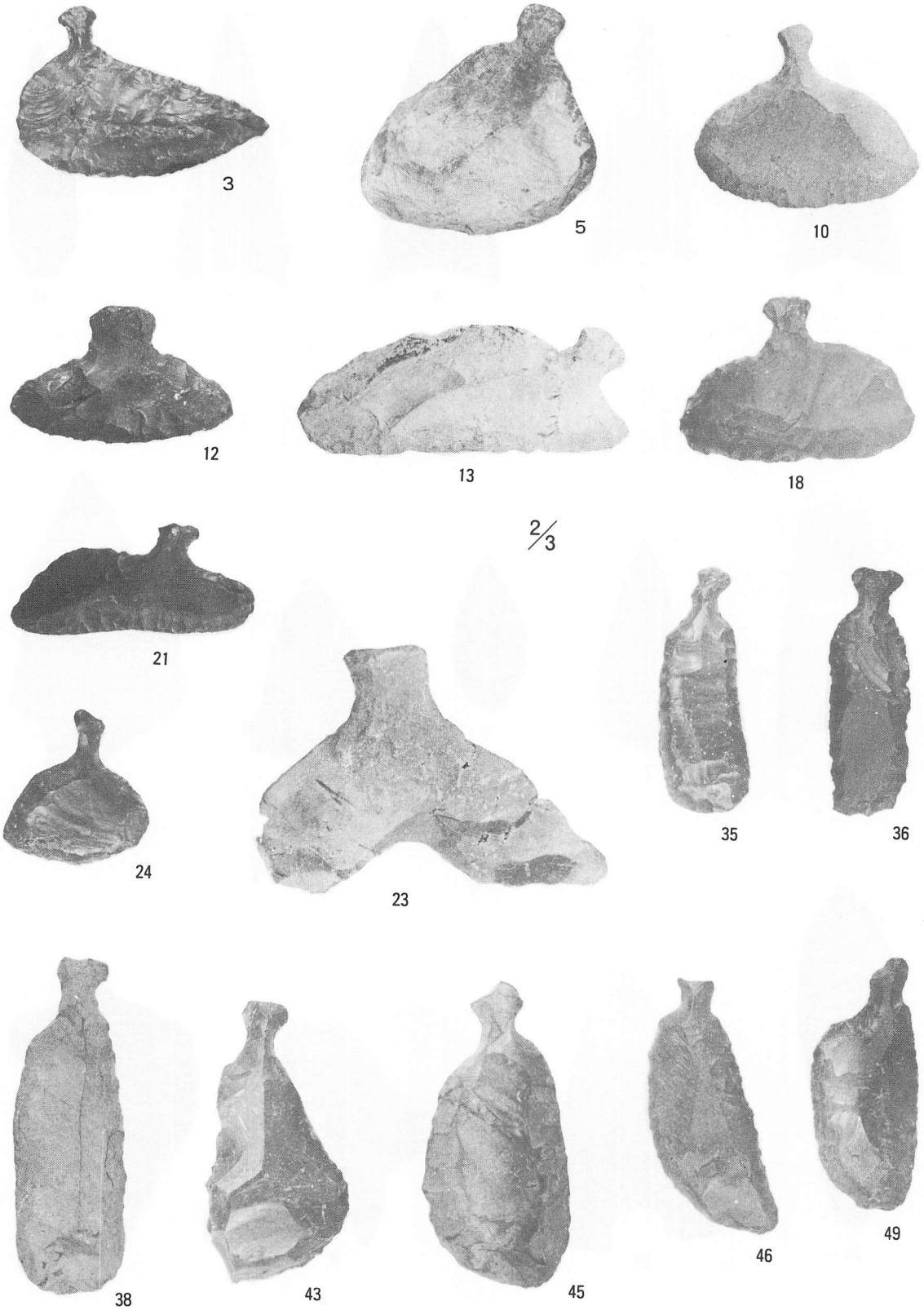
6　北東区粗掘

2/3

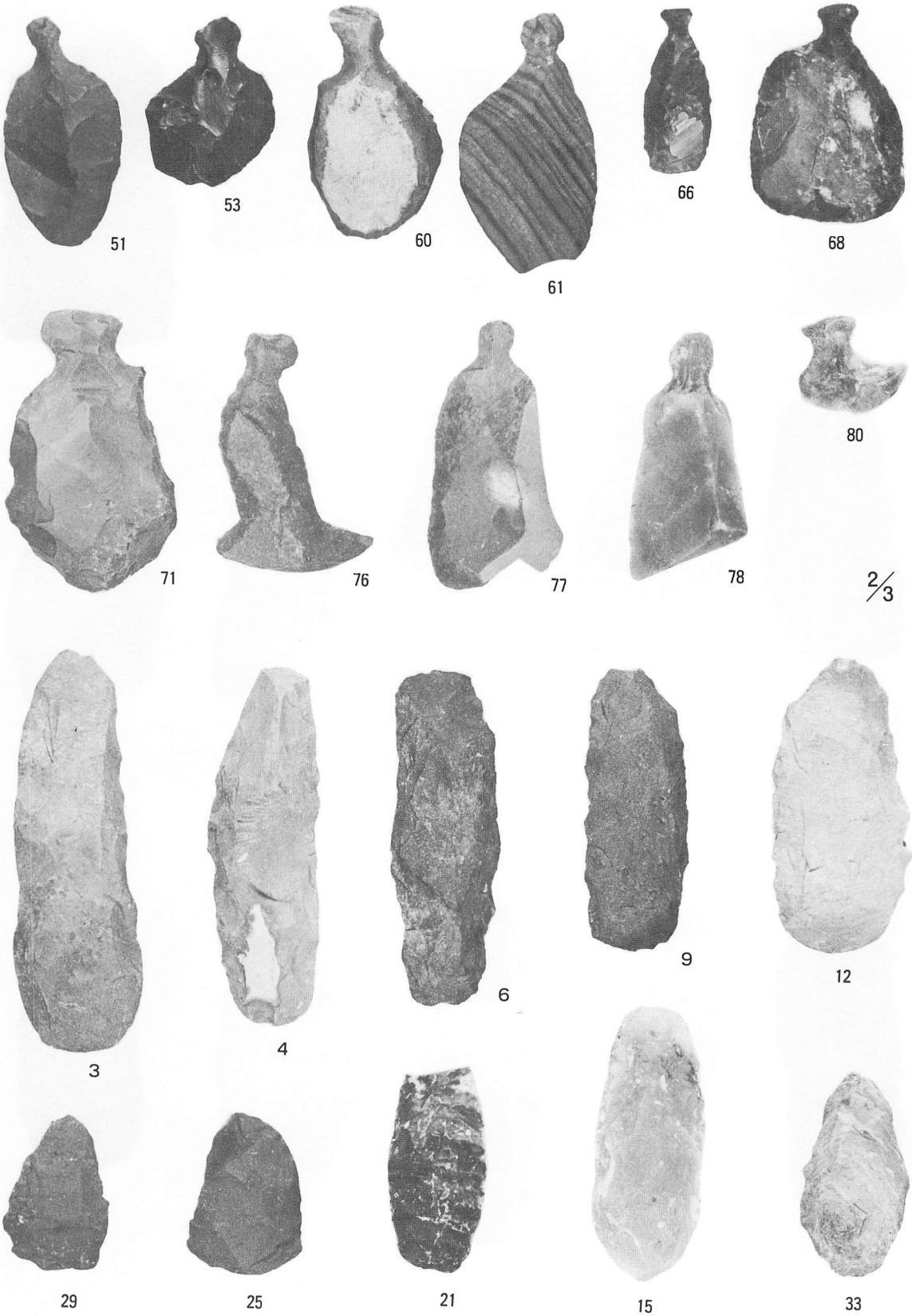
写真図版10　土偶その他



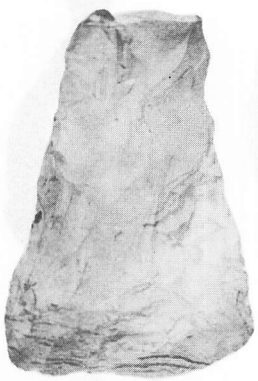
写真図版11　石鏃・錐



写真図版12　石匙

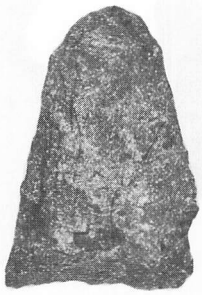


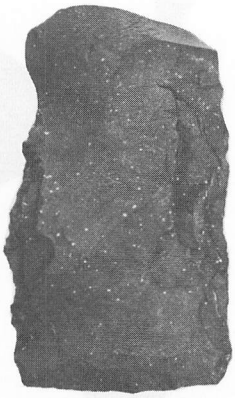
写真図版13　石匙・石鏃


35

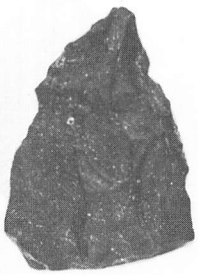
38

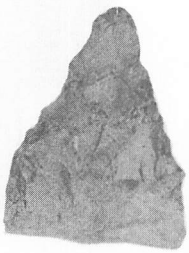
39


41

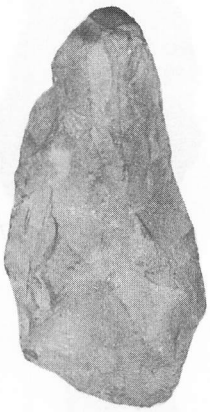

50

52


53


56

61


62

2/3

1

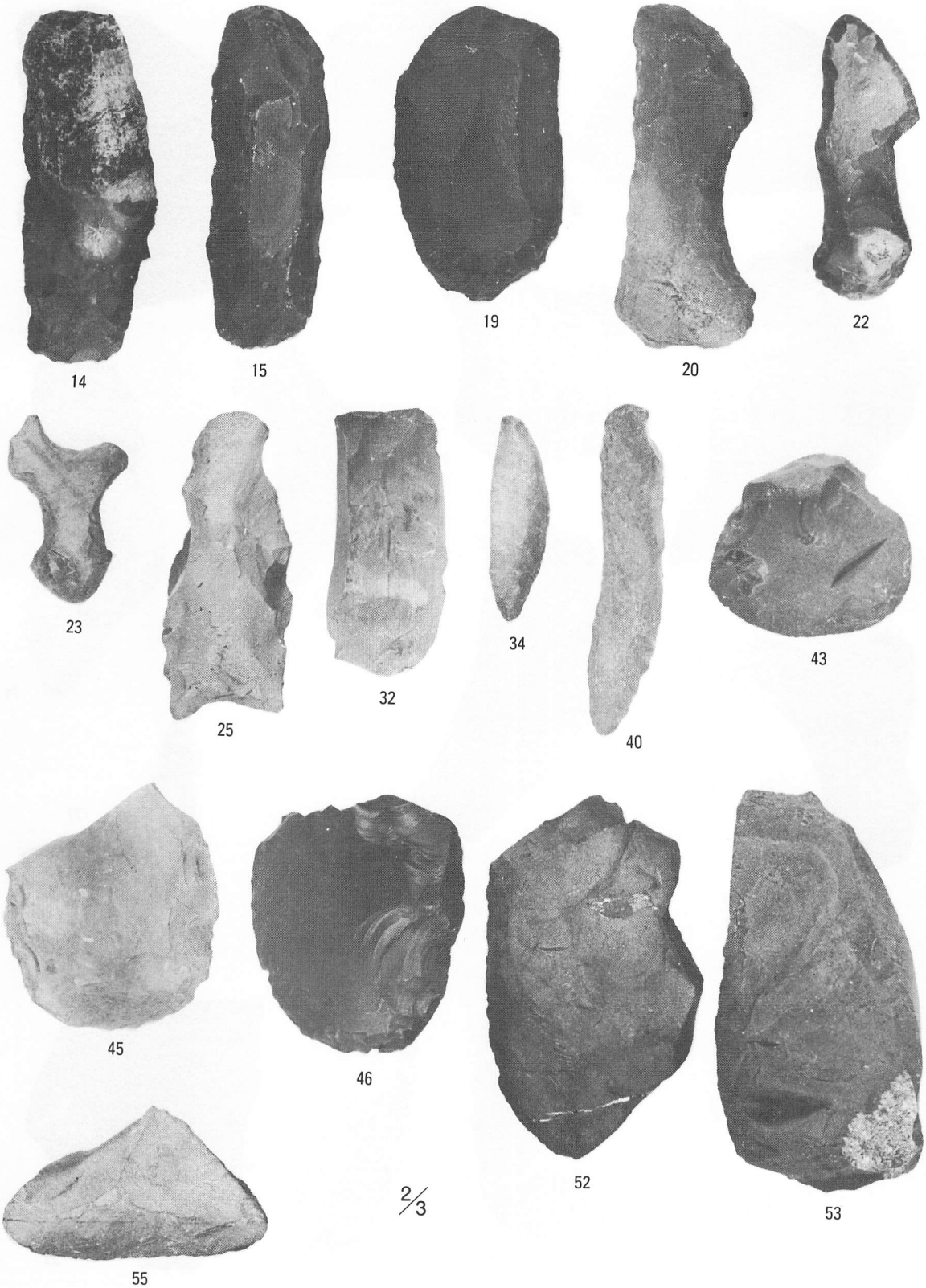
2

7

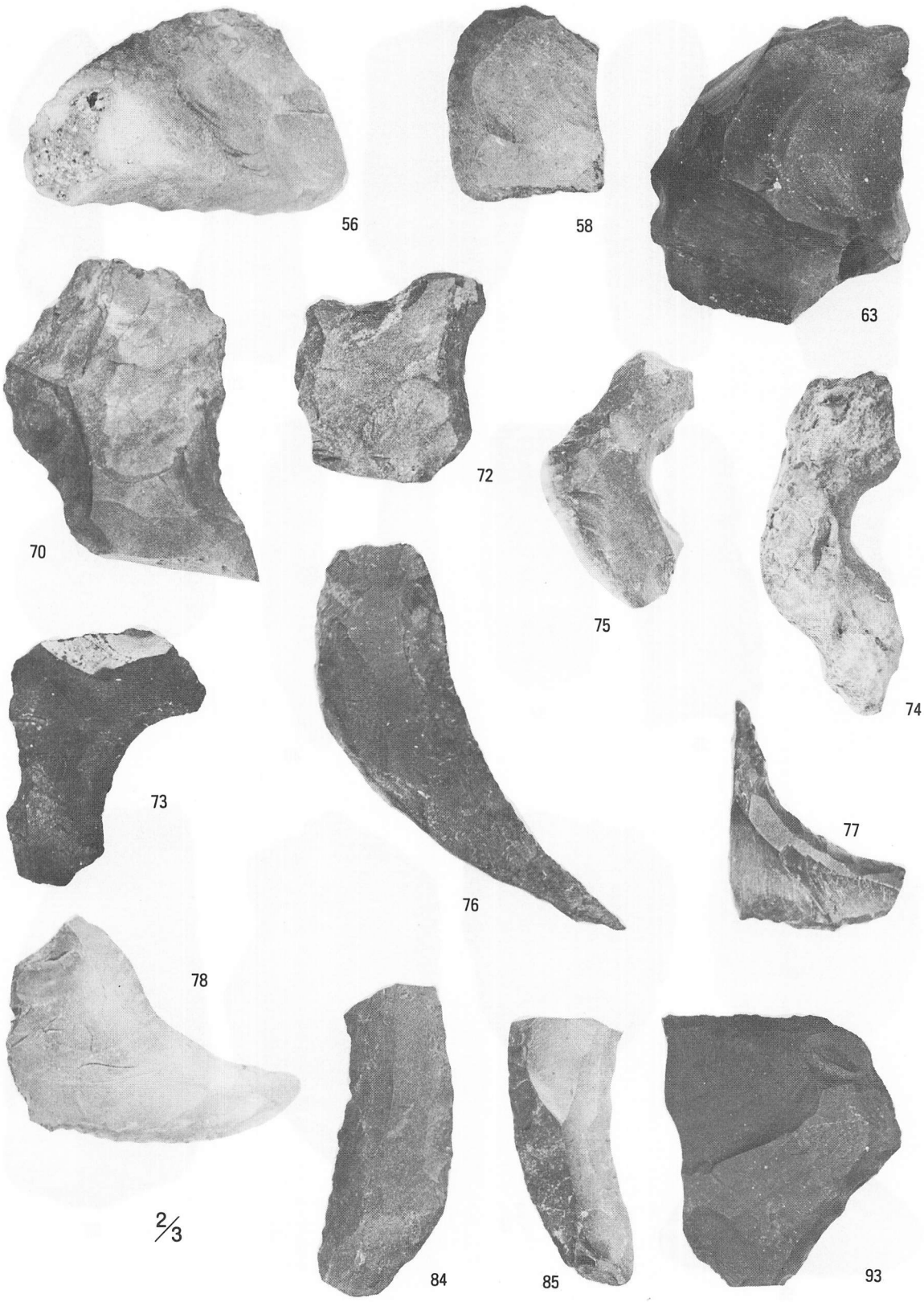
9

11

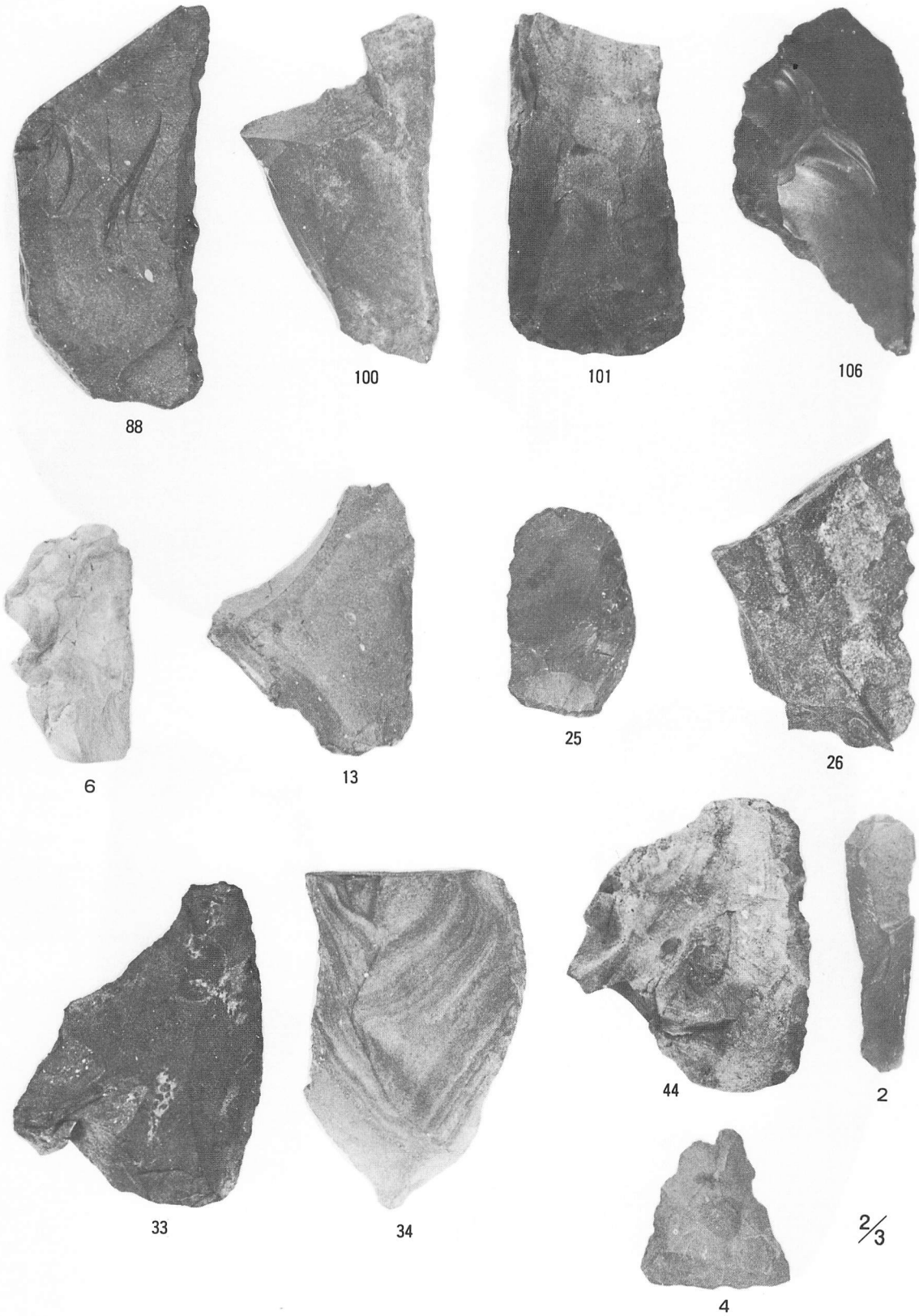
写真図版14　石鏃・掻器



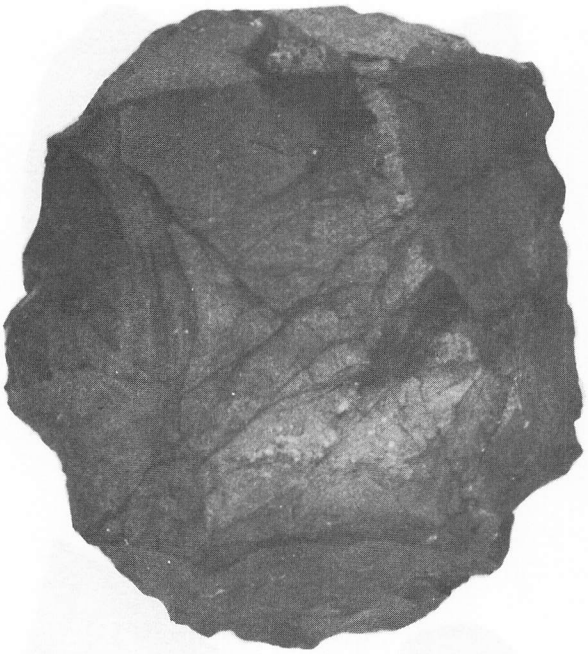
写真図版15　掻器



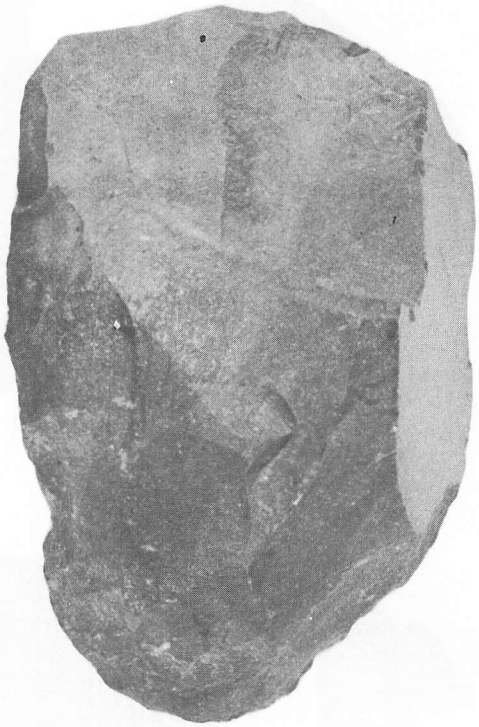
写真図版16　掻器



写真図版17　掻器・削器



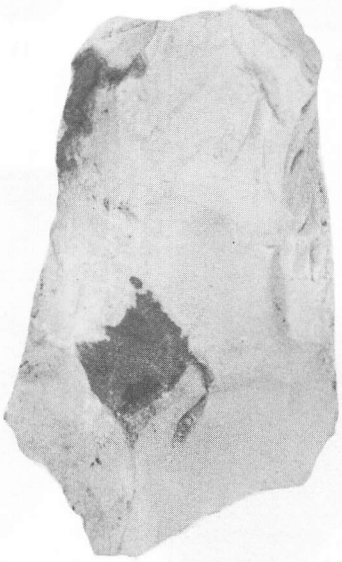
1



2

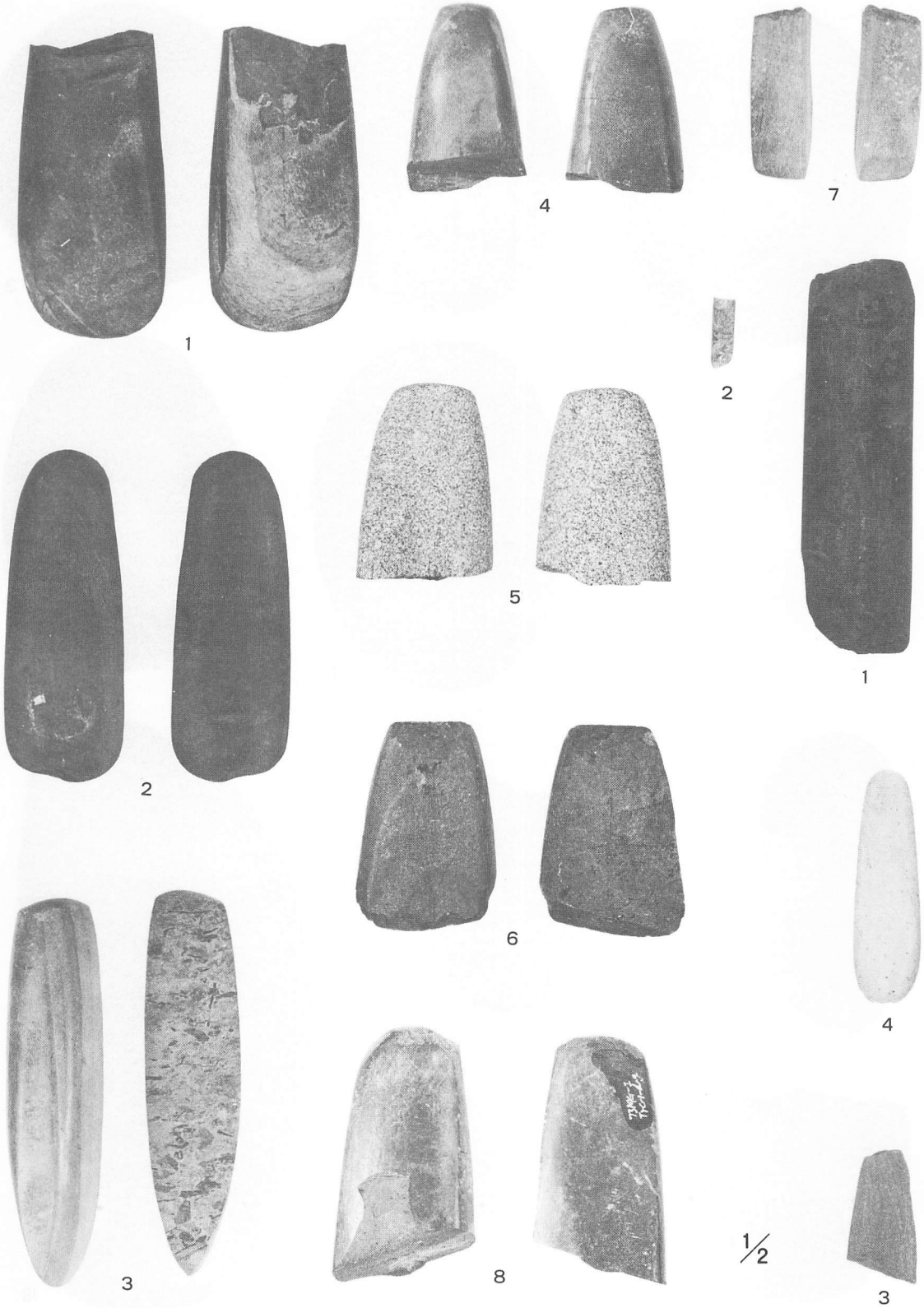
2

1/1

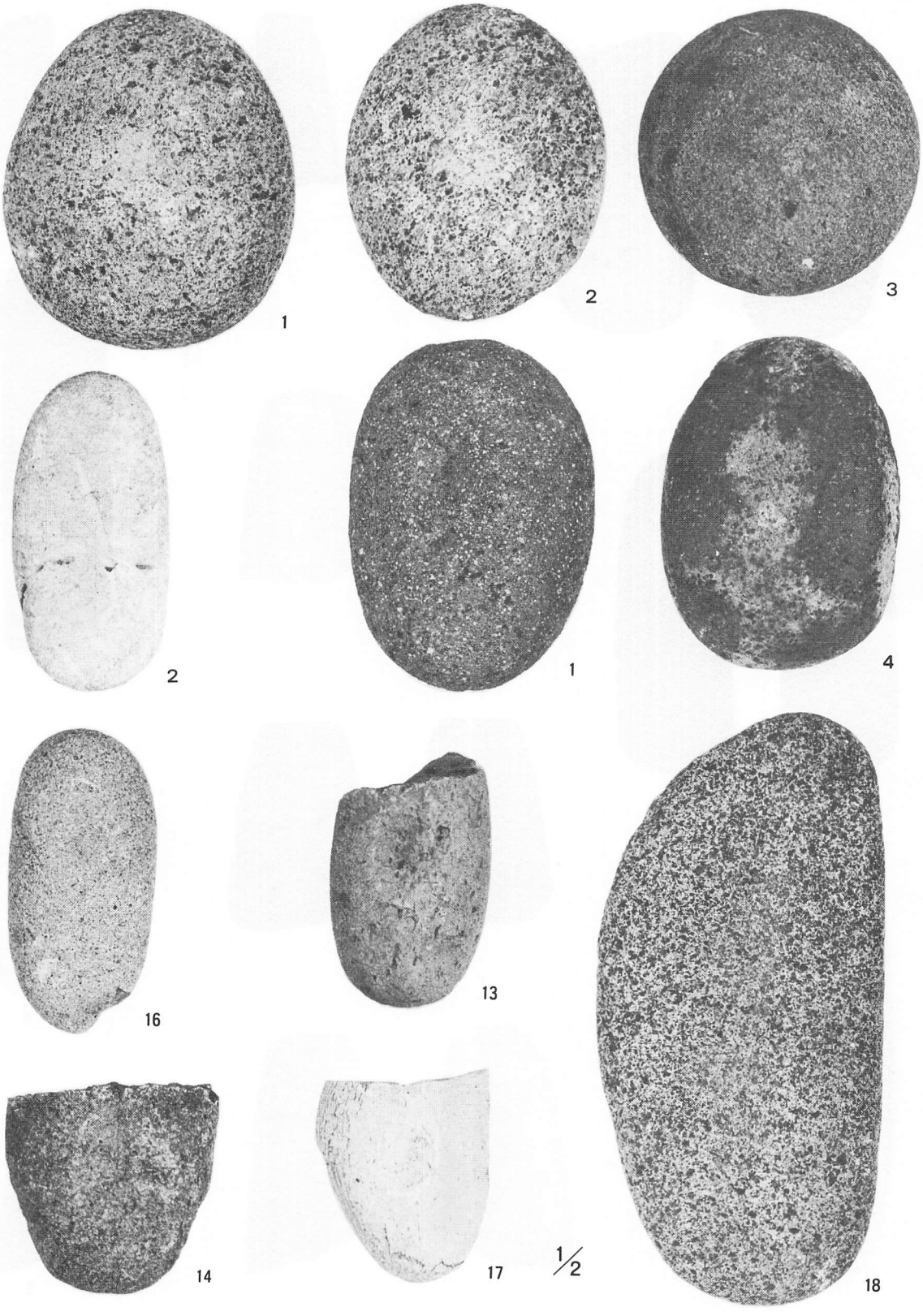


1

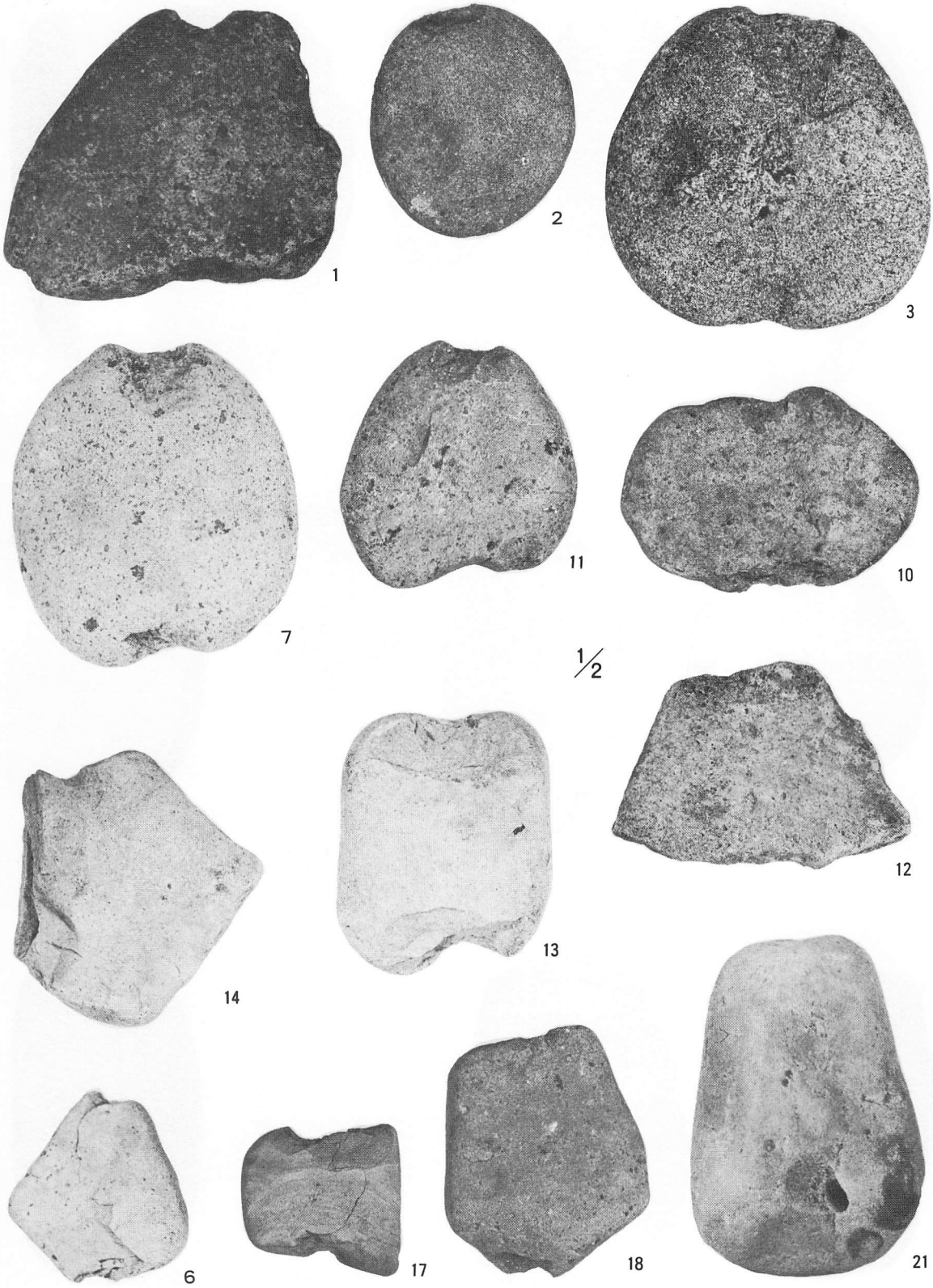
写真図版18　大型掻器その他



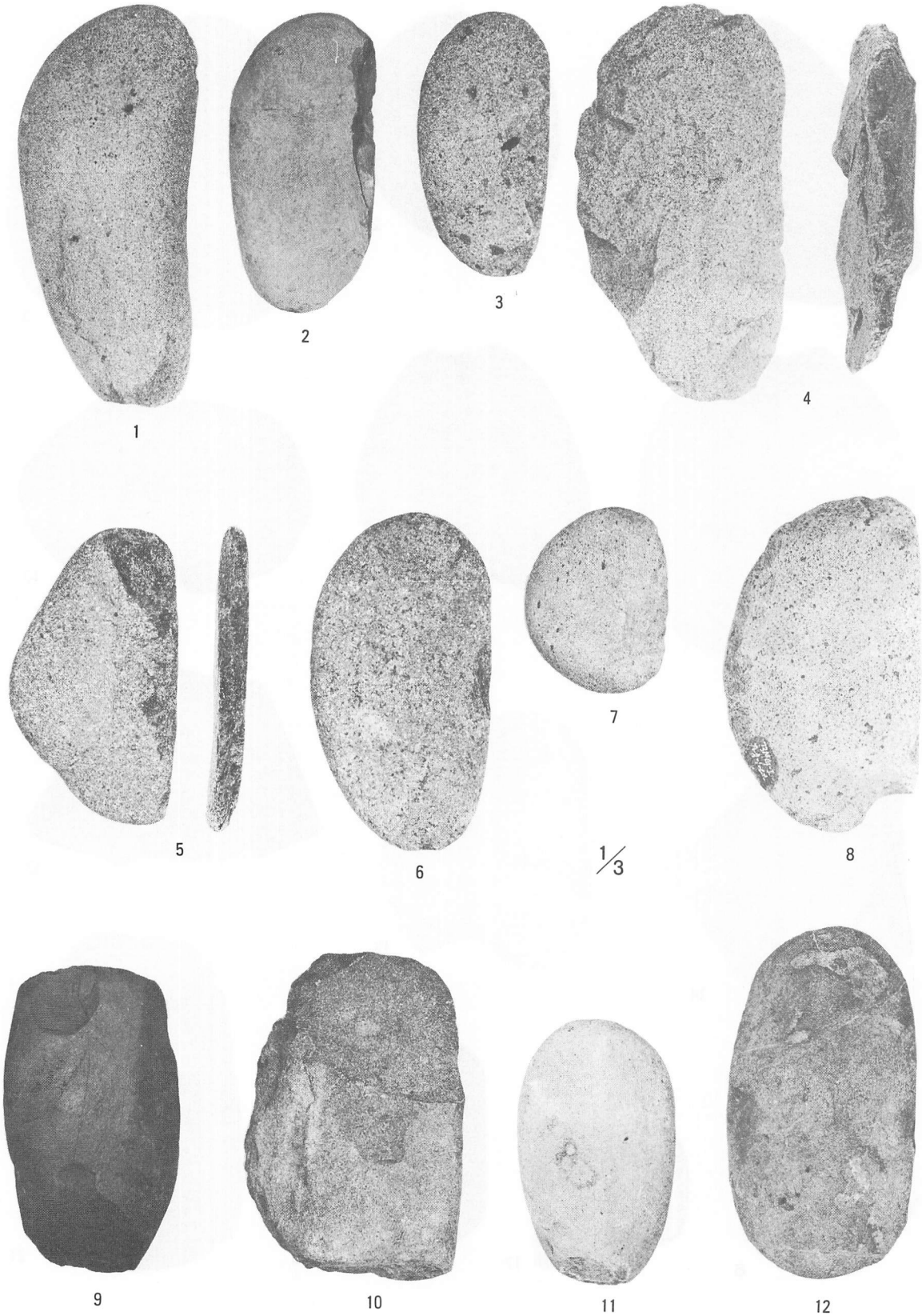
写真図版19　磨製石斧・その他



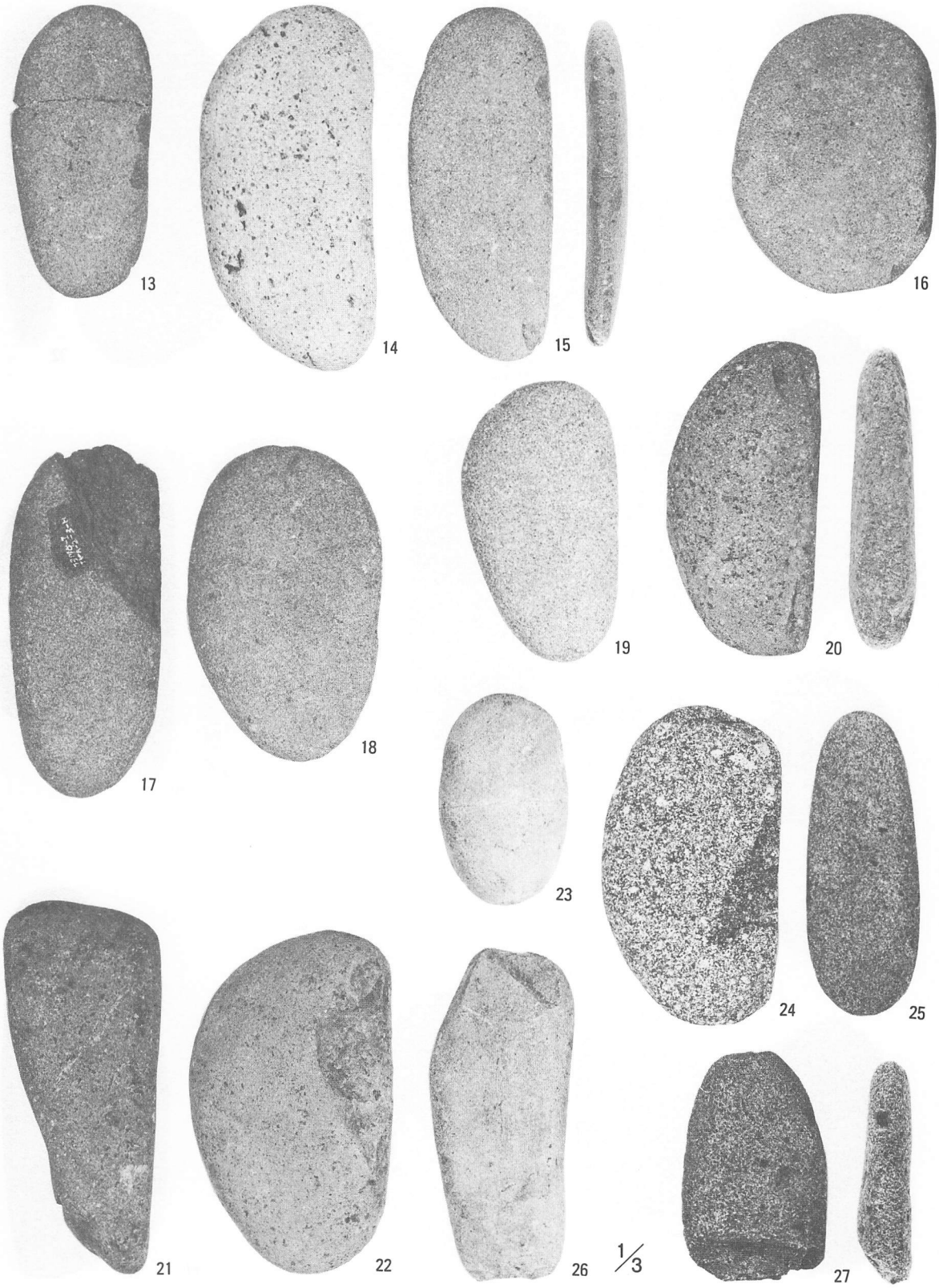
写真図版20　磨石・砥石・凹石



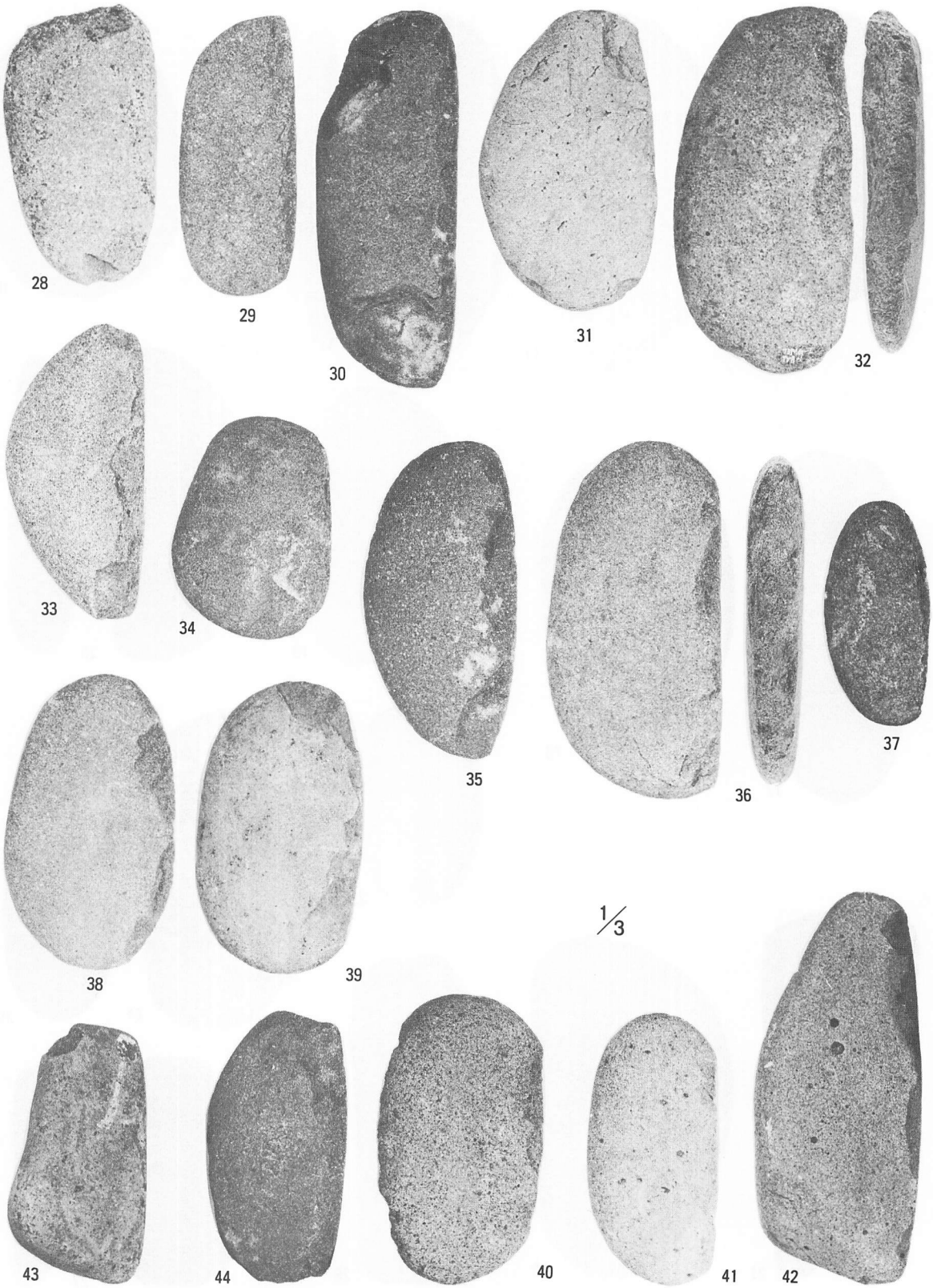
写真図版21　石錘



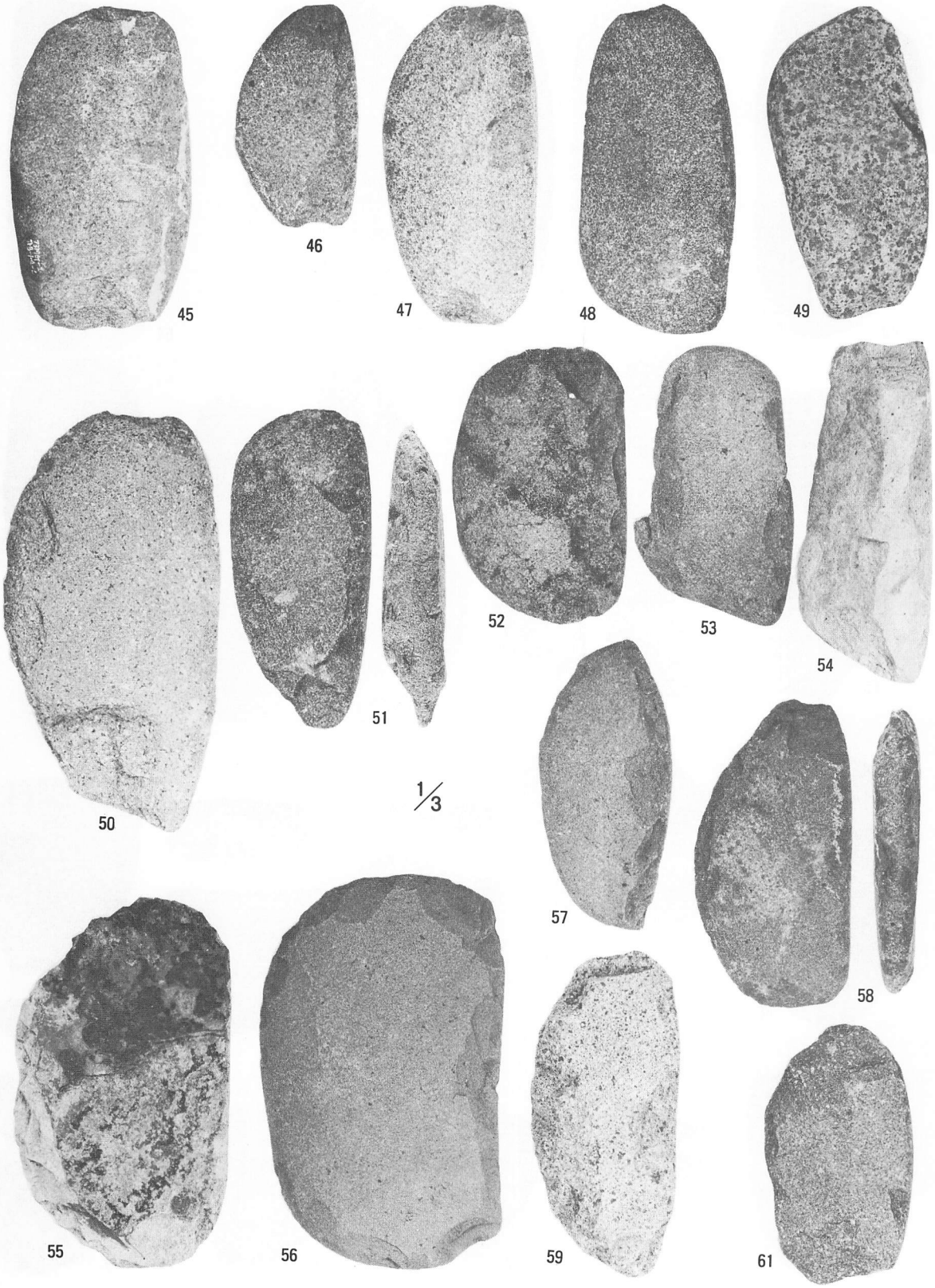
写真図版22　半円状扁平打製石器



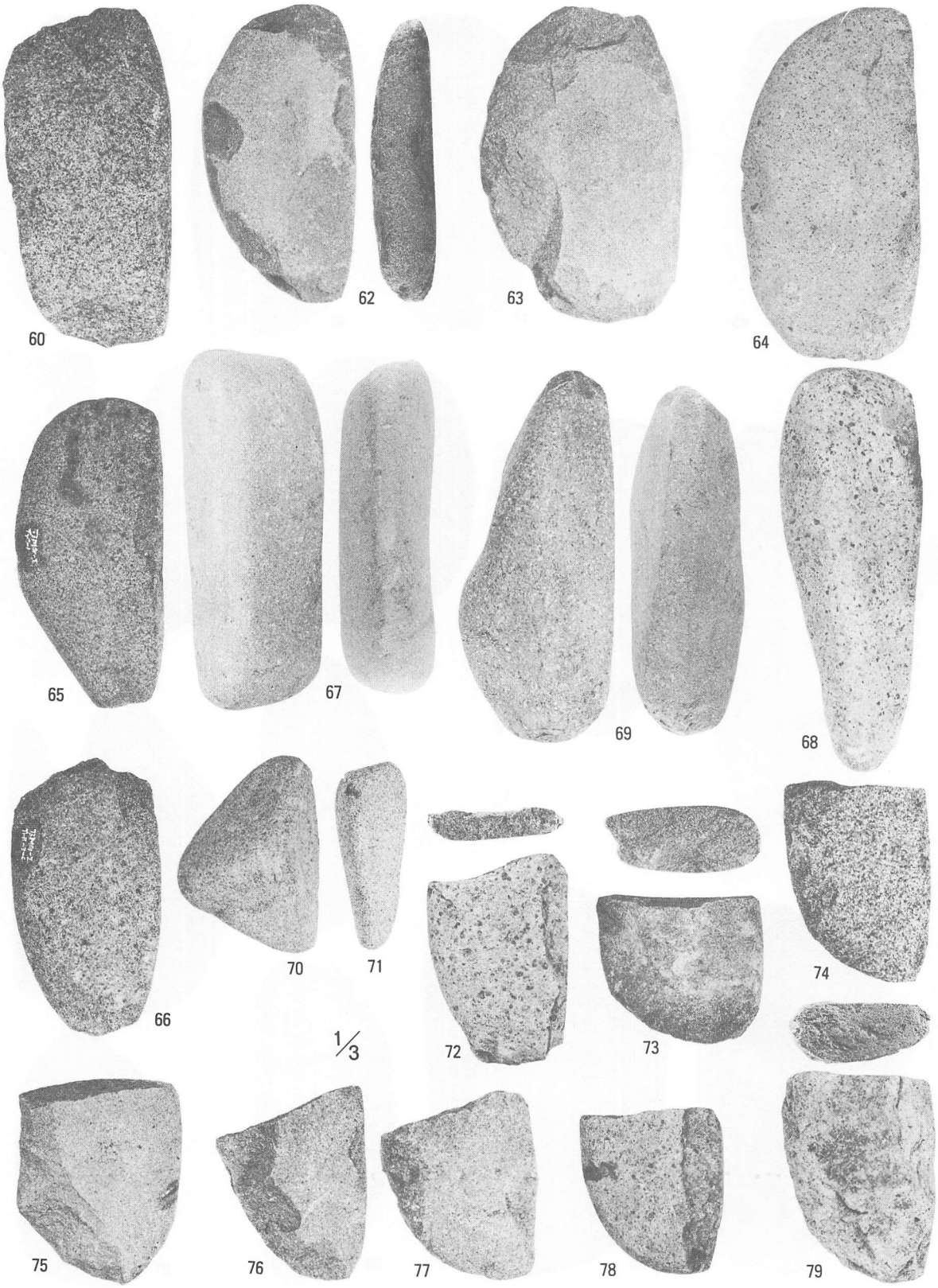
写真図版23　半円状扁平打製石器



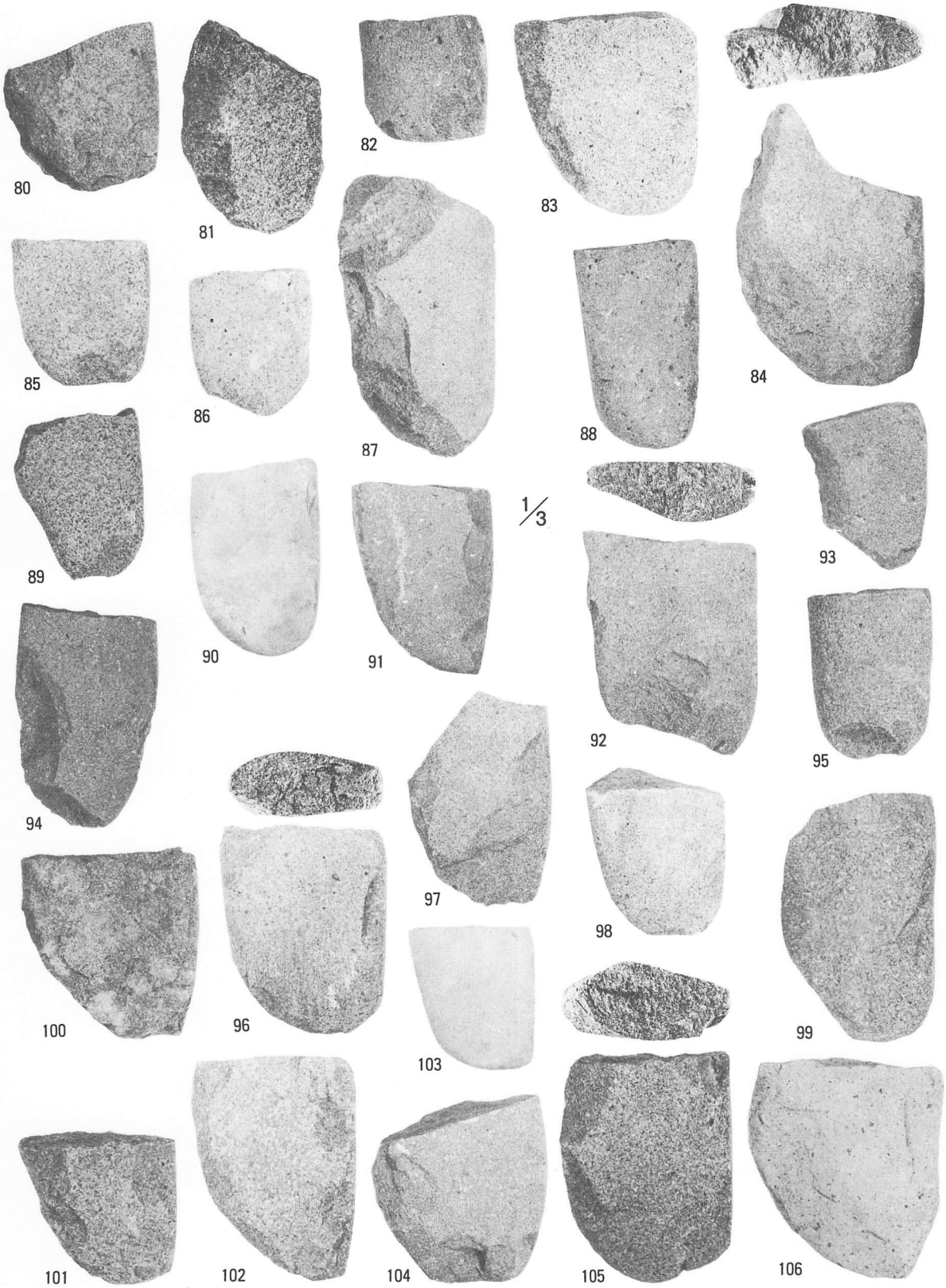
写真図版24　半円状扁平打製石器



写真図版25　半円状扁平打製石器



写真図版26　半円状扁平打製石器



写真図版27　半円状扁平打製石器

元御所（もとごしょ）Ⅱ 遺跡

遺跡所在地	岩手県岩手郡雫石町繋字元御所
調査対象面積	11,500㎡
発掘面積	11,500㎡
調査期間	昭和48年9月25日
調査担当者	瀬川司男、上野　猛、高橋与右衛門

1．調査の概要

元御所Ⅱ遺跡は、塩ケ森遺跡群の載る段丘面の下位段丘面に載っている。

本遺跡は、御所ダム建設に伴う砂利プラント用地に予定され、工事側にとって最優先する地区に存在した。そのため、建設省と文化課との協議によりブルドーザーを用い表土を除去して遺構確認を行うこととした。なお元御所Ⅰ遺跡も一部同様の方法を用いた。

表土は約30cmで、その直下は黄褐色土層である。遺構は過去のデーターから黄褐土層を切り込んでいるものと推定し、黄褐色直上までブルドーザーで除去し、遺構検出を行なった。

2．調査の結果

表土の除去後、遺構検出を行なったが元御所Ⅱ遺跡においては全ったく検出されなかった。この遺跡は、塩ケ森Ⅱ遺跡同様、沢状の流跡及びその広がりの部分であることが判明した。

なお、元御所Ⅰ遺跡南側部分については、竪穴住居址が検出されたため、プラント用地から除外した。

岩手県埋文センター文化財調査報告書第28集
御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書
雫石町　下長谷地・元御所Ⅰ・Ⅱ遺跡

(昭和48年度・55年度)

昭和５７年３月２０日　印刷
昭和５７年３月２５日　発行

発行　財団法人岩手県埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡
第11地割字高屋敷185
ＴＥＬ (0196) 38―９００１

印刷　株式会社吉田印刷
© 岩手県埋文センター 1982